福岡県の中近世城館跡Ⅳ

―筑後地域・総括編―

附 . 福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台跡

福岡県文化財調査報告書第 260 集

2017

福岡県教育委員会

福岡県の中近世城館跡Ⅳ

―筑後地域・総括編―

附 . 福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台跡

福岡県文化財調査報告書第 260 集

序

今を500年ほど遡る中世から近世初頭にかけて、全国各地に数多くの城館が築かれました。福岡県も同様に、著名な山城から無名の小砦に至るまで非常に多くの城館が造られ、その数は現在知られているもので1,000箇所を超えています。戦乱の続く激動の時代の象徴とも言える遺跡として、今でもその痕跡を残すものも数多くあります。大内氏、大友氏、毛利氏、龍造寺氏、島津氏、黒田氏をはじめとした名だたる諸大名の諸将が鎬を削り、林立した諸勢力の盛衰の歴史を今に物語っています。

本県ではこれまで、埋蔵文化財包蔵地の詳細分布調査や各自治体史誌の編纂事業等をとおして、これら中近世城館遺跡の把握や周知を進めてまいりました。また、任意団体や個々の研究者によって踏査や縄張り図の作成等が行われ、個々の内容と歴史的重要性が次第に明らかになってきました。

一方、遺跡の詳細を未だ把握できていない中近世城館遺跡も多く存在しており、近年の開発事業等によりやむを得ず記録保存の対象となった事例も少なくありません。

こうした現状に対し、本県教育委員会では、県内に所在する全ての中近世城館遺跡を対象に総合的な緊急分布調査に取り組むこととし、平成24年度から調査に着手しました。本調査は遺跡の位置や時代、歴史的背景を可能な限り把握するとともに成果の体系的な整理と評価を行い、遺跡の周知化と保存活用に向けた理解を促進することを目的としています。

この度、最終巻として旧筑後国の調査成果を取りまとめることができました。既刊の旧筑前国・豊前国を対象とした３冊に続いての４冊目となり、福岡県下の調査・報告が揃うとともに、全体としての総括に至りました。また、今後の遺跡周知化・保存活用のため、附編として「福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台跡」も設けております。

本調査の実施並びに本書の刊行に当たり、調査指導委員会の委員の皆様、関係市町村をはじめ、多くの方々に多大なる御協力を得ましたことに心より感謝申し上げます。

平成29年3月31日

福岡県教育委員会教育長

城戸　秀明

例　言

1　本書は、福岡県教育委員会が国庫補助を受けて実施した福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業の報告書第４集であり、福岡県文化財調査報告書第 260 集にあたる。

2　本事業は県内に所在する中世・近世の城館跡および関連遺跡を対象とした悉皆分布調査事業であり、平成 24 年度から 28 年度まで調査を実施し、28 年度で全て報告書を刊行した。

3　本書では、平成 27 年度から 28 年度にかけて実施した福岡県内の筑後地域（旧郡の御原郡（小郡市（一部）・三井郡大刀洗町（一部））・御井郡（小郡市（一部）・三井郡大刀洗町（一部））・久留米市（一部））・三潴郡（久留米市（一部）・大川市・三潴郡大木町・柳川市（一部）・筑後市（一部））・山本郡（久留米市（一部））・竹野郡（久留米市（一部）・三井郡大刀洗町（一部）・うきは市（一部））・生葉郡（うきは市（一部）・八女市（一部））・上妻郡（八女市（一部）・筑後市（一部）・八女郡広川町）・下妻郡（八女市（一部）・筑後市（一部）・みやま市（一部））・山門郡（柳川市（一部）・みやま市（一部））・三池郡（大牟田市・みやま市（一部）））の旧 10 郡、７市３町に所在する約 290 箇所の中世・近世の城館跡、城館等伝承地、城館関連遺跡を報告対象とした。また、県内所在の近世台場・遠見番所・烽火台跡についても、関連遺跡として調査を行い、附編として「福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台跡」も併せ掲載した。

4　調査については福岡県中近世城館遺跡詳細分布調査指導委員会の指導と承認のもとに実施した。

5　本書に掲載した縄張り図および遺構実測図は、事務局で作成したもの以外は全て出典を明示し、縄張り図については作成者もしくは作成機関名を明示した。

　事務局にて作成した縄張り図の作成および製図は岡寺　良（九州歴史資料館）が担当した。

6　本書に掲載した写真は明示したもの以外は事務局にて撮影したものであり、岡寺が担当した。

7　本書の執筆分担は目次に示したとおりである。

8　本書の編集は岡寺が担当した。

目　次

Ⅰ　はじめに ……（坂元雄紀） 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の経過 …… 1
　3　調査の組織 …… 3
Ⅱ　調査の方法 ……（岡寺　良） 5
　1　調査の進め方と方法 …… 5
Ⅲ　対象地域城館一覧 ……（岡寺） 10
Ⅳ　対象地域城館分布図 ……（岡寺） 35
Ⅴ　個別城館報告 ……（岡寺） 67
　1　中世城館 …… 68
　①御原郡 …… 68
　②御井郡 …… 70
　③三潴郡 …… 78
　④山本郡 …… 84
　⑤竹野郡 …… 92
　⑥生葉郡 …… 103
　⑦上妻郡 …… 124
　⑧下妻郡 …… 144
　⑨山門郡 …… 148
　⑩三池郡 …… 158
　2　近世城館 …… 163
　3　城館等伝承地 …… 183
　4　城館関連遺跡 …… 184
Ⅵ　城館関連文献史料一覧 ……（酒井芳司） 199
Ⅶ　城館関連地名一覧 ……（岡寺） 223
Ⅷ　うきは市長岩城跡発掘調査報告 ……（飛野博文） 227
Ⅸ　『福岡県の中近世城館跡Ⅰ～Ⅲ』の補遺 ……（岡寺） 230
　1　個別城館報告 ……（岡寺） 231
　2　城館関連文献史料一覧 ……（酒井） 240
Ⅹ　総括 …… 249
　はじめに－福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業について ……（岡寺） 249
　1　福岡県の中近世城館の歴史的概観 ……（酒井） 250
　2　福岡県の中世城館跡の構造的特徴 ……（中井　均） 258
　3　海岸堡－ Beachhead ……（服部英雄） 264
　4　福岡県における遺跡としての中近世城館 ……（西谷　正） 269
　5　総括－福岡県の中近世城館の様相と特徴 ……（岡寺） 272
　おわりに－今後に向けて ……（岡寺） 282

附 . 福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台跡 …… （岡寺）284
1　福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台の歴史的概要 …… （岡寺）284
2　個別報告 …… （岡寺）286
⑴福岡藩 …… 286
⑵小倉藩 …… 295
⑶久留米藩 …… 302
⑷柳川藩 …… 302
⑸中津藩 …… 307
⑹その他 …… 309
3　遠見番所・烽火台・台場関連文献史料一覧 …… （松川博一・酒井・一瀬　智）310
索　引（筑後地域編） …… 326

挿　図　目　次

第 1 図　「浮羽郡古城址とその歴史」に掲載された福岡縣浮羽郡内古城分布図 …… 7
第 2 図　山隈城遠景 …… 68
第 3 図　夜須郡四三島村山隈山古城図（『古戦古城図』のうち）（部分・国立公文書館蔵）…… 68
第 4 図　山隈城縄張り図（文献 128・岡寺　良作成） …… 68
第 5 図　三原城測量図（文献 64） …… 69
第 6 図　『大刀洗町史』に掲載された「三原城図」（左）と「三原城間どり図」（右）（文献 29 から転載） …… 69
第 7 図　鰺坂城々内全略図（文献 123） …… 70
第 8 図　西鰺坂城航空写真（昭和 23 年・国土地理院撮影） …… 70
第 9 図　西神代字図（久留米市蔵・文献 9 から転載） …… 71
第 10 図　地図に表れた神代館の堀（陸地測量部発行 1/25,000 地形図「久留米」）（大正 15 年測量・福岡県立図書館提供） …… 71
第 11 図　神代館航空写真（昭和 23 年・国土地理院撮影） …… 71
第 12 図　鶴ヶ城近くからの久留米市街の眺め …… 71
第 13 図　鶴ヶ城の堀切（上）と畝状空堀群（下） …… 72
第 14 図　鶴ヶ城縄張り図（事務局作成） …… 72
第 15 図　毘沙門岳城堀切（上）・横堀（下） …… 73
第 16 図　毘沙門岳城縄張り図（事務局作成） …… 73
第 17 図　毘沙門岳城遠景 …… 74
第 18 図　杉ノ城堀切（上）・横堀（下） …… 74
第 19 図　杉ノ城石垣 …… 75
第 20 図　杉ノ城縄張り図（事務局作成） …… 75
第 21 図　吉見岳城縄張り図（事務局作成） …… 76
第 22 図　吉見岳城主郭の土塁（左）・堀切（右） …… 77
第 23 図　海津城縄張り復元図（文献 72） …… 78

第 24 図　耕地整理前（大正 6 年）の海津城付近地図（赤い枠線が上図のおよその範囲。陸地測量部大正 6 年測量「久留米西部」（福岡県立図書館提供）を一部改変して作成）…… 78
第 25 図　田川高良社（周囲より一段高くなっている）…… 79
第 26 図　田川城周辺現況図（久留米市提供図を一部改変して事務局作成）…… 79
第 27 図　大正 6 年当時の犬塚城周辺地図（陸地測量部測量 1/25,000 地形図「久留米西部」（福岡県立図書館提供））…… 80
第 28 図　水路土居（左）と犬塚城「陣堀」…… 80
第 29 図　犬塚城周辺図（久留米市提供図を一部改変して事務局作成。図は現在の地割を示し、網掛部は推定城域を示す。）…… 80
第 30 図　生津城跡図（文献 20）…… 81
第 31 図　昭和 23 年の生津城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）…… 81
第 32 図　酒見城跡図（文献 20）…… 82
第 33 図　昭和 23 年の酒見城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）…… 82
第 34 図　明治 21 年頃の酒見城周辺字図（『筑後国三潴郡酒見村ノ図』（部分・大川市教育委員会蔵・柳川古文書館保管））…… 82
第 35 図　現在の酒見城周辺地形図（大川市教育委員会提供図を一部改変して作成）…… 82
第 36 図　昭和 23 年当時の津村城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）…… 83
第 37 図　津村城周辺地形図（大川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成。網掛部は水路）…… 83
第 38 図　飯田館推定地東側の水路 a と道路 …… 84
第 39 図　飯田館周辺地形図（久留米市提供図を一部改変して事務局作成）…… 84
第 40 図　文献 24 に書かれた竹井城と物見櫓 …… 85
第 41 図　竹井城本城部主郭 …… 85
第 42 図　竹井城本城部堀切…… 85
第 43 図　竹井城「物見櫓」の堀切 …… 86
第 44 図　竹井城縄張り図（事務局作成）…… 86
第 45 図　竹井城「物見櫓」縄張り図（事務局作成）…… 86
第 46 図　発心城遠景…… 86
第 47 図　文献 24 に描かれた発心城 …… 87
第 48 図　発心城・周辺城館位置図（国土地理院発行 1/25,000 地形図「草野」を一部改変して事務局作成）…… 87
第 49 図　発心城（本城部）からの眺め（上）・本城部曲輪 I （下）…… 87
第 50 図　発心城（本城部）縄張り図（事務局作成）…… 88
第 51 図　「蔵所」の土塁遺構 …… 89
第 52 図　「蔵所」縄張り図（事務局作成）…… 89
第 53 図　文献 119 に記された「上・中・下ノ城」…… 90
第 54 図　「上ノ城」・「中ノ城」・「下ノ城」縄張り図（事務局作成）…… 90
第 55 図　「上ノ城」曲輪面（上）・堀切（中）と「下ノ城」堀切（下）…… 91
第 56 図　西葛尾城堀切（上・中）・石垣状遺構（下）…… 92

第 57 図　西葛尾城縄張り図（事務局作成）…… 92
第 58 図　内山館見取り図（原書では「内山城平面」・文献 118）…… 93
第 59 図　内山城略図（文献 121）…… 93
第 60 図　内山城付近からの眺め（上）・内山城堀切（下）…… 94
第 61 図　内山城縄張り図（事務局作成）…… 94
第 62 図　高野城遠景 …… 95
第 63 図　高野城縄張り図（事務局作成）…… 95
第 64 図　高丸城主郭 …… 95
第 65 図　高丸城堀切 …… 96
第 66 図　高丸城・小丸城縄張り図（事務局作成）…… 96
第 67 図　小丸城遠景（上）・推定堀切断面（下）…… 97
第 68 図　伐採以前に作成された小丸城縄張り図（中村修身氏作成・提供）…… 97
第 69 図　伐採・シダ繁茂後の現状の小丸城縄張り図（事務局作成）…… 97
第 70 図　平家城曲輪 …… 98
第 71 図　平家城縄張り図（事務局作成）…… 98
第 72 図　山ノ中城縄張り図（事務局作成）…… 99
第 73 図　山ノ中城遠景（左）・堀切（中）・遺物散布状況（右）…… 100
第 74 図　新田城遠景（左）・曲輪Ⅰ（右）…… 100
第 75 図　新田城縄張り図（事務局作成）…… 101
第 76 図　菅館周辺図（うきは市教育委員会提供図面を一部改変して事務局作成。網掛部は水路を示す）…… 102
第 77 図　昭和 23 年当時の菅館周辺航空写真（国土地理院撮影）…… 102
第 78 図　鷹取山城縄張り図（岡寺　良作成）…… 103
第 79 図　鷹取山城からの眺め（左・筑後平野方面）・曲輪群（中・奥は八女方面）・畝状空堀群（右）…… 104
第 80 図　西の城縄張り図（事務局作成）…… 104
第 81 図　文献 118 に描かれた妙見（明顕）城配置図 …… 105
第 82 図　妙見城畝状空堀群（上）・堀切（下）…… 105
第 83 図　妙見城縄張り図（事務局作成）…… 106
第 84 図　妙見城曲輪群Ⅵの石垣 …… 107
第 85 図　谷山城堀切 …… 108
第 86 図　谷山城縄張り図（事務局作成）…… 108
第 87 図　『生葉郡内絵図』（個人蔵）に記された「平家城」…… 108
第 88 図　平家城遠景 …… 108
第 89 図　平家城跡現況図（事務局作成）…… 109
第 90 図　福丸城縄張り図（事務局作成）…… 110
第 91 図　文献 118 掲載の福丸城側面図（実際に存在するのは真ん中の出丸から左部分のみ）…… 110
第 92 図　福丸城の曲輪 …… 110
第 93 図　満願寺城遠景（上・妹川から）・堀切（下）…… 111
第 94 図　満願寺城縄張り図（事務局作成）…… 111
第 95 図　安山城縄張り図（事務局作成）…… 112

第 96 図　安山城および周辺城館遠景 …… 113
第 97 図　井上城からの眺め（上）・井上城及び西ノ城遠景（下）…… 113
第 98 図　井上城・西ノ城縄張り図（事務局作成）…… 114
第 99 図　井上館周辺図（うきは市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）…… 115
第 100 図　昭和 23 年当時の井上館周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）…… 115
第 101 図　日田氏館跡図（『生竹巡覧』のうち・篠山神社蔵）…… 116
第 102 図　隈ノ上城址見取図（文献 118）…… 116
第 103 図　昭和 23 年当時の隈ノ上城周辺航空写真（国土地理院撮影・北側の濠が明瞭に見える）…… 116
第 104 図　隈ノ上城地割図（うきは市教育委員会提供図面を一部改変して事務局作成）… 116
第 105 図　長瀬城主郭（城丸土神社）…… 117
第 106 図　長瀬城・鵜木城周辺航空写真（昭和 38 年・国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）…… 117
第 107 図　長瀬城周辺地割図（網掛部が城跡。うきは市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）…… 117
第 108 図　高井岳城遠景 …… 118
第 109 図　高井岳城縄張り図（事務局作成）…… 118
第 110 図　長岩城石垣（上）・曲輪（中・長岩説教所）・長岩城Ⅱ遠景（下・中央に立神岩）…… 119
第 111 図　長岩城縄張り図（事務局作成）…… 120
第 112 図　松尾城縄張り図（事務局作成）…… 121
第 113 図　松尾城遠景（上）・曲輪面（中）・竪堀群（下）…… 121
第 114 図　松尾城近くの千人塚…… 121
第 115 図　高岩城遠景（上）・堀切（下）…… 122
第 116 図　高岩城縄張り図（事務局作成）…… 122
第 117 図　白石城曲輪（上）・堀切（下）…… 123
第 118 図　白石城縄張り図（事務局作成）…… 123
第 119 図　アイノツル城跡図（『山土産』のうち。久留米市立中央図書館蔵）…… 124
第 120 図　アイノツル城跡の現状（茶畑）…… 124
第 121 図　高屋城遠景 …… 124
第 122 図　高屋城縄張り図（事務局作成）…… 125
第 123 図　高屋城からの眺め …… 125
第 124 図　築足城縄張り図（事務局作成）…… 125
第 125 図　地下名城主郭 …… 126
第 126 図　地下名城縄張り図（事務局作成）…… 126
第 127 図　高牟礼城遠景（奥側の山）…… 126
第 128 図　高牟礼城縄張り図（事務局作成）…… 127
第 129 図　高牟礼城曲輪ⅠとⅡの間の土塁ライン（上）・曲輪Ⅱの横堀（下）…… 128
第 130 図　熊野堂城遠景 …… 128
第 131 図　熊野堂城縄張り図（事務局作成）…… 128
第 132 図　猫尾城遠景（上）（左奥には高牟礼城）・石垣 a（下）…… 129

第 133 図　猫尾城出土桐文軒丸瓦（文献 91）……129
第 134 図　猫尾城跡で検出された石組井戸（文献 91）……129
第 135 図　猫尾城縄張り図（文献 127・木島孝之作成）……130
第 136 図　兎城堀切 ……131
第 137 図　兎城縄張り図（事務局作成）……131
第 138 図　生駒野城遠景（左）・A 地点武者溜まり状の窪み（写真左側に土塁が見える）（右）……131
第 139 図　生駒野城縄張り図（事務局作成）……132
第 140 図　熊ノ川城横堀 ……132
第 141 図　熊ノ川城縄張り図（事務局作成）……133
第 142 図　高朶城縄張り図（事務局作成）……133
第 143 図　高朶城堀切……134
第 144 図　山下城縄張り図（事務局作成）……134
第 145 図　山下城遠景（堀切Ｂ近くからＡ方向を望む）（上）・堀切Ａ（下）……135
第 146 図　国見岳城遠景（上）・横堀（下）……135
第 147 図　国見岳城縄張り図（事務局作成）……136
第 148 図　山崎城遠景（左）・堀切（右）……136
第 149 図　山崎城縄張り図（事務局作成）……137
第 150 図　兼松城堀切……137
第 151 図　兼松城縄張り図（事務局作成）……138
第 152 図　三ノ瀬城遠景 ……138
第 153 図　三ノ瀬城縄張り図（事務局作成）……139
第 154 図　谷川城縄張り図（文献 131・岡寺　良作成）……139
第 155 図　谷川城堀切……140
第 156 図　犬尾城縄張り図（文献 129・岡寺　良作成）……140
第 157 図　鷹尾城縄張り図（文献 129・岡寺　良作成）……141
第 158 図　鬼ノ口城堀切（上）・石垣（下）……142
第 159 図　鬼ノ口城縄張り図（事務局作成）……142
第 160 図　昭和 23 年当時の知徳城航空写真(国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成)……143
第 161 図　知徳城Ⅰの東側の横堀状遺構……143
第 162 図　知徳城縄張り図（事務局作成）……143
第 163 図　下牟田館周辺図（青は圃場整備前のクリーク・文献 146 掲載図を一部改変して事務局作成)……144
第 164 図　昭和 23 年当時の下牟田館周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）……144
第 165 図　禅院城土塁（上）・石垣（中）・堀切（下）……145
第 166 図　禅院城縄張り図（事務局作成）……146
第 167 図　小田城石垣（上）・横堀（下）……146
第 168 図　小田城縄張り図（事務局作成)……147
第 169 図　宮園城周辺地形図（みやま市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）…148
第 170 図　昭和 23 年当時の宮園城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）……148

第 171 図　明治 20 年代初期頃の宮園城周辺字図（『筑後国山門郡大廣園村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）…… 148
第 172 図　明治 20 年代初期の濱田城周辺字図（『筑後国山門郡濱田村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）…… 149
第 173 図　濱田城周辺地形図（みやま市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）…… 149
第 174 図　昭和 37 年当時の竹井館周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）…… 150
第 175 図　竹井館周辺地形図（みやま市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）…… 150
第 176 図　竹井館土塁状遺構…… 151
第 177 図　飯江城縄張り図（事務局作成）…… 151
第 178 図　飯江城遠景 …… 152
第 179 図　白鳥之古戦場碑と水路（左）・水路に沿った土手状の高まり（右）…… 152
第 180 図　明治 20 年代初期の白鳥古戦場周辺の字図（『筑後国山門郡白鳥村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）…… 152
第 181 図　白鳥城推定地周辺地形図（柳川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）…… 153
第 182 図　明治 20 年代初期の津留城周辺の字図（『筑後国山門郡六合村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）…… 153
第 183 図　津留城の水堀と考えられる水路…… 154
第 184 図　昭和 37 年当時の津留城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）…… 154
第 185 図　津留城周辺地形図（柳川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）…… 154
第 186 図　明治 20 年代初期の蒲船津城周辺字図（『筑後国山門郡蒲船津村絵図』（部分）を一部改変して事務局作成）…… 155
第 187 図　蒲船津城周辺地形図（柳川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）… 155
第 188 図　昭和 23 年当時の蒲船津城周辺航空写真（国土地理院撮影）…… 156
第 189 図　塩塚城趾碑 (左) ・百八人塚（右）…… 156
第 190 図　昭和 37 年当時の塩塚城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）…… 156
第 191 図　明治 20 年代初期の塩塚城周辺字図（『筑後国山門郡塩塚村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）…… 157
第 192 図　塩塚城周辺地形図（柳川市教育委員会提供図（平成 5 年測量）を一部改変して事務局作成）…… 157
第 193 図　今福城遠景 …… 158
第 194 図　今福城縄張り図（事務局作成）…… 158
第 195 図　飛塚城遠景 …… 159
第 196 図　飛塚城縄張り図（事務局作成）…… 159
第 197 図　内山城周辺地形図（文献 98 掲載図を一部改変して事務局作成）…… 160
第 198 図　内山城跡礎石建物・柵平面図（文献 98）…… 160
第 199 図　昭和 23 年当時の大間城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成。白破線は城の推定範囲を示す。）…… 161
第 200 図　三池山城主郭 I の「三池」（左）・三池山城堀切（右）…… 162
第 201 図　三池山城縄張り図（事務局作成）…… 162

第 202 図　昭和 23 年当時の松崎陣屋周辺航空写真（国土地理院提供写真を一部改変して事務局作成）……163
第 203 図　昭和 23 年当時の赤司城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）……164
第 204 図　赤司城址図（文献 24）……164
第 205 図　赤司城復元図（文献 127・木島孝之作成）……164
第 206 図　明治初期の久留米城本丸（写真提供：久留米市）……165
第 207 図　天保年間の久留米城（『天保時代久留米城下地図』（部分）・久留米市蔵）……165
第 208 図　久留米城本丸南側石垣……165
第 209 図　久留米城本丸南虎口の石垣 ……165
第 210 図　延宝年間の久留米城下（『延宝八年製図久留米市街図』（久留米市蔵））……166
第 211 図　御城本丸絵図（篠山神社蔵）……167
第 212 図　昭和 23 年当時の城島城跡周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）……168
第 213 図　『城島城絵図』（写）（九州大学附属図書館付設記録資料館蔵「桧垣文庫」のうち）……168
第 214 図　城島城跡推定図（文献 127）……169
第 215 図　明治 20 年代初期の榎津城周辺字図（『筑後国三潴郡榎津町之図』（部分）・大川市教育委員会蔵・柳川古文書館保管）……169
第 216 図　榎津城周辺地形図（大川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）……170
第 217 図　福島城本丸跡の櫓台跡（上）・福島城の水堀の名残（福島八幡宮・下）……170
第 218 図　福島城復元図（文献 125）……171
第 219 図　福島古城図（篠山神社蔵）……171
第 220 図　明治期の福島城周辺地図（陸地測量部作成 1/20,000 地形図「筑後福島」（明治 33 年測量・福岡県立図書館提供）……172
第 221 図　昭和 23 年当時の福島城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）……172
第 222 図　明治 20 年代初期頃の松延城周辺字図（『筑後国山門郡松延村絵図』と『筑後国山門郡山門村絵図』（共に部分・柳川みやま土木組合蔵）を合成して事務局作成）……173
第 223 図　昭和 23 年当時の松延城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）……173
第 224 図　松延城推定図（文献 127・1973 年の地形図使用）……174
第 225 図　田尻親種墓碑（柳川市指定史跡・鷹尾城推定地付近に建つ）……174
第 226 図　鷹尾城絵図（『田尻家文書』のうち。親種寺蔵・柳川古文書館写真提供）……175
第 227 図　『鷹尾城絵図』（第 226 図）のうち鷹尾城主要部分……175
第 228 図　明治 20 年代初期頃の鷹尾城周辺字図（『筑後国山門郡鷹ノ尾村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵））……176
第 229 図　昭和 23 年当時の鷹尾城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）……176
第 230 図　『鷹尾城絵図』（第 226 図）に描かれた中島城（「才兵衛へとり遣し候城」）……176
第 231 図　明治 20 年代初期頃の中島城周辺字図（『筑後国山門郡中島村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）……177

第 232 図　描かれた柳川城天守（『柳河明証図会』のうち「其二五重殿守」・立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）…… 177
第 233 図　現在の柳川城天守台（上）・矢穴痕跡の残る石垣石材（下）…… 177
第 234 図　昭和 23 年当時の柳川城航空写真（国土地理院撮影）…… 178
第 235 図　『御城御絵図』（伝習館文庫）（福岡県立伝習館高等学校蔵・柳川古文書館保管・写真提供）…… 178
第 236 図　『御家中絵図』（旧柳河藩主立花家史料）（立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）…… 179
第 237 図　昭和 23 年当時の江浦城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）…… 180
第 238 図　三池陣屋石橋（上）・石段（中）・建物（下・現三池郷土館）…… 181
第 239 図　元三池陣屋地図（大牟田市立三池カルタ・歴史民俗資料館蔵）…… 182
第 240 図　峯切山採集遺物（黒木高校蔵）実測図（文献 36）…… 183
第 241 図　干潟中屋敷遺跡土塁実測図（文献 43）…… 184
第 242 図　三沢寺小路遺跡調査地位置図（文献 60）…… 184
第 243 図　三沢寺小路遺跡３・５地点平面図（文献 57）…… 184
第 244 図　大保横枕遺跡平面図（文献 59・黒塗りは中世期の遺構）…… 185
第 245 図　稲吉元矢次遺跡遺構平面図（文献 54）…… 185
第 246 図　西森田遺跡遺構平面図（文献 61）…… 186
第 247 図　下見遺跡第５～９次調査遺構配置図（文献 37）…… 187
第 248 図　下見遺跡Ⅲ期の遺構配置模式図（文献 37）…… 187
第 249 図　昭和 23 年当時の「立石土塁」航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）…… 187
第 250 図　筑後国府跡「方形居館」遺構配置図（左・文献 67）・「立石土塁」平面図（右・文献 81）…… 188
第 251 図　東光寺遺跡Ⅳ区遺構平面図（文献 66）…… 188
第 252 図　神道遺跡主要遺構配置図（文献 83）…… 189
第 253 図　日出原南遺跡４次Ｂ～Ｄ区遺構配置図（文献 84）…… 189
第 254 図　古賀前遺跡主要遺構配置図（文献 77）…… 190
第 255 図　二子塚遺跡５次調査遺構配置図（文献 85・アミカケは中世の溝）…… 190
第 256 図　城崎遺跡中世主要遺構配置図（文献 75）…… 191
第 257 図　道蔵遺跡主要遺構配置図（文献 74）…… 191
第 258 図　北ノ屋敷遺跡遺構配置図（文献 88）…… 192
第 259 図　仁右衛門畑遺跡古代以降の主要遺構配置図（文献 52）…… 192
第 260 図　東館遺跡石垣・石段・柱穴列（上）・石垣内部から検出された礎石列（下）（八女市提供）…… 193
第 261 図　東館遺跡居館部遺構配置図（文献 89）…… 193
第 262 図　熊野屋敷遺跡土塁状遺構実測図（文献 93）…… 194
第 263 図　長崎坊田遺跡調査区Ｂ主要遺構配置図（文献 92）…… 194
第 264 図　彼岸田遺跡主要遺構配置図（文献 130）…… 195
第 265 図　陣内遺跡遺構配置図（文献 96）…… 195
第 266 図　陣内遺跡と城前遺跡遠景（左・手前の水田が陣内遺跡・奥の鉄塔が城前遺跡）・城前遺跡の横堀状遺構（右）…… 196

第 267 図　城前遺跡縄張り図（事務局作成）…… 196
第 268 図　城前遺跡と陣内遺跡の位置関係図（みやま市教育委員会提供図面を一部改変して事務局作成）…… 196
第 269 図　上内高頭遺跡溝状遺構（SD-01）平面図（文献 101）…… 197
第 270 図　白川遺跡 B-1・2 地区遺構平面図（文献 102）…… 197
第 271 図　上白川遺跡遺構平面図・断面図（文献 99）…… 198
第 272 図　長岩城跡遺構配置図（1/200）…… 227
第 273 図　長岩城跡周辺地形図および縄張り図（1/2,000）…… 228
第 274 図　長岩城跡発掘調査区写真…… 229
第 275 図　天ヶ城位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「二日市」を一部改変して事務局作成）…… 231
第 276 図　『御笠郡天山村柴田故城之図』（国立公文書館蔵）に描かれた「天ヶ城」…… 231
第 277 図　天ヶ城縄張り図（事務局作成）…… 231
第 278 図　扇山城位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「大隈」を一部改変して事務局作成）…… 232
第 279 図　扇山城縄張り図（A ～ D 地区・事務局作成）…… 232
第 280 図　「穂波郡阿恵村扇山古城図」（部分・『古戦古城之図』のうち。国立公文書館蔵）…… 233
第 281 図　扇山城縄張り図（E ～ L 地区・事務局作成）…… 234
第 282 図　大丸城からの眺め（上・油山が見える）・主郭（中）・石垣（下）…… 236
第 283 図　大丸城縄張り図（事務局作成）…… 236
第 284 図　城山砦縄張り図（事務局作成）…… 237
第 285 図　大将陣（矢留山）遠景…… 238
第 286 図　大将陣縄張り図（若杦善満作成・提供）…… 238
第 287 図　猿尾の陣主郭（上）・堀切（下）…… 239
第 288 図　猿尾の陣縄張り図（事務局作成）…… 239
第 289 図　福岡県内主要中近世城館位置図…… 250
第 290 図　飯盛城石垣 …… 259
第 291 図　山家城石垣 …… 259
第 292 図　武名ヶ平城跡略測図（島根県教育委員会 1988『島根県中近世城館跡分布調査報告書（第 2 集）出雲・隠岐の城館跡』から転載）…… 261
第 293 図　太閤ヶ平本陣周辺の縄張図（西尾孝昌氏作図）…… 262
第 294 図　上山田陣城跡概要図（中井均作図）…… 263
第 295 図　福岡市御飯ノ山城跡測量図（福岡市教育委員会 2000）…… 271
第 296 図　福岡市香椎 B 遺跡遺構平面図（福岡市教育委員会 2000）…… 271
第 297 図　県内の中世の大規模城館の事例（左：立花山城・右：古処山城）…… 273
第 298 図　県内の石垣を用いた中世城館の事例（左：鷲ヶ岳城・中：安楽平城・右：一ノ岳城）…… 273
第 299 図　県内の畝状空堀群を多用する中世城館の事例 …… 275
第 300 図　九州における畝状空堀群を構築する中世城館分布図（岡寺 2016b）…… 276
第 301 図　県内の多重横堀を構築する中世城館の事例（左：高尾山城・中：馬場城・右：小田城）…… 277

第 302 図　三岳城周辺城館位置図 …… 278
第 303 図　永禄 11 年三岳合戦における陣城配置考察図（岡寺 2016b）…… 278
第 304 図　松山城縄張り図 …… 279
第 305 図　御城絵図（柳川城）（福岡県立伝習館高等学校蔵・柳川古文書館保管・写真提供）
…… 280
第 306 図　福岡県内の近世台場・遠見番所・烽火台跡位置図 …… 285
第 307 図　『志摩郡形相図』（部分・福岡県立糸島高等学校蔵）に描かれた芥屋遠見番所（写真提供：糸島市教育委員会）…… 286
第 308 図　「浦嶋遠見番所灯篭堂急用丸囲上屋共図」（『林文書』九州歴史資料館蔵）に描かれた遠見番所 …… 287
第 309 図　芥屋遠見番所跡位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「芥屋」を一部改変して事務局作成）…… 288
第 310 図　芥屋遠見番所跡に散布する瓦 …… 288
第 311 図　相島遠見番所位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「津屋崎」を一部改変して事務局作成）…… 288
第 312 図　『藍嶋絵図』（部分・岩国徴古館所蔵）に描かれた「物見番所」…… 288
第 313 図　相島遠見番所現況平面図（事務局作成）…… 288
第 314 図　相島遠見番所「物見櫓」石垣遺構（左）・遺物散布状況（右）…… 289
第 315 図　『遠賀郡海岸形相図』に描かれた岩屋遠見番所（部分・福岡市博物館蔵）…… 289
第 316 図　地島遠見番所位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「神湊」を一部改変して事務局作成）…… 289
第 317 図　地島遠見番所現況平面図（事務局作成）…… 290
第 318 図　地島遠見番所遠景（左）・瓦散布状況（中）・石垣遺構（右）…… 290
第 319 図　『筑前三笠郡岩谷城図』（個人蔵）に描かれた烽火台 …… 290
第 320 図　『長州戦争図』（部分・北九州市自然史・歴史博物館蔵）に描かれた名古屋崎台場
…… 291
第 321 図　波奈台場跡地（午砲場跡）…… 291
第 322 図　『福岡城之図』（1898 年・福岡市 1968 から転載）に描かれた福岡城下の台場
…… 292
第 323 図　洲崎台場跡地現況平面図（事務局作成）…… 292
第 324 図　洲崎台場の石垣（左上）・石垣外側の石材（右上）・内側の石材（左下）・盛土状の高まり（右下）…… 293
第 325 図　能古台場推定地位置図（国土地理院作成 1/25,000「福岡西部」を一部改変して事務局作成）…… 293
第 326 図　能古台場推定地の石列（左・奥に志賀島が見える）・推定地崖下にあった鉄鎖（右）
…… 294
第 327 図　能古台場推定地周辺平面図（事務局作成）…… 294
第 328 図　姪浜（小戸）台場周辺平面図（事務局作成）…… 294
第 329 図　姪浜台場石垣・石段 …… 295
第 330 図　姪浜台場位置図（国土地理院作成 1/25,000「福岡西部」を一部改変して事務局作成）
…… 295
第 331 図　『長州戦争図』（左）と『小倉領藍嶋略図』（右）（共に北九州市自然史・歴史博物館蔵）に描かれた境鼻遠見番所 …… 295

第 332 図　藍島遠見番所旗柱石位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「六連島」を一部改変して事務局作成）……296
第 333 図　藍島遠見番所旗柱石（左・福岡県指定史跡）・『小倉領藍嶋略図』（部分・北九州市自然史・歴史博物館蔵）に描かれた藍島遠見番所と旗柱（右）……296
第 334 図　覗山城内に確認される烽火台と推測される痕跡位置図（●で示す）……297
第 335 図　『長門国対岸ノ図』（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵）……297
第 336 図　『小倉西市中図』（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵・左端に「西臺場」の文字が見える。左が北）……298
第 337 図　『沓尾ノ図』（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵）……298
第 338 図　『宇ノ嶋ノ図』（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵）……299
第 339 図　『金部峠江引揚ノ節備配龍ヶ鼻刀掛ヨリ周囲ヲ見ル図』（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵）……300
第 340 図　鈴ヶ岩屋から小倉方面の眺め……301
第 341 図　『狸山諸備持場ノ図』（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵）……301
第 342 図　御牧山山頂の現況……302
第 343 図　柳川藩内の番所絵図（１）（立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）…303
第 344 図　柳川藩内の番所絵図（２）（立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）…304
第 345 図　柳川藩内の番所絵図（３）（立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）…305
第 346 図　『柳河明証図会』に描かれた宇治番所（沖端宇治番所）と新田番所（立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）……306
第 347 図　配崎山遠見番所位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「芥屋」を一部改変して事務局作成）……307
第 348 図　配崎山遠見番所石垣・吹抜差立石（上）・礎石列（下）（写真提供：糸島市教育委員会）……307
第 349 図　配崎山遠見番所平面図（二丈町教育委員会 2006 から転載）……307
第 350 図　雄熊山烽火台位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「中津」を一部改変して事務局作成））……308
第 351 図　雄熊山烽火台全景（上）・焚口部分（中・下）……308
第 352 図　雄熊山烽火台現況平面図（事務局作成）……308
第 353 図　「久留米藩の大里船入場」（浅野 1939 から転載）……309

表　目　次

第１表　福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会委員名簿……　1
第２表　福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会の経過（平成 28 年度）……　2
第３表　福岡県内の中世の主な拠点城館一覧……272

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経過

古代の防衛施設である大野城跡、基肄城跡、水城跡という特別史跡が存する本県では、九州歴史資料館を中心とした継続的な古代山城の調査研究をはじめ、保護のみならず整備・活用を図ってきた。また、8ヶ所の神籠石系山城も国史跡であるだけでなく、知識・技術を注いで研究者、行政それぞれの場で充実が図られている文化財として十分に周知されている。

一方で、中世以降近世初期までの間に築造された、山城を中心とする数多くの城館・城郭遺跡については、これまで県および市町村が実施した遺跡詳細分布調査や重要遺構確認調査、県史・市町村史編纂事業を通じて把握に努めてきた。また、任意団体や個々の研究者によって地道に続けられた調査研究成果の蓄積は著しく、本県における中近世城館研究の進展はこれに負うところが大きい。しかしながら、悉皆的な調査が実施されていないため、位置が特定されていない、あるいは詳細が十分に把握されていない城館・城郭遺跡は依然として多く、適切な保護措置を講じるにあたり情報が不足している状況である。そのため、全体的かつ総体的な評価を行うには至っておらず、遺跡の公開活用を図る上でも県内の城館遺跡相互の比較検討は必要であり、本県にとって中近世城館遺跡の総合調査の実施は課題となっていた。

近年の山間部における開発の増加に加え、山城に対する興味関心の高まりや保存活用の要望の増加から、急務となった総合的な調査に取り組むこととなった。県内の中近世城館遺跡を対象に、遺跡の位置や範囲、時代、歴史的背景等の基本的情報を可能な限り把握し、成果の体系的な整理と評価を行うものである。また、遺跡の周知化と保存活用に向けた理解の促進をも目的としている。

2　調査の経過

福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業は、国庫補助を受けて平成24年度から5ヶ年の計画で実施している。平成25年2月に第1回福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会（以下指導委員会）を開催し、調査の方針と手法について指導を受けた。委員は第1表のとおりである。本詳細分布調査は、県内市町村を旧国に基づいて地域分けし、筑前地域、豊前地域、筑後地域の順に調査を進め、随時報告書をまとめることとなった。

第1表　福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会委員名簿（敬称略）

委員氏名	職名	備考
西谷　正	九州歴史資料館名誉館長 九州大学名誉教授	委員長、考古学
服部英雄	くまもと文学・歴史館長 九州大学名誉教授	副委員長、中世史
中井　均	滋賀県立大学教授	城郭研究

平成25年度は筑前地域の報告書刊行と豊前地域の調査を実施する予定となっていたが、筑前地域に所在する中近世城館遺跡の数は非常に多く、また、関連資料等も膨大な量にのぼるため、報告書を2分冊とし、調査事業を1年延長することとなった。指導委員会は2回開催し、調査および報告書作成作業の進捗状況の報告、併せて、旧筑前国の三日月山城館群、黒崎城跡、花尾城跡の現地視察と検討を行った。また、筑前地域の南半部にあたる旧御笠郡・夜須郡・上座郡・下座郡・穂波郡・

嘉麻郡の旧６郡の調査成果を「福岡県の中近世城館跡Ⅰ－筑前地域編１－」にまとめた。

平成 26 年度は筑前地域北半部の重点調査と報告書の作成、豊前地域の調査を実施した。５月に開催した第４回指導委員会では、旧筑前国立花山城跡の南側に位置する城ノ越山に点在する城ノ越城館群の現地視察と検討、報告書作成作業の進捗状況および豊前地域の調査状況の報告を行った。平成 27 年３月には第５回指導委員会を開催し、旧豊前国長野城跡周辺に展開する城館群を現地視察し、検討を行うとともに豊前地域の調査状況の報告を行い、指導、助言を得た。年度末には筑前地域北半部にあたる旧鞍手郡・遠賀郡・宗像郡・糟屋郡・席田郡・那珂郡・早良郡・怡土郡・志摩郡からなる旧９郡の調査成果をまとめた「福岡県の中近世城館跡Ⅱ－筑前地域編２－」を刊行した。

平成 27 年度は豊前地域の重点調査と報告書の作成、筑後地域の調査を実施した。５月に開催した第６回指導委員会では旧豊前国の北東部にあたる馬ヶ岳城跡と松山城跡の現地視察と検討を行い、豊前地域の調査状況を報告するとともに筑後地域の調査についての指導、助言を得た。平成 28 年３月 10 日に開催した第７回指導委員会では、旧豊前国南部にあたる神楽城跡、大平城跡、宇都宮氏館跡の現地視察、検討を行い、筑後地域の調査状況を報告し、指導、助言を得た。年度末には豊前地域にあたる旧企救郡・田川郡・京都郡・仲津郡・築城郡・上毛郡からなる旧６郡の調査成果をまとめた「福岡県の中近世城館跡Ⅲ－豊前地域編－」を刊行した。

平成 28 年度は筑後地域の重点調査と報告書の作成を実施した。６月に開催した第８回指導委員会では旧筑後国の北東部にあたる鷹取山城跡、発心城跡、毘沙門岳城跡、杉ノ城跡といった耳納山系の中世城館と、近世では久留米藩有馬氏の居城であった篠山城跡の現地視察と検討を行った。また、筑後地域の調査状況や最終巻となる当年度報告書に所収される既報告地域の追加調査や近世台場・遠見番所・烽火台跡の調査について報告するとともに、今後の調査についての指導、助言を得た。平成 29 年２月 27 日に開催した第９回指導委員会では、最終回となることもあり、県内の代表的な城館跡として旧豊前国長野城跡とその関連遺跡である椎山城跡の現地視察と検討を行った。また、筑後地域及び総括編となる報告書の確認をするとともに、福岡県全域を踏まえた中近世城館遺跡の今後の保存と活用についての検討によって総括を行った。

第８回指導委員会の様子
（毘沙門岳城現地視察）

第２表　福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会の経過（平成 28 年度）

	開催日時	会　場	審議内容等
第８回	平成 28 年６月２日	久留米市 坂本繁二郎生家	・耳納山系の中世城館・篠山城跡の現地視察 ・耳納山系の中世城館・篠山城跡の検討 ・筑後地域等の調査について ・今後の予定（報告書作成等）について
第９回	平成 29 年２月 27 日	北九州市埋蔵文化財センター	・長野城跡・椎山城跡の現地視察 ・長野城跡・椎山城跡の検討 ・筑後地域及び総括報告書について ・福岡県の中近世城館遺跡の保存と活用について

3　調査の組織

本詳細分布調査事業は、福岡県教育庁総務部文化財保護課と九州歴史資料館とで協力して取り組んでいる。

福岡県教育庁総務部文化財保護課（調整・調査・報告）

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
総括					
教育長	杉光　誠	杉光　誠	城戸秀明	城戸秀明	城戸秀明
教育次長	荒巻俊彦	城戸秀明	西牟田龍治	西牟田龍治	西牟田龍治
総務部長	西牟田龍治	西牟田龍治	川添弘人	川添弘人	辰田一郎
文化財保護課長	伊﨑俊秋	伊﨑俊秋	赤司善彦	赤司善彦	赤司善彦
課長補佐	桂木俊樹	髙田政司	岩崎千鶴子	岩崎千鶴子	岩崎千鶴子
庶務					
管理係長	石橋伸二	石橋伸二	石橋伸二	伊藤幸子	伊藤幸子
事務主査	伊藤幸子	綾香博充	末吉大祐	末吉大祐	宮原朋子
	綾香博充	末吉大祐	宮原朋子	宮原朋子	青木久美
				青木久美	浦田宗一郎
主任主事	加藤教子	加藤教子	加藤教子		
調査・報告					
企画係長	吉田東明	吉田東明	吉田東明	吉田東明	吉田東明
技術主査	岸本　圭	今井涼子	今井涼子	宮地聡一郎	宮地聡一郎
	今井涼子		大庭孝夫		坂元雄紀
	宮地聡一郎				
主任技師		大庭孝夫	坂元雄紀	坂元雄紀	城門義廣
		坂元雄紀			

九州歴史資料館（調査・報告）

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
総括					
館長	西谷　正	荒巻俊彦	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠
副館長	篠田隆行	篠田隆行	伊﨑俊秋	伊﨑俊秋	飛野博文
参事				飛野博文	
参事補佐	小池史哲				
庶務					
総務室長	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塩塚孝憲	塩塚孝憲	塩塚孝憲
総務班長	長野良博	長野良博	山﨑　彰	中村満喜子	中村満喜子
調査・報告					
学芸調査室長	小田和利	小田和利	小田和利	小田和利	小田和利

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
学芸普及班長 （平成 25 年度から学芸研究班）	松川博一	松川博一	松川博一	松川博一	松川博一
技術主査		岡寺　良	酒井芳司 岡寺　良	酒井芳司 岡寺　良	酒井芳司 岡寺　良
主任技師	岡寺　良 一瀬　智	一瀬　智			

調査協力（本書報告対象地域のみ（50 音順・敬称略））

＜公的機関等＞㈶有馬記念館保存会、うきは市教育委員会、大川市教育委員会、大木町教育委員会、大牟田市教育委員会、大牟田市立三池カルタ・歴史資料館、小郡市教育委員会、九州大学附属図書館付設記録資料館、久留米市市民文化部文化財保護課、久留米市立中央図書館、篠山神社、親種寺、大刀洗町教育委員会、立花家史料館、筑後市教育委員会、広川町教育委員会、福岡県立伝習館高等学校、福岡県立図書館、みやま市教育委員会、柳川古文書館、柳川市教育委員会、柳川みやま土木組合、八女市新社会推進部文化振興課。

＜研究団体・個人＞片山安夫、木島孝之、佐々木四十臣、中村修身、北部九州中近世城郭研究会（代表：山崎龍雄）。

Ⅱ　調査の方法

1　調査の進め方と方法

前章でも述べたとおり、本県における中近世城館の調査研究成果の蓄積は著しく、既往の調査情報が比較的多くそろっているのが実情である。よって、既往情報の整理と蓄積を主眼に置き、以下のとおりの手順で調査を進めている。

＜手順１＞既存資料の把握

上記の状況を勘案し、対象地域における城館の全体概要を知るために、過去の調査資料等を把握するところから始めることとした。福岡県内における城館調査は、既に江戸時代の地誌類編纂にまでさかのぼることができるが、それらも含め、筑後地域については以下の８の文献に、城郭の一覧を早い段階において公表した『探訪日本の城』（1977 年・小学館発行。福岡県城郭一覧は西谷正が記載）を加えた９文献を「基本参考文献」とし、そのほか各自治体史や報告書等を参考にしながら、城館の情報を収集した。８の基本参考文献の概要は以下のとおりである。

①　『筑後将士軍談（筑後国史）』（矢野一貞著・1853 年）

筑後国は藩政時代、久留米藩と柳川藩に大きく二分されていたこともあって、筑後国全体をまとめた地誌類があまり多いとはいいがたい。そのような状況にあって、本書は国学者の久留米藩士・矢野一貞が嘉永６年（1853）に序文を記したもので、筑後国における合戦や官人・武将の伝記、城跡等を記したもので、久米邦武が『筑後国史』と副題を付けている。後の昭和２年（1927）に『校訂筑後国史　筑後将士軍談』（上・中・下巻）として筑後遺籍刊行会から版本が出され、世に広く知れ渡ることとなった。その後も同書は復刊が行われている。

本書の巻之 45・46（校訂本は中巻の後半部分）が「城舘第宅部」として筑後全 10 郡内の城館 172 箇所を解説しており、近世期にここまで一括して城館の解説を掲載している地誌はない。また、本書以前に刊行されたもので、筑後全体の城館を網羅した『筑後地鑑』（西以三著・1683 年。同書は『筑後地誌叢書』（1929 年刊のち 1979 年に復刊）に所収されている）の他、『寛延記』や『南筑明覧』（1765 年・戸次求馬著。『筑後地誌叢書』所収）などの久留米・柳川各藩の地誌の多くをそのまま引用しており、本調査を行うに際しては、まずはこの『筑後将士軍談』を引用した上で、不足分について他の地誌を引用することとした。

②　『旧城跡等ノ取調』（福岡県社第 1956 号　大正５年 10 月２日施行）

福岡県庁には大正５年の公文書の中に「旧城跡取調」という一連の文書が残されている。これは同年９月 10 日付にて高知県庁から各府県にあてての照会として、「貴府縣下ニ於テ旧城址ノ現存セルモノ有之候ハバ乍御手数左記事項御回報相成候」として城名、城主名、位置、面積、現存建物の有無、所有者及び管理者、利用・維持・保存方法について回答を依頼している。福岡県ではこれを受けて県下の郡役所に照会をかけ、回答を得ている。城数自体はさほど多くはないものの、大正時代の城跡の認識を知る上でも非常に重要な資料である。

③　『研究旅行用　面白い種々な見方の福岡縣史、史蹟名勝口碑傳説所在地』（和田宗八・1936 年）

福岡師範学校教諭の和田宗八が著し、金文堂から出版された。序文に「一、小学校の先生曰く、この村はつまりません。貧乏村で（以下略）」のユニークな書き出しで始まるこの書籍は、郷土史を

教える福岡県内の小学校、中等学校の教員のために記されたもので、福岡県の歴史に始まり、人物、風習、口碑伝説、遺跡などを記す。特に史蹟遺物口碑伝説所在地と銘打った一覧は、市郡ごとに詳細な地名表が掲げられ、城館のほか、寺社や遺跡なども数多く掲載されている。和田は本書を記すにあたって、地誌類はもとより数多くの古文献に当たっているようで、本文献が初出の城館も少なからず存在する。また、当文献は後の福岡県教育委員会作成の一覧（文献⑤）を作成する際にも、参考とされ、その後の城館一覧に掲載されるに至ったものもある。

④ 『日本城郭全集』14 佐賀・長崎・福岡（人物往来社（鳥羽正雄他編・1967 年））

大類伸が監修し、全国都道府県ごとに古代から中近世城館の全体概要を示したという点では、戦後初めてとなるシリーズ本で、鳥羽正雄や小室栄一など当時の学界をリードしていた研究者が編集を行った。福岡県は蒲池星が編集を担当、小和田哲男や廣崎篤夫などが執筆した。近世からの地誌のほか、郡誌などにしか掲載のない城館なども採り上げられ、昭和 40 年代における城館の把握状況を知ることができる。

⑤ 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXIX 付録　福岡県中世山城跡
（福岡県教育委員会（副島邦弘・近沢康治編）・1979 年）

九州縦貫自動車道建設に伴い、70 年代には福岡県教育委員会では路線内の記録保存調査を大規模に行うこととなったが、中世城館跡も幾つかが調査対象となった。その一つ、鞍手町音丸城跡の調査報告に際し、県内の中世山城跡の一覧表を作成報告したものが本書である。基本的には城名、所在地、立地、規模、形式、築城者、時代、残存遺構、文献、備考の項目を列記したものである。例言の５に「本書は、中世山城についての資料を採集した資料編で、今後の研究のためのたたき台としてほしい。」とあるように、その後の福岡県内における城館研究の基礎資料となった。

⑥ 『日本城郭大系』第 18 巻福岡・熊本・鹿児島（新人物往来社（磯村幸男編・1979 年）

全国の古代から近世に至るまでの城館遺跡を対象としたシリーズで、都道府県ごとに地元の研究者が執筆したこともあり、70 年代の城館遺跡に関する情報が網羅されたものとなっている。福岡県は県職員で古代史が専門の磯村幸男が編集を担当し、中世については当時、文献⑤を手がけていた副島邦弘と近沢康治が、近世は三池賢一という県の関係者が手がけている。中世に関しては文献⑤と重複する部分が殆どであるが、一般への普及という意味に於いては本書の果たした役割は大きい。

⑦ 『福岡県の城』（廣崎篤夫・1995 年）/『福岡県古城探訪』（廣崎篤夫・1997 年）

中学校の歴史教員の傍ら、全国城郭研究者セミナーなどの全国学会でも発表しつつ、60 年代から 90 年代の約 40 年をかけて県内 1,000 箇所の内の約 700 箇所を踏査し、内約 300 城を詳細に報告した労作である。特に、これまで城館跡の報告としては図面等が完備されたものがなかったが、本書では非常に多くの縄張り図を完備しており、本書が刊行された折には全国の城館研究者の注目度が高かったことは、当時の研究雑誌に書評が載せられたことからも窺い知ることができよう。また、巻末には詳細な城館一覧表が載せられていることも本書の学術的価値を高めている。また、『福岡県の城』刊行の２年後には普及・追補版として『福岡県古城探訪』が刊行されている。

⑧ 『福岡県の城郭』（福岡県の城刊行会・2009 年）

平成 11 年、福岡県に「北部九州中近世城郭研究会」が発足した。同会は、これまで北部九州の城館研究を推進してきた一人、中村修身が中心となって主宰するもので、年１回の研究集会の他、年数回の現地見学会、年２回の機関紙の発行が主な活動内容となっている。自治体、大学、その他

城郭研究者など、多様なメンバーによって構成された団体であり、この研究会が母体となって、中村と同会会員の村上勝郎が中心となってまとめたのが本書である。本書には、県内 222 箇所の中世城館の説明と挿図が載せられている。会員をはじめとする計 38 人という大人数が執筆に加わったこともあり、2009 年段階での県内城館の研究状況をそっくり反映したものとなっている。巻末には城館一覧も掲載されている。

また、筑後地域は藩領（久留米藩（御原郡・御井郡・三潴郡（一部）・山本郡・竹野郡・生葉郡・上妻郡（一部）・下妻郡（一部））・柳川藩（上妻郡（一部）・下妻郡（一部）・山門郡・三池郡））によって参考とする既往文献が異なるため、ここで各郡における既往文献の状況だけ簡単に触れておくこととしたい。

㋐久留米藩　久留米藩領において最も詳細に記した近世地誌が、『旧記寛文古城址書上』と『寛延記』（『寛延記』は 1976 年に久留米郷土研究会により翻刻版が出版されている）であろう。これらは久留米藩が領内の寺社・史跡等を把握するため、各村の庄屋に書上を提出させて編纂されたもので、大きなものでは寛文年間と寛延年間に行われている。さらに、『筑後志』などもある。また、明治時代以降に作成されたものとしては、各郡単位において異なるため、以下に分けて記す

a. **御原郡・御井郡・山本郡**　この３郡は近代以降、「三井郡」として一括される。これらの地域の城館が記載されたものとしては、昭和 33 年（1958）に三井郡社会科同好会から発刊された『郷土資料集』がある。

b. **三潴郡**　当郡においては、戦前に編纂された『福岡縣三潴郡誌』が存在するが、本報告書作成において参照することができなかった。そのため、それを多数引用し、なおかつ追加記載が数多く記載されている『新考三潴郡誌』（1932 年）ほか各自治体誌を参照した。

c. **竹野郡・生葉郡（うきは市部分）**　この両郡は生葉郡の星野村を除き、近代以降、「浮羽郡」として一括される。『浮羽郡誌』などの編纂誌もあるが、基本的にはすべて古賀基司の調査成果に拠っている。吉井町出身の古賀基司（元は基二）は戦前より浮羽郡内の中世城館の調査を熱心に行っており、『郷土研究筑後』などに幾度か調査報告を掲載していた。それらをまとめたのが、『浮羽古文化財保存会誌　宇枳波』第二号に掲載された「浮羽郡古城址とその歴史」である。そこには浮羽郡内に所在する古城について一つ

第１図　「浮羽郡古城址とその歴史」に掲載された福岡縣浮羽郡内古城分布図

一つ文献や現地踏査に基づいた報告が、分布図（第1図）と共に掲載されており、以後の同地域の城郭研究の基本文献となっているものである。本調査においても、浮羽郡内の城館現地調査は古賀基司の調査報告を丹念に読み込んだ上で、現地調査を行っている。いくつか古賀基司が伝承などの無い場所を城館としたものについては現地踏査の結果、誤認であるものもあった。しかしながら、古賀はそれらの所在を文章の形で丁寧に説明していたために、それが現地のどこを指しているかを把握できたため、再検証することが可能であった。

d. **生葉郡（八女市星野村部分）・上妻郡・下妻郡**　これらの地域は近代以降、「八女郡」として一括されている。同地域で参考としたのが『稿本八女郡史』（1917年・福岡縣八女郡役所）である。同書内の「城舘誌」に多くの城館の記載がみられる。

㋑**柳川藩**　柳川藩内においては、柳川藩領内全体を扱ったものとして、『旧柳川藩志』（1914年著・1962発刊（1980年復刻）・渡辺村男著）があり、同書中巻の「第16章　名所旧跡」には柳川藩領内の古城址の記載がなされている。また同書中巻に「附録」として「邪馬台国探見記」が掲載されており、古代の邪馬台国を検証するため筑後南部の史跡を解説しており、その中でしか記載されない中世城館もあり、貴重な記述となっている。また、郡ごとの文献としては、八女郡は先に挙げた『稿本八女郡史』、山門郡の『山門郡誌』（1926年・山門郡教育会編）や三池郡の『三池郡誌』（1926年・三池郡教育会編）を参考にした。

＜手順２＞既存情報の整理

上記の資料をはじめとする把握された既存情報を元に、城館一覧表を作成するとともに、位置が判明しているものについては国土地理院発行1/25,000地形図により位置図を作成した。それらの内容や詳細についてはⅢ・Ⅳを参照願いたい。

それらの情報をこの段階において、該当市町村教育委員会および指導委員会委員に情報照会を行ったうえで、追補訂正を行った。

＜手順３＞一次調査

上記、既存情報の整理を行った情報をもとに、一次調査として以下の調査を行った。

①　現地遺構の確認調査

位置が把握できたものについて、現地にて遺構の有無や状況について確認した。既に縄張り図等のデータがあるものについては、それらの図面と現地の状況との照合も行っている。

②　文書調査

既に翻刻されている古文書について、対象地区の城館にかかわる記載を抽出する作業を行った。詳細についてはⅥを参照願いたい。

③　絵図調査

古城跡を描いた古絵図資料として、文化～天保年間に秋月藩士の大倉種周・土井正就によって描かれた『古戦古城之図』（国立公文書館蔵）や、筑後地域編に関連する所では、篠山神社および久留米市所蔵の久留米城・福島城関係絵図、柳川古文書館保管の柳川城等絵図、柳川みやま土木組合所蔵の山門郡各村の字図の調査も行い、現地調査および報告書刊行のためのデータとした。

④　地名調査

城館にかかわる地名を抽出する作業で、「明治十五年字小名調」（『福岡縣史資料第七輯』1937年福岡県編集・発行）を元に、城館関連地名について抽出を行った。また、上記文献には記載さ

れていないが、現在残されている小字名なども城館に直接関わると思われるものについても抽出を行った。詳細についてはⅦを参照願いたい。

＜手順４＞二次調査（追加調査）

一次調査において、得られた情報をさらに補完するため、追加調査として二次調査を行った。調査内容については以下のとおりである。

①　現地調査

一次調査において現地を確認した結果、城館遺構が確認され、なおかつ既往の図面がないものについて、縄張り調査を行い、図面を作成した。また、平地に立地し、現地形からでは城館の範囲の特定が困難なものについては市町村が所蔵する地籍図を利用して城館の範囲を特定・推定した。作業の工程上、現地調査については一次調査と二次調査を連続して行わざるを得ない状況であり、いくつかについては事実上、一連の調査として行ったものもある。

なお、図面の作成方法･表記･遺構名称等については、『発掘調査のてびき　各種遺跡編』（2014年・文化庁編）に準じた。

②　地名調査

一次調査において確認された城館関連地名について、特定の城館と関連性が窺われるものについては、現在の場所との照合を行った。照合方法は、現在の小字との照合によるものであり、市町村教育委員会および地元博物館等に照会することで行った。そのため、既に今となっては所在不明となってしまったものも多かった。

最終的に、調査対象については「中近世城館」･「城館関連遺跡」･「城館等伝承地」の三分類を行い、それぞれ報告することとした。それらの分類基準は以下のとおりである。

a　中近世城館

中近世城館一般をさす。位置や来歴が明確なもののみならず、それらが不明の場合であっても、基本文献に城として記載されているものについてはここに含めた。

なお、報告においては中世城館と近世城館は区別し、中世から近世まで連続しているものについては中世城館に含め、近世以降に築城されたことが明らかなものについて近世城館とした。

b　城館関連遺跡

城館等の伝承や来歴はないが、発掘調査において確認された中世（概ね 12 ～ 16 世紀代）の溝や堀状遺構で囲まれた集落、屋敷地などの遺跡を指す。中世の屋敷地と思われる遺跡であっても、溝や堀で囲まれる、防御されたものではないものについては除外した。

c　城館等伝承地

城館伝承の内、主として特定の武将などの居館として伝承のあるもので、現在、場所や城館遺構が全く不明となっているもの、城館以外のもの（岩など）に城館伝承が付されているものを指す。確実に遺構等が見られるものについては「中近世城館」として扱っている。

なお、筑後地域にて散見される環濠集落については、確実に中世まで遡る伝承・記載等がないものについては除外している。

本書では、上記の調査を経た福岡県内の筑後地域（旧筑後国全域）について報告を行うものである。

Ⅲ　対象地域城館一覧

本章では、本書における対象地域内すべての城館および関連遺跡についての一覧を示す。一覧表の各項目の詳細は以下のとおりである。

＜一覧表の項目解説＞

「地域」…県内の旧国名（筑前・筑後・豊前）の別を示す。

「No.」…遺跡の分類ごとに通しで番号を付した。番号の振り方は以下のとおり。

- 「中世城館」…１・２・３･･･
- 「近世城館」…Ｋ１・Ｋ２・Ｋ３･･･
- 「城館等伝承地」…Ｄ１・Ｄ２・Ｄ３･･･
- 「城館関連遺跡」…Ｒ１・Ｒ２・Ｒ３･･･
- 「所在不明」…Ｆ１・Ｆ２・Ｆ３･･･

「名称・別称」……城館の名称が複数あるものについては、なるべく基本参考文献の初出名を名称として採用し、他の名称については別称とした。ただし、今日一般的に通用した名称が上記基準でない場合は、一般名称の方を採用した。
よみがなについては、なるべく確実に把握することに努めたが、読み方を確定できなかったものについては（）を付して記している。

「旧郡名」……旧郡名の別を指す。

「所在地」……大字までの表記とした。

「関連地名」……地名調査の結果、城館に直接関連すると思われる地名を記した。

「史料」……文書調査の結果、一次史料に記載のあるものには、「一次」欄に、参考史料に記載のあるものには「参考」欄に○を付した。

「地誌類・基本参考文献」…本一覧表を作成するにあたって基本参考文献とした文献に記載のあるものにはそれぞれ○を付し、「その他文献」欄にはそれ以外の文献番号（番号は参考文献一覧（32 ～ 34 ページに記載）の番号に同じ）を付した。番号がゴチックとなっているものについては、縄張り図または測量図が掲載されている文献を指す。文献の略号内容は以下のとおり。

- 「軍談」…『筑後将士軍談』（矢野一貞著・1853年）
- 「旧城」…『旧城跡等ノ取調』（福岡県社第1956号　大正５年（1915）10月２日施行）
- 「種々」…『研究旅行用 面白い種々な見方の福岡縣史、史蹟名勝口碑傳説所在地』（金文堂（和田宗八・1936年））
- 「全集」…『日本城郭全集』14 佐賀・長崎・福岡（人物往来社（鳥羽正雄他編・1967年））
- 「探訪」…『探訪日本の城』10西海道（小学館（西谷正ほか・1977年））
- 「教委」…『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXIX 付録　福岡県中世山城跡（福岡県教育委員会（副島邦弘・近沢康治編）・1979年）
- 「大系」…『日本城郭大系』第18巻福岡・熊本・鹿児島（新人物往来社（磯村幸男編・1979年）
- 「廣崎」…『福岡県の城』（廣崎篤夫・1995年）/『福岡県古城探訪』（廣崎篤夫・1997年）
- 「城郭」…『福岡県の城郭』（福岡県の城刊行会・2009年）

「種類」…以下の基準により分類して表記した。

・「山城」（比高約50m以上の丘陵・山稜上に立地する城館）

・「丘城」（比高約50m未満の丘陵上に立地する城館）

・「平地城館」（平地に立地する城館）

「所在」…城館の所在や遺構の状況や範囲は判別できるか否か等で以下のとおり分類・表記した。

◎…所在・残存遺構・範囲が明確に把握できるもの。

●…所在は把握できるが、残存遺構や範囲は把握できない（もしくは未踏査）もの。

○…小字の範囲程度の所在のみが把握できるもの

△…大字の範囲程度の所在のみが把握できるもの

なお、旧郡の範囲までしか把握できないものについては「所在不明」とした。

「図幅名」……Ⅳに掲載した位置図の図幅名を示した。図幅名は国土地理院のものを採用し、地図の西側と東側とで、それぞれ（西）・（東）を付した。

「調査データ」…今回の調査事業も含め、「縄張り調査」・「測量調査」・「発掘調査」がなされているものについて、それぞれ○を付した。

「包蔵地番号」…周知の包蔵地となっているものについては、包蔵地番号を県および市町村の番号をそれぞれ付した。それぞれの包蔵地を示した分布地図については、参考文献一覧を参照願いたい。

「概要」……Ⅴの個別報告に記載のあるものについては、記載ページを付し、記載のないものについては、城館の概要について記した。

＜中世城館＞

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献									種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
筑後	1	乙隈城	おとぐま	鎮西探題館・乙隈館	御原郡	小郡市乙隈	北小路・南小路・大門			○	○	○		○	○	○	○	○		平地城館	●
筑後	2	山隈城	やまぐま	花立山城・干潟城	御原郡/筑前国夜須郡	小郡市山隈・朝倉郡筑前町四三嶋・山隈	城山	○	○	○	○	○		○	○	○	**○**	**○**	10～12, 45,**48,128**	山城	◎
筑後	3	吹上城	ふきあげ		御原郡	小郡市吹上				○	○	○		○	○	○	○	○		平城	●
筑後	4	大板井城	おおいたい	坂井城	御原郡	小郡市大板井	屋敷・門出・大手町		○	○				○	○	○	○	○	135	平地城館か	○
筑後	5	甲条城	こうちょう		御原郡	三井郡大刀洗町甲条					○									平地城館か	○
筑後	6	下高橋城	しもたかはし		御原郡	三井郡大刀洗町下高橋				○	○			○	○	○	○	○	62,63	平地城館	●
筑後	7	上高橋城	かみたかはし		御原郡	三井郡大刀洗町上高橋			○	○	○			○	○	○	○	○		平地城館か	○
筑後	8	三原城	みはら	本郷館	御原郡	三井郡大刀洗町本郷			○	○				○	○	○	○	○	29,64,115	平地城館	◎
筑後	9	本郷城	ほんごう		御原郡	三井郡大刀洗町本郷				○						○	○	○		平地城館か	△
筑後	10	西鯵坂城	にしあじさか	西鯵坂館・阿地坂城	御井郡	小郡市下西鯵坂	城・番上田・城ノ内・東馬場添・西馬場添・大手		○	○	○	○		○	○	○	○	○	**123,135**	平地城館	◎
筑後	11	古賀城	こが	八町嶋城	御井郡	久留米市宮ノ陣町八丁島			○	○	○	○		○	○	○	○	○	135	平地城館か	△
筑後	12	稲員館	いなかず	稲員城	御井郡	久留米市北野町稲数				○	○					○	○	○		平地城館か	○
筑後	13	神代館	くましろ		御井郡	久留米市山川町神代				○	○			○		○	○	○		平地城館	◎
筑後	14	鶴ヶ城	つるが	舞鶴城	御井郡	久留米市山川町	鶴ヶ城			○					○	○	**○**	**○**		山城	◎
筑後	15	毘沙門岳城	びしゃもんだけ	別所城	御井郡	久留米市御井町		○		○					○	**○**	**○**	**○**	**37,126, 133**	山城	◎
筑後	16	杉ノ城	すぎの	住厭城	御井郡	久留米市御井町				○					○	**○**	○	**○**	**37,124, 133**	山城	◎
筑後	17	古寶殿城	こほうでん		御井郡	久留米市山川町				○				○	○	○	○	○		山城か	●
筑後	18	吉見岳城	よしみだけ	芳水嶽城	御井郡	久留米市御井町・山川町			○	○	○			○	○	○	○	**○**	**37,133**	山城	◎
筑後	19	高瀬城	たかせ		御井郡	久留米市御井町				○				○	○	○	○	○		山城	△
筑後	20	明星岳城	あかぼしだけ		御井郡	久留米市高良内町				○					○	○	○	○		山城	●
筑後	21	東光寺城	とうこうじ	算城・長増山城	御井郡	久留米市山川町		○		○	○			○	○	○	○	○	37,66	丘城か	●
筑後	22	磐井城	いわい	岩井城	御井郡	久留米市御井町・山川町				○	○			○	○	○	○		37,50	丘城か	●
筑後	23	若松城	わかまつ		御井郡	久留米市宮ノ陣町若松					○									不明	△
筑後	24	草場館	くさば	草場城	御井郡	久留米市宮ノ陣町大杜	内屋敷			○	○					○	○	○		平地城館か	○
筑後	25	五郎丸館	ごろうまる		御井郡	久留米市宮ノ陣町五郎丸	幡屋敷			○	○			○		○	○	○		平地城館か	○
筑後	26	弓削城	ゆげ		御井郡/山本郡	久留米市山本町豊田・山川町	城・城ノ谷・城ノ前		○										135	不明	○

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
二日市(東)				200002	04073	『軍談』には、「乙隈村城跡」として、「平城也。縦二十間、横十七間、周リノ土手高一間半」とし、鎮西探題・北条光時の居城ではないかとする。また同書には、「乙隈村舘跡」もあげ、館屋敷といい、三方に土居を設け、さらにその東十間の場所にも、四重の堀が巡ることや、西側に大門・関屋という地名が残るとし、探題北条氏の館、あるいは「土人ハ龍造寺ノ出城ト云伝フ」と記す。現在はおよその伝承地しか伝わっていないが、50～60年ほど前までは堀の跡とも考えられる溝が近辺に残されていたとされ(小郡市教育委員会の聞き取り調査による)、小字「北小路」「南小路」との間の一角を「大門」と呼ぶことから、そのあたりに城館があったものと考えられる。
二日市(東)	○			200032 ・ 530001	05023	本文68頁を参照。
鳥栖(東)				200116	07017	『軍談』には、「吹上村城跡」として、「平城也。縦二十四間、横十六間、三方ニ隍アリ」とし、南側の堀は水堀、東側と北側の堀は空堀であるとし、高橋鑑直が城主であるとするも時代は不詳とする。「ウーヤシキ(大屋敷か)」「ウーキンド(大城戸か)」「村囲」などの地名が残る近辺に城地が伝わり、東西方向に延びる土塁状の高まりも残されている。しかしながら、城の明確な範囲は現状では不明と言わざるを得ない。
鳥栖(東)				200271	10041	『軍談』には「大板井村城跡」として、『寛延記』を引用して城主不詳とするが、巻末に追記として、大板井村の伊藤善兵衛宅を「城」といい、宅地の南を「門出」と呼び、周囲には堀が巡るとしている。また、『筑紫氏所領城数覚書』(福岡市博物館蔵)には筑紫氏の持ち城の一つとして、「坂井之城」が出てくるが、おそらく大板井にある城の事を指しているものとみられる。現在、「門出」とその北側に「屋敷」という小字名があり、その近辺が城地と考えられるが、現地に明確な痕跡はなく、詳細は不明と言わざるを得ない。なお、福岡県の分布地図(文献138)には「大板井村館跡」としているが、「城跡」の間違いと思われる。
鳥栖(東)				650021		『種々』を初出とし、「甲條城址(廣瀬氏)」とある。県の分布地図(文献138)には甲条神社の周辺にあるとしているが、その根拠が不明なため、詳細もまた不明と言わざるを得ない。
鳥栖(東)			○	650026	0015	『軍談』には「下高橋村城跡」として「平城也。縦五十三間、横二十五間」とし、その東側と西側に堀があり、二ノ丸の存在も記載する。高橋氏代々の居城で、鑑種の代で筑前岩屋城へ移ったと記している。現在、下高橋の竈門神社には、「高橋様」と呼ばれる石塔があり、『軍談』の言う「高橋氏碑」である可能性が高い。同書には碑は下高橋城跡にあるとされることから、竈門神社が城地であると考えられる。神社近辺では、発掘調査もなされ、中世の溝なども検出されているが、全体的な構造を解明するまでには至っておらず、城に直接かかわるものか否かも不明と言わざるを得ない。なお、『種々』下高橋の項にある「下高松城址」は「下高橋城址」の誤りであろう。
鳥栖(東)				650027		『軍談』には「上高橋村城跡」として「平城也。縦四十九間、横四十間、西ニ長三十六間、横一間ノ堀アリ、三方ハ藪ナリ」とし、高橋図書頭武重が居城したとする。『寛延記』には「東立」という場所にあったとし、田になっているとある。同書にはさらに高橋図書頭は天正14年(1586)に筑前岩屋城にて討死したとしている。また、『筑紫氏所領城数覚書』(福岡市博物館蔵)には筑紫氏の持ち城の一つ「高橋ノ城　切取ル」として千手六亟を城主とするが、上高橋城か下高橋城のどちらかかは不明である。なお、上高橋城は、上高橋の老松神社付近に推定されているが、明瞭な痕跡などはなく詳細は不明と言わざるを得ない。
鳥栖(東)		○	○	650023		本文69頁を参照。
鳥栖(東)						『寛延記』には「本郷町西築地殿と申城主有之候由申伝候。城跡に大塚二つ有之候。年号時代相知不申候」とあり、本郷町の西側に築地殿という城主がいた城があったことがわかる。また『軍談』には「本郷村城跡」として「平城也。縦二十五間、横二十四間、南ニ長二十間、廣八間ノ堀アリ」とし、三原左衛門重種が居城したとあり、『寛延記』の築地殿の記載を記す。現在その場所は全く分からないため、不明と言わざるを得ない。
鳥栖(西)	○			200280	15004	本文70頁を参照。
鳥栖(東)						『軍談』には「古賀村城跡」として「平城也、縦五十間、横三十一間」とし、二ノ丸や、南北に堀の存在を記す。また、筑紫上野守が築城し、家臣の岩橋麟迦が守備したとし、天正14年(1586)7月に薩摩勢に攻められたため、城を焼いたとある。『寛延記』も、城主を岩橋林家とする他はほぼ同様の記載であるし、『筑紫氏所領城数覚書』(福岡市博物館蔵)には筑紫氏の持ち城の一つ「八町嶋城」として城主は岩橋林加と記されている。。現在の宮ノ陣町八丁島の古賀に位置するとみられるが、詳細な場所は不明である。また『種々』には三井郡三國村の力武(現在の小郡市力武)の項に「古賀城址(筑紫氏)」と記されるが、当城のことを指していると思われ、所在も誤認しているとみられる。
鳥栖(東)				660016	38	『軍談』には「稲員村舘跡」として延暦21年(802)に稲員保只が稲員村に館を構え、正応3年(1290)に右京大夫良参が上妻郡古賀村に移ったとする。『種々』には三井郡大城村稲敷の項目に「稲員館址(稲員氏)」とする。県教委あるいは北野町教育委員会発行の分布地図には、北野町稲数所在とし、およその場所が示されているが、あくまでも推定地であり、詳細は不明と言わざるを得ない。
久留米 (東/西)				030150		本文70頁を参照。
久留米(東)	○			030335		本文71頁を参照。
久留米(東)	○			030416		本文73頁を参照。
久留米(東)	○			030725		本文74頁を参照。
久留米(東)				030334		『軍談』には「古寶殿城跡」として『寛延記』を引き、時代は不明で、上古の社の跡であるとする。城跡と伝えられる現地には、人工的な広い平坦面が残されているが、寺社関連の造成面であり、明確な城郭遺構は見られないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
久留米 (東/西)	○	○		030418 030419 030420		本文76頁を参照。
久留米(東)						『軍談』には「高瀬氏城跡」として「高良山ニアリ、文明ノ頃ヨリ大永年間迄、高瀬氏是ニ拠ル、今其所ヲ知ス」とあり、高良山内にあることが想定されるものの、『軍談』にあるとおり、所在は不明である。
久留米(東)				030931		『軍談』には「明星嶽城地」として、正平年間に菊池氏が征西将軍を奉じて陣を置いたことなどが記され、堀などの存在が記載される。しかしながら、明星山山頂には、平安時代の瓦や土師器が散布するものの、曲輪、堀などの明確な城館遺構は存在しておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
久留米(西)				030295		『寛延記』には「一古城跡　一ヶ処　東光寺　此城主の儀不相知」とあるが、『軍談』には「東光寺城跡」として天正年間には高良山座主良寛・大祝保常がこれを守備したとある。また、『高良山雑記』(文献66に該当箇所所収)に「東光寺城趾　招魂所の処、坐主の出城なりしと云ふ」とあり、現在の山川招魂神社付近に城地が想定されるが明確な城館遺構は確認されていない。なお、近隣では茶臼山・東光寺遺跡として発掘調査がなされており、中世の館跡と思われる遺構が検出されており(筑後R8)、関連が窺われるが、天正年間の記載とは無関係のようである。
久留米(西)				030340		『軍談』には「磐井城跡」とあり、「高良山大祝第宅ノ前ニアリ」とあり、大祝邸跡の西側を九州自動車道建設に伴い「岩井城」として調査を行ったが、関連する遺構は確認されていない。文献37には、調査地の東にある大師堂付近に城地が求められるとするも、明確な城館遺構は確認されていない。『種々』の三井郡御井町高良山の項には「磐井居館址」の名が挙げられている他、古代の豪族、筑紫国造磐井の城であることや、大祝保常の出城であるとしている(典拠不明)。
鳥栖(西)/ 久留米(西)						『種々』を唯一の出典とし、三井郡宮陣村若松の項に、「若松城址」とのみ記載する。現在の宮ノ陣町若松に所在するものと思われるが、これ以上の情報がなく、また若松地内においても明瞭な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
久留米(西)						『軍談』には「草場村舘跡」として、「圓通寺ノ丑寅ニアリ赤司資清居館ノ跡也」と記す。現在の圓通寺の北東側にあったものと考えられるが、堀などの明確な城館遺構は確認できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
久留米(西)				030012		『軍談』には「五郎丸村舘跡」として「村中叢林ノ内ニアリ、近藤氏代々ノ館跡也」とある。県の分布地図(文献138)に西鉄五郎丸駅南東側に位置を示しているが、明確な根拠は不明であり、明確な城館遺構も残存しないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
久留米(東)						『筑紫氏所領城数覚書』(福岡市博物館蔵)には筑紫氏の持ち城の一つ「弓削城」として弓削左衛門を城主とする。文献135では、久留米市山本町に弓削の地名があるとして、山川町と山本町豊田との境界付近に「詰めの城」や「城の館」を想定する。付近には「城」「城ノ谷」「城ノ前」などの地名があり、およその城地が推定されるものの、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献								種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他	
筑後	27	大石館	おおいし		三潴郡	久留米市大石町				○			○			○	○	○		平地城館か	●
筑後	28	白口中村館	しらぐちなかむら	白口館・中村館	三潴郡	久留米市荒木町白口	黒門・馬場・蔵跡			○	○			○		○	○	○	20	平地城館か	○
筑後	29	荒木館	あらき	荒木近藤氏館	三潴郡	久留米市荒木町荒木	館		○	○	○			○		○	○	○	20	平地城館か	○
筑後	30	大隈城	おおくま		三潴郡	久留米市梅満町				○			○		○	○	○	○		平地城館か	●
筑後	31	海津城	かいづ	安武古町城・古町城	三潴郡	久留米市安武町大島			○	○	○			○	○	○	○	○	20,**37**,**72**	平地城館	◎
筑後	32	荊津館	おどろつ		三潴郡	久留米市宮ノ陣町荊津				○				○		○	○	○	20	平地城館	●
筑後	33	隈城	くま		三潴郡	久留米市大善寺町夜明													136	平地城館か	○
筑後	34	高三潴館	たかみづま	高三潴式部少輔館	三潴郡	久留米市三潴町高三潴				○	○					○	○	○	20,31	平地城館か	●
筑後	35	横溝氏館	よこみぞし		三潴郡	久留米市三潴町高三潴													31,112	平地城館か	●
筑後	36	田川館	たがわ	田川城	三潴郡	久留米市三潴町田川				○	○			○	○	○	○	○	20,31	平地城館	●
筑後	37	犬塚城	いぬづか		三潴郡	久留米市三潴町玉満	陣堀		○		○			○	○	○	○	○	20,31,112	平地城館	◎
筑後	38	下田館	しもだ		三潴郡	久留米市城島町下田				○	○					○			20,41	平地城館か	△
筑後	39	下田城	しもだ		三潴郡	久留米市城島町下田				○	○			○	○	○	○	○	20,41,46	平地城館か	△
筑後	40	西江上城	にしえがみ	江上城	三潴郡	久留米市城島町江上本	館	○		○	○			○	○	○	○	○	20,41	平地城館か	○
筑後	41	東江上城	ひがしえがみ	江上城・館古賀城	三潴郡	久留米市城島町江上	館ノ前・館古賀・東三ノ丸・西三ノ丸・館屋敷	○		○	○			○	○	○	○	○	20,41	平地城館か	●
筑後	42	下青木城	しもあおき		三潴郡	久留米市城島町下青木													46	平地城館か	△
筑後	43	南清松館	みなみきよまつ		三潴郡	久留米市三潴町清松			○										31	平地城館か	●
筑後	44	生津城	なまづ		三潴郡	久留米市三潴町生津				○	○			○	○	○	○	○	20,31	平地城館	◎
筑後	45	生津館	なまづ		三潴郡	久留米市三潴町生津か								○		○	○	○	20,31	平地城館か	△
筑後	46	西牟田本村館	にしむたほんむら	本村館	三潴郡	久留米市三潴町西牟田				○	○				○	○	○	○	20,31	平地城館か	○
筑後	47	西古賀館	にしこが		三潴郡	久留米市三潴町西牟田				○				○		○	○	○	31	平地城館か	●
筑後	48	西牟田館	にしむた		三潴郡	筑後市西牟田	城崎		○	○				○		○	○		20,31	平地城館か	●
筑後	49	西牟田城	にしむた		三潴郡	筑後市西牟田	館	○	○					○	○	○	○	○	20	平地城館か	●
筑後	50	流館	ながれ		三潴郡	筑後市西牟田	本城			○				○			○	○		平地城館か	○
筑後	51	福間館	ふくま		三潴郡	三潴郡大木町福土				○				○		○	○	○	20,113	平地城館か	○
筑後	52	草野別館	くさの	福間別館	三潴郡	三潴郡大木町福土か				○				○			○			平地城館か	△
筑後	53	蛭池館	ひるいけ		三潴郡	三潴郡大木町蛭池				○	○			○		○	○	○	20,110,113	平地城館か	○

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
久留米(西)						『軍談』には「村中ニアリ、今陣ノ内ト云、伊勢ノ産大石越前守ノ館也」とし、現在の大石神社が城地であるとする。この記載から場所は特定できるが、明確な城館遺構はみられず、詳細は不明と言わざるを得ない。
久留米(西)				030797		『軍談』には「白口中村館跡」として「川ノ南ニアリ、一木但馬守ノ館跡ト云、廣凡二反計、三方ニ堀アリ、北ニ黒門ト号スル地アリ」とし、馬場、蔵跡などの地名が残るとする。県の分布地図(文献138)などには城地が推定されているが、明確な根拠が不明であると共に、明確な城館遺構は見られないため、詳細もまた不明と言わざるを得ない。
久留米(西)				030961		『軍談』には「荒木村舘跡」として「上荒木ノ村中ニアリ、其地ヲ館ト云、民家十軒計アリ」とし、近藤備後守の居館であるとする。県の分布地図(文献138)には字「村中」の場所に館地が推定されているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細もまた不明と言わざるを得ない。また、館推定地の鹿児島本線を挟んで東側には、元亀3年(1572)銘のビゴさん塚という石塔(包蔵地番号030985)があり、近藤備後守の墓と言われている。
久留米 西部(東)				030227		『軍談』には「大隈村城跡」として、「村中ニアリ」とし、大隈左近将監の居城で、文政7年(1824)に城跡の東、「搆へ口」という場所から礎石3つが掘り出されたとする。そして、現在の大隈天満宮が城地であるとしている。以上のことから大隈天満宮に城地が求められるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
久留米 西部(東)			○	030598		本文78頁を参照。
久留米 西部(東)				030765		『軍談』には「荊津村舘跡」として荊津伊賀守の館跡であり、藤吉村幸市という者の宅の傍の観音堂が城地であるとする。荊津天満宮付近に城地が想定されており、近隣の道蔵遺跡(筑後R14)において中世の区画溝が検出されており、荊津館との関連が想定されているが、全体的な構造を解明するには至っていない。
久留米 西部(東)				030949		県の分布地図(文献138)に「隈城跡」として「安土時代、丘陵、周囲に堀をめぐらす、玉垂宮祝部隈氏の居城」とあるが、典拠は記されておらず、真偽は確かめる術がない。現地にも明確な城館遺構は確認できないようであり、詳細は不明と言わざるを得ない。
久留米 西部(東)						『軍談』には「高三潴村舘跡」として高三潴式部少輔の館で、三方に堀(塹)が巡り、その場所が「館」と呼ばれているとある。またその地には、富松氏の宅があり、宅内に塚と祠があるとする。県の分布地図(文献139)には「富松どんの墓」(680023)があり、それを指しているものと思われ、その付近に城地が想定されるが、明確な城館遺構は確認できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
久留米 西部(東)						『三潴町史』(文献31)には高三潴字池田の弓頭神社前の小路を横溝と言い、鎌倉時代に高三潴村の地頭職に補任された横溝氏代々の居館跡と言い伝えられるという。また近くには寛政3年(1791)に祀った「オヤシロサン」が残るとされる。現在神社の西側に標柱も建てられており、およその場所は推定できるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
久留米 西部(東)				680039		本文79頁を参照。
久留米 西部(東)	○			680014 680015		本文80頁を参照。
久留米 西部(西)				690021		『軍談』には「下田村城舘跡」として堤貞正入道妙光が、下田村近郷の七邑を領して、寛正3年(1462)に下田村に居を構えたとし、南北八十間、東西六十間であるとする。城島町下田地内に想定されるものの、『新考三潴郡誌』(文献20)にもあるとおり、詳細な場所は不明である。
久留米 西部(西)				690021		『軍談』には「下田村城舘跡」として、堤貞正の館の記載に続き、永禄3年(1560)に、村中の久重に城を築き、大友勢を防いだとある。また同7年には村の南に新川を掘り、要害としたとある。また江戸時代にかかれた「神社仏閣幷古城跡之覚書 三潴郡城島組」(文献46所収)の三潴郡下田村の項には「一城跡 堤薩摩守城跡と申伝候、漸々川崩仕、唯今ニては川中ニ罷成居申候」とあり、既に川によって崩れてしまったことが記されている。城島町下田地内でなおかつ川に近い場所に想定されるものの、『新考三潴郡誌』(文献20)にもあるとおり、詳細な場所は不明である。
羽犬塚(西)				690010		『寛延記』の江上上村(本村の誤まりか)の項に、「一江上殿古城跡 西江上と申処へ有之候。前々より城跡と申伝、只今田地ニ罷成居申候」とある。また、『軍談』には「江上村城跡両所」として「江上本村ノ内西江上ト云ル地、江上三郎忠種ノ古城也、其地山王社ノ北ニ当テ、中牟田村ノ境也」とある。『新考三潴郡誌』(文献20)にも、江上村大字江上本字館166番地に江上四郎の城跡(江上三郎の誤まりか？)とあり、そこには松樹の古木があるとされる。実際、その地番は今でも伝江上三郎墓とされている(文献150)。以上のことから、城島町江上本にある日吉神社の北側、林松寺との間の一帯に城地が想定されるが、戦後すぐの空中写真を見ると、非常に細かくクリークが入っており、戦国時代の城域を想定できるような地形ではなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(西)				690011		『寛延記』の江上上村の項に「一　江上殿古城跡　此処前々より館古賀と申伝、都而田地ニ罷成居申候」とある。また『軍談』には「江上村城跡両所」として、西江上の城跡の記載の後に、「又江上々村ノ内ニ舘ノ古賀ト云ル地、江上四郎ノ古城趾也」とある。そして『新考三潴郡誌』(文献20)にも、江上村大字江上字館屋敷182番地に江上三郎忠種(江上四郎の誤まりか)の城址があるとし、現在も江上182番地は城跡とされ、官有地で若宮神社が祀られている。同書には、城跡の東南部が「館ノ前」、西部が「館古賀」、北部に「東三ノ丸、西三ノ丸」の小字があると記す。城の場所は上記のとおり推測できるが、戦後すぐの空中写真を見ても、直線的なクリークがとめどなく広がっており、戦国時代の城域を明確に想定できるような地形とは言えず、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(西)						江戸時代に書かれた「神社仏閣幷古城跡之覚書 三潴郡城島組」(文献46所収)の三潴郡下青木村の項に「一城跡　鐘ヶ江民部居城跡之由申伝候」とあり、鐘ヶ江殿の墓所という小塚なども記載する。これ以外に記載は見られず、また下青木地内に城館遺構が確認されていないため、詳細な場所も含め不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)						『三潴町史』(文献31)には三潴町清松の字身ノ代には、東西70間、南北45間、北東南の三方に堀を廻らし、西側は山ノ井川に面した場所があり、古老たちは城跡と呼び、『筑後秘鑑』を引いて、清松村領主の「白仁弾正入道鎮広の館跡である」とする。現状は圃場整備が進み、全く見当もつかず、また戦前の地図や戦後すぐの米軍の空中写真を見ても、身ノ代集落は、山ノ井川に並行あるいは直交するクリークが多数入っており、明確な城域を読み取ることは不可能であり、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)						本文81頁を参照。
羽犬塚(東)						『軍談』には「生津村舘跡」として「東西五十六間、南北三十九間、堀口廣東八間、南四間、北二十四間、西十三間、西牟田氏常居ノ舘跡、今ハ西牟田本村口分田村ノ中トナル」とあるが、明確な場所が不明であるため、詳細もまた不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)						『軍談』には「西牟田本村舘跡」として「東西三十五間、西南北ニロアリ、南北ニ二十五間ノ堀アリ、口ノ廣二間」とあり、西牟田氏の老臣・中弾正が居したとする。『三潴町史』にも、場所については検討したが不明であるとされており、旧西牟田本村内に城地が想定されるものの、明確な場所はわからず、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)						『軍談』には「西古賀舘跡」として「東西二十六間、南北三十間、東ニ堀アリ、口廣二間、南北三十間ノ土手アリ」とあり、西牟田氏家臣・高橋次郎家次が居したとある。『三潴町史』(文献31)には「農協西牟田支所の北側の少し高めの一帯を「館山」と呼び、戦国時代には館があったといわれている」とあり、場所を推定している(小字は古賀)。現在は住宅地となっているが、同書では以前は空堀の一部が残っていたとある。城地は推定できるものの、明確な城館遺構は残存しておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)						『軍談』には「西牟田舘跡」として、西牟田氏家老の長松右京の館跡で、真光寺の境内地に当たるとする。真光寺の位置から城地は想定できるものの、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)					1341-13	江戸時代の地誌類には掲載されず、『新考三潴郡誌』(文献20)に「西牟田城址」として「西牟田村字館にある」とし、藤原道隆後裔の家綱入道行西が西牟田を領し、城を築いたとする。その後、天正7年(1579)に生津城を築城して移ったとする。筑後市西牟田の字館に城地が想定されており、戦後すぐの米軍の空中写真などには、北側と西側に矩形に折れるクリークなども確認されるものの、城館遺構とは断定できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)						『軍談』には「流村舘跡」として「其地ヲ本城ト云、舘主詳ナラス」とある。また、同書の「福間村舘跡」の項には「大森筆記」からの引用として、横溝村廣門宮を建立した堀戸左近は廣門(筑紫廣門のことか)の末孫で、本国は筑前で、流村にも館があり、本城というとある。『福岡県の城』や『城郭』では三潴郡大木町にあるとしているが、大木町内に「流」の地名はなく、筑後市西牟田にある「流」を指しているものと思われる。近隣に西牟田城なども想定され、混同も考えられるが、いずれにせよ詳細な場所は確認できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)						『軍談』には「福間村舘跡」として「西牟田家臣田中大膳入道、石橋上野、並ニ当村ニ居ル、舘跡今猶存ス」とあり、二箇所の館の存在を記している。詳細な場所については、『大木町史蹟・文化財めぐり』(文献113)には、場所不明としながらも、「「高の城」という地名があるので、ここではなかろうかと土地の人はいっている」とし、一応の推定地はあるものの、確証はなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)						『軍談』の「福間村舘跡」の項には、「大森筆記」からの引用として、西牟田氏の家臣に松浦右衛門佐が十八町を領し、草野別館に居住したと記している。おそらく旧福間村内にあったものと考えられるが、確証はなく、詳細な場所は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)						『軍談』には「蛭池村舘跡」として「東西三十九間、南北三十間」で周囲に堀と南北に篤(土塁)があるとし、西牟田氏家臣、牟田筑前守家村の館であるとする。『新考三潴郡誌』(文献20)には「居館址は木佐木村大字蛭池字館にあり、周囲に濠をめぐらし、敷地は五反歩に及び、小高い樹林のある所は居館庭園中の築山であったといい傳えられている(木佐木村役場調査)」とあり、文献113には、そこと思われる場所に位置が示されるが、区画整理以前の地図や航空写真を見ても、周囲には類似するような方形区画が並列しており、上記の場所を特定することは困難である。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献									種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
筑後	54	大藪砦	おおやぶ	大藪居館	三潴郡	三潴郡大木町大藪	高の城			○	○			○			○	○	20,113	平地城館か	○
筑後	55	城ノ内城	じょうのうち	横溝城	三潴郡	三潴郡大木町横溝					○			○	○	○	**○**	○	20,113	平地城館か	●
筑後	56	下林城	げばやし		三潴郡	大川市下林					○				○	○	○	○		不明	△
筑後	57	木室城	きむろ		三潴郡	大川市本木室	城の上・赤城			○	○			○	○	○	○	○	20	平地城館	●
筑後	58	酒見城	さけみ		三潴郡	大川市酒見	上城内・下城内・蔵畑	○		○	○			○	○	○	○	○	20,22,28	平地城館	◎
筑後	59	津村城	つむら		三潴郡	大川市津	城跡・二ノ丸		○	○	○				○	○	○	○	20,22,28	平地城館	◎
筑後	60	西田口城	にしたぐち		三潴郡	大川市三丸	城内			○	○				○	○	○	○	20	平地城館か	●
筑後	61	蒲池城	かまち	鎌池城	三潴郡	柳川市東蒲池		○		○	○			○	○	○	○	**○**	20,22	平地城館	●
筑後	62	谷山城	たにやま		山本郡	久留米市山本町豊田					○				○	○	○	○	17	不明	△
筑後	63	柳坂城	やなぎさか		山本郡	久留米市山本町柳坂				○				○	○	○	○	○		山城	△
筑後	64	飯田館	いいだ		山本郡	久留米市善導寺町飯田		○			○			○		○	○	○	25	平地城館	●
筑後	65	吉木館	よしき		山本郡	久留米市草野町吉木				○	○			○		○	○	○		平地城館か	△
筑後	66	吉野尾館	よしのお	草野館	山本郡	久留米市草野町吉木				○				○		○	○	○	24	平地城館か	●
筑後	67	竹井城	たけい	武井城・竹之城	山本郡	久留米市草野町吉木	古城山	○		○	○	○	○	○	○	○	**○**	**○**	17,24,37,**122**	丘城・山城	◎
筑後	68	釣井城	つりい		山本郡	久留米市草野町吉木				○								○	24	山城	△
筑後	69	発心城	ほっしん	発心岳城	山本郡/竹野郡/上妻郡	久留米市草野町草野・田主丸町中尾、八女市上陽町上横山・上陽町下横山	蔵所	○		○	○	○	○	○	○	**○**	**○**	**○**	**17,24**,30,37,119,**122,124**	山城	◎
筑後	70	問本城	といもと		山本郡か	久留米市草野町か			○											不明	△
筑後	71	鳥飼城	とりかい		竹野郡	三井郡大刀洗町三川				○	○	○			○	○	○	○	24	平地城館	●
筑後	72	恵利砦	えり		竹野郡	久留米市田主丸町恵利													119	平地城館	●
筑後	73	奴田館	ぬた		竹野郡	久留米市田主丸町豊城	城の内											○	119	平地城館	○
筑後	74	平家城	へいけ		竹野郡	久留米市田主丸町田主丸													119	平地城館か	●
筑後	75	平家城	へいけ	松門寺城・松門寺館	竹野郡	久留米市田主丸町常盤				○					○	○	○	○	119	平地城館か	●
筑後	76	小川館	おがわ		竹野郡	久留米市田主丸町船越				○	○		○	○		○	○	○	119	平地城館	●
筑後	77	諏訪館	すわ		竹野郡	久留米市田主丸町殖木				○		○		○		○	○	○	119	平地城館か	○
筑後	78	平家城	へいけ	諏訪平家城	竹野郡	久留米市田主丸町殖木				○		○		○	○	○	○	○	119	平地城館か	△
筑後	79	下笹尾岳城	しもささおだけ	笹尾岳城	竹野郡	久留米市田主丸町竹野									○	○	○	○	119	山城か	●
筑後	80	姥ヶ城	うばが		竹野郡	久留米市田主丸町地徳	姥ヶ城								○	○	○	○	119	山城	●

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
羽犬塚(東)						『軍談』には「大藪村砦跡」として「天正十二年蒲池鑑廣砦ヲ搆ヘ、大木・中村・末吉ノ党ヲシテコレヲ守ラシム」とある。『種々』では「大藪居館址」とする。現在、正確な場所がわからなくなっており、詳細は不明と言わざるを得ない。しかし、『大木町史蹟・文化財めぐり』(文献113)には出典不明ながら、「大藪館跡」として元寇後、大藪の地頭として派遣された高橋丹藤兵衛藤原基氏の屋敷で、大藪三島神社の西方堂屋敷に構えたとする。確証は全くないが、いちおうここを城地として位置を推定する。圃場整備前はこの地はクリークに囲まれた屋敷跡の様相を呈していたというが、それらが屋敷の区画を示すか否かは確証はなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(西)	○			670007		『種々』三潴郡大溝村横溝の項に「城ノ内城(蒲池氏)」と名を挙げるのを初出とする。文献31では「城ノ内の城跡」として「大溝村大字横溝字本村に城ノ内の城址という所がある。蒲池氏の別館の址である」とし、蒲池五代の孫、筑後守治久は末弟の久弘を代官としてこの地にて近郷を支配させたとある。現在、文献113などでは横溝本村の集落の西端に城地が推定されているが、現地の状況、さらには戦後すぐの航空写真を見ても明確な城館遺構は確認できず、詳細な位置を含め不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(西)						『種々』三潴郡三叉村下林の項に「下林城址」と記すのが初出で、以降の文献も基本的にはこの記載を元にしているようである。大字下林地内にあることは想定できるが、それ以上の情報がなく、明確な城館遺構も確認されていない。
羽犬塚(西)				120018		『軍談』には「木室村城跡」として「同年(天正12年)木室又兵衛拠此城、肥兵ヲ防グ」とある。字城の上に城地が想定されている。耕地整理前の空中写真や地図を見ると、周囲には、方形のクリークがたくさん点在しており、明確な城館遺構としていずれも認識することは困難であり、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(西)				120061		本文82頁を参照。
羽犬塚(西)				120071		本文83頁を参照。
羽犬塚(西)				120049		『軍談』には「西田口村城跡」として「田口刑部居城ノ古跡也、其地ヲ城内ト云」とある。城内という地名は現在は所在不明となっており、推定地は存在するものの、明確な根拠に乏しく、また戦後の米軍の空中写真を見ても、明瞭な区画は存在せず、詳細は不明である。
羽犬塚(西)	○			080059		『軍談』では「蒲池村城跡」として天慶年間に藤原純友の一族が築き、後に蒲池家が代々の居城とし、柳川城を築城した後は、柳川城の出城となったことや、立花宗茂が柳川に入った際には、小野和泉守が守ったことが記される。天正9年(1581)には、柳川城主蒲池鎮連は龍造寺隆信に謀殺、本城柳川城と共に落城している。城跡の詳細な位置や構造を示す既往文献はほとんどなく、『城郭』では西蒲池の祟久寺の西側一帯が城跡としており、現地には城跡の石碑も建てられている。その一方で、『福岡県の城郭』では西蒲池の三島神社が城の中心ではないかという案も出されているが、筑後平野一帯のクリーク集落の神社の多くは水路で囲われており、それをもって城跡と即断できる状況でもない。そして、現状および戦後の米軍の航空写真、さらには大正6年の地図を見たところでも、城跡と判断できるような明瞭な区画は確認できない。よって、城の中心部分の位置を含め、詳細は不明と言わざるを得ないが、国道385号線バイパスの建設に伴う近年の発掘調査では、中世期の遺構や遺物も確認されているため、今後の調査いかんによってはより明確に判明してくる可能性も考えられる。
久留米(東)				030730		『三井郡読本』(文献17)には千光寺(谷山城)として、南北朝時代の懐良親王が大保原合戦の後、山本千光寺に入ったことが記されている。また、『種々』には「谷山城址(谷山氏)」とあり、南朝方の城として捉えられていたようである。県の分布地図(文献138)では千光寺の西側の永勝寺の西の裏山に城地が推定されるが根拠に乏しく、明確な城館遺構が確認されておらず、また千光寺そのものを指している可能性も考えられる。
久留米(東)						『軍談』には「柳坂村城跡」として「山中ニアリ、南北十五間余、東西八九間、城主未タ詳ナラズ」とある。柳坂地内にあるものと考えられるが、詳細な場所や明確な城館遺構が確認されておらず、詳細は、不明と言わざるを得ない。
久留米(東)				030183		本文84頁を参照。
久留米(東)						『軍談』には「吉木村舘跡」として「赤司氏ノ舘跡也」とあり、赤司氏末裔の農夫宗作の宅地にあることや、館の門の左右に銀杏2株が植えられていたが、今は1株しかないことなどが記される。草野町吉木地内にあることが想定されるが、詳細な場所が現在分からなくなっており、不明と言わざるを得ない。
久留米(東)						『軍談』には「同村(吉木村)吉野尾舘跡」として「同氏(草野氏)代々ノ居舘也」とし、さらに『寛延記』を引いて惣郭や築地の跡は「南面松」といい、家中小路ノ跡ハ今田畠ノホノケニ残レリ」とある。また、『寛延記』吉木村の項の「小森大明神」の文中には、「草野氏代々山城の麓、吉野尾御館下に小森あり」と記す。『郷土資料集』(文献24)の「竹井城址」の図(第40図)には、竹井城の北西側に「草野館址」などの居館群が記されており、典拠は不明ながらも、これが吉野尾館を示しているものと思われる。そのため、およその場所は推測できるものの、現状では明確な遺構を確認することができず詳細は不明と言わざるを得ない。
草野(西)	○			030567 030736		本文85頁を参照。
草野(西)						『軍談』には『寛延記』からの引用として、「吉木村釣井城跡」として「草野氏代々ノ城舘也」とある。『寛延記』には「一釣井城　右同断(申伝なし)」とする。竹井城(筑後67)の物見櫓がこれにあたる可能性も考えられるが、確証はないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
草野(西)	○			030595	15 (田主丸町)	本文86頁を参照。福岡県指定史跡。
草野(西)						『豊前覚書』によれば、戸次道雪の娘、闇千代が生誕した城と記される。文脈から草野近辺にあることが想定されるものの、「問本」という地名やそれと思われる城館遺構も確認されていないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
田主丸(西)				650029		『軍談』には「鳥飼村城跡」として「東西二十四間、南北三十間、南面ニテ四方へ廣三間ノ堀アリ、今庄屋宅内也、此城ハ新田義信ノ所築ト云」と一部『寛延記』を引いて記す。現在、城址の碑なども建立され、およその場所は推定されるが、明確な城館遺構は確認されず、詳細は不明と言わざるを得ない。
田主丸(西)						『浮羽郡古城址』(文献119)には「恵利の砦」として、秋月氏一族の恵利氏の文書に記載されるとし、恵利暢元が恵利に砦を構えて居したとする。さらに同書は地形から見て三角の秋葉神社付近と推測する。三角の集落自体が方形の区画状を呈しているようにも見えるが、明確な城館遺構が確認されていないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
田主丸(東)						『浮羽郡古城址』(文献119)には「奴田居館跡」として、怒田と口高との境の「城の内」と称する所を指すとある。田主丸町豊城の怒田地内にあることは想定されるが、詳細な場所は不明となっており、詳細もまた不明と言わざるを得ない。
田主丸(東)						『浮羽郡古城址』(文献119)には「平家の城　田主丸町吉田町」として「伝説によれ(ば)吉田町祇園社の南巨勢川に近い地域に平家の城址という場所があり、昔の遺構があったと伝えるが、今は開田されてなんら確認されるものはない」とする。吉田町の素戔嗚神社と巨勢川との間に城地が想定されるが、明確な城館遺構は確認されていないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
田主丸(東)				640370	448 (田主丸町)	『軍談』には「松門村平家城跡」として、「塚アリ、其地ヲ古来平家城ト称ス」と記す。また、『浮羽郡古城址』(文献119)には「平家の城　水分村松門寺」として寛文の古城書上や『寛延記』を引用し、『軍談』とほぼ同様に記載する。さらに文献119では、塚のことを地元では「ジャンジャン塚」と呼んでおり、古老談により松門寺集落の北側の場所を指し示す。よって、場所は類推できるが、明確な城館遺構が確認されないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
田主丸(東)				640364	468 (田主丸町)	『軍談』には「小川村舘跡」として「村東南ニアリ、舘ノ口東西ニ一所、北ニ四所アリ、堀ノ長二百三十間、廣二間、東南ニアリ」とあり、大友氏家臣小川伊賀守の居館であるとする。館地とされる場所には小川伊賀守のものと伝えられる石塔もあるが(文献119)、明確な城館遺構も確認されないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
田主丸(東)						『軍談』には「諏訪村舘跡」として、草場氏の館とする。『浮羽郡古城址』(文献119)には「村内(水分村のことか？)巨勢川畔に草場という地名があつて、同所を指して館跡というと古老は語るが、現在その遺構と認むべきものはない」とある。「草場」という小字があり、およその位置はわかるが、それ以外の詳細は不明と言わざるを得ない。
田主丸(東)						『軍談』には「同村(諏訪村)平家城跡」として「城跡今田圃トナリ其字ノミヲ存ス」とあり、寛文の古城址書上にもほぼ同様の記載が確認できる。『浮羽郡古城址』(文献119)には「城址は居館跡と思われるが旧記のようにすでに寛文の頃から畑となり、現在はその跡さえ確認すべきものがなく、所在がはつきりしない」とあり、諏訪地内にあること以外は詳細は不明と言わざるを得ない。
草野(西)				640036	38 (田主丸町)	『浮羽郡古城址』(文献119)には「笹尾嶽城　竹野村三明寺」として、三ヶ所あり、便宜上、上中下の三つに分けるとしたものの、全ての地点において城館遺構が確認されなかった(下笹尾城の地点のみ、後世の畑の人工造成段が多数あり、他の2ヶ所は自然地形があるのみ)。しかし、同書には竹野村の天満宮縁起に「元下笹尾嶽城址に鎮座あり云々」とあるため、下笹尾岳城のみは城としての根拠が残されるため、場所不確実ながら一覧に掲げた(上笹尾岳城、中笹尾岳城は城としての根拠がないため、削除対象とした)。
草野(西)				640057 640058	63・64 (田主丸町)	『浮羽郡古城址』(文献119)には「姥ヶ城址　海抜二四〇米」として、城地から尾根伝いに耳納山系の山稜部(お局峠)に向け、五ケ所ほど砦の跡と思われる削平地があるとする。しかしながら、現地踏査の結果、これら全て自然地形がみられるのみで、明確な城館遺構は存在しなかった。同書には、伝説として、草野城主草野太郎常門が豊後の国石井の里にて救った姫が後に当城に住んだことから城の名が起こったことを記している。そのため、城としての根拠が残され、場所不確実ながら一覧に掲げた。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献								種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他	
筑後	81	西葛尾城	にしかづらお	西葛生城	竹野郡	久留米市田主丸町益生田									○	○	○	○	117～119	山城	◎
筑後	82	内山館	うちやま	内山城・麦生館	竹野郡	久留米市田主丸町益生田	城内	○	○		○	○				○		○	117～119,**121**	山城か	●
筑後	83	内山城	うちやま	東葛生城	竹野郡	久留米市田主丸町益生田		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		山城	◎
筑後	84	高野城	こうの	河野城	竹野郡	久留米市田主丸町益生田									○	○	○	○		山城	◎
筑後	85	高丸城	たかまる	麦生城	竹野郡	久留米市田主丸町益生田		○	○	○	○	○			○	○	○	○		山城	◎
筑後	86	小丸城	こまる		竹野郡	久留米市田主丸町益生田									○	○	○	○	117～119	山城	◎
筑後	87	平家城	へいけ	益永平家城・益永城	竹野郡	久留米市田主丸町益生田	平城			○	○	○	○		○	○	○	○		山城	◎
筑後	88	山ノ中城	やまのなか	石垣城・三ツタカ城・星野城	竹野郡	久留米市田主丸町石垣		○	○	○	○	○			○	○	○			山城	◎
筑後	89	新田城	にった		竹野郡	久留米市田主丸町石垣	城ヶ谷			○	○	○	○	○	○	○	○	○		山城	◎
筑後	90	城氏城	じょうし	麓の城	竹野郡	久留米市田主丸町石垣				○		○			○	○	○	○	119	山城	△
筑後	91	菅館	すげ		竹野郡	うきは市吉井町鷹取	馬場・蔵増		○	○	○	○				○	○	○	119	平地城館	◎
筑後	92	平家城	へいけ	森部の平家城	竹野郡	うきは市吉井町鷹取													119	山城	●
筑後	93	平家城	へいけ	冠城・冠平家城	竹野郡	うきは市吉井町鷹取				○	○	○			○	○	○	○	119	山城	●
筑後	94	鷹取山城	たかとりやま	鷹取城	生葉郡/竹野郡	うきは市浮羽町妹川・八女市星野村・久留米市田主丸町森部		○	○	○	○	○	○	○	○	○	O	O	13,40,119,**128**	山城	◎
筑後	95	屋形館	やかた	豆塚長者館	生葉郡	うきは市吉井町屋部				○		○							119	平地城館か	△
筑後	96	清水城	きよみず		生葉郡	うきは市吉井町富永				○	○	○		○	○	○	○		117～119	山城	●
筑後	97	西の城	にしの	妙見西城	生葉郡	うきは市吉井町富永				○	○	○			○	○	○	O		山城	◎
筑後	98	妙見城	みょうけん	明顕城・妙見山城	生葉郡	うきは市吉井町富永	小城	○	○	○	○	○	○		○	○	O	O	117～119,**134**	山城	◎
筑後	99	谷山城	たにやま	山ノ上城・小城・古城	生葉郡	うきは市吉井町福益						○			○	○	○	○	117～119	山城	◎
筑後	100	平家城	へいけ	妹川城・妹川平家城	生葉郡	うきは市浮羽町妹川	平家ヶ城			○	○	○	○		○	○	○	○	32,117～119	山城	◎
筑後	101	重虎城	しげとら		生葉郡	うきは市浮羽町妹川														山城	●
筑後	102	福丸城	ふくまる	福益城・延寿寺城	生葉郡	うきは市吉井町福益	城下		○	○	○	○	○		○	○	O	O	117～119	山城	◎
筑後	103	福丸館	ふくまる	福益館・延寿寺館	生葉郡	うきは市吉井町福益	室堀・陣内・権頭屋敷・鍛冶屋敷・曲金屋敷・釜瀬屋敷・			○							○	○	118,119	平地城館	○
筑後	104	満願寺城	まんがんじ	妹川万貫寺城・万貫城・満願城	生葉郡	うきは市浮羽町妹川・吉井町福益				○	○	○		○	○	○	○	○	32,117～119	山城	◎
筑後	105	安山城	やすやま	大聖寺山城	生葉郡	うきは市浮羽町流川				○					○	○	○	O	32,119	山城	◎
筑後	106	立石城	たついわ	龍石城・立岩城	生葉郡	うきは市浮羽町流川				○	○	○	○		○	○	○	○	18,32,119	山城	●
筑後	107	井上城	いのうえ		生葉郡	うきは市浮羽町流川	城・城ヶ鼻		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		山城	◎
筑後	108	西ノ城	にしの	井ノ上西城	生葉郡	うきは市浮羽町流川									○		○	○	119	山城	◎
筑後	109	小坂館	こさか		生葉郡	うきは市浮羽町流川				○		○				○	○	○		平地城館か	△
筑後	110	井上館	いのうえ	問註所氏館・大村居館	生葉郡	うきは市浮羽町清瀬	小路			○		○				○	○	○	18,32,119	平地城館	◎
筑後	111	隈ノ上城	くまのうえ	西隈上城・日田氏館	生葉郡	うきは市浮羽町朝田		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	18,32,118,119	平地城館	◎
筑後	112	一之瀬館	いちのせ		生葉郡	うきは市浮羽町朝田				○	○	○	○	○		○	○	○	18,32,119	平地城館か	●
筑後	113	大石城	おおいし	久保城	生葉郡	うきは市浮羽町高見				○	○	○	○		○	○	○	○	32,119	平地城館	●
筑後	114	長瀬城	ながせ	原口城・西原口城	生葉郡	うきは市浮羽町高見	城丸		○	○	○				○	○	○	○	32,119	平地城館	◎

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
草野(西)				640079	91 (田主丸町)	本文92頁を参照。
草野(東)				640080	92 (田主丸町)	本文93頁を参照。
草野(東)				640082	94 (田主丸町)	本文94頁を参照。
草野(東)				640083	95 (田主丸町)	本文95頁を参照。
草野(東)						本文95頁を参照。
草野(東)				640189	235 (田主丸町)	本文97頁を参照。
草野(東)				640188 640191	234・237 (田主丸町)	本文98頁を参照。
草野(東)				640335	407 (田主丸町)	本文99頁を参照。
草野(東)				640333	405 (田主丸町)	本文100頁を参照。
草野(東)						『軍談』では『寛延記』を引き「同村(石垣村)城氏城跡」として「耳納山中ニアリ、城十郎太郎ノ居城也、周リニ堀二重アリ」とある。『浮羽郡古城址』(文献119)には「城址について踏査したが判明しない」とあり、石垣地内に所在することが想定されるが、詳細な場所は不明である。
田主丸(東)						本文102頁を参照。
草野(東)						『寛延記』竹野郡森部村の項には「一城跡　平家の城と申伝候」とあり、『浮羽郡古城址』(文献119)には「平家の城　水縄村森部」として、現在の久留米市田主丸町との境近くの寺跡と呼ばれる尾根をさらに上った標高380m地点にあるとする。想定される箇所を現地踏査したところ、標高360～370m地点に自然地形ながらやや平坦な地形が見られ、そこから麓方向の尾根伝いに9世紀を中心とする須恵器や土師器が数多く散布している状況が確認された。しかし、堀などの明確な城館遺構は確認できず、「寺跡」の地名が示すが如く、古代の宗教関連の遺跡が想定された。そのため、城館の実態としては、詳細は不明と言わざるを得ない。
草野(東)						『軍談』には「冠村平家城跡」として「耳納山中ニアリ」と記すのみであり、『寛延記』もほぼ同様の記載である。『浮羽郡古城址』(文献119)には「平家の城　船越村冠」として、冠の天満宮の南約1kmの標高140mの丘陵の突端にあるとする。上記の記載や周辺の地形から、冠の集落に面した標高162mの丘陵突端頂部が城地と想定され、現地を踏査したものの、自然地形が見られるばかりで明瞭な城館遺構はなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
草野(東)	○					本文103頁を参照。八女市指定史跡。
草野(東)						『軍談』には「屋形村第跡」として「村中ニ豆塚長者第宅ノ跡アリ、今其地ヲ呼テ豆塚トス」とする。『生竹巡覧』(篠山神社所蔵)には「豆塚」は場所不明となっているとする。また、『浮羽郡古城址』(文献119)には「豆塚長者の跡」として、本佛寺に「陣内長者の碑」があり、元々旧屋部村と深迫村との堺にあったとされるものの、陣内長者の碑と豆塚長者が同一かどうかも不明としている。そもそも『軍談』では「屋形村」としているため、陣内長者とは場所が異なっているような印象を受ける。そのため、豆塚の場所については不明と言わざるを得ず、詳細も不明である。
草野(東)				630085	044	『軍談』には「千代久村清水城跡」として「東西五間、南北七間、耳納山中ニアリ、城主詳ナラス」とある。寛文の古城址書上や『寛延記』は「古城」とする他は、ほぼ同様の記載である。『浮羽郡古城址』(文献119)には「清水城　海抜二二〇米」として、弦掛峠から北に分岐した丘陵上の突端にあるとし、妙見城と石垣城との繋ぎのために設けたものとする。現地を踏査したが、自然地形であり、明確な城館遺構は確認されなかったが、土師器の細片が散布しているのを確認した。城地としては十分妥当性はあるが、詳細は不明である。
草野(東)	○					本文104頁を参照。
草野(東)	○			630085	044	本文105頁を参照。
草野(東)						本文107頁を参照。
草野(東)				620131	055	本文108頁を参照。
草野(東)						『浮羽郡古城址』(文献119)の「妹川城」には妹川城(平家城(筑後100))の左前城の突端に重虎城(仮称)(星野氏一族釜瀬入道重虎の居城という)があるとする。『生葉郡内絵図』(第87図)にも「重佛(虎カ)城」と記されており、平家城の東、標高449mの尾根頂部が城地と推定される。しかし現地は自然地形がみられるばかりで明確な城館遺構はなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
千足(西)	○			630061	070	本文109頁を参照。
千足(西)					630059	『寛延記』延寿寺村の項に「一館　壱ヶ処　今畑ニ成居申候。此節観音堂一宇アリ」とあり、『浮羽郡古城址』(文献119)には延寿寺集落の東にある「血留の観音堂」の上に「館畑」と称する広い畑地があり、星野氏累代の居館跡と伝えられているとし、室堀、陣内、権頭屋敷、鍛冶屋敷、曲金屋敷、釜瀬屋敷などの地名が残されているとある。現在、血留観音堂を初め、「上多知」「下多知」「東多知」「陣内」「血留」「鍛冶屋敷」などの字名が集落近くに残されており、およその場所は把握できるが、明確な城館遺構を確認することができず、詳細は不明と言わざるを得ない。
千足(西)/ 草野(東)				620125	053	本文111頁を参照。
千足(西)	○			620037	068	本文112頁を参照。
千足(西)				620036	069	『軍談』には「流川村立石城跡」として「東西三十間、南北五十間、問註所ノ支城也」とあり、問註所氏と星野氏が当城を巡って争う様子を記す。寛文の古城址書上や『寛延記』などにも同様の記載がみられる。また、『浮羽郡古城址』(文献119)には「立石城　海抜三三三米」として、安山城と井ノ上城の南側背後の標高332mの頂部を城地とする。しかしながら、現地には名の由来とも関連しそうな巨岩が見られるものの、基本的には自然地形であり、明確な城館遺構を確認することはできず、詳細は不明と言わざるを得ない。安山城の説明でも述べたように、本書で安山城とした場所が立石城の可能性もあることを含め、今後検討を要する。
千足(西)				620035	067	本文113頁を参照。
千足(西)				620035	067	本文114頁を参照。
千足(西)						『軍談』には「同村(小坂村)舘跡」として「問註所氏代々ノ居舘也、其地ヲ古川野ト号ス」とある。また『寛延記』の小坂村の項には「一館　壱ヶ処　村上ニアリ　右同断」とする。現在、古川野の地名の場所が不明であり、所在地含め詳細は不明と言わざるを得ない。
千足(西)/ 吉井(西)				630046	038	本文115頁を参照。
千足(西)				620004	063	本文116頁を参照。
千足(西)				620023	076	『軍談』には「朝田村一之瀬舘跡」として「東西三十間、南北五十間、町野孫助重信居之」とし問註所善長と争ってともに滅亡したことが記されている。『寛延記』生葉郡朝田村の項にも「一館屋敷一ヶ処　峯山ノ際ニアリ、小坂城主問住(註)所館ノ由申伝今作所ニ相成居候」とあり、問註所氏の館とする。一之瀬集落の西側の丘陵上に想定されているが、果樹園となっていると共に、群集墳が点在しているものの、明確な城館遺構は確認できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
吉井(東)				620052	083	『軍談』には「大石村城跡」として「今ノ庄屋宅地則城跡也、四方堀アリ、廣或二間、或五間、天正中大石丹後守居之」とある。、『浮羽郡古城址』(文献119)には通称を「久保城」ともいい、旧庄屋屋敷内に城地を想定するが、範囲などは不明瞭であるとしている。大字高見字森前の天満宮に城地が想定されているが、周囲は条里地割のような整然とした地割が広がっており、城域を推測するすべはなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
吉井(東)				620055	084	本文117頁を参照。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献								種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他	
筑後	115	峯山城	みねやま		生葉郡	うきは市浮羽町三春				○		○			○			○		平地城館か	△
筑後	116	煎熊館	いりくま	入限館・尼ノ長者居館	生葉郡	うきは市浮羽町三春・山北				○		○				○	○	○	32,119	平地城館	●
筑後	117	岸山城	きしやま	保木城	生葉郡	うきは市浮羽町山北					○				○	○	○	○	32,119	山城	●
筑後	118	小塩城	こじお	笹隈城	生葉郡	うきは市浮羽町小塩	古城			○	○	○	○		○	○	○	○	32,119	山城	●
筑後	119	高井岳城	たかいだけ		生葉郡/豊後国	うきは市浮羽町小塩・大分県日田市川下		○		○	○	○	○		○	○	○	**O**	32,**104**,119	山城	◎
筑後	120	小椎尾氏館	こじおし	越生氏館	生葉郡	うきは市浮羽町小塩													119	平地城館	●
筑後	121	小椎尾氏別館	こじおし		生葉郡	うきは市浮羽町小塩	小松堀												119	平地城館	○
筑後	122	東山城	ひがしやま	烏山城	生葉郡	うきは市浮羽町小塩				○		○			○	○	○	○	32,119	山城	●
筑後	123	長岩城	ながいわ		生葉郡	うきは市浮羽町新川		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	**O**	32,119	山城か	◎
筑後	124	松尾城	まつお	田籠城	生葉郡	うきは市浮羽町田籠	城平	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	32,119	山城	◎
筑後	125	高岩城	たかいわ	寺ん城	生葉郡	八女市星野村				○	○	○	○		○	○	○	**O**	13	山城	◎
筑後	126	白石城	しらいし		生葉郡	八女市星野村	城山	○		○	○	○	○	○	○	○	○	**O**	13	山城	◎
筑後	127	十籠館	じゅうごもり		生葉郡	八女市星野村				○						○	○	○		平地城館か	△
筑後	128	千々谷館	ちぢや		生葉郡	八女市星野村				○						○	○	○		平地城館か	○
筑後	129	浦館	うら		生葉郡	八女市星野村				○						○	○	○	40	平地城館	●
筑後	130	内城城	うちじょう	妙見城	生葉郡	八女市星野村				○					○	○	○	○		山城か	●
筑後	131	本星野館	ほんほしの		生葉郡	八女市星野村				○	○			○		○	○	○	40	平地城館	●
筑後	132	高島城	たかしま		生葉郡	八女市星野村				○					○	○	○	○		山城	△
筑後	133	アイノツル城	あいのつる		上妻郡	八女市矢部村北矢部							○		○	○	○	○	13,35	丘城か	●
筑後	134	高屋城	たかや	矢部山城	上妻郡	八女市矢部村矢部			○		○	○	○	○	○	○	○	○	13,22,35	山城	◎
筑後	135	栗原城	くりはら		上妻郡	八女市矢部村矢部			○	○	○		○	○	○	○	○	○	13,22,35	山城	○
筑後	136	虎伏木城	こぶしき		上妻郡	八女市矢部村北矢部	遠見鼻・構ン本・賀籠ン据場・射ン場ノ本												35	山城	●
筑後	137	築足城	つきあし	月足城	上妻郡	八女市黒木町大淵				○	○		○	○	○	○	○	○	13,22	山城	◎
筑後	138	白牧大岩屋名城	しらまきおおいわやな	向城	上妻郡	八女市黒木町笠原				○					○	○	○		13	山城か	●
筑後	139	地下名城	じげな	大岩空堀城	上妻郡	八女市黒木町笠原				○	○			○	○	○	○	○	13	山城	◎
筑後	140	高牟礼城	たかむれ	高群城	上妻郡/生葉郡	八女市黒木町笠原・星野村		○	○	○	○		○		○	○	○	**O**	13,**91**,**132**	山城	◎
筑後	141	熊野堂城	くまのどう	大渕城	上妻郡	八女市黒木町大淵				○	○			○	○	○	○	**O**	13,22	山城	◎
筑後	142	立華城	たかはな	喬花城・立花城	上妻郡	八女市黒木町木屋			○		○		○		○	○	○		13,22	山城	●
筑後	143	猫尾城	ねこお	黒木城	上妻郡	八女市黒木町木屋		○	○	○	○	○	○	○	○	**O**	**O**	**O**	13,22,**91**,**126**,**127**	山城	◎
筑後	144	鷲岳城	わしがたけ	高城・鷲ヶ城	上妻郡	八女市黒木町木屋	東城・中城・南城・西城・城の谷・芋生堀			○	○			○	○	○	○	○	13	丘城か	●
筑後	145	兎城	うさぎ	鬼城	上妻郡	八女市黒木町土窪												○	13,140	山城	◎
筑後	146	生駒野城	いごまの	轟城	上妻郡	八女市上陽町下横山			○	○	○			○	○	○	○	○	30	丘城	◎
筑後	147	前川内城	まえかわち	江後前川内城・辺春城	上妻郡	八女市立花町上辺春		○	○			○						○	13,33	山城	●
筑後	148	熊ノ川城	くまのかわ	熊河城・辺春城	上妻郡	八女市立花町上辺春		○	○	○	○			○	○	○	**O**	**O**	13,22,33	山城	◎

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
吉井(東)						『軍談』には「同村(西原口村)峯山城跡」として「時代傳ハラス」とある。峯山という地名の場所が不明であるため、詳細もまた不明と言わざるを得ない。
吉井(東)				620064	086	『軍談』には「東原口村煎熊舘跡」として尼長者の宅跡で、碑(尼ガ墓碑)や古井戸などが残り、豊前坊というとある。『浮羽の古城址』(文献119)には山春村大字三春字豊前坊にあり、秋葉神社背後の高台にあるとする。『浮羽町史』(文献32)には城跡の写真として、石祠が写っているものの、明確な城館遺構は見つかっておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
千足(東)				620098	096	『浮羽郡古城址』(文献119)に付属する「福岡縣浮羽郡内古城分布図」(第1図)の浮羽町の岸山の丘陵上に城の印が付されているのが初出で、同書には高井嶽城の項に「岸山(岸山城)の砦を構えて」と記すのみであり、不明瞭ながら高井岳の出城としているようである。また『種々』の浮羽郡山春村三春の項に「原口城址」とあり、これは長瀬城の誤認と思われるが、『福岡県の城』の浮羽町三春の項目に「原口城」として「岸山城ともいう。大友氏家臣の野村氏の城」とあるが、明らかに長瀬城(原口城)と岸山城を混同しているため、原口城を別称とするのは間違いとみられる。文献32には、「保木城」として「山春保木岸山の山上にあって」とし、江藤氏の記録によると江藤佐太郎が保木に移住してその子孫が築城、大友方であったが焼き討ちに遭い、落城したと記す。なお、城地は現在果樹園となっており、人工的に平坦面が形成されているが、堀などの明確な城館遺構は確認できず、詳細は不明である。
千足(東)				620108	090	『軍談』には「小鹽村城跡」として「山嶺山北村ノ境ニアリ、城地ヲ笹隈ト云、里老云、山北氏ノ所築也」とある。『寛延記』は城主・時代不詳としている。笹の隈の集落の背後にある字古城に城地が想定されるが、丘陵全体が果樹園と思われる後世の造成がなされており、明確な城館遺構は確認できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
千足(東)	○			620099	099	本文118頁を参照。
千足(東)				620103	101	『浮羽郡古城址』(文献119)の「東山城」の項には「越生氏の居館跡は城址の麓東名で、同所は前に小塩川の渓流を望み、後に東山城を負い、この天嶮の地を相して居館を構えていたのであろう」とある。分布地図等では、岩屋堂の集落、小塩川の左岸に無入寺跡と共に周知の包蔵地となっているが、明確な城館遺構の有無については不明である。
千足(東)						『浮羽郡古城址』(文献119)の「東山城」の項には「又小塩小松堀に居館跡(別館)と称する地がある」と記す。小松堀の地名は現在でも残り、およその場所はわかるが、明確な城館遺構は確認されず、詳細は不明と言わざるを得ない。
千足(東)				620100	102	『軍談』には「東山城跡」として「小椎尾氏代々ノ居城也」とする。『浮羽郡古城址』(文献119)には「東山城(一名烏岳)　海抜四五〇米」として「小椎尾神社の南方に聳立する峻峰の山頂にある」とする。小椎尾神社の南側の標高449mの山稜上に位置するとされるが、現地は自然地形がみられるばかりであり、明確な城館遺構は確認できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
千足(東)	○			620115	094	本文119頁を参照。
千足(東)				620116	098	本文120頁を参照。
十籠(西)	○					本文122頁を参照。
十籠(西)	○					本文123頁を参照。
十籠(西)						『軍談』には「同村(星野村)十籠舘跡」として「樋口次郎太郎構之、代々居之」とある。十籠地内にあるものと思われるが、現在詳細な場所は不明であり、これ以上の情報はない。
十籠(西)						『軍談』には「同村(星野村)千々谷舘、浦舘跡」として「樋口越前守隠居舘也、後浦ノ舘ニ移ル」とあるため、樋口越前守が当初は千々谷館を隠居館としていたことがわかる。浦館の近隣にあるものと思われ、小字に「千々谷下」があり、現在の星野焼展示館があるあたりに推測されるものの、詳細は不明と言わざるを得ない。
十籠(西)				740043		『軍談』には「同村(星野村)千々谷舘、浦舘跡」として「樋口越前守隠居舘也、後浦ノ舘ニ移ル」とあるため、樋口越前守(星野胤實十四代の孫と伝える)が当初は千々谷館を隠居館としていたが、後に浦館に移ったということがわかる。『星野村史』(文献40)には、天正17年(1589)のこととする。現在、浦館跡は市指定史跡となっており、場所は把握されているが、詳細な構造については不明である。
十籠(西)/黒木(東)				740047		『軍談』には「同村(星野村)内城城跡」として「星野胤實築之」とある。県の分布地図(文献140)では「妙見城跡」として本星野館の東側の山稜上が城地とされるが、現地は自然地形がみられるばかりであり、詳細は不明と言わざるを得ない。
黒木(東)				740021		『軍談』には「同村(星野村)本星野舘跡」として「星野胤實構之、代々居之」とある。現在、本星野の集落には「星野氏館跡庭園」が八女市指定史跡として残されており、そこが館地と考えられるが、館の範囲や構造などの詳細は不明である。
黒木(東)						『軍談』には「同村(星野村)高島城跡」として「星野鎮實築之」とある。星野村内に所在するものと考えられるが、「高島」という地名もなく、高屋城の間違いかともみられるが、城主名が異なっており、妥当性に欠く。全くこれ以外の情報がなく、詳細は不明である。
宮ノ尾(東)				750006		本文124頁を参照。
宮ノ尾(東)				750007		本文124頁を参照。
宮ノ尾(東)				750008		『軍談』には「栗原城跡」として「五條左馬頭家臣栗原伊賀守代々ノ居城也」とある。県の分布地図(文献140)には栗原集落の東側の丘陵上に城地が想定されているが、現地は自然地形がみられるばかりで、明確な城館遺構は確認できない。文献35には「城址の位置がどこなのか古老に聞いても知らないという」とあり、明確な所在が不明である可能性も考えられる。
宮ノ尾(東)						文献35には南北朝時代に懐良親王が居した城と伝えるとあり、旧高巣小学校の校歌の一節にも「皇子のいませし虎伏木城」とあるとする。虎伏木集落の東側の丘陵上に位置すると伝わるが、現地は自然地形がみられるばかりであり、明確な城館遺構は確認できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
十籠(西)/宮ノ尾(西)				710062 710102		本文125頁を参照。
十籠(西)/黒木(東)				710078		『寛延記』には「一白牧大岩　屋敷名ノ向、城跡と申伝候」とあり、『軍談』には「同村(鹿子尾村)白牧大岩屋名城跡」として「向城ト号ス、城主詳ナラス」とある。『福岡県の城』には「大友氏が猫尾城攻めの時の向城を築いた」とあるが根拠不明である。県の分布地図(文献140)では笠原の鬼納内集落の西側の丘陵上に城地が想定されているが、現地は自然地形、あるいは後世の畑地造成が見られるばかりであり、明確な城館遺構は確認できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
十籠(西)/黒木(東)				710077		本文126頁を参照。
黒木(東)	○	○				本文126頁を参照。
黒木(東)						本文128頁を参照。
黒木(東)				710050		文献13には「立華城址」として「黒木城主の一族木屋弾正左衛門尉行實城主たり」とあるが、『旧柳川藩志』(文献22)には「立華城趾」として「辺春勘解由の拠る所、領地11丁、1本に勘解由は高朶城主なりと。後考を待つ」とあり、それとは別に「木屋の番花城趾」として上記と同じく木屋弾正を城主として掲載する。ここではとりあえず同一のものとして扱うが、県の分布地図(文献140)には大谷の集落の西側丘陵上を城地とするが、現地は自然地形がみられるばかりで明確な城館遺構は確認できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
黒木(西)	○	○	○			福岡県指定史跡。本文129頁を参照。
黒木(西)				710020		『軍談』には「鷲嶽城跡」として「黒木四郎定善ノ所築也」とし、城の周りに肥後国和仁氏の所領、芋生の村民が掘ったという「芋生堀」と呼ばれる堀を巡らし、麓に館を構えたとある。また、文献13には「鷲ヶ嶽城址」として、上記の記載に加え、「和仁氏の室は黒木(猫尾)城主源助能の息女で、麓に館を構えた所は「館屋敷」と呼ばれているとする。地元では、「高城」と呼ばれ、上記の伝承に加え、南朝方の良成親王が居城としたとし、東城・中城・南城・西城の4箇所からなるとする。その内、「城の谷」と呼ばれる「南城」には南北朝時代の石塔群があり、「南城の石塔群」として八女市指定史跡となっている。現地はこの石塔群の他には、畑地となっており、明瞭な城館遺構を確認することができず、詳細は不明と言わざるを得ない。
黒木(西)				700005		本文131頁を参照。
黒木(西)				710012		本文131頁を参照。
野町(東)				720216	50003 (立花町)	『福岡県の城郭』では地元では辺春氏の本城と伝え、辺春能登守が居城したとする。県の分布地図(文献140)では、熊ノ川城(筑後148)の南側の標高272mの山稜頂部を城地とするも、現地は畑地造成による平坦面や石垣が見られるものの、明瞭な城館遺構は確認することはできない。しかしながら『旧城』に記載される「邊春城」の所在地番は、件の分布地図の「江後前川内城」と同じ地点であり、大正5年段階における「辺春城」がここであったいう認識を知ることができる。ちなみに同書には「白山城　城主・大麻長瀬」として大字上辺春1668番地を所在とする記載も確認されるが、その場所は当城の西方にある集落内に位置している。今回は一覧には列記しなかったが、ここに記し、後考を待つこととしたい。
野町(東)	○			720215	50002 (立花町)	本文132頁を参照。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献									種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
筑後	149	高朶城	たかすだ	蒔原城・蒔城・高須田城・高朶谷蒔城	上妻郡	八女市立花町下辺春	城山			○	○	○	○	○	○	○	○	○	13,22,33	山城	◎
筑後	150	白木城	しらき	藤山城	上妻郡	八女市立花町白木		○		○	○		○	○	○	○	○	○		山城	●
筑後	151	平家塚城	へいけづか		上妻郡	八女市立花町白木													13	平地城館か	○
筑後	152	城平山城	じょうでらやま		上妻郡	八女市立花町白木													22	山城	●
筑後	153	仙頭屋敷城	せんどう		上妻郡	八女市立花町白木か													13	不明	○
筑後	154	久保山城	くぼやま		上妻郡	八女市立花町か													13	不明	△
筑後	155	山下城	やました	人見城・笹城	上妻郡	八女市立花町北山	城山・城ノ谷	○	○		○	○		○	○	○	○	○		山城	◎
筑後	156	国見岳城	くにみだけ	山下国見岳城・国見城・舞鶴城	上妻郡	八女市立花町北山		○	○	○	○		○		○	○	○	○		山城	◎
筑後	157	鞍掛城	くらかけ		上妻郡	八女市立花町北山					○		○		○	○	○		13,22,33	山城	△
筑後	158	山崎城	やまざき	掻上城・平林城	上妻郡	八女市立花町山崎	城山・城ノ下	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		山城	◎
筑後	159	兼松城	かねまつ	高山城	上妻郡	八女市立花町兼松	城山		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		山城	◎
筑後	160	三ノ瀬城	さのせ		上妻郡	八女市立花町下辺春											○	○	22,33	山城	◎
筑後	161	谷川城	たにがわ		上妻郡	八女市立花町谷川		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	13,33,**131**	丘城	◎
筑後	162	酒井田館	さかいだ	酒井田城	上妻郡	八女市酒井田			○	○	○			○	○	○	○	○	13	平地城館	○
筑後	163	柳島城	やなじま		上妻郡	八女市北田形	城ノ峯・城の谷				○	○			○	○	○	○	13	丘城か	○
筑後	164	犬尾城	いぬお	川崎城	上妻郡	八女市山内		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13,**90**,**129**	山城	◎
筑後	165	鷹尾城	たかお	笹ノ城・舛形城	上妻郡	八女市山内・大籠				○	○	○	○	○	○	○	○	○	13,**129**	山城	◎
筑後	166	茶臼城	ちゃうす	茶臼山城・長野城	上妻郡	八女市長野				○	○			○	○	○	○	○	13	山城	△
筑後	167	城跡山城	しろあとやま	東山城・東山館	上妻郡	八女市長野か				○					○	○	○	○		山城	△
筑後	168	鶴見山館	つるみやま		上妻郡	八女市豊福	屋形原			○	○			○			○	○	13	平地城館か	○
筑後	169	川崎氏館	かわさきし	川崎屋敷	上妻郡	八女市豊福					○								13	平地城館か	●
筑後	170	本館	ほん	本村館	上妻郡	八女市本	館山			○	○			○		○	○		13	平地城館か	○
筑後	171	国武館	くにたけ	中野屋敷・中野大膳光臣館	上妻郡	八女市国武				○	○			○		○	○	○	13	平地城館か	△
筑後	172	蒲原館	かまはら		上妻郡	八女市蒲原	館屋敷・屋敷・弓場		○	○	○			○		○	○	○	13	平地城館	●
筑後	173	吉田館	よしだ		上妻郡	八女市吉田			○	○				○		○	○	○	13	平地城館か	△
筑後	174	鬼ノ口城	おにのくち	甘木城・甘木河内守城	上妻郡	八女市広川町水原	城ノ尾			○	○	○	○		○	○	○	○	13,47	山城	◎
筑後	175	馬場館	ばば	甘木河内守館	上妻郡	八女市広川町水原			○	○	○				○		○		13,47	平地城館	●
筑後	176	城ノ尾城	じょうのお	長延館・長延城・萩尾城・萩尾麟可館	上妻郡	八女郡広川町長延	城ノ尾		○	○	○		○	○	○	○	○	○	13,47	丘城か	●
筑後	177	山王山城	さんのうざん	長延城・長延館・西城	上妻郡	八女郡広川町長延			○	○				○	○	○	○	○	13,47	丘城か	●

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
野町(東)				720218	40002 (立花町)	本文133頁を参照。
野町(東)				720217	30019 (立花町)	『軍談』には「白木城跡」として「天正ノ頃、豊饒左馬大夫居城也」とある。文献13には「白木城址　一名藤山城」として、上記の記載に加え、天正年間に龍造寺隆信により、背後のノゾキ山から攻められて落城したことが記載される。白木川東岸の標高136mの頂部が城地とされる。その現地には上妻神社の祠があり、神社に伴うと思われる平坦面が確認できるばかりであり、明瞭な城館遺構が確認できないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
野町(東)					30022 (立花町)	文献13の「白木城址」の項に、「塔の原に城あり、之を平家塚と称す、其藤山城の西側に在るより見れば、或は是該城没落当時の戦没者の塚なるやも計り難し」とあり、白木城(藤山城)の西側に城があることを示している。実際、白木城の南西、菖蒲尾の集落内に「平家塚」と伝えられる場所も残されているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
野町(東)						『旧柳川藩志』(文献22)には「白木の城平」として「城館記に上妻越前守の居城の跡とせり」とある。白木集落の南東に聳える城平山(標高346m)山頂にあるものと想定され、現地を踏査したが、石碑に加え、城館とは無関係と思われる造成段が見られるばかりであり、詳細は不明と言わざるを得ない。
野町(東)						文献13には「仙頭屋敷」として「右古城址と云ひ伝ふ」とある。辺春村の熊川城址と白木村白木城址との間に記載されている。「仙頭屋敷」そのものを見出すことは難しいが、大字白木に「瀬戸」という小字があり、「仙頭」が訛って「瀬戸」になったとも考えられ、そこにある可能性が高いが、確証はなく、詳細は不明である。
八女(東)						文献13には「久保山城址」として「右城山と云ひ伝ふれども、城主年代等知るに由なし」とある。辺春村の熊川城址と白木村白木城址との間に記載されているため、八女市立花町周辺にあるものと思われ、実際、大字谷川や原島などには「〇〇久保」などの小字があるものの、明確な位置はわからず、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(西)	○			720170	20108 (立花町)	本文134頁を参照。
八女(西)	○			720165	20060 (立花町)	本文135頁を参照。
八女(西)				720164		文献13には「鞍掛城址」として、「上妻名勝図絵」を引き、「右蒲池家の城跡なり、光源水と云ふ薬水ありて、七夕の水とも云けるが、今は絶てなし、此所に七夕堂あり」とある。『旧柳川藩志』(文献22)には「其の趾確かならず」とある。名称から立花町北山の鞍懸集落周辺にあるものと思われ、また山下城を指している可能性も指摘されているが、根拠不十分である。また、文献33では国見岳城の北西側の尾根上に想定されているものの、現地は自然地形あるいは畑地等の校正の造成が若干みられる程度であり、明瞭な城館遺構は確認できず、詳細はやはり不明と言わざるを得ない。
八女(東)				720166	10127 (立花町)	本文136頁を参照。
八女(東)	○			720167	10053 (立花町)	本文137頁を参照。
八女(東)	○				40001 (立花町)	本文138頁を参照。
八女(東)	○			720168	10041 (立花町)	本文139頁を参照。
八女(東)				110319		『軍談』には「酒井田村舘跡」として「村ノ東北ニアリ、其地ヲ長田ト云、酒井田氏代々ノ舘跡ナリ、時俗長田殿ト称シツト」とある。現在の字長田の地内にあったものと考えられるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(東)						『寛延記』の上妻郡柳嶋村の項に「一城ノ峯と申て村東山ニ城跡御座候、城主相知不申候」とある。文献13には『軍談』や『筑後秘鑑』を引いて「今舛形残る」とある。柳島地内の東側の丘陵上に「城ノ峰」の小字が残るためその近辺に存在したものと考えられるが、明確な城館遺構の存在する場所がないため、詳細は不明と言わざるを得ない(本事業では現地未踏査)。
八女(東)	○	○	○	110216		本文140頁を参照。
八女(東)	○			110217		本文141頁を参照。
八女(東)						『寛延記』上妻郡長野村の項には「一ちやうす城と申而言伝御座候得共、何の代のもの相知不申候」とある。また、『軍談』には「長野村城跡」として「茶臼ノ城ト号ス、城主分明ナラズ」とあり、また同書の「川崎庄山内村犬尾城跡」の項には「犬尾城ノ東ニ茶臼山ト云アリ(中略)川崎支城ノ跡ナリ」とある。犬尾城の東側には現在、明確な城館遺構の存在する場所や伝承地がないため、詳細は不明と言わざるを得ない(本事業では現地未踏査)。
八女(東)						『軍談』の「川崎庄山内村犬尾城跡」の項には「犬尾城ノ東ニ茶臼山ト云アリ、其東山腹ニ城跡山ト云アリ、両所共ニ川崎支城ノ跡ナリ」とある。『教委』では上記の「東山腹ニ」の記載を元に「東山城」としたと思われる。また、『城郭』の「東山館」は『教委』の「東山城」から引いていると思われるが、「犬尾城の館とされている」とあり、犬尾城の麓の館と混同しているようである。城地については茶臼城同様、明確な城館遺構の存在する場所や伝承地がないため、詳細は不明と言わざるを得ない(本事業では現地未踏査)。
八女(東)						『軍談』には「鶴見山舘跡」として「川崎三郎定宗隠棲ノ舘跡也、今其地ヲ上野ト云、舘下ヲ屋形原ト云」とあり、『寛延記』も同様の記載がなされる。鶴見山古墳がある近辺が字鶴見山であり、およその場所は推測できるものの、明確な城館遺構はなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(東)				110227		『軍談』の「鶴見山舘跡」の項に「又豊福村中ニ川崎屋布ト云アリ、土人云、川崎氏ノ舘跡ナリ」とある。県の分布地図(文献140)には豊福の太神宮の南側に館地が想定されているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない(本事業では現地未踏査)。
八女(東)						『軍談』には「本村舘跡」として「村中ニアリ、舘山ト云、舘主詳ナラズ、恐クハ大津山氏ノ舘跡ナラン」とある。また『稿本八女郡史』(文献13)には、上記の記載に加え、「舘山」には赤穂浪士の寺坂吉右衛門の館跡もあるとする。八女市本の立山山には寺坂吉右衛門の墓もあり、この立山山一帯のどこかにあったものと想定されるが、明確な城館遺構はなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(西)						『軍談』には「國武村舘跡」として「中野大膳舘跡也」とあり、「屋布凡一町計、囲ノ堀ノ跡ナドハ残レリ、此宅地ノ鎮守也トテ、東ノ方ニ天神祠、鬼門ニ毘舎門ナトアリ」とある。『寛延記』にも「中野屋敷」として山下城主蒲池殿三男・中野大膳光元居住屋敷であるとする。大字国武地内にあることは想定できるが、詳細な場所がわからないため、これ以上は不明と言わざるを得ない。
八女(西)				110295		『軍談』には「蒲原村舘跡」として「村ノ中央ニアリ、蒲原氏ノ舘跡ト云、廣凡五段許、四方ニ隍周レリ、今ハ其内ニ人家四五軒アリ、其内二段計ハ田園ナリ」とあり、『寛延記』にも「梶原家陪臣の末孫蒲原次郎丸祐安住処の跡、干今館屋敷と申」とある。県の分布地図(文献140)には蒲原集落の中央付近に館地を想定しており、屋敷や弓場などの字が残されていて、およその場所は推測できるものの、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(西)						『軍談』には「村東ニアリ、領主吉田氏ノ舘跡ト云」とある。この他には情報が全く見当たらないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(東)	○			730002	3	本文142頁を参照。
八女(東)				730003	4	『軍談』の「甘木村鬼ロ城跡」の項に「馬場舘跡付」として「(鬼ノロ城の)常居ノ舘ハ城西五町ニアリ。其地ヲ馬場ト云、応仁二年元祖河内守家恒構之、南面也キト、今堀ノ跡僅ニ残レリ」とあり、東側に「射場ノ谷」などの地名が残るとする。現在、馬場集落の中に、館地とする場所が残されているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
久留米(東)				730041	50	『軍談』には「長延村城跡両所」として「一ハ縦七間半、横七間、西面也、一ハ縦七間、横六間、南面也、城主詳ナラス、長延村北ノ山中ニアリ、西面縦七間半、南面、縦六間、横五間、城主詳ナラス」とあるものの一つであるがどちらかは判別が難しい。文献13には「長延舘址　上廣川村長延の北城野又城尾」として「萩尾麟可の館址とも、又萩尾城跡とも云ふ、或は云ふ、此城の時代城主未た詳ならすと、長七間半横七間、大手口西の向にして、麓より隔ること凡そ一町の山城なり」とある。長延の集落の北にある尾根の南端頂部(標高98m)が城地と伝えられるが、自然の平坦地形がみられるばかりであり、詳細は不明である。
久留米(東)				730042	54	『軍談』には「長延村城跡両所」として二つの城址を記載するものの内のどちらかである。文献13には「長延舘址　同村(下廣川村)長延西山 一に北山」として「縦七間(一に六間)横六間(一に五、七間)南面の山城なり」とし、城主不詳あるいは蒲池氏の家臣・矢加部大学の拠所であったとする。文献47には西城とも、あるいは長延の日吉神社の背後にあったことから、山王山城とも呼ばれたとする。現地は果樹園造成により大々的に改変されており、現状では構造等を知ることは難しい。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献									種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
筑後	178	藤田館	ふじた		上妻郡	八女郡広川町藤田			○										21,47	平地城館	○
筑後	179	古賀館	こが	古賀城	上妻郡	八女郡広川町新代	西屋敷		○	○	○		○			○	○	○	13,47	平地城館	●
筑後	180	川崎式部館	かわさきしきぶ		上妻郡	八女郡広川町新代					○								13,47	平地城館	△
筑後	181	川瀬城	かわせ		上妻郡	八女郡広川町広川			○	○					○	○	○	○	21,47	丘城	●
筑後	182	川瀬館	かわせ		上妻郡	八女郡広川町新代	城屋敷			○	○								13,21,47	平地城館	●
筑後	183	知徳城	ちとく	智徳城・知徳館	上妻郡	八女郡広川町広川			○	○	○		○		○	○	○	○	13,21,47	丘城	◎
筑後	184	一條館	いちじょう		上妻郡	八女郡広川町一條・筑後市一条	南屋敷・館屋敷		○	○	○							○	21,47,108	平地城館	●
筑後	185	齋藤館	さいとう		上妻郡	八女郡広川町一條													21,47	平地城館	○
筑後	186	長浜館	ながはま		下妻郡	筑後市長浜													108	平地城館か	●
筑後	187	久恵館	くえ	溝口館	下妻郡	筑後市久恵	大屋敷・新屋敷・堀内・大門・北村囲												105	平地城館か	●
筑後	188	溝口館	みぞぐち	溝口城	下妻郡	筑後市溝口	城	○	○	○	○		○	○		○	○	○	13,105,106	平地城館か	●
筑後	189	鶴田城	つるだ		下妻郡	筑後市鶴田													13	不明	△
筑後	190	水田城	みずた		下妻郡	筑後市水田	城ノ崎・上お倉・下お倉				○		○				○		13,114	平地城館か	○
筑後	191	下牟田館	しもむた		下妻郡	筑後市井田	北屋敷・掘越・下掘越			○	○							○	13,114	平地城館	●
筑後	192	中牟田館	なかむた		下妻郡	筑後市中牟田	屋敷			○	○			○		○	○	○	13,114	平地城館	●
筑後	193	中牟田城	なかむた		下妻郡	筑後市中牟田	土居ノ内			○			○	○	○	○	○	○	13,114	平地城館	●
筑後	194	馬間田城	ままだ		下妻郡	筑後市馬間田				○	○		○	○	○	○	○	○	13,114	平地城館	●
筑後	195	吉田大膳城	よしだだいぜん		下妻郡	筑後市馬間田	陣ノ内			○				○	○	○	○	○	13,114	平地城館	●
筑後	196	本郷城	ほんごう		下妻郡	みやま市瀬高町本郷		○		○	○				○	○	○	○	14,22,27	平地城館か	△
筑後	197	禅院城	ぜんいん		下妻郡	みやま市瀬高町小田・廣瀬		○											22	山城	◎
筑後	198	小田城	おだ		下妻郡	みやま市瀬高町小田		○		○	○			○	○	○	○		14,22	山城	◎
筑後	199	吉岡城	よしおか		下妻郡	みやま市瀬高町文廣	天神屋敷・東屋敷・西屋敷			○					○	○	○	○	14,27	平地城館	●
筑後	200	瀬高城	せたか		山門郡	みやま市瀬高町上庄		○		○				○	○	○	○	○	14,22,27	平地城館	○
筑後	201	宮園城	みやぞの		山門郡	みやま市瀬高町大廣園				○	○			○	○	○	○	○		平地城館	●
筑後	202	大木城	おおき		山門郡	みやま市瀬高町大廣園				○	○			○	○	○	○	○		平地城館	●
筑後	203	濱田城	はまだ		山門郡	みやま市瀬高町濱田			○	○	○			○	○	○	○	○		平地城館	●
筑後	204	堀切城	ほりきり		山門郡	みやま市瀬高町堀切	寺屋敷	○	○	○	○			○	○	○	○	○	14, 22, 27, 38	平地城館	○
筑後	205	萱津城	かやつ		山門郡	みやま市山川町竹飯		○		○	○				○	○	○		22	平地城館か	△
筑後	206	竹井城	たけい	竹井の今城	山門郡	みやま市高田町竹飯	今城	○		○	○				○	○	○	○	14,22,27,111	平地城館	●
筑後	207	竹井館	たけい	竹井牡丹長者	山門郡	みやま市山川町尾野	長者原			○	○							○	22,27	平地城館	◎

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
久留米(西)						文献21には「藤田村舘跡」として「一は光泉寺の西南にあり、舘と云ふ。一は前峯の南、藤田川右岸の台地なり。同じく舘といふ。弓場など云ふ地名もあり。舘主時代共に不明」とある。また文献47には「館」という字は現在の藤田区公民館に隣接した場所であり、弓場やどんどん馬場などの関連地名も残っていると記す。この字「館」が文献21のいう2つの館地名の内のどちらに当たるのかについては不明である。このようにおよその場所は想定できるが、明確な城館遺構が確認されていないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(西)						『軍談』には「古賀村舘跡」として「正応三年稲員良参、此舘ヲ構へ、代々居之」とある。文献13には天正6年(1578)頃に稲員大蔵大輔安茂が居し、同9年に龍造寺方に攻められたが守り切ったことが記される。文献47には字西屋敷に城主稲員氏の末裔の居宅が昭和60年代まで残されていたことが記され、旧家の写真も掲載されており、およその場所は推測できるものの、明確な城館遺構は確認できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(西)						文献13には「川崎式部舘跡　同村(中廣川村)古賀」として川崎家が没落した後に居したとされ、川崎式部・民部兄弟の墳墓もあったとする。文献47には『寺社幷古城古墳等書付』を引き、「館屋敷と申し伝え、「三方に堀あり」としるされていますが、現在では場所の特定はできません」とあり、場所も含め、詳細は不明である。
八女(西)						『軍談』には「川瀬村城跡」として「縦十二間、横十間、北面也、蒲池氏ノ臣、矢賀部大學居之」とし、さらに「川瀬村ニアリ、縦十二間、矢賀部大學ノ城跡ナリ」とある。大字広川と新代との境付近、大聖寺の北側の丘陵上(標高約50m)に城地が想定されている。ただ、現地を確認したが、石祠がいくつか見られるばかりで明瞭な城館遺構は存在せず、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(西)						文献47の川瀬城の項には川瀬城主の矢賀部久盛の常居の館が、川瀬村中にあり、今も「城屋敷」という呼称で名残をとどめているとする。およその場所は推測されているものの、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(西)				730120	185	本文143頁を参照。
八女(西)						『軍談』には「今南屋布卜号ス。溝和泉(知徳城主・一條和泉守)、本郷ノ城ヨリ来て居之」とあり、また文献21には「一条氏舘跡」として、上記の記載に加え、「別ニ舘屋敷ト称スル地アリ(南屋敷の西)一條氏ノ舘跡カ、又ハ斉藤氏ノ舘跡カ」とある。館地とされる場所には「一條殿の墓」と伝える碑石があり、およその場所は想定できるが、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(西)						文献21には「齋藤氏舘跡」として「右(一條氏舘跡の項)に述べし舘屋敷の南に、齋藤とよぶ地名あり。大友氏の家臣にして筑後の将士監督のために派遣され齋藤氏の舘跡なるべし」とある。文献47には一條地内に字地名として「斉藤」があり、そこが館地であるとする。上記のようにおよその場所は想定されるものの、明確な城館遺構が確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(西)				130035	1339-10	文献108の記載を初出とし、「長浜神社」の項の最後に、「なおこの地は館の趾か城の址を思わせる地形を想像される」とあり、項末に「長浜区　長浜館址」という写真を掲載する。県の分布地図(文献139)には「室町時代　平地、伝緒方氏居館跡」と記すが、緒方氏の居館とする根拠は不明である。長浜区野町の長浜玉垂命神社の末社・長浜神社(玉垂神社の南約200m)が館地と想定されるが、明確な城館遺構は確認されておらず、館の存否も含め、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(西)				130043	1339-13	文献105には「久恵大屋敷溝口館」として「久恵部落の中央、周囲に濠を廻らし、又其上に村囲濠を有し、二重の濠をめぐらした一区域がある。是を大屋敷という。溝口氏居館の跡で現在でも溝口氏が住んでいる」とあり、溝口城落城後の溝口氏の居館であるとする。久恵集落のほぼ中央に館地は想定されているが、明確な城館遺構が確認されていないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(西)				130046	1308-1	『軍談』には「溝口村舘跡」として「村ノ南邊ニアリ、伝云、溝口宗清常居ノ舘也、時代詳ナラス」とある。また、文献105には、八女郡広川町川瀬西念寺記録に「溝口館主横溝氏之事」を載せており、慶長年間に横溝氏が館を溝口に構えたことが記されている。現在、溝口地内には字「城」があり、そこが城地と想定されているが、詳細は不明とである。
八女(西)						文献13の「溝口村舘址」の項には、鶴田村の宗清寺の寺伝として、「溝口舘主宗清盛なりし時、鶴田村に出城を構へたることあり」と記し、鶴田村内に溝口館の出城があったことを示している。これ以外に情報がなく、詳細な場所含め、不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)				130064	1313-4	文献13を初出とし、「水田城址」として「水田浄弘寺は水田城主駿河守速久、天文十一年開基すと、天正六年頃には、水田藤五郎は水田に居り、六町五反を領す、其地域は城の崎附近ならんか」とある。また文献114には出典不明ではあるものの「城には2つの倉があり、寺の東側に「上お倉」、西側には「下お倉」の地名が残っています」とある。浄弘寺西側の字「城ノ崎」に城地が想定されているものの、詳細な場所含め、不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)					1328-7	本文144頁を参照。
羽犬塚(東)						『軍談』には「中牟田村舘跡」として「村中ニアリ長島八郎助高ガ居舘ノ跡ト云」とあり、館地には助高天神・盛高天神が祀られるとある。現在も助高盛高天神が祀られており、そこが館地とみられるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明である。
羽犬塚(東)				130076	1324-2	『軍談』には「中牟田村城跡」として「村中ニアリ、塚本大膳居城ト云」とある。字土居ノ内の中牟田天満宮付近に城地が想定されているものの、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)				130078	1323-1	『寛延記』には「一古城　井口紀伊と申伝候城主御座候由、城囲相見候。只今太右衛門と申百姓屋敷ニ罷成、且馬乗馬場等も御座候」とある。『軍談』には「馬間田村城跡」として名を掲げる。馬間田集落の北西側、字西井口に城地が想定されているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明である。また、近くの井口観音堂の傍には、城主・井口紀伊守の墓と言われる宝篋印塔が残されている。
羽犬塚(東)				130079	1323-2	『寛延記』には「一古城　吉田大膳と申伝候城屋敷御座候。只今理右衛門と申百姓囲内ニ御座候」とあり、『軍談』には「吉田大膳城跡」として名を掲げ、上妻郡の吉田氏の支族であろうとしている。字陣ノ内にある馬間田福部神社が城地と想定されているが、明瞭な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)						『軍談』には「本郷城跡」として「天正十二年、檀大炊助蒲池鑑廣ノ為此城ニ拠テ、肥前ノ兵ヲ防ク。子孫今当村大庄屋タリ」とある。また「第九扱所村誌」(文献38所収)には「村ノ西ニアリ東西三十間、南北三十間」とあり、さらに異本には「「城跡五稜形ヲナシ、或ハ回字ノ形ヲナス」とある。瀬高町本郷地内にあることは推測できるが、これ以上の情報はなく、場所含め詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(西)					0011	本文145頁を参照。
野町(西)				790054	0033	本文146頁を参照。
柳川(東)				790170	0040	『軍談』には「吉岡村城跡」として「同年(天正12年)吉岡加賀守、鑑廣ノ為ニ守之」とある。文献14には「瀬高町大字吉岡の中央にあり。境界判然たらず。今僅かに東西3間半、南北3間位の不毛の地を存す」と記す。県の分布地図(文献137)などでは吉岡の宅地内に城地が想定されているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
柳川(東)						『軍談』には「瀬高庄城跡」として「太平記理盡抄ニ筑後國瀬高城アリ、筑後志云、黒木兵庫頭カ兵士守之」とある。文献14には「瀬高城趾」として「瀬高町大字上庄にあり。天正12年黒木兵庫頭の臣某之に拠ると。未だ其の所在を詳にせず。一に上の庄の西北に牛御前森あり。森中1碑石あり。是れ即ち此の城趾なりと」とある。瀬高町上庄地内にあるものと想定され、小字「牛御前」があり、そこに城地が推定されるものの、明確な城館遺構はなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
柳川(東)	○			790399	0075	本文148頁を参照。
柳川(東)				790401	0074	『軍談』には「大木村城跡」として「天正中、大木兵部少輔居之、蒲池鎮並ニ属ス」とある。文献14には「山川村大字大木の中央にあり。東西1丁20間、南北50間、小濠囲繞す」とあり、宇治橋合戦の功により宇都宮弥三郎が大木に在城して大木主計頭と称したことなどが記される。北大木の集落内に館地が想定されているが、堀などは確認されず、明瞭な城域は不明である。
柳川(東)	○			790393	0092	本文149頁を参照。
柳川(東)	○			790405	0093	『軍談』には「堀切村城跡」として「天正ノ頃、田尻ノ家士福山将監守之、鷹尾城ノ砦タリ」とある。また「第八扱所村誌」(文献38所収)には「今何ノ處ニ在リヲシラズ」とあるが、文献14(山門郡誌)には「大和村大字堀切の北方にあり」とし、上記の記載に加え、天正12年(1584)頃には大友方の平井鎮経が城に入り、田尻鑑種に対抗したが、島津方の山田有信に攻められ落城したことなどが記載される。そして文献15には「大和村堀切の東方に在り」とあるなど、明確な位置については既に近代にはわからなくなっているようである。なお、みやま市の分布地図(文献152)には堀切南集落中にある「寺屋敷跡」(三池氏の内室墓のある場所)を、『城郭』では寺屋敷の北側の方形に水路で囲まれた区画を城跡の場所としているものの、明確な根拠や出典を見出すことができない。よって、城の正確な位置を含め、詳細は不明と言わざるを得ない。
柳川(東)/野町(西)						文献22には「萱津の城趾」として荒木氏文書の康永2年の文書や、立花信氏旧記の天正12年の高橋紹運・立花道雪の文書を引き、荒木氏に関わる城として「是れ竹井原の城墟ならんか」と記載する。山川町竹飯地内に想定されるものの、詳細な場所は不明である。
柳川(東)				800088	0100	『軍談』には「竹井村城跡」として天文15年に西原石見守武雄が城を築き、武雄の五代の孫・周防守武範も居城したことなどが記される。文献14には「竹井の今城趾」として「山川村字竹井にあり。東西35間、南北15間の趾あり」として、上記の内容を記載する。竹飯集落の西、竹海小学校の西に隣接する飯江川右岸の低段丘上の突端部の字今城に城地が想定されているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
野町(西)				800090	0098	本文150頁を参照。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献									種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
筑後	208	飯江城	はえ	舞鶴城	山門郡	みやま市高田町舞鶴	城道			○	○		○	○	○	○	○	O	14,15,22,27,111	山城	◎
筑後	209	北関城	きたのせき		山門郡	みやま市山川町北関	城山				○				○	○	○	○	14,22,27		△
筑後	210	久末城	ひさすえ	上久末城	山門郡	柳川市三橋町久末					○				○	○	○	○	14,22	平地城館	●
筑後	211	白鳥城	しらとり		山門郡	柳川市三橋町白鳥	北屋敷								○	○	O			平地城館	◎
筑後	212	垂見城	たるみ		山門郡	柳川市三橋町垂見	堀の内			○	○			○	○	○	○	○	14,22	平地城館か	●
筑後	213	津留城	つる		山門郡	柳川市大和町六合			○	○	○			○	○	○	○	O	14	平地城館	◎
筑後	214	蒲船津城	かまふなつ		山門郡	柳川市三橋町蒲船津		○			○				○		○	○	14,22	平地城館	●
筑後	215	今古賀城	いまこが		山門郡	柳川市三橋町今古賀				○	○				○	○	O	○	14,22	平地城館	●
筑後	216	江崎城	えざき		山門郡	柳川市三橋町垂見									○		○	○	109	平地城館	○
筑後	217	鷹取城	たかとり		山門郡	柳川市上宮永町	中小路・西小路・北小路・馬場小路・オンド城				○				○	○	○	○	22	平地城館	○
筑後	218	塩塚城	しおつか		山門郡	柳川市大和町塩塚				○	○			○	○	○	O	○	14,22	平地城館	●
筑後	219	佐留垣城	さるがき		山門郡	柳川市大和町栄		○			○				○		○	○	14,22	平地城館	●
筑後	220	今福城	いまぶく	豊福城	三池郡	みやま市高田町今福	城山	○		○	○		○	○	○	○	O	O	15,22,23,111	丘城	◎
筑後	221	飛塚城	とびづか	田尻城・田尻飛塚城	三池郡	みやま市高田町田尻	陣内		○	○	○			○	○	○	O	O		山城	◎
筑後	222	茶臼城	ちゃうす	茶臼山城	三池郡	大牟田市倉永					○				○	○	○	○	97	山城か	○
筑後	223	内山城	うちやま	吉野内山城	三池郡	大牟田市吉野				○			○	○	○	○	○	O	15,22,**98**	丘城	●
筑後	224	大奥城	おおおく		三池郡	大牟田市宮崎												○	22	丘城か	○
筑後	225	西の原城	にしのはる		三池郡	大牟田市白銀												○	22	不明	○
筑後	226	下内城	しもうち		三池郡	大牟田市岩本	中門・門口												15,22	不明	△
筑後	227	原内山城	はらうちやま		三池郡	大牟田市												○	22	不明	△
筑後	228	甘木城	あまぎ		三池郡	大牟田市甘木	城		○		○		○		○	○	○	○	15,22,100	丘城か	●
筑後	229	大間城	だいま	大間館・三池氏館・平野城	三池郡	大牟田市三池	古城	○	○	○	○		○	○	○	○	○	O	15,19,22,103	平地城館	◎
筑後	230	三池山城	みいけやま	舞鶴城・今山岳城・今山城	三池郡	大牟田市三池・熊本県玉名郡南関町久重			○	○	○			○	○	○	○	O		山城	◎

＜近世城館＞

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献									種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
筑後	K1	松崎陣屋	まつざき	松崎館・松崎城	御原郡	小郡市松崎		○		○	○	○		○		○	O		51,116	陣屋	●
筑後	K2	赤司城	あかじ		御井郡	久留米市北野町赤司	城小路	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	17,24,87,**127**	平城	◎
筑後	K3	久留米城	くるめ	篠原城・笹原城・久留目城・来目城・篠山城	御井郡	久留米市篠山町		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	16,65,127	平山城	◎
筑後	K4	城島城	じょうじま	城島館	三潴郡	久留米市城島町城島		○		○	○	○		○	○	○	○	○	20,41,**127**	平城	◎
筑後	K5	榎津城	えのきづ		三潴郡	大川市榎津		○						○			○	○	28,**127**	平城	●
筑後	K6	福島城	ふくしま		上妻郡	八女市本町		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	13,34,**125,127**	平城	◎

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
野町(西)	○			800086	0136	本文151頁を参照。
野町(西)				770042		文献14には「北の關城趾」として「山川村北の關に在り、今之を城山と称す。高さ五十丈、周回三十町、天文十三年小田山城守親元、菊地義武に与しこの城によりて大友氏に抗す、高橋鑑種大友氏の命を受けて攻むるに及び城遂に陥る」とある。北関の集落の南、県境に近い国道443号線と九州自動車道との間に挟まれた独立丘陵があり、字が「赤城」であったので、城地の可能性が高いと想定して現地を踏査したが、明確な城館遺構はなく、所在を含め、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)				780007		文献14には「久末城趾」として「三橋村久末の北に在り、地稍々高し、往昔藤島美濃守の拠りし所なりと伝ふ。其傍に小森あり。稲荷森と称す、之美濃の産神の趾とも謂へば其家臣諸藤外記の塚なりとも謂ふ」とある。文献22には「久米城趾」、県の分布地図(文献137)には「上久末城跡」とあるが、それぞれ「久末」「上久末」の誤りとみられる。県の分布地図(文献137)には明照院の南側(字宮)に城地が想定されており、周辺には掘割で細かく方形に区画されているものの、「稲荷森」の場所が現在分からなくなってしまっているため、詳細は不明と言わざるを得ない。
柳川(東)	○			780019		本文152頁を参照。
柳川(東)				780015		『軍談』には「元亀天正年間、垂見常陸介蒲池鎮並ノ為守之、直茂譜云、蒲船津城」とある。文献14には「三橋村垂見の東北に在り、四方掘り廻れども水田と化す」として、大永年間に陶美濃守が居城したことや、天正年間の垂見常陸介のことなどが記される。垂見集落の北東にある高良神社の東側に城地が推定されているが、戦後の米軍の航空写真を見ても、城館とおぼしき区画も見られないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
柳川(東)	○			760007		本文153頁を参照。柳川市指定史跡。
柳川(西)	○			780018		本文155頁を参照。
柳川(西)	○			780035		『軍談』には「天正中ヨリ慶長五年迄、立花右衛門大夫守之」とあり、文献14には「三橋村今古賀なれど所在不明、天正十五年立花氏の臣立花右衛門大夫及び立花吉右衛門をして城番たらしむ。慶長五年以後廃城となる」とある。また「第四扱所村誌」(文献38所収)には「村ノ西北ニアリ東西南北詳ナラス残礎存セス。遺濠湮滅シテ今水田トナル」と記す。文献22には上記の記載に加え、「古老の談に曰く、本城は末松伊豆守之を築くと。末松は何時代の人たるを知らず」とある。県の分布地図(文献137)では、今古賀集落の東側の水田に想定されているが、米軍の航空写真を見ても、城館とおぼしき区画は確認できない。また『福岡県の城』では確証はないとしつつも今古賀集落内の今古賀公民館付近を城地と推定する。今古賀集落全体がクリークにより方形に細かく区画され一見城館の体をなしているようにも見えるが、上記のように城館に関する伝承はなく、決め手に欠くため詳細は不明である。
柳川(西)				780024		県の分布地図(文献137)には「江崎城跡　三橋町大字垂見字飯森　室町時代　周囲を掘でかこんでいる」とある。『垂見小学校創立百周年記念誌』(文献109)には「江崎の城とは飯森の北東部で小さい塚のあるところである。城とは墓のことで」とあり、飯森にあることがわかるものの、城ではなく墓とするところに疑義が残る。これ以上の情報はない。『教委』では参考文献に『軍談』を挙げているが、『軍談』に江崎城に関する記載を見つけることはできなかった。ただ、小字「飯森」が現在もあり、およその場所を知ることはできるが、明確な城館遺構はなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
柳川(西)						文献14には「鷹取城趾」として「西宮永村上宮永に在り、東西百四十八間、南北五十間、遺濠四方に廻り長方形をなす。附近に中小路、西小路、北小路、馬場小路等あり。筑後城主記によれば堀田遠江守の居城か或は蒲池氏の属城かとも謂ふ」とある。文献22には上記の記載に加え、「土人の談に今尚ほ小名に「オンド城」と唱ふる所あり。是れ本丸ならん。又「三の籠」と云ふは三の丸ならん」とあり、薬師小路、蔵の前などの地名も挙げている。これらの地名の内、柳川城の南側あたりに馬場小路、中小路などの地名が残されており、そのあたりに城地が求められるものの、近世以来の改変により詳細は不明と言わざるを得ない。
柳川(西)	○			760013		本文156頁を参照。柳川市指定史跡。
柳川(西)					760049	文献14には「佐留垣城趾」として「大和村皿垣にあり、天正九年六月蒲池統春此城により肥前勢と戦ひ戦死して城遂に陥る」とある。現在、皿垣小学校の東側付近に城地が想定されるが明確な城館遺構はなく、詳細は不明である。柳川市指定史跡。
柳川(東)	○			800089	0125	本文158頁を参照。
柳川(東)	○			800085	0130	本文159頁を参照。
大牟田(東)						『種々』を初出とし、銀水村倉永の項に「茶臼城址」と名を挙げるのみである。ただこれに続いて「茶臼塚」と記されており、古くから「茶臼塚」と呼ばれていた倉永茶臼塚1号墳の近辺が城地と想定される。ただ、明確な城館遺構は確認されておらず、城の存否含め、詳細は不明と言わざるを得ない。
大牟田(東)	○		○	040103	121	本文159頁を参照。
大牟田(東)						文献22には「大奥の城趾」として「怒縄田にあり一に大方屋敷と云ふ。何時の頃の人なるやすべて不詳、石垣隍の跡などあり。後ろの畑を辻といひ其後を北の辻と云ひ又丸と云ふ字もあり。」と記す。現在大字宮崎地内の怒縄田近くの丘陵上に字「辻」があり、城地と想定されるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明である。また、近隣には「城ノ平」という字もある。
大牟田(東)						文献22には「西の原の城趾」として「豊持の北に凡そ1丁許の屋敷也。周囲に隍の跡とて今も其の形あり。豊持和泉守の拠りし所なりと。民家5・6戸あり。又辻などと云ふ字あり」とある。現在、大字白銀地内に「西ノ原」という地名があり、そこに城地が想定されるが、現在は住宅地となっており、詳細は不明と言わざるを得ない。
大牟田(東)						文献15の銀水村の章には「下内城址」として「上内村岩本にあるも、城主年代詳かではない。只口碑に残つて居るばかりである」とある。また文献22には「下内の城趾」として「下内の中程小高き所にあり。三池民部大輔源鎮照の拠りし所なりと云ふ。今、城の丑寅の田の字を中門と云ひ、戌亥の田の字を門口と云ふ」とあるが、これらの地名の場所が不明なため、詳細不明である。
大牟田(東)						文献22には「原内山の城趾」として「三池玄蕃允の城跡なり。申酉の方小高き所を矢倉台と云ひ又城堀御厩辻大手町跡など皆田地の字に存せり。同所の茶屋浦は右城主の別荘地なりと云ふ」とある。原資料の記載順から見て大牟田市北部あたりにあるものと思われるが、地名の場所が不明であるため、詳細もまた不明と言わざるを得ない。
大牟田(東)						文献15に「甘木城址」として「建武年間甘木紀伊守築城後、菊池氏に亡ぼされたと云つて居る。今に甘木山の南端数地の所を城と云つて居る。附近蟹町城の橘等の名がある」とあり、また文献22には、「今は畑地なるも稍々高く周囲は低し。荘畑と云ふ字あり。又辻の前、門前、郭内、城の後など云ふ所あり。前の橋を今も城の橋と云ふ。左右の圃の字に町跡の名も存在せり」とある。現在、甘木山の南、白銀川に面した標高13mほどの低丘陵上に字城の地名があり、そこが城地と想定され、近辺には「辻」や「門前」の字も残る。過去に行われた発掘調査でも鎌倉時代頃の遺物も多く出土しており、城との関連が窺われる。
大牟田(東)	○		○	040239	301	本文160頁を参照。
関町(西)	○					本文161頁を参照。

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
鳥栖(東)	○		○			本文163頁を参照。
鳥栖(東)	○		○	660018	41 (北野町)	本文164頁を参照。
久留米(西)			○	030005		本文165頁を参照。福岡県指定史跡。
久留米 西部(西)	○			690006		本文168頁を参照。
羽犬塚(西) /佐賀南部 (東)	○			120065		本文169頁を参照。
八女 (東/西)				110254		本文170頁を参照。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献									種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
筑後	K7	松延城	まつのぶ	吉井城	山門郡	みやま市瀬高町松田・山門		○		○	○				○	○	○	○	14,22,**53**,94,95,**127**	平城	◎
筑後	K8	鷹尾城	たかお	高尾城	山門郡	柳川市大和町鷹ノ尾		○		○	○			○	○	○	○	○	14,22,42,127	平城	●
筑後	K9	中島城	なかしま		山門郡	柳川市大和町中島		○											42,127	平城	●
筑後	K10	柳川城	やながわ	柳河城・梁河城	山門郡	柳川市本城町		○	○	○	○			○	○	○	○	○	14,22,44,127	平城	◎
筑後	K11	江浦城	えのうら	江村之城	三池郡	みやま市高田町江浦		○	○	○	○			○	○	○	○	○	15,111,**127**	平城	◎
筑後	K12	三池陣屋	みいけ	今山陣屋・三池藩主居館・三池町館	三池郡	大牟田市新町		○	○	○			○	○		○	○		15,19,22	陣屋	◎

＜城館等伝承地＞

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献									種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
筑後	D1	向築地長者館	むかいちじちょうじゃ	小郡館	御原郡	小郡市小郡	向築地・東上築地・西上築地・下築地			○	○					○	○	○		平地城館か	●
筑後	D2	陣屋陣	じんや		御井郡	久留米市北野町陣屋	茶屋屋敷・蔵屋敷	○		○				○			○		26	陣	●
筑後	D3	宮ノ陣	みやの		御井郡	久留米市宮ノ陣5丁目	宮ノ陣													陣	●
筑後	D4	春野屋敷	はるの		三潴郡	久留米市原古賀町				○			○	○			○	○		屋敷	○
筑後	D5	石橋氏屋敷	いしばしし		三潴郡	久留米市三潴町草場														屋敷	○
筑後	D6	田中兵庫屋敷	たなかひょうご		三潴郡	久留米市三潴町高三潴														屋敷	●
筑後	D7	笹渕館	ささぶち		三潴郡	三潴郡大木町笹渕													113	館	△
筑後	D8	福間村營	ふくまむら		三潴郡	三潴郡大木町福土				○	○							○	20,113	陣	△
筑後	D9	堀田屋敷	ほったやしき	横溝館	三潴郡	三潴郡大木町横溝	堀田													屋敷	●
筑後	D10	柳坂陣	やなぎさか	耳納城	山本郡	久留米市山本町柳坂		○		○	○				○	○	○	○		陣	●
筑後	D11	峯切山陣	みねきりやま		上妻郡	八女市黒木町木屋												○	13,36	陣	●
筑後	D12	梨木山陣	なしのきやま		上妻郡	八女市黒木町木屋												○	13,22	陣	●
筑後	D13	道雪陣	どうせつ		上妻郡	八女市柳島				○							○	○	13	陣	○
筑後	D14	足利尊氏陣	あしかがたかうじ		下妻郡	筑後市鶴田													13,105,106	陣	●
筑後	D15	龍造寺陣	りゅうぞうじ		下妻郡	筑後市鶴田													13,106,107	陣	△
筑後	D16	下妻村營	しもつまむら	下妻城	下妻郡	筑後市下妻				○	○				○	○	○	○		陣	△
筑後	D17	陣屋敷	じんやしき		三池郡	大牟田市田隈													22	陣	△

＜城館関連遺跡＞

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献									種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
筑後	R1	干潟中屋敷遺跡	ひかたなかやしき	干潟館	御原郡	小郡市干潟	上屋敷・中屋敷・下屋敷・堀之内・町屋敷											○	43	居館遺跡か	◎
筑後	R2	三沢寺小路遺跡	みつさわてらしゅうじ		御原郡	小郡市三沢	寺小路												55～58,60	居館遺跡	◎
筑後	R3	大保横枕遺跡	おおほよこまくら		御原郡	小郡市大保	弓場												59	居館遺跡	◎
筑後	R4	稲吉元矢次遺跡	いなよしもとやつぎ		御原郡	小郡市稲吉													54	居館遺跡	◎
筑後	R5	西森田遺跡	にしもりた		御原郡	三井郡大刀洗町本郷													61	居館遺跡	◎
筑後	R6	下見遺跡	したみ		御井郡	久留米市東合川町5丁目													37,68	居館遺跡	◎
筑後	R7	筑後国府跡	ちくごこくふあと		御井郡	久留米市合川町		○	○										67,78	居館遺跡	◎
筑後	R8	東光寺遺跡	とうこうじ		御井郡	久留米市山川町													66	居館遺跡	◎

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
柳川(東)	○		○	790301	0058	本文173頁を参照。
柳川(東)	○			760010		本文174頁を参照。柳川市指定史跡。
柳川(東)						本文176頁を参照。柳川市指定史跡。
柳川(西)				080114		本文177頁を参照。柳川市指定史跡。
柳川(東)	○			800087	0120	本文180頁を参照。
大牟田(東)					306	本文181頁を参照。

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
鳥栖(西)						『軍談』に「(小郡)村北開畑ト云所ニ館跡アリ。向築地長者ノ館跡ト云」とあり、焼米が出土することから陣営の跡ではないかとしている。現在、小字「向築地」には古代郡衙の小郡官衙遺跡(国史跡)があり、焼米が大量に出土することから、この遺跡のことを指していると思われる。ただ、発掘調査では古代の遺跡であることが判明しているため、伝承の城を出ないと言わざるを得ない。
鳥栖(東)						『軍談』には「陣屋村陣跡」として、「北野郷陣屋村ハ天正中立花道雪陣営ノ地ナリ、道雪宿所ノ跡ヲ今ハ茶屋々布(屋敷)ト云」とある。伝承地は伝わるものの、江戸時代の段階で既に構造は不明瞭となっていたようであり、詳細は不明と言わざるを得ない。
久留米(西)						南北朝時代の征西将軍懐良親王の陣所跡と伝えられるところで、明治時代に宮ノ陣神社が建てられている。明確な遺構も確認されておらず、詳細は不明である。
久留米(西)						『軍談』には「春野屋敷」として、天明年間より700年前に春野長左衛門が居住した春野屋敷があり、堀の跡などが残っており、その場所は「原ノ古賀」と呼んでいるとする。現在の久留米市原古賀町に場所が想定されるが、早くに市街地化している場所であり、明確な城館遺構を確認できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
久留米西部(東)						『三潴町史』(文献31)には「石橋氏の屋鋪跡(高屋敷)」として下田城主堤左近将監貞元の家老石橋太郎右衛門尉正親の屋鋪跡と伝えるとする。草場公民館があるあたりが屋敷地で、昔は堀が村中を囲んでいたとするが、戦後すぐの航空写真を見ても、明確な城館の区画などを確認することはできず、詳細な場所を含め不明と言わざるを得ない。
久留米西部(東)						『三潴町史』(文献31)には「田中兵庫屋鋪跡」として田中吉政の家臣、田中兵庫頭の屋敷があったとし、かつては堀が二重に巡り、二重目の内側は堀に沿って竹藪があって平地より幾分高めであったとし、北半分を田中と呼んでいたそうである。現在は、田中観音と呼ばれる観音堂が残されるのみとなり、詳細は不明である。
羽犬塚(東)						文献113を唯一の出典とし、「笹渕館跡」として「西牟田城の家臣野間口常陸次郎高秀が居を構えた地である。現在その跡地は残されていないが、笹渕東北部らしい」と記す。それ以上の情報がないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(東)						『軍談』には「福間村營跡」として「同年(天正12年)隈右京、高三潴式部、杉左近大夫等、營を搆テ敵ヲ禦ク」とある。大木町福土の福間地内に想定されるものの、位置に関する情報がないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
羽犬塚(西)						文献113を唯一の出典とし、「横溝館跡」として「西牟田氏の家臣堀田左近の館跡である。この地を堀田屋敷と言い権現様を祀る祠があり、この地が館跡であろうと思われる。現在は整地され権現様は堀田の天満神社に移転されている」と記す。場所はわかるがそれ以上の情報は見当たらず、詳細は不明である。
久留米(東)				030731		『軍談』には「柳坂村陣跡」として「柳坂村ザラメキ岳上ヲ平ニシ、北ノ麓ニ遖ヲ廻ラス、二重許ナリシト見ユ」とあり、「太平記」に出てくる菊池氏が高良山在陣した時の柳坂水縄山の陣所とする。昭和時代以降は「耳納城」と称したようであり、『種々』の三井郡山本村耳納の項に「耳納城址」として名を挙げ、同書には「耳納城址、谷山城址(新田氏、谷山氏)」とあることから南北朝時代の南朝方・新田氏の山城ととらえているようである。県の分布地図(文献138)などでは耳納山山頂を城地とし、『福岡県の城』では耳納山頂にあり、尾根上に堀跡が残ると記しているが、現地で明確な城館遺構が確認されておらず、城の存在も含め、詳細は不明である。
黒木(西)				710049		本文183頁を参照。
黒木(西)				710019		『稿本八女郡史』(文献13)には「立花道雪、黒木城攻めの時の陣所」と記す。県の分布地図(文献140)には、鷲岳城(高城・筑後144)の西の丘陵上に位置がおとされているが、現地は後世の造成あるいは自然地形であり、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(東)						『軍談』の「柳嶋村城跡」の項に「此村山中に立花道雪陣跡有り。其地道雪陣と号す」とあり、文献13の「道雪陣址」の項には、天正12年(1584)立花道雪が川崎出羽守の川崎城(犬尾城)を攻めたときの陣跡で、同年の山下城攻めの際にも陣を張ったことが記されている。城ノ峯の西にあるとされ、柳島地内の東側の丘陵上、字「城ノ峰」の北側に字「道雪陳」があるため、その近辺にあることが想定されるが、同所は施設開発によりかなり造成が行われており、遺構があったにしても残されていない可能性が高い。
八女(西)				130042		文献13には「足利尊氏陣址」として足利尊氏が肥後の菊池氏を討つために肥後へ進軍する途中に陣を構えた所であるとする。鶴田集落の北に伝承地が伝えられるが、詳細は不明と言わざるを得ない。
八女(西)						文献13には「龍造寺陣址」として天正8年(1580)9月に龍造寺隆信が山下城を攻めた時に陣を置いたことが記される。『寛延記』の下妻郡靍田村の項には「一陣屋敷　龍造寺隆信山下ノ城と被攻候節、陣小屋取建候由于今陣屋敷と申伝候」とある。現在、陣屋敷の場所が不明であり、詳細不明である。
八女(西)						『軍談』には「下妻村營跡」として「天正十二年、蒲池鑑廣一族輪番ニテ守之、肥前ノ兵ヲ防ク」とある。筑後市下妻地内にあったものと思われるが、場所不明である。また『福岡県の城郭』にはこれとは別に「折地城(筑後市折地)」として「天正十二年九月、戸次鑑連は蒲池鎮運が折地村に付城を造り近辺の悪党を討果した事を賞した」とあるが、これについても詳細は不明である。
大牟田(東)						『旧柳川藩志』(文献22)には「田隈の陣屋敷」として「龍造寺氏大間城を攻むるとき此所に陣を構へしなりと」とある。大牟田市田隈地内にあることは想定されるが、それ以上の情報はなく、詳細は不明と言わざるを得ない。

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
二日市(東)			○			本文184頁参照。
鳥栖(西)			○			本文184頁参照。
鳥栖(東)			○			本文185頁参照。
鳥栖(東)			○			本文185頁参照。
鳥栖(東)			○			本文186頁参照。
久留米(西)			○			本文186頁参照。
久留米(西)			○			本文187頁参照。
久留米(西)			○	030294		本文188頁参照。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献									種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
筑後	R9	神道遺跡	じんどう		御井郡	久留米市御井旗崎1丁目													68,79,80,82,83,86	居館遺跡	◎
筑後	R10	日出原南遺跡	ひいでばるみなみ		御井郡	久留米市御井町													84	居館遺跡	◎
筑後	R11	古賀前遺跡	こがんまえ		御井郡	久留米市本山1丁目	松本屋敷												69,71,73,76,77	居館遺跡	◎
筑後	R12	二子塚遺跡	ふたごづか		三潴郡	久留米市荒木町荒木													85	居館遺跡	◎
筑後	R13	城崎遺跡	じょうざき		三潴郡	久留米市安武町安武本	城崎・屋敷												70,75	居館遺跡	◎
筑後	R14	道蔵遺跡	どうぞう		三潴郡	久留米市大善寺町中津													74	居館遺跡	◎
筑後	R15	北ノ屋敷遺跡	きたのやしき		三潴郡	久留米市城島町江上本	北ノ屋敷												88	居館遺跡	◎
筑後	R16	仁右衛門畑遺跡	にえもんばたけ		生葉郡	うきは市吉井町新治													52	居館遺跡	◎
筑後	R17	東館遺跡	ひがしたち		上妻郡	八女市山内	東館・西館			○									89,129	居館遺跡	◎
筑後	R18	熊野屋敷遺跡	くまのやしき		上妻郡	筑後市熊野	屋敷												93	土塁遺構	◎
筑後	R19	長崎坊田遺跡	ながさきぼうた		上妻郡	筑後市長崎													92	居館遺跡	◎
筑後	R20	彼岸田遺跡	ひがんだ		下妻郡	筑後市島田	外屋敷												130	居館遺跡	◎
筑後	R21	陣内遺跡	じんない		三池郡	みやま市高田町上楠田	陣内												96	溝状遺構	◎
筑後	R22	城前遺跡	じょうまえ		三池郡	みやま市高田町上楠田	城前												96	丘城か	◎
筑後	R23	上内高頭遺跡	かみうちたかがしら		三池郡	大牟田市上内	城林												101	居館遺跡	◎
筑後	R24	白川遺跡	しらかわ		三池郡	大牟田市上白川町2丁目													102	居館遺跡	◎
筑後	R25	上白川遺跡	かみしらかわ		三池郡	大牟田市上白川町2丁目													99	居館遺跡	◎

＜所在不明＞

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献									種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
筑後	F1	妙福寺ノ城	みょうふくじの		上妻郡	不明		○												不明	不明
筑後	F2	紅桃林城	ことばやし		竹野郡	久留米市草野町紅桃林か		○												不明	不明
筑後	F3	石井要害	いしい		生葉郡か	うきは市か		○												不明	不明
筑後	F4	中尾畑城	なかおばた		山門郡か	みやま市か		○												不明	不明
筑後	F5	戸原城	とはら		不明	不明			○											不明	不明
筑後	F6	権現岳城	ごんげんだけ		上妻郡か	八女市か			○											不明	不明
筑後	F7	堀口城	ほりぐち		三池郡	大牟田市													○	不明	不明

＜削除対象＞

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌	基本参考文献									種類	所在
								一次	参考	軍談	種々	旧城	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
筑後	－	宗崎館	むねさき	宗崎遺跡	御井郡	久留米市御井町								○			○	○	49・50		◎
筑後	－	五郎丸城	ごろうまる	古賀館	御井郡	久留米市北野町五郎丸												○			
筑後	－	内野城	うちの		三潴郡	久留米市大善寺町								○			○	○		不明	
筑後	－	江島城	えじま		三潴郡	久留米市江島												○		不明	
筑後	－	隈城	くま		竹野郡	久留米市田主丸町竹野									○	○	○	○	119		
筑後	－	富本城	とみもと		竹野郡	久留米市田主丸町竹野									○	○	○	○	119		
筑後	－	上笹尾城	かみささおだけ	笹尾岳城	竹野郡	久留米市田主丸町竹野									○	○	○	○	119		
筑後	－	中笹尾城	なかささおだけ	笹尾岳城	竹野郡	久留米市田主丸町竹野									○	○	○	○	119		
筑後	－	観音寺山城	かんのんじやま		竹野郡	久留米市田主丸町石垣									○	○	○	○	119		
筑後	－	権現岳城	ごんげんだけ		竹野郡	久留米市田主丸町石垣									○	○	○	○	119		
筑後	－	妙見出城	みょうけん		生葉郡	うきは市吉井町鷹取													136		
筑後	－	妙見出城	みょうけん		生葉郡	うきは市吉井町富永													136		
筑後	－	妙見出城	みょうけん		生葉郡	うきは市吉井町富永													136		
筑後	－	今山城	いまやま		三池郡	みやま市高田町									○	○	○				
筑後	－	大将陣砦	たいしょうじん		三池郡	大牟田市天道町							○								

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
久留米(西)			○			本文189頁参照。
久留米(西)			○			本文189頁参照。
久留米(西)			○			本文190頁参照。
久留米(西)			○			本文190頁参照。
久留米西部(東)			○			本文191頁参照。
久留米西部(東)			○			本文191頁参照。
羽犬塚(西)			○			本文192頁参照。
吉井(西)			○	630095		本文192頁参照。
八女(東)			○			本文193頁参照。
羽犬塚(東)			○		1304	本文194頁参照。
羽犬塚(東)			○		1336-1	本文194頁参照。
羽犬塚(東)			○		1329	本文195頁参照。近年度中に、九州歴史資料館から正式報告書を刊行する予定。
柳川(東)			○		0158	本文195頁参照。
柳川(東)					0155	本文196頁参照。
関町(西)			○			本文196頁参照。
大牟田(東)			○			本文197頁参照。
大牟田(東)			○			本文198頁参照。

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
不明						康永4年(1345)の荒木近藤文書に、「筑後国上妻郡妙福寺ノ城」の警固について仰せ下される文書が残されているが、詳細な場所がわからず不明である。
不明						応安8年(1375)の門司文書に門司聖親が差し出した文書に、石垣、耳納山、麦生、発所嶽とならんで紅桃林の記載がみられる。久留米市草野町紅桃林にあった城館の可能性が高く、『城郭』では発心岳城の上・中・下ノ城がそれにあたるのではないかとしているものの、確証はなく、所在不明とした。
不明						天正9年(1581)に大友宗麟から問註所氏に石井要害に兵力を入れておくことを検討するように申し付ける文書があり、小椎尾河内に関することからうきは市小塩付近が想定されるものの、所在不明である。
不明						建武5年(1338)あるいは康永元年(1342)の文書が確認される。瀬高や清水などの地名が出てくることからみやま市瀬高町近辺が想定されるものの、所在不明である。
不明						天正10年(1582)に龍造寺方の綾部氏が「戸原之城」を攻めた文書が残されているが、肥前東部にはそのような城が見当たらない。また筑後国内にも現状では見当たらないが、可能性が残るため掲載した。
不明						天正12年(1584)に立花道雪、高橋紹運が高牟礼城を攻めた後に権現岳から川崎(八女市山内か)に陣替えした記載がみられる。高牟礼城から犬尾城の間に想定されるものの、所在不明である。
不明						建武元年(1334)に糸田貞義が豊前の門司氏らと共に建武政権に反乱を起こした際に立てこもった城である。所在は不明である。

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張図	測量図	発掘	県	市町村	
久留米(西)			○	03707		『探訪日本の城』に「宗崎館」として「宗崎氏の居館」とするのを初出とする。『天正六年筑後領主附』の書上げの「宗崎」からの引用、あるいは九州自動車道建設に伴い発掘調査された宗崎遺跡のことを指しているものと思われるが、調査では明瞭な中世居館は検出されていないため、城館としての明確な根拠に乏しく、削除対象とした。
						『城郭』に唯一記載される城で、「別称古賀館。久留米市宮ノ陣町古賀又は八丁島筑紫上野介家臣萩尾麟賀住む」とある。久留米市宮ノ陣町八丁島所在の古賀城(筑後11)と類似する記載であり、それとの混同が考えられるため、削除対象とした。
						『探訪日本の城』を初出とするも城名と所在以外の情報が全くなく、何を根拠に城としているのか不明であるため、削除対象とした。
						『城郭』に「江島城」として「天正六年江島遠江守の城」とのみ記載するのが唯一の記載であり、『天正六年筑後領主附』の書上げからの引用とみられる。近隣では久留米市城島町に江島は存在するが、城館等の遺構や伝承は一切見られず、また、この書上げ自体が、領主の一覧であり城跡の一覧ではないため、確実に城館が存在する証拠にならないため、削除対象とした。
草野(西)				640011	13・14	『浮羽郡古城址』(文献119)には「隈城址(仮称)　海抜四二〇米」として、諸文献はないものの、城館遺構があるものとして、城と認定している。しかしながら、上記文献の記載に基づき現地を隈なく踏査したが、自然地形しか見られず、明確な城館遺構は存在しなかった。よって、城としての根拠は皆無となったため、削除対象とした。
草野(西)				640012	21	『浮羽郡古城址』(文献119)には「富本城(仮称)　海抜五二〇米」として、旧記にはないとしつつも、左前城、第三の前城、左二の前城、本城があるとしているが、いずれも現地踏査をした結果、自然地形であり、城館遺構は全く認められなかった。そのため城としての根拠は皆無となったため、削除対象とした。
草野(西)				640038 640039	40・41	『浮羽郡古城址』(文献119)には「笹尾嶽城　竹野村三明寺」として、三ヶ所あり、便宜上、上中下の三つに分けるとしたものの、全ての地点において城館遺構が確認されなかった。下笹尾岳城については、竹野村の天満宮の縁起の記載から、城としての根拠が残されるため、一覧に掲げたものの、上笹尾岳城、中笹尾岳城は城としての根拠が皆無となってしまったため、削除対象とした。
草野(西)				640037	39	
草野(東)				640334	406	『浮羽郡古城址』(文献119)には「観音寺山城　海抜五二(〇)米」として、『寛延記』の「嶽ノ観音」を引き、石垣観音寺に城があったとするが、現地には奥の院の平坦面が確認されるばかりで、また『寛延記』「嶽ノ観音」の記載にも、城の記述は一切見られないことから、城としての根拠が皆無となってしまったため、削除対象とした。
草野(東)				640336	408	『浮羽郡古城址』(文献119)には「権現嶽の城　海抜五五〇米」として、『寛延記』の「岩屋権現」を引き、そこに城があったとする。現地には確かに人工的に削った平坦面が僅かに確認され、また中世の土師器の散布が確認された。しかし堀などの明確な城館遺構は見られず、山岳霊場などの信仰遺跡の痕跡であるとみられる。よって、城としての根拠が非常に乏しいため、削除対象とした。
				630088	047	県の分布地図(文献136)に「妙見出城跡」として名が挙がるのが初出である。現地を踏査したが平安時代頃の土器が散布し、若干の造成地形はあったが、堀などの明瞭な城館遺構は全く見られず、城地とする明確な根拠はないため削除対象とした。
				630087	050	県の分布地図(文献136)に「妙見出城跡」として名が挙がるのが初出である。現地を踏査したが、自然地形がみられるばかりであり、城地とする明確な根拠は不明であるため削除対象とした。
				630086	051	
						『教委』を初出とし、参考文献に「筑後封植録」を挙げる。同書を見ると、「三池郡今山居城三池弾正少弼二百五十丁ヲ領ス」とあり、大牟田市の三池山城(今山城)を指しており、重複していることが判明したため、削除対象とした。
						『全集』に「大牟田市天道町」に所在するものとされているが、記載内容を見ると、飯塚市天道町と嘉穂郡桂川町との境に所在する「大将陣」(筑前D14)であることが判明したため、削除対象とした。

参考文献一覧表

＜基本参考文献＞

No.	編著者名	発行年	著書名	発行
1	矢野一貞	1853	『筑後将士軍談（筑後国史）』	
2	福岡県	1916	『旧城跡等ノ取調』(福岡県社第1956号　大正5年10月2日施行)	
3	和田宗八	1936	『研究旅行用　面白い種々な見方の福岡縣史、史蹟名勝口碑傳説所在地』	金文堂
4	鳥羽正雄ほか編	1967	『日本城郭全集』14 佐賀・長崎・福岡	人物往来社
5	西谷正ほか	1977	『探訪日本の城』10西海道	小学館
6	副島邦弘・近沢康治編	1979	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXIX 付録　福岡県中世山城跡	福岡県教育委員会
7	磯村幸男編	1979	「福岡県」『日本城郭大系』第18巻	新人物往来社
8	廣崎篤夫	1995	『福岡県の城』	海鳥社
		1997	『福岡古城探訪』	海鳥社
9	福岡県の城郭刊行会	2009	『福岡県の城郭　戦国城郭を行く』	銀山書房

＜市町村郡誌等＞

No.	編著者名	発行年	著書名	発行
10	貝原篤信	1629	『筑前国続風土記』	
11	加藤一純・鷹取周成	1798	『筑前国続風土記附録』	
12	青柳種信	文政～天保	『筑前国続風土記拾遺』	
13	福岡縣八女郡役所	1917	『稿本八女郡史』	福岡縣八女郡役所
14	山門郡教育会	1926	『山門郡誌』	山門郡教育会
15	三池郡教育会	1926	『三池郡誌』	三池郡教育会
16	久留米市役所	1933	『久留米市誌　別冊』	久留米市役所
17	三井郡教育会	1935	『三井郡読本』	三井郡教育会
18	浮羽郡御幸村役場	1935	『浮羽郡御幸村郷土誌』	浮羽郡御幸村役場
19	大牟田市役所	1944	『大牟田市史』	大牟田市役所
20	福岡縣三潴郡小学校教育振興会	1953	『新考三潴郡誌』	福岡縣三潴郡小学校教育振興会
21	井上農夫	1956	『下広川郷土史』	下広川小学校PTA会
22	渡辺村男	1957	『旧柳川藩志』(上・中・下)	福岡県柳川・山門・三池教育会
23	高田町	1958	『高田町誌』	高田町
24	三井郡社会科同好会	1958	『郷土資料集』	三井郡社会科同好会
25	善導寺町史編纂委員会	1959	『善導寺町誌』	三井郡善導寺町役場
26	三井郡北野町教育委員会	1969	『北野町史誌』	三井郡北野町教育委員会
27	瀬高町教育委員会	1974	『瀬高町誌』	瀬高町
28	大川市誌編集委員会	1977	『大川市誌』	大川市役所
29	大刀洗町郷土誌編纂委員会	1981	『大刀洗町史』	大刀洗町
30	上陽町郷土史研究会	1983	『上陽町文化財調査『郷土の文化と遺跡』』	上陽町教育委員会
31	三潴町史編さん委員会	1985	『三潴町史』	三潴町史刊行委員会
32	浮羽町史編集委員会	1988	『浮羽町史』上巻	浮羽町
33	立花町史編さん委員会	1990	『立花町史』上巻	立花町史編さん委員会
34	八女市史編さん専門委員会	1992	『八女市史　上巻』	八女市
35	ひらけゆくふるさと矢部編さん委員会	1992	『矢部村誌　ひらけゆくふるさと矢部』	矢部村
36	黒木町史編さん実務委員会	1993	『黒木町史』	黒木町
37	久留米市史編さん委員会	1994	『久留米市史　第12巻　資料編(考古)』	久留米市
38	柳川市史編集委員会	1995	『柳川市史　史料編Ⅰ　地誌』	柳川市
39	田主丸町誌編集委員会	1996	『田主丸町誌』第二巻　ムラとムラびと(上)	田主丸町
40	星野村史編さん委員会	1997	『星野村史　文化財民俗編』	星野村
41	城島町誌編纂委員会	1998	『城島町誌』	城島町
42	大和町史編さん実務委員会	1999	『大和町史　資料編』	大和町
43	小郡市史編集委員会	1999	『小郡市史　第五巻　資料編　中世・近世・近代』	小郡市
44	柳川市史編集委員会	1999	『地図のなかの柳川-柳川市史　地図編-』	柳川市
45	小郡市史編集委員会	2003	『小郡市史』第二巻　通史編　中世・近世・近代	小郡市
46	城島町誌編纂委員会	2004	『城島町誌補遺』	城島町
47	広川町史編さん委員会	2005	『広川町史』上巻	広川町
48	筑前町史編さん委員会	2016	『筑前町史』上巻　自然環境・原始・古代・中世・近世	筑前町

＜発掘等調査報告書＞

No.	編著者名	発行年	報告書名
49	福岡県教育委員会	1970	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ』
50		1977	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅤ』
51		1998	『松崎城跡』(福岡県文化財調査報告書第135集)
52		2000	『仁右衛門畑遺跡Ⅰ』(浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第12集)
53		2006	『山門前田遺跡』(九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集)
54	小郡市教育委員会	1988	『稲吉元矢次遺跡』(小郡市文化財調査報告書第45集)
55		1997	『三沢寺小路遺跡』(小郡市文化財調査報告書第117集)
56		2001	『三沢寺小路遺跡2』(小郡市文化財調査報告書第158集)
57		2007	『三沢寺小路遺跡3・5』(小郡市文化財調査報告書第222集)
58		2007	『三沢寺小路遺跡4』(小郡市文化財調査報告書第229集)
59		2012	『大保横枕遺跡2』(小郡市文化財調査報告書第260集)
60		2012	『三沢寺小路遺跡6』(小郡市文化財調査報告書第263集)
61	大刀洗町教育委員会	1993	『大刀洗町内遺跡群』(大刀洗町文化財調査報告書第3集)
62		2003	『高橋城跡1』(大刀洗町文化財調査報告書第24集)
63		2003	『高橋城跡2』(大刀洗町文化財調査報告書第25集)
64		2006	『三原城跡』(大刀洗町文化財調査報告書第35集)
65	久留米市教育委員会	1974	「篠山城跡石組暗渠遺構」『久留米市文化財調査報告書第7集』
66		1974	『茶臼山・東光寺遺跡』(久留米市文化財調査報告書第9集)
67		1980	『筑後国府跡　昭和54年度発掘調査概報』(久留米市文化財調査報告書第23集)
68		1982	『昭和56年度　東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査概報』(久留米市文化財調査報告書第32集)
69		1993	『上津・藤光遺跡群Ⅰ』(久留米市文化財調査報告書第80集)
70		1993	『安武地区遺跡群Ⅶ』(久留米市文化財調査報告書第82集)
71		1994	『上津・藤光遺跡群』(久留米市文化財調査報告書第86集)
72		1994	『安武地区遺跡群Ⅷ』(久留米市文化財調査報告書第87集)
73		1996	『上津・藤光遺跡群』(久留米市文化財調査報告書第111集)
74		1996	『大善寺北部地区遺跡群Ⅴ』(久留米市文化財調査報告書第112集)
75		1996	『城崎遺跡-第2次調査-』(久留米市文化財調査報告書第116集)
76		1997	『上津・藤光遺跡群』(久留米市文化財調査報告書第130集)
77		1998	『上津・藤光遺跡群Ⅱ』(久留米市文化財調査報告書第145集)
78		1999	『筑後国府跡-第162・164次調査報告-』(久留米市文化財調査報告書第156集)
79		2004	『二本木遺跡群Ⅰ』(久留米市文化財調査報告書第197集)
80		2005	『二本木遺跡群Ⅱ』(久留米市文化財調査報告書第209集)
81		2005	『筑後国府跡　国分寺跡-平成16年度発掘調査報告・概要報告-』(久留米市文化財調査報告書第210集)
82		2006	『二本木遺跡群Ⅲ』(久留米市文化財調査報告書第226集)
83		2008	『二本木遺跡群Ⅴ』(久留米市文化財調査報告書第265集)
84		2009	『二本木遺跡群Ⅵ』(久留米市文化財調査報告書第280集)
85		2009	『久留米市埋蔵文化財調査集報Ⅺ』(久留米市文化財調査報告書第278集)
86		2010	『二本木遺跡群Ⅶ』(久留米市文化財調査報告書第291集)
87	北野町教育委員会	1997	『赤司城跡』(北野町文化財調査報告書第7集)
88	城島町教育委員会	1994	『北ノ屋敷遺跡』(城島町文化財調査報告書第1集)
89	八女市教育委員会	1993	『東館遺跡』(八女市文化財調査報告書第25集)
90		1996	『犬尾城跡』(八女市文化財調査報告書第47集)
91	黒木町教育委員会	1991	『猫尾城址』(黒木町文化財調査報告第1集)
92	筑後市教育委員会	1999	『長崎坊田遺跡』(筑後市文化財調査報告書第23集)
93		2012	『熊野屋敷遺跡』(筑後市文化財調査報告書第101集)
94	みやま市教育委員会	2010	『松田掛畑遺跡Ⅱ　松延城跡』(みやま市文化財調査報告書第1集)
95	瀬高町教育員会	1998	『瀬高地区遺跡群Ⅱ』(瀬高町文化財調査報告書第15集)
96	高田町教育委員会	1992	『陣内遺跡』(高田町文化財調査報告書第1集)
97	大牟田市教育委員会	1981	『倉永茶臼塚』(大牟田市文化財調査報告書第15集)
98		1983	『内山城跡Ⅰ』(大牟田市文化財調査報告書第18集)
99		1989	『上白川遺跡』(大牟田市文化財調査報告書第34集)
100		1990	『城遺跡』(大牟田市文化財調査報告書第36集)
101		1991	『上内・高頭遺跡』(大牟田市文化財調査報告書第38集)
102		1992	『白川遺跡　羽山遺跡Ⅱ』(大牟田市文化財調査報告書第42集)
103		1999	『大間遺跡』(大牟田市文化財調査報告書第51集)
104	大分県教育委員会	2004	『大分の中世城館』第四集総論編(大分県文化財調査報告書第170輯)

＜その他刊行物＞

No.	編著者名	発行年	著書名	発行
105	筑後市教育委員会 筑後郷土史研究会	1969	『筑後市神社仏閣調査書　第二集(旧八女郡古川村篇)』	筑後市教育委員会 筑後郷土史研究会
106		1971	『古川むらの生いたちの記』	
107		1972	『筑後市神社仏閣調査書　第三集』(西牟田篇)	
108		1975	『筑後市神社仏閣第六集』	
109	垂見小学校創立百周年記念誌編集委員会	1976	『垂見小学校創立百周年記念誌』	垂見小学校創立百周年記念誌編集委員会

No.	編著者名	発行年	著書名	発行
110	中ノ森　節夫	1986	『蛭池ものがたり』	
111	高田町教育委員会	1992	『高田町の文化財』	高田町教育委員会
112	三潴町文化財探訪編集委員会	1993	『三潴町文化財探訪』	三潴町教育委員会 三潴町文化財専門委員会
113	大木町教育委員会	2001	『大木町文化財・史蹟めぐり　2000年版』	大木町教育委員会
114	筑後市教育委員会	2005	『筑後市の文化財』-平成16年度版-	筑後市教育委員会

＜論文等＞

No.	編著者名	発行年	論文名	著書名	発行
115	橋本　氾	1935	「本郷城趾及其附近」	『郷土研究筑後』第六巻第三号	筑後郷土研究会
116	著者不明	1935	「往時の松崎」	『郷土研究筑後』第六巻第三号	筑後郷土研究会
117	古賀基二	1937	「水縄村城趾」	『郷土研究筑後』第五巻第九号	筑後郷土研究会
118	古賀基二	1938	「星野氏の諸城址踏査記」	『郷土研究筑後』第六巻第三号	筑後郷土研究会
119	古賀基司	1953	「浮羽郡古城址とその歴史」	『浮羽古文化財保存会誌宇枳波』第二号	浮羽古文化保存会
120	三浦末雄	1966	『物語秋月史』		㈶秋月郷土館
121	廣崎篤夫	1974	『福岡県内城砦誌』		私家版（久留米市立中央図書館に写し所蔵）
122	樋口一成	1983	「鳥栖・久留米地方の中世山城雑感」	『栖』第3号	鳥栖郷土研究会
123	佐々木高栄	1984	「鰺坂城址考」	『少弐氏と宗氏』No.3	
124	村田修三編	1987	『図説中世城郭事典』第三巻		新人物往来社
125	九州芸術工科大学環境設計学科歴史環境研究室・都市環境研究室	1998	『八女福島　八女市福島伝統的建造物群保存対策調査報告』		八女市教育委員会
126	木島孝之・中西義昌	1998	「天正中・後期の北部九州における城郭の様相」	『戦国の城と城下町Ⅱ』	鳥栖市教育委員会
127	木島孝之	2001	『城郭の縄張り構造と大名権力』		九州大学出版会
128	中西義昌・岡寺　良	2001	『歴史史料としての戦国期城郭-北部九州における城郭遺構と地域権力-』（地域資料叢書4）		九州大学服部英雄研究室
129	岡寺　良	2002	「福岡県八女市大字山内所在の戦国期城館（犬尾城・鷹尾城・東館遺跡）の検討」	『九州歴史資料館研究論集』27	九州歴史資料館
130	小田和利	2003	「筑後市彼岸田遺跡出土の呪符木簡」	『九州歴史資料館研究論集』28	九州歴史資料館
131	岡寺　良	2004	「谷川寺境内の「谷川城」について」	『筑後八女谷川寺』（九州の寺社シリーズ19）	九州歴史資料館
132	片山安夫	2004	「筑後黒木・高牟礼城」	『北部九州中近世城郭情報紙』7	北部九州中近世城郭研究会
133	宮武正登	2004	「高良山陣所群に見る大友氏関連城郭の構造的特質」	『大分の中世城館』第四集総論編（大分県文化財調査報告書第170輯）	大分県教育委員会
134	片山安夫	2004	「筑後星野氏と生葉妙見城について」	『北部九州中近世城郭情報紙』13	北部九州中近世城郭研究会
135	木原武雄	発行年不詳	「肥前戦国史　中世肥前（佐賀県）北・中・東部編」	『「佐賀学」を考える』（佐賀大学・教育研究学内特別経費による研究報告書）	佐賀大学

＜分布地図＞

No.	編著者名	発行年	著書名
136	福岡県教育委員会	1977	『福岡県遺跡等分布地図』（浮羽郡編）
137	福岡県教育委員会	1978	『福岡県遺跡等分布地図』（大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編）
138	福岡県教育委員会	1979	『福岡県遺跡等分布地図』（久留米市・小郡市・三井郡編）
139	福岡県教育委員会	1979	『福岡県遺跡等分布地図』（大川市・筑後市・三潴郡編）
140	福岡県教育委員会	1980	『福岡県遺跡等分布地図』（八女市・八女郡編）
141	吉井町教育委員会	1995	『吉井町遺跡等詳細分布調査報告書』（吉井町文化財調査報告書第7集）
142	北野町教育委員会	1997	『北野町遺跡等詳細分布調査報告書』（北野町文化財調査報告書第6集）
143	小郡市教育委員会	1999	『福岡県小郡市市内遺跡等分布地図』
144	田主丸町教育委員会	1999	『田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書』（田主丸町文化財調査報告書第12集）
145	立花町教育委員会	2000	『福岡県立花町町内遺跡等分布地図』
146	筑後市教育委員会	2004	『筑後市文化財分布地図』
147	広川町教育委員会	2005	『広川町文化財等分布地図』
148	久留米市教育委員会	2006	『久留米市三潴町遺跡等詳細分布調査報告書』（久留米市文化財調査報告書第217集）
149	大牟田市教育委員会	2007	『大牟田市遺跡等分布地図』
150	久留米市教育委員会	2010	『久留米市城島町遺跡等詳細分布調査報告書』（久留米市文化財調査報告書第292集）
151	うきは市教育委員会	2010	『うきは市内遺跡等詳細分布調査報告書』（うきは市文化財調査報告書第10集）
152	みやま市教育委員会	2015	『みやま市内遺跡等分布地図』（みやま市文化財調査報告書第10集）

Ⅳ　対象地域城館分布図

本章では、本書における対象地域内すべての城館および関連遺跡についての位置図を示す。凡例および分布図対照図について以下のとおりである。

＜凡例＞

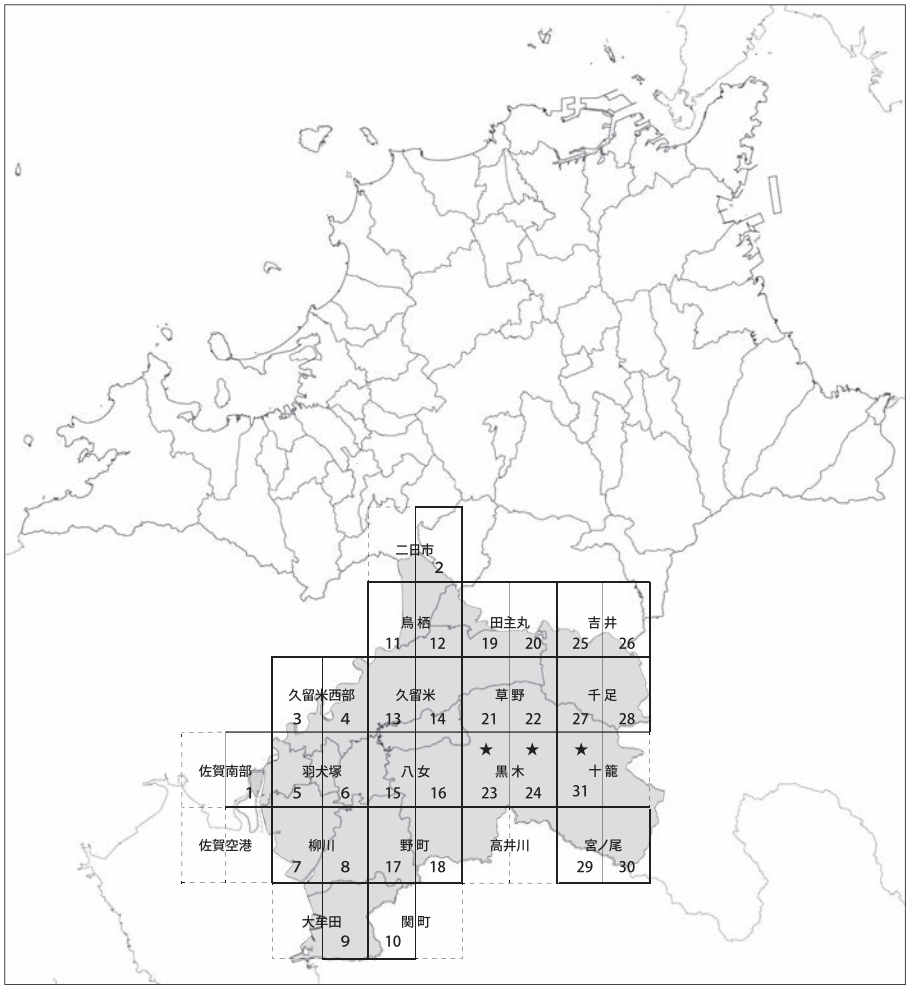
1　基本地図は、国土地理院長の承認を得て（承認番号　平 28 情複　第 1345 号）、同院発行の数値地図 25000（地図画像）を複製したもので、下の対照図に★が付されている図幅については、1/37,500 に、それ以外は全て 1/35,000 に縮小して掲載している。

2　本書の対象地域になっているが、城館が存在しない図幅については割愛した。

3　分布図の遺跡の表記と分布図対照図は以下のとおり。

＜遺跡の表記＞

	範囲が明確なもの	所在は明確であるが範囲が不明確なもの	所在はある程度は明確なもの（小字の範囲程度）	所在は明確でないもの（大字の範囲までの把握）
中近世城館	○	●	○	表記なし（地図の欄外に名称のみ記載）
伝承地	なし	●	○	表記なし（地図の欄外に名称のみ記載）
城館等関連遺跡	○	●	○	なし



〈分布図対照図〉

1　佐賀南部（東）

＜中近世城館＞
筑後 K5 榎津城

2　二日市（東）

＜中近世城館＞
筑後１乙隈城
筑後２山隈城

＜城館関連遺跡＞
筑後 R1
干潟中屋敷遺跡

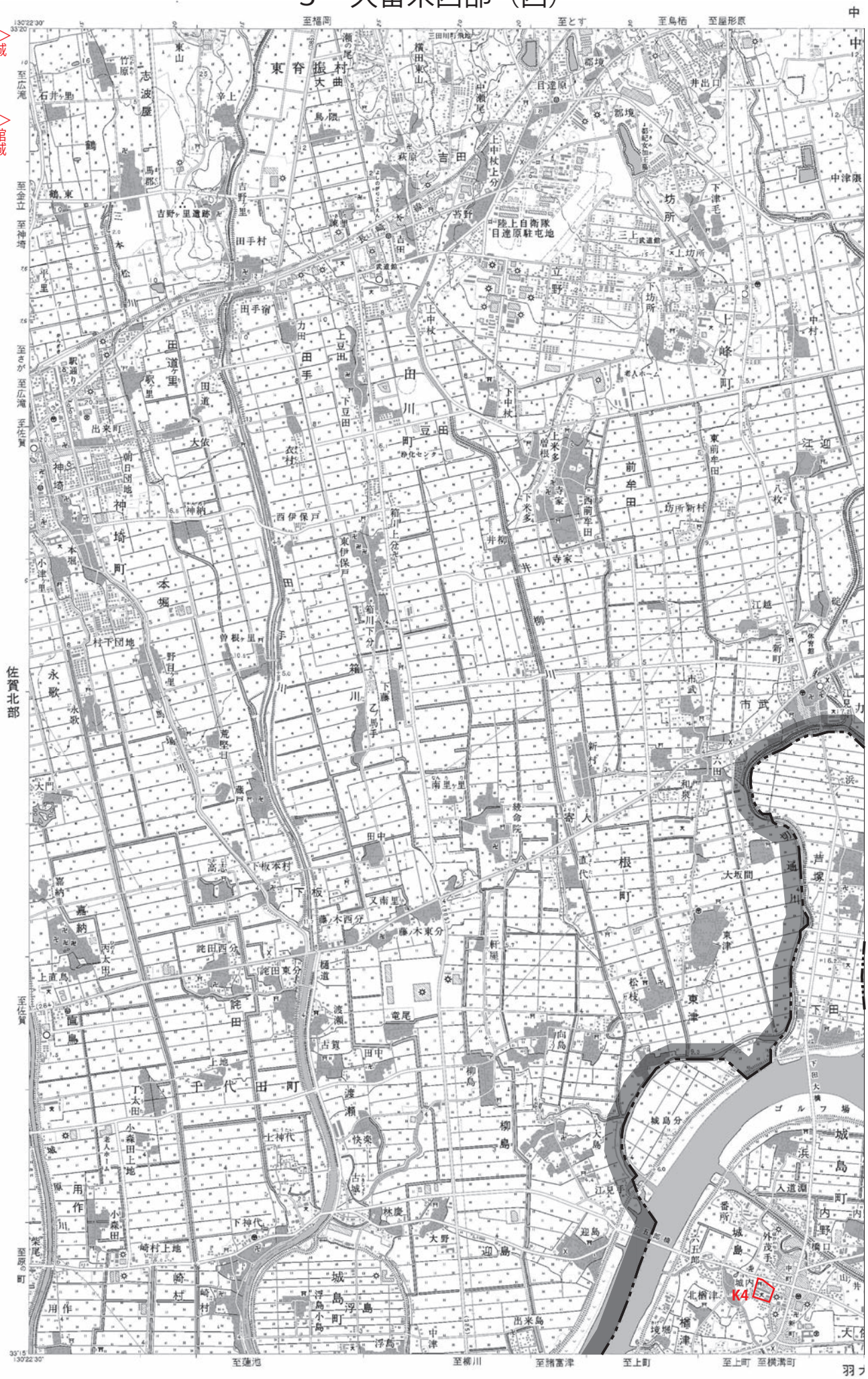
報告書１にて報告分
＜中近世城館＞
筑前 25 天ヶ城
筑前 26 砥上山城
筑前 28 中牟田城
＜城館関連遺跡＞
筑前Ｒ３ 下タテ野遺跡
筑前Ｒ４ 砥上上林遺跡
筑前Ｒ５ 炭焼遺跡

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑前 27 荘林城
筑前 29 作手城

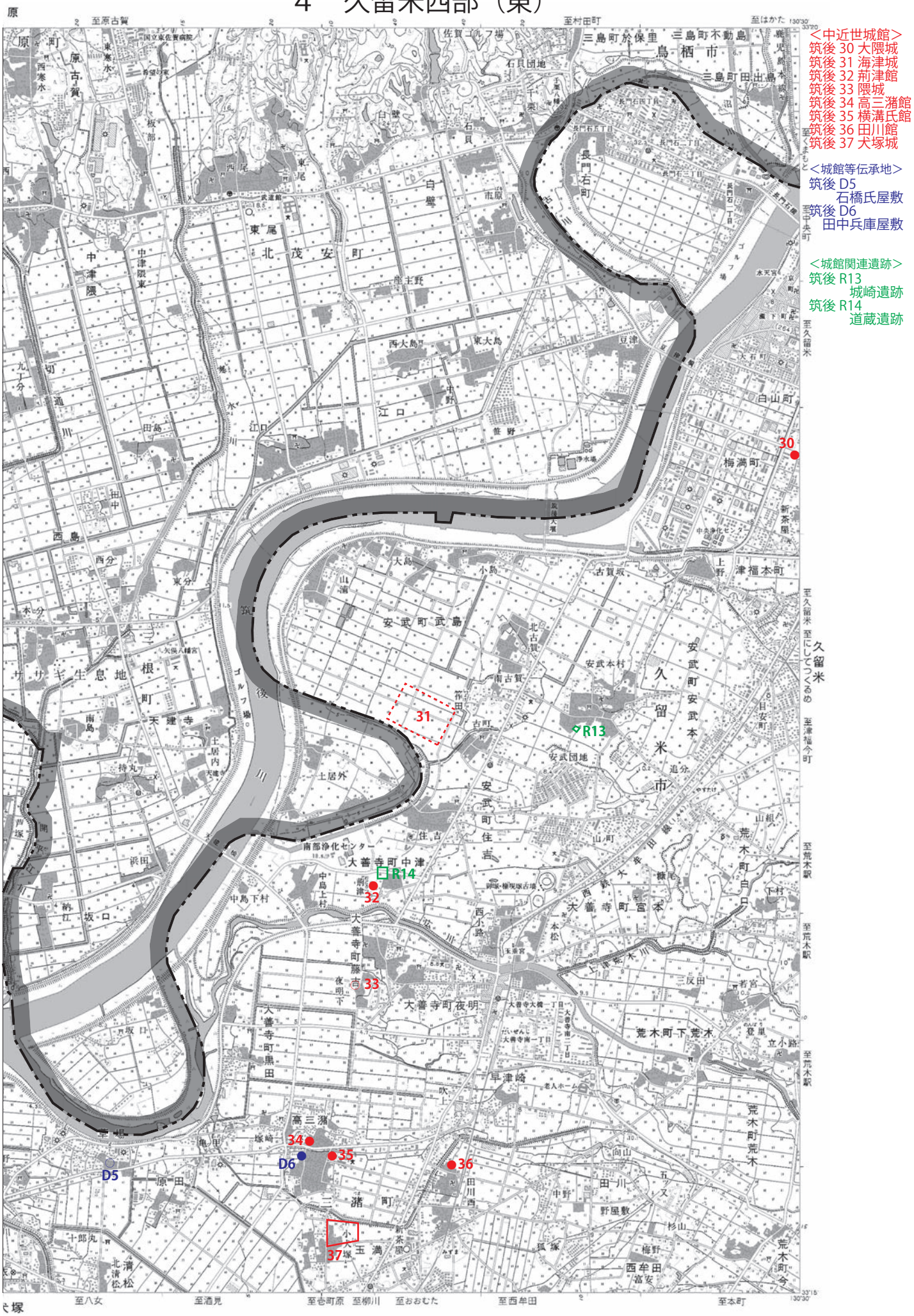
3　久留米西部（西）

＜中近世城館＞
筑後 K4 城島城

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 38 下田館
筑後 39 下田城



4　久留米西部（東）


＜中近世城館＞
筑後 30 大隈城
筑後 31 海津城
筑後 32 荊津館
筑後 33 隈城
筑後 34 高三潴館
筑後 35 横溝氏館
筑後 36 田川館
筑後 37 犬塚城
＜城館等伝承地＞
筑後 D5
石橋氏屋敷
筑後 D6
田中兵庫屋敷
＜城館関連遺跡＞
筑後 R13
城崎遺跡
筑後 R14
道蔵遺跡
30
31
32
33
34
35
36
37
D5
D6
R13
R14
至原古賀
至村田町
至はかた
至久留米
至にしてつくるめ
至津福今町
至荒木駅
至八女
至酒見
至吉町原
至柳川
至おおむた
至西牟田
至本町

5　羽犬塚（西）

＜中近世城館＞
筑後 40 西江上城
筑後 41 東江上城
筑後 55 城ノ内城
筑後 57 木室城
筑後 58 酒見城
筑後 59 津村城
筑後 60 西田口城
筑後 61 蒲池城
筑後 K5 榎津城
＜城館等伝承地＞
筑後 D9 堀田屋敷
＜城館関連遺跡＞
筑後 R15
北ノ屋敷遺跡
（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 42 下青木城
筑後 56 下林城
至下神代
至福岡
至天建寺
至大善寺町夜明
至久留米
至諸富津
至上町
至佐賀
至若津
至一木
至草津江
至新田
至京町
至有明町
至熊本 至おおむた
至蒲船津
佐賀南部
柳川市
40
41
R15
D9
55
57
58
K5
59
60
61

6　羽犬塚（東）

＜中近世城館＞
筑後 43 南清松館
筑後 44 生津城
筑後 46
西牟田本村館
筑後 47 西古賀館
筑後 48 西牟田館
筑後 49 西牟田城
筑後 50 流館
筑後 51 福間館
筑後 53 蛭池館
筑後 54 大藪砦
筑後 190 水田城
筑後 191
下牟田館
筑後 192
中牟田館
筑後 193
中牟田城
筑後 194
馬間田城
筑後 195
吉田大膳城
筑後 210 久末城

＜城館関連遺跡＞
筑後 R18
熊野屋敷遺跡
筑後 R19
長崎坊田遺跡
筑後 R20
彼岸田遺跡

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 45 生津館
筑後 52 草間別館
筑後 196 本郷城
＜城館等伝承地＞
筑後 D7 笹渕館
筑後 D8 福間村營

7　柳　川（西）

＜中近世城館＞
筑後 214 蒲船津城
筑後 215 今古賀城
筑後 216 江崎城
筑後 217 鷹取城
筑後 218 塩塚城
筑後 219 佐留垣城
筑後 K10 柳川城

8　柳　川（東）

＜中近世城館＞
筑後 199 吉岡城
筑後 200 瀬高城
筑後 201 宮園城
筑後 202 大木城
筑後 203 濱田城
筑後 204 堀切城
筑後 206 竹井城
筑後 211 白鳥城
筑後 212 垂見城
筑後 213 津留城
筑後 220 今福城
筑後 221 飛塚城
筑後 K7 松延城
筑後 K8 鷹尾城
筑後 K9 中島城
筑後 K11 江浦城

＜城館関連遺跡＞
筑後 R21 陣内遺跡
筑後 R22 城前遺跡

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 205 萱津城

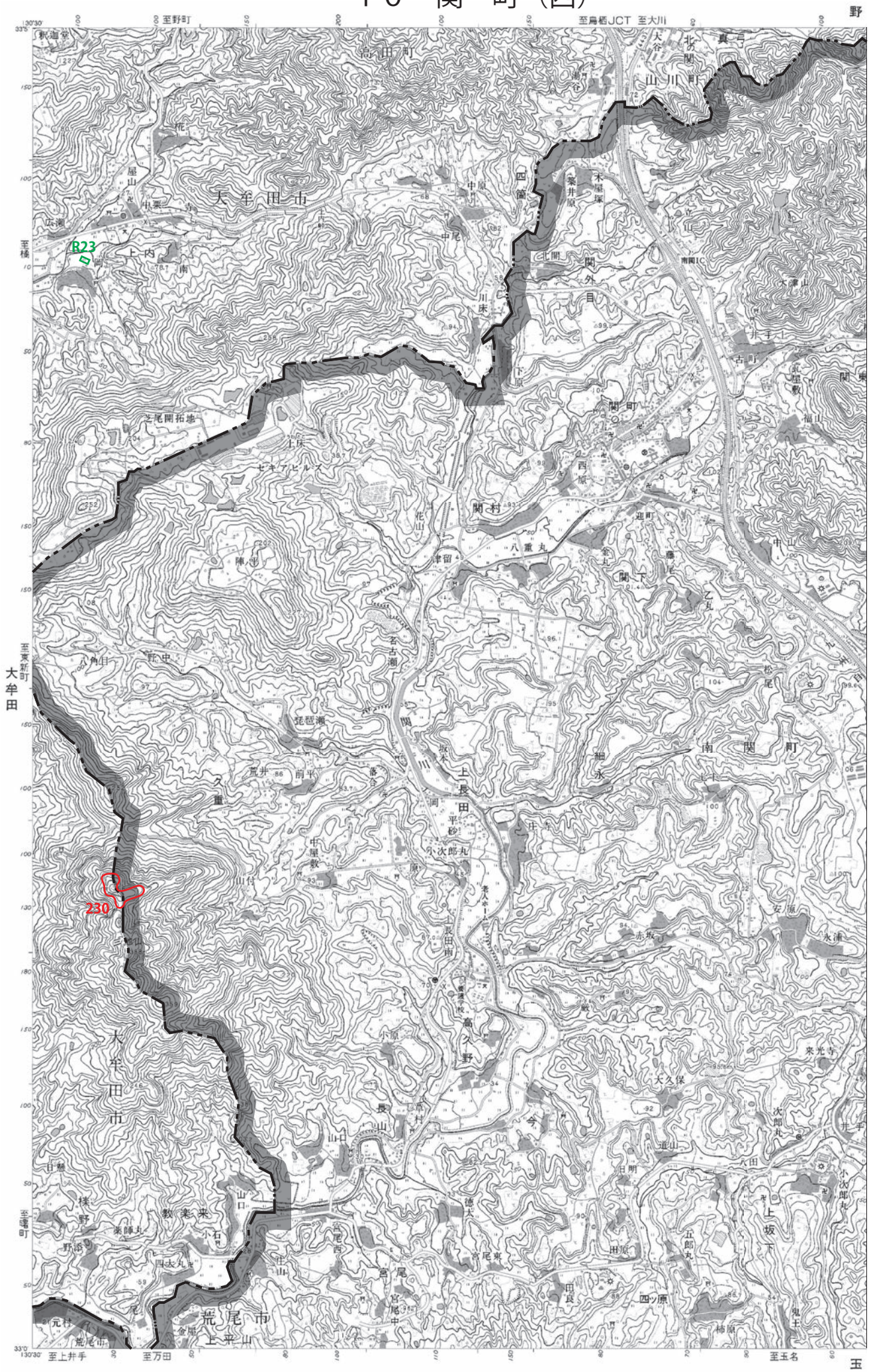
9　大牟田（東）

＜中近世城館＞
筑後 222 茶臼城
筑後 223 内山城
筑後 224 大奥城
筑後 225 西の原城
筑後 228 甘木城
筑後 229 大間城
筑後 K12 三池陣屋

＜城館関連遺跡＞
筑後 R24 白川遺跡
筑後 R25
　　上白川遺跡

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 226 下内城
筑後 227 原内山城
＜城館等伝承地＞
筑後 D17 陣屋敷

１０　関　町（西）



＜中近世城館＞
筑後 230 三池山城

＜城館関連遺跡＞
筑後 R23
上内高頭遺跡

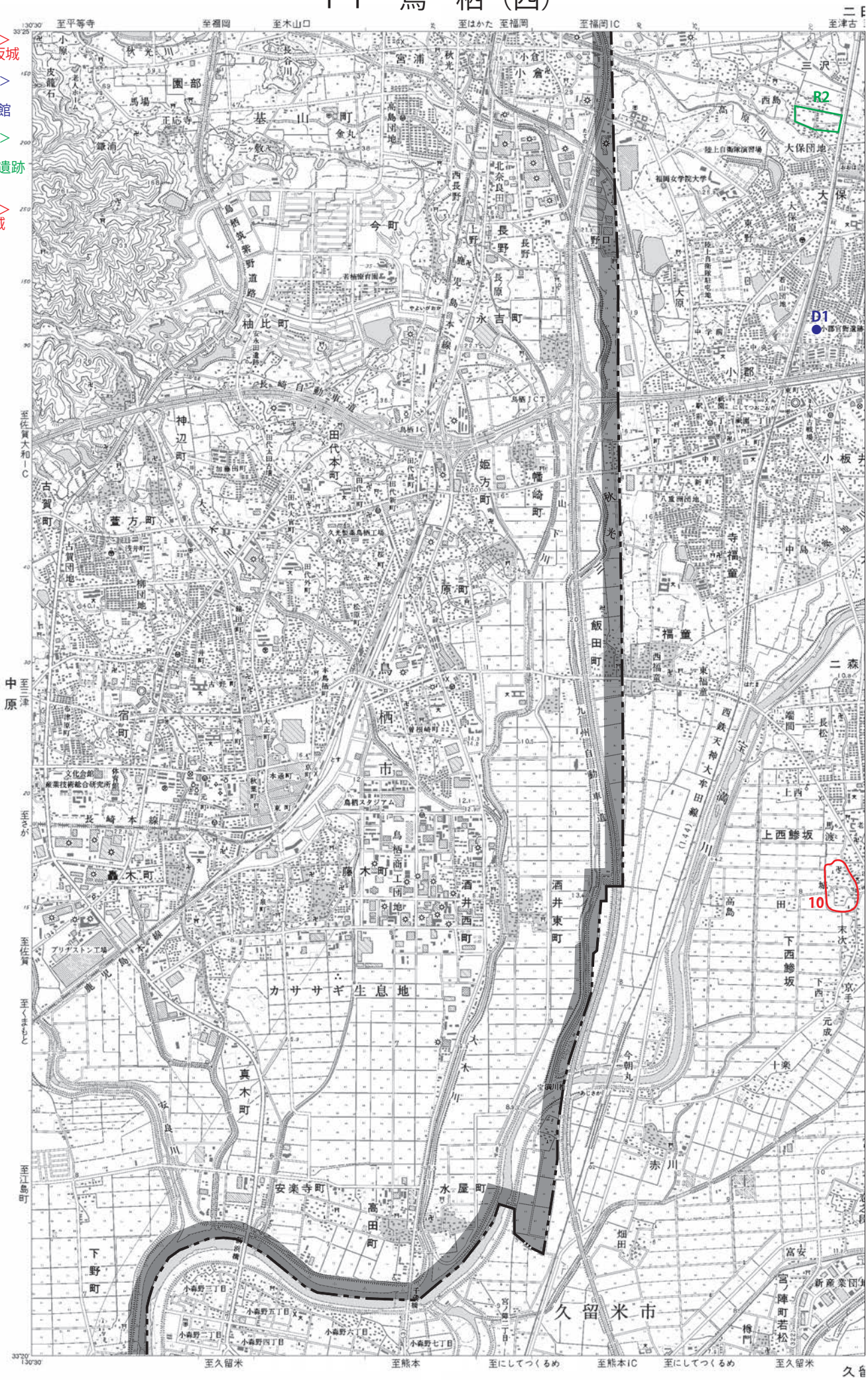
１１　鳥　栖（西）

＜中近世城館＞
筑後 10 西鯵坂城

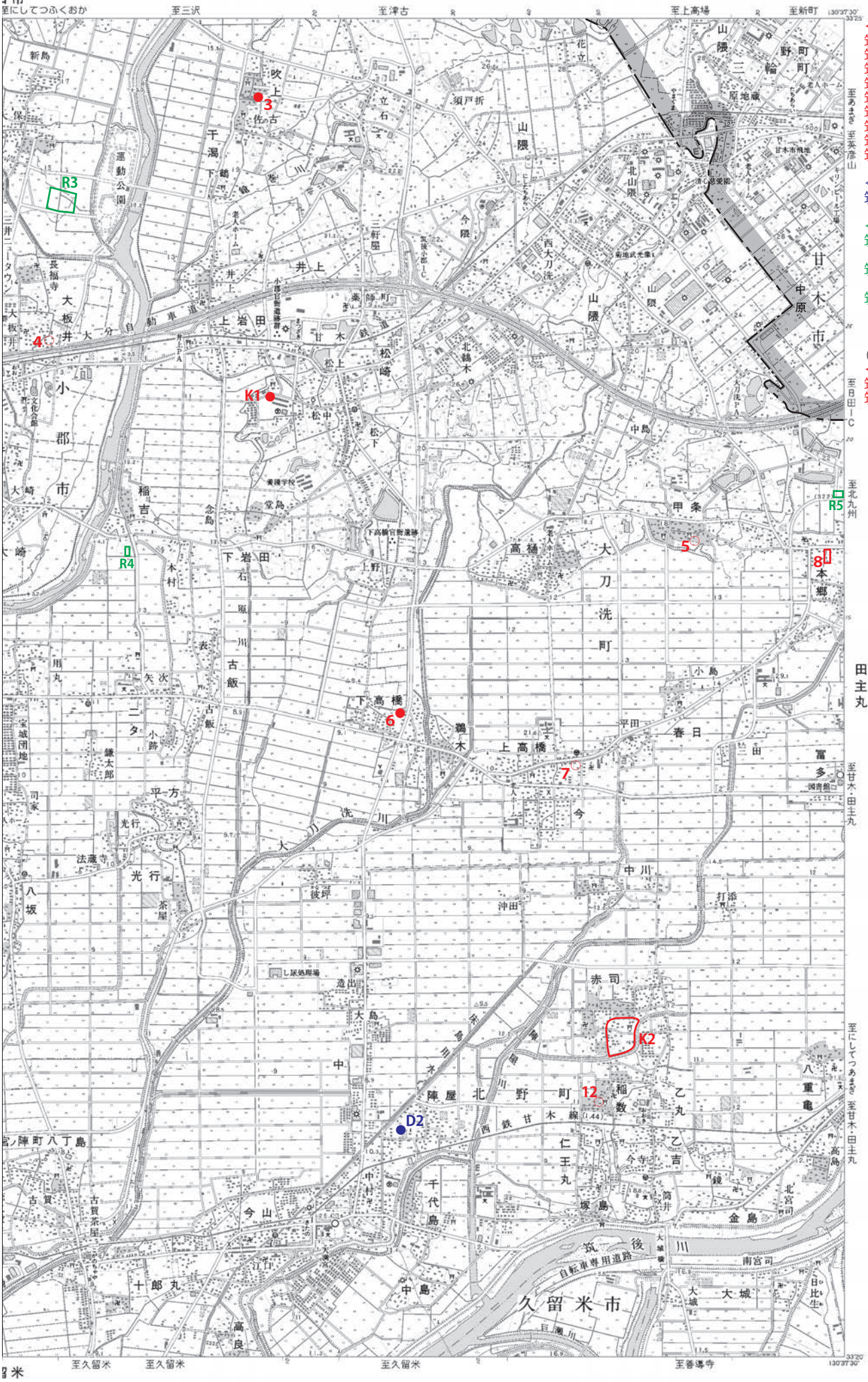
＜城館等伝承地＞
筑後 D1
向築地長者館

＜城館関連遺跡＞
筑後 R2
三沢寺小路遺跡

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 23 若松城



１２　鳥　栖（東）



＜中近世城館＞
筑後３吹上城
筑後４大板井城
筑後５甲条城
筑後６下高橋城
筑後７上高橋城
筑後８三原城
筑後 12 稲員館
筑後 K1 松崎陣屋
筑後 K2 赤司城

＜城館等伝承地＞
筑後 D2 陣屋陣

＜城館関連遺跡＞
筑後 R3
　大保横枕遺跡
筑後 R4
　稲吉元矢次遺跡
筑後 R5
　西森田遺跡

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後９本郷城
筑後 11 古賀城

１３　久留米（西）

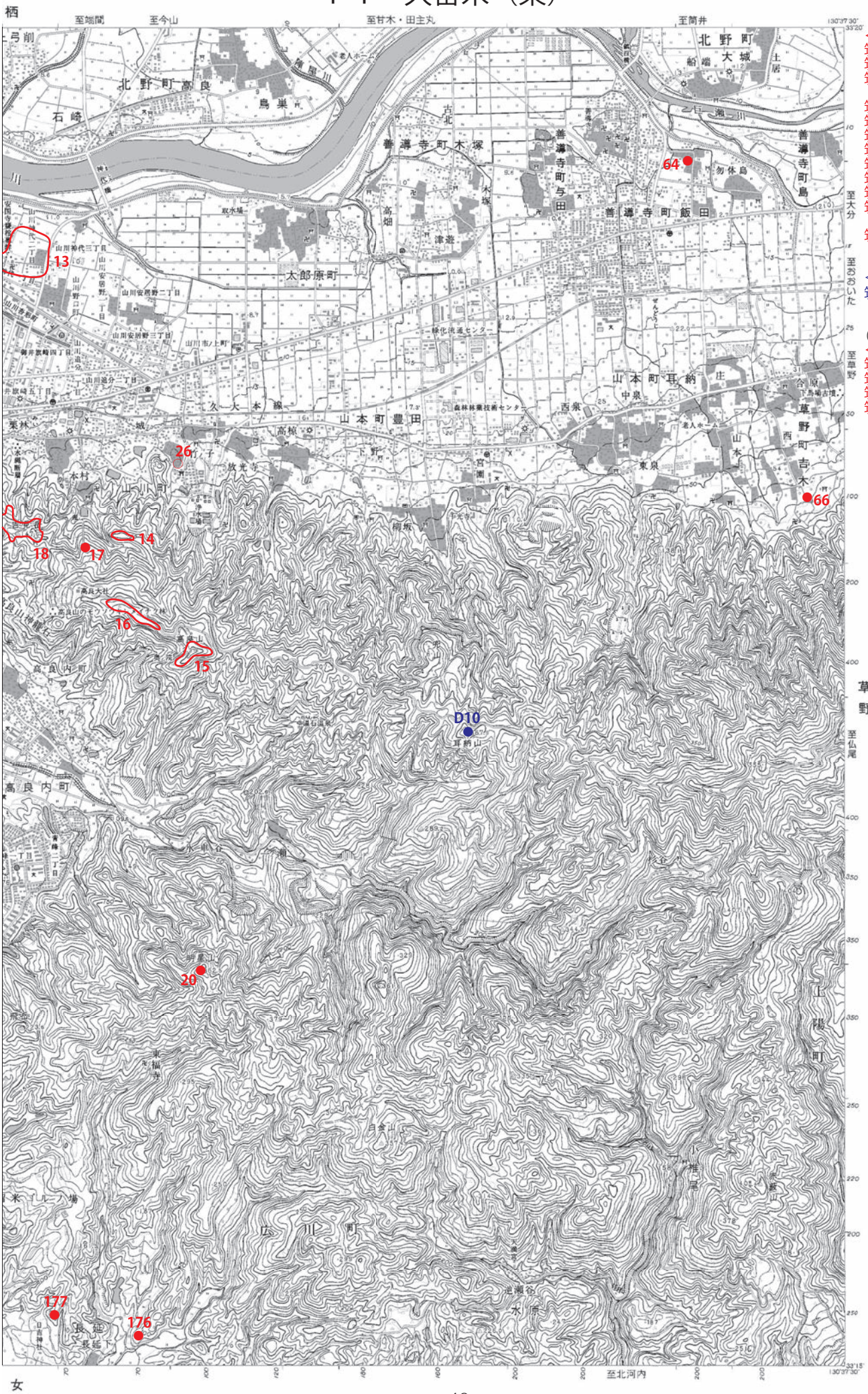
＜中近世城館＞
筑後 13 神代館
筑後 18 吉見岳城
筑後 21 東光寺城
筑後 22 磐井城
筑後 24 草場館
筑後 25 五郎丸館
筑後 27 大石館
筑後 28
　白口中村館
筑後 29 荒木館
筑後 178 藤田館
筑後 K3 久留米城

＜城館等伝承地＞
筑後 D3 宮ノ陣
筑後 D4 春野屋敷

＜城館関連遺跡＞
筑後 R6 下見遺跡
筑後 R7 筑後国府跡
筑後 R8 東光寺遺跡
筑後 R9 神道遺跡
筑後 R10
　日出原南遺跡
筑後 R11
　古賀前遺跡
筑後 R12
　二子塚遺跡

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 23 若松城

１４　久留米（東）



＜中近世城館＞
筑後 13 神代館
筑後 14 鶴ヶ城
筑後 15
毘沙門岳城
筑後 16 杉ノ城
筑後 17 古寶殿城
筑後 18 吉見岳城
筑後 20 明星岳城
筑後 26 弓削城
筑後 64 飯田館
筑後 66 吉野尾館
筑後 176
城ノ尾城
筑後 177
山王山城

＜城館等伝承地＞
筑後 D10 柳坂陣

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 19 高瀬城
筑後 62 谷山城
筑後 63 柳坂城
筑後 65 吉木館

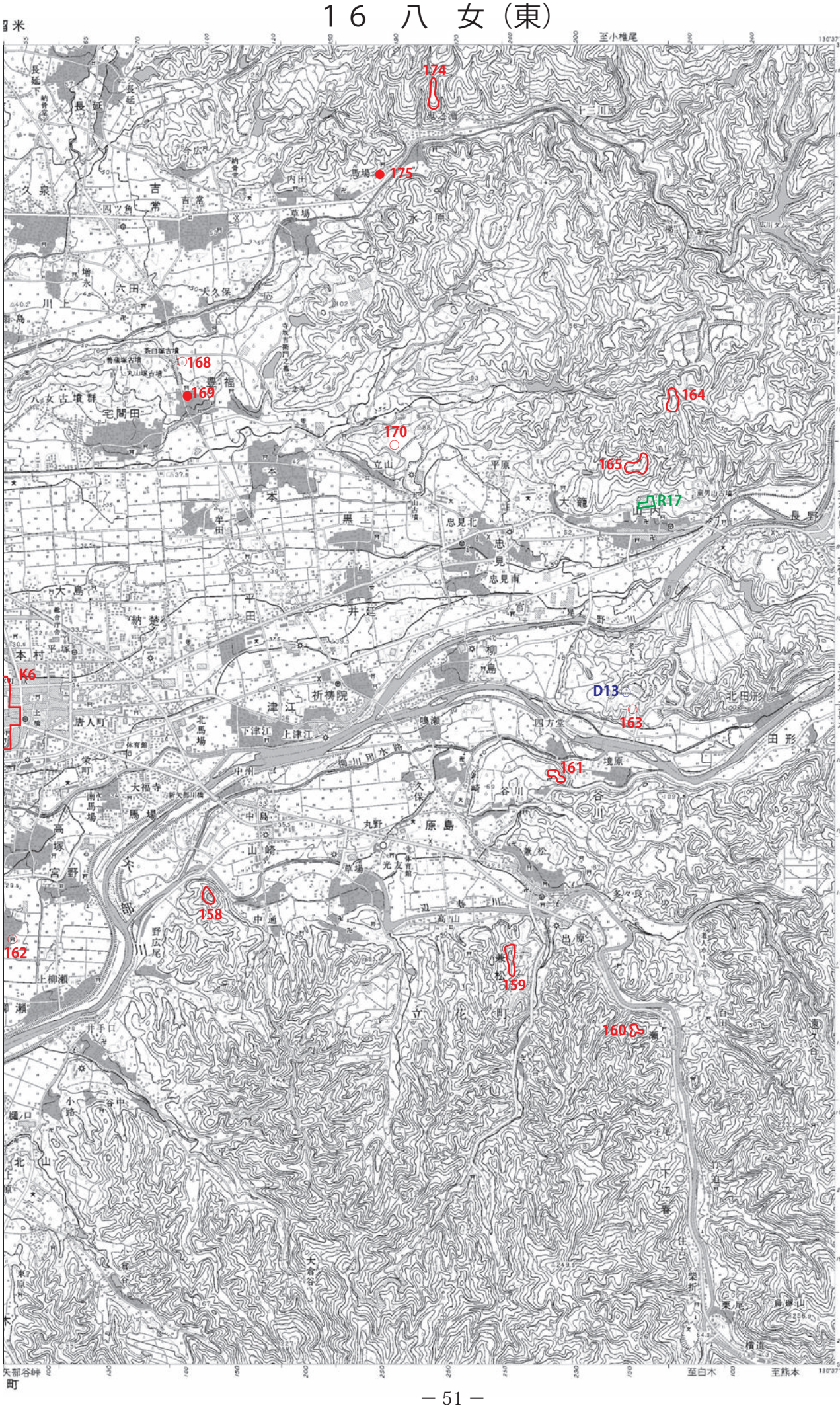
１５　八　女（西）

＜中近世城館＞
筑後 155 山下城
筑後 156 国見岳城
筑後 172 蒲原館
筑後 179 古賀館
筑後 181 川瀬城
筑後 182 川瀬館
筑後 183 知徳城
筑後 184 一條館
筑後 185 齋藤館
筑後 186 長浜館
筑後 187 久恵館
筑後 188 溝口館
筑後 197 禅院城
筑後 K6 福島城

＜城館等伝承地＞
筑後 D14
　足利尊氏陣

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 157 鞍掛城
筑後 171 国武館
筑後 173 吉田館
筑後 180
　川崎式部館
筑後 189 鶴田城
＜城館等伝承地＞
筑後 D15 龍造寺陣
筑後 D16 下妻村營

１６　八　女（東）



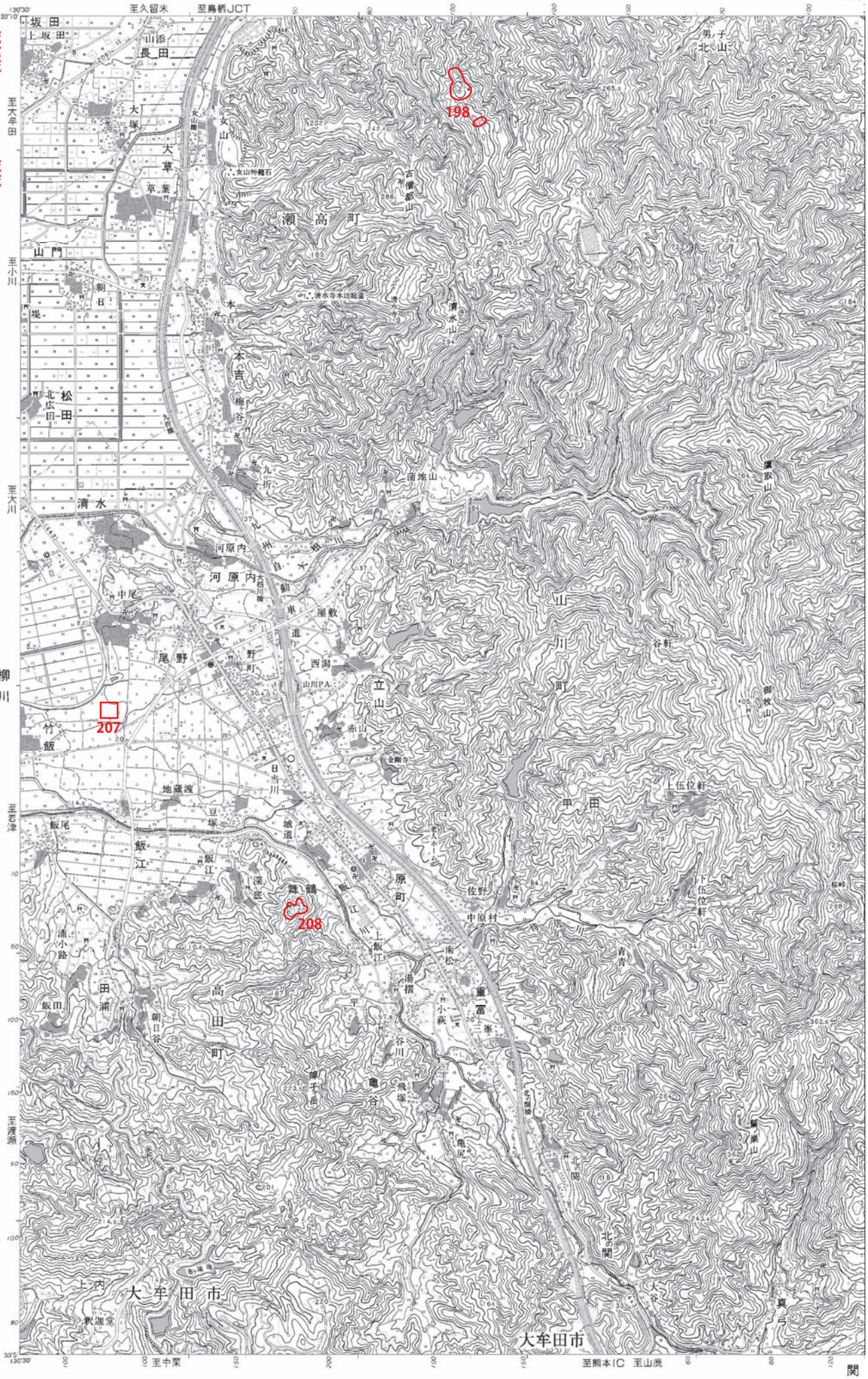
＜中近世城館＞
筑後 158 山崎城
筑後 159 兼松城
筑後 160 三ノ瀬城
筑後 161 谷川城
筑後 162 酒井田館
筑後 163 柳島城
筑後 164 犬尾城
筑後 165 鷹尾城
筑後 168 鶴見山館
筑後 169 川崎氏館
筑後 170 本館
筑後 174 鬼ノ口城
筑後 175 馬場館
筑後 K6 福島城

＜城館等伝承地＞
筑後 D13 道雪陣

＜城館関連遺跡＞
筑後 R17
東館遺跡

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 154 久保山城
筑後 166 茶臼城
筑後 167 城跡山城

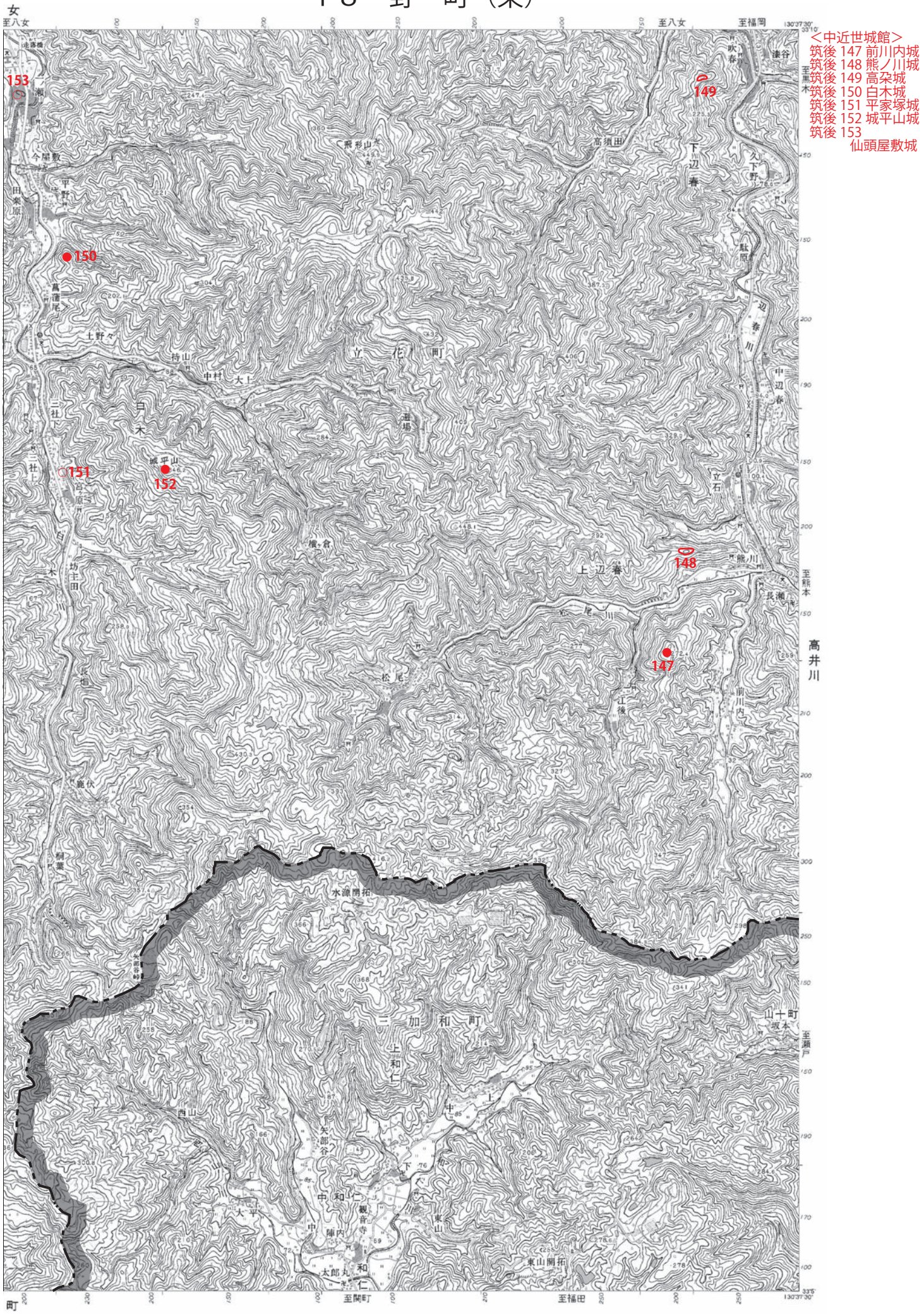
１７　野　町（西）



＜中近世城館＞
筑後 198 小田城
筑後 207 竹井館
筑後 208 飯江城

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 205 萱津城
筑後 209 北関城

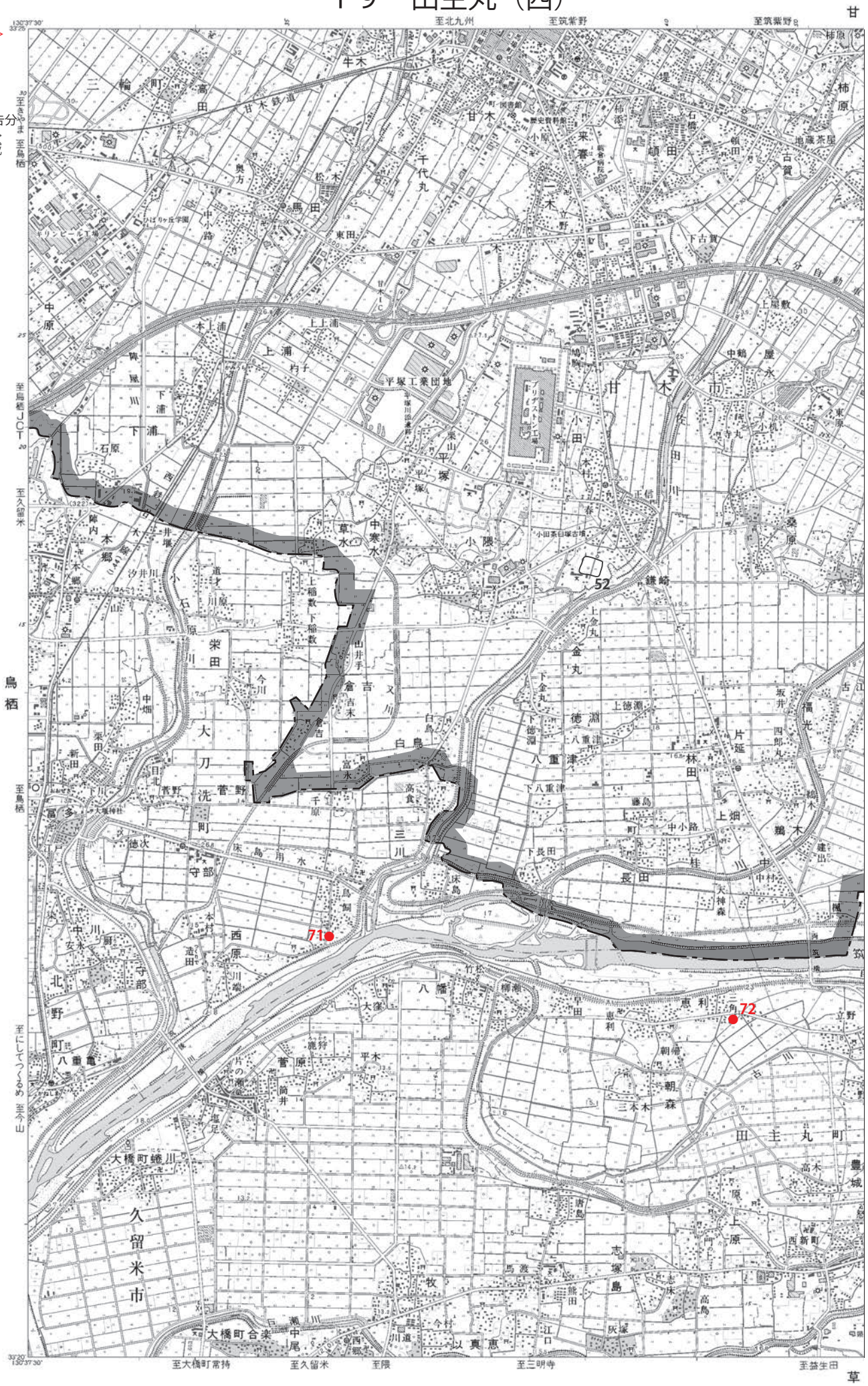
１８　野　町（東）


＜中近世城館＞
筑後 147 前川内城
筑後 148 熊ノ川城
筑後 149 高朶城
筑後 150 白木城
筑後 151 平家塚城
筑後 152 城平山城
筑後 153
仙頭屋敷城
153
149
150
151
152
148
147
女
至八女
至福岡
至黒木
至熊本
至瀬戸
至関町
至福田
町
高井川
立花町
二加和町
山十町
水源開拓
東山開拓
白木
松尾
上辺春
下辺春
立石
熊川
長瀬
前川内
江後
城平山
土野々
中村
大上
二社上
宮原
白木川
坊主田
鹿伏
桐葉
長畑
平野
今屋敷
田楽原
高塚尾
持山
飛彩山
富須田
吹春
塗谷
久下野
點原
中辺春
辺春川
立石
熊川
長瀬
松尾川
上和仁
中和仁
下和仁
矢部谷
西山
大平
観音寺
東山
陣内
太郎丸
和仁

１９　田主丸（西）

＜中近世城館＞
筑後 71 鳥飼城
筑後 72 恵利砦

報告書１にて報告分
＜中近世城館＞
筑前 52 小田城



２０　田主丸（東）

＜中近世城館＞
筑後 73 奴田館
筑後 74 平家城
（吉田町の平家城）
筑後 75 平家城
（松門寺の平家城）
筑後 76 小川館
筑後 77 諏訪館
筑後 91 菅館

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 78 平家城
（諏訪の平家城）

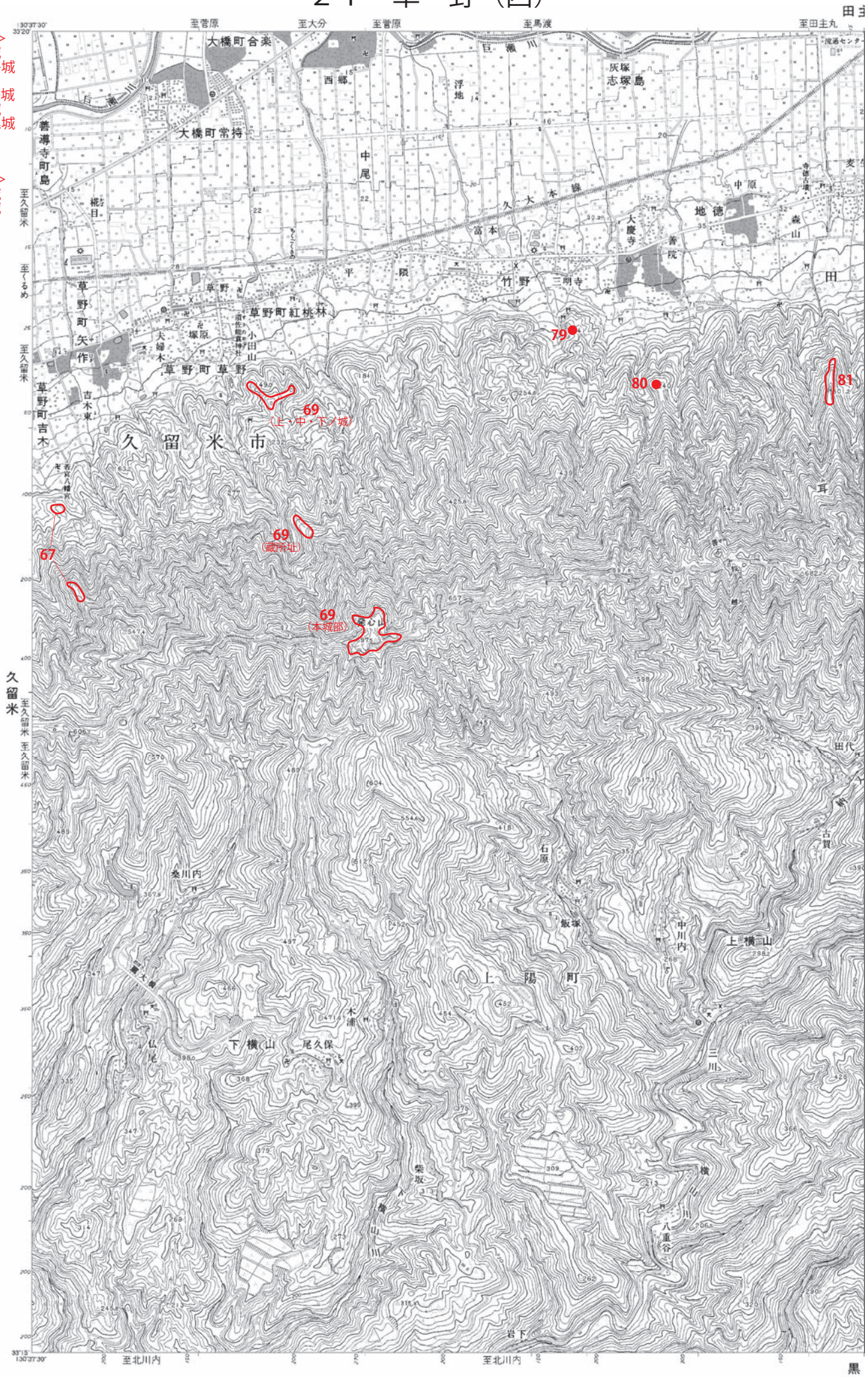
報告書１にて報告分
＜中近世城館＞
筑前 54 岩切山城
筑前 55 平家城
＜城館等伝承地＞
筑前Ｄ13 小西館

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑前 56 中尾城

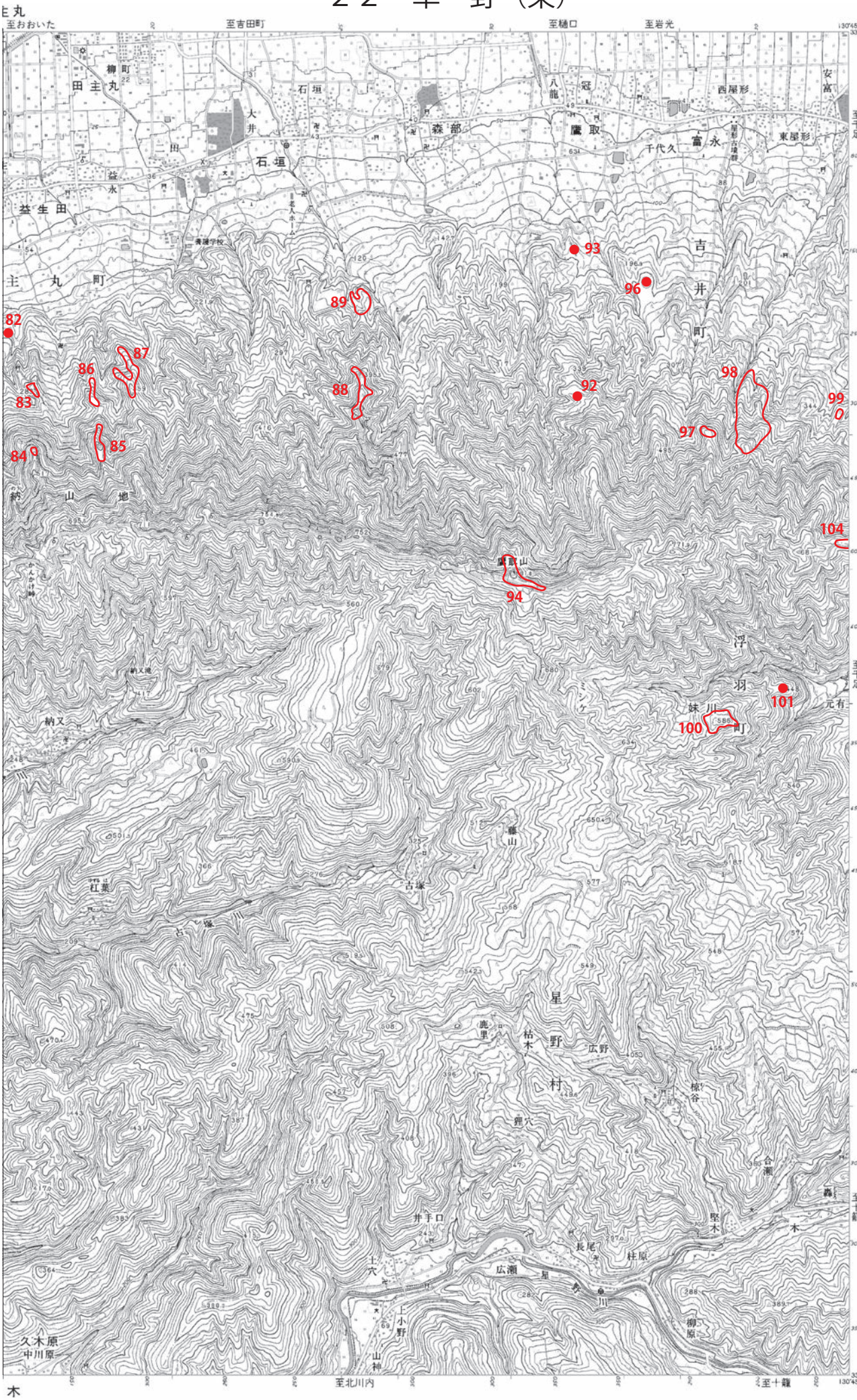
21　草　野（西）

＜中近世城館＞
筑後 67 竹井城
筑後 69 発心岳城
筑後 79
　下笹尾岳城
筑後 80 姥ヶ城
筑後 81 西葛尾城

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 68 釣井城
筑後 70 問本城



22　草　野（東）



＜中近世城館＞
筑後 82 内山館
筑後 83 内山城
筑後 84 高野城
筑後 85 高丸城
筑後 86 小丸城
筑後 87 平家城
（益永の平家城）
筑後 88 山ノ中城
筑後 89 新田城
筑後 92 平家城
（森部の平家城）
筑後 93 平家城
（冠の平家城）
筑後 94 鷹取山城
筑後 96 清水城
筑後 97 西の城
（妙見西の城）
筑後 98 妙見城
筑後 99 谷山城
筑後 100 平家城
（妹川の平家城）
筑後 101 重虎城
筑後 104
満願寺城

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 90 城氏城
筑後 95 屋形館

23　黒　木（西）

＜中近世城館＞
筑後 143 猫尾城
筑後 144 鷲岳城
筑後 145 兎城
筑後 146 生駒野城

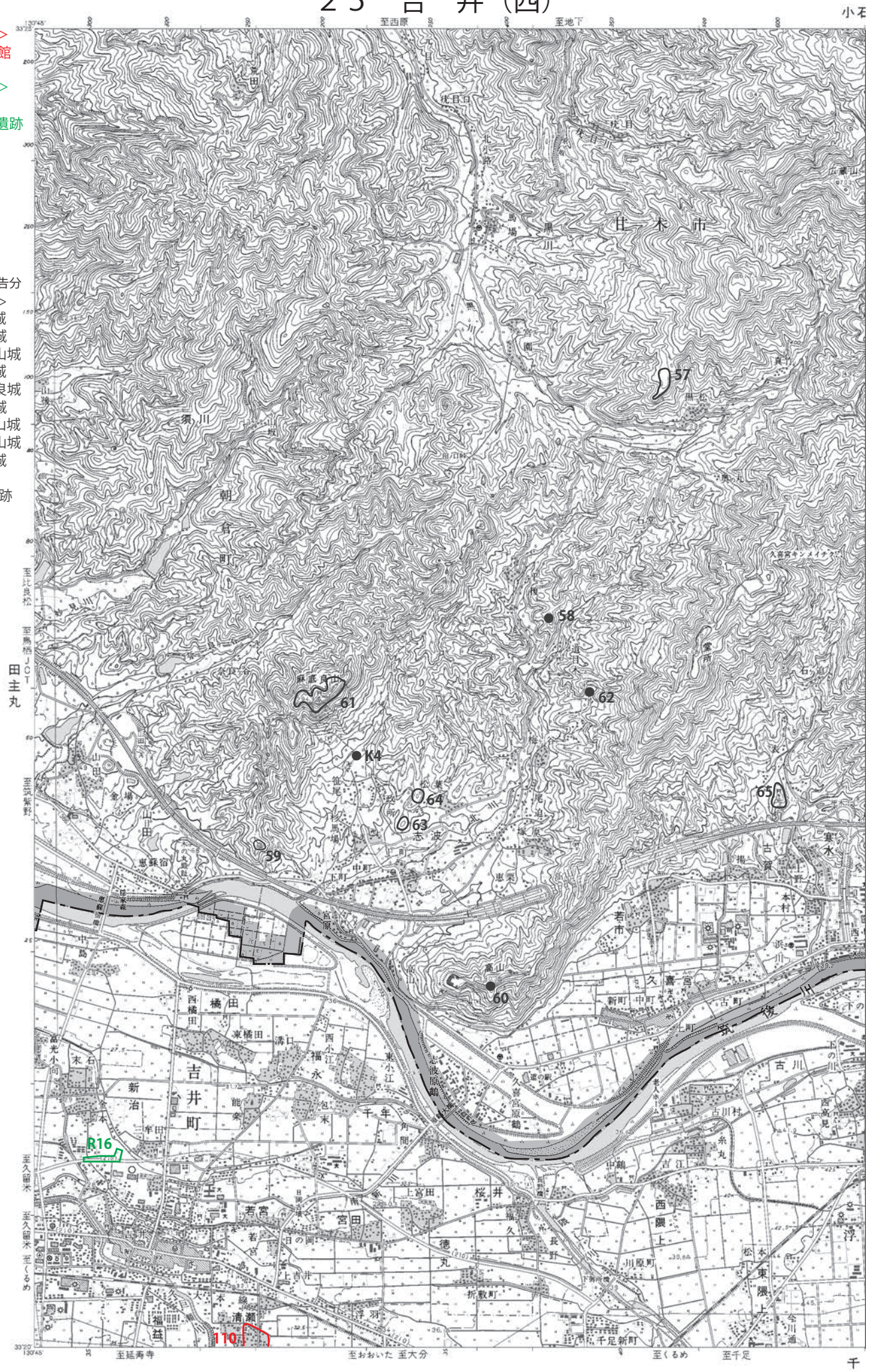
＜城館等伝承地＞
筑後 D11
峯切山陣
筑後 D12
梨木山陣

２４　黒　木（東）

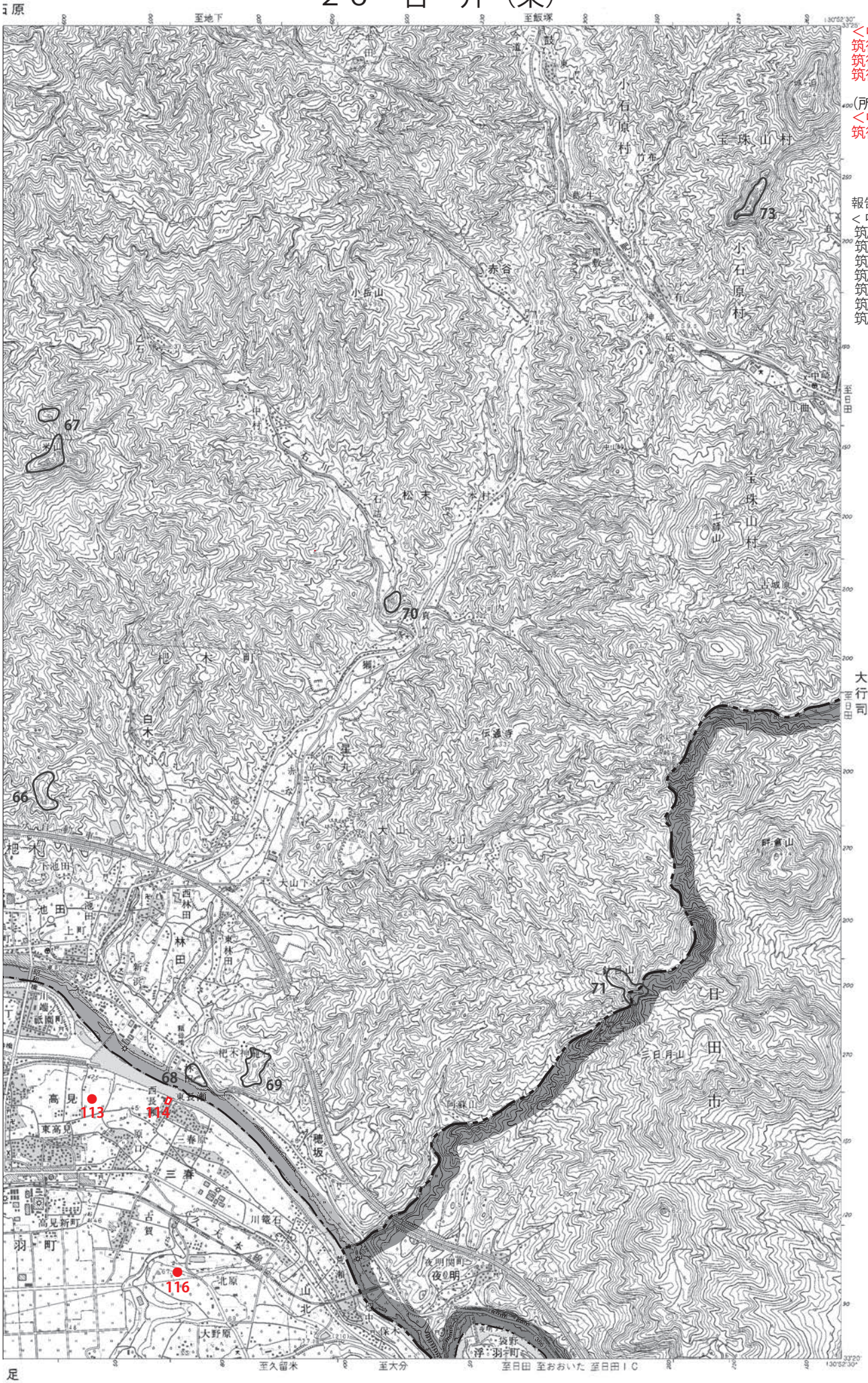
＜中近世城館＞
筑後 130 内城城
筑後 131 本星野館
筑後 138
　白牧大岩屋名城
筑後 139 地下名城
筑後 140 高牟礼城
筑後 141 熊野堂城
筑後 142 立華城

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 132 高島城

25　吉　井（西）


＜中近世城館＞
筑後 110 井上館
＜城館関連遺跡＞
筑後 R16
仁右衛門畑遺跡
報告書 1 にて報告分
＜ 中近世城館 ＞
筑前 57 村上城
筑前 58 志波城
筑前 59 本陣山城
筑前 60 高山城
筑前 61 麻氐良城
筑前 62 烏山城
筑前 63 前隈山城
筑前 64 茶臼山城
筑前 65 夕月城
筑前Ｋ 4
栗山備後宅跡
甘木市
吉井町
R16
110
57
58
59
60
61
62
63
64
65
K4

26　吉　井（東）

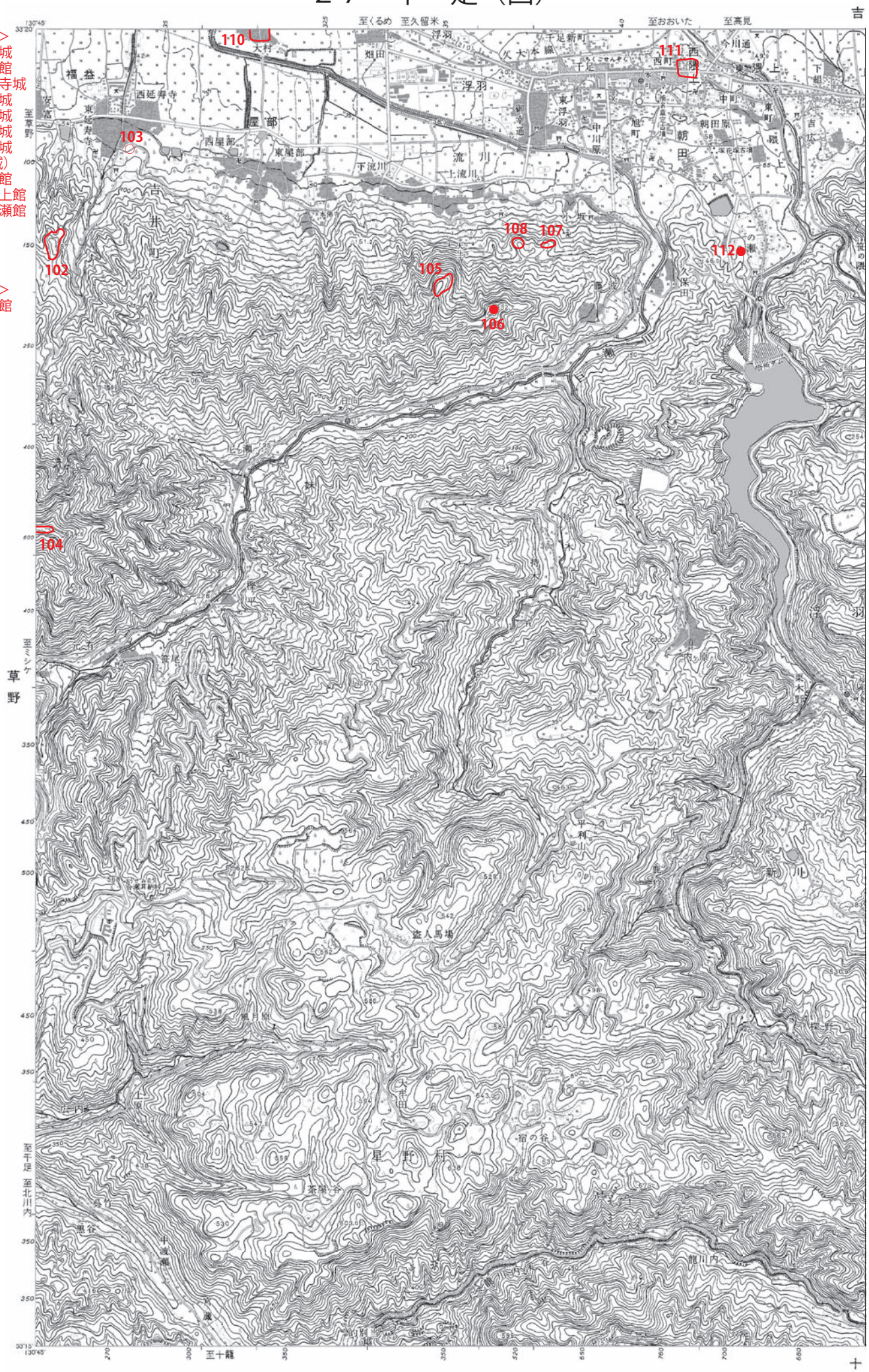


＜中近世城館＞
筑後 113 大石城
筑後 114 長瀬城
筑後 116 煎隈館

(所在不明)
＜中近世城館＞
筑後 115 峯山城

報告書 1 にて報告分
＜中近世城館＞
筑前 66 三日月城
筑前 67 米山城
筑前 68 鵜木城
筑前 69 長尾城
筑前 70 真竹山城
筑前 71 針目城
筑前 73 烏岳城

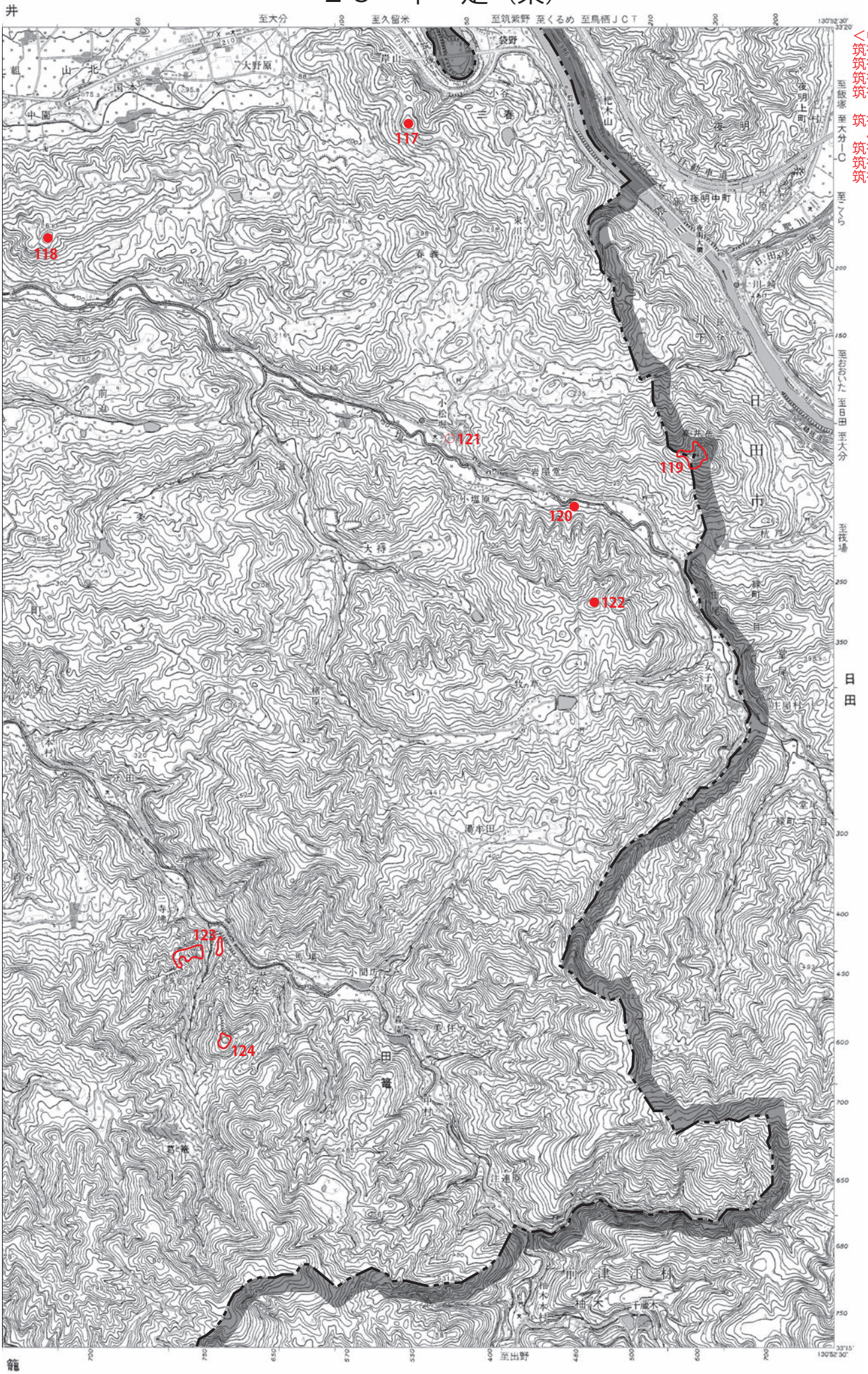
27　千　足（西）



＜中近世城館＞
筑後 102 福丸城
筑後 103 福丸館
筑後 104 満願寺城
筑後 105 安山城
筑後 106 立石城
筑後 107 井上城
筑後 108 西ノ城
（井上西城）
筑後 110 井上館
筑後 111 隈ノ上館
筑後 112 一之瀬館

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 109 小坂館

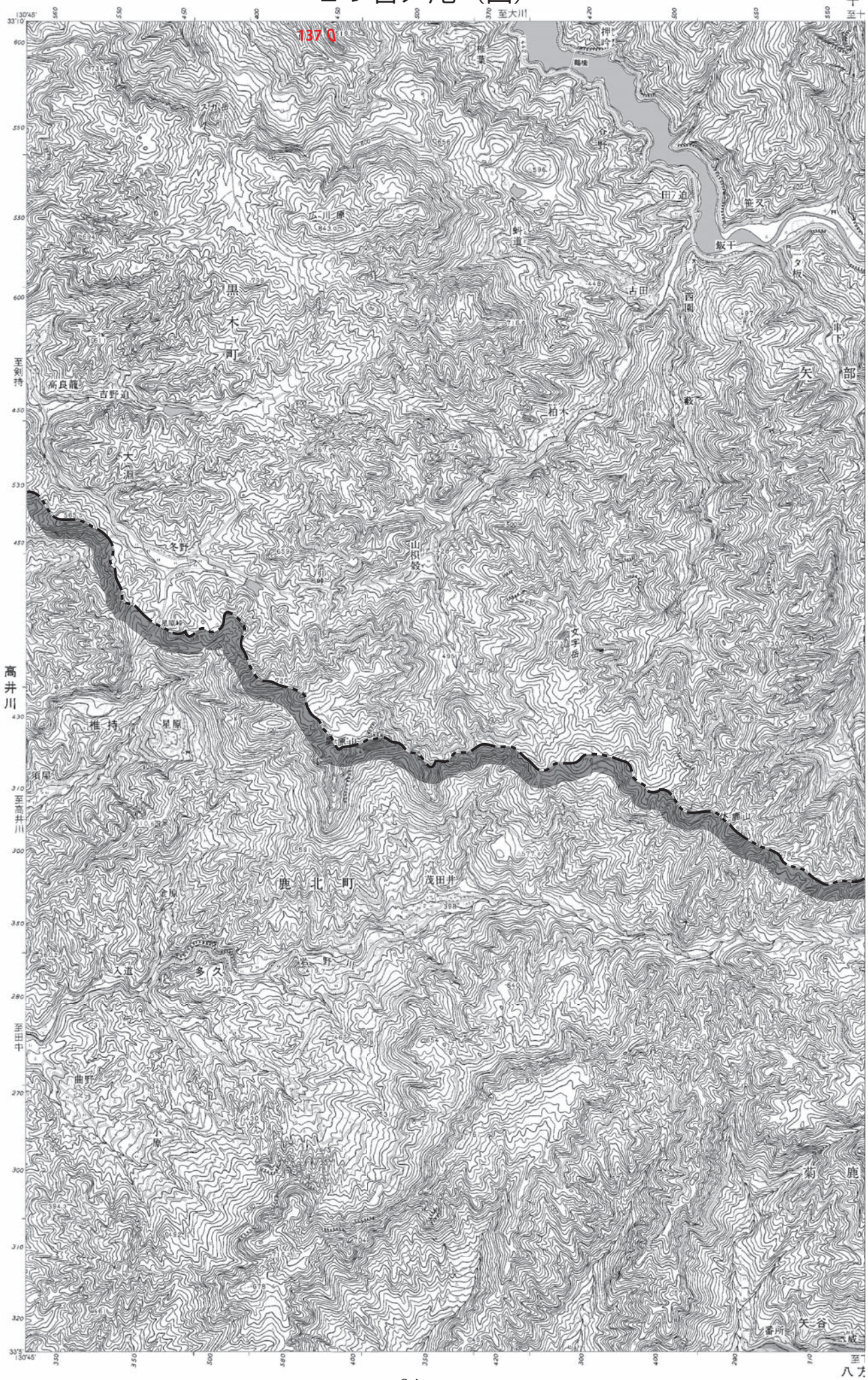
２８　千　足（東）



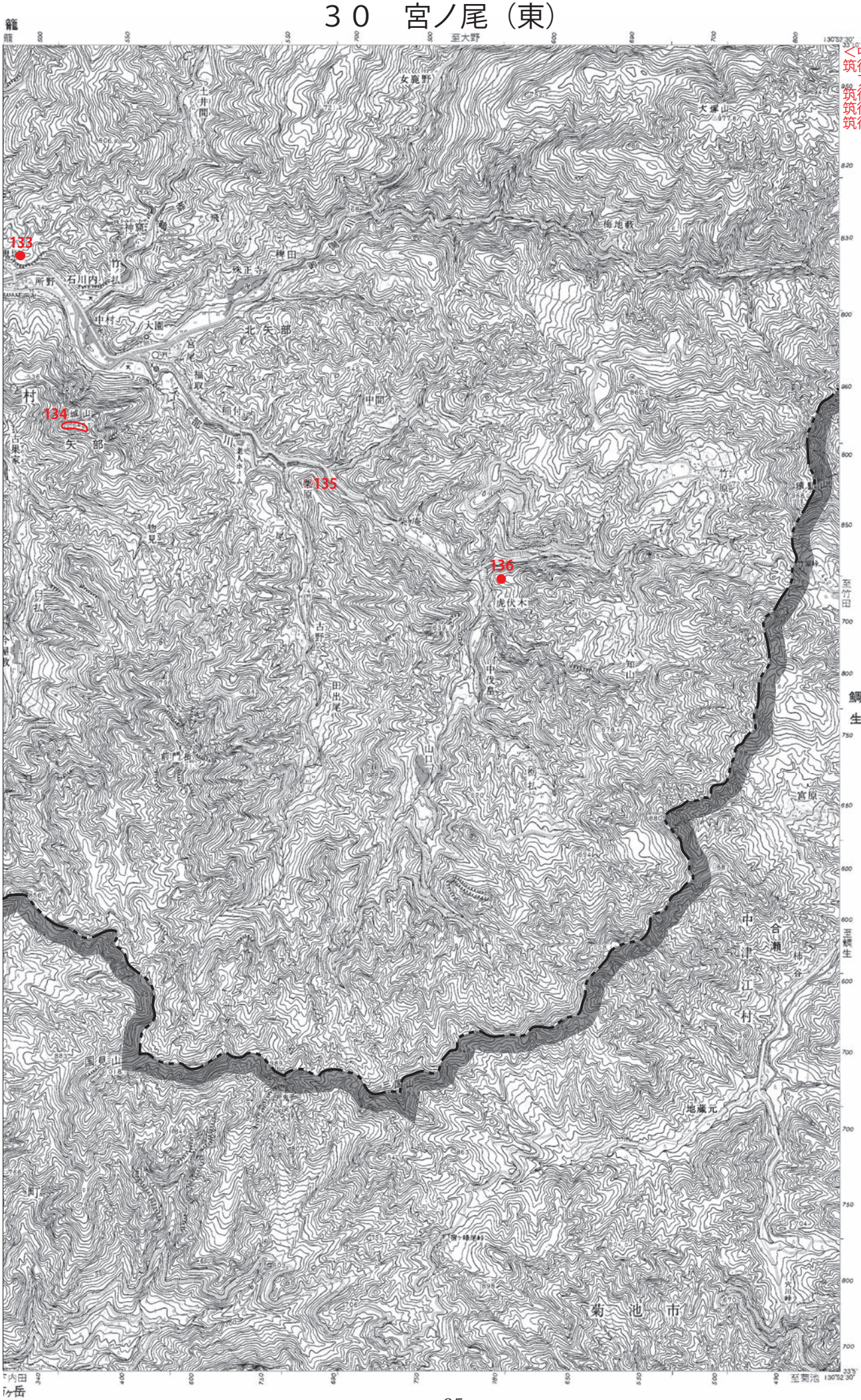
<中近世城館>
筑後 117 岸山城
筑後 118 小塩城
筑後 119 高井岳城
筑後 120
　小椎尾氏館
筑後 121
　小椎尾氏別館
筑後 122 東山城
筑後 123 長岩城
筑後 124 松尾城

２９宮ノ尾（西）

<中近世城館>
筑後 137 築足城



３０　宮ノ尾（東）

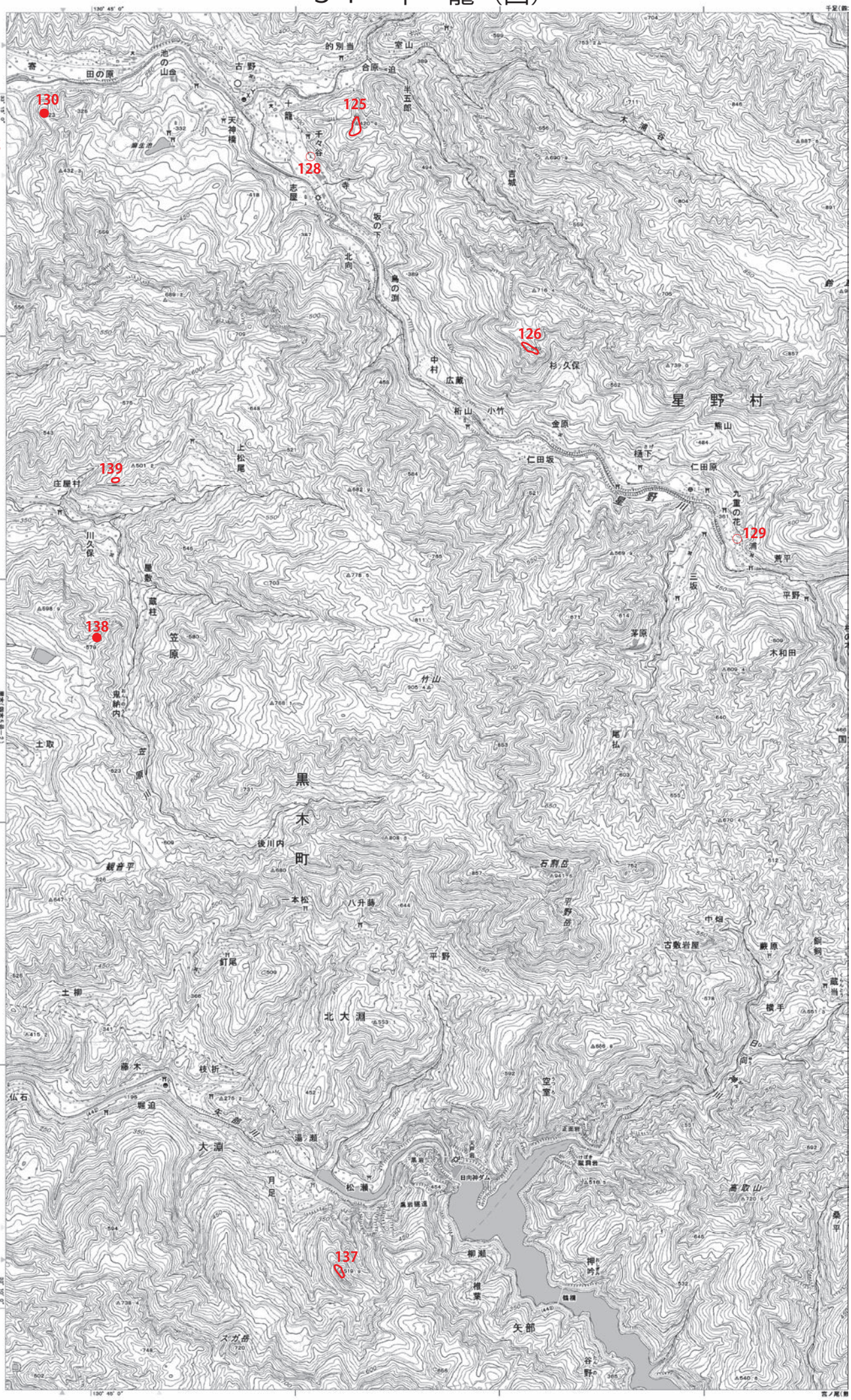


＜中近世城館＞
筑後 133
アイノツル城
筑後 134 高屋城
筑後 135 栗原城
筑後 136 虎伏木城

31　十　籠（西）

＜中近世城館＞
筑後 125 高岩城
筑後 126 白石城
筑後 128 千々石館
筑後 129 浦館
筑後 130 内城城
筑後 137 築足城
筑後 138
　白牧大岩屋名城
筑後 139 地下名城

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑後 127 十籠館
筑後 132 高島城



Ⅴ　個別城館報告

＜凡例＞

1　本章では、対象地域に分布する個別城館遺跡等の記載を行っている。

2　城館跡は、遺跡の分類単位で、なおかつ旧郡単位で収録しており、市町村単位ではない。

3　個別城館のタイトルに示した内容は、Ⅳの一覧に準じている。

4　文中にある文献番号は、参考文献一覧（32～34ページ）と対応している。また、基本参考文献等の略号は以下のとおりである。

- 「軍談」…『筑後将士軍談（筑後国史）』（矢野一貞著・1853年）
- 「旧城」…『旧城跡等ノ取調』（福岡県社第1956号　大正５年10月２日施行）
- 「種々」…『研究旅行用　面白い種々な見方の福岡縣史、史蹟名勝口碑傳説所在地』（和田宗八・1936年）
- 「全集」…『日本城郭全集』14 佐賀・長崎・福岡（人物往来社（鳥羽正雄他編・1967年））
- 「探訪」…『探訪日本の城』（小学館・1977年）
- 「教委」…『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXIX 付録　福岡県中世山城跡（福岡県教育委員会（副島邦弘・近沢康治編）・1979年）
- 「大系」…『日本城郭大系』第18巻福岡・熊本・鹿児島（新人物往来社（磯村幸男編・1979年）
- 「廣崎」…『福岡県の城』（廣崎篤夫・1995年）/『福岡県古城探訪』（廣崎篤夫・1997年）
- 「城郭」…『福岡県の城郭』（福岡県の城刊行会・2009年）

5　個別報告文章の項目および内容は以下のとおりである。

【沿革】…城館の位置、および伝承等の来歴を記す。

【概要】…城館の現地の状況及び構造等を記す。

【史料】…文書調査における「一次史料」・「参考史料」の記載の有無を示す。

【参考文献】…参考文献一覧に示した文献の有無を示すもので、文献番号を付した。番号がゴチック体となっているものについては、記載文献に縄張り図・測量図等の調査データが搭載されているものを示す。

6　掲載した縄張り図の内、事務局作成分については、作成方法・表記方法等については、『発掘調査のてびき　各種遺跡編』（2014年・文化庁編）に準じている。また、遺構名称も上記文献に準じているが、曲輪への出入口を指す用語については「虎口」を用いた。

1　中世城館　　①御原郡

筑後２　山隈城（やまぐまじょう）　　**郡名　御原郡/筑前国夜須郡　別称　花立山城・干潟城　図幅名　二日市（東）**
種別　山城　　所在　小郡市山隈・朝倉郡筑前町四三嶋・山隈

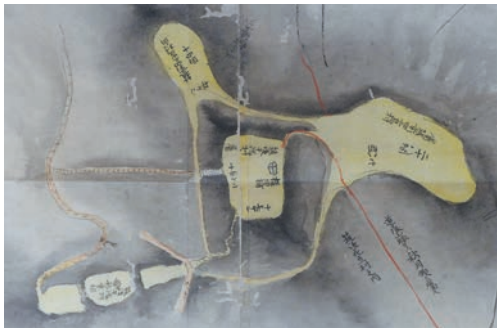
【沿革】筑前と筑後との境、筑後平野の中に聳える独立峰、城山（花立山）の山頂に位置する。『筑前国続風土記』によると、当城は南北朝時代に北朝方の少弐氏によって築かれたとされ、また豊臣秀吉の九州平定後、小早川隆景の名島城の支城となったことが記される。また、『軍談』には「山隈城跡」として「山城也、縦十四間、横十四間、西ニ小掘五ツアリ、長十間、廣五尺、深三尺、南ニ小堀七ツアリ、長十間、廣五尺、深三尺、二ノ丸縦二十四間、横十六間、小堀八ツアリ、三ノ丸縦十八間、横八間、太宰少弐ノ支城也」とある。また文献 120 には秋月氏の端城ともされ、秋月氏の関与が窺われる。

【概要】標高 130.9m の頂部には、南北約 30m、東西約 20m の主郭Ⅰを置き、その北東側、北西側、、南西側に曲輪を配する。北東側はあまり標高が変わらない頂部に曲輪Ⅱを置き、その南東側に平面逆Ⅴ字形の堀切３本を設ける。またⅠの北西側に曲輪Ⅲ、南東側には堀切３本を設けている。そして、Ⅰの南西側にはやや離れて曲輪Ⅳ、Ⅴを配するが、Ⅳの東側には堀切あるいは食い違いの形状の土塁を備えた堀が設けられる。城山は周囲からも非常に目立つ山であり、中世全般にかけて頻繁に使用された城郭であると考えられる。

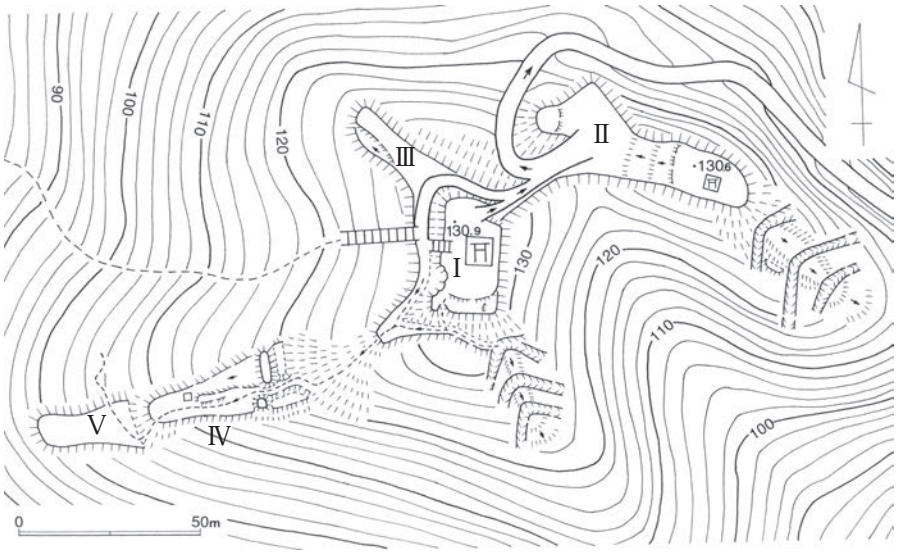
【史料】あり

【参考文献】1 ～ 3,5 ～ 7,8,9,10 ～ 12,45,**48**, **128**

第２図　山隈城遠景



第３図　夜須郡四三島村山隈山古城図（『古戦古城図』のうち）（部分・国立公文書館蔵）



第４図　山隈城縄張り図（文献 128・岡寺　良作成）

筑後 8　三原城（みはらじょう）

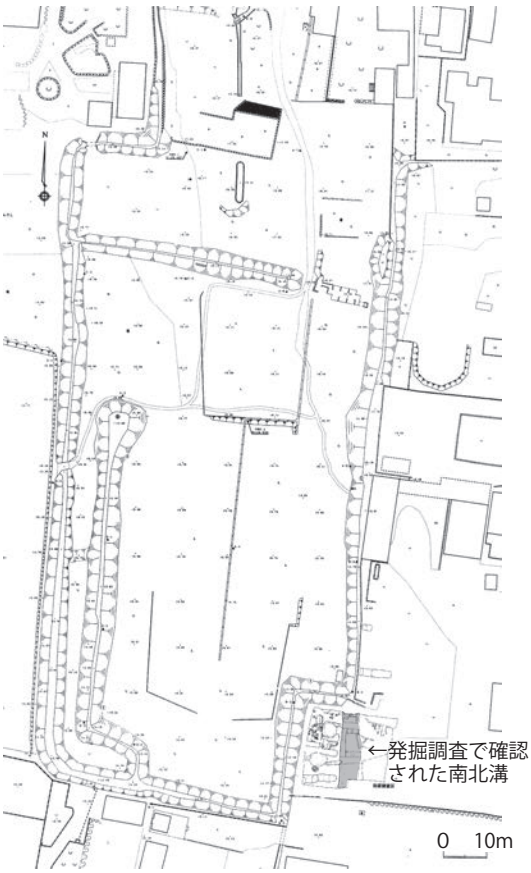
郡名　御原郡　　**別称**　本郷館　　**図幅名**　鳥栖（東）
種別　平地城館　　**所在**　三井郡大刀洗町本郷

【沿革】筑後川の支流、陣屋川に面した本郷宿に隣接して位置する平地城館である。『軍談』には「同村（本郷村）舘跡」として『寛延記』を引いて、「本郷新町にあり、長禄中三原種朝居館ノ跡ナリ、三万ノ領主ト云伝フ」とある。また、秋月氏の持ち城の一覧を記した『天正十五年四月生駒雅楽頭宛城数覚書』（文献 120 所収）には「三原　板浪左京」とあり、天正 15 年（1587）段階には秋月方の城となっていたことが推測される。

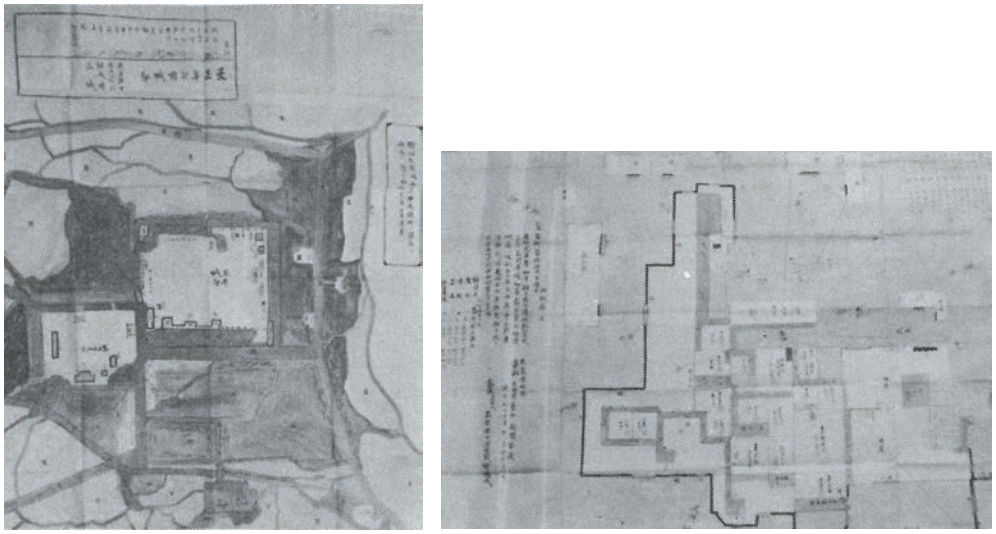
【概要】本郷宿の南、標高約 17m の平地に、南北約 150m、東西約 80m の長方形の範囲に幅約 5 m、深さ約 1 m の空堀が、北側と東側の一部を除いて全周する。また、西側と北側には堀が二重に巡る構造となっている。南東隅については入隅のように内側に折れているが、その外側の発掘調査によって、元々は折れもなく直線的に巡らされていたものが、現在見られるような入隅状に改修されていることが判明している。現状ではこの方形区画が確認されるのみであるが、『大刀洗町史』（文献 29）に掲載された『三原城図』や『三原城間どり図』（共に所在不明）には、複数区画が描かれているようであり、この絵図の真偽はともかく、今後の課題と言えよう。いずれにせよ筑後平野においては明瞭に堀で巡らされた方形区画が地表に残されている貴重な事例と言えよう。

【史料】あり

【参考文献】
1,5 ～ 9,29,
64,115



第 5 図　三原城測量図（文献 64）



第 6 図　『大刀洗町史』に掲載された「三原城図」（左）と「三原城間どり図」（右）（文献 29 から転載）

②御井郡

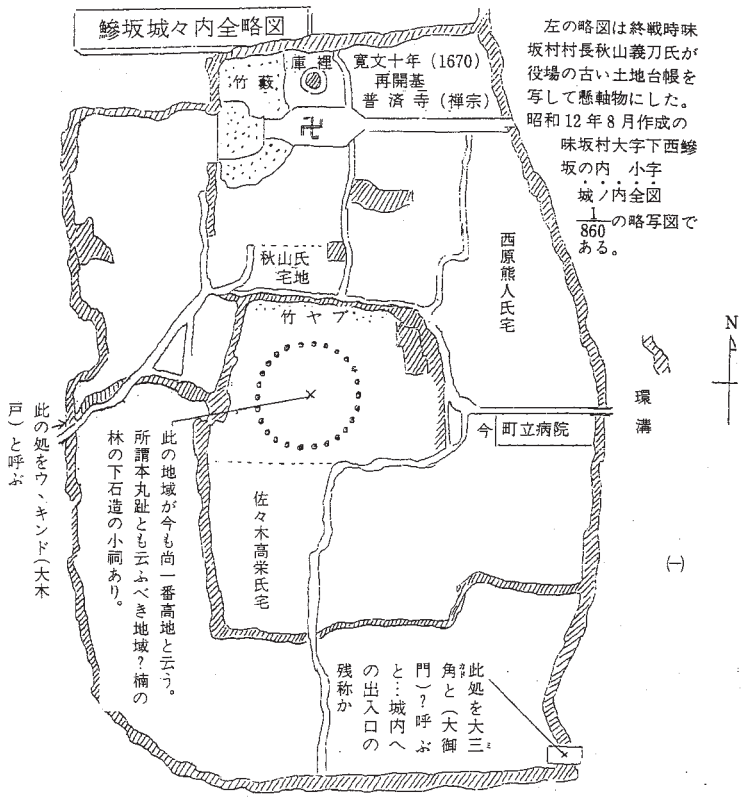
筑後 10	西鯵坂城（にしあじさかじょう）	郡名　御井郡	別称　西鯵坂館・阿地坂城	図幅名　鳥栖（西）
		種別　平地城館	所在　小郡市下西鯵坂	

【沿革】宝満川東岸、味坂の集落の南端近く、味坂小学校西側の標高約９ｍの平地上に位置する。『軍談』には「西鯵坂村城跡」として「平城也、縦六十間、横二十間、伝云、筑紫上野守ノ臣、宗宗家居之」とし、土地の人は佐々木高綱の城跡と伝えると記す。また、『筑紫氏所領城数覚書』（福岡市博物館蔵）には筑紫氏の持ち城の一つ、「阿地坂之城」として城主を宗次郎左衛門尉として千栗城（佐賀県三養基郡みやき町）の城主と同一の名が挙がっている。

【概要】字城ノ内（現在は城地区）の集落一帯が城地と伝えられ、当時の地割が現在も残されている。佐々木高綱の後裔とする旧家・佐々木高栄所蔵の図面（第７図）や昭和初期の字図などを参考にすれば、中央部に逆Ｌ字形の水路が巡り、またその外側には北側を除いた三方に水路が巡っていたことがわかる。水路の内部、すなわち現在の集落域は現在でも約１～２ｍ標高が高くなっている。また、区画の南東隅を「大三角（大御門）」、西側の出入口を「ウウキンド（大木戸）」と呼ばれていたように、城館に関連する地名もいくつか残されている。以上のように南北約300m、東西約 200m の範囲が城域と想定できよう。

【史料】あり

【参考文献】1 ～ 3,5 ～ 9,**123**,**135**



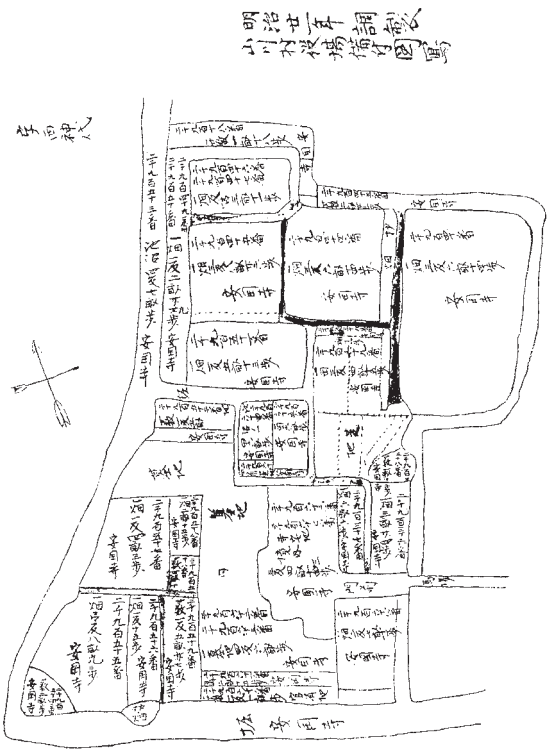
第７図　鯵坂城々内全略図（文献 123）

第８図　西鯵坂城航空写真（昭和 23 年・国土地理院撮影）

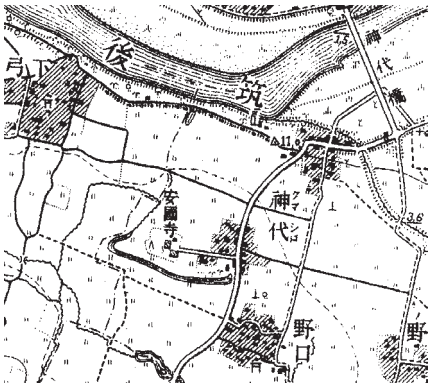
筑後 13	神代館（くましろやかた）	郡名　御井郡	別称　なし	図幅名　久留米（東 / 西）
		種別　平地城館	所在　久留米市山川町神代	

【沿革】筑後川南岸、山川町神代の安国寺のある標高約 10m の平地上に位置する。『軍談』には「白

鳳年間神代良續舘ヲ構ヘテヨリ、代々居之。永正中対馬守顕元去テ肥前ニ行ク。今ノ安國寺境内其舘蹟也」とする。また、『寛延記』には「一神代村昔は城有之候由承伝候得共、今は城跡相知不申候」とある。



第９図　西神代字図
（久留米市蔵・文献９から転載）



第 10 図　地図に表れた神代館の堀（陸地測量部発行 1/25,000 地形図「久留米」）（大正 15 年測量・福岡県立図書館提供）

第 11 図　神代館航空写真
（昭和 23 年・国土地理院撮影）
※館を含む周辺部は圃場整備されているが、堀の痕跡は明瞭に残されている。

【概要】現在、安国寺は現存しているものの、周辺は宅地開発や区画整理によりほとんど往時の姿を残していない。明治 21 年（1888）の西神代の地籍図（第９図）により安国寺境内を囲む溝や水路があることがわかる。また、大正末期の地図にも南側から西側にかけて、地籍図と同じ形状の水路があることがわかる（第 10 図）。久留米市教育委員会の遺構確認調査によって、溝や水路で囲まれた内部は二分されていることが推測され、南側が安国寺、北側が館跡と推定される。神代氏が檀那であった神代山万法寺が足利尊氏によって全国に建てられた安国寺となっており、安国寺と中世領主とのつながりを示す重要な事例と考えられる。

【史料】なし　【参考文献】1,2,5,7 ～ 9

筑後 14　鶴ヶ城（つるがじょう）

郡名　御井郡　　**別称**　舞鶴城　　**図幅名**　久留米（東）
種別　山城　　**所在**　久留米市山川町

【沿革】耳納山脈の西端に聳える高良山から北西へ延びる尾根の突端頂部に位置する。当城の西側には別の尾根になるが古宝殿城、吉見岳城などが位置する。『軍談』には「舞鶴城」と城名を掲げるのみであって、詳しい来歴等については地誌類には記載されていない。

【概要】標高 159m の尾根の突端頂部に東西約 30m ×南北約 15m の主郭を置き、その西側には同規模の曲輪をも

第 12 図　鶴ヶ城近くからの久留米市街の眺め

う一つ置いている。これらの曲輪群の東側から北側にかけて防御遺構が顕著にみられる。主郭の東側から南側の縁辺部には低土塁が巡っているように見受けられるが、曲輪面は近年まで人家があり、後世の改変の可能性も大きく、城館遺構とは断言できない。その一方で、主郭の東側の尾根続きの部分には、連続する５本の堀切が構築され、高良山側からの攻撃に厳重に備える。堀切の深さは概して４～５ｍほどだが、主郭に最も近い堀切は主郭曲輪面から約 15m もの深さを呈する。その一方で、いくつかの堀切には岩盤を掘り残して土橋としている箇所が見受けられる。また、曲輪群の北側にはＡとＢの曲輪を設け、その外側には横堀を伴う畝状空堀群が構築されており、竪堀は 20 本近くにも上る。特筆すべきは曲輪Ａと Ｂとの間の谷状となる地形を反映し、横堀が横矢を効かせるように直角に折れをなしていることである。明らかに曲輪Ａと Ｂから横堀の敵に対して側射できるような工夫と言えよう。

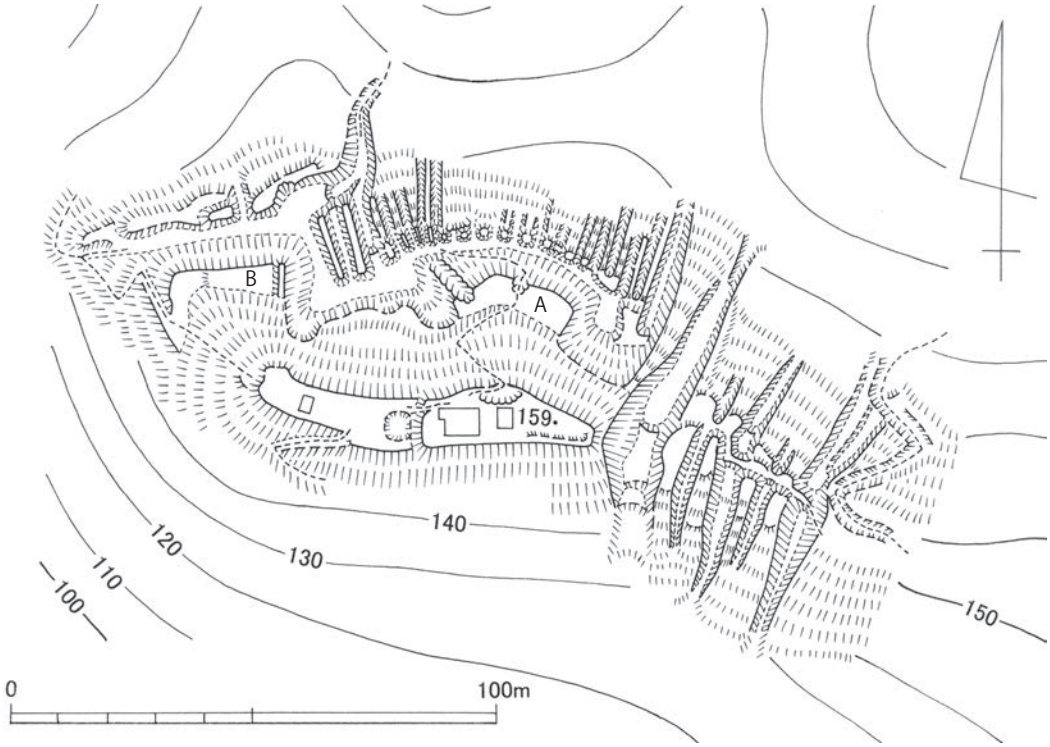
第 13 図　鶴ヶ城の堀切（上）と畝状空堀群（下）

　このように、鶴ヶ城は全長 200m にも満たず、決して大きいとは言えない城ではあるが、連続する堀切群や横堀を伴う畝状空堀群を用いた厳重な防備をなしていたことがわかる。城主は伝わっていないが、高良山周辺の城館群と密接な関係にあったと思われ、高良山座主あるいは豊後大友氏の関与が想定される。

【史料】なし

【参考文献】

1,6,7,**8**,**9**,37



第 14 図　鶴ヶ城縄張り図（事務局作成）

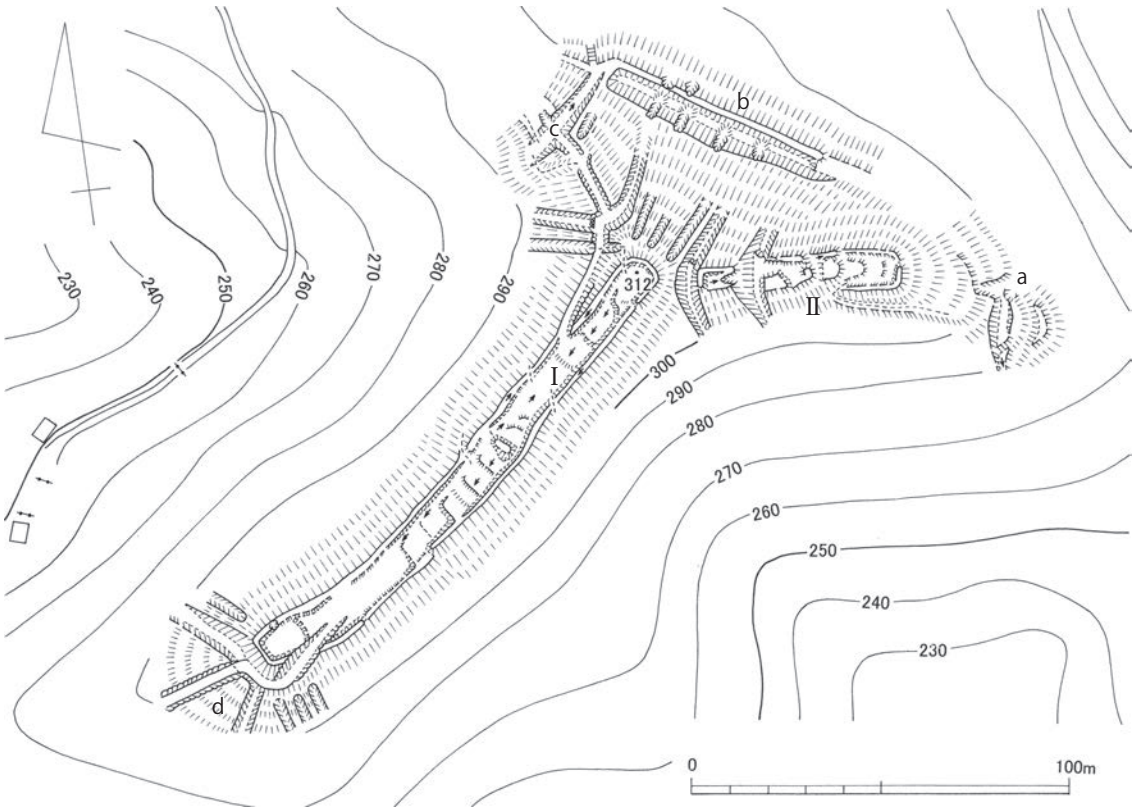
筑後 15　毘沙門岳城（びしゃもんだけじょう）

郡名　御井郡　　別称　別所城　　図幅名　久留米（東）
種別　山城　　所在　久留米市御井町

【沿革】高良大社の背後、高良山山頂（標高 312m）に位置する。『軍談』には「別所城」として「其の跡、山上に在り」と記すのみで、城主などは地誌類には確認できない。

【概要】高良山山頂部を頂点に、そこから南西方向へ緩やかに傾斜する平坦地形が約 150m 続く。一見、曲輪とも思えないが、平坦面縁辺部には明瞭に低土塁が巡らされており、平坦面が不明瞭な曲輪面であることがわかる（図中Ⅰ）。曲輪面の途中には、仕切りともつかないような土塁や、不明瞭に造成された階段状の平坦面なども確認でき、恒常的な使用というよりも、急ごしらえのような臨時的な構築を思わせる。山頂の東側と北西側には堀切を設け、北側斜面には３本の竪堀群を構築、東側の尾根上には、堀切の前後に土塁を伴うが平坦面が非常に不明瞭な曲輪を伴っていることがわかる（図中Ⅱ）。さらにその先にも堀切１本を設ける（図中 a）。また、北側斜面には竪堀群のさらに下方に、長さ約 50m にもわたって構築された直線的な横堀と土塁遺構が確認される（図中ｂ）。さらに横堀はその西側の堀切ｃとも

第 15 図　毘沙門岳城堀切（上）・横堀（下）



第 16 図　毘沙門岳城縄張り図（事務局作成）

連動しているようにも見受けられ、斜面下方から攻め上がる敵を迎撃するための塹壕のような印象を受ける一方で、斜面上方の竪堀群や堀切などとは接続しない、これも急ごしらえで改修されたかのような印象を受ける。この横堀の斜面下は現在つつじ公園となっており、城館遺構が既に消滅したかのような印象も受けるが、現状を見る限りでは旧地形をほぼ残しており、堀などの遺構はなかったものと考えられる。

一方、曲輪Ⅰの南西側にも堀切と竪堀群が構築され、斜面下からの攻撃に備える（図中ｄ）。また曲輪Ⅰの西側には自然の平坦地形が杉ノ城へ向かって続いており、文献 133 などでは曲輪として認識されている。しかしながら城郭構築としての造成が全くなされておらず、現状では城域に含めるのは困難であろう。城主等は伝わらないが、立地や防御遺構などから考えて、高良山座主あるいは天正 12 年（1584）に高良山に陣を敷いたという立花道雪らの大友方の関与が想定できるのではなかろうか。

第 17 図　毘沙門岳城遠景

【史料】あり　【参考文献】1,6,**7 ～ 9**,37,**126**,**133**

筑後 16　杉ノ城（すぎのじょう）	郡名　御井郡　　別称　住厭城　　図幅名　久留米（東） 種別　山城　　所在　久留米市御井町

【沿革】毘沙門岳城から北西方向の高良大社へ延びる尾根上に位置する。毘沙門岳城からは 200 ～ 300m しか離れておらず近接している。『軍談』には「住厭城」とのみ名を掲げるのみで、城主等の来歴は地誌類には見られない。

【概要】毘沙門岳城から北西へ延びる尾根の２ヶ所の頂部（標高 304m・294m）を中心に縄張りは展開している。城内最高所であるⅠはあまり平坦ではないが人工的に段造成がなされた平坦面群が展開し、東側の尾根上ａとｂの２ヶ所に堀切を構築する。また、ｃには曲輪の縁辺部に土塁が部分的に巡り、ｂの堀切と共に東側からの攻撃に備える。ｃの土塁は北側が道路造成の際に消滅してしまっており、どのように延びていたかは不明である。Ⅰの曲輪群の北側斜面は二段に渡って一部横堀状となった帯曲輪ｄ・ｅが巡っており、竪堀により接続している。この帯曲輪のラインは城域全体にわたって延びており、城の全体を防衛するラインであることがわかる。

第 18 図　杉ノ城堀切（上）・横堀（下）

一方、西側の頂部Ⅱ（標高 294m）は現在「鳳山」と呼ばれているが、頂部はあまり平坦に造成がなされていない。しかしその東側の曲輪ｆは平坦面が非常に明瞭に造成されている。そしてその東側、ｇは不明瞭な平坦地形であるものの、北側には土塁と横堀が巡り、横堀のさらに北側には 30 本足らずの竪堀群で構成される畝状空堀群ｈが確認でき

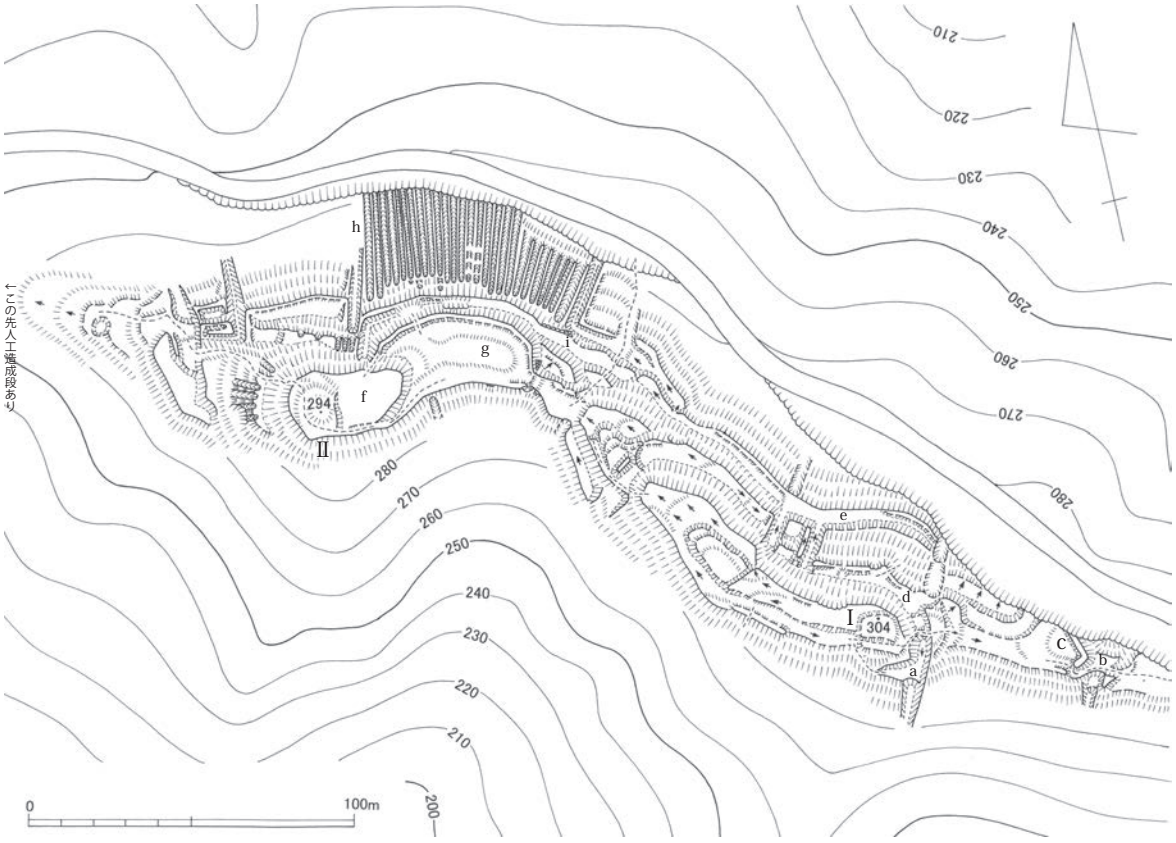
る。この竪堀群は堀と堀との間隔が約２m と非常に狭いが、直線的で非常に整然と構築されており、北側斜面の防衛強化を見ることができる。この空堀群の東側 i には石垣がいくつか確認でき、土留めなどの役割を果たしていたものと考えられる。また、Ⅱの頂部の西側にもいくつか竪堀群を確認することができ、その西方にもいくつか平坦面群を確認することができるが、およそ城域はこのあたりで収束するものと考えられる。

第 19 図　杉ノ城石垣

文献 133 では、ここから西側約 200m にわたって展開する平坦地形をも曲輪とし、高良山神籠石に沿って堀が構築されているように理解されているが、Ⅰ・Ⅱを中心とする曲輪群とは全く様相を異にしており、城域と理解するのは困難であろう。一部に人工的な造成も確認できるがそれは後世の山仕事、あるいは高良大社に関わる造作であると思われる。

このように非常に高度に発達した縄張りを駆使して防御されていることがわかるが、毘沙門岳城同様、曲輪の平坦面は非常に不明瞭で臨時的な構築の印象を強く受ける。城主は伝わらないが、高良山座主あるいは立花道雪ら大友方が筑後攻略のために高良山に敷いた陣に関わる可能性も考えられるが、詳細は今後の課題と言えよう。

【史料】なし　【参考文献】1,6,**7**,8,**9**,37,**124**,**133**



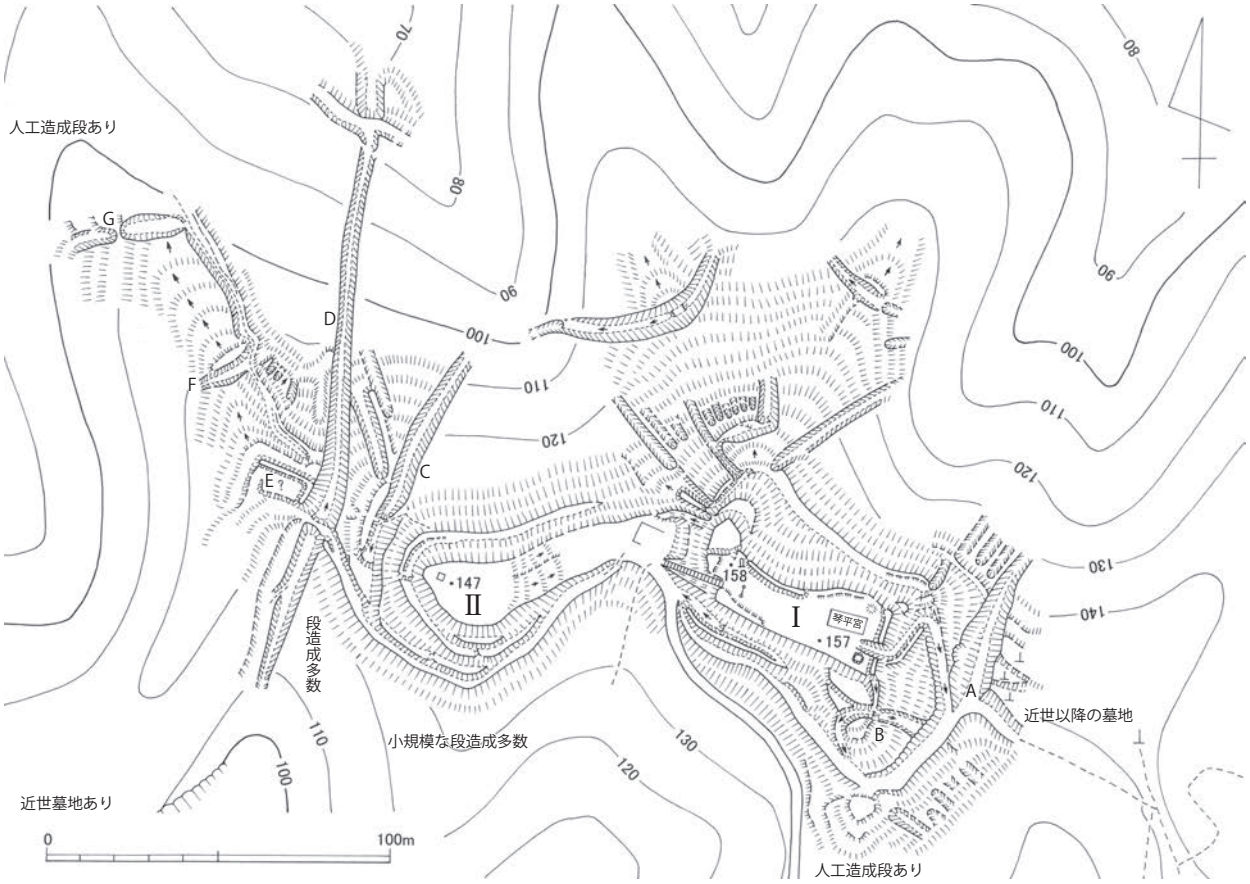
第 20 図　杉ノ城縄張り図（事務局作成）

筑後 18	吉見岳城（よしみだけじょう）	郡名　御井郡	別称　芳水嶽城	図幅名　久留米（東 / 西）
		種別　山城	所在　久留米市御井町・山川町	

【沿革】高良大社から北西側の尾根を下った標高 158 mの吉見岳山頂に位置する。『軍談』には「吉見嶽城跡」として「山城也、其始何人ノ築ク處ト云事ヲ知ズ、天文中八尋式部卿居之、天正十五年秀吉公此ニ陣ス、縦三十間、横六間、四方ニ高六尺、横六尺ノ土手アリ」として、さらに出丸、堀、二ノ丸などの存在を記す。『寛延記』にも「一古城跡　一ヶ処　吉見嶽」として上記とほぼ同様の記載がなされている。

【概要】吉見岳山頂には、現在琴平宮が祀られているが、それが吉見岳城の主郭Ⅰである。東西約 50 m、南北約 20 mで、主郭の東側と北側には土塁が巡らされている。Ⅰの東側と南側にはAとBの堀切が設けられるが、特にAは幅約 10 m、深さ約 10 m近くもある大型のものである。またⅠの北側には一部は横堀ともなる帯曲輪が巡り、そこから竪堀が構築される。畝状空堀群ともみられる竪堀群の集中も見られるが、やや不明瞭であり、城郭遺構として断定できるかは微妙である。そのさらに北東側と北西側の尾根上に堀切 1 本を設けている。

Ⅰの西側にも東西約 70 m×南北約 10～20 mの曲輪Ⅱを構築するが、その西側にも長大な堀切C・D、さらには土塁状の高まりに囲まれた平坦面Eなども見られる。そしてその北西側の尾根上に堀



第 21 図　吉見岳城縄張り図（事務局作成）

切Ｆ・Ｇを設け、城域を画す。

なお、文献 133 に掲載された図には、後世の高良大社に関わる寺院遺構を含みつつも、さらに城域が広がると認識して図化しているが、それらは全て近世墓や後世の山仕事によるものであり、現状で確認できる城域は上記の通りと考えられる。高良山周辺の山城の中では最もしっかりと構築された印象を受け、高良山座主にかかわる城、あるいは天正 15 年（1587）の豊臣秀吉の陣跡を反映している可能性も考えられよう。

【史料】あり　【参考文献】1,2,5 ～ 8,**9**,**37**,**133**

第 22 図　吉見岳城主郭の土塁（左）・堀切（右）

③三潴郡

筑後 31	海津城（かいづじょう）	郡名　三潴郡　　別称　安武古町城・古町城　図幅名　久留米西部（東） 種別　平地城館　所在　久留米市安武町大島

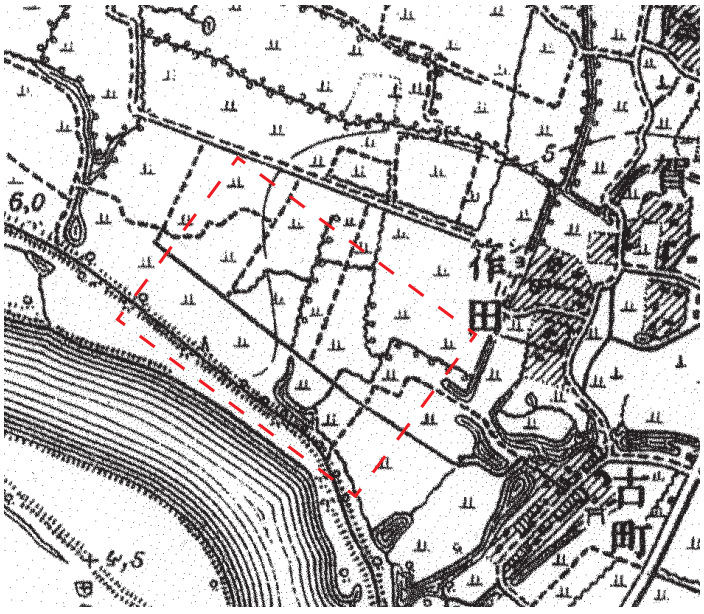
【沿革】筑後川の大きく蛇行する旧河道の左岸に面した字城山および字館の周辺に位置する。『軍談』には「安武古町海津城跡」として「本丸東西二十七間、南北二十六間」とあり、他に二ノ丸、三ノ丸の存在も示し、安武民部少輔重乗の築城で、その子安右衛門の代に龍造寺方の横岳頼次により落城させられたことや、立花氏家臣の立花三右衛門が居城し、慶長年間に廃城となったことなどが記される。

【概要】現在、城跡は、大正８年（1919）の耕地整理や、さらには昭和の大耕地整理により、それ以前の地割がわからない一面の水田となってしまっており、城跡の面影は現地に立てられた石碑による他はない。しかし圃場整備に伴う発掘調査が行われており、その調査によって、16 世紀初頭から中頃の中国製陶磁器を初めとする遺物が出土する堀が各所で発掘され、そこから字「城山」や「館」さらには周辺の字ごとに、堀で囲まれた方形区画が並立する状況が復元されている。それは、耕地整理前の大正６年測量の陸地測量部の地図に示された地割とある程度整合が取れそうな復元案であり、おおよその城の姿を知ることができる。また、城の東側には安武古町が隣接し、字図などでは、地割が短冊形に区画されており、かつての城下集落とみられる。

【史料】あり

【参考文献】1,2,5 ～ 9,20,**37**,**72**

第 23 図　海津城縄張り復元図（文献 72）



第 24 図　耕地整理前（大正６年）の海津城付近地図
（赤い枠線が上図のおよその範囲。陸地測量部大正６年測量「久留米西部」（福岡県立図書館提供）を一部改変して作成）

筑後 36 田川館（たがわやかた）

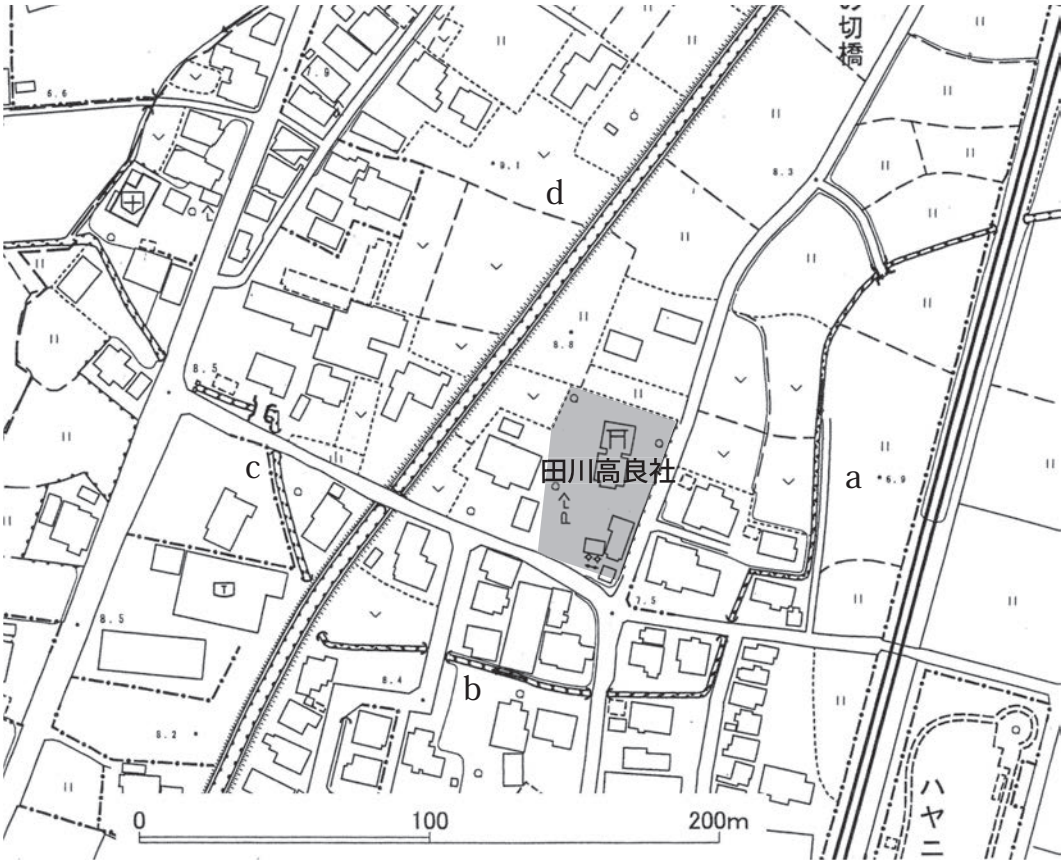
郡名　三潴郡　　別称　田川城　　図幅名　久留米西部（東）
種別　平地城館　所在　久留米市三潴町田川

【沿革】高良玉垂宮で有名な大善寺町の南、三潴町田川の集落内に位置する。『軍談』には「田川村舘跡」として「村中今ノ高良社ノ地則田川氏代々ノ舘舎也」とある。また、『三潴町史』（文献 31）に、城域については東側と南側に溝が残り、神社の北側については、耕地整理の際の地下げの時に幅三間の東西方向に褐色土がみられ、田川城の堀跡だったのではないかという言い伝えが載せられている。

第 25 図　田川高良社
（周囲より一段高くなっている）

【概要】現在、城の中心は田川高良宮となっており、神社境内地の北、東、南は２ｍほど低くなっている。また、その外側にも、図中ａ～ｃと、神社を矩形に迂回するように水路が巡っており、城の外郭の名残の可能性がある。城の北側については不分明な状況ではあるが、東西の幅から、外郭の一辺が約 150 ～ 200m となり、そうなると北側は図中ｄ付近の東西方向の境界線が目安となるかもしれない。また、田川高良社部分が一辺約 50m 程度の城の中心区画になる可能性も考えられるが、確証はなく、今後の調査でより明らかにするほかないであろう。

【史料】なし　【参考文献】1,2,5 ～ 9,20,31

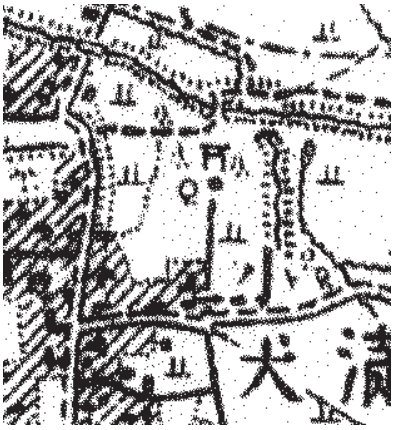


第 26 図　田川城周辺現況図（久留米市提供図を一部改変して事務局作成）

筑後 37　犬塚城（いぬづかじょう）

郡名　三潴郡　　別称　なし　　図幅名　久留米西部（東）
種別　平地城館　所在　久留米市三潴町玉満

【沿革】田川館の西、玉満の小犬塚天満宮境内一帯に位置する。『軍談』などの近世の地誌類には記載されていない城だが、『新考三潴郡誌』(文献 20)には「犬塚の城跡」として、原口天満宮（小犬塚天満宮）境内は犬塚氏の城跡で、神社の周囲に堀があり、これを「陣堀」といい、左右に高地があり、里人は櫓の跡というと記している。また、『三潴町文化財探訪』(文献 112) には享保 13 年 (1728) に書かれた「小犬塚天満宮縁起」に「陣屋鋪ト号ス。即チ古城境内」とあり、これが最古の記載の可能性がある。



第 27 図　大正 6 年当時の犬塚城周辺地図（陸地測量部測量 1/25,000 地形図「久留米西部」（福岡県立図書館提供））

第 28 図　水路土居（左）と犬塚城「陣堀」

【概要】現在、天満宮の東側には南北に直線的に延びる土塁状の高まりと溝状の窪みが見られ、この窪みが「陣堀」とされている。しかし土塁状の高まりの上には後世の水路土居があり、『三潴町文化財探訪』（文献 112）には水路土居構築以前にも土塁状の高まりがあったとするが、大正 6 年の地図にも既に水路土居とその東側に「陣堀」を流れる水路の表記があり（第 27 図）、土居遺構が城に伴うものかは断定が難しい。それ以外にも殿山、人切などという地名が残るとする。また、櫓跡については、社殿の北東側に高さ 1 mにも満たない低い高まりがあり、それを櫓跡としているが、あまりに削平されすぎており、城郭遺構か否かの判断が

第 29 図　犬塚城周辺図（久留米市提供図を一部改変して事務局作成。図は現在の地割を示し、網掛部は推定城域を示す。）

つかない。現在の地籍を見ると、水路土居に沿った東側に陣堀の水路があり、それを辿ると一辺約150mの方形区画が想定できるが、確実な城域とするには判断材料が乏しい。城地として問題はないが、詳細な構造や範囲は現状では不明と言わざるを得ない。

なお、文献112には、犬塚城の絵図を佐賀県三養基郡三根町（現・みやき町）向島の犬塚氏が所蔵するとの記載があり、今回、その絵図の画像を確認したが、近世城館のような馬出などが描かれており、実際の城の姿とは異なっている可能性が高い。

【史料】あり　【参考文献】2,5 ～ 7,**8**,9,20,31,112

筑後44　生津城（なまづじょう）	郡名　三潴郡	別称　なし	図幅名　羽犬塚（東）
	種別　平地城館	所在　久留米市三潴町生津	

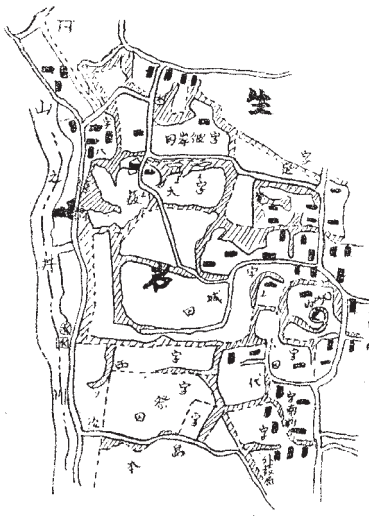
【沿革】筑後川支流、山ノ井川の東岸に接する生津集落内の字城田を中心として位置する。『軍談』には「本丸東西七十三間、南北六十二間、西堀口廣三間、中ノ堀口廣二間、右堀及二三ノ丸、今ハ田畠民居トナル」とあり、西牟田城が堅固ではないので、天正7年（1579）に西牟田家周が新たに築城したが、同11年に落城したことを記す。また、『新考三潴郡誌』（文献20）には三谷有信氏の調査報告書を引用し、「堀切五重を廻らせ、五重目の堀の傍を築地とよび以前は土居があつた」とする。また外郭の外を大泥池（おおたんぼ）といい低湿の地であると記し、第30図の図を示す。

【概要】現在、城があった場所は耕地整理や圃場整備でかつての様相とは様変わりしているため、過去のデータを元に城の構造を推測する。第30図や戦後すぐの航空写真(第31図)を参考に考えると、字城田を中心に方形のクリークが二重ほど廻り、さらにその外周についても複雑にクリークが入り組んでいる様子がわかる。字城田の二重に巡る方形のクリークは南東隅が直角に屈曲しており、断定はできないが、城の水堀などの方形区画を反映している可能性も十分考えられる。そのように考えると、一辺約150m四方、その外側に一辺約200 ～ 250mの方形区画を持つ平地城館であったことも推察できるが、いずれにせよ確実なことは今後の調査に委ねざるを得ない。

【史料】なし

【参考文献】

1,2,5 ～ 9,20,31



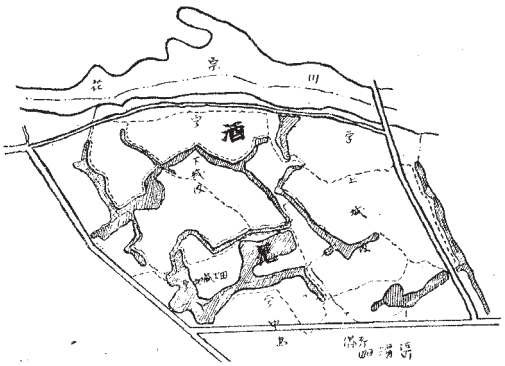
第30図　生津城跡図（文献20）

第31図　昭和23年の生津城周辺航空写真
（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

筑後 58 酒見城（さけみじょう）	郡名　三潴郡	別称　なし	図幅名　羽犬塚（西）
	種別　平地城館	所在　大川市酒見	

【沿革】筑後川支流の花宗川左岸、大川風浪宮の西側の平地上に位置する。『軍談』では『陰徳記』を引き、天正 8 年（1580）に龍造寺隆信が築城し、鍋島信生に守らせたことなどを記す。『旧柳川藩志』（文献 22）には「天正 15 年（1587）立花家の老臣由布美作をして城番となし以て肥前の防城とす」とある。

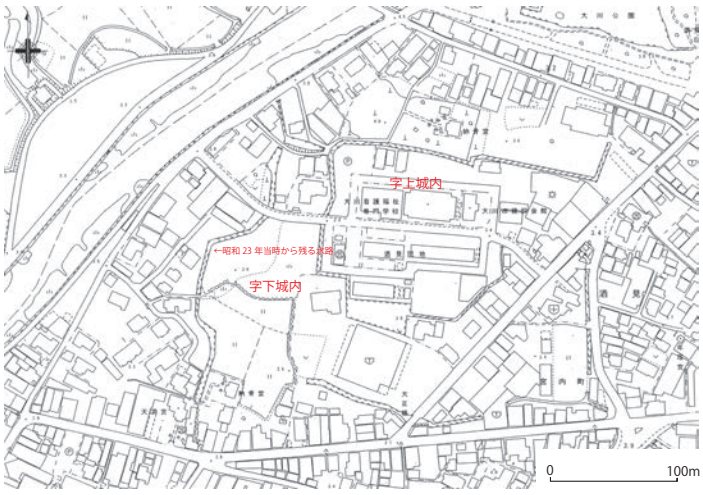
【概要】『新考三潴郡誌』（文献 20）には大川町役場調査の所見として、「大川町大字酒見字上城内、下城内にあり、面積四町五反二畝六歩（上城内二町一反六畝一歩、下城内二町三反六畝五歩）あり、城内三反歩の高地（水田より約五尺高い）より目下共同墓地となつている。石垣、記念木などはない」として第 32 図を示している。それを見ると、上記にあるように上城内と下城内を途切れながらも、それぞれ一辺約 100m の方形に巡る水路があり、それがかつての城の堀の名残である可能性も考えられる。また、米軍撮影の航空写真を見ても（第 33 図）、ほぼ同様の水路があることがわかる。現在も下城内の西側の水路など、一部水路がそ



第 32 図　酒見城跡図（文献 20）

第 33 図　昭和 23 年の酒見城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

第 34 図　明治 21 年頃の酒見城周辺字図（『筑後国三潴郡酒見村ノ図』（部分・大川市教育委員会蔵・柳川古文書館保管））



第 35 図　現在の酒見城周辺地形図（大川市教育委員会提供図を一部改変して作成）

のままに残存しており、そこから類推すると上城内の南半部が、現在の大川看護福祉専門学校の敷地に、北半部が墓地、下城内は水田であることがわかる。このように酒見城は水堀で囲まれた二つの方形区画を持つ縄張りが想定される一方で、明治 21 年頃と想定される酒見村の字図を見ると（第 34 図）、字の名称や範囲はもとより、詳細な図とはいえ昭和 20 年代の水路と照合することが困難なくらい異なっており、果たして昭和 20 年代の水路配置が酒見城の城館遺構を反映したものかどうかの確証は断言できない状況と言えよう。

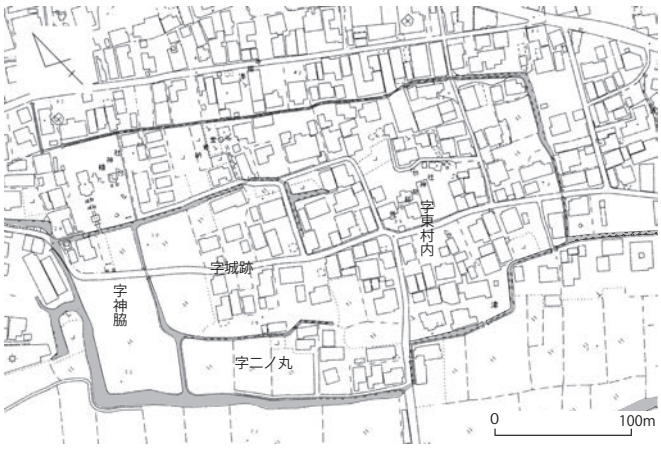
【史料】あり　【参考文献】1,2,5 ～ 9,20,22,28

筑後 59　津村城（つむらじょう）	郡名　三潴郡	別称　なし	図幅名　羽犬塚（西）
	種別　平地城館	所在　大川市津	

【沿革】筑後川支流の花宗川に面した榎津町の東に位置する津村の集落に位置する平地城館である。『軍談』では「津村城跡」として天正年間に藤原秀郷の後裔・津村大輔が守り、子孫は北大野島の庄屋になったことなどが記され、さらに田中吉政の時代には榎津加賀右衛門が守備したとするが、これについては榎津城（筑後 K5）のことを指しているものと思われる。さらに『新考三潴郡誌』（文献 20）では川口村字津村にあるとするが、城跡ははっきりしないとしている。『大川市誌』（文献 28）では川口地区字城跡にあったとして、城跡の区画を提示している。

第 36 図　昭和 23 年当時の津村城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

【概要】文献 28 に従い、城跡の概要を記すと津村の集落の西側、八幡社の南東側に字城跡、さらにその南側に字二ノ丸が所在、字城跡は一辺約 100m、字二ノ丸は南北約 50m、東西約 150m の方形の水路に囲まれ、城の水堀の痕跡をとどめている可能性がある。その外側にも併行して水路が取り巻く。昭和 23 年（1948）の航空写真や現在の地形図にもそれらの水路の区画は明瞭に残されている（第 36・37 図）。もちろん断定はできないが、これらの水路が中世の城跡の区画を示すものであれば、現在もその区画が明瞭に残る貴重な事例と言えよう。



第 37 図　津村城周辺地形図（大川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成。網掛部は水路）

【史料】あり　【参考文献】1,2,6 ～ 9,20,22,28

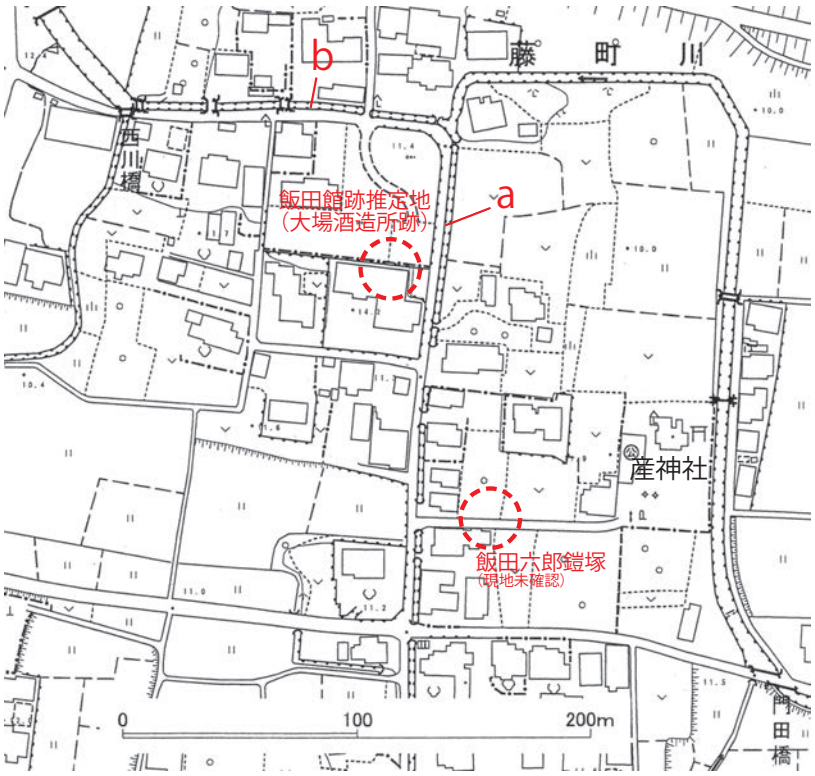
④山本郡

筑後 64 飯田館（いいだやかた）	郡名　山本郡	別称　なし	図幅名　久留米（東）
	種別　平地城館	所在　久留米市善導寺町飯田	

【沿革】筑後川と支流の巨瀬川が合流する地点の南岸、善導寺町の飯田集落に位置する。『軍談』では「飯田村舘跡」として『寛延記』を引き、「村中ニアリ、飯田六郎永信ノ舘跡也」とする。『善導寺町誌』（文献 25）には「飯田館跡については史料がない為判然としないが地形や小字名等から推定して現大場酒造場一帯の地が想像される」とする。

第 38 図　飯田館推定地東側の水路 a と道路

【概要】上記記載の大場酒造場跡が館跡地として県の分布地図（文献 138）に示されており、飯田の産神社西側約 100m 地点とされている。また、その近くには館主・飯田六郎の鎧塚も県の分布地図に掲載されている（現地では確認できず）。これらの推定地一帯は、大正時代の地図や米軍の航空写真で確認しても、ほとんど地割は変化していないようであり、館の時代の区画を反映している可能性がある。そのように考えると、館推定地のすぐ東側には南北方向に水路 a を伴った道路があり、館推定地の北側で、水路と共に西側に直角に屈曲している（図中 b）。自然に発生した水路としては不自然であり、館の方形区画の北東隅部を反映している可能性も考えられ、一辺 100m 程度の方形区画を想定できそうである。また、東側にも藤町川が不自然に直角に屈曲しており、いくつかの方形区画が並列していた可能性も考えられるが、断定することはできない。ただ、いずれにせよ、伝承等からこの地に館が位置していたことは非常に可能性が高いであろう。



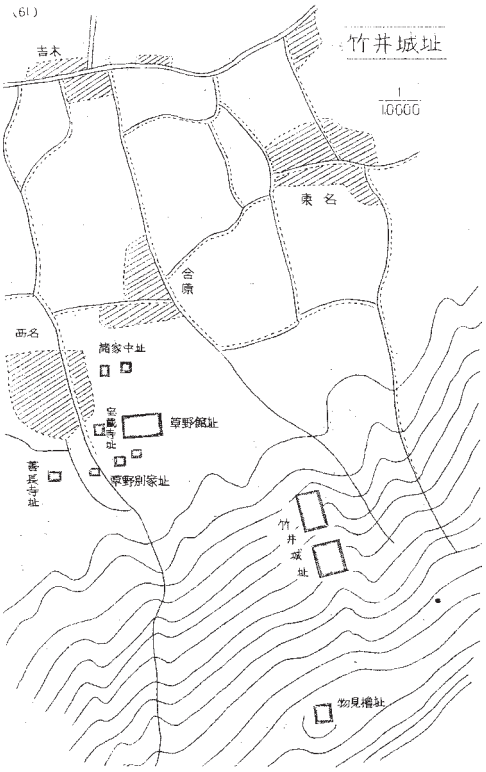
第 39 図　飯田館周辺地形図（久留米市提供図を一部改変して事務局作成）

【史料】あり　【参考文献】2,5,7 ～ 9,25

筑後 67　竹井城（たけいじょう）

郡名　山本郡　　別称　武井城･竹之城　　図幅名　草野(西)
種別　丘城・山城　所在　久留米市草野町吉木

【沿革】草野町吉木の若宮八幡宮の背後の丘陵上に位置する。『寛延記』には「一武井城　右同断（申伝なし）」とするが、『軍談』には「竹之城跡」として「耳納山中ニアリ、東面也、東西四十間、南北五十間、草野氏代々ノ居城也」とする。昭和 10 年（1935）に発刊された『三井郡郷土読本』（文献 17）には「竹井城址」として「草野町吉木八幡宮側の小路を辿ると竹井城址がある。西に突き出た山頂に物見櫓があったといふ。草野氏の居城である」とある。また、後に草野氏は発心岳山頂に発心城を築き、そちらに移ったとされている。



第 40 図　文献 24 に書かれた竹井城と物見櫓

【概要】上記のように、竹井城には本城部の他に「物見櫓」とされる場所があることがわかるが、昭和 33 年に三井郡社会科同好会から発刊された『郷土資料集』（文献 24）には竹井城と物見櫓の場所が記された地図が載せられている（第 40 図）。実際、この図の通り、それぞれに城跡が残されている。以下、本城部と物見櫓に分けて構造を説明する。

＜本城部＞尾根の頂部の標高 171m に「竹井城址」の石碑が見られるが、そこに南北約 30m ×東西約 15m の主郭を置く。主郭は東側に土塁を設け、南側に深さ約 6 m の堀切 1 本を設け、尾根上側からの攻撃に備える。また、主郭の西側には腰曲輪を巡らせ、斜面下方向に堀切と並行して竪堀 12 本からなる畝状空堀群を構築する。竪堀は真ん中の一番大きな竪堀を挟んで大きさが変化している。そして主郭の北西側には階段状に曲輪が並び、その一番西側に深さ約 8 m の堀切 1 本を構築する。以上のように、竹井城の本城部は全長約 100m 程度の城域である。

＜物見櫓＞竹井城の本城部から尾根を南へ上った標高 371 mの頂部には「物見櫓」と称する曲輪群が残されている。標高 371m の尾根上頂部には、あまり広い曲輪面はなく、盗掘坑のような窪みなども見られるが、基本的には小曲輪群が階段状に展開する。そして、その北側の I がここの主要な曲輪と見られ、南北約 40 m ×東西約 15 m で、さらにその北側にも階段状に曲

第 41 図　竹井城本城部主郭

第 42 図　竹井城本城部堀切

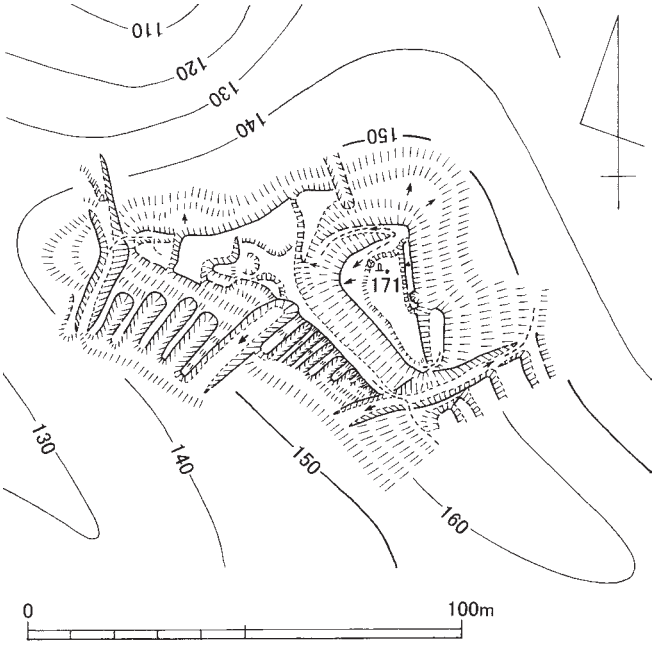
輪群がいくつか展開している。一方、曲輪群の南側は、一部道路で破壊されているものの、堀切２本が構築される。幅約 10 m近くにもなる大型の堀切である。

　このように物見櫓とは言われているもののそのような単純な構造ではなく、竹井城の本城部とほぼ同規模を呈しており、同程度の曲輪群が同一の尾根上に２ヶ所並立しているような構造と言えよう。

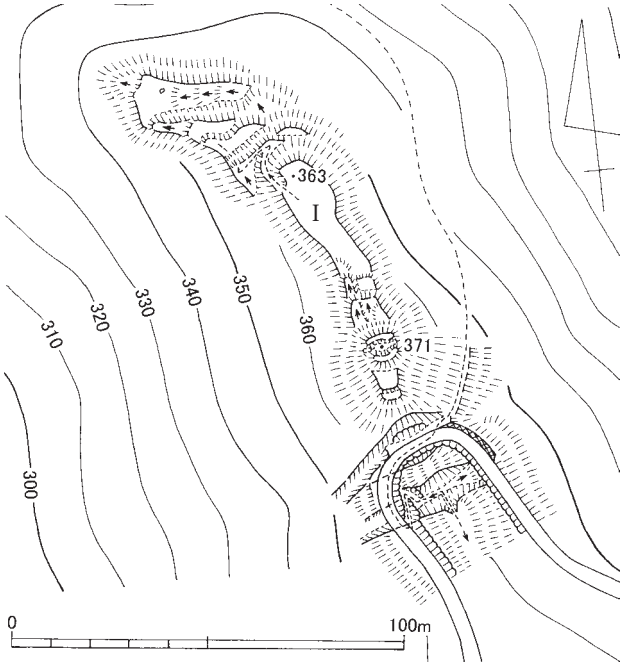
【史料】あり

【参考文献】1 ～ 7,**8**,**9**,17,24,37,**122**

第 43 図　竹井城「物見櫓」の堀切



第 44 図　竹井城縄張り図（事務局作成）



第 45 図　竹井城「物見櫓」縄張り図（事務局作成）

筑後 69　発心城（ほっしんじょう）

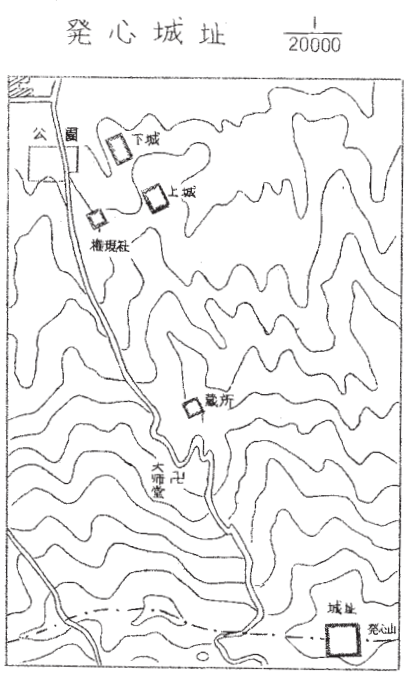
郡名　山本郡 / 竹野郡 / 上妻郡　別称　発心岳城　図幅名　草野（西）　種別　山城
所在　久留米市草野町草野・田主丸町中尾、八女市上陽町上横山・上陽町下横山

【沿革】耳納山系西側でひときわ高く聳える発心山山頂に位置する。『軍談』には「耳納山中ニアリ、東西百三十間、南北百間」とあり、大友宗麟が天正６年（1578）の日向遠征で敗北した後、草野右衛門督鎮永が大友方を離反し、龍造寺方に属した際､竹之城（竹井城）から新たに築城し、大友、秋月、高良山座主良寛らが攻めても落城しなかったことや、天正 15 年に草野鎮永が豊臣秀吉に謀殺されたことなどが記される。

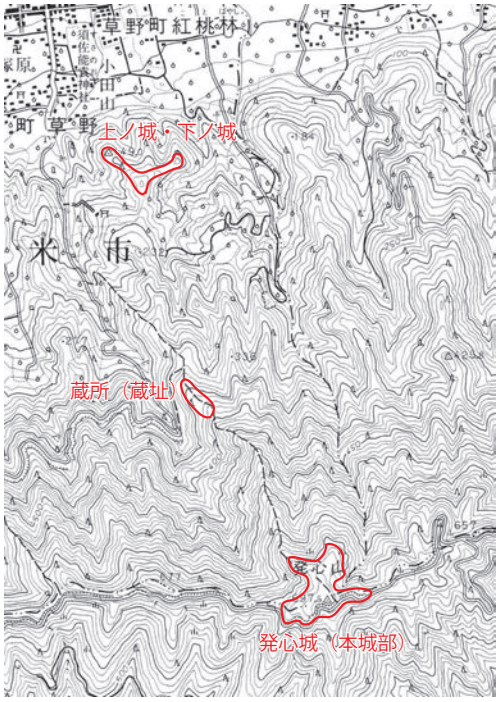
【概要】発心城は、山頂部に本城（いわゆる発心城）が

第 46 図　発心城遠景

あるが、昭和33年（1958）に発刊された『郷土資料集』（文献24）には発心岳山頂を「城址」とし、そこから草野町へ下りる尾根沿いに、「蔵所」や「上城」「下城」の存在を記している（第47図）。また実際に現地にも城館遺構が残されている（第48図）。これらを別々の城と扱うことも可能ではあるが、発心城の出城として、一括してここで説明することとしたい。



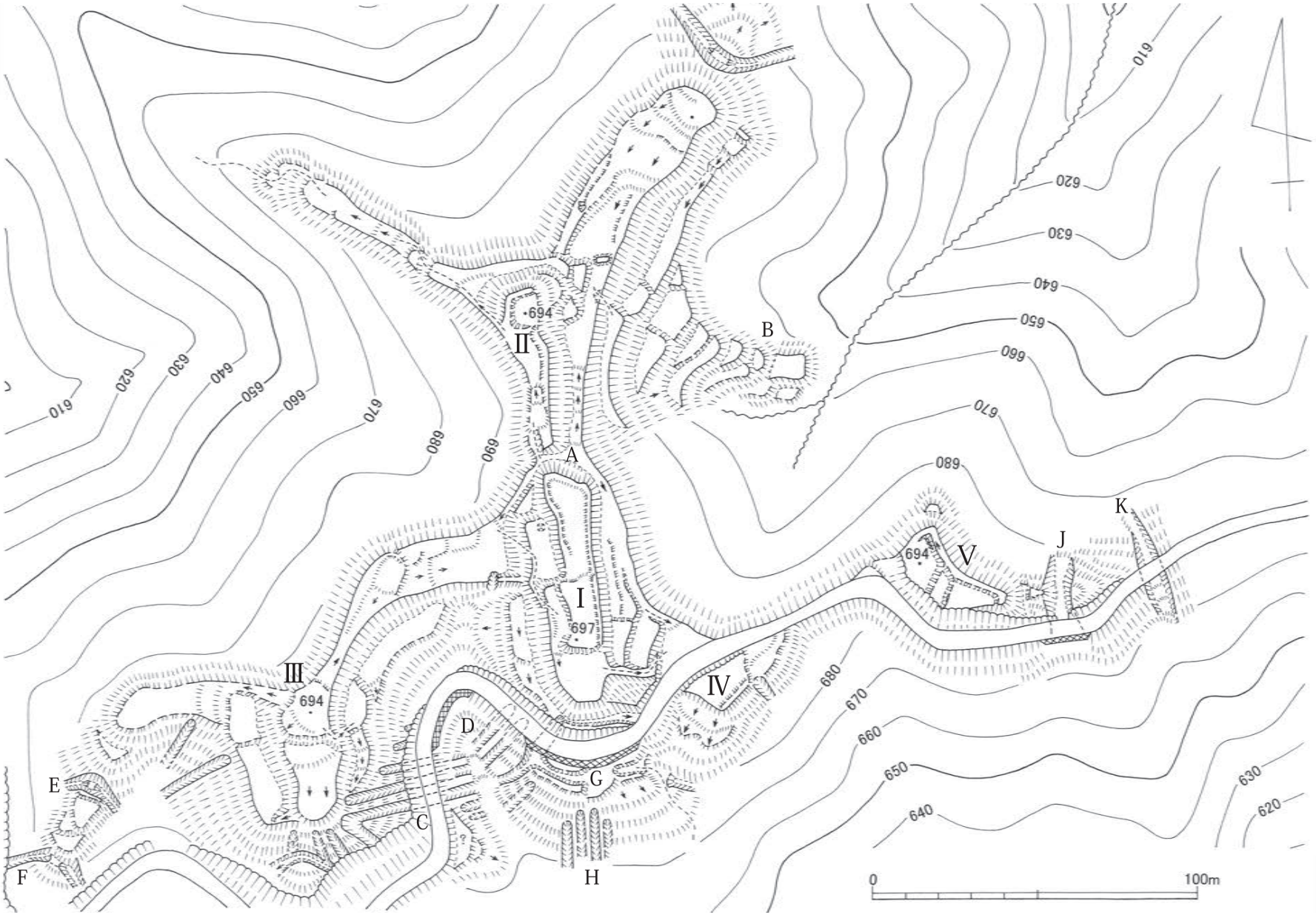
第47図　文献24に描かれた発心城



第48図　発心城・周辺城館位置図
（国土地理院発行 1/25,000 地形図「草野」を一部改変して事務局作成）

＜本城部＞発心山山頂に位置するいわゆる発心城本体である。標高697mの山頂部に南北約50m、東西約10mの規模で周囲に低土塁を巡らす主郭部Ⅰを置き、周囲に階段状に帯曲輪を巡らす。北側については、堀切状となっている（図中A）。主郭周囲は北側と西側にほぼ同高度の尾根が続いており、一見自然地形のような平坦地形が続いているように見られるが、人工的な造成がなされており、一応曲輪とみなすことができる。Ⅰの北側はⅡの曲輪を中心に尾根上に曲輪が展開しているが、造成はあまり明瞭にはなされない。ただ、東側の谷に続く所には階段状に並列する小曲輪群Bが見られ、その先の自然湧水へとつながっている。水の手の確保のための造作とみられる。Ⅱから北東側から延びる尾根先には堀切が1本設けられているが、Ⅱの北西側の尾根は若干の平坦加工がなされた曲輪の先は自然地形の斜面となっている。こちらの尾根は草野町から「蔵所」を通り、発心山山頂へとたどり着く主要登城路と考えられているために堀切などの防御遺構はないものと考えられる。一方、Ⅰの西側は同高度の尾根先にある標高694m地点にやや広めの曲輪Ⅲを置き、周囲に放射状に小曲輪が展開する。そしてその南側斜面には、一部林道で切られているものの、堀切1本と竪堀約8本からなる畝状空堀群Cが構築されている。

第49図　発心城（本城部）からの眺め（上）・本城部曲輪Ⅰ（下）

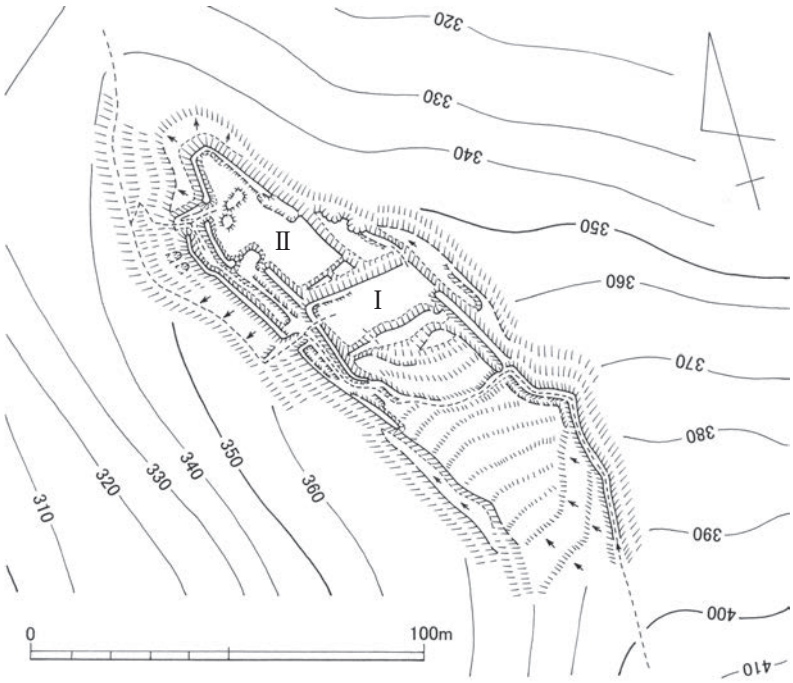


第 50 図　発心城（本城部）縄張り図（事務局作成）

この空堀群はⅠの南西斜面に残された竪堀群Dと連動し、南側の谷からの侵入を厳重に防ぐ。Ⅲの西側は自然の尾根地形が続き、その先に堀切E・Fの２本を構築し、城域を画す。また、Ⅰの南側については、林道開削のため、縄張りを読み込むことが非常に困難になっているが、横堀Gが巡り、その南側にも竪堀群Hが確認できる。Ⅰの東側には林道で切られ、一段高くなった曲輪Ⅳがあり、一部には土塁状の高まりも確認できるが、その東側は尾根の鞍部となる。ここにかつて堀切があったか否かについては林道建設時の埋め立てによりよくわからない。しかし、その東側には曲輪Ⅴがあり、土塁状の高まりも確認でき、そのさらに東側Jには堀切２本、さらにやや離れた箇所Kに堀切１本を構築し、東側の城域を画している。以上のように、発心城本城部は南北約250m、東西約400mにも及ぶかなり規模の大きい城で、畝状空堀群など、厳重な防備を確認することができるものの、曲輪一つ一つの造作は荒く、急ごしらえのような印象を受ける縄張りでもあるが、筑後北部有数の国人領主・草野氏の本城として十分の規模を備えた城と言えよう。

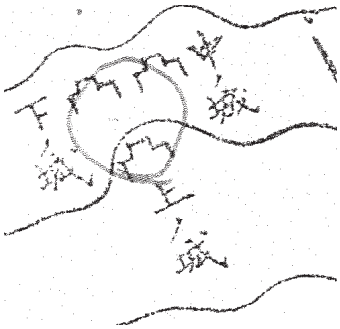
第51図　「蔵所」の土塁遺構

＜蔵所＞発心山頂の城跡から草野町へと降りる尾根道沿い、標高約350 m地点には蔵所（現在は蔵址と呼ばれる）という城館遺構が残されている。昭和10年（1935）に発刊された『三井郡郷土読本』（文献17）の「発心城址」の一節には「地蔵鼻・蔵所址等の地に立って、其の昔をしのぶと、感慨深いものがある」とあり、現在「蔵址」と呼ばれる所がそれにあたる（地蔵鼻は場所不明）。縄張り構造は、Ⅰ・Ⅱの２面の曲輪が階段状に並列し、その東西の斜面側には土塁や横堀状の遺構が巡っている。曲輪の形状は直線的な矩形を呈し、Ⅱの曲輪の土塁の途切れ目には虎口と考えられる遺構や土塁で囲まれた横矢のような矩形の折れも存在する。南北尾根線方向は堀切など通行を遮断するような防御遺構は見られない。「蔵」という機能は現状では断定するのは難しいが、明確な城館遺構であることは疑いなく、草野町の麓と山頂の発心城との繋ぎとなった機能を彷彿とさせる。



第52図　「蔵所」縄張り図（事務局作成）

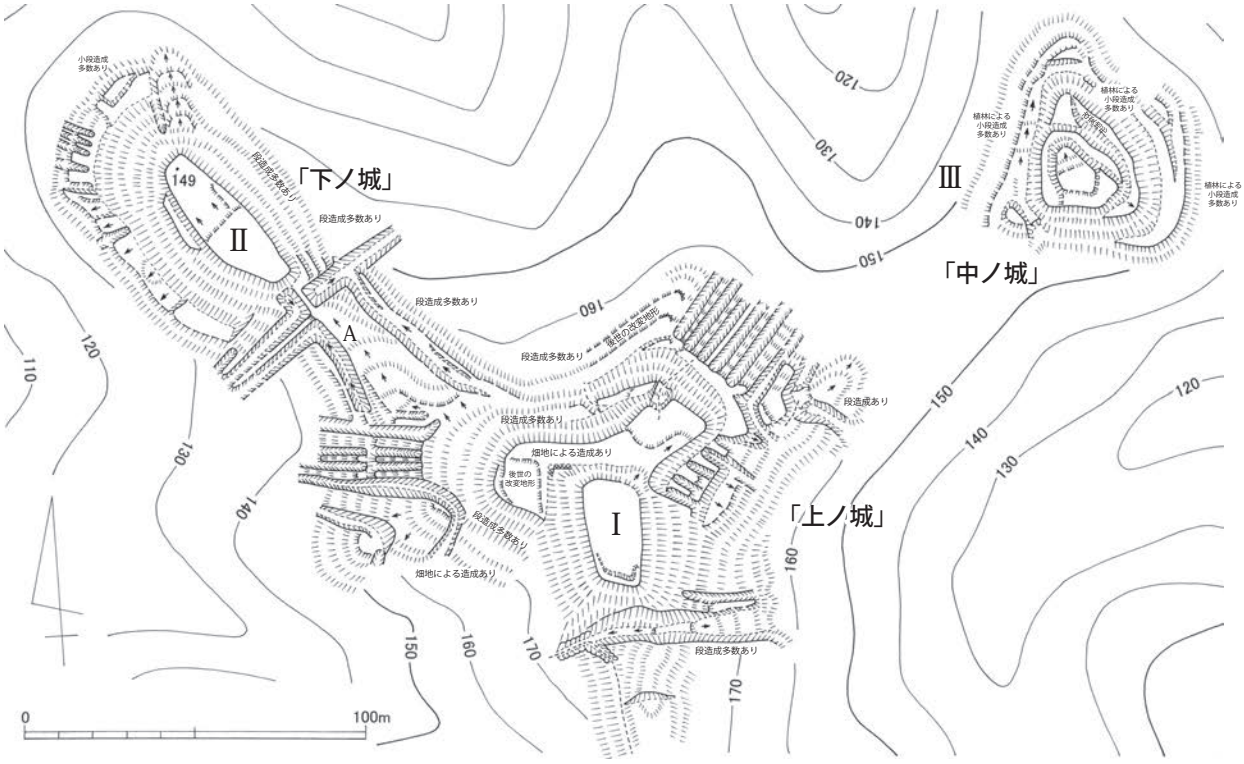
なお、文献 122 には、この「蔵所」のさらに尾根を下った箇所に、「繋ぎの城」が想定されている。現地を確認したものの、自然地形があるのみで、明確な城館遺構は確認できず、不明と言わざるを得ない。



第 53 図　文献 119 に記された「上・中・下ノ城」

＜上・中・下ノ城＞発心公園近くの標高約 190m の尾根先端の頂部に曲輪群Ⅰを置き、そこから北西方向にあたる尾根先端部の標高 149m 地点に曲輪群Ⅱ、Ⅰの北東側の標高約 160m 地点に曲輪群Ⅲがある。これらの名称については、文献 24 ではⅠを「上ノ城」、Ⅱを「下ノ城」としてⅢは特に城跡の表記や名称などは示していない。また、文献 122 ではⅢはⅡと同様に「下ノ城」とする。一方、昭和 28 年（1953）に発行された「浮羽の古城址」（文献 119）に付された「福岡縣浮羽郡内古城分布図」（第 1 図）の中では、Ⅲを「中ノ城」と記している（第 53 図）。確かにⅢの方がⅡよりも標高が高い個所にあるため、仮称ではあるが、ここでは文献 119 の表記に従い「上・中・下ノ城」と呼称する。

曲輪群Ⅰ（上ノ城）は南北約 30m、東西約 15m の主郭ともよべる曲輪を置き、南側には土塁と深さ 10m にも及ぶ大きな堀切 1 本を設ける。曲輪の北側には北東側と北西側に二股に分かれるように曲輪を配する。そして北東側斜面は堀切 2 本とそれに並行する 10 本の竪堀からなる畝状空堀群を構築している。Ⅰから北東へ 100m ほど尾根上を進むと、曲輪群Ⅲ（中ノ城）へたどり着く。一辺 10m 四方ほどの曲輪を最高所に置き、帯状に曲輪を巡らせる構造である。Ⅰへの方向に当たる南西側には深さ 5 m の堀切 1 本、さらに北側の尾根上にも深さ 4 m の堀切 1 本を設けて備えとする。北東側斜面は後世の植林に伴う小規模な段造成が多数あり、往時の様子は知れない。



第 54 図　「上ノ城」・「中ノ城」・「下ノ城」縄張り図（事務局作成）

一方、曲輪群Ⅰの西側斜面には堀切２本と竪堀４本で厳重に斜面を固める一方で、北西側には自然傾斜の尾根地形が続いており、約 100m 先には曲輪群Ⅱ（下ノ城）が置かれている。約 50m × 15m の曲輪を中心にその周りには帯曲輪と所々に竪堀群を確認することができる。

また、特筆すべきは、ⅠとⅡとの間のＡは一見自然地形に見えるが、その左右両側の斜面には、横堀、あるいは帯曲輪が構築され、さらにはⅠとⅡ、それぞれの曲輪群に近い所には竪堀群や堀切などが数多く構築されている。ⅠとⅡを密接につなぐために自然地形であるＡの空間にこのような造作がなされたものと考えられる。

以上のように、この城郭群は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲそれぞれが独立した位置にありつつも、ⅠとⅡについては横堀などによって、密接につなごうという意識が働いた非常に高度な縄張り構造であり、発心城の麓側の拠点城郭としても十分想定できる構造であると言えよう。

以上のように、発心城は山頂の発心城（本城部）の他、山麓への尾根の途中には「蔵所」、さらに麓には「上・中・下ノ城」を構築､さらに旧来より存在した竹井城（本城部･「物見櫓」）が西側の麓にあることから、城主の草野氏は、本拠の草野町から発心山山頂にかけ、城塞化することで本拠地を防衛していたことがわかる。

【史料】あり

【参考文献】1 ～ 6,**7 ～ 9**,17,24,30,37,119,**122**,**124**

第 55 図　「上ノ城」曲輪面（上）・堀切（中）と「下ノ城」堀切（下）

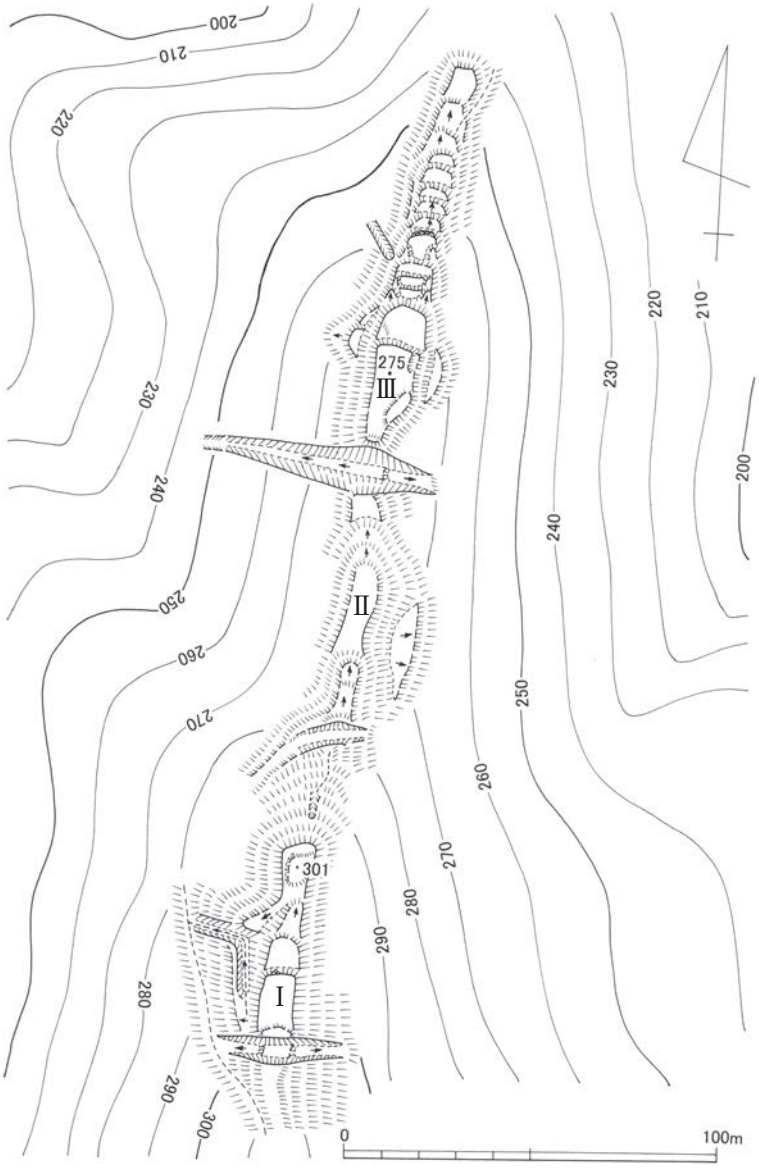
⑤竹野郡

筑後 81	西葛尾城（にしかずらおじょう）	郡名　竹野郡	別称　西葛生城	図幅名　草野（西）
		種別　山城	所在　久留米市田主丸町益生田	

【沿革】田主丸から八女市上陽町へ抜ける神掛峠を通る県道 70 号線が通る谷筋の西側約 200 mの標高 301 mの尾根上に位置する。当城の初出は昭和 12 年（1937）に出された文献 117 であり、その時は「西葛生城」であったが、昭和 28 年の文献 119 では、「西葛生城」と「西葛尾城（仮称）」と併記され、現在は「西葛尾城」が一般的となっている。

【概要】曲輪構成は堀切を挟んで大きくⅠ～Ⅲの３つに分かれる。標高 301m の尾根上に曲輪群Ⅰが置かれる。Ⅰでは一辺約 10 ～ 20m 規模の曲輪をおよそ４つ階段状に連ね、南側の尾根上には、幅約７m、深さ約４m の堀切１本を設ける。ここから南側には城郭遺構は確認できない。そして、西側の斜面には横堀から直角に折れた竪堀が構築される。Ⅰの北端部の曲輪から北へ 25m ほど離

第 56 図　西葛尾城堀切（上・中）・石垣状遺構（下）



第 57 図　西葛尾城縄張り図（事務局作成）

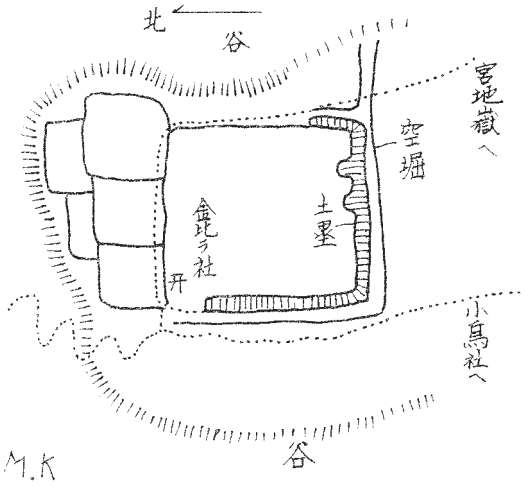
れた場所に深さ約２ｍの堀切１本を構築し、そこから北側に曲輪群Ⅱが展開する。Ⅱは尾根上に３面曲輪が展開し、その東側斜面上にも一ヶ所曲輪が見られ、そこには中世のものとみられる土師器片も散布している。Ⅱの各曲輪面はあまり明瞭に平坦化されていない。Ⅱの北側には幅約 12m、深さ約８m、全長約 60m 近くもある堀切が掘られ、その北側に曲輪群Ⅲが展開する。Ⅲの中には長さ 30m にも及ぶ規模の曲輪面もあるが、多くは小曲輪が階段状に展開している。中ほどには石垣とも見られる遺構（第 56 図下）も確認できる。

以上のように、西葛尾城は尾根上に全長約 300m にも及ぶ城域を持ち、神掛峠を扼する城館の中ではひときわ大きく、重要拠点であったものとみられる。

【史料】なし　【参考文献】6 ～ 9,117 ～ 119

筑後 82　内山館（うちやまやかた）	郡名　竹野郡	別称　内山城・麦生館	図幅名　草野（東）
	種別　山城か	所在　久留米市田主丸町益生田	

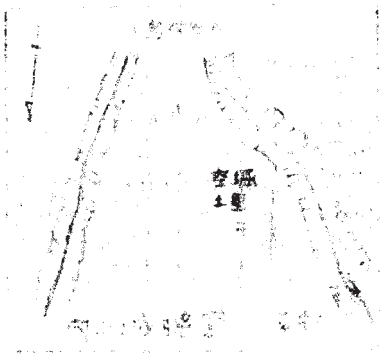
【沿革】内山城（筑後 83）の北方尾根上にあるとされる城館で、古賀基二（基司）の一連の記載がある。昭和 12 年（1937）に書かれた文献 117 には、「内山城　二〇〇（m）　麦生村　左右の河野、葛生の両城を詰城とす。武器の変遷を物語る参考的の城址で、土塁、空堀及び館城の跡歴然と残る、内山城は城とするよりも館城と見るが適当である」とある。さらに翌年出された文献 118 には、さらに詳説が加えられ、挿図（第 58 図）も掲載されている。文献 119 では「内山居館跡　海抜一六〇米」とし東葛生城としてきた城郭を「内山城」とした。地誌類の記載は内山城（筑後 83）にまとめる。



第 58 図　内山館見取り図
（原書では「内山城平面」・文献 118）

【概要】文献 119 には、東西 70m、南北 35m の平地を主郭（原書では本丸）とし、前面（北側）にいくつか曲輪が展開する。主郭には背後に土塁と空堀が巡るという。館の背後は宮地嶽社と小烏社があるとする。

現地を踏査したところ、内山城（筑後 83）の北側に小烏社と宮地嶽の社殿を確認することができたが、館の所在はよくわからなかった。しかし廣崎篤夫の『福岡県内城砦誌』（1974 年・私家版（文献 121））の「第二集浮羽の城」の「内山城」の項に館の図面に、周りの谷や農道が掲載されていたことから現地の場所を把握することができた。この図が書かれた当時（昭和 40 年代）までは土塁や空堀は残っていたが、現在、金毘羅社の社殿も跡形もなくなり、耕作地の造成が残るのみであるが、第 58 図の左に描かれた五面ほどの平坦面状地形は確認できた。しかしこの平坦面自体が城館に関連したものである可能性は低く、現状で当館に関連する遺構を見ることはできない。



第 59 図　内山城略図（文献 121）

【史料】あり　【参考文献】2,3,7,9,117 ～ 119,**121**

筑後 83　内山城（うちやまじょう）	郡名　竹野郡	別称　東葛生城	図幅名　草野（東）
	種別　山城	所在　久留米市田主丸町益生田	

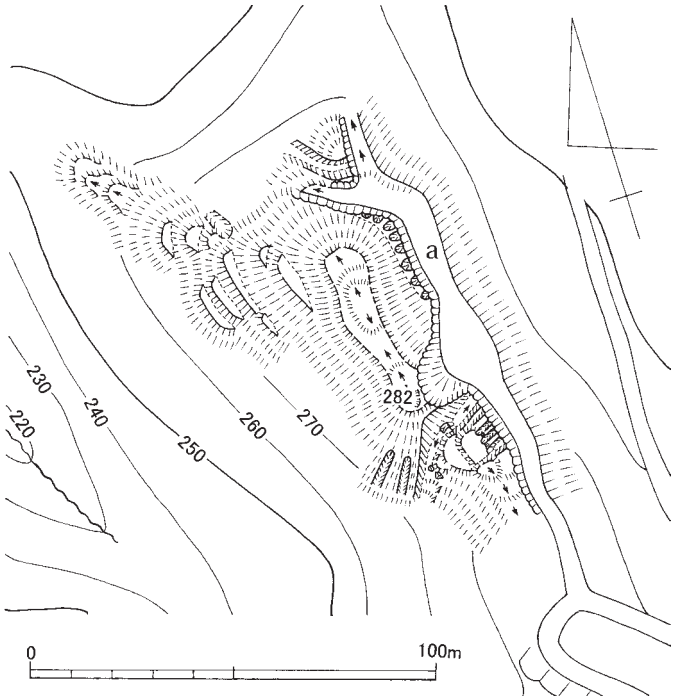
【沿革】神掛峠に通じる県道の西側丘陵頂部に位置する。『軍談』には「麥生村内山城跡」として「東西五十四間、南北二十五間」とあり、「星野右衛門大夫築之、落去ノ後城下町ヲ中道ニ移ス、是ヲ吉田町ト號ス」とある。また、『寛延記』の東西麦生村の項には「耳納山の内古城跡」として上記とほぼ同様の記載がなされる他、「大刀と申古城、麦生殿古城の由申伝候」ともある。さらに「内山の古城跡」として「豊後小丹中将殿の御内星野太郎家次」なる人物が取り立てたとある。このいずれかが当城に当たるものと考えられる。昭和 12 年（1937）に書かれた文献 117 では、当城は「東葛生城」とされたが、昭和 28 年の文献 119 において「内山城」とされたため、本書では「内山城」として報告する。

【概要】尾根上の標高 282m の頂部に長さ 50m 近くにもわたって主郭と想定される平坦地形がみられる。平坦面はあまり明瞭ではないが、その北側には深さ約 10m にも及ぶ堀切をはじめ竪堀群が確認できる。また、主郭の東側は県道からの進入路が造成されており、破壊されているものの、a には竪堀群の頂部がおよそ 8 ヶ所確認でき、畝状空堀群が構築されていたことが分かる。またその北側にも半壊状態ではあるが、堀切 1 本も確認できる。そして北西側の尾根上にも小曲輪群が雛壇状に展開する。当城は一部損壊がなされているものの、元は畝状空堀群を伴うような高度な防御遺構を備えた城館であり、妙見城の星野氏に深く関わり、神掛峠を押さえる役割を十二分に果たしていたものと考えられる。なお、文献 119 では麓側の小烏社と宮地嶽社も城域とするが、明瞭な城館遺構は確認されないため、そこまでは広がらないであろう。

【史料】あり

【参考文献】1 ～ 9,117 ～ 119

第 60 図　内山城付近からの眺め（上）・内山城堀切（下）

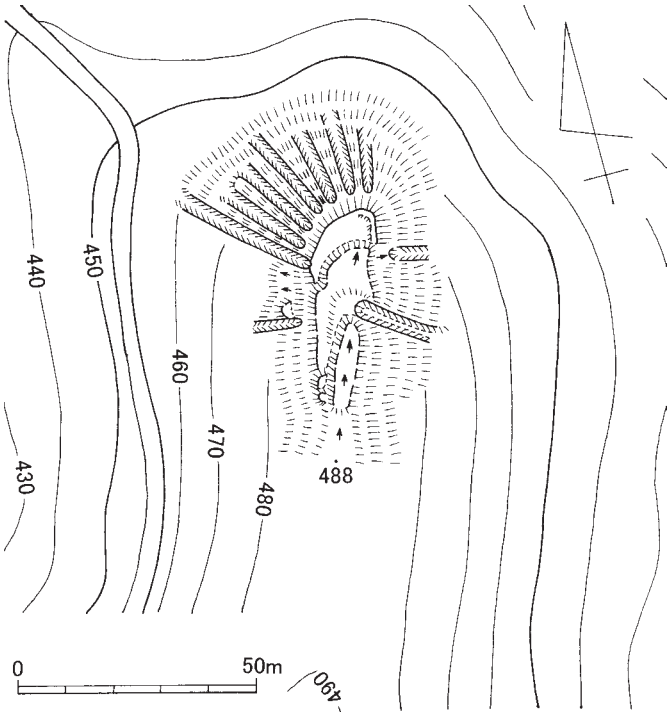


第 61 図　内山城縄張り図（事務局作成）

筑後 84	高野城（こうのじょう）	郡名　竹野郡	別称　河野城	図幅名　草野（東）
		種別　山城	所在　久留米市田主丸町益生田	

【沿革】内山城のある尾根筋を南へ約 400m 登った標高 488m の頂部に位置する。文献 117・118 では河野城としているが、後の文献 119 では高野城とされている。文献 118 の説明では、「河野城は奇岩峨々として峭壁をなす峻嶮の伽藍寺跡の直下にある。前、左右は土砂掻き、薬研式の堀を縦に数条掘割つて岨峻岩壁とした拳大の頂部がそれである」とあり、近世以前の地誌記載は確認できない。

第 62 図　高野城遠景



第 63 図　高野城縄張り図（事務局作成）

【概要】標高 488m の尾根上に幅約 15m の小規模な曲輪を 3 面ほど展開する非常に小規模な城館である。小規模ながらも、曲輪北東部には低土塁や、北側斜面に 7 本の竪堀群からなる畝状空堀群が構築されており、文献 118 の記載と正に合致する。城館という確実な伝承などもない場所だけに、平坦面のみだと一見城館であることに判断を躊躇するが、畝状空堀群の存在から明確に中世山城の遺構であることが分かる。

【史料】なし　【参考文献】6 ～ 9,117 ～ 119

筑後 85	高丸城（たかまるじょう）	郡名　竹野郡	別称　麦生城	図幅名　草野（東）
		種別　山城	所在　久留米市田主丸町益生田	

【沿革】神掛峠へ上がる県道 70 号線の東側の尾根線上、標高 462m の頂部に位置する。『軍談』には「益永村高丸城跡」として「本丸東西十五間、南北十九間、二ノ丸東西十四間、南北十七間、星野右衛門大夫所築也」とあり、『旧記寛文古城址書上』や『寛延記』にも同様の記載がなされる。文献 117・118 には麦生城（通称高丸城）とするが、後の文献 119 では高丸城とする。また地誌に記載された高丸城の二ノ丸が小丸城であるとしており、本書ではその説に従い報告する。

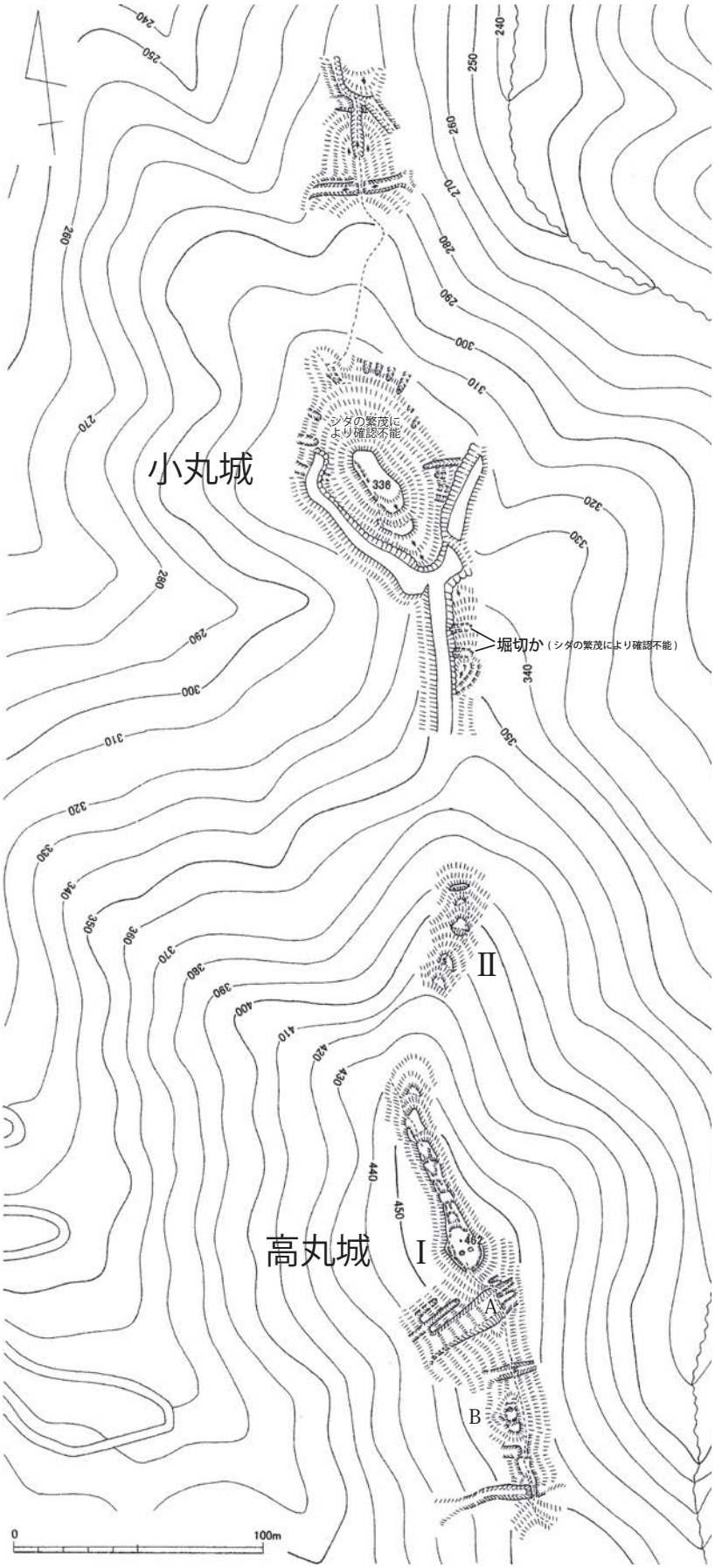
第 64 図　高丸城主郭

【概要】 標高 462m の頂部を中心に縄張りが展開している。頂部には全長 70m 余りにわたって曲輪群Ⅰが尾根に沿って伸びている。頂部付近を中心に低土塁が曲輪面縁辺部を巡っている状況が確認できる。Ⅰの南側には約 10m の落差をもって幅広の堀切Aが構築され、その南側にも間隔をあけながら堀切が２本ほど構築される。その堀切と堀切との間には小高い自然の高まりBがあり、岩の露頭が確認できる。文献 119 に記載のある「烏帽子岩」の可能性がある。曲輪群Ⅰの北側は約 100m の間隔をあけて小曲輪群Ⅱが確認できる。５つほどの一辺約５m 規模の小曲輪が並列している。曲輪群Ⅱから尾根を北へ約 150m 下った個所が小丸城である。

【史料】あり

【参考文献】1 ～ 3,6 ～ 9,117 ～ 119

第 65 図　高丸城堀切



第 66 図　高丸城・小丸城縄張り図（事務局作成）

筑後 86　小丸城（こまるじょう）	郡名　竹野郡	別称　なし	図幅名　草野（東）
	種別　山城	所在　久留米市田主丸町益生田	

【沿革】地誌等の記載については、高丸城（筑後 85）の項に記載したため、ここでは割愛する。

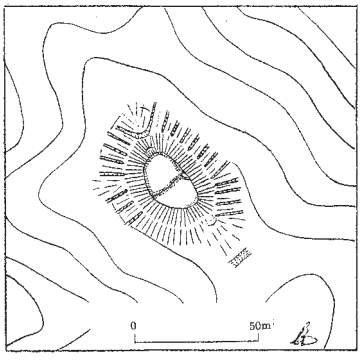
【概要】 高丸城から尾根沿いに北へ約 250m 下った標高 336m の尾根の頂部に小丸城は位置する。主郭は南北約 30m ×東西約 10m の曲輪で、南側にもう一段曲輪面を設けている。現在の小丸城は、近年、植林していた杉の伐採が大々的に行われ、その際に山道造成が行われ、主郭南側の尾根鞍部は道路で削られるとともに伐木が相当数積み重ねられ、さらには伐採された範囲には背丈近くもあるシダが密生してしまい、現状では地表を詳細に観察することは難しくなってしまっている（第 69 図）。伐採以前に作成された図面（第 68 図）を見ると、曲輪の周囲にはかなりの本数の竪堀で構成される畝状空堀群が構築され、主郭の南側には堀切も見られたようであるが、現在、若干の竪堀と鞍部よりもさらに南側に堀切とみられる地形の窪みが 2 ヶ所確認できるくらいである。大々的な除草作業か植生の変化が起こらない限りは、詳細をつかむことはなかなか難しい。また、主郭から北へ 50m ほど下ると、堀切 2 本は明瞭に確認することができる。以上のように、小丸城は高丸城と同一の尾根線上にあることから、高丸城と密接に関連し神掛峠を扼する役割を果たしていたことが想定されよう。

【史料】なし

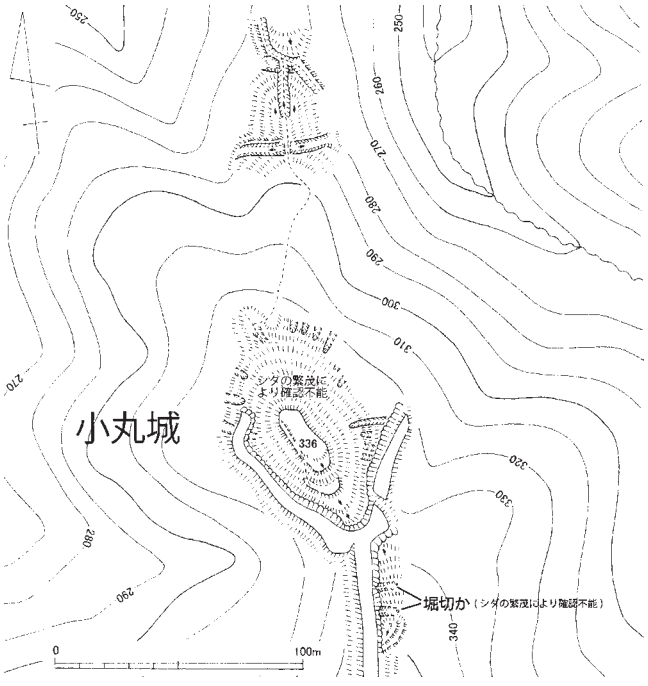
【参考文献】

6 ～ 9,117 ～ 119

第 67 図　小丸城遠景（上）・推定堀切断面（下）



第 68 図　伐採以前に作成された小丸城縄張り図（中村修身氏作成・提供）



第 69 図　伐採・シダ繁茂後の現状の小丸城縄張り図（事務局作成）

筑後 87　平家城（へいけじょう）	郡名　竹野郡	別称　益永平家城・益永城	図幅名　草野（東）
	種別　山城	所在　久留米市田主丸町益生田	

【沿革】小丸城から谷を挟んで東側の尾根上、標高357m地点の頂部に位置する。『軍談』には「同村（益永村）平家城跡」として「耳納山中、大谷山ニアリ、東西十五間、南北二十間、何人ノ所築ナル事ヲ知ズ」とあり、『寛延記』を引いて星野右衛門大夫の築城とする。

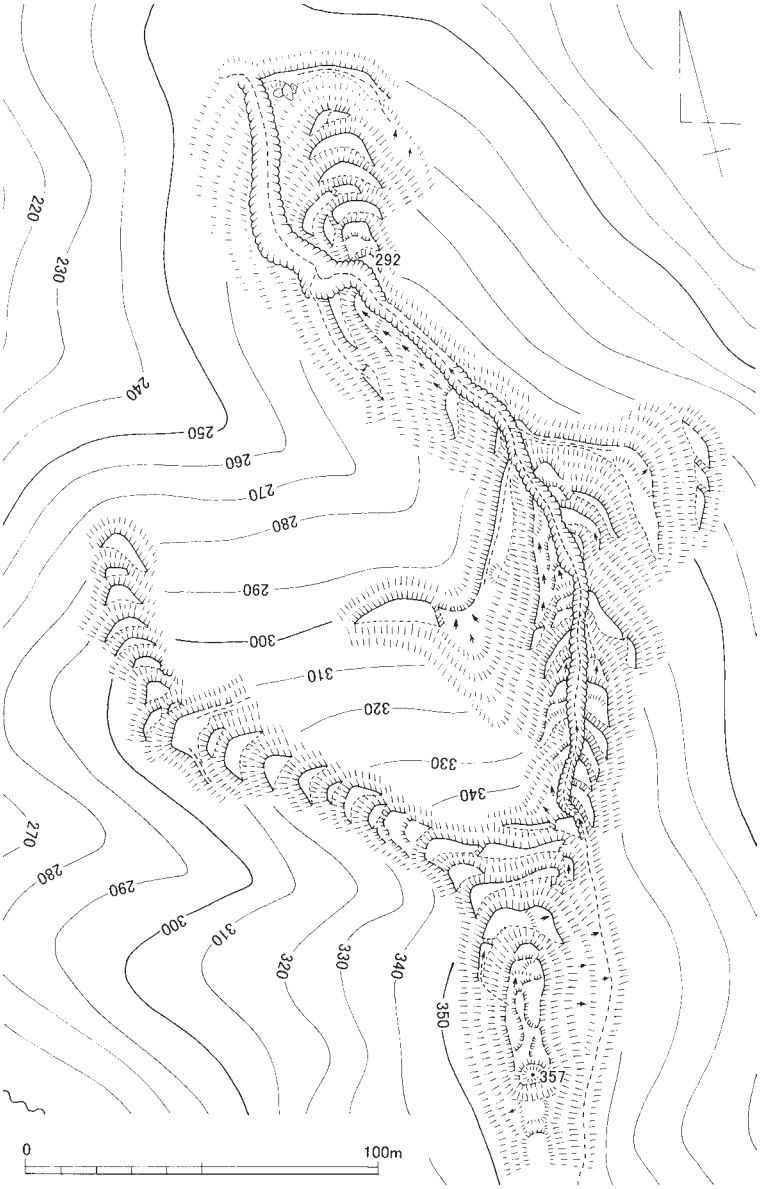
【概要】標高 357m を頂点に、北側へ延びる尾根線上に階段状に曲輪群が伸びている。基本的には小曲輪群を一段ずつ階段状に展開させており、北西側と北東側の尾根上にそれぞれ展開しているが、その小曲輪の面数はそれぞれ 25 ずつほどを数える。最高所背後の尾根の鞍部を含め、明瞭に堀切などの遺構が構築された痕跡は確認できない。また、この曲輪群の各所では、陶磁器などの中世遺物の散布を顕著に確認することができる。古いところは同安窯系青磁など、12 世紀後半代までさかのぼるものもあり、まさに平家の時代にあたり、あながち平家の城であった伝承も全く根も葉もないことではない可能性も考えられるが、その時期については城郭以外の別の機能を想定する必要もあろう。また 14 ～ 15 世紀頃の陶器片なども確認できることから、中世後半期の使用も確認でき、城郭としての性格も十分考えられよう。

なお、文献 119 には、この平家城よりさらに尾根を上った標高 560m 地点にも益永城という城郭があり、平家城の本城であるとするもその個所は自然地形が見られるのみであり、明確な城館遺構を確認することはできない。

【史料】なし

【参考文献】1 ～ 4,6 ～ 9,117 ～ 119

第 70 図　平家城曲輪



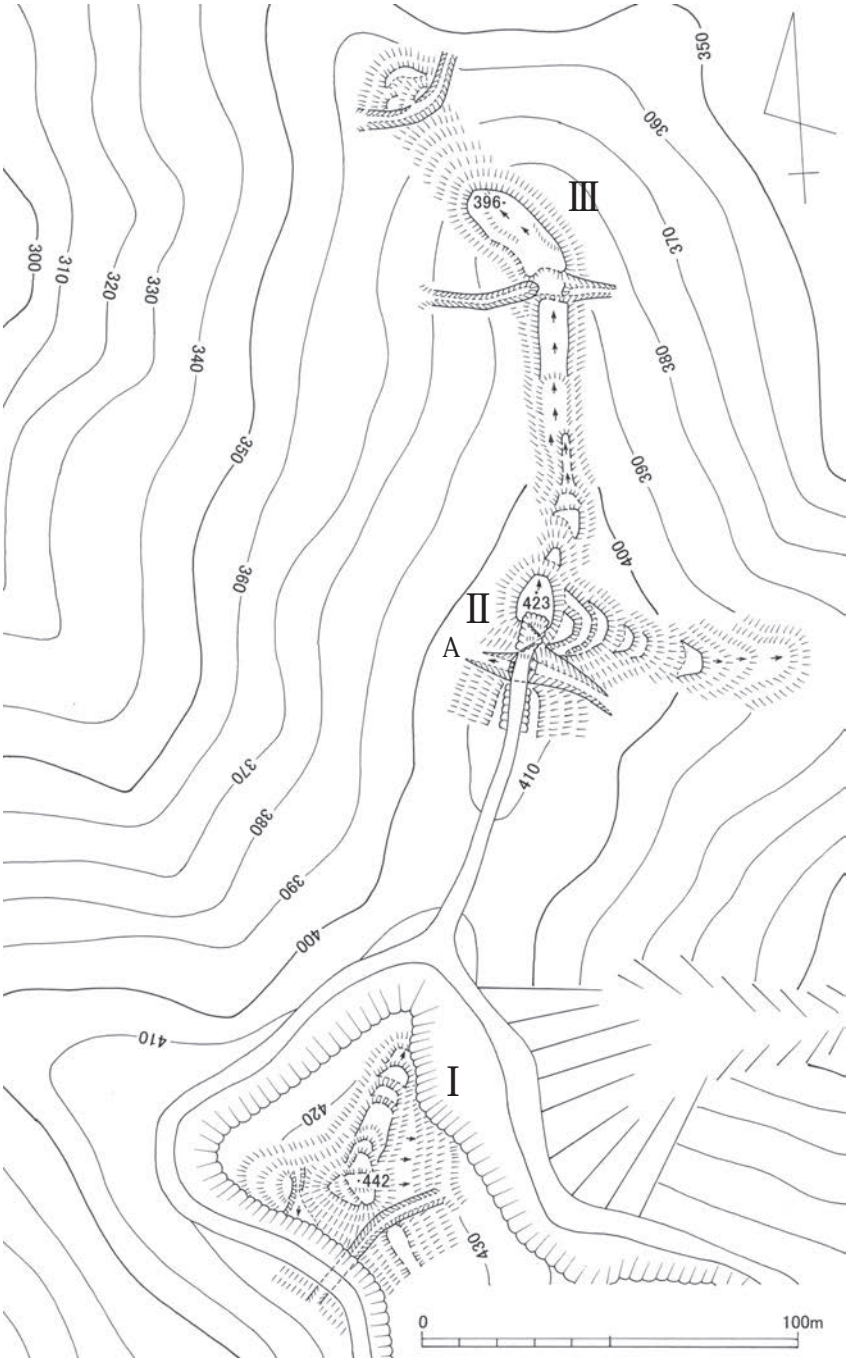
第 71 図　平家城縄張り図（事務局作成）

筑後 88　山ノ中城（やまのなかじょう）

郡名　竹野郡　**別称**　石垣城・三ツタカ城・星野城　**図幅名**　草野（東）
種別　山城　**所在**　久留米市田主丸町石垣

【沿革】田主丸の古刹・石垣観音寺の南方、平原公園から耳納山系稜線へ上る林道沿い、標高 442m 地点に位置する。『旧記寛文古城址書上』（文献 119 所収）には「耳納山　山ノ中ノ小城」とし、本丸が東西二十五間、南北十間、二ノ丸が東西三十三間、南北十三間で、星野重安の城であるとする。また、『軍談』では「同村（石垣村）星野城跡」とし、上記とほぼ同様の記載がなされるため、同一の城を指していることがわかる。また、文献 117・118 では石垣城と称し、また三つの峰に曲輪があることから、通称「三ツタカ（ミツタカ）城」とも呼ぶとされる。さらに、文献 117 においては石垣城の他に別の峰に「山中城」「三原城」「俵城」の三城があるとしているが、後にこの一帯の城跡をまとめた文献 119 では、石垣城と山中城は同一とされ、三原城、俵城は掲載されていない。そのため、三原城と俵城については城の根拠なども記載されておらず、本書では割愛している。

【概要】同一の尾根線上の、標高 442m、423m、396m の頂部を中心に 3 つの曲輪群が展開している。標高 442m 地点の Ⅰ の曲輪群は、文献 119 では「一の城」と呼ぶ箇所で、一辺 10m にも満たない小曲輪が階段状に北西方向に向かって約 40m 展開する。曲輪は全部で 6 ～ 7 段ほどになる。その曲輪の南東側と西側に堀切を各 1 本設けている。特に南東側の堀切は斜面にも堀が長く伸びている。Ⅰの曲輪群から現在の林道をまたぎ、北方向へ尾根を約 100m 下ったところにⅡの曲輪群（文献 119 では二の城）がある。途中、自



第 72 図　山ノ中城縄張り図（事務局作成）

第 73 図　山ノ中城遠景（左）・堀切（中）・遺物散布状況（右）

然地形を挟みながら、曲輪群が約 100m にわたって展開している。また東側の尾根にも小曲輪が伸びている。これらの曲輪群の南北両端には、それぞれ堀切が構築されているが、南側の堀切 A は深さ 8 m 近くにも及ぶものである。Ⅱの曲輪群から堀切を挟んだ北側にはⅢの曲輪（文献 119 では三の城）がある。南北約 25m、東西約 15m で、その北 20m 先には深さ 2 m の堀切 1 本を構築し、尾根下からの攻撃に備える。

また、Ⅱの最北端の曲輪と、Ⅲの曲輪周辺には、15 ～ 16 世紀代の明代の染付片が多く散布しており、当城にてそれらが使用されていたことが想定される。

以上のように、山中城は連続する 3 つの曲輪群で構成され、それらの曲輪群どうしの間は、堀切で区画・防御されていたことが分かる。

なお、文献 117・118 には、当城にはさらに詰城（犂先峠）や新田城の谷を挟んで西側の麓（標高約 200 m）に前城があるとしているが、現地には明確な城館遺構は残されておらず、現状では存在しなかったというのが妥当であろう。

【史料】あり　【参考文献】1 ～ 3,6 ～ 8,117 ～ 119

筑後 89　新田城（にったじょう）	**郡名　竹野郡**	**別称　なし**	**図幅名　草野（東）**
	種別　山城	**所在　久留米市田主丸町石垣**	

【沿革】山ノ中城から尾根上を北へ約 500 m 下った尾根の先端頂部に位置する。『軍談』には「石垣村新田城跡」として「耳納山中ニアリ、本丸北面、東西二十五間、南北十五間、二ノ丸東西三十五間、南北十間、麓ニ廣野アリ、一ノ搆ト云」とし、新田四郎の居城と伝え、新田善良の祖先の城ではないかとしている。文献 119 では『城館第宅』には、新田忠常の居城、あるいは新田義信の築城とあるとする。また著者の古賀基司は星野氏が築城し、後に新田氏が豊前から来て居城としたため新田城の名が起こったものと思われるとあるが、詳細な根拠は不明である。

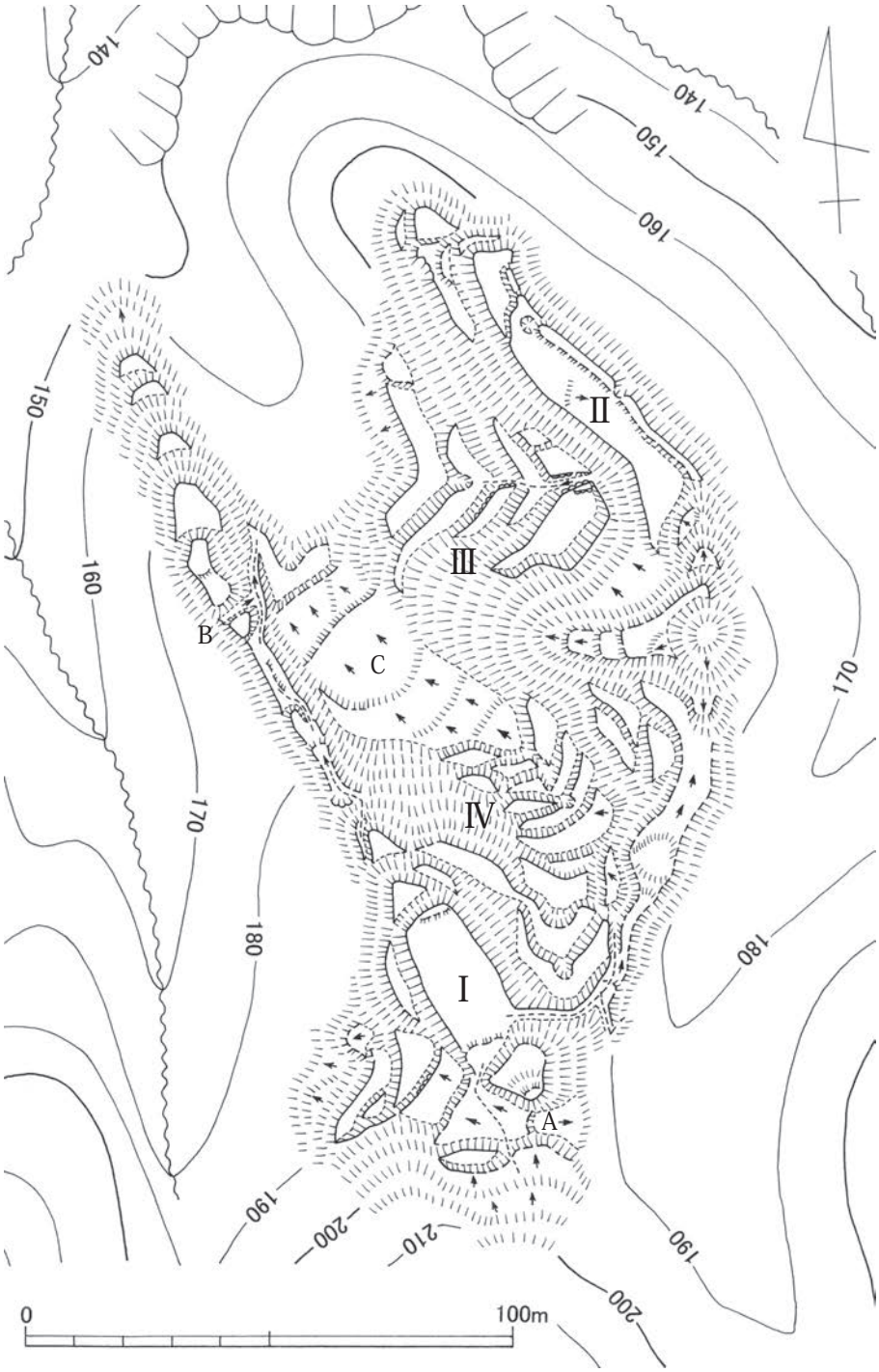
第 74 図　新田城遠景（左）・曲輪Ⅰ（右）

【概要】城は大きく、Ⅰの曲輪を中心としたエリア（地誌に言う「本丸」か）とⅡの曲輪を中心としたエリア（地誌に言う「二ノ丸」か）、それらに挟まれた谷部分の曲輪群Ⅲ・Ⅳのエリアに分かれる。城内最高所にある曲輪Ⅰのエリアは、南北約 35m ×東西約 20m の曲輪Ⅰを中心に小規模な曲輪が無造作に展開する。Ⅰは平坦面が非常に明瞭で、風炉など中世遺物の散布が顕著にみられる。Ⅰの北側の尾根上には途中自然地形も含め、約 150m にわたって小曲輪群が階段状に展開し、その途中には堀切状遺構Ｂも確認できる。一方、Ⅰの南側にも堀切遺構Ａ（深さ約３m）が確認できるが、Ⅰから北東側へ延びる尾根上にも無造作に平坦面が展開し、鞍部と頂部を経てⅡの曲輪へ至る。Ⅱは全長 70m にもわたる長い曲輪面で、東側には低土塁状の高まりもある。Ⅱの北側にも小曲輪群が階段状に展開する。そしてⅡの南側、谷に面した斜面にはⅢの曲輪群があり、地形に即したいびつな形状の平坦面が５面ほど確認でき、中には石を積んだ痕跡もあるが、城があった当時のものかは断定できない。また、ⅠとⅡ・Ⅲとの間に挟まれた尾根の鞍部の北西側にも小曲輪群Ⅳが展開しており、その北西側には、やや広い谷の平坦地形Ｃが確認できるが、そこから北へ下るにしたがって、尾根が両側から迫ってきており、あたかも城戸口のような様相を呈している。

以上のように、新田城は二つの尾根上とその間に挟まれた谷部に曲輪群が展開する縄張り構造であり、周辺の中世城館とはやや縄張りの展開状況が異なる印象を受け、遺物の分布をみてもわかるように新田氏の伝承はともかく中世城館の遺構（山ノ中城に関連する城郭など）として考えておくのが妥当であろう。

【史料】なし

【参考文献】1 ～ 9,117 ～ 119



第 75 図　新田城縄張り図（事務局作成）

筑後 91　菅館（すげやかた）	郡名　竹野郡	別称　なし	図幅名　田主丸（東）
	種別　平地城館	所在　うきは市吉井町鷹取	

【沿革】筑後川支流、巨瀬川と美津留川に挟まれた標高約 20 mの下菅集落に位置する。『軍談』には「菅村舘跡」として、元応年間に菅某が館を構え、代々菅氏の居館であったとする。また同書には、今の庄屋宅がその館跡であるとし、馬場、蔵増などの地名が残るとある。『旧記寛文城館書上』（文献 119 所収）には「今其囲堀の跡残れり、長サ百五十間、予嘗てその跡を問に今の庄屋が宅地即其館跡也其の宅地内竹林の内を馬場と云ふ、西北に門の跡あり、門出と云ふ。西に倉庫の跡あり蔵増と号す」とあり、文献 119 にはこの記述を受けて元庄屋権藤氏の居宅を中心に下菅集落全域を城地と想定している。

第 76 図　菅館周辺図（うきは市教育委員会提供図面を一部改変して事務局作成。網掛部は水路を示す）

【概要】地誌に残された馬場、門出、蔵増などの地名は字としては残されておらず、その詳細な位置は知れない。ただ、元庄屋権藤氏の居宅は八幡宮の南東側に隣接した場所であり、ここが居館の跡と推測される。現在も八幡宮境内に中世と思われる石塔が残されており、居館と何らかの関係があるものと思われる。そして文献 119 の記載に従い城の四至を見てみると、北側は東西に流れる美津留川、西は南から北へ流れる水路、南は大楠（隼鷹神社・クスの大木は昭和 26 年（1951）頃に伐採されたという（場所不明））、東は竹野・生葉の郡境とされ、ほぼ下菅の集落全体、一辺約 200m の方形の範囲が想定されるが、実際の地形に即した範囲が推定されよう。ただ、この範囲にしても考古学的に証明されたものではないため、詳細は不明と言わざるを得ない。

第 77 図　昭和 23 年当時の菅館周辺航空写真（国土地理院撮影）

【史料】あり

【参考文献】1 ～ 3,6 ～ 9,119

⑥生葉郡

筑後 94　鷹取山城（たかとりやまじょう）

郡名　生葉郡 / 竹野郡　別称 鷹取城　　図幅名 草野（東）種別　山城
所在　八女市星野村星野・久留米市田主丸町森部・うきは市浮羽町妹川

【沿革】耳納山系最高所、鷹取山山頂に位置する。『軍談』では「同村（星野村）鷹取城跡」として「東西四十二間、南北十間、重忠ノ曾孫、重種ノ居城也」とし、星野鎮胤の居城であることを記す。文献 119 には本丸、二の丸、三の丸があり、三の丸の東下に馬責場、射場と称する練武場の地名が残っていると記す。

【概要】標高 802m の山頂部に主郭を置き、そこから南あるいは東側へ向かって階段状に曲輪を展開させている。ほぼすべての曲輪には土塁が巡り、途中 A・B には堀切が構築される。これらの曲輪の南側斜面には竪堀 32 本の畝状空堀群、さらには西側斜面にも竪堀 9 本からなる畝状空堀群が

第 78 図　鷹取山城縄張り図（岡寺　良作成）

構築されている。南側斜面の畝状空堀群が土塁直下に横堀あるいは犬走りを通し、整然と竪堀を並べるのに対し、西側斜面は竪堀の大きさもまちまちでやや雑然とした印象を受けるが、西側斜面の方が南側斜面よりも傾斜がきついという地形の影響によるものとみられる。主郭の北側には尾根が土塁状に延び、その先のDには大型の竪堀と堀切を構築し、城域を画す。また城の東側、Cにも堀切1本を設け、東側からの備えとしている。以上のように、当城は小型ながらも、土塁に囲まれた曲輪群や、膨大な数の畝状空堀群など、北部九州において高度に発達した縄張り技術を駆使しており、妙見城を本城とする国人領主・星野氏の重要城郭の一つで、本城・妙見城の詰め城と想定できると共に、耳納山系南側からの攻撃に備えた峠の城という位置付けも可能であろう。

【史料】あり　【参考文献】1 ～ 7,**8**,**9**,13,40,119,**128**

第79図　鷹取山城からの眺め（左・筑後平野方面）・曲輪群（中・奥は八女方面）・畝状空堀群（右）

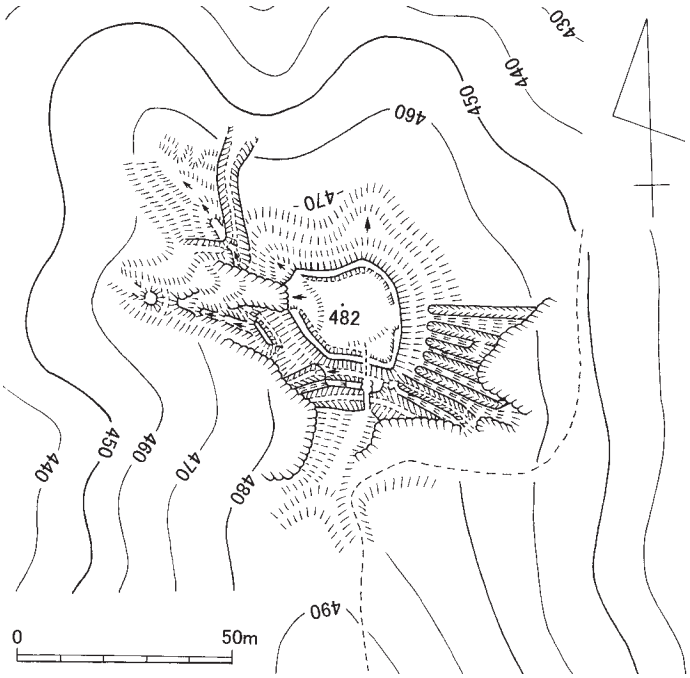
筑後97　西（にし）の城（しろ）　　**郡名　生葉郡**　　**別称　妙見西城**　　**図幅名　草野（東）**
種別　山城　　**所在　うきは市吉井町富永**

【沿革】星野氏の本城、妙見城の谷を挟んで西側の尾根の頂部に位置する。『寛延記』には「一古城跡　壱ヶ処　西城と申伝候。耳納筋ニ有之候。城主之時代不相知」とある。『軍談』には「同村（千代久村）西城跡」として星野伯耆守が築城した城だとする。

【概要】標高482mの尾根線上部に一辺約25mの曲輪を置く。曲輪の周囲には低土塁が巡り、南側には2本の堀切を施して尾根上からの備えとし、東側斜面には堀切と並行して5本の竪堀群からなる畝状空堀群を構築する。西側は自然崩落などもあり不明瞭な部分もあるが、横堀とその斜面下に堀切2本を構築して尾根下からの備えとしている。妙見城本体の西側尾根上を防備する位置にあり、妙見城を防衛するための出城と認識できよう。

【史料】なし

【参考文献】1 ～ 3,6 ～ 8,**9**,117 ～ 119

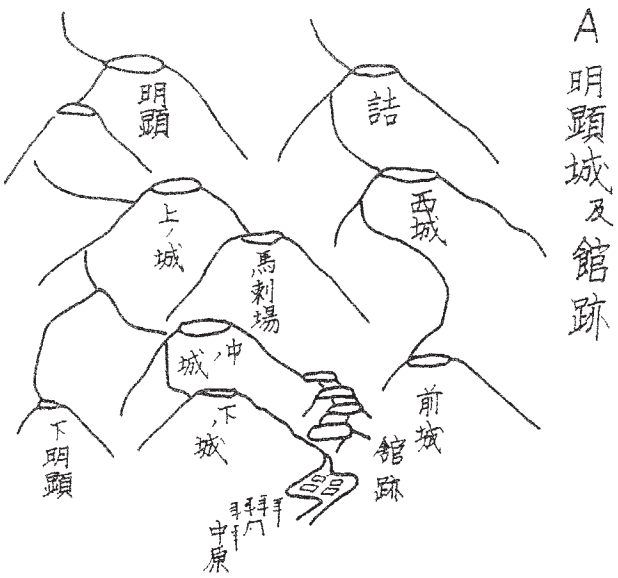


第80図　西の城縄張り図（事務局作成）

筑後 98 妙見城（みょうけんじょう）	郡名　生葉郡	別称　明顕城・妙見山城	図幅名　草野（東）
	種別　山城	所在　うきは市吉井町富永	

【沿革】屋永の吉井百年公園から農道を南へ上った先にある標高 488 mの頂部を頂**点**にそこから北側にかけて城館遺構が残る。『軍談』には「屋形村妙見城跡」として「山上ニアリ、星野伯耆守築之」とし、星野親忠も居城したとある。文献 117・118 では「明顕城」として上ノ城・中ノ城・下ノ城・馬刺場・妙見居館・下明顕を含んだ総称として報告している。

【概要】文献 118 に掲載された図には、城内各所の呼び名とその位置が鳥瞰図的に描かれている（第 81 図）。それらをすべて現地比定することは難しいが、いくつか可能なものもあるため、それらを踏まえつつ、以下、城の縄張り構造について説明する。



第 81 図　文献 118 に描かれた妙見（明顕）城配置図

城の主郭は、南最奥部にして最高所の標高 488 m、耳納山系から北へ派生した尾根の頂部に当たり（図中Ⅰ）、ここが第 81 図の「上ノ城」に当たる。文献 119 では、ここから筑後の平野を一望することができたというが、現在は杉檜の植林により鬱蒼とした山林となっている。主郭Ⅰは決して大きい曲輪とは言えないが、南側背後には土塁を巡らし、さらにその南側には 4 本の竪堀群と 3 本の堀切群により、山上からの攻撃に備えている。Ⅰから北東側に尾根が伸びており、その先には若干の曲輪面と東から北東側の斜面には畝状空堀群Ａを確認することができる。そしてさらに北へ下ると曲輪はあまり顕著ではないが、東側斜面Ｂには堀切とそれに並行する形で畝状空堀群が掘られている。いわゆる「上ノ城（Ⅰ）」と「中ノ城（Ⅱ）」とをつないでいる尾根線を厳重に防備して通行を遮断されないようにした防御遺構と言えよう。さらに北側のＣには大堀切を設け、そこから北側に階段状に曲輪群が展開する。Ⅱは南北約 50 m、東西約 15 mの城内最大規模の曲輪であり、第 81 図の「中ノ城」に当たるものと思われる。Ⅱの北側から東側にかけては横堀と接続した竪堀群約 15 本からなる畝状空堀群Ｄが構築されており、斜面下からの守りを固める一方で、竪堀のさらに下に当た

第 82 図　妙見城畝状空堀群（上）・堀切（下）

第 83 図　妙見城縄張り図（事務局作成）

るＥには階段状に小曲輪群を造成して、谷下からの攻撃に備えている。Ⅱの北東側の尾根を下り、土橋状の掘り残しを持つ竪堀を過ぎると土塁に囲まれた曲輪群Ⅲとなる。ここが「下ノ城」に当たるものと考えられ、Ⅱの曲輪群に次ぐ規模の曲輪が並立するが、その東側斜面にも、横堀と接続する形の 20 本足らずの竪堀群で構成される畝状空堀群Ｆが構築されている。Ⅲのさらに先にも尾根は伸びているが、城館遺構は確認できない。

第 84 図　妙見城曲輪群Ⅵの石垣

一方、主郭Ｉの西側は、Ｇにいくつかの竪堀群が確認できるが、その先に遺構はない。Ｉから北西に延びる尾根の先は、『城郭』によると屏風岩と呼ばれる巨岩壁があり、その西側の頂部に若干の曲輪面Ⅳが形成されている。ここが「馬刺場」で、西側斜面には短いながらも５本の畝状空堀群Ｈが掘られており、曲輪面だけを見れば、ここが城館遺構であるか否か迷う所であるが、空堀群の存在によりここも城郭化されていることがわかる。ここから尾根を北へ下った東側、谷に面した傾斜地に曲輪群を設けている。曲輪群は大きくⅤ・Ⅵと二分され、これらが第 81 図の「館跡」であり、この近辺には中世遺物も散布している。特にⅥの曲輪には、城道からの虎口を石垣で固め、谷部に位置しながらも防御に配慮した構造といえよう。Ⅵの北側先端部のＪには堀切２本を設け、城への導入における守りの要としている。「館」という機能・性格は今後の課題とはいえ、妙見城の城館遺構であることは疑いない。

なお、第 81 図にある「下妙見」は、文献 118 にも「何等の設備の跡も見出し難い」とあり、また最高所とする「明顕」についても、ほぼ山系稜線上に近い標高 650 mにあるとするが、現地を踏査したところ、特に顕著な城館遺構を確認することはできず、これも存在は否定せざるを得ない。

いずれにせよ、妙見城は、南北約 600 m、東西約 250 mの規模を有する筑後国内最大の山城であり、なおかつ城内併せて 80 本近い竪堀による畝状空堀群が構築される高度に発達した縄張りを有した城である。地誌などでは星野氏に関連する城であることは確実であることから、まさに星野氏の本城と呼ぶにふさわしい山城と言えるのではなかろうか。

【史料】あり　【参考文献】1 ～ 4,6,7,**8**,**9**,117 ～ 119,**134**

筑後 99　谷山城（たにやまじょう）　　**郡名　生葉郡**　　**別称　山ノ上城・小城・古城**　　**図幅名　草野（東）**
種別　山城　　**所在　うきは市吉井町福益**

【沿革】妙見城の東側、標高 331m の尾根線の頂部に築かれている。『軍談』には「同村（延寿寺村）山上城跡」とあり、福丸城と共に星野高實が築城したとある。『旧記寛文古城跡書上』（文献 119 所収）には「一小城、古城　上ノ山也」とあり、文献 119 では地名から「谷山城」と仮称する。

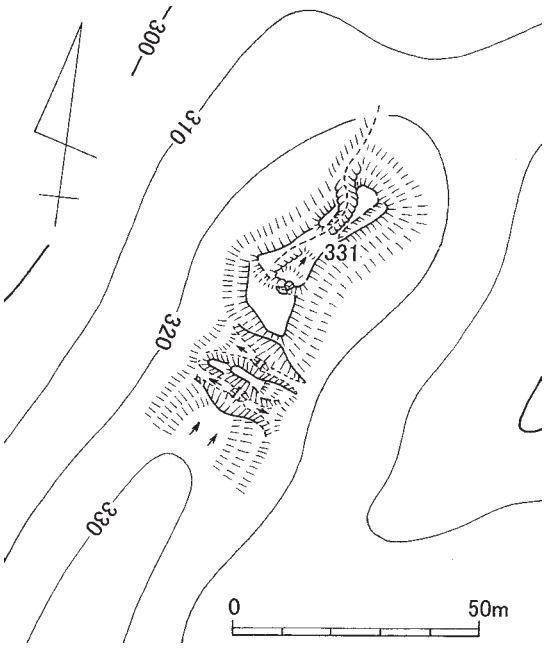
【概要】約 30m ×約 10m の主郭の南側に小曲輪を設け、さらにその南側に深さ４m の堀切２本を構築し、尾根上からの攻撃に備えている。小曲輪の平坦面上には土師器片の散布も見られる。当城は、

全長約 50m の小規模な城域で、砦という印象を受ける。妙見城の東側を守る出城、あるいは福丸城と満願寺城との繋ぎの城としての役割が考えられよう。

【史料】なし

【参考文献】3,6 ～ 9,117 ～ 119

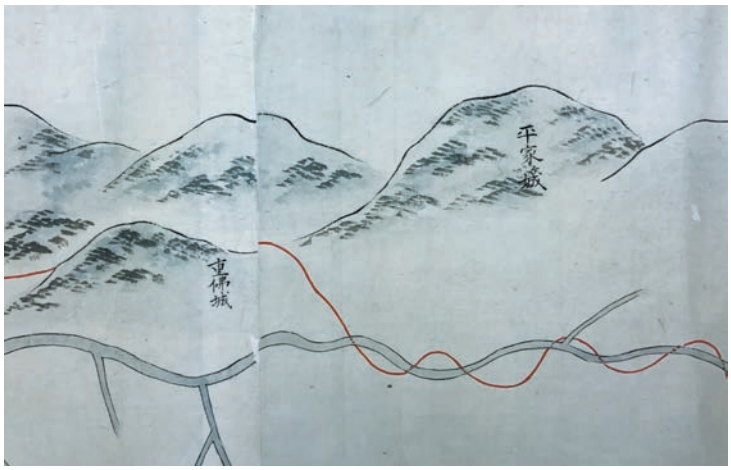
第 85 図　谷山城堀切



第 86 図　谷山城縄張り図（事務局作成）

筑後 100　平家城（へいけじょう）	郡名　生葉郡	別称　妹川城・妹川平家城	図幅名　草野（東）
	種別　山城	所在　うきは市浮羽町妹川	

【沿革】筑後川支流の巨瀬川上流、耳納山系の南に聳える標高 586 mの頂部に位置する。『軍談』には「同村（妹川村）平家城跡」として「東西五十間、南北十二間、堀二重廻レリ、城主詳ナラス」とあり、『寛延記』にもほぼ同様の記載がなされる。『生葉郡内絵図』（個人蔵）には当城と共に、出城ともいわれる重虎城（絵図には重佛城）が記されている。



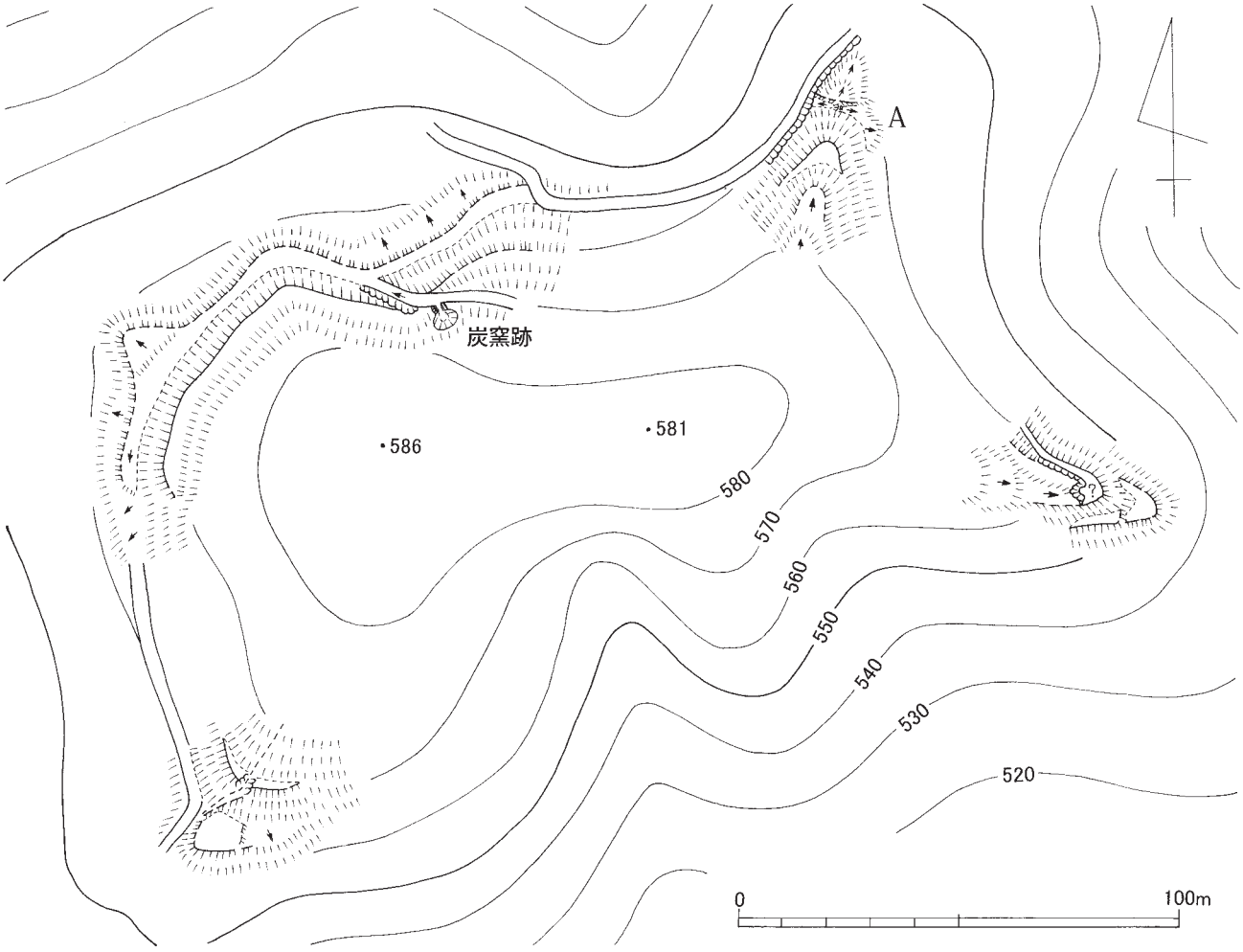
第 87 図　『生葉郡内絵図』（個人蔵）に記された「平家城」

【概要】標高 586 mの頂部は、東西約 100 m、南北約 50 mの自然地形で、一見城館遺構は確認できないが、山頂から四方に派生する尾根上、標高 560 mの位置にはⅠ～Ⅳのテラス状の平坦面が確認できる。一見、城館遺構ではなく、後世の山仕事の造作とも考えられる。実際、山頂の北側には近現代の炭窯の跡があり、周囲には山道も確認できる。しかし、文献 119 には、「山頂の周囲には幅約 2 m の武者走りが東から北西に半円形に巡り、城跡は東西 100m、南北 25m で東に向かって緩斜面をなし、搦

第 88 図　平家城遠景

手口に当たる野首には野首ノ城を３ヶ所設け、そこに弓蔵路（ゆみかくしみち）を設けて‥」とあり、すべて現地に落とし込むことは不可能ではあるものの、武者走りや山頂の様子など、現状と同様の遺構状況の表記がなされており、昭和 28 年段階にはすでに現在の景観となっていたことが分かる。また、Ａには堀切とも思える切通状の遺構も見られる。確実に城館遺構とは言えないが、今後の課題の意味合いも含め、現状の状態を報告しておくこととする。

【史料】なし　【参考文献】1 ～ 4,6 ～ 9,32,117 ～ 119



第 89 図　平家城跡現況図（事務局作成）

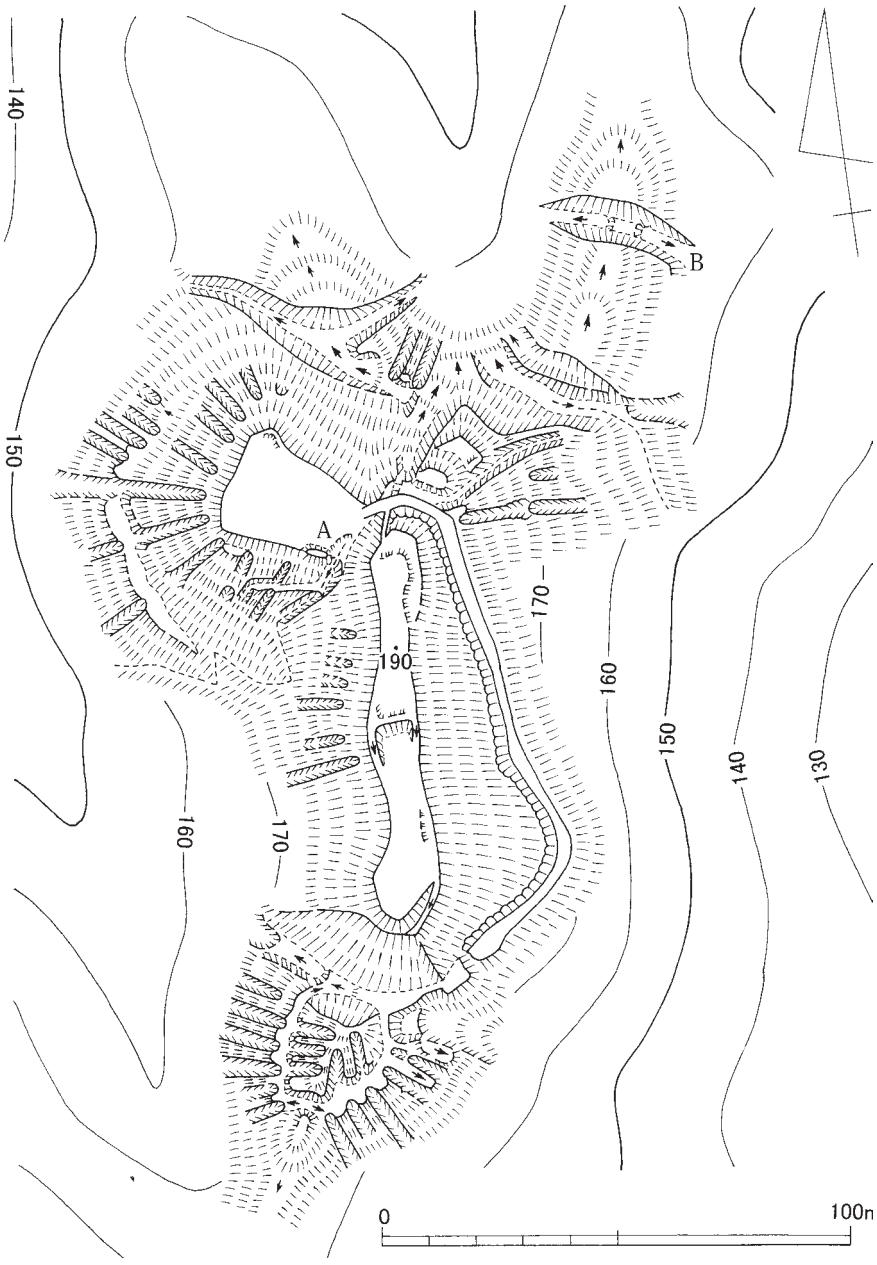
筑後 102　福丸城（ふくまるじょう）

郡名　生葉郡　　別称　福益城・福増城・延寿寺城　　図幅名　千足（西）
種別　山城　　所在　うきは市吉井町福益

【沿革】福益の西延寿寺の集落の背後に、耳納山系から伸びてくる尾根線上の頂部、標高 190 m地点に位置する。『軍談』には「延寿寺村福丸城」として「東西十二間、南北三十間」とあり、山上城（谷川城）と共に星野高實の築城によるものとする。『寛延記』には「一福増之城　山ノ上ニアリ　星野殿城跡と申候。于今城ノ跡御座候」と記す。

【概要】 標高 190m の頂部に南北長約 80m、東西幅約 15m の２段からなる曲輪を置く。曲輪の南側の尾根続きの部分には、深さ 15m 近くもある大堀切で尾根を分断し、さらにその南側に残された

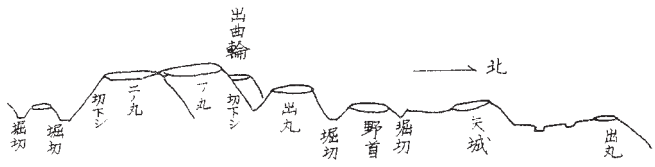
自然丘陵頂部は、二段にわたって竪堀群を密集させ、完全に丘陵頂部を破壊し、使用を不可能として攻城の足場とさせないようにしていることが分かる。曲輪の西側斜面には不明瞭ながら６本ほどの竪堀群を設け、さらに北西側には南北約 20m、東西約 30m の城内最大の曲輪を構築する。その曲輪の南側には土塁を伴い、虎口らしき進入路 A を構築するも、周囲の斜面には約 15 本の竪堀からなる畝状空堀群を構築する。一方、頂部の北東側の尾根上には堀切や階段状に構築した小曲輪群が複雑に配置され、構築される堀切はいずれも深さ５m 以上もある規模の大きなものであると同時に竪堀群などとも組み合わせ、厳重な防備の様子が窺われる。堀切 B のさらに北東側については、文献 119 では尾根上に「矢城」と呼ぶ曲輪が展開しているとしているが（第 91 図）、現地は自然の平坦地形の尾根であり、明確な城館遺構を確認することはできない。以上のように福益城は堀切５本に総計 40 本前後もの竪堀群を構築する厳重な防備がなされた城郭であることが分かり、星野氏の重要城郭の一つであると考えられる。



第 90 図　福丸城縄張り図（事務局作成）

【史料】あり

【参考文献】1 ～ 4,6,7,8,9,117 ～ 119



面側城丸福 B

第 91 図　文献 118 掲載の福丸城側面図
（実際に存在するのは真ん中の出丸から左部分のみ）

第 92 図　福丸城の曲輪

筑後 104　満願寺城（まんがんじじょう）

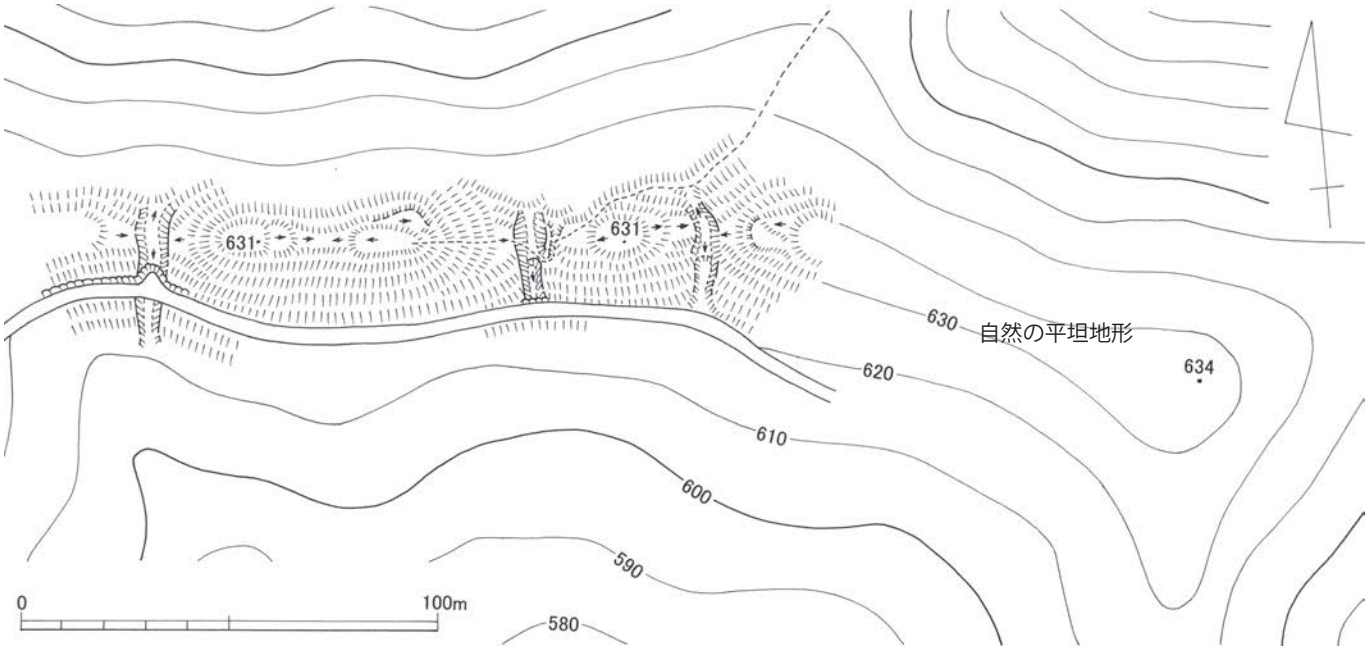
郡名 生葉郡　　別称 妹川万貫城・万貫城・満願城　　種別 山城
図幅名 草野（東）/ 千足（西）所在 うきは市浮羽町妹川・吉井町福益

【沿革】耳納山系の東端、牛鳴峠から山系稜線へ上がった標高 631m の稜線上に位置する。『旧記寛文古城跡書上』（文献 119 所収）には「古城まんぐわんじ城」として、「東西五十間、南北八間」とし、城主不詳とする。また『寛延記』にも「満願城」としてほぼ上記の通りの規模と城主不詳の記載に加え、「古城跡、立テ堀数ヶ所御座候」と記す。また、『軍談』では「妹川（村）万貫城跡」として上記とほぼ同様の記載がなされる。

【概要】牛鳴峠から耳納山系の主稜線へ取りつく尾根の結節部付近、標高 630m 前後の尾根上に位置する。深さ２～３m の堀切３本が確認できるのみで、堀切と堀切の間は東側で約 30m、西側で約 80m の間隔があるが、共に人工的な造成がほとんど加えられない自然地形に近い状況となったままで、積極的に曲輪面を造作したような痕跡は確認できない。さらに東側は耳納山系の東突端部（標高 634 m）の西側にあたり、従来そこに城が位置するものとされていたが、そこは自然の平坦地形が広がるのみで、人工的に造成された平坦面や堀などの防御遺構は全く確認できないため、城域と断定できない。

おそらく牛鳴峠から耳納山系稜線上の弦懸峠に続く稜線上にあたる箇所で、ここから弦懸峠付近は妙見城の背後の

第 93 図　満願寺城遠景（上・妹川から）・堀切（下）



第 94 図　満願寺城縄張り図（事務局作成）

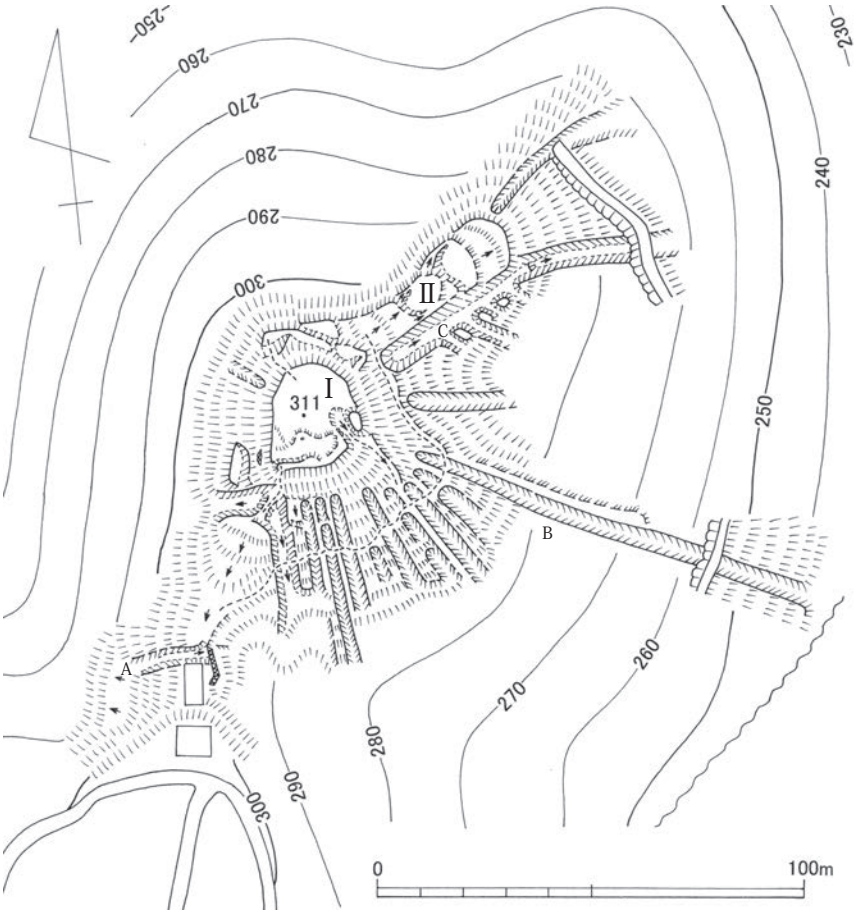
稜線上にあたる。敵方に牛鳴峠から妙見城の背後をとられないようにするため、そのルート上の防御しやすいこの場所に、敵の侵攻を防ぐために築かれた城館遺構と考えられる。曲輪面が積極的に構築されないところから考えても、稜線上の通行を妨げることを一番の目的として築かれたものと考えられる。

なお、文献 119 などには、当城の北面、牛鳴峠に至る尾根線上の途中に、「前城」があるとされるが、現地を踏査したが、明確な城館遺構はなく、現状では存在を認めることは難しい。また、文献 118 に牛鳴峠付近に牛鳴砦との地図表記もあり、「前城」と同一視したものと思われ、こちらも存在は認めがたい。

【史料】なし 【参考文献】1 ～ 3,5 ～ 9,32,117 ～ 119

筑後 105 安山城（やすやまじょう）	郡名 生葉郡	別称 大聖寺山城	図幅名 千足（西）
	種別 山城	所在 うきは市浮羽町流川	

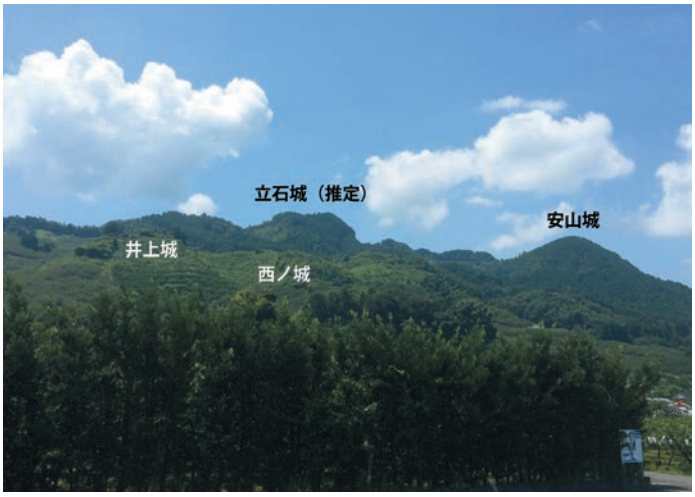
【沿革】流川集落の**南**背後、標高 311m の半独立丘陵頂部に位置する。文献 119 には「安山城（一名大聖寺山城）海抜三二〇米」とある。現状では、この記載をもって、安山城の城名や位置を把握しているが、『寛延記』の大生寺（大聖寺）の伝記には「寺山両峯御座候。高キヲ主山、低ヲ安山ト申候（中略）右安山ハ立ツ岩共申候」として問註所氏と秋月種座が合戦をした際に構えた城郭であると記していて、安山と立ツ岩（立石）が同一であるかのような書き方をしている。文献 119 では安山城を西城、立石城を東城としてはいるが、実際立石城とされる場所には明確な城館遺構はなく、『福岡県の城』でも当城を立石城としており（ただし一覧表には別に安山城も掲載されている）、この安山城とされる場所が立石城と呼ばれていた可能性も十分考えられるが、今後の課題としておきたい。



第 95 図 安山城縄張り図（事務局作成）

【概要】井上城の西、やや高くそびえる標高 311 mの頂部に南北約 25m、東西約 20m の主郭Ⅰを置く。Ⅰの南辺部には低土塁が確認でき、南東隅には虎口とも見える進入口が見られるが、

後世の山道造成による可能性も考えられる。Ⅰの南西側には、堀切Aを設け、尾根上側からの備えとする一方で、Ⅰの南側斜面一帯には、堀切と並行する約10本の竪堀群で構成される畝状空堀群が構築されている。特にBの竪堀は100m前後もの長大なもので、斜面の横移動を遮断する機能が想定される。一方、Ⅰの北東側の尾根上にも、4段くらいの小曲輪からなる曲輪群Ⅱがあり、曲輪群の南側に大きな横堀Cと横堀から斜面側には4本の竪堀が派生しており、いわゆる畝状空堀群となっている。以上のように、安山城は主郭の南側から東側にかけての斜面上に畝状空堀群をはじめとする厳重な防備で固める縄張りを見て取ることができ、問註所氏と星野氏が争った抗争の激しさを物語る城といえよう。



第96図　安山城および周辺城館遠景

【史料】なし　【参考文献】1,6 ～ 8,**9**,32,119

筑後107　井上城（いのうえじょう）　　**郡名　生葉郡　　別称　なし　　図幅名　千足（西）**
種別　山城　　所在　うきは市浮羽町流川

【沿革】安山城から谷を挟んで東側、標高約170 mの頂部に位置する。『軍談』には「小坂村井上城跡」として本丸、二ノ丸、三ノ丸の存在を記し、大永年間の問註所親照が築城し、その子加賀守重直の代に秋月氏が来襲し、重直の弟・町の源助（あるいは孫助）は長岩城へ移ったことが記されている。文献119などでは「井ノ上城」とするが、本書では「井上城」で統一する。

【概要】井上城は、本城部分と「西ノ城」と呼ばれる二箇所に分かれており（第98図）、一個の城郭のようであるが、実際にはそれぞれ別個の城郭の体をなしているため、本書では別の城として扱うこととする。井上城がある丘陵一帯は、現在果樹園となっており、城がある丘陵頂部も果樹栽培がなされており、若干の改変が見込まれるものの、主郭は一辺約20mの規模を有し、明瞭に平坦に造成される。主郭から北東側の尾根上に2～3段の曲輪と思われる平坦面が階段状に展開するが、斜面下方は果樹園造成が大々的になされており、城郭遺構かどうかの判断は非常に難しい。一方、主郭の南西側は現在、農道が切通し状に開削されているが、元来堀切があった可能性が十分考えられる。

第97図　井上城からの眺め（上）・井上城及び西ノ城遠景（下）

なお、主郭から北側斜面にかけて土師器の散布が確認できたが、中には古墳時代の須恵器なども散見され、中世に属するものがあるかどうかは不明と言わざるを得ない。

【史料】あり　【参考文献】1 ～ 9,18,32,119

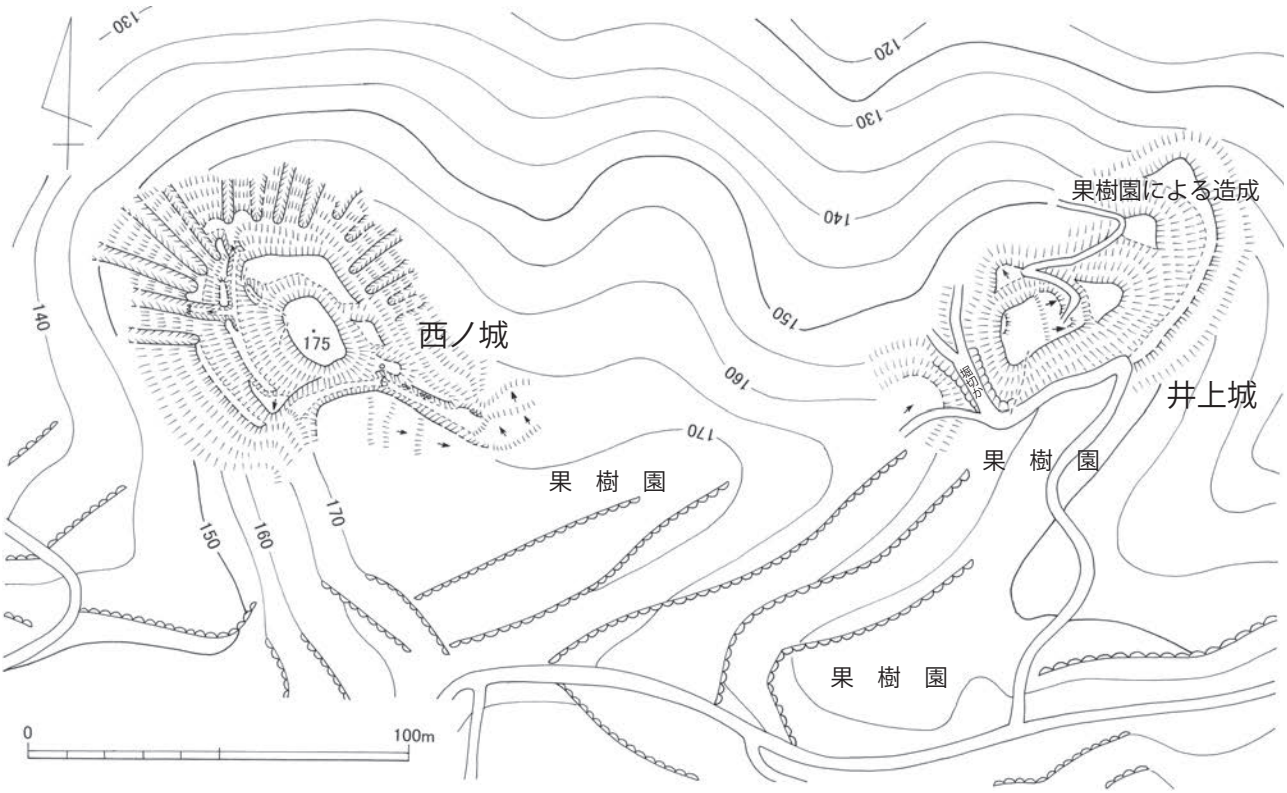
筑後 108　西ノ城（にしのしろ）	郡名　生葉郡	別称　井ノ上西城	図幅名　千足（西）
	種別　山城	所在　うきは市浮羽町流川	

【沿革】井上城から谷を挟んだ西側約 200 m地点の丘陵突端頂部に位置する。文献 119 には井上城の西方に「西ノ城」という出城を構えるとあり、『寛延記』の井上城の二の丸ないし三の丸ではないかとしている。

【概要】 井上城の西側、標高 175m の丘陵突端頂部に位置する。この一帯も井上城と同様、果樹園栽培が行われていた痕跡があるが、明瞭に城館遺構は残存している。主郭は約 10m ×約 20m の規模で、主郭の南東側には深さ約 4 m の堀切 1 本を設ける。堀切内には果樹園造成等に伴う後世の石垣などが構築されているが、部分的にとどまり、堀切は城館遺構であるとみてよい。また、主郭の北側にも曲輪を 1 ～ 2 面設け、その北側斜面には、およそ 14 本の竪堀で構成される畝状空堀群が構築されている。特に北西側斜面には竪堀頂部は横堀とも接続している。

以上のように、井上城と西ノ城はそれぞれで完結した縄張りを持つ単独の城郭遺構ではあり、両城との間についても自然地形であったとみられるが、両者の間隔は約 200 mと近接しており、両者は密接な関係にあったものと考えられる。

【史料】なし　【参考文献】6,8,9,119



第 98 図　井上城・西ノ城縄張り図（事務局作成）

筑後 110　井上館（いのうえやかた）

郡名　生葉郡　　別称　問註所氏館・大村居館　　種別　平地城館
図幅名　千足（西）/ 吉井（西）　　所在　うきは市浮羽町清瀬

【沿革】巨瀬川右岸、標高約 35m の清瀬の大村集落に位置する。『寛延記』生葉郡大村の項には「一館屋敷　一ヶ処　井上と申屋敷ニアリ、小坂ノ城主問住（註）所館ノ由申伝候。屋敷続キ城内と申所有リ、此廻リ堀跡御座候。今田方作所ニ罷成居申候」とある。また『浮羽の古城址』（文献 119）には「大村居舘跡」として、寛文の古城址書上を引き、大村集落の南東よりの一角に「井ノ上」という地域があり、そこを館跡とする。さらに同書では、「東西約五十間、南北約三十間、三方面（東南西）に堀をめぐらした跡と思われる用水路が現存している」とする。

【概要】大村の集落には館跡と推定される字「井ノ上」の地名の他、馬場、下屋敷、国光屋敷、屋敷田など、居館に関連するような地名が多く残される。ただし、『寛延記』にみえる「城内」の地名は残されていない。また現地には堀跡の名残とも思われるような水路が多く残されている。昭和 23 年の航空写真などからも、およそ 150 m～ 200m 四方の範囲が館跡の範囲と推測されるものの、周辺は条里地割が残されていて、その名残の可能性も考えられ、明確な根拠に欠けるため、詳細については今後の調査に委ねるほかはない。

【史料】なし

【参考文献】1,3,7 ～ 9,18,32,119

第 99 図　井上館周辺図（うきは市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）

第 100 図　昭和 23 年当時の井上館周辺航空写真
（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

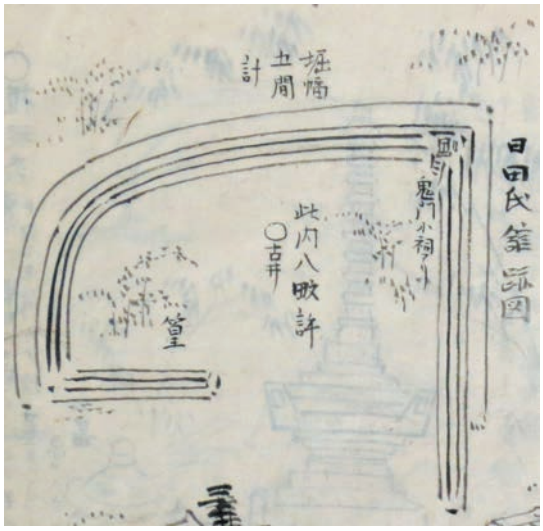
筑後 111　隈ノ上城（くまのうえじょう）

郡名　生葉郡　　**別称**　西隈上城・日田氏館　　**図幅名**　千足（西）
種別　平地城館　　**所在**　うきは市浮羽町朝田

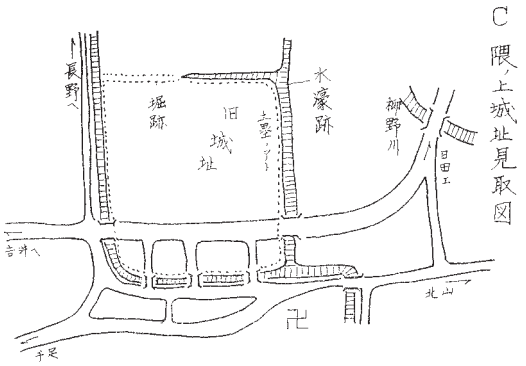
【沿革】浮羽町の市街地の東、標高約 40m の隈上川左岸に位置する。『軍談』には「西隈上村城跡」として「東西十八間、南北十一間、周廻ノ土手高七尺、長南北十間、東方ニアリ、南七間、西方ニアリ、東西二十七間、北方ニアリ、南ハ土手ナシ、北方ニ堀アリ、東方三十間、西方又堀アリ、南北八間」とあり、その様子が『生竹巡覧』に「日田氏館跡図」として掲載されている。また文献 118 には「隈ノ上城址見取図」として昭和初期段階の城跡の様子を作図している。

『軍談』などの地誌では、日田三郎永隆が平家追討の軍功により建久元年（1190）に生葉郡隈上庄を給い、同 7 年に築城したことや、その後星野高實がこの城に出張して大友方の兵を防いだことなどが記される。

【概要】第 102 図を元に現在の地割に当てはめてみると、ほぼその状況を復元することができる。周囲を巡っていたという土塁は既になくなっているが、現在、道などになってその範囲を知ることができるし、昭和 23 年当時の航空写真を見てみると、館跡の北側に堀の痕跡が水路などの形で残されているのがわかる。南北約 100m、東西約 120m で南側を除く三方に堀と土塁が巡っていた姿を復元することができる。江戸時代以来、良好な資料が

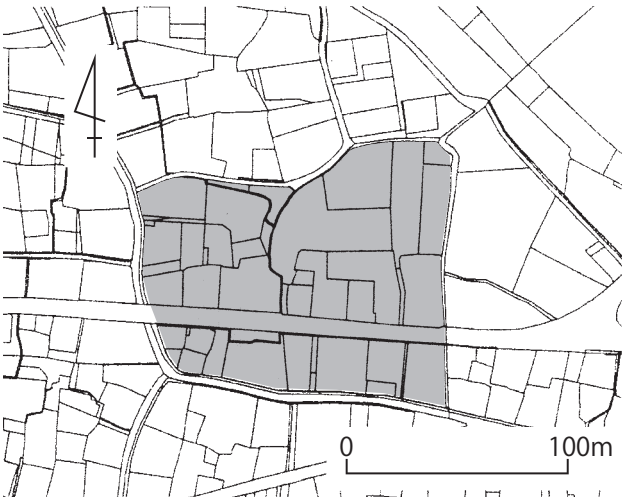


第 101 図　日田氏館跡図（『生竹巡覧』のうち・篠山神社蔵）



第 102 図　隈ノ上城址見取図（文献 118）

第 103 図　昭和 23 年当時の隈ノ上城周辺航空写真（国土地理院撮影・北側の濠が明瞭に見える）



第 104 図　隈ノ上城地割図（うきは市教育委員会提供図面を一部改変して事務局作成）

残されており、非常に明確に復元ができる重要な平地城館の事例と言えよう。
【史料】あり　【参考文献】1 ～ 9,18,32,118,119

筑後 114　長瀬城（ながせじょう）	郡名　生葉郡　　別称　原口城・西原口城　　図幅名　吉井（東） 種別　平地城館　所在　うきは市浮羽町高見

【沿革】筑後川南岸、大石堰より少し上流の西長瀬にある標高約 44m の城丸土神社の境内に位置する。『軍談』には「西原口村長瀬城跡」として「今庄屋宅ノ子丑ノ方ニアリ、天正中大友ノ臣、野村主殿居城也。又日田領主日田安芸守親永、日田ヲ逃出テ暫ク此城ニ居ル」とあり、『寛延記』もほぼ同様の記載がなされる。『浮羽の古城址』（文献 119）には字城丸の城丸神丸土神社境内にあたるとする。また、『生駒雅楽守覚書』（文献 120 所収）には秋月氏の持ち城の一覧として「筑後国生葉郡　長瀬　日田近江預り」とあり、長瀬城が天正 14 年（1586）段階には秋月氏の持ち城と認識されていたことが想定される。

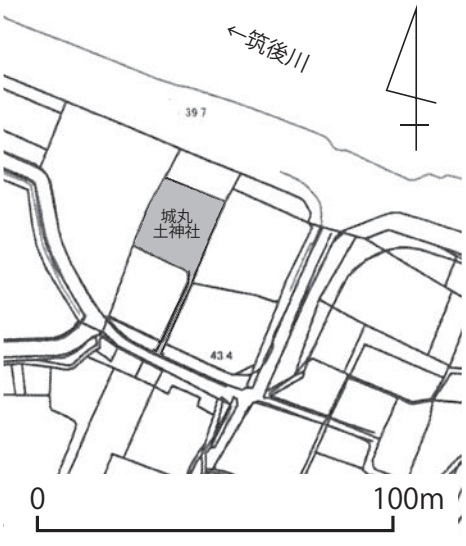
第 105 図　長瀬城主郭（城丸土神社）

【概要】筑後川に面した城丸土神社は、一辺約 20m 弱の方形区画となっており、周囲よりも 1 m ほど高くなっており、主郭のような城の中心的な場所であったと思われる。文献 119 にはその東側に二ノ丸、その下に三ノ丸を想定し、城の南側を大屋敷といい、小路、ハトバなどの地名が残るとされている。神社境内地周辺の正方形の地割などが、曲輪に当たる可能性も考えられるが、確実ではなく、神社があった場所以外の城館遺構については不明確である。

当城の川の対岸は筑前国で、真向かいに秋月方の城の一つ、鵜木城が所在する。『生駒雅楽守覚書』には鵜木城は日田近江が城主とされており、日田近江が鵜木城と長瀬城の両方を管轄していたことが想定される。このことから、長瀬城は大友方にあった時には、筑前の秋月領との境目を防衛する橋頭堡として、さらに秋月方にあった時には、筑後川を両岸でおさえ、河の往来をも監視することのできる重要な位置を占めていたことがわかる。

【史料】あり
【参考文献】
1,2,6 ～ 9,32,119

第 106 図　長瀬城・鵜木城周辺航空写真（昭和 38 年・国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）



第 107 図　長瀬城周辺地割図（網掛部が城跡。うきは市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）

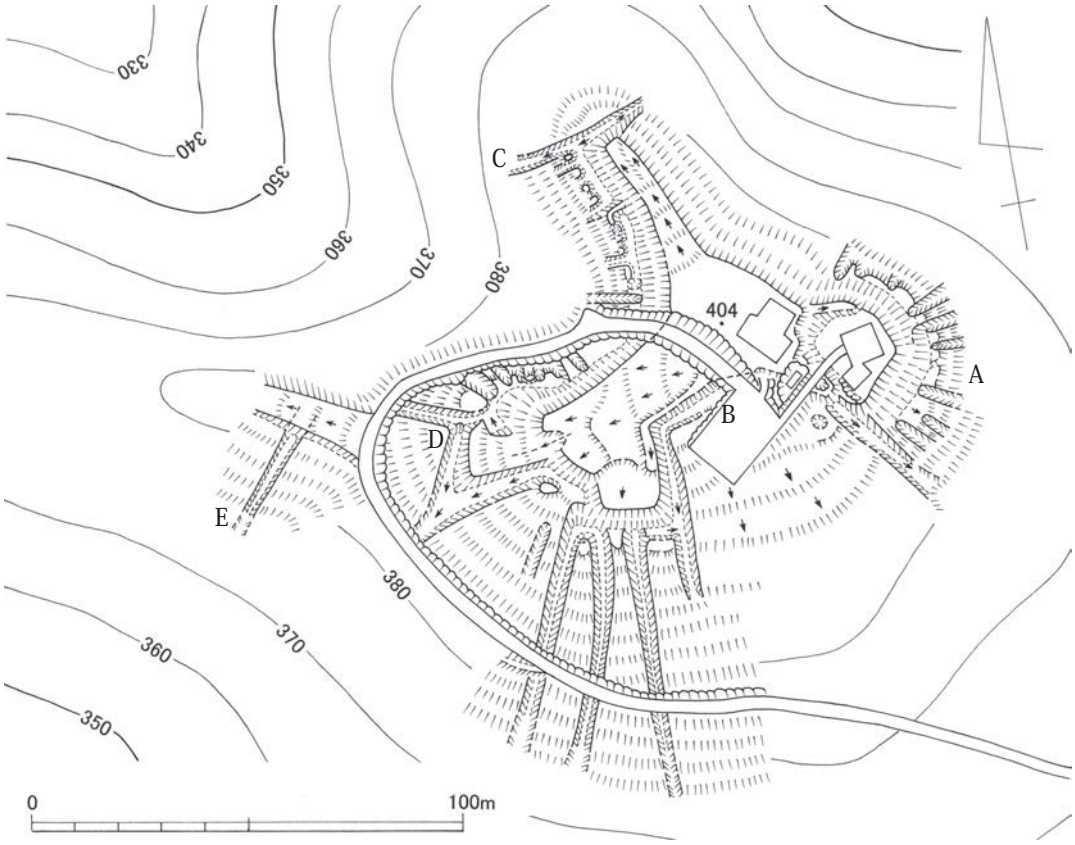
筑後 119　高井岳城（たかいだけじょう）

郡名　生葉郡 / 豊後国　別称　なし　　図幅名　千足（東）
種別　山城　　所在　うきは市浮羽町小塩・大分県日田市川下

【沿革】筑後川南岸、筑後と豊後との境に聳える高井岳山頂に位置する。『軍談』には「山上豊筑ノ境ニアリ。大友家ヨリ輪番ノ城也、天正十四年秋月ノ兵攻テコレヲ抜ク」とある。『寛延記』など他の地誌についてもほぼ同様の記載がなされている。

第 108 図　高井岳城遠景

【概要】 現在、高井岳の山頂は、テレビ中継塔と車道、駐車場により、かなりの改変が加えられており、縄張りを読み込むことが困難となっている。山頂部の主郭も車道によって分断されており、一見、二分された曲輪であるかのように見受けられるが、元は一個のいびつな形状の曲輪であったと想定される。この曲輪は縁辺部は自然の傾斜を残しているようであり、平坦面が明瞭ではない箇所がいくつも見られる。この主郭の周囲に、非常に多くの防御遺構が構築されている。主郭の東側は、中継塔によりかなりの改変が加えられているものの、その東斜面には約 10 本の竪堀群によって構成される畝状空堀群 A があって、東側からの敵の侵入に備えている。一方南側斜面は、



第 109 図　高井岳城縄張り図（事務局作成）

矩形に屈曲する横堀Ｂとそこから４本の竪堀が派生しており、城内でも一番長大な竪堀が掘られている場所である。この横堀Ｂは東側で車道に切断されているが、さらに東側の畝状空堀群Ａに接続していた可能性も考えられるが、後世の改変が激しく、はっきりとはわからない。一方主郭の北西側斜面は北端部に堀切Ｃを設け、そこから短小な竪堀群を巡らし、西側の尾根上に築かれた堀Ｄにまでくまなく構築されている。さらに西側尾根にはＥ地点にも半分は山道により埋没しているものの、堀切が設けられている様子を窺うことができる。

以上のように、高井岳城は、広い単独の曲輪の周囲に約 30 本もの竪堀からなる畝状空堀群を巡らしており、相当厳重な防備を施しており、まさに大友方の筑前・筑後方面の境目の城として重要視されていたことがわかる。

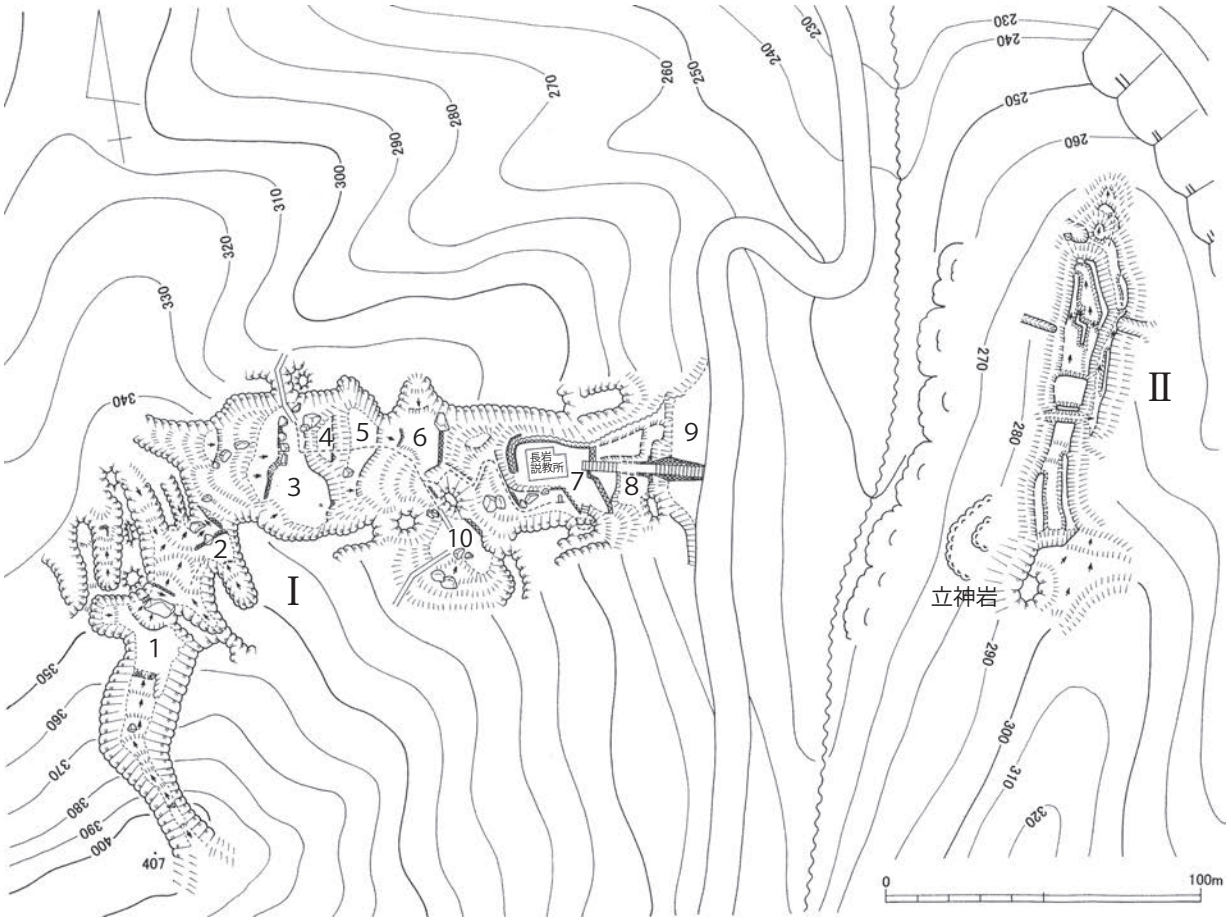
【史料】あり　【参考文献】1 ～ 4,6 ～ 8,**9**,32,**104**,119

筑後 123　長岩城（ながいわじょう）	**郡名　生葉郡**	**別称　なし**	**図幅名　千足（東）**
	種別　山城か	**所在　うきは市浮羽町新川**	

【沿革】筑後川支流、新川上流・三寺拂から葛籠の集落へ上る途中､奇勝七ツ岩で有名な長岩の谷に位置する｡『軍談』には「新川村長岩城跡」として「山腹岩間ニアリ、本丸北面東西十間、南北十五間、二ノ丸東西十間、南北十五間」とあり、長谷部氏が築城した後、問註所統景が居城し、天正年間には大友氏の配下であったことなどが記される｡『寛延記』などの地誌類もほぼ同様の記載がなされている。

【概要】　標高 270 m～ 350 mの間の谷部に本城部Ⅰが位置する。谷の両側は高さ 10 mを越える絶壁となっており、周囲からは隔絶された空間となっている。その谷には石垣などを構築することで、何段かの曲輪が造成される。谷上部の１には一辺約 10 m四方の曲輪を置き、そこから谷の下方向に２～９の曲輪面が並ぶ。３・６・７は特に広い空間となっており、谷を隔てた 10 の曲輪面とあわせ、城内でも主要な場となっていたことが想定される。７は長岩説教場の建物が建てられ、かなり改変が加えられているが、城内の曲輪であったと想定される。９については道路と同一面となって、改変が加えられていて、曲輪面を反映したものかどうかは不明である。城内の各所には石垣が構築されており、一見、城域ではないようにも思われるＡにも土留めの石垣が組まれており、谷の両側の隙間からの敵の進入に備えている。このようにⅠは、尾根上に曲輪群を展開する一般的な中世山城とは大きく異なった構造を呈しているが､見てきたような人工造成段が形成されていることや、さらには６の曲輪では平成 10 年（1998）に発掘調査が

第 110 図　長岩城石垣（上）・曲輪（中・長岩説教所）・長岩城Ⅱ遠景（下・中央に立神岩）



第 111 図　長岩城縄張り図（事務局作成）

行われ、中世の遺物や遺構が確認されている（発掘調査の詳細については、227 ページを参照）ことからも、中世城館とみて間違いないであろう。また、Ⅰの川を挟んだ東側の丘陵、立神岩の尾根上Ⅱには、土塁で囲まれた曲輪群が展開する。堀切や矩形に折れた土塁など、かなり手の込んだ縄張りである。確かに谷部Ⅰは、Ⅱからは丸見えの状態であり、ここを守城側が押さえておかないと、城の内部の動向がすべて見えてしまう弱点となる場所であり、ここを城郭化して押さえとしていたものと考えられる。『城郭』では「長岩切寄」として報告がなされているが、ここでは長岩城として一つにまとめて報告する。

このように、長岩城は一見、中世山城らしからぬ構造を呈しているが、発掘調査の成果や、川を挟んだⅡの曲輪群とも併せ考えると、中世山城の遺構とみてよく、問註所氏の守りの要となった城であったといえよう。

【史料】あり　【参考文献】1 ～ 8,**9**,32,119

筑後 124　松尾城（まつおじょう）	郡名　生葉郡	別称　田籠城	図幅名　千足（東）
	種別　山城	所在　うきは市浮羽町田籠	

【沿革】長岩城の川を挟んで東側の山塊の最頂部に位置する。長岩城からは南東側に当たる。『軍談』では「田籠村松尾城跡」として「東西十三間、南北五間、二ノ丸東西十六間、南北十間、大友氏出城也」

とあるが、『寛延記』には「古城　松尾　問住（註）所出城と申伝候」とあり、文献 119 でも問註所氏の長岩城の出城と推察している。

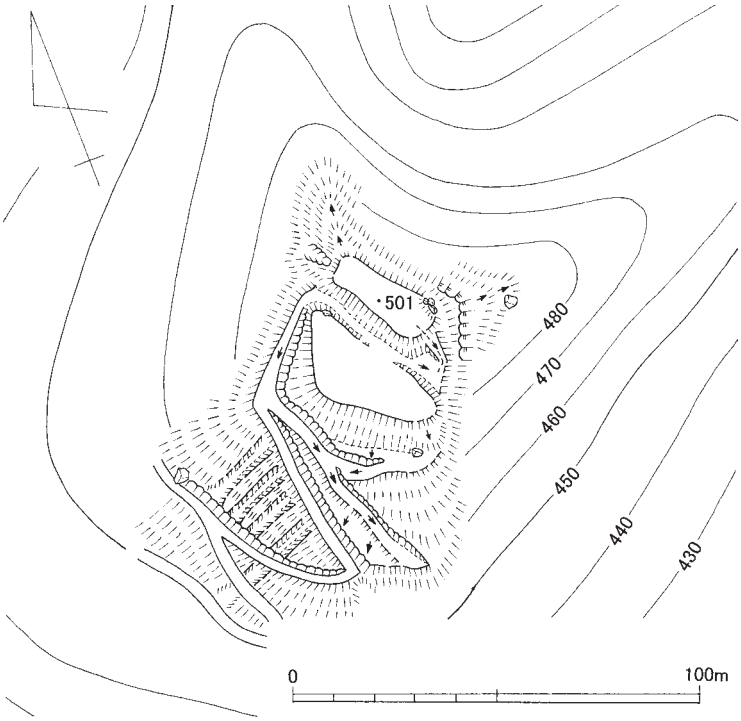
【概要】　標高 501 mの頂部には約 30 m×約 10 mの長方形を呈する主郭を置き、その南西側にさらに広い曲輪 1 面を設ける。両者の曲輪の間には、堀状の窪みが見られ、一見後世の山道によるものかとも思うが、東側斜面にまで続いているため、堀などの城館遺構を反映したものと考えられる。また曲輪上には焼けた壁土のような遺物も散布している。

これらの曲輪から下方については、後世の山道造成が入っており、非常に地形を読み込むのが困難であるが、南西側斜面に明瞭に 4 本の竪堀群が残されており、その竪堀群と曲輪との間にも小曲輪などの城館遺構も想定されるが、やはり山道造成が密に入っていて明確には判明しない。主郭の北側斜面は断崖があったり、斜面が急だったりして堀などの明確な城館遺構は確認されない。以上のように曲輪 2 面と竪堀群によって構成される簡素な縄張りであると言えよう。

　また、当城の南側、田籠の集落へ下りる尾根上には、松尾城での戦いにおける供養塔「千人塚」も残されている。

【史料】あり　【参考文献】1 ～ 9,32,119

第 113 図　松尾城遠景（上）・曲輪面（中）・竪堀群（下）



第 112 図　松尾城縄張り図（事務局作成）

第 114 図　松尾城近くの千人塚

筑後 125	高岩城（たかいわじょう）	郡名　生葉郡	別称　寺ん城	図幅名　十籠（西）
		種別　山城	所在　八女市星野村	

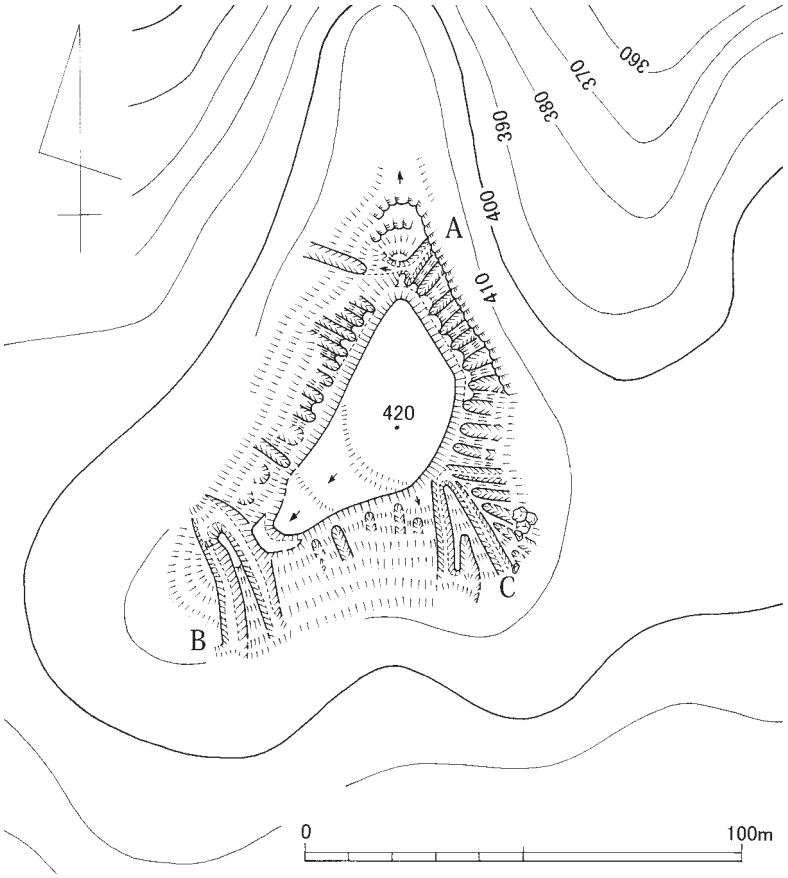
【沿革】星野村十籠の集落の東側に聳える標高 420m の頂部に位置する。『軍談』には「星野村高岩城跡」として「東西二十間、南北十五間、星野重忠築之」とし、あるいは星野鎮実や樋口次郎太郎などが築いたともある。

【概要】標高 420 mの頂部に全長約 50 mの略三角形のやや広い主郭を置いている。北側斜面には堀切 1 本（図中 A）と、南西側斜面 B にも堀切 2 本を構築して尾根上の通行を妨げるとともに、南側斜面を除くすべての斜面には 30 本を越える竪堀群により畝状空堀群が構築されている。特に主郭の南東側斜面 C は単純に竪堀を並べるのではなく、尾根上に堀が集中するように密に構築している様子が見受けられ、堀切と畝状空堀群とによって防御を固めようとする意図を読み取ることができる。全長約 100 mの単郭構造の城郭ではあるが、他の生葉郡の城郭と同じように畝状空堀群を基調とする高度な防御技術により構築された城郭であることが分かる。

【史料】なし

【参考文献】1 ～ 4,6 ～ 8,9,13

第 115 図　高岩城遠景（上）・堀切（下）



第 116 図　高岩城縄張り図（事務局作成）

筑後 126	白石城（しらいしじょう）	郡名　生葉郡	別称　なし	図幅名　十籠（西）
		種別　山城	所在　八女市星野村	

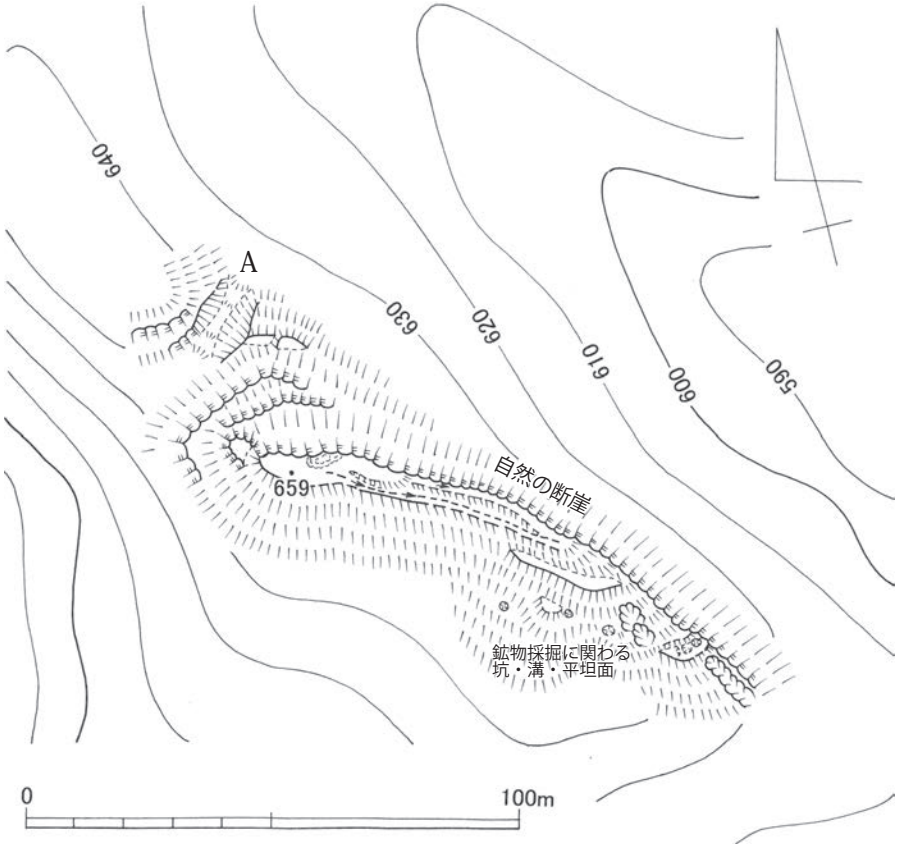
【沿革】星野村杉ノ久保集落の西側に聳える城山（標高659m）の山頂に位置する。『軍談』には「同村（星野村）白石城跡」として「東西五間、南北十五間、（星野）重忠甥の正實居之」とあり、この二人が相争っていたことが記され、また星野胤実が築城したことなどが記される。

【概要】 城山山頂が主郭とみられるが、非常に痩せ尾根であり、北側斜面は全体的に断崖絶壁となっており、城郭遺構を構築する状況でもない。尾根の頂部が若干人工的に平坦に造成されている以外は、北西側斜面の鞍部に堀切Aを設ける程度の縄張りである。主郭の南側には人工的な平坦面なども見られるが、こちらは近世以降に鉱産資源の採掘がなされており、採掘坑や採掘溝がいくつも残されている状況であり、城館遺構と判断することは難しい。以上のように、当城は堀切と主郭周辺を若干造成した程度の非常に簡素なつくりの城であったと推察される。

【史料】あり

【参考文献】1 ～ 8,9,13

第 117 図　白石城曲輪（上）・堀切（下）

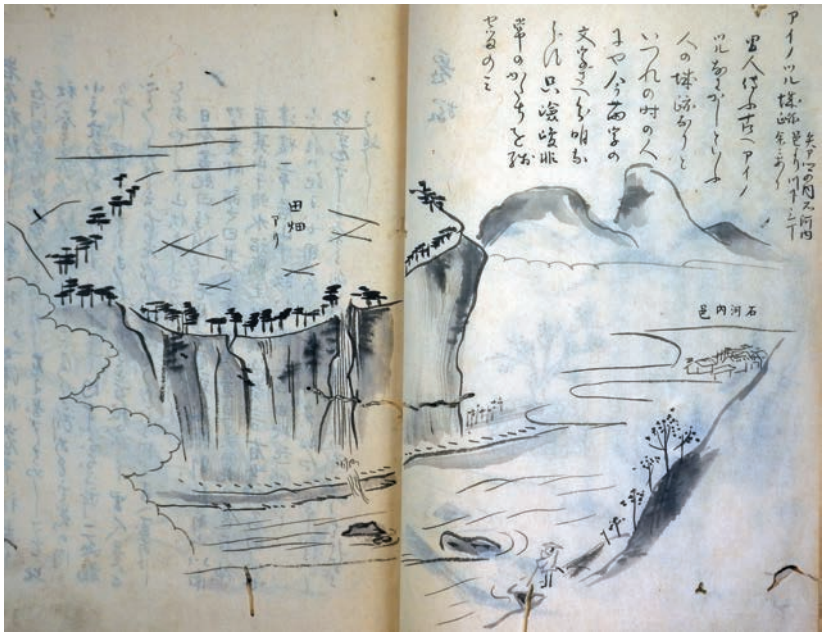


第 118 図　白石城縄張り図（事務局作成）

⑦上妻郡

筑後 133　アイノツル城　　郡名　上妻郡　　別称　なし　　図幅名　宮ノ尾（東）
種別　丘城か　　所在　八女市矢部村北矢部

【沿革】矢部川流域の日向神ダム最上流の鬼塚集落の北側丘陵上に位置するとされる。江戸時代に著された『山土産』には「里人伝ふ、古へアイノツルなにがしといふ人の城跡なりといづれの時の人にや今苗字の文字さへ分明ならず」とあり、絶壁の丘陵上の城跡に「田畑アリ」との記載の入った絵を描いている。



第 119 図　アイノツル城跡図（『山土産』のうち。久留米市立中央図書館蔵）

【概要】現状は茶畑となっており、江戸時代の『山土産』に記されている通り、田畑の現状に変わりはなく、明確な城館遺構は確認できない。このように既に江戸時代には城跡自体が伝承地となってしまっていて、詳細な構造は不明となっており、現状もそれとは変わらず詳細は不明と言わざるを得ない。

第 120 図　アイノツル城跡の現状（茶畑）

【史料】なし

【参考文献】4,6 ～ 9,13,35

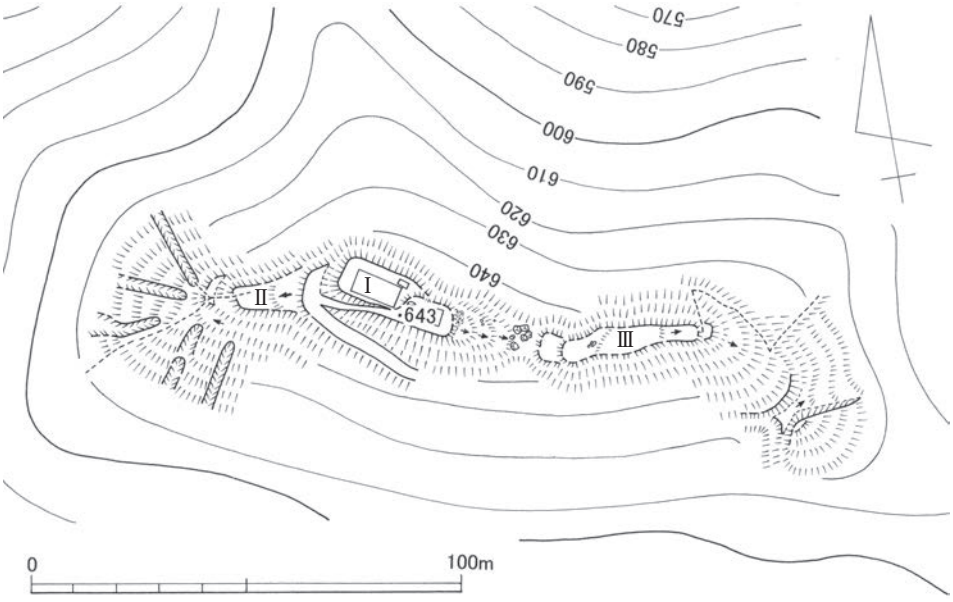
筑後 134　高屋城　　郡名　上妻郡　　別称　矢部山城　　図幅名　宮ノ尾（東）
種別　山城　　所在　八女市矢部村矢部

【沿革】矢部川上流の左岸、矢部の集落一帯を見渡せる城山（標高 642m）山頂に位置する。『軍談』には「大淵村高屋城跡」として、応安年間に征西将軍懐良親王に随行して九州へ下り、その子孫が築城した五條氏代々の居城で、天正年間は五條左馬頭が居城したと記す。

第 121 図　高屋城遠景

【概要】城山の山頂には現在、防災無線の基地局が建

てられており、若干損なわれている部分もあるが、その周囲には明瞭に城郭遺構が残存している。現在、基地局が建てられている平坦面Ⅰ（約30ｍ×10ｍ）を主郭とし、西側にⅡの曲輪を置く。さらにその西側斜面には放射状に竪堀約５本が掘られている。一方、Ⅰの東側は自然地形に近い平坦地形が連続し、Ⅲには若干造成が加えられた平坦面となっている。その南東側斜面には深さ約２ｍ、幅約５ｍの堀切１本を設け、城域を画している。



第 122 図　高屋城縄張り図（事務局作成）

第 123 図　高屋城からの眺め

【史料】あり

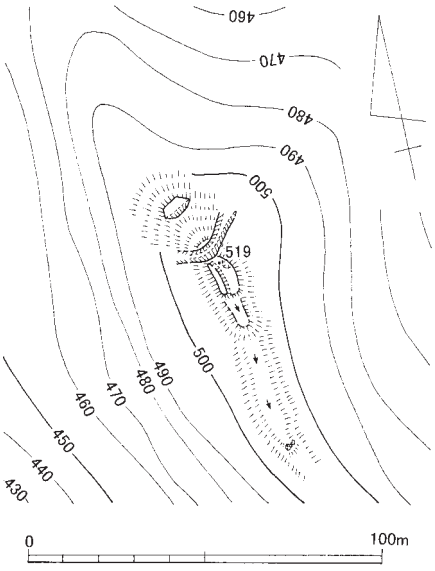
【参考文献】2 ～ 9,13,22,35

筑後 137　築足城（つきあしじょう）

郡名 上妻郡　　別称　月足城　　図幅名 十籠（西）/ 宮ノ尾（西）
種別 山城　　所在　八女市黒木町大淵

【沿革】大淵の月足の集落の南、標高 519m の山稜上に位置する。『軍談』には「五條左馬頭家臣築足弾正左衛門代々居城也」とあるが、文献 13 には『邪馬台国探見記』（文献 22 所収）を引き、五條頼元が前征西宮将軍・懐良親王を擁護して居城したことなども記している。

【概要】 三角点のある標高 519 ｍの頂部には、10 ｍ× 5 ｍで西側に土塁状の高まりを持つ平坦面があり、その南側に自然の痩せ尾根が続いている。一見それだけだと城館遺構であるか躊躇するが、曲輪の北側には曲輪側からの落差 3.5m、その反対側の深さ約 0.5m の堀切 1 本が確認でき、城館遺構であるとみられる。城域としては非常に狭く、物見くらいの役割しか果たせなさそうではあるが、明瞭な城館遺構があるため、ここが月足城ではないかと考えられる。



第 124 図　築足城縄張り図（事務局作成）

なお、県の分布地図（文献 140）にはここの他、麓の集落にも「月足城」の存在を示しているが、明確な城館遺構はなく詳細は不明である。

【史料】なし　【参考文献】1,2,4 ～ 9,13,22

筑後 139　地下名城（じげなじょう）

郡名　上妻郡　**別称**　大岩空堀城　**図幅名**　十籠（西）/ 黒木（東）
種別　山城　**所在**　八女市黒木町笠原

【沿革】矢部川支流・笠原川流域の笠原・庄屋村集落の北に聳える尾根上に位置する。『軍談』には『鹿子尾村地下名城跡』として「大岩空堀城ト號ス、跡主詳ナラス」とある。

【概要】尾根の先端、標高約 480m 地点には明治元年（1868）に建てられた石祠が立っており、そこが一辺約５m 四方の主郭となる。主郭の東西には若干の小曲輪も見られるが、規模の大きなものではない。主郭の北西側に深さ約２m の堀切２本を構築し、尾根上からの攻撃に備えている。西側の尾根下方向には何ら防御遺構はない。曲輪が極端に狭く、城館遺構であるか躊躇するところではあるが、２本の堀切はしっかりと構築しており、城館遺構であることを示している。

【史料】なし

【参考文献】1,2,5 ～ 9,13

第 125 図　地下名城主郭

第 126 図　地下名城縄張り図（事務局作成）

筑後 140　高牟礼城（たかむれじょう）

郡名　上妻郡 / 生葉郡　**別称**　高群城　**図幅名**　黒木（東）
種別　山城　**所在**　八女市黒木町笠原・星野村

【沿革】八女市黒木町笠原と同市星野村との境に聳える高峰（標高 567m）の山頂部を中心に位置する。『軍談』には「椿原村高牟禮城跡」として「本丸縦十二間、横十間、二ノ丸縦百二十間、横二十六間、龍造寺ノ臣多久長門、成富十右衛門、大友ノ兵ヲ防カン為ニ来テ此城ヲ築テ以テ猫尾城の子城トシ、椿原式部ヲ以テ城代トス」とあり、猫尾城の出城であることを示す。『寛延記』にもほぼ同様の記載がなされる。また、『稿本八

第 127 図　高牟礼城遠景（奥側の山）

女郡史』（文献 13）にはさらに天正 12 年（1584）の大友方による猫尾城攻めの際には、椿原式部は大友方に寝返ったために猫尾城は落城、猫尾城主・黒木氏の家臣らに式部は首をはねられ、高牟礼城は落城したことなどが記載される。

【概要】城域は大きく、高峰山頂部とその東、約 350m の頂部の二箇所から構成される。高群山頂（標高 567m）には南北約 25m、東西約 20m の主郭Ⅰを置くが、主郭の西側から南側にかけては山道造成によりかなり地形が改変されてしまっている。しかし、Ⅰの北西側には堀切Ａがあり、そのさらに北側に帯曲輪を巡らし、北側斜面には竪堀２本を構築し、北側からの備えとする（図中Ｂ）。また、主郭の東側も改変地形があり、かなり広い平坦地形が広がっているが、明瞭な平坦地形とは言えず、自然地形を残しているかのような印象を受ける。その西側Ｃには平面逆Ｖ字形の堀切２本を構築し、敵の進入を防ぐが、斜面下の堀切の片側の堀は 50m ほどの長さを持つ長大なものとなっ

第 128 図　高牟礼城縄張り図（事務局作成）

ている。また、山頂部一帯の曲輪群の東側斜面には、約 17 本の竪堀群 D が整然と並び、竪堀群の下部には横堀 E が巡っている。E のさらに東外側にも帯曲輪 F がテラス状に巡っており、東側斜面からの厳重な備えを物語っている。また、F の北端からは北東方向に向けて細い尾根が伸びているが、その尾根上の G は土塁で囲まれた細長い空間となっている。その土塁はさらに H で屈曲したのち、さらに 250m ほど、一部に石垣を伴って直線的に伸び、最終的にはⅡの曲輪にたどり着く。Ⅱの曲輪は内部が自然地形を残すかのように不明瞭な平坦面だが、西側を除く曲輪縁辺部は土塁が巡る長方形を呈する曲輪となっている。さらに東側から南側にかけては土塁に併行して横堀 J が巡り、さらに K・L 地点では竪堀と接続し、防御を高めている。

以上のように当城は高群山頂の主郭Ⅰを中心とした曲輪群と、そこから東約 350m 離れた尾根上頂部に設けられた曲輪Ⅱに二分されるが、それらはそれぞれ畝状空堀群や横堀で防御されつつも、ⅠとⅡとの連絡を保つために、長大な土塁ラインを構築している。八女地域においては高度に発達した縄張りを持つ規模も大きい城郭であり、奥八女地域有数の城郭であったことが分かる。

第 129 図　高牟礼城曲輪ⅠとⅡの間の土塁ライン（上）・曲輪Ⅱの横堀（下）

【史料】あり　【参考文献】1,2,4,6 ～ 8,**9**,13,**91**,**132**

筑後 141　熊野堂城（くまのどうじょう）	郡名　上妻郡	別称　大渕城	図幅名　黒木(東)
	種別　山城	所在　八女市黒木町大淵	

【沿革】矢部川上流左岸、大淵の大渕集落の背後に聳える標高 332m の山頂部に位置する。『軍談』には「同村（大渕村）熊野堂城跡」として「五條左馬頭家臣大淵三河守代々居城也」とある。

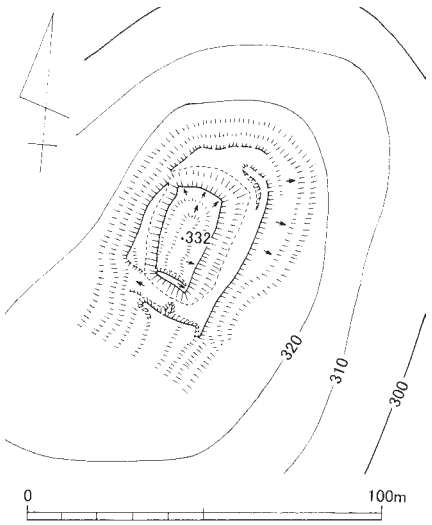
【概要】丘陵頂部に位置し、頂部には南北約 25m、東西約 15m の主郭を置く。主郭の南縁辺部には土塁も見られ、主郭の周囲には帯曲輪が巡り、南側は深さ３～４ｍの堀切に、北東隅部は横堀状になる。全長約 50m の小規模城館といえよう。

【史料】なし

【参考文献】

1,2,5 ～ 8,**9**,13,22

第 130 図　熊野堂城遠景



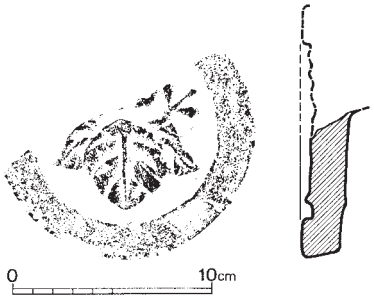
第 131 図　熊野堂城縄張り図（事務局作成）

筑後 143	猫尾城（ねこおじょう）	郡名　上妻郡	別称　黒木城	図幅名　黒木（西）
		種別　山城	所在　八女市黒木町木屋	

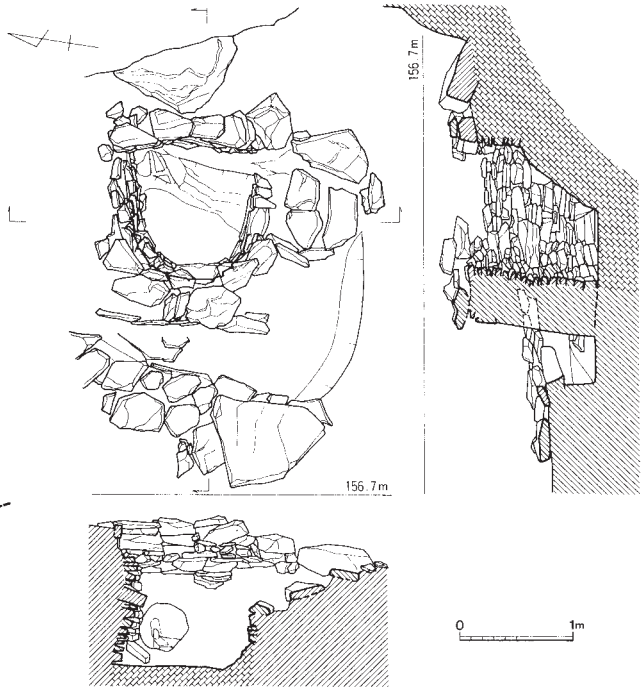
【沿革】矢部川とその支流・笠原川が合流する付け根に当たる標高 240m の城山（猫山）山頂に位置する。『軍談』には「木屋村猫尾城跡」として「山城也、本丸西面南北三十間、東西十五間、二ノ丸ハ西ニアリ」とし、本丸と二ノ丸との間に五十間の馬場、本丸の東側に三ノ丸の存在などを記す。さらに当城が、薩摩根智目城城主の源助能が黒木の地を訪れ、猫尾城に居城して黒木姓を名乗り、以後黒木氏代々の居城としたこと、さらに天正 12 年（1584）には豊後勢が攻めたこと、さらには田中吉政の時代には辻勘兵衛を城代としたことなどが記される。なお、辻勘兵衛は当城に知行高 3,650 石、組下の書上げ 8 名 3,230 石をもって入城しており、元和の一国一城令により廃城となったとみられる。

【概要】黒木町の東側背後に聳える城山の山頂部には、東西約 50m、南北約 80m の主郭を築き、主郭周りには、虎口やそれに付随した櫓台、さらには横矢を効かせるための塁線の屈曲がみられ、周囲は石垣で固められている。石垣の石材は近隣で採取できる板石状の結晶片岩で、その石材を用いて垂直に積まれており、現在神社が建てられていることもあって、一見、城の石垣であるかどうか判断に躊躇するところであるが、北東部の入隅部 a などの積まれ方を見てみると、傾斜を持った算木積みであり、石垣の全てが城に伴うものかどうかは判断が難しいが、①の周囲には城の石垣があったと考えて問題はないだろう。また、昭和 63 年度から平成 2 年度にかけて行われた発掘調査では、主郭の曲輪面上では礎石建物に用いられたとみられる礎石

第 132 図　猫尾城遠景（上）（左奥には高牟礼城）・石垣 a（下）



第 133 図　猫尾城出土桐文軒丸瓦（文献 91）



第 134 図　猫尾城跡で検出された石組井戸（文献 91）

の他、虎口 K1 には門礎と見られる礎石も検出されており、礎石立ちの門や建物があったことが類推される。また、出土遺物では、①の南西隅の石垣上のトレンチから、小型だが桐文の軒丸瓦が出土している。報告書では神社に伴うものではないかとしているものの、城に伴う可能性もあるかもしれない。これらの主郭①の石垣、礎石建物は田中吉政時代に構築されたものであろう。

主郭①の東側には大型の堀切 H1、さらに南側斜面には 4 本の竪堀群がある。特に堀切 H1 は、『軍談』では天正 12 年の立花道雪を初めとする豊後勢の猫尾城攻略戦の際に掘られたものと記されている。おそらく戦国期のものとみてよいだろう。また、H1 の東側は緩斜面となっており、石垣や土塁が構築されていて、『軍談』にて「三ノ丸」とされているものである。しかしながら、これらの遺構は後世の畑作業等によって生じたものであり、城館遺構ではないと判断される。

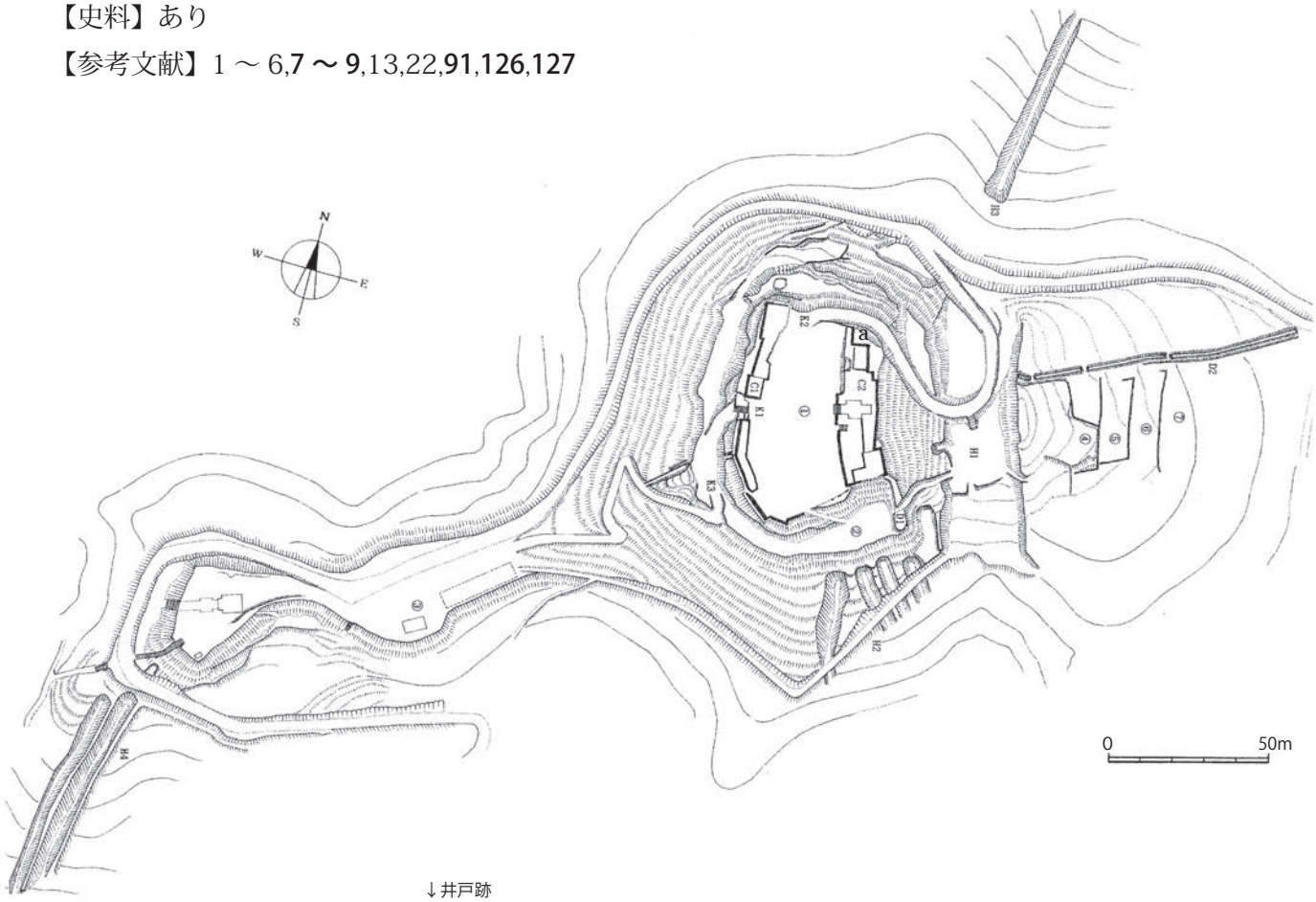
一方①の西側は、②の腰曲輪が取り巻き、西側に尾根が伸びている。①から西へ約 150m 先の尾根の頂部は薬師堂が建てられているが、これが二ノ丸であり、①との間の細長く伸びた③が、『軍談』のいう「馬場」と見られる。二ノ丸には竪堀２本（H4）が構築されるのみで、石垣などの遺構は確認されず、おそらく田中氏時代には使用されていない戦国時代の城の姿であると考えられる。

なお、これらの曲輪群の南側、標高 160m 付近の谷部には、地元の伝承で「殿様の井戸」があったが、農道を造った際に埋もれていた。発掘調査時に併せて調査が行われ、石段が設けられた井戸が検出されている。断定は難しいが、城に伴う水の手であったものと考えられる。

当城は中世段階では国人領主黒木氏の居城として、織豊期においては柳川藩 32 万石の支城の一つとして機能した当地域の城の中でも重要な存在であったと言えよう。

【史料】あり

【参考文献】1 ～ 6,**7 ～ 9**,13,22,**91**,**126**,**127**



第 135 図　猫尾城縄張り図（文献 127・木島孝之作成）

筑後 145　兎城（うさぎじょう）

郡名　上妻郡　　別称　鬼城　　図幅名　黒木（西）
種別　山城　　所在　八女市黒木町土窪

【沿革】矢部川を猫尾城からさらに下った南岸、土窪の下名集落の南東背後の丘陵突端頂部に位置する。『稿本八女郡史』（文献 13）には「兎城址」として「右城主年號詳ならす、込野を過きて右に在り」と『調氏記録』や『上妻名勝図絵』を引いて記す。県の分布地図（文献 140）では「鬼城跡」とし、その後の文献においても「鬼城」とされるが、「兎城」の誤字であるとみられる。

【概要】標高 166m の丘陵突端部に位置する。山頂一帯、主に山頂から東側にかけては果樹園による造成が見られ、後世の改変がかなり想定される場所である。山頂部には全長約 25m、幅約 10m 弱の主郭を置き、西側を除く三方に帯曲輪を巡らしている。東側から南側にかけては後世の段造成の影響が色濃く、城があった当時の状況からはかなり改変されているようであるが、主郭の北側には堀切とみられる掘り込みがあり、城館遺構の名残とみられる。全長 40m ほどの小規模な城館であったとみられる。

第 136 図　兎城堀切

第 137 図　兎城縄張り図（事務局作成）

【史料】なし

【参考文献】9,13,140

筑後 146　生駒野城（いごまのじょう）

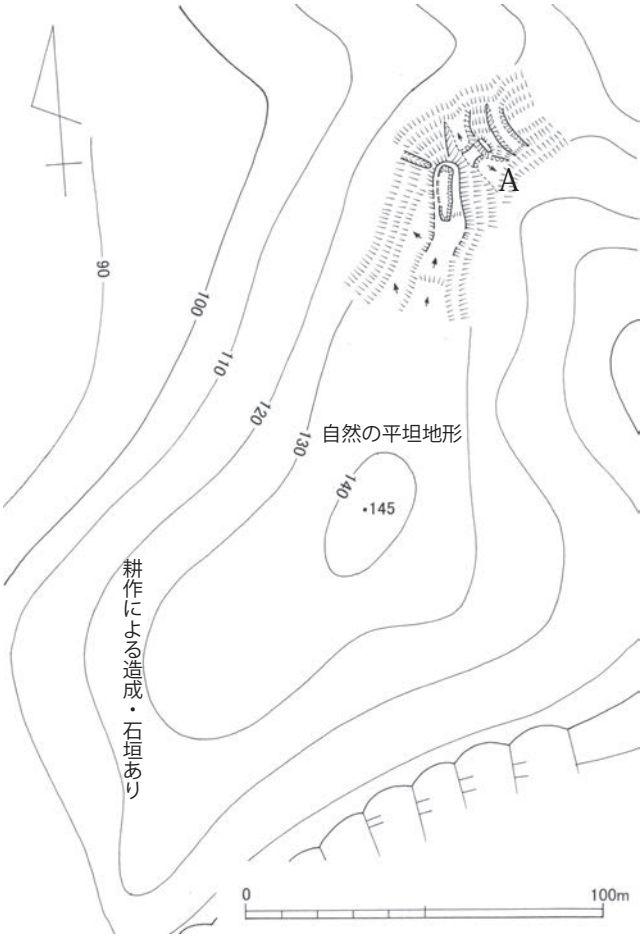
郡名　上妻郡　　別称　轟城　　図幅名　黒木（西）
種別　丘城　　所在　八女市上陽町下横山

【沿革】矢部川支流の星野川北岸、八女市下横山の轟集落の背後の丘陵上に位置する。『軍談』の「川崎庄山内村犬尾城跡」の項の文中、犬尾城の東側の茶臼山、城跡山の両城の説明をした後に、「其東ニ生駒野名アリ、生駒山アリ、北河内村地下ノ内

第 138 図　生駒野城遠景（左）・
A 地点武者溜まり状の窪み（写真左側に土塁が見える）（右）

也、此山ハ砦ノ跡ト見ユ」とあり、犬尾城の砦としている。『種々』の八女郡横山村轟の項に「轟城址」と名を掲げているが、場所から考えて生駒野城を指しているものとみられる。

【概要】城の位置は、下横山の轟集落に面した丘陵先端の頂部（標高 145m）に想定されているが、現地は自然地形であり、西側斜面などには後世の畑地利用の際の段造成や石垣などが残るのみとなっている。しかし、頂部北側の尾根続きの鞍部 A には、深さ約 5 m の大堀切をはじめとする堀切 2 本とその南側に接して、土塁状の高まりに囲まれた、あたかも武者溜まり状の城館遺構が確認できる。おそらく城域としては堀切から南側の丘陵全体ということとなろうが、明確に城館遺構が確認できるのは、尾根の野首のようになった鞍部 A だけである。極力人為的な造作は避けて城とした結果であろうか。土塁に囲まれた空間についても現状では、堀切側に対する武者溜まりのような防御遺構の一つとみておくのが妥当かと思われる。いずれにせよ、これらの遺構が当城の遺構であることに疑いを挟む余地はなかろう。



第 139 図　生駒野城縄張り図（事務局作成）

【史料】あり

【参考文献】1,2,6 ～ 9,13

筑後 148　熊ノ川城（くまのかわじょう）

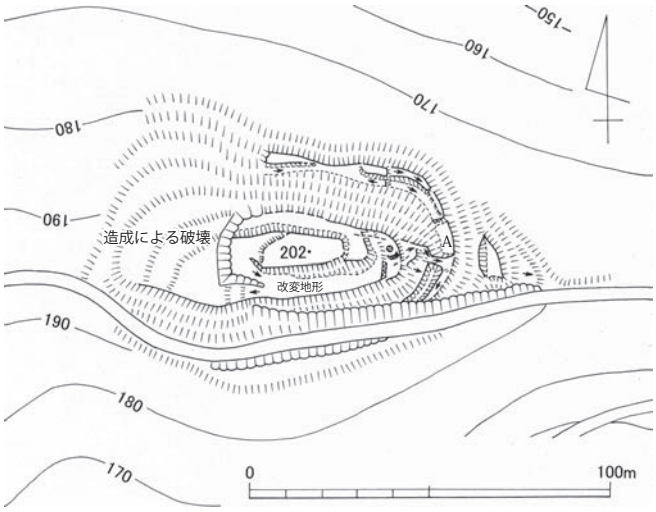
郡名　上妻郡　　**別称**　熊河城・辺春城　　**図幅名**　野町（東）
種別　山城　　**所在**　八女市立花町上辺春

【沿革】矢部川支流の辺春川上流域、松尾川の北岸の丘陵頂部に位置する。『軍談』には「同所（邊春村）熊河城跡」として「此城時代詳ナラス」とあるが、さらに『稿本八女郡史』（文献 13）では「熊川山に在り」とし、城主、年代未詳として、さらには山頂に巡る濠の存在から城ではなく墳墓ではないかとする。ただ、上辺春の場所にあって、多くの古文書に「辺春城」が出てくることから、辺春氏の本城・辺春城ではないかと考えられており、『福岡県の城』では「辺春城」として紹介されている。

第 140 図　熊ノ川城横堀

【概要】城がある尾根上頂部は、最近まで畑地となっており、かなりの改変が想定されるものの、明瞭に城館遺構を確認できる箇所は残されている。曲輪があったとみられる丘陵頂部は、何段か平坦面が展開しているが、開墾等によりどれだけ城館遺構

として形状を残しているのかは不明である。しかし、その東側から北側にかけての斜面下Aには明瞭に横堀遺構が巡っている。南側は山道造成により切られている。さらに西側に関しても、畑地造成により大々的に掘削、埋め立てがなされており、地表観察では城館遺構は確認できなくなってしまうほどの改変状況である。『邪馬台国探見記』（文献 22 所収）には堀が巡ることから城ではなく古墳だったのではないかと述べているが、明らかに城の横堀であり、またこの記載から大正６年頃にも横堀を見ることができたという積極的に城館遺構となる証拠記載になるともいえよう。



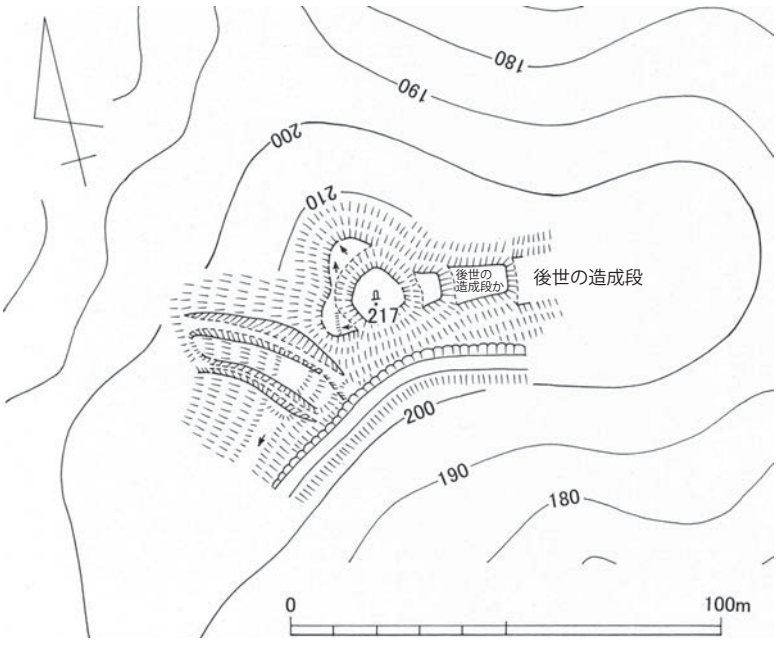
第 141 図　熊ノ川城縄張り図（事務局作成）

以上のように、城の西側半分は完全に破壊されているものの、東側は曲輪の周囲に横堀を巡らして防御していた様子を窺うことができる。

【史料】あり　【参考文献】1 ～ 3,5 ～ 7,**8**,**9**,13,22,33

筑後 149　高朶城（たかすだじょう）	郡名　上妻郡　　別称　蒔原城・蒔城・高須田城・高朶谷蒔城
	図幅名　野町（東）　種別　山城　　所在　八女市立花町下辺春

【沿革】辺春川左岸から高須田の集落へ分岐する南側の丘陵上に位置する。『軍談』には「邊春村高朶蒔城跡」として「天正ノ初､邊春勘解由居之」とある。『稿本八女郡史』（文献 13）には『調氏記録』を引いて、永禄７年（1564）頃に辺春に部春入道紹真が入り、天正の頃には黒木氏一族の辺春薩摩守鎮信（あるいは勘解由､式部少輔）が居城したことや、辺春城を巡る大友方と龍造寺方との争いの様子が記され、当城が辺春城であるとみているようである。



第 142 図　高朶城縄張り図（事務局作成）

【概要】標高 217m の山頂部には明治 25 年（1892）に建てられた「柚本啞山」の碑が建っているが、そこが主郭であり、一辺 10m 弱の曲輪で、その西側に帯曲輪を巡らせる。さらにその南西側の尾根上に深さ約２ｍの堀切２本が構築され、尾根伝いからの敵の攻撃に備えている。一方、主郭の東側には階段状に明瞭な平坦面が展開している。しかしながら、尾根を下ると非常

に多くの段状造成を確認することができ、山仕事など、後世の改変が想定されるため、城館遺構とは考えにくい。以上のように、小規模な主郭及びそれに付随する小曲輪、さらには尾根上に堀切２本を構築する非常に単純かつ小規模な山城であったことが分かる。

【史料】なし

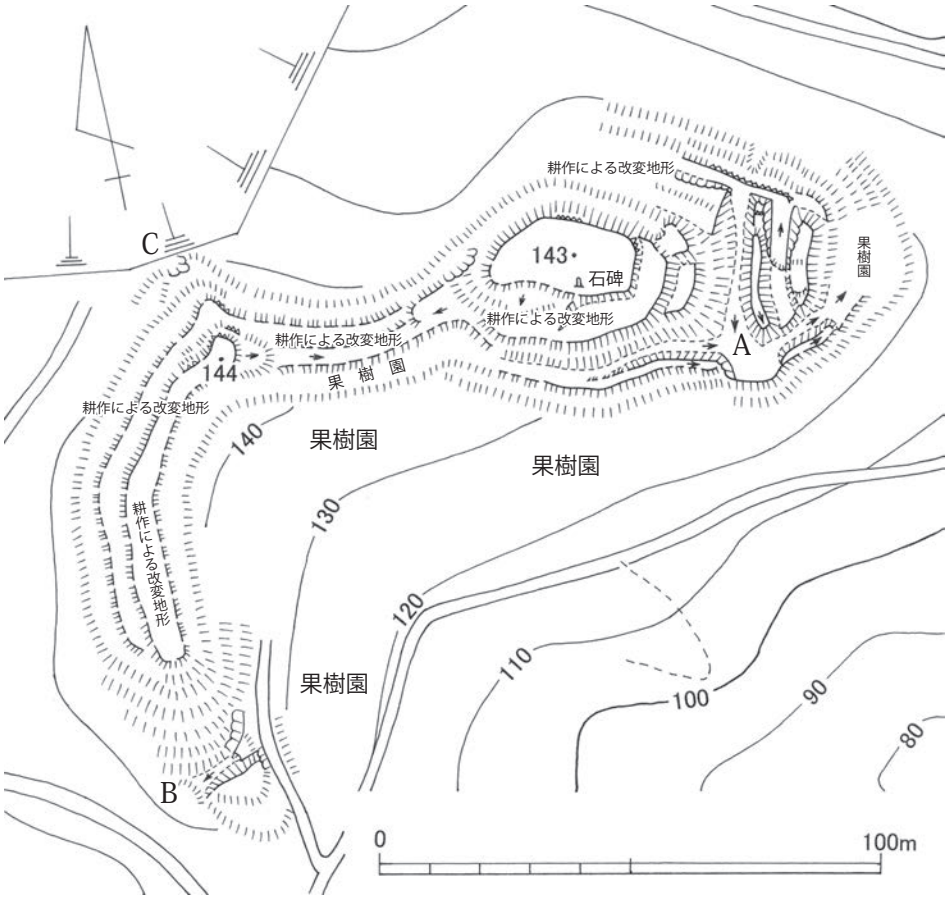
【参考文献】1 ～ 9,13,22,33

第 143 図　高朶城堀切

筑後 155　山下城（やましたじょう）

郡名　上妻郡　　別称　人見城・笹城　　図幅名　八女（西）
種別　山城　　所在　八女市立花町北山

【沿革】矢部川と支流の白木川の合流点の南の丘陵上に位置する。『軍談』には「山下國見嶽城跡」の名が挙がるが、これは国見岳城（筑後 156）のことを指しているようである。一方、『邪馬台国探見記』（文献 22 所収）には「（白木）川の西方に城山あり。之を山下城と云ふ、柳河城主蒲池筑後守治久の２男蒲池和泉守親広及志摩守鑑広、兵庫頭鎮運３代の居城趾也。今尚礎石井戸等存す」とあり、上記『軍談』の記載と重複する箇所が見受けられる。蒲池氏の居城としてはこの山下城か国見岳城のどちらかはよくわからない状況と言えよう。



第 144 図　山下城縄張り図（事務局作成）

【概要】現在、城山の山頂には、大正年間の山下城の石碑が建てられており、後世ここが山下城であった認識が確認できる。山頂部には東西約 30m、南北約 20m の平坦面があり、周囲には石垣も見られるが、明らかに後世の改変によるものである。また、山頂部の東側 A には、曲輪からの落差

10m、深さ２～３ｍの堀切２本が構築され、城館遺構であることが認識できるものの、堀切の北側には新しい時期の山道造成などもなされており、後世の改変がなされていることが分かる。さらに山頂部背後の尾根上及びその周囲は後世の果樹園、畑地の造成により、その段造成が延々と続いていて、ここが本当に城館かどうか躊躇するような状態である。途中、標高 144m の頂部に石垣も見られるが、明らかに新しく、平坦面の形状も明らかに城館としては似つかわしくない形状を呈している。しかし、尾根の先、B 地点には堀切とみられる掘り込みなどもあり、いちおうここまで城域ではないかと想定はできる。また、北側斜面は近年の大規模開発により破壊されてしまっているが、『福岡県の城郭』に掲載された図面には C 地点付近に堀切の表記がなされている。しかし現地には堀切の痕跡は確認できず、もしその図面の通りに堀切が存在していたならば、既に破壊されてしまっているものの、城館遺構がそこに存在していたこととなろう。以上のように当城は大々的に改変が加えられてしまっており、城の詳細な構造を知ることはできないが、残された城館遺構から、東西約 150m、南北約 100m 程度の規模を有していたことが想定される。

第 145 図　山下城遠景（堀切Ｂ近くからＡ方向を望む）（上）・堀切Ａ（下）

【史料】あり　【参考文献】2,3,5 ～ 7,8,9,13,22,33

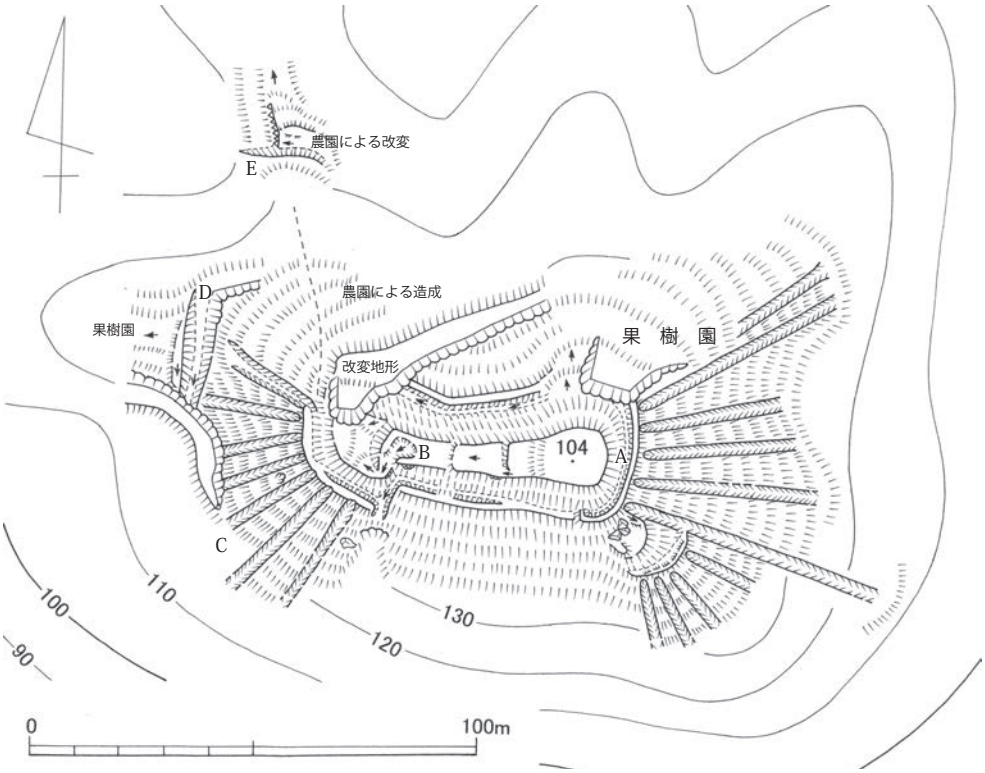
筑後 156　国見岳城（くにみだけじょう）　**郡名 上妻郡　別称 山下国見岳城・国見城・舞鶴城　図幅名 八女（西）**
種別 山城　所在 八女市立花町北山

【沿革】矢部川と白木川に挟まれた独立丘陵上に位置する。山下城からは白木川を挟んで北側に当たる。『軍談』には「山下國見嶽城跡」として蒲池兵庫鑑廣が三潴郡の蒲池城から居城を移したことや、龍造寺方に攻められても落ちなかったこと、天正 15 年（1587）には豊臣秀吉が筑紫廣門に「山下ノ城」を与えたことなどが記されている。当城が字国見に当たることや、城の位置の記載などから、国見岳城と呼ぶことには問題はないが、蒲池氏や筑紫氏に関する記載が、当城か前述の山下城なのかは現状では区別がつかないと言わざるを得ない。

第 146 図　国見岳城遠景（上）・横堀（下）

【概要】標高 104m の頂部に東西約 50m、南北約 15m 弱の曲輪を置き、その周囲に横堀を巡らしている。曲輪の東側には横堀の斜面下 A に畝状空堀群の竪堀 10 本を確認できるが、北側斜面全体は果樹園造成により大々的に破壊されており、元はさらに竪堀があったものと考えられる。とはいえ、曲輪の北側には横堀と

土塁が確認でき、城館遺構の残存が確認できるものの、竪堀は確認できない。曲輪の最も西側は虎口状の導入路Bがあり、さらに西側に曲輪が続いている。その南西側から西側にかけての斜面Cにも東側斜面同様、畝状空堀群があり、7本の竪堀を確認できる。さらに西側尾根上Dには深さ約2mの堀切1本、北側尾根上Eには果樹園造成により損壊しているものの、元来堀切であったとみられる落ちが確認できる。以上のように、当城は曲輪群を横堀で囲み、その周囲に畝状空堀群を配し、西側には堀切を設けた構造であり、竪堀も 50m を越える長いものもあり、厳重な防御のあり方を窺うことができる。



第 147 図　国見岳城縄張り図（事務局作成）

【史料】あり　【参考文献】1,2,4,6 ～ 8,**9**,13,22,33

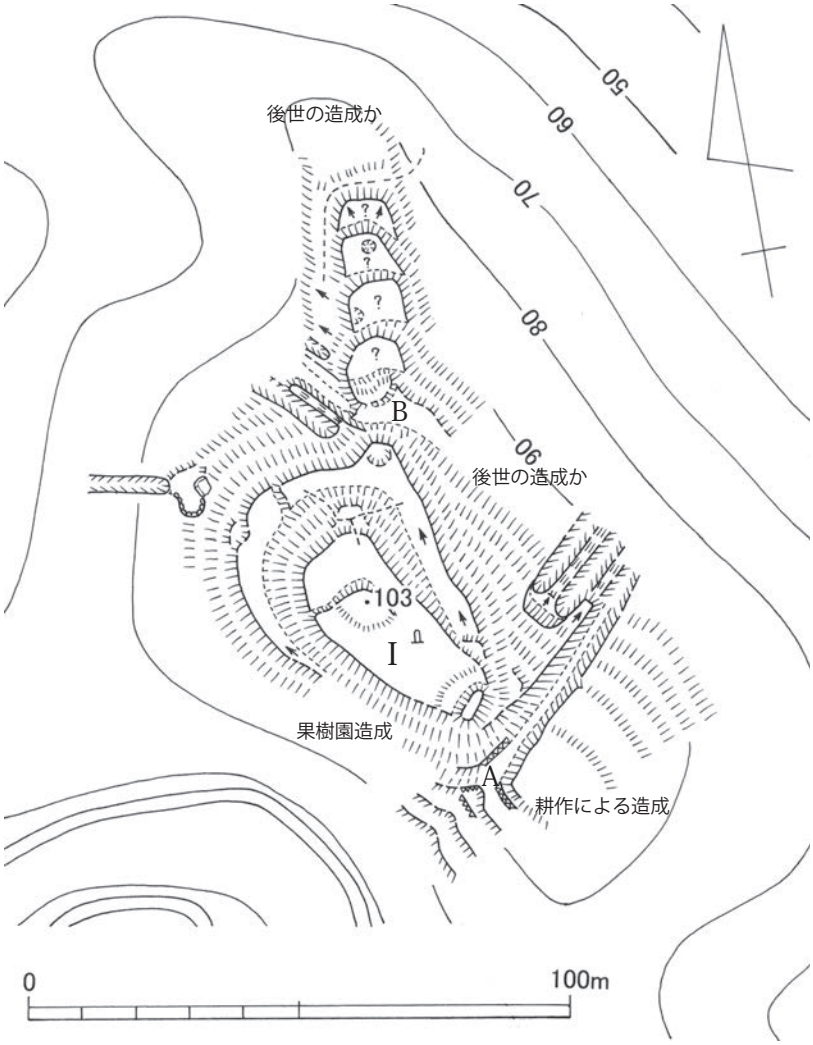
筑後 158　山崎城（やまざきじょう）　　**郡名　上妻郡**　　**別称　掻上城・平林城**　　**図幅名　八女（東）**
種別　山城　　**所在　八女市立花町山崎**

【沿革】矢部川とその支流・辺春川の合流点近くの辺春川南岸の城山山頂（標高 103m）に位置する。『軍談』には「山崎村城跡」として「天正ノ始、上妻越前守居城也。同十二年道雪紹運、当郡平治ノ為メ暫当城ニ陣ス」とある。また、『邪馬台国探見記』（文献 22 所収）には山崎城とは別に平林城を挙げ、城主不詳としているものの、山崎にある字「平林 (でえらばやし)」は山崎城から川を挟んだすぐの対岸であり、文献 13 などは同一の城としており、本書ではとりあえず同一のものとして扱うこととする。

第 148 図　山崎城遠景（左）・堀切（右）

【概要】　城山山頂の最高所Ⅰは人工的に平坦に造成された

面で、主郭である。三角点の近くには猿田彦の石碑なども建っている。主郭の南側にはやや不整形ながら土塁状の高まりがあり、その南東側には深さ６～７ｍの堀切Ａが確認できる。堀切の南西側半分は果樹園の造成が広く入っており、新しい石垣なども確認できるが、元あった堀切の形状を元に後世に造成を加えたものとみられる。主郭の東側斜面には堀切に併行して竪堀２本も確認できる。主郭の南側を除く三方には帯曲輪が螺旋状に巡る。さらに北側尾根上Ｂには、堀切とみられる掘り込みも確認することができる。Ｂの北側は階段状に平坦面が階段状に並ぶが、尾根の先端まで長く伸びており、削られた斜面も土が露出して新しい印象を受け、後世のものの可能性が高い。以上のように当城は後世の改変を受けてはいるものの、基本的には主郭とその周囲の尾根上に堀切を設けるという、比較的単純な構造の城であったとみられる。



第 149 図　山崎城縄張り図（事務局作成）

【史料】あり　【参考文献】1 ～ 3,5 ～ 9,13,22,33

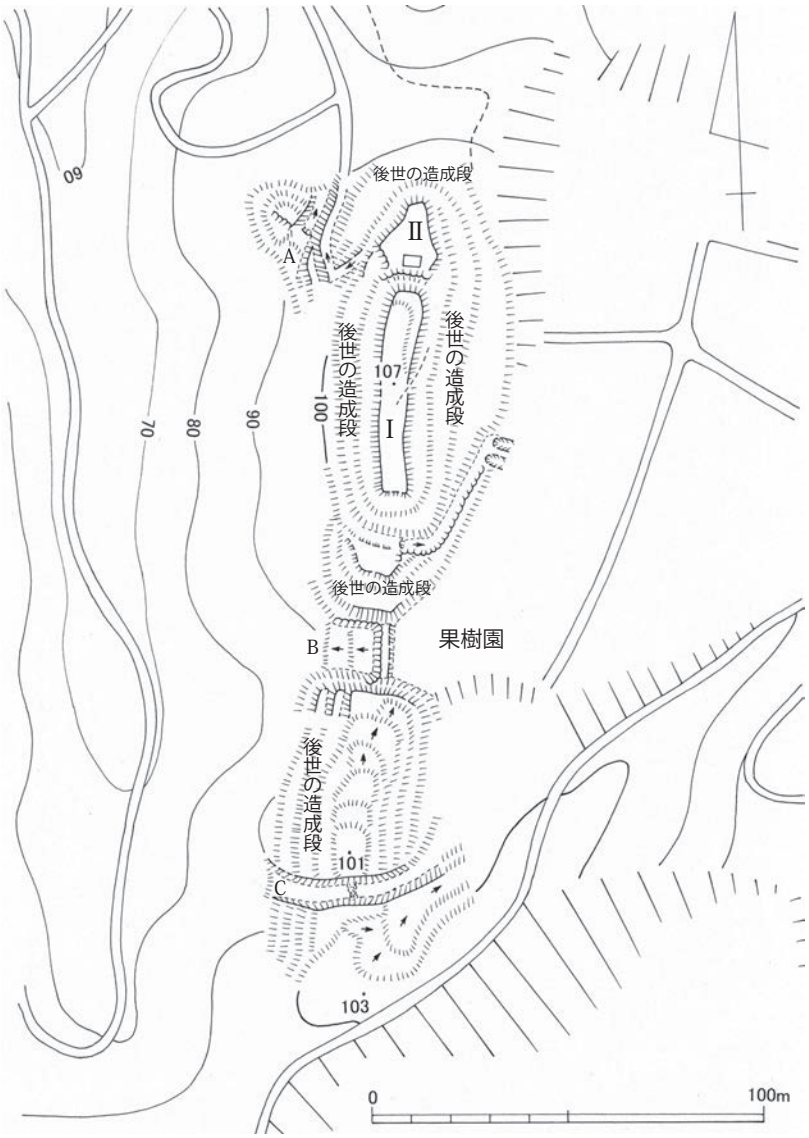
筑後 159	兼松城（かねまつじょう）	郡名　上妻郡	別称　高山城	図幅名　八女（東）
		種別　山城	所在　八女市立花町兼松	

【沿革】矢部川支流の辺春川南岸にある城山山頂（標高 107m）に位置する。『軍談』には「天正ノ頃、豊饒美作守鎮連居城也」とし、また天文年間には豊饒美濃守鑑述が居城したとする。『旧柳川藩志』（文献 22）には出典不明ながら天正９年（1581）６月 22 日に龍造寺方に攻められ、城主豊饒新介は殺害、城も落ちたとしている。

【概要】城山山頂の最高所には南北約 50m、東西約 10m の主郭Ｉが置かれる。周囲全体は果樹園等による後世の造成面が非常にたくさんあり、城館遺構との区別は非

第 150 図　兼松城堀切

常に難しい。Ⅰの四方は全て平坦面があるが、北側を除く三方の斜面には小段造成が無数にあり、後世の改変を思わせる。北側Ⅱには堂宇があるが、ここは一辺約 20m の平坦面で後世の改変を受けているとはいえ、他の段よりも格段に広いことから、城の曲輪であった可能性が高い。Ⅱの北西側 A には堀切と思われる掘り込みなども見られる。一方、主郭の南側は小段造成が続くが、その先は尾根の鞍部になっている。『福岡県の城』などでは大堀切となっている B は後世の段造成の結果生じたものと思われる。B の南側は自然丘陵が残るが、その西側は後世の段造成が広がっている。C は人工的に掘り込んだもので、堀切とみてよい。堀切の中央部には岩盤を削り残した箇所が連なっており、一見土橋にも見えるが、意図して生じたものかは不明である。このように、当城は果樹園などの後世の造成が激しく全体像を復元するのは非常に困難ではあるが、全長約 180m の曲輪と堀切からなる構造であることは言えそうである。



第 151 図　兼松城縄張り図（事務局作成）

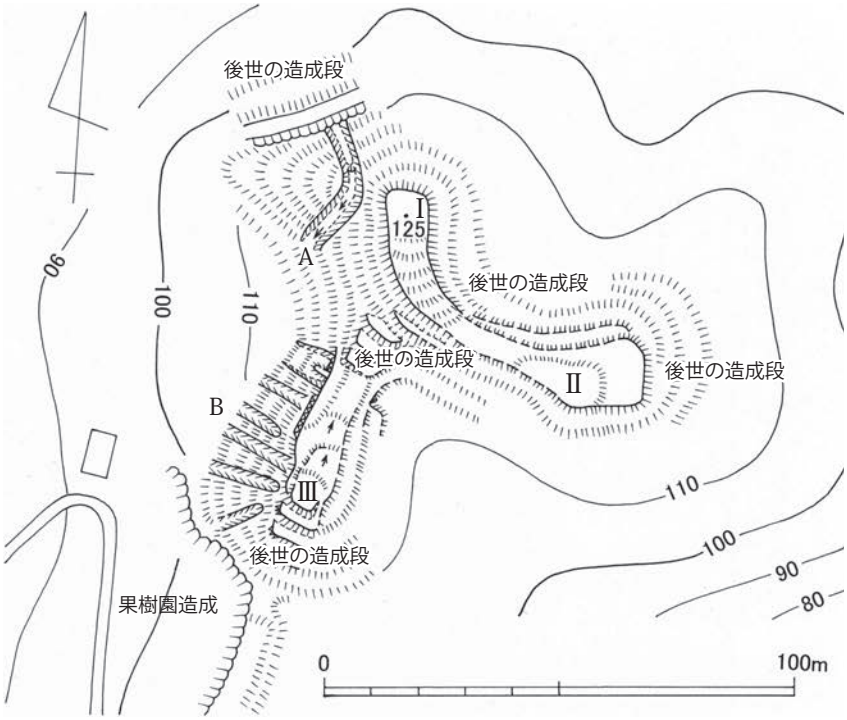
【史料】あり　【参考文献】1 ～ 7,**8**,**9**,13,22,33

筑後 160　三ノ瀬城（さのせじょう）　**郡名　上妻郡**　**別称　なし**　**図幅名　八女（東）**
種別　山城　**所在　八女市立花町下辺春**

【沿革】矢部川支流の辺春川は上流から北流してくるが、その流れが西に変わる屈曲点近くの左岸の丘陵上に位置する。地誌類にはほとんど記載がみられないが、かろうじて『邪馬台国探見記』（文献 22 所収）には「下辺春のサノセ城は誰の城なりしを知らず」の記載がみられる程度である。『福岡県の城』では当城を「高朶城」として紹介している

第 152 図　三ノ瀬城遠景

が、城の位置が明らかに高朶（高須田）ではなく、高朶城の遺構は別に確認されているため、誤りとみられる。城主不詳ではあるものの、立地などから考えて、辺春氏に関連した城ではないかと考えられる。



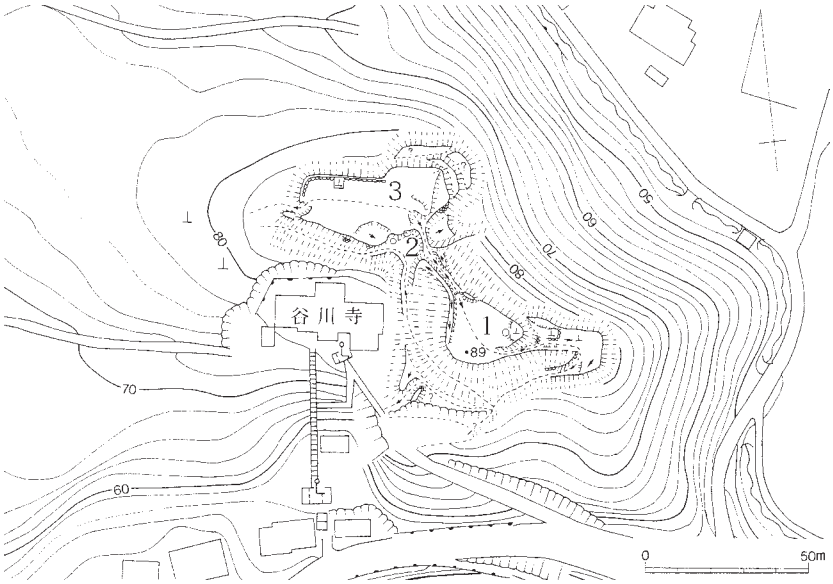
第 153 図　三ノ瀬城縄張り図（事務局作成）

【概要】標高 125 ｍの頂部の主郭Ⅰ（一辺約 10m）から南東方向に自然の平坦地形が続いており、その先端部Ⅱは人工的な造成がなされているが、周囲は畑地造成などの平坦面が多数あり、城館遺構か否かは不明である。Ⅰの西側Aには堀切 1 本を設けるとともに、南側へ続く尾根上Ⅲには平坦地形が続いているが、平坦面は不明瞭であるとともに、後世の畑地造成に伴う石垣遺構なども残されており、後世の改変が見受けられる。しかしながら、西側斜面Ｂには約６～７本の竪堀群からなる畝状空堀群が構築されており、Ⅲが城域であることが分かる。以上のように当城は後世の改変がかなりなされているものの、堀切や畝状空堀などの防御遺構が明確に残存し、かつての山城の姿が残されているのがわかる。

【史料】なし　【参考文献】**8**,**9**,22,33

筑後 161　谷川城（たにがわじょう）	郡名　上妻郡	別称　なし	図幅名　八女（東）
	種別　丘城	所在　八女市立花町谷川	

【沿革】矢部川南岸の八女市谷川の谷川寺の裏山・辻の山の頂部に位置する。『軍談』には「天正ノ頃、黒木氏余流、谷河新三郎居城也」とある。また『旧柳川藩志』（文献 22）には「谷川城趾」として、城主・谷川新三郎は龍造寺方により滅ぼされ、その子孫は高橋紹運、さらに立花家に仕えたことが記される。『稿本八女郡史』（文献 13）には別名を臥牛城とす



第 154 図　谷川城縄張り図（文献 131・岡寺　良作成）

ることに加え、『鎮西要略』を引き、永禄年間に蒲池志摩守鑑廣は山下、谷川の二城に拠ったとする。さらに、同書には『柳河偉人奇士伝』を引き、谷川大膳鎮實は、元々谷川城主であったが、没落後は高橋紹運、さらには立花宗茂に仕えたことが詳細に記される。

【概要】谷川寺の東側背後の頂部、標高 89m 地点に主郭を配する。主郭には一部土塁が見られ、北西側に続く道が確認できる。その道は２の堀切を挟んで３の曲輪へと続いている。３は城内でも最も広い平面空間で、江戸時代の石造物が多く並べられているが、曲輪と見てよいと思われる。１の東側の平坦面は墓地となっており、曲輪であったか否かの判断は難しい。以上のように当城は２つの曲輪を配し、その間に堀切を設ける構造であったことが分かる。

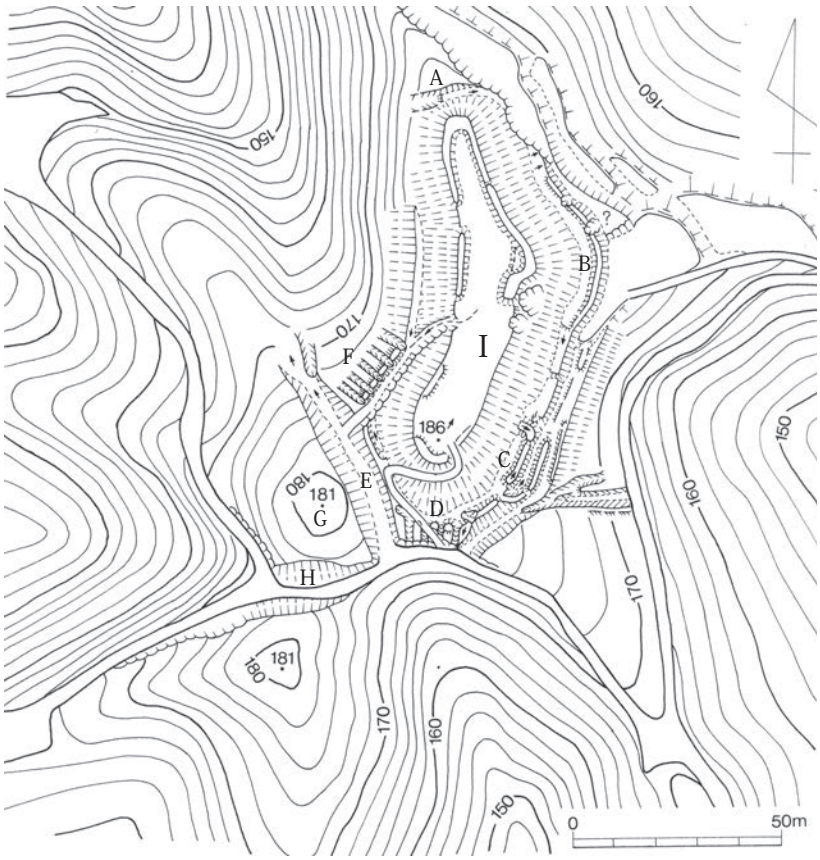
【史料】あり　【参考文献】1 ～ 4,6 ～ 8,**9**,13,33,**131**

第 155 図　谷川城堀切

筑後 164　犬尾城（いぬおじょう）	郡名　上妻郡	別称　川崎城	図幅名　八女（東）
	種別　山城	所在　八女市山内	

【沿革】八女丘陵の東端、矢部川支流の星野川の北岸の丘陵上に位置する。『軍談』には「川崎庄山内村犬尾城跡」として「本丸縦十八間、横五間、南面也、二ノ丸縦十二間、横二間、建久ノ頃黒木助能嫡男、川崎五郎築之、代々居之、常居ノ舘ハ麓ニアリ」とし、豊臣秀吉の九州平定の際に落城したことが記される。『寛延記』では「黒木ノ嫡子川崎三郎定宗」の城であるとする。

【概要】標高 186 mの頂部には、南北約 100m、東西約 25m の主郭Ｉを置く。Ｉの曲輪面縁辺部には、途切れながらも土塁が巡り、周囲斜面には数多くの防御遺構が確認できる。Ｉの北側Ａから東側Ｂにかけては横堀が巡り、Ｃに至っては横堀は二重に構築されている。Ｃのさらに南側Ｄになると竪堀４本と横堀が組み合わさって畝状空堀群が構築される。Ｉの西側には大堀切Ｅを施し、Ｉの北西側Ｆには竪堀５本からなる畝状空堀群が造られている。堀切Ｅの西側Ｇは、『軍談』のいう「二ノ丸」の場所と思われるが、自然の平坦地形となっており、城域ではないと思われる。そうなるとＧ



第 156 図　犬尾城縄張り図（文献 129・岡寺　良作成）

の南側Hにある切通し状の掘り込みについても、城の堀切と考えるよりは山道造成によって生じたものと考えるのが妥当とみられる。また、主郭Ⅰおよびその周辺では発掘調査が行われており、Ⅰの平坦面上では、岩盤に掘り込まれた柱穴や、円礫の集石、さらにはⅠを南北に区画するような東西方向の石列なども確認されている。

以上のように当城はさほど大きい城とは言えないが、周囲は堀切や横堀、畝状空堀群によって厳重に防備され、さらに中腹には支城の鷹尾城（筑後165）、麓には東館遺跡（筑後R16）も確認されることから、山内集落から犬尾城にかけて、川崎氏に関連する城館遺跡が連続し、それらが連携しながら本拠を防御していた様子が窺い知れよう。

【史料】あり　【参考文献】1 ～ 7,**8**,**9**,13,**90**,**129**

筑後165　鷹尾城（たかおじょう）	郡名　上妻郡	別称　笹ノ城・舛形城	図幅名　八女（東）
	種別　山城	所在　八女市山内・大籠	

【沿革】犬尾城から南西方向に尾根上を下った標高139 mの頂部に位置する。『軍談』には「同村（山内村）鷹尾城跡」として「犬尾ノ支城也」とあり、笹ノ城と別称することなどが記される。『稿本八女郡史』（文献13）には金毘羅山にあり、俗に舛形城ともいい、天正８年（1580）には龍造寺家晴、多久与兵衛が攻め、さらに同12年の猫尾城攻めの際には当城が焼かれたとしている。

【概要】城の曲輪群は、標高139mの最高所に主郭Ⅰを置き、その西側に曲輪Ⅱを挟んで、標高136m地点に曲輪Ⅲを置く。これらの曲輪群の北側に横堀Aを構築する。さらにⅠの東側に横堀と接続する形で大堀切Bをはじめ堀切や竪堀を設け、尾根上側からの攻撃に備える。またやや離れたCにも堀切1本を設ける。また曲輪Ⅲの北西側にも横堀に沿う形で堀切Dを設け、南西側には帯曲輪Eを巡らしている。曲輪群の南斜面には特に防御遺構は確認できない。以上のように当城は規模の同じ曲輪群が並列し、その周囲を横堀や竪堀群により厳重に防備する様子が窺われる。規模の大きさや防御遺構の手厚さから単に犬尾城の出城というのみならず、犬尾城と連携し川崎氏の拠点として重要な城であっただろう。

【史料】なし

【参考文献】1 ～ 8,**9**,13,**129**

第157図　鷹尾城縄張り図（文献129・岡寺　良作成）

筑後 174	鬼ノ口城（おにのくちじょう）	郡名　上妻郡	別称　甘木城・甘木河内守城	図幅名　八女（東）
		種別　山城	所在　八女市広川町水原	

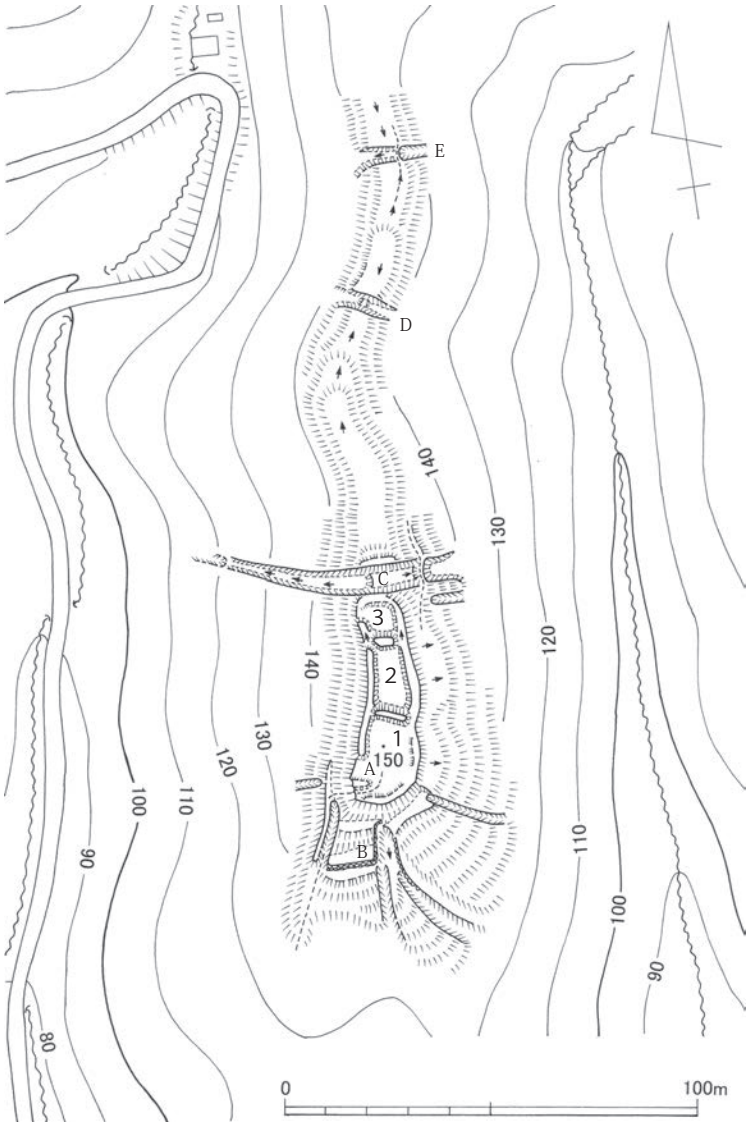
【沿革】広川上流の鬼之淵の集落の北背後にある丘陵上に位置する。『軍談』には「甘木村鬼口城跡」として「縦十四間、横五間、南面也、甘木家棟所築也」とあり、天正 14 年（1586）に麓の馬場館と共に薩摩島津の兵により落城したことを記す。さらに城地の名称が「香山」であり、時代不明ながら香山氏が居住したことも記している。

【概要】南に延びる標高 150m の尾根の先端頂部に曲輪を置く。曲輪は全長約 50m で、周囲を土塁で囲み、曲輪の空間を三分するように土塁で仕切られる（図中 1 ～ 3）。その南側の区画 1 は最も広く、主郭と想定でき、南西角には虎口らしき土塁残片 A も確認できる。曲輪の南側には放射状に竪堀が 3 ～ 4 本掘られ、竪堀と竪堀の間に築かれた小曲輪 B には石垣遺構なども確認できる。曲輪 3 の北側には、曲輪に接して深さ約 4 m の堀切 C が掘られるが、西側斜面へは長さ 50m 近くもある長大なものとなっている。C の北側には自然の尾根の鞍部地形が続くが、その先には D と E の堀切 2 本が構築され、尾根上からの敵の攻撃に備える。以上のように当城はやや小型ながらも曲輪を囲む土塁の他、石垣などもあり、かなり入念に構築された様子が窺われる。

【史料】なし

【参考文献】1 ～ 4,6 ～ 8,**9**,13,47

第 158 図　鬼ノ口城堀切（上）・石垣（下）



第 159 図　鬼ノ口城縄張り図（事務局作成）

筑後 183	知徳城（ちとくじょう）	郡名　上妻郡	別称　智徳城・知徳館	図幅名　八女（西）
		種別　丘城	所在　八女郡広川町広川	

【沿革】広川右岸、当条と知徳の集落の間にある独立丘陵上に位置する。『軍談』には「縦二十間、横十六間、西面也、城主詳ナラズ」とある。『稿本八女郡史』（文献 13）には天正 12 年（1584）に山下城の蒲池鎮連の家臣・一條和泉守が居城し、翌 13 年に龍造寺方の山下城攻めの際には横岳頼次が山下城を攻める前に当城を攻めようとしたため和泉守兄弟が出陣して戦死、山下籠城の際に当城も落城したとある。

【概要】標高 42m の独立丘陵頂部に当城があるとされるが、丘陵全体に畑や竹林、あるいは墓地などの後世の改変造作が確認でき、人工的に造成された地形全てが城館に関連したものではないことは明白な場所である。その一方で、丘陵の最高所は南北 40m、東西 20m の長方形を呈する平坦面 I となっており、東側から南側にかけては横堀状の掘り込みを伴う帯曲輪状の平坦面が巡っている。さらに I は草木が除伐されていて、近年まで何等か利用されていたような印象を受ける。しかしながら、周囲に巡る横堀状遺構など、城館遺構と考えるのが最も妥当ではないかと思える遺構もあり確実な判断は発掘調査に委ねざるを得ないが、まずは当城の現状として報告する。

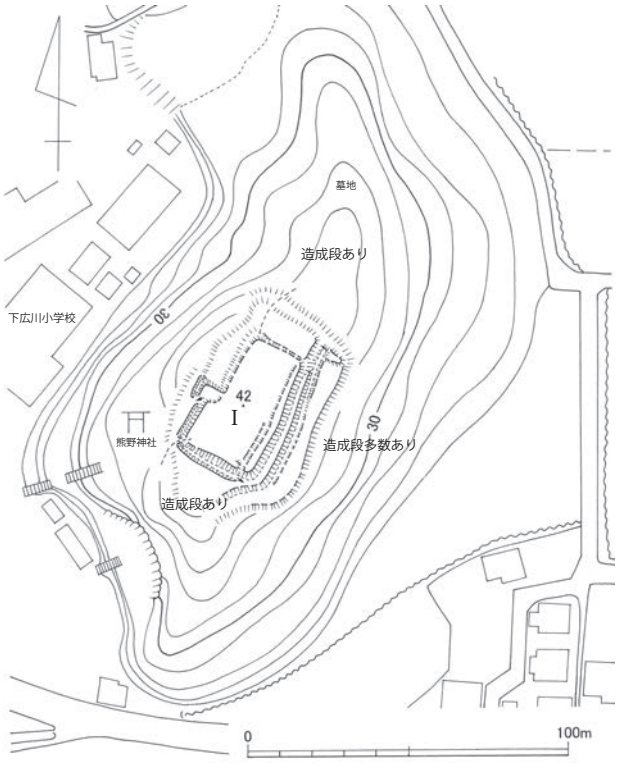
第 160 図　昭和 23 年当時の知徳城航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

なお、『福岡県の城』などには西側の小学校増築の際に丘陵の多くが削られてしまい、旧状をかなり損ねたという記載も見られるが、昭和 23 年（1948）の航空写真を見ると小学校増築前であるが、北西側の尾根は削られているものの、丘陵最高所については現在とあまり変わらないような状況であるため、城の位置としては現状の最高所で良いものと考えられる。

【史料】あり

【参考文献】1,2,4,6 ～ 9,13,21,47

第 161 図　知徳城 I の東側の横堀状遺構



第 162 図　知徳城縄張り図（事務局作成）

⑧下妻郡

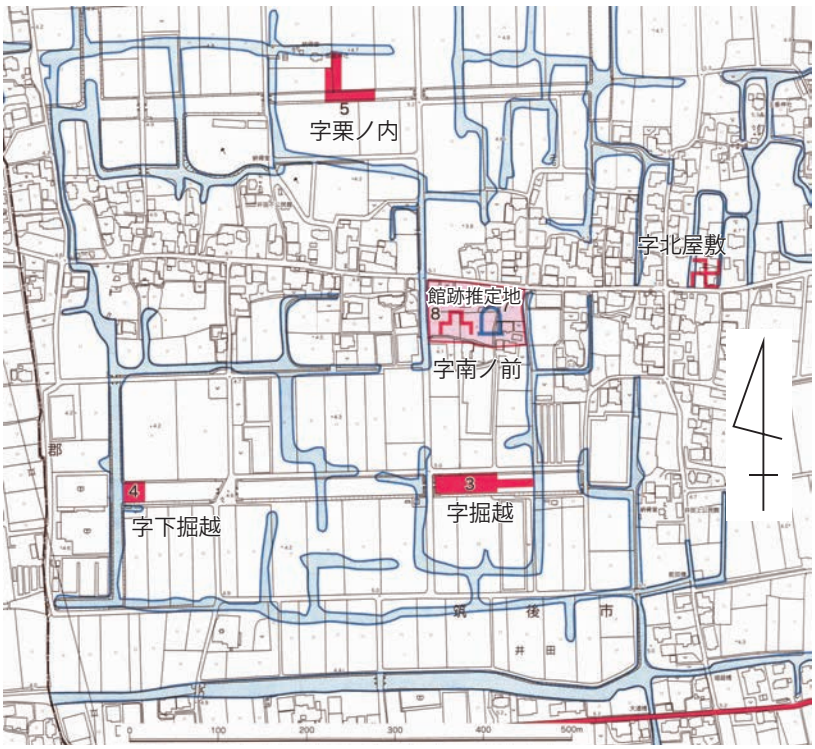
筑後 191	下牟田館（しもむたやかた）	郡名　下妻郡	別称　なし	図幅名　羽犬塚（東）
		種別　平地城館	所在　筑後市井田	

【沿革】筑後市西部、井田の平地の集落内に位置する。『軍談』には「下牟田舘跡」として「村中ニアリ、中富入道了三カ舘跡ナリ、今其七代ノ孫、農夫茂作ト云者居之」とあり、了三の妻の墓（慶安３年銘）がその宅地にあるとする。

【概要】『筑後市の文化財』（文献 114）には、現在も屋敷跡には中富入道の子孫が住み、入道の墓と伝えられる板碑も屋敷地内に残されているとある。現在は周辺の地形も往時から様変わりして、かつての様子が非常にわかりにくくなっているが、昭和 23 年（1948）の航空写真等を見てみると、館跡推定地の周囲には方形の水路が数多く入れられており、周囲約 500 m四方には北屋敷や掘越などの舘に関連しそうな地名も散見される。これらの水路の区画が城の範囲を示すものか否かは断定できないものの、往時の姿を示すものとして提示する。

【史料】なし

【参考文献】1,2,9,13,114



第 163 図　下牟田館周辺図（青は圃場整備前のクリーク・文献 146 掲載図を一部改変して事務局作成）

第 164 図　昭和 23 年当時の下牟田館周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

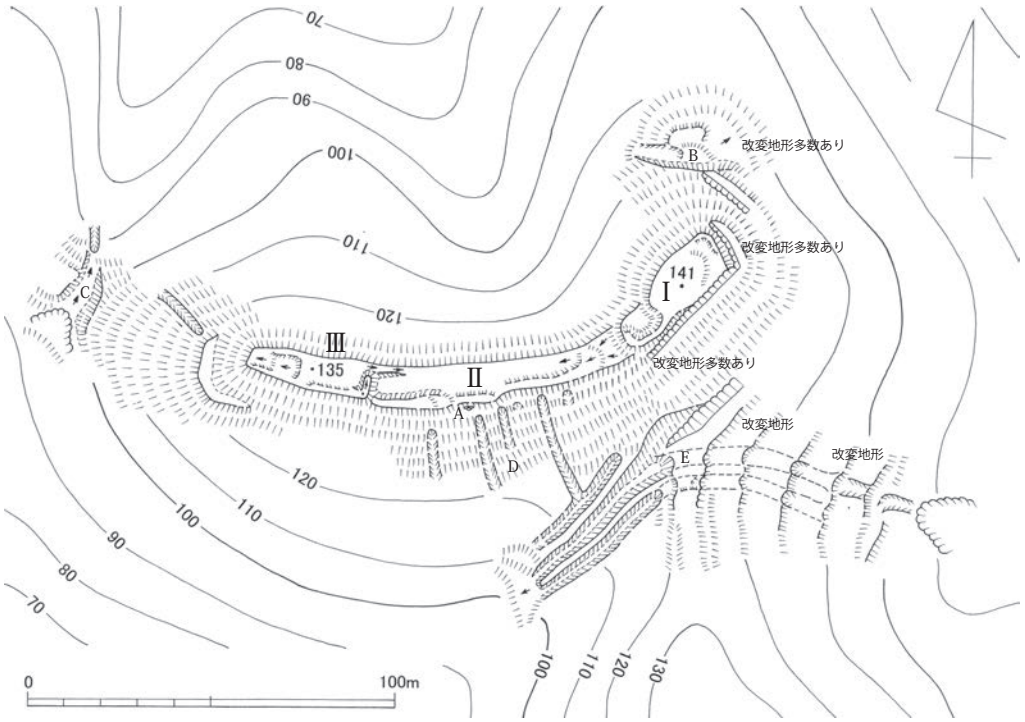
筑後 197	禅院城（ぜんいんじょう）	郡名　下妻郡	別称　なし	図幅名　八女（西）
		種別　山城	所在　みやま市瀬高町小田・廣瀬	

【沿革】矢部川南岸に面した標高 141 mの頂部に位置する。『旧柳川藩志』（文献 22）の「小田城趾」には明応・文亀年間の溝口常陸介と溝口帯刀、永正年間の溝口薩摩守の居城とし、「小田城趾２あり。一は小田の奥山にあり。一は禅院山の城趾なり。それ或は城代の城墟ならんと察す。果して溝口氏拠りしとせば旧趾を修築せしものならんか」とある。また『邪馬台国探見記』（文献 22 所収）には「禅院小田の２ヶ所高山に山城あり。繞らすに数層の濠を以てす」とある。現状ではこれ以外の地誌類に記載を確認することはできないが、入江文書の康永２年（1343）には「溝口禅院城」を攻めたことが記載されており、その時代に使用されたことが推察される。

第 165 図　禅院城土塁（上）・石垣（中）・堀切（下）

【概要】城のある山稜頂部は東西に長い緩やかな平坦地形であり、やや自然地形の形状を残すような不明瞭な平坦具合であり、その一方で、東側斜面を中心に後世の山道等の造成の手が入り、城の縄張りを読み込むことが困難であるが、城館に関連する造成の手が加えられた痕跡は如実に見ることができる。Ⅰは城内最高所の標高 141m で、東西約 30m、南北約 15m の範囲が平坦に造成されており、そこから西側へ平坦地形が続いている。Ⅰの西側Ⅱは一見自然地形にも見えるが、南側に土塁状の高まりを持ち、北側は平坦面地形から一気に急傾斜に変化しており、人工的に造成された曲輪と見てよい。土塁には A などに小規模ながら石垣遺構も確認できる。Ⅱはそのような地形が東西約 70m 続き、その西側は一段高くなってⅢの曲輪が構築される。ⅡからⅢへは土塁を利用したスロープ状の導入路がつけられている。Ⅲから西側は斜面となり、小規模な腰曲輪を設けたのち、B に堀切１本を設ける。また、Ⅰの北側 C にも半壊しつつも堀切１本が構築されている。Ⅰ・Ⅱの南側斜面については、特にⅠの東側から南側斜面に大規模に後世の造成段が構築されており、非常にわかりづらいが、Ⅱの南側斜面にはやや間隔を置いた４～５本の竪堀群 D により構成される畝状空堀群が施され、さらに尾根の鞍部 E は、山道造成が激しく一見何も城郭遺構はないように見えるが、西側斜面に明瞭に２本の堀切とそれに併行する１本の竪堀が確認できる。２本の堀切については、後世の段造成に切られながらも、東側斜面にも展開しており、総延長約 100m にも及ぶ長大なものとなっている。以上のように、当城は東西に細長く伸びた尾根の頂部に曲輪群を形成し、その周囲は土塁や堀切、竪堀群により防御を固めている。特に曲輪群南側斜面と尾根の鞍部は畝状空堀群と大規模な堀切群を構築しており、敵の攻撃に対して最大の備えを

行っている箇所といえよう。小田城の出城という記載がなされてはいるが、小田城よりも曲輪面積が広く、なおかつそれなりの防御遺構も備えており、単なる出城という位置付けではない、つまりは小田城に代わり、溝口城の詰城となっていた時期もあったのではないかとも考えられるが、詳細は今後の課題といえよう。



第 166 図　禅院城縄張り図（事務局作成）

【史料】あり　【参考文献】22

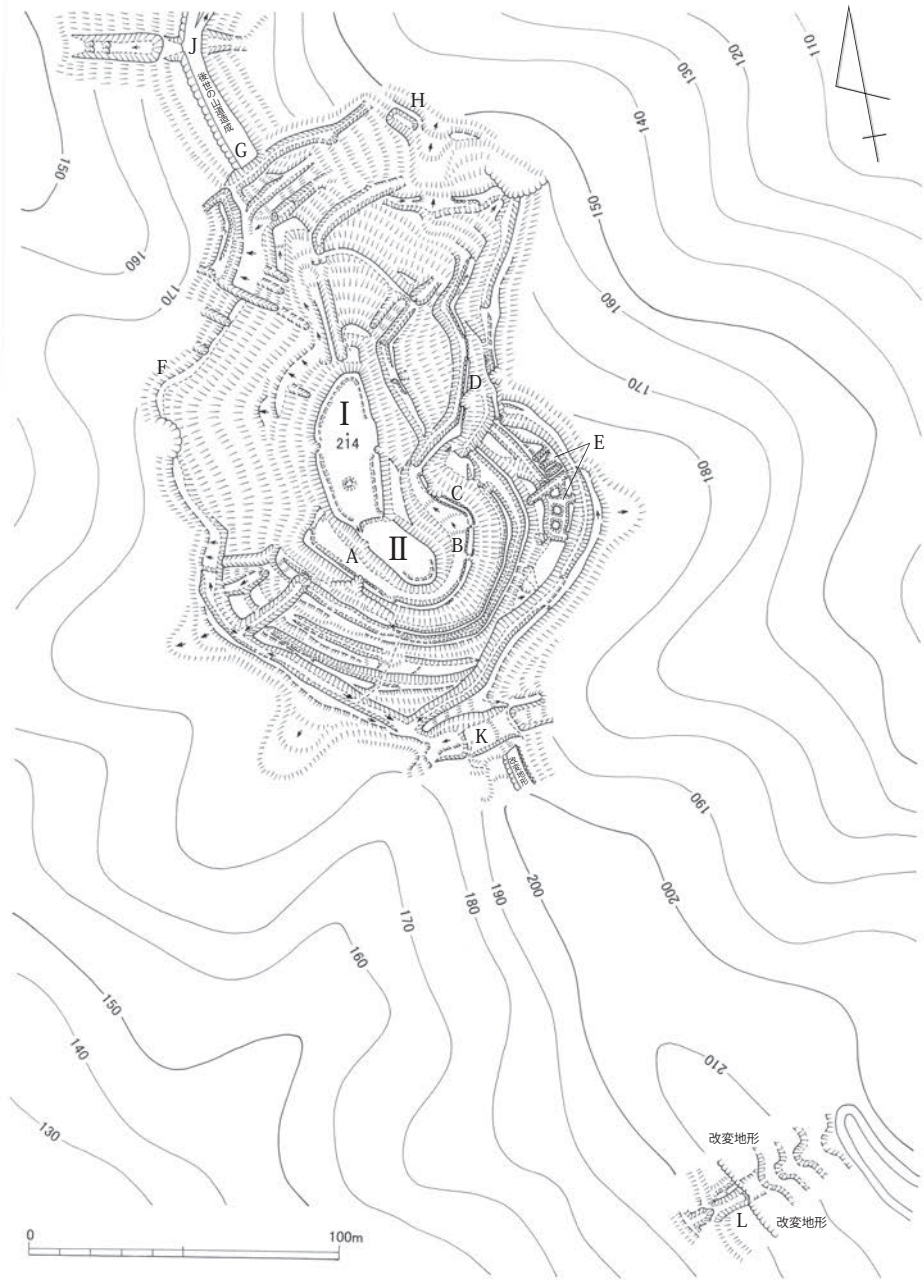
筑後 198　小田城（おだじょう）	郡名　下妻郡	別称　なし	図幅名　野町（西）
	種別　山城	所在　みやま市瀬高町小田	

【沿革】矢部川南岸、禅院城の南西側の山稜上に位置する。『軍談』には「小田村城跡」として「明応、文亀ノ頃、溝口常陸介、同帯刀守之」とある。『邪馬台国探見記』（文献 22）には「繞らすに数層の濠を以てす。或は削りて急坂となし或は大石を混じて土壁を築く如き」とあり、朝鮮式山城との類似性を指摘、溝口氏が古城を修築して拠ったものではないかとしているが、構造からみて純粋に中世山城と考えて問題はない。

【概要】標高 214m の頂部に、南北約 50m、東西約 20m の主郭Ⅰとその南に約 30m ×約 10m の副郭Ⅱを置く。それらの周囲には低土塁が巡り、Ⅰには自然の削り残しと思われる塚状の高まりもある。曲輪はこの２面だけであるが、それらの周りには非常に厳重に竪堀と横堀が交錯するように何重にも巡る。特に最も内側の堀の土塁は石垣で固められ、A ～ D に顕著に石垣が確認できる。横堀は特に南側に集中して見られ、最も多いところでは６重にもなり、

第 167 図　小田城石垣（上）・横堀（下）

Eには畝状空堀群のように横堀と竪堀が縦横に掘られている。大半の横堀については曲輪の南半部を取り巻くのみで、全周することはないが、最も外側の横堀はほぼ全周しており、防御遺構の薄い西側斜面にも犬走り状の遺構Fとして巡って外郭ラインを形成している。また、北側の尾根上Gには堀切が３本連続して掘られ、一番外側の堀切は武者溜まり状の掘り込みがなされたHに接続し、外郭ラインの一部を担っている。そして北側約 50m 地点Jには山道造成で一部削られてはいるものの、堀切１本を構築し、北側の城域を画している。一方、南側の尾根上Kにも幅 10m にも及ぶ堀切１本が構築され、さらに約 150m 離れた丘陵上Lにも農園造成によりかなり改変が加えられているものの、堀切と思われる掘り込みが一ヶ所確認できる。



第 168 図　小田城縄張り図（事務局作成）

以上のように、当城は曲輪が２面のみの必ずしも広い面積の城とは言えないが、曲輪を取り巻く防御遺構は、最大６重にもわたる横堀など、異常ともいえる執拗な防御遺構の状況を看て取ることができる。このような厳重な防御遺構を備えた縄張りを持つということは、この城が地元の領主・溝口氏の単なる詰城としての性格だけではなく、筑後を巡る天正年間の争乱の中で、龍造寺氏や大友氏の積極的な関与が介在したことを想定すべきかもしれない。

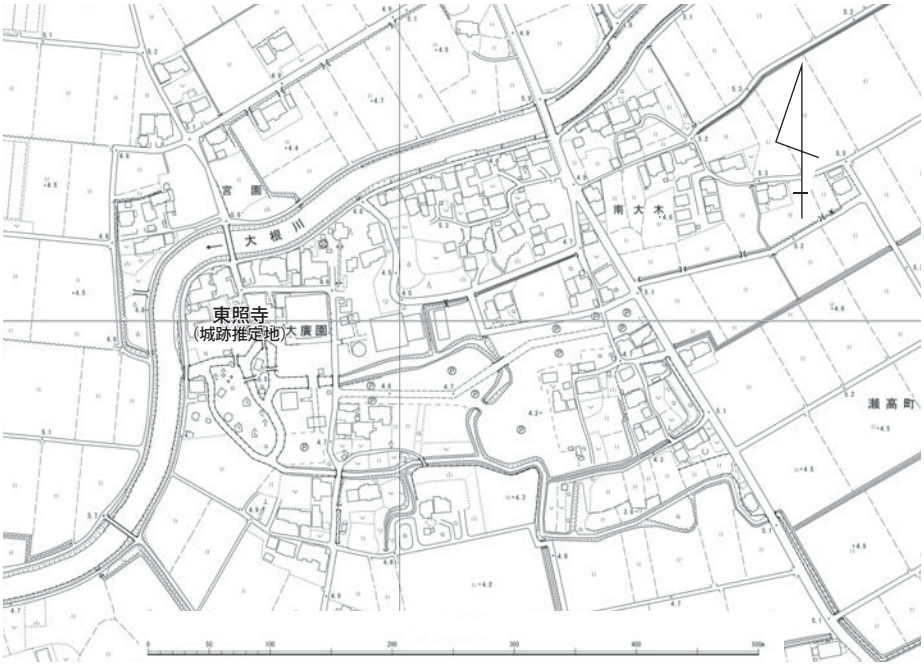
【史料】あり【参考文献】1,2,5 ～ 9,14,22

⑨山門郡

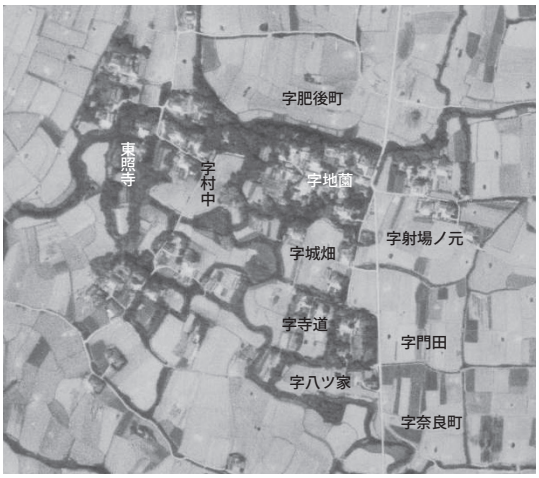
筑後 201	宮園城（みやぞのじょう）	郡名　山門郡	別称　なし	図幅名　柳川（東）
		種別　平地城館	所在　みやま市瀬高町大廣園	

【沿革】矢部川支流の大根川の南岸、標高 4 m ほどの大廣園の東照寺近辺に位置する。『軍談』には「宮薗村城跡」として「今村氏蒲池鑑廣ノ為ニ当城ニ住シテ敵兵ヲ防禦アリ」とある。『山門郡誌』（文献 14）には「東山村大廣園字宮園に在り、東西十間、部落の西南に在り、天正十二年蒲池氏肥前軍を防ぐ為め今村某をして之に拠らしむ」とある。

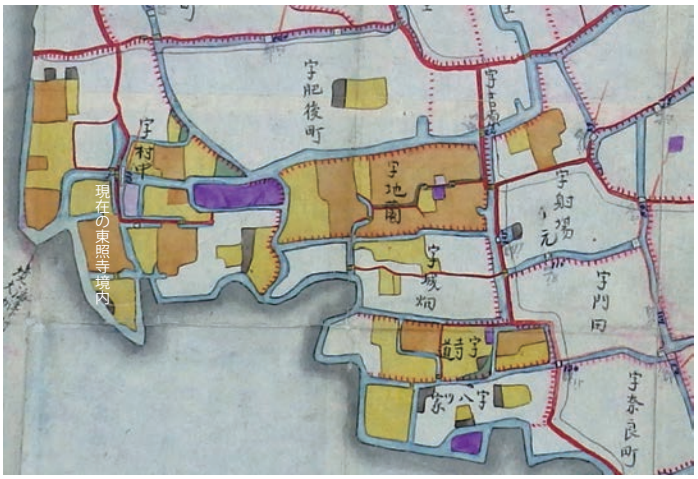
【概要】『福岡県の城』には大根川に面した東照寺境内が城地とされているとあり、『城郭』には本丸、東二の丸、西二の丸といった地名が現地に付けられているとする。明治 20 年代初期頃の字図や、昭和 23 年の航空写真を確認すると、東照寺があった場所は南北に細長い楕円形で三分割された島状になっているのがわかる。ここが城の中心としても考えることができる一方で、やや東側には字「城畑」の他、「門田」や「射



第 169 図　宮園城周辺地形図（みやま市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）



第 170 図　昭和 23 年当時の宮園城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）



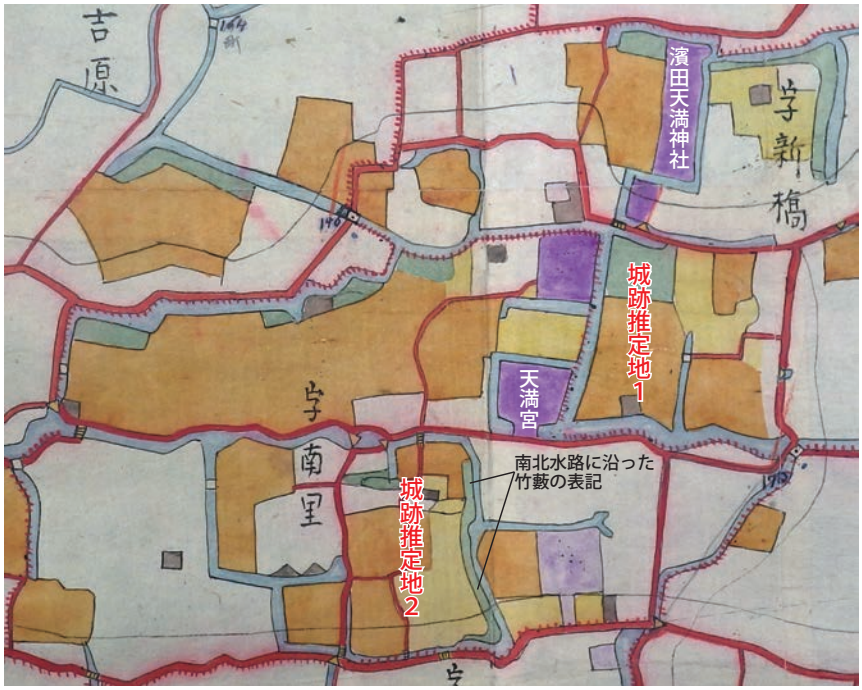
第 171 図　明治 20 年代初期頃の宮園城周辺字図（『筑後国山門郡大廣園村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）

場ノ元」という城に関連する地名があるなど、城の広がりについては不明確な部分が多く、今後の調査に委ねるほかはない。

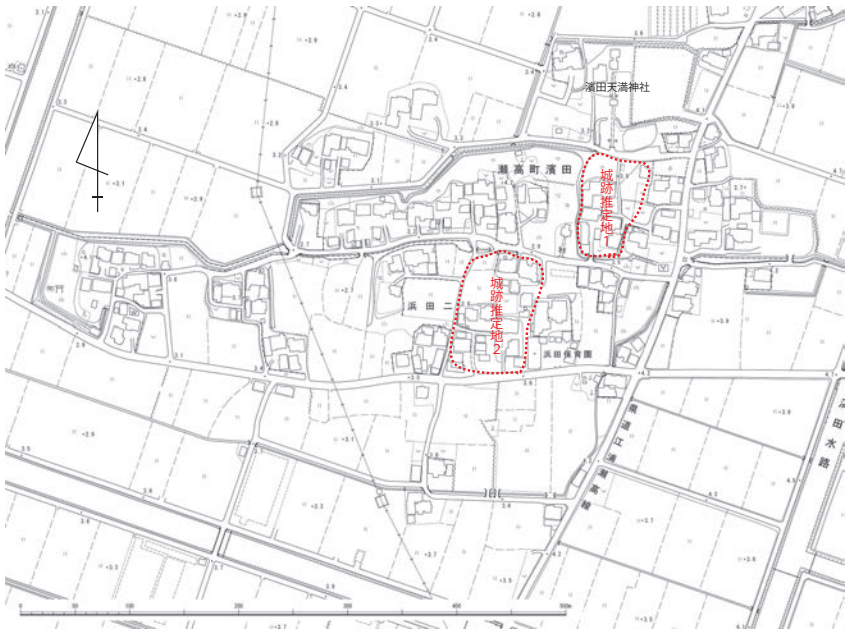
【史料】なし　【参考文献】1,2,5 ～ 8,**9**,14,22,27

筑後 203　濱田城（はまだじょう）	郡名　山門郡　　別称　なし	図幅名　柳川（東）
	種別　平地城館　　所在　みやま市瀬高町濱田	

【沿革】矢部川と支流の飯江川との間の標高２～３ｍの浜田の集落に位置する。『軍談』には「濱田村城跡」として「同頃（天正ノ頃）田尻ノ家士田尻大蔵守之、同城（鷹尾城）ノ砦タリ」とある。「第八扱所村誌」（文献 38 所収）には「平地ヨリ高サ二間余小丘陵ノ形ヲナス。南北掘廻リ竹叢是ニ沿フ、今此処ヲ古城ト唱ヘ農民ノ三家アリ」と記す。『山門郡誌』（文献 14）には「大和村濱田の南にあり、東西約十間、南北二十一間、平地より一間半高し、現時竹叢にして其内に一古墳あり」とある。



第 172 図　明治 20 年代初期の濱田城周辺字図（『筑後国山門郡濱田村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）



第 173 図　濱田城周辺地形図（みやま市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）

【概要】地誌の記載では、濱田集落周辺にあることはわかるが、城を推測できそうな詳細な場所は記載されず、また城に関連しそうな字も見当たらないため、詳細な城跡の推測は非常に難しい。『福岡県の城』や『城郭』では濱田の天満神社の南にある東西約 50m、南北約 100m の東側を除く濠で囲まれた空間を城跡と推定しているが（城跡推定地１）、一方でみやま市の周知の包蔵地は、その南西側の一辺 70 ～ 100m の方形区画を城

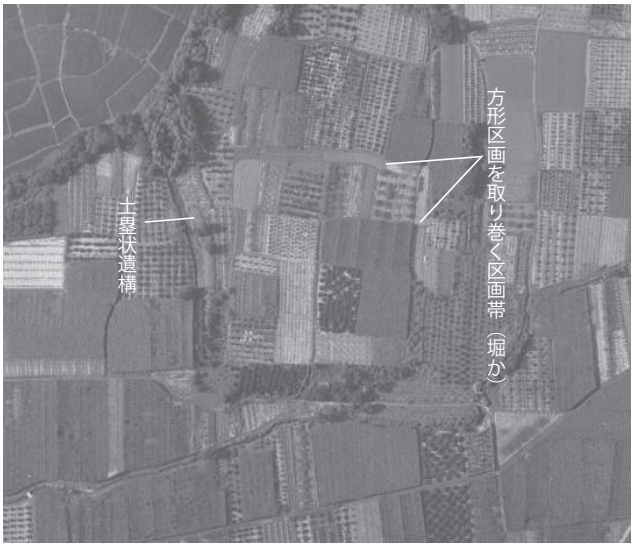
跡と推定している（城跡推定地２）。ただ、地誌に竹林が堀に沿って巡っているという記載を重視すれば、明治時代の字図に、推定地２の東側の水路に沿って、竹藪の表記が確認され、また「濱田の南にあり」という記載とも合致、そこが地誌の言う城跡に当たる可能性もある。しかしながら、いずれも決め手に欠く。位置を含め詳細については今後の課題であろう。

【史料】あり　【参考文献】1,2,5 ～ 7,**8**,**9**,14,22,27,38

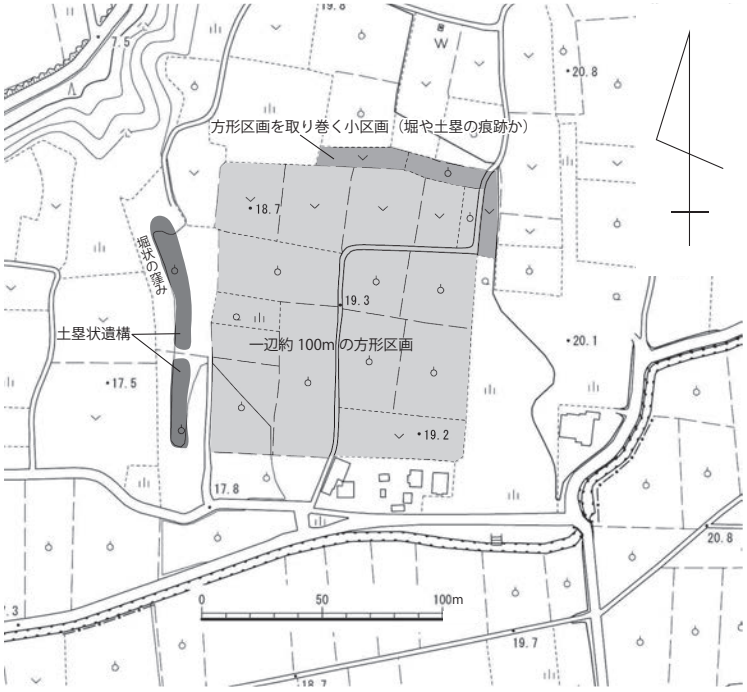
筑後 207　竹井館（たけいやかた）　　**郡名　山門郡**　　**別称　竹井牡丹長者館**　　**図幅名　野町（西）**
種別　平地城館　　**所在　みやま市山川町尾野**

【沿革】矢部川支流の飯江川北岸、髙田町竹飯から続く標高 19m の低台地上に位置する。『軍談』には「竹井村舘跡」として「牡丹長者第宅ノ跡アリ､今長者原ト號ス」とある。『城郭』では「所在地不明」とする。

【概要】竹井という地名は高田町竹飯であるが、その東隣に隣接する山川町尾野に字「長者原」があり、ここが館地と推測される。さらに現地には一辺約 100m の正方形区画が実存し、方向軸は正南北に近いがやや東側に振れている。さらに地割を見ると北東隅部に幅約５m で区画を取り巻いているような状況も見受けられ、その上、昭和 20 ～ 50 年代の複数の航空写真では、より広い範囲を取り巻いている状況が確認でき、方形区画の外側は堀などで囲まれていた可能性を暗示している。さらに区画の西側には基底部幅約８m、高さ１～２m の土塁状遺構とその西側に堀状の窪みが確認されるが、方形区画からはやや離れ、さらに若干外側に屈曲している様子から、方形区画の時期よりも新しい段階の遺構である可能性も考えられる。みやま市の分布地図（文献 152）ではここを「長者原遺跡」として周知の包蔵地となっており､「扇状地の中央部に所在、土塁が残存、土師器、須恵器が出土」とし、時期を「古代」としている。時期については明確なことは現状で



第 174 図　昭和 37 年当時の竹井館周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）



第 175 図　竹井館周辺地形図（みやま市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）

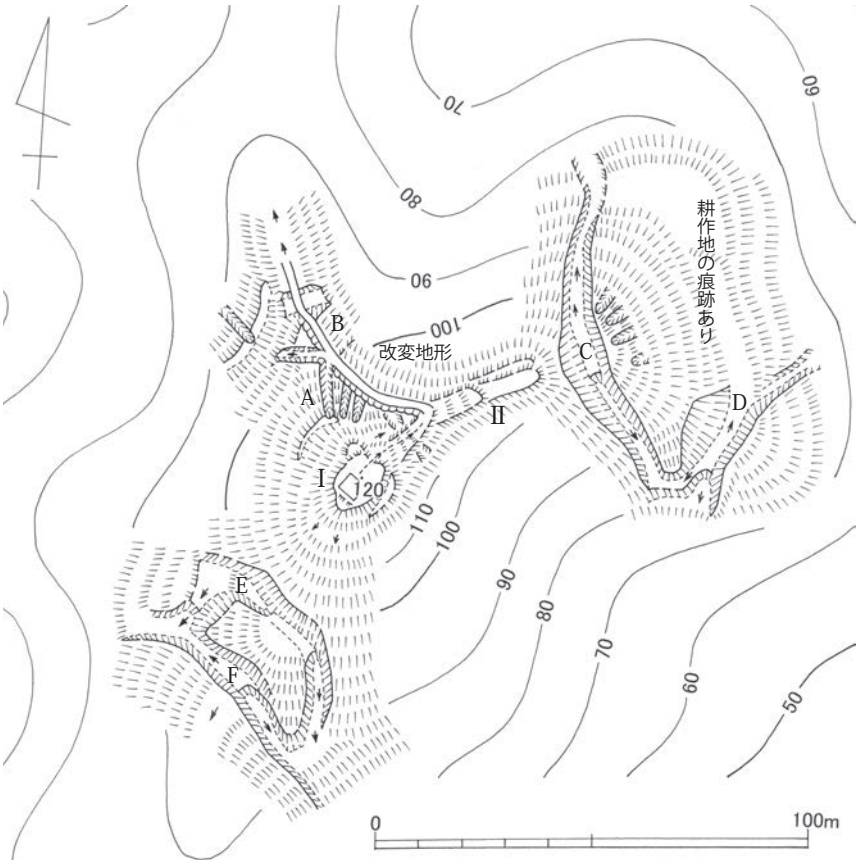
は不明ではあるが、中世ならば居館になろうし、また古代であれば、未発見の山門郡衙などの官衙遺跡の可能性も十分考えられる。いずれにせよ、これ以上の詳細については、さらなる調査を待たねばなるまい。

第 176 図　竹井館土塁状遺構

【史料】なし　【参考文献】1,2,9,22,27

筑後 208　飯江城（はえじょう）	郡名　山門郡	別称　舞鶴城	図幅名　野町（西）
	種別　山城	所在　みやま市高田町舞鶴	

【沿革】飯江川が瀬高の平野へ注ぎ込む入口、川の西岸の丘陵上に位置する。『軍談』では「飯江村城跡」として花山天皇の代に武智源太春倫が居城し、後に田尻氏が肥後からの攻撃に備えるために築いた砦であるとする。『旧柳川藩志』（文献 22）では「舞鶴城趾」として名を挙げている。



第 177 図　飯江城縄張り図（事務局作成）

【概要】城がある山頂には、金刀比羅宮の社殿が建つが、そこが一辺約 10m 四方の主郭Ⅰで、その他の曲輪といえば、北東尾根の細長い曲輪Ⅱくらいである。このように非常に小さな曲輪が２面ばかりある城であるが、その周囲には過剰なほどの防御遺構が確認できる。Ⅰの北側には、現状で A に竪堀３本を構築し、さらに北側 B に堀切２本が山道造成で半ば損なわれながらも残されている。またⅡの東側には、全長 80m、幅 10m 強、深さは 15m 近くもある巨大な堀切 C が構築され、さらにその東側に不明瞭ながらも竪堀が３～４本、そして、これも大堀切 D の端部が堀切 C と接続する形で構築されている。C の北東側には平坦地形が存在するものの、これは自然の平坦地形を後世に耕作のための造成が入れられたものであると思

われる。またＩの南西側にも、堀切ＥとＦが端部を接続する形で構築される。Ｅは中央部が窪んでおらず平坦になっているが、これは斜面上からの土砂の埋没によるものと考えられる。以上のように、当城は非常に小規模な曲輪面に対し、過剰なまでの防御遺構が構築されており、城の防御面に非常に腐心していた様子が窺い知れ、地誌の記載にあるように、田尻氏が肥後方面からの攻撃に備えて防備を厳重にした様子を表しているのであろうか。

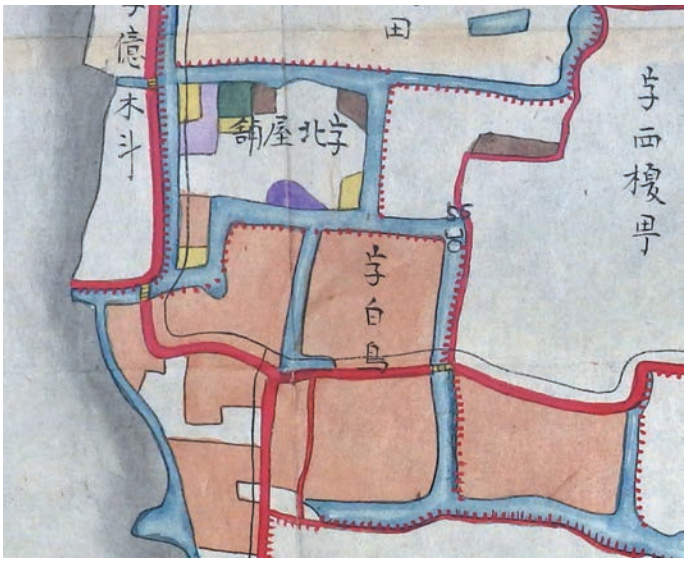
第 178 図　飯江城遠景

【史料】なし　【参考文献】1,2,4 ～ 8,**9**,14,15,22,27,111

筑後 211　白鳥城（しらとりじょう）　　**郡名**　山門郡　　**別称**　なし　　**図幅名**　柳川（東）
種別　平地城館　　**所在**　柳川市三橋町白鳥

【沿革】矢部川右岸、標高約３ｍの平地に位置する。近代以前の地誌には、白鳥に城館が存在するという記載は見られず、白鳥城の初出は『教委』である（『教委』では『軍談』を白鳥城の参考文献として挙げているが、『軍談』には白鳥の城の記載は見られない）。また、『福岡県の城』にも「白鳥城」の記載があり、白鳥城跡の石碑の存在を記しているが、これは城跡の石碑ではなく、後述する古戦場跡の石碑である。古戦場跡地が次に述べるように城跡の様相を呈しているために、古戦場跡を城跡と読み替えたのであろうか。そのためか『城郭』には「白鳥城」の名は挙がっていない。ちなみに、古戦場としての白鳥の記載としては、『山門郡誌』（文献 14）に「三椿村白鳥の東北の平野なり。天正七年五月龍造寺隆信一萬余騎を率ゐて筑後山下城主蒲池鑑廣と白鳥に戦ふ」とあり、龍造寺方と蒲池方との争いが白鳥をはじめ瀬高などであったことを記している。

第 179 図　白鳥之古戦場碑と水路（左）・水路に沿った土手状の高まり（右）



第 180 図　明治 20 年代初期の白鳥古戦場周辺の字図（『筑後国山門郡白鳥村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）

【概要】白鳥の字北屋敷は、一辺約 80m のＬ字形のクリークで囲まれた方形区画を呈しており、そ

の北端に白鳥之古戦場碑が建つ。『福岡県の城』では水路の周囲に土塁状の高まりが方形区画の周りを巡るように図示されているが、現状では、北西隅の観音堂がある一角のみが残存する。明治時代の字図では墓地や藪、畑となっている。以上のように、字北屋敷の一角について、周囲に残るクリークや土手を城館の水堀や土塁として解釈するならば、城館遺構として認定することも可能であろう。しかしながら、この地に城としての伝承等はなく、確定要素にかける。この存在が城館遺構であるか否かも含め、今後の検討課題と言わざるを得ない。ただ、明治時代以降の土地利用が宅地ではなく耕地であり（集落域に設けたクリークではない）、区画の縁辺部が藪や墓地として利用されていることや（土塁などの痕跡の可能性）、また字が「北屋敷」であることなどから考えても、白鳥の合戦に直接関係するかはともかく、中世から近世期にかけてのどこかの段階で、当地が屋敷地となっていた可能性は考えられよう。

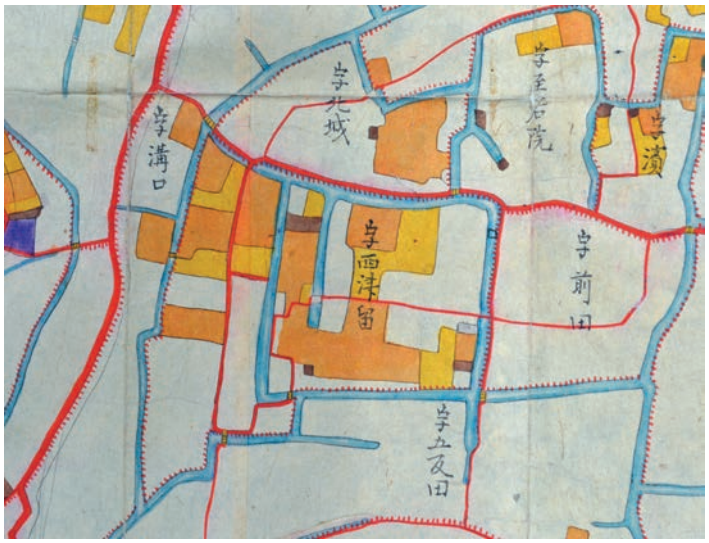
第 181 図　白鳥城推定地周辺地形図（柳川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）

【史料】なし　【参考文献】6,7,8

筑後 213　津留城（つるじょう）	郡名　山門郡	別称　なし	図幅名　柳川（東）
	種別　平地城館	所在　柳川市大和町六合	

【沿革】矢部川に面した大和町六合の標高約３ｍの西津留の集落内に位置する。『軍談』には「同頃（天正の頃）田尻ノ家士津留因幡守、田尻石見守守之、同城（鷹尾城）ノ砦タリ」とある。『山門郡誌』（文献 14）には「大和村西津留に在り、小溝廻れる水田之也。只老松一株を残すのみ」とある。

【概要】現在、津留城のある西津留集落は、矢部川の右岸（西岸）であるが、旧河道を見ると、江戸時代以前は大きく蛇行して北側から西、南へと津留城を大きく迂



第 182 図　明治 20 年代初期の津留城周辺の字図（『筑後国山門郡六合村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）

第 183 図　津留城の水堀と考えられる水路

第 184 図　昭和 37 年当時の津留城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

回するように流れており、現在とは逆の矢部川の左岸に位置し、矢部川に囲まれる要害の地であった。現在、西津留の集落には東西約 150m、南北約 100m の方形区画を取り囲むように水路が巡らされており、そこが城跡とされている。また地元では、その区画の中にも水路が分かれており、「鮎堀」と称する水路などもある。これらの水路や地割については、明治 20 年代初期頃の字図にも現在とほぼ同様に残されており、中世城館の水堀を踏襲している可能性が高い。また、地元では「城内」という地名があったり、さらに北側には字「北城」などもある。明確に断言するのは難しいが、さしあたっては、方形区画を城の確実な範囲とし、字「北城」についても曲輪など城の一部であった可能性があることは指摘できるであろう。

【史料】あり

【参考文献】1,2,5～8,9,14

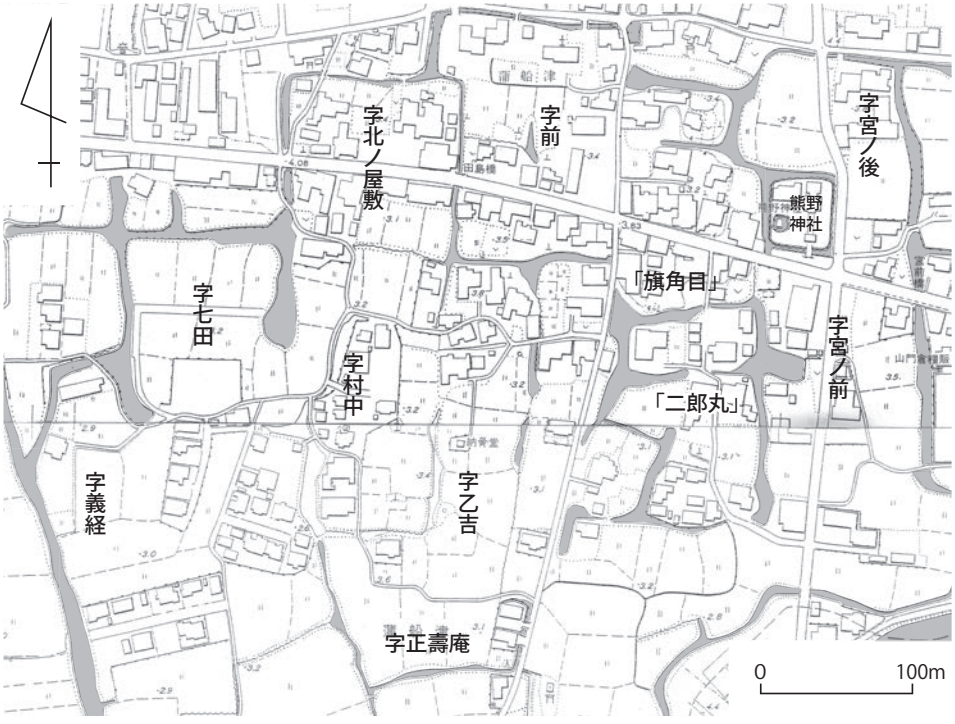
第 185 図　津留城周辺地形図（柳川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）

筑後 214	蒲船津城（かまふなつじょう）	郡名　山門郡	別称　なし	図幅名　柳川（西）
		種別　平地城館	所在　柳川市三橋町蒲船津	

【沿革】塩塚川右岸、柳川城の東側にあたる三橋町蒲船津の標高３ｍほどの平地に位置する。『山門郡誌』（文献 14）には「蒲池氏の支城三橋村蒲船津の東南方にあり、二郎丸といふ場所の本城二の丸趾と伝ふ。蒲池氏の臣蒲池益種城番たり。天正九年龍造寺氏の臣鍋嶋氏之を攻む。益種等奮戦及ばず戦死す。城の南方に戦死者の塚あり」とある。

【概要】蒲船津城の一角に当たるという「二郎丸」という地名は小字にはないが、地元では熊野神社の南西側にあてられている。また、周辺には「旗角目」などの関連地名もあるとする。それらの一帯は水路が縦横に走ることで造られた方形の区画を多数確認することができ、特に「二郎丸」の位置は、水路に沿って藪が巡っており、土塁などの痕跡の可能性も考えられ、それらがかつての蒲船津城の水堀や土塁などを反映したものである可能性は考えられる。近くの字「北ノ屋敷」なども蒲船津城に関連し

第 186 図　明治 20 年代初期の蒲船津城周辺字図（『筑後国山門郡蒲船津村絵図』（部分）を一部改変して事務局作成）



第 187 図　蒲船津城周辺地形図（柳川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）

た地名の可能性がある。さらに現状残された水路の多くも、少なくとも明治 20 年代からは、若干埋められたものを除いてはほとんど変わっておらず、中世まで遡る可能性を残している。しかしながら、城としての根拠が地名のみであり、およその位置以外の、明確な城の位置や範囲などの詳細情報は不分明であり、現状の情報では知ることは難しい。

【史料】あり

【参考文献】2,6,8,9,14,22

第 188 図　昭和 23 年当時の蒲船津城周辺航空写真（国土地理院撮影）

筑後 218　塩塚城（しおつかじょう）	郡名　山門郡	別称　なし	図幅名　柳川（西）
	種別　平地城館	所在　柳川市大和町塩塚	

【沿革】塩塚川左岸、塩塚の集落の西側の平地に位置する。『軍談』では「鹽塚村城跡（直茂譜云、佐留垣城）」として「同頃（元亀天正年間頃）鹽塚石見守､鎮並ノ為ニ守之､今此處ヲ塚ト云」とあり、『山門郡誌』（文献 14）には「大和村塩塚の西方に在り、本丸は東西十五間、南北十四間半」とある。

第 189 図　塩塚城趾碑（左）・百八人塚（右）

【概要】現在、塩塚集落の西方の水田中には「塩塚城趾」の碑が建っている。確かにクリークに囲まれた一角ではあるが、『城郭』では水田中にあることなどから、城跡としてはふさわしくなく、塩塚集落内かあるいは『軍談』の言うように佐留垣城のことを指しているのではないかとしている。しかしながら、明治 20 年代の字図を参考に字を落とし込んでみると、石碑がある場所は字「北城」となっており、塩塚城に関連するような地名の場所にある。また、石碑の南西に所在する宗樹寺には「蒲池氏百八人塚」（柳川市指定史跡）があり、伝承では天正 9 年（1581）5 月 28 日、蒲池統安が

第 190 図　昭和 37 年当時の塩塚城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

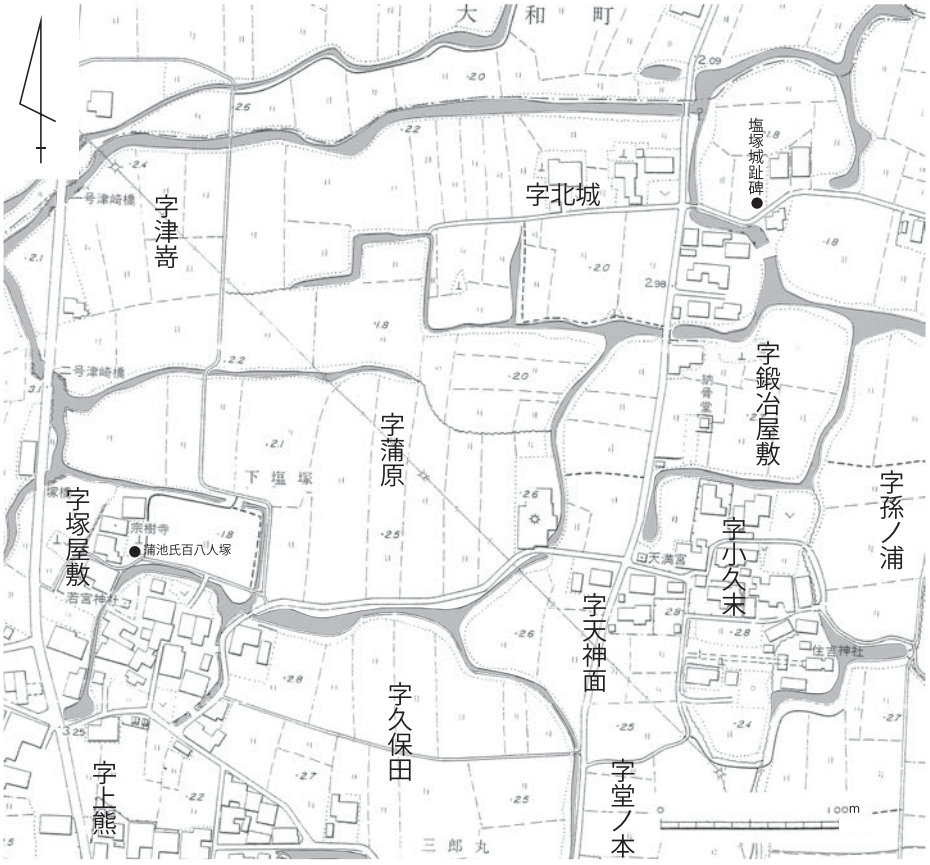
守る柳川城が落城した際、蒲池鎮並夫人玉鶴姫ほか 108 人は統安の次男・鎮貞が守る塩塚城へ逃れたものの、6月1日、龍造寺隆信と田尻鑑種によって落城、その 108 人も殺され、宗樹寺の前に合葬されたのが「百八人塚」であるという。塩塚城はこの「百八人塚」の北東約 200m の場所と推測されると現地の解説板には書かれている。その推測地は、百八人塚と塩塚城趾碑とのちょうど中間地点にあたる（字は北城）。そこには方形に巡るクリーク（現在は消滅）なども確認でき、城地として想定できる可能性は十分に考えられる。

以上のように、塩塚城の位置は、明確な場所までは不明ではあるが、推定地として塩塚集落の西方、字「塚屋敷」から「北城」の間のどこかにあったとしておくのが、現状では最も妥当な判断であると思われる。

【史料】なし

【参考文献】1,2,5 ～ 7,8,
9,14,22

第 191 図　明治 20 年代初期の塩塚城周辺字図
（『筑後国山門郡塩塚村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）



第 192 図　塩塚城周辺地形図
（柳川市教育委員会提供図（平成 5 年測量）を一部改変して事務局作成）

⑩三池郡

筑後 220	今福城（いまぶくじょう）	郡名　三池郡	別称　豊福城	図幅名　柳川（東）
		種別　丘城	所在　みやま市高田町今福	

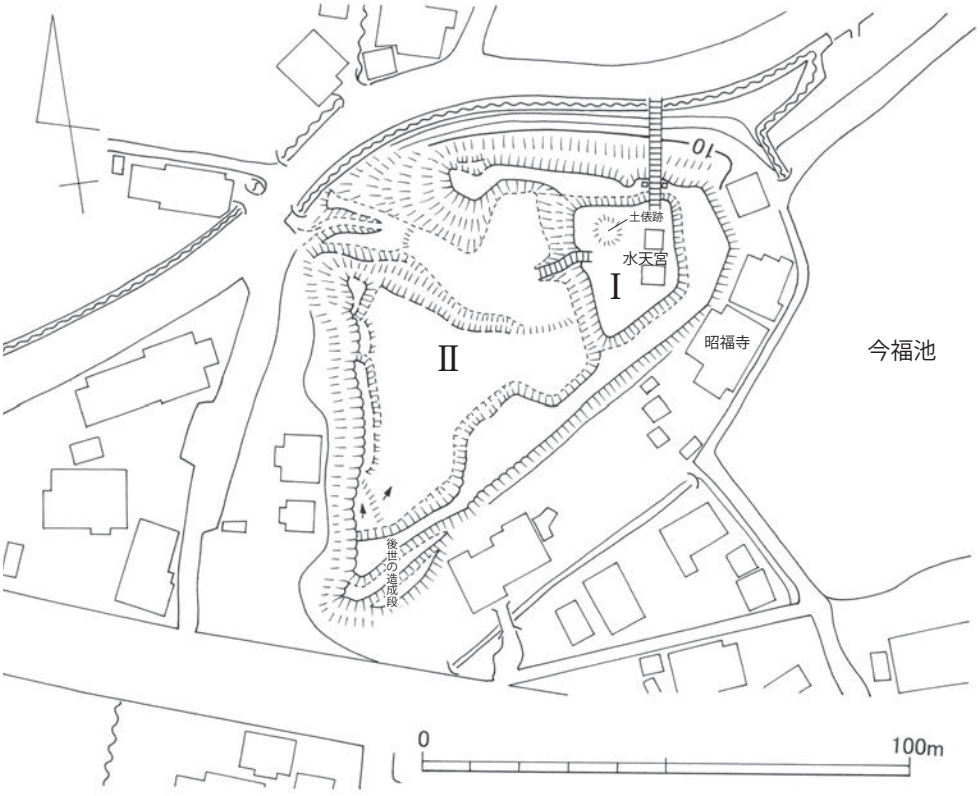
【沿革】矢部川支流、飯江川左岸にある今福池の西側の「城山」と呼ばれる小高い丘陵上に位置する。『軍談』には「今福村城跡」として正治元年（1199）に三毛摂津守が築城、翌年大間城に移り、その代わりに家臣の小山左衛門尉に守らせたとする。また、『福岡県の城』には出典不明ながら、天文 19 年（1550）７月に蒲池武蔵守鑑盛が田尻伯耆守親種と連合し、数千余騎で三池氏の家臣小山浄栄入道が守る当城を攻め、三池氏の本城、大間城ともども落城したとする。

第 193 図　今福城遠景

【概要】現在、城山の最高所Ⅰには水天宮が祀られており、一辺約 30m 四方の平坦面となっている。また、標高が低いということもあって、後世の開墾などの造成が著しく、丘陵全体にわたって展開する平坦面の多くは、後世の造成に伴うものと考えられ、どれほど城の遺構が残っているのか判断するのは非常に難しい。南東側斜面も、寺院や住宅があり、かなり削られてしまっているようである。ただ、大々的に改変がなされていないものとすれば、最高所Ⅰを主郭とし、その西側には広大なⅡの曲輪が副郭として展開していた可能性も指摘できる。ただ、Ⅱの西側にある土塁状の高まりや、Ⅱの北側の虎口とも見られそうな出入口についても、城館遺構と断定することは困難であり、むしろ後世の改変によるものと見た方が良いかもしれない。詳細は今後の調査に委ねるほかはないだろう。

【史料】あり

【参考文献】1,2,4 ～ 7,**8**,**9**,15,22,23,111



第 194 図　今福城縄張り図（事務局作成）

筑後 221	飛塚城（とびづかじょう）	郡名　三池郡	別称　田尻城・田尻飛塚城	図幅名　柳川（東）
		種別　山城	所在　みやま市高田町田尻	

【沿革】今福城の東側にある丘陵上に位置する。『軍談』には「田尻村飛塚城跡」として「田尻家代々ノ居城也、永禄中鷹尾城ニ移ル」とある。『旧柳川藩志』（文献 22）には鷹尾城へ移った後は、田尻左京が城番として居城したとする。

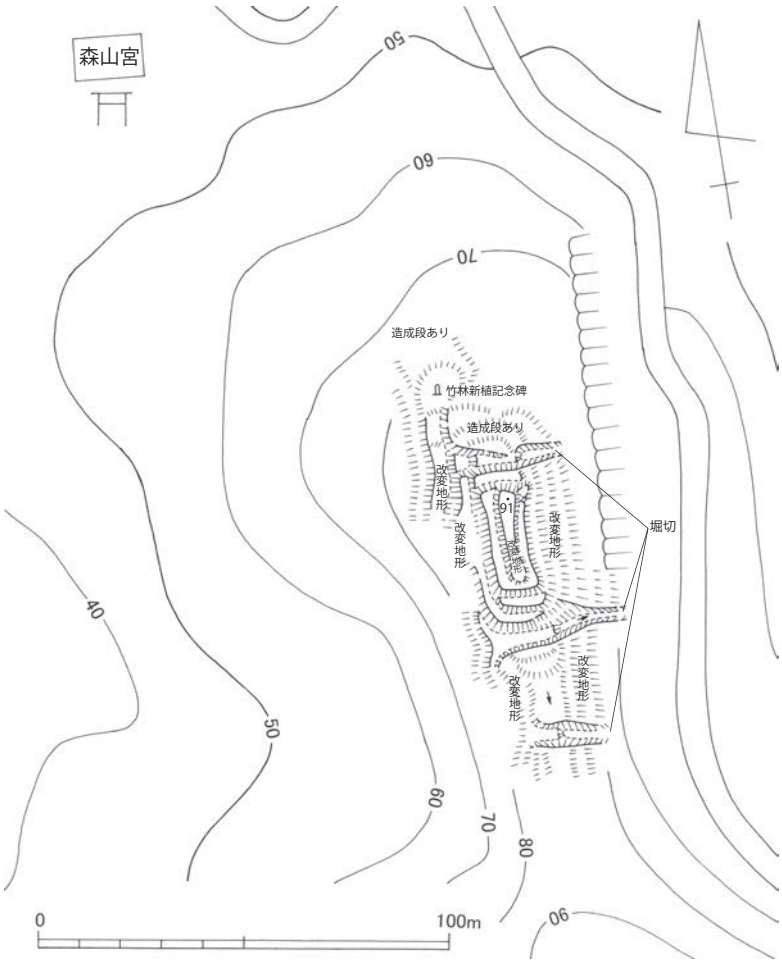
【概要】森山宮背後の標高 91m の頂部に城館遺構が確認される。城の北側には、大正 13 年（1924）および昭和２年（1927）の竹林新植の記念碑が建っており、この時期に城のある一帯が、大々的に改変されていることが想定され、城の内部も小規模な段造成が細かく無数に造られている。しかし、およその城の姿は残されている。

頂部には南北 30m、東西 10m 弱の曲輪を置き、その北側には１本、南側には２本の堀切を構築する。曲輪や堀切の周りには小段が数多く造られているが、そのほとんどは竹林などに伴う後世のものであろう。以上のように、当城は田尻氏の一時的な居城であるとはいえ、必ずしも大きな城ではなかったものと想定される。

【史料】あり

【参考文献】1,2,5 ～ 7,**8**,**9**,15,22,23,111

第 195 図　飛塚城遠景



第 196 図　飛塚城縄張り図（事務局作成）

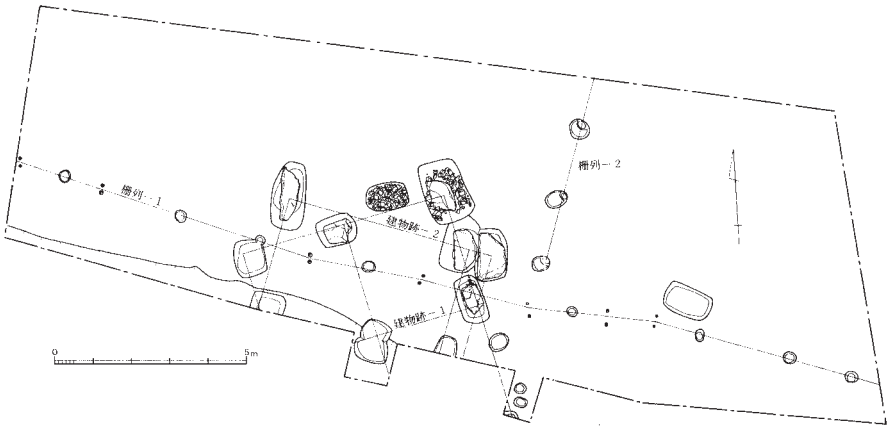
筑後 223	内山城（うちやまじょう）	郡名　三池郡	別称　吉野内山城	図幅名　大牟田（東）
		種別　丘城	所在　大牟田市吉野	

【沿革】有明海に注ぎ込む隈川の南岸、標高14mの低台地上に位置する。『軍談』には「豊永村内山城跡」として「天正中、豊持和泉守、三池上総守ニ属シテ守之」とある。また、『三池郡誌』（文献15）には「今城址と思はれし所畑地になつて居る」とある。なお、『全集』には大牟田市内

に内山城が２つ掲載されているが、同一の城を指していて、重複である。

【概要】隈川とその支流が合流する両川に挟まれた標高 14m の低台地上は、字「城畑」で、内山城があった所と推測されており、一辺 50m ほどの方形の平坦面が広がっている。その南西隅では昭和 57 年（1982）に発掘調査が行われており、小面積ではあるが礎石建物２棟、柵２列が検出されていて、内山城に関連する城館遺構とみなすことができる。このように確実に内山城の遺構が残存していることが判明しているものの、後世の改変が大きく入った耕作地などが周囲に広がっており、明確な城域は不明である。字城畑の東に南北に段丘を切り通す道路が堀切の痕跡の可能性が指摘されていたり（『城郭』）、字南屋敷には竪堀と土塁が残されていることなども指摘されているものの（文献 98）、いずれも明確な証拠を欠いており、断言することが難しい。地誌の記載にしても、現在は畑地となっているとしており、発掘調査が行われた「城畑」に城域を限定している可能性もある。いずれにせよ、詳細な発掘調査を待つよりほかないと言えよう。

第 197 図　内山城周辺地形図（文献 98 掲載図を一部改変して事務局作成）



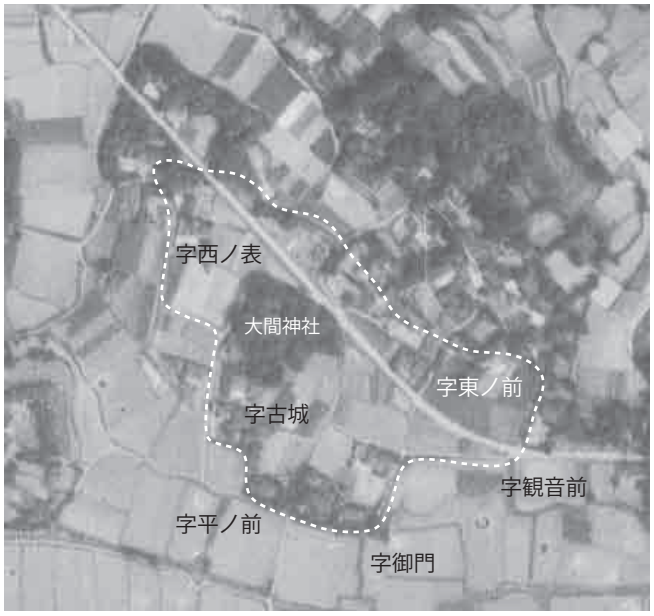
第 198 図　内山城跡礎石建物・柵平面図（文献 98）

【史料】なし　【参考文献】1,4 ～ 8,**9**,15,22,**98**

筑後 229	**大間城**（だいまじょう）	**郡名**　三池郡	**別称**　大間館・三池氏館・平野城	**図幅名**　大牟田（東）
		種別　平地城館	**所在**　大牟田市三池	

【沿革】大牟田市の東にある大間山（標高225m）の西に所在する大間神社周辺一帯に位置する。『軍談』には「大間村城跡」として「八幡社ノ東ニアリ、三池摂津守師貞此城ヲ築キ、今福城ヨリ移テ居之、子孫代々守之」とあり、さらに「此城四方共ニ地下リ、中央ニ五六十間四面耕ザル地ア

リ、居間ノ跡也ト云、其南ニ又同シ高サナル所アリ、諸士第宅ノ跡ト云、東ノ下地ニ城地ノ跡アリ、御舘掘ト云」とある。また『大牟田市史』（文献19）には「三池系図」を引き、城の三ノ丸に若宮八幡宮を建立したことが記される。『旧柳川藩志』（文献22）には「三池郡大字大間の西にあり」とし、「又館辻元小路など云ふ字あり」と記す。なお、『三池郡誌』（文献15）には三池師貞８代の孫の鑑速と紀伊守親久兄弟は、大友方に属したが、永禄10年（1567）９月に龍造寺方に攻められ、兄弟共に戦死したとする。



第 199 図　昭和 23 年当時の大間城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成。白破線は城の推定範囲を示す。）

【概要】大間神社付近の字が古城であり、神社地が周囲よりも一段高くなっていて、『大系』や『城郭』では、そこに方形区画の城地が想定されている。神社周辺については、開発などが入り、かなり状況が様変わりしており、なかなか城があった当時の様子を復元するのは難しい。ただ、昭和 23 年（1948）の航空写真を見ると、神社境内やその南東側に方形に区画されているような状況が読み取れ、城域を反映している可能性もあろうが断定できない。また、神社の南東側を発掘調査した大間遺跡 D 地点では、調査区一面に無数のピット群が検出されると共に東西方向の溝も検出され、13 世紀を中心とする大量の土師器や龍泉窯系青磁碗などが出土している。三池師貞が大間城に入ったのが正治２年（1200）とされることから、初期の大間城の様相を示しているものと思われる。

【史料】あり　【参考文献】1,2,4 ～ 8,**9**,15,19,22,103

筑後 230　三池山城（みいけやまじょう）
郡名　三池郡　　別称　舞鶴城・今山岳城・今山城　　図幅名　関町（西）
種別　山城　　所在　大牟田市今山・熊本県玉名郡南関町久重

【沿革】大牟田市街の東、熊本県との境に聳える三池山（標高 388m）から県境の稜線上を北へ進んだ先にある三池神社境内周辺に位置する。『軍談』には「今山村三池山城跡」として「三池氏代々ノ詰ノ城ニシテ、要害堅固ノ山城也、今勢溜リ馬場等存在セリ」とある。

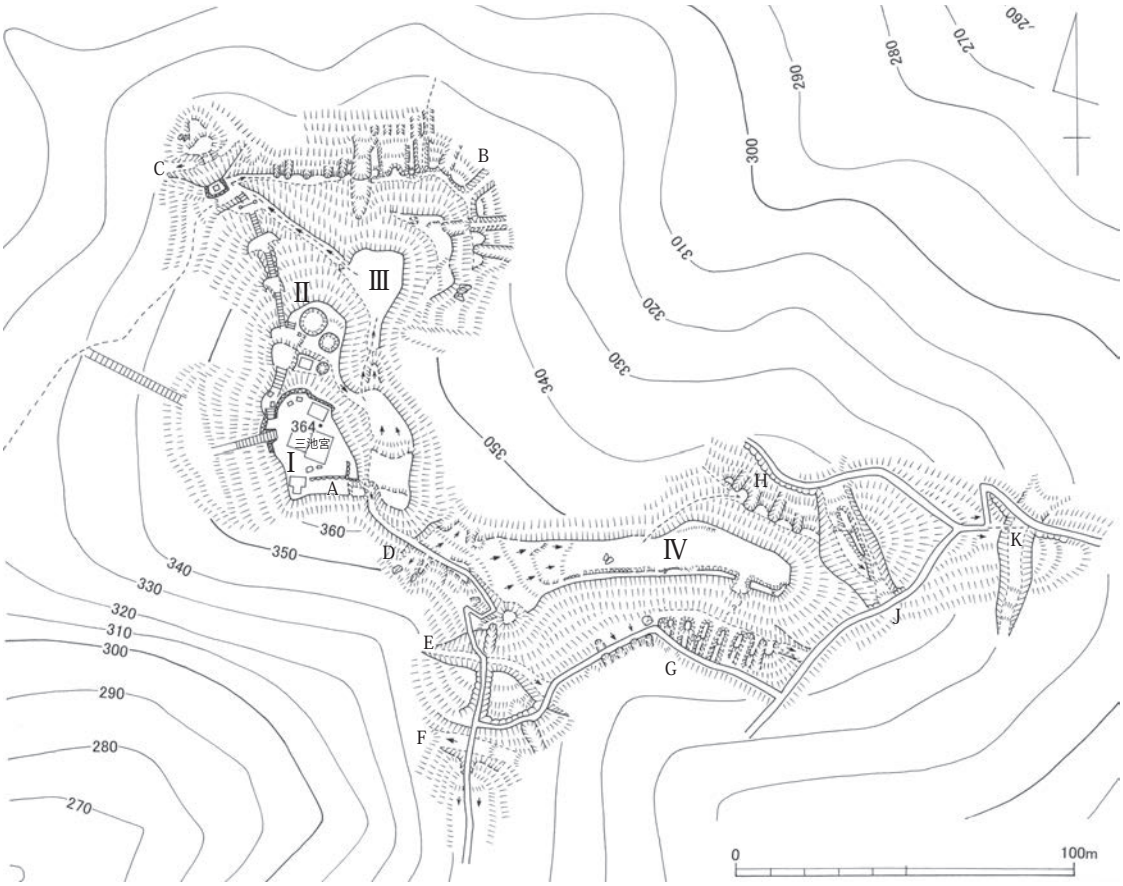
【概要】三池神社境内一帯が城域で、神社社殿があるⅠが城内でも最高所で、主郭であったとみられる。Ⅰは一辺約 30m の曲輪で、周囲に石垣が構築されるが、その多くが神社造成に伴うものであるが、A には大型の石を並べた石列が見られ、城に伴う可能性の石垣かもしれない。そしてⅠの東側から北側にかけて曲輪が取り巻いている。北側のⅡには「三池」の名の由来となった三つの池があり、現在でも水が溜まっている。Ⅱの北東側にも同規模の曲輪Ⅲを置き、その北側斜面を中心に、10 本を越える竪堀群が一部横堀と接続する形で畝状空堀群として構築される（図中 B）。また、北西尾根上 C には堀切１本を構築し、北側の城域を画している。また、Ⅰの南東側にも不鮮明ながら堀切 D を設け、その先に不明瞭な平坦地形が続き、その先に東西に細長い曲輪Ⅳを置く。Ⅳの南西

側E・Fには大型の堀切２本を構築して三池山側からの攻撃に備えるとともに、南側の斜面に対しては、Gに13本前後の竪堀群を横堀と接続させる形で畝状空堀群を構築している。この畝状空堀に連動する形で曲輪Ⅳの南端部にも低土塁が確認され、小規模な石積みも見られるが、石積みについては曲輪Ⅳの中央部に近世末期の石切り痕跡があり、その石切りの際に生じた破石を積んでいるようであり、土塁については問題ないものの、石積みについては城との関係は微妙である。そしてⅣの北東側にもHに畝状空堀群､隣接して堀切Jを構築する。Jの堀底部分は堀が二重になっている。Jの東約50m地点Kにもさらに堀切1本を構築し、東側からの攻撃に備えている。以上のように当城は東西約300m弱、南北約200mの規模であり、筑後南部の中世山城としては最大規模のものといえ、三池郡一帯を押さえていた三池氏の本城にふさわしい城といえるのではないだろうか。

第200図　三池山城主郭Ⅰの「三池」（左）・三池山城堀切（右）

なお、Ⅱの曲輪面において、12世紀代の中国製陶磁器なども散布する状況が見受けられた。三池宮があることからもわかるように、城があった以前においても神社や山寺のような山岳宗教遺跡がこの地にあった可能性も指摘でき、そのような場所に戦国時代に山城が築城されたと言えよう。

【史料】あり　【参考文献】1,2,5 ～ 8,**9**



第201図　三池山城縄張り図（事務局作成）

2　近世城館

筑後Ｋ１　松崎陣屋（まつざきじんや）	郡名　御原郡	別称　松崎館・松崎城	図幅名　鳥栖（東）
	種別　陣屋	所在　小郡市松崎	

【沿革】宝満川東岸の標高約 16m の低段丘上に位置する。出石藩小出家出身で久留米藩二代藩主・有馬忠頼の養子となっていた有馬豊範が、寛文８年（1668）に御原郡松崎に一万石を分知、久留米有馬藩の支藩として、松崎の地に同 11 年頃に陣屋を構えたものである。その後、貞享元年（1684）に奥州久保田藩の家督相続争いに巻き込まれ、豊範は領地没収、廃城となった。

【概要】近世秋月街道の宿の一つ、松崎宿は有馬豊範が松崎入部に際して、整備を行った宿場町であるが、その西側の字「城山」に陣屋があったとされ、現在は三井高校となっている。松崎宿から街道を西に分岐する道筋は、桜馬場と呼ばれ、豊範が山桜を植樹して整備をしたとされている。

このように松崎宿や桜馬場、そして陣屋のおよその場所については判明しているものの、陣屋の規模や構造、範囲などについては判然としない。『福岡県の城』などでは松崎宿の西側の字城山の台地一帯が陣屋で、台地の周囲には内堀、外堀、土塁などを完備した城郭であったとする。確かに台地の南西側の池は堀幅のように細長く蛇行し、「城近堤」と城に関係がありそうな名称まで付けられている。しかし、台地全体を陣屋とみた場合、一万石の陣屋としてはあまりに広く、その範囲に疑念を抱かざるを得ない。また、三井高校のグラウンドにおいて福岡県教育委員会により発掘調査が行われ、直線の素掘りの溝が検出されており、陣屋に関する遺構であるとされてはいるものの、溝がどのように配置されていたか全くわからないため、陣屋に関する遺構かどうかも判断がつかない。以上のように、当陣屋はおよその場所については判明しているものの、現状においては規模、構造などはよくわかっておらず、詳細は今後の調査に委ねるほかはない。

【史料】あり　【参考文献】1 ～ 3,5,7,**8**,51,116

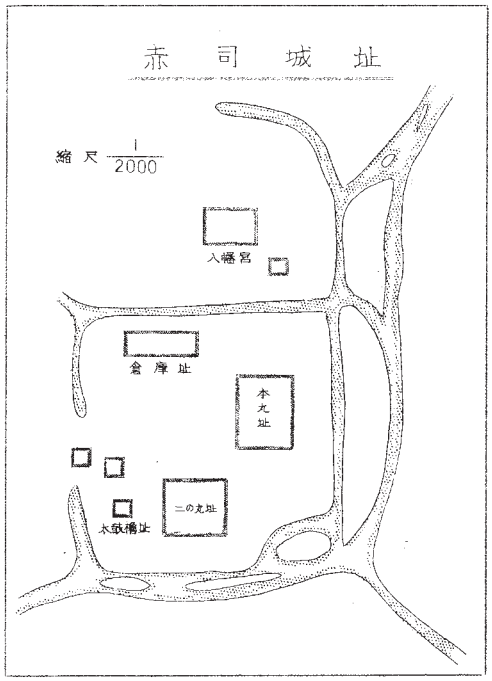
第202図　昭和23年当時の松崎陣屋周辺航空写真（国土地理院提供写真を一部改変して事務局作成）

筑後Ｋ２ 赤司城（あかじじょう）	郡名　御井郡	別称　なし	図幅名　鳥栖（東）
	種別　平城	所在　久留米市北野町赤司	

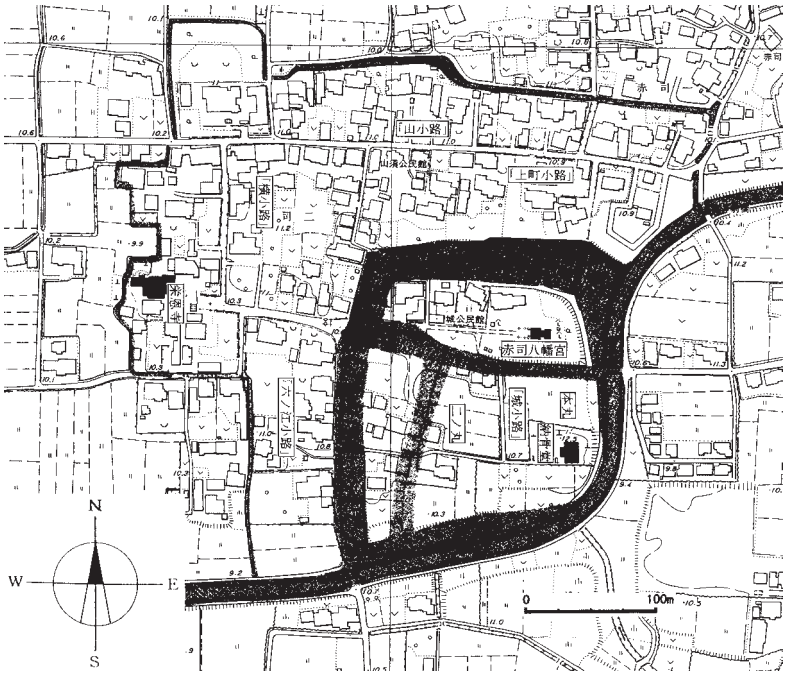
【沿革】筑後川支流の陣屋川と、陣屋川に合流する池田川にはさまれた場所に当たり、池田川の右岸に面した標高約 10m の平地上に位置する。『軍談』には「赤司村城跡」として「平城也、縦廿間、横十七間、二ノ丸縦四十五間、横廿三間、東南ニ池アリ、西北ニ廣七間、深七尺ノ堀アリ」とし、『寛延記』を引き、草野太郎家清嫡男が在城し、その後大友方の上光駿河守、野上左京が守備したとする。さらに慶長５年（1600）の田中吉政の時代には、支城の一つとして田中左馬尉清政が知行高 2,840 石、城付知行１万石として入城したと記す。その後、元和の一国一城令にて廃城となったと考えられる。

【概要】池田川が大きく蛇行する湾曲部の字「城」に城が構えられたようであるが、現在は水田や納骨堂となっており、縄張りの詳細を知るのは難しい。『郷土資料集』（文献 24）には第 203 図のように、赤司八幡宮の南側の池田川にはさまれた空間に本丸、二ノ丸、倉庫、太鼓櫓などが想定されている。また、木島孝之の復

第 203 図　昭和 23 年当時の赤司城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）



第 204 図　赤司城址図（文献 24）



第 205 図　赤司城復元図（文献 127・木島孝之作成）

元案によれば（文献 127）、城の中心部は「本丸」「二ノ丸」と地元で呼ばれ、字「城小路」などの地名が残り、赤司八幡宮境内をも含めた一辺約 200m 四方が池田川と堀によって囲まれた空間を城域としている。さらにその北西側に、「城小路」「横小路」「六ノ江小路」などの地名があって、横矢のような折れを持ちながら水路が周りを巡っており、その内部に家臣・与力の屋敷地を想定している。以上のように当城は赤司八幡宮およびその南側の一角を中心とし、池田川右岸一帯に広がりを見せていたことがわかる。

【史料】あり　【参考文献】1 ～ 3,5 ～ 9,17,24,87,**127**

筑後Ｋ３　久留米城（くるめじょう）

郡名　御井郡　別称　篠原城・笹原城・久留目城・来目城・篠山城
図幅名　久留米（西）　種別　平山城　　所在　久留米市篠山町

【沿革】筑後川左岸の標高 23 mの丘陵上に位置する。『軍談』には永正年間に初めて築城したがほどなく落城、天文年間初頭に再び御井郡郡司某が城を構え、天正年間初頭に高良山座主良寛が弟麟圭を城主にしたとある。天正 15 年（1587）には筑後北部７万５千石を与えられた小早川（毛利）秀包が当城に入城して居城としたが、慶長５年（1600）の関ヶ原合戦により改易、筑後柳川に入部した田中吉政の柳川城の支城となった。当城には吉政の嫡子・吉信が入り、同 11 年に吉信が死去した後は、坂本和泉さらには田中主水が入城している。その後、元和

第 207 図　天保年間の久留米城（『天保時代久留米城下地図』（部分）・久留米市蔵）

第 206 図　明治初期の久留米城本丸（写真提供：久留米市）

第 208 図　久留米城本丸南側石垣

第 209 図　久留米城本丸南虎口の石垣

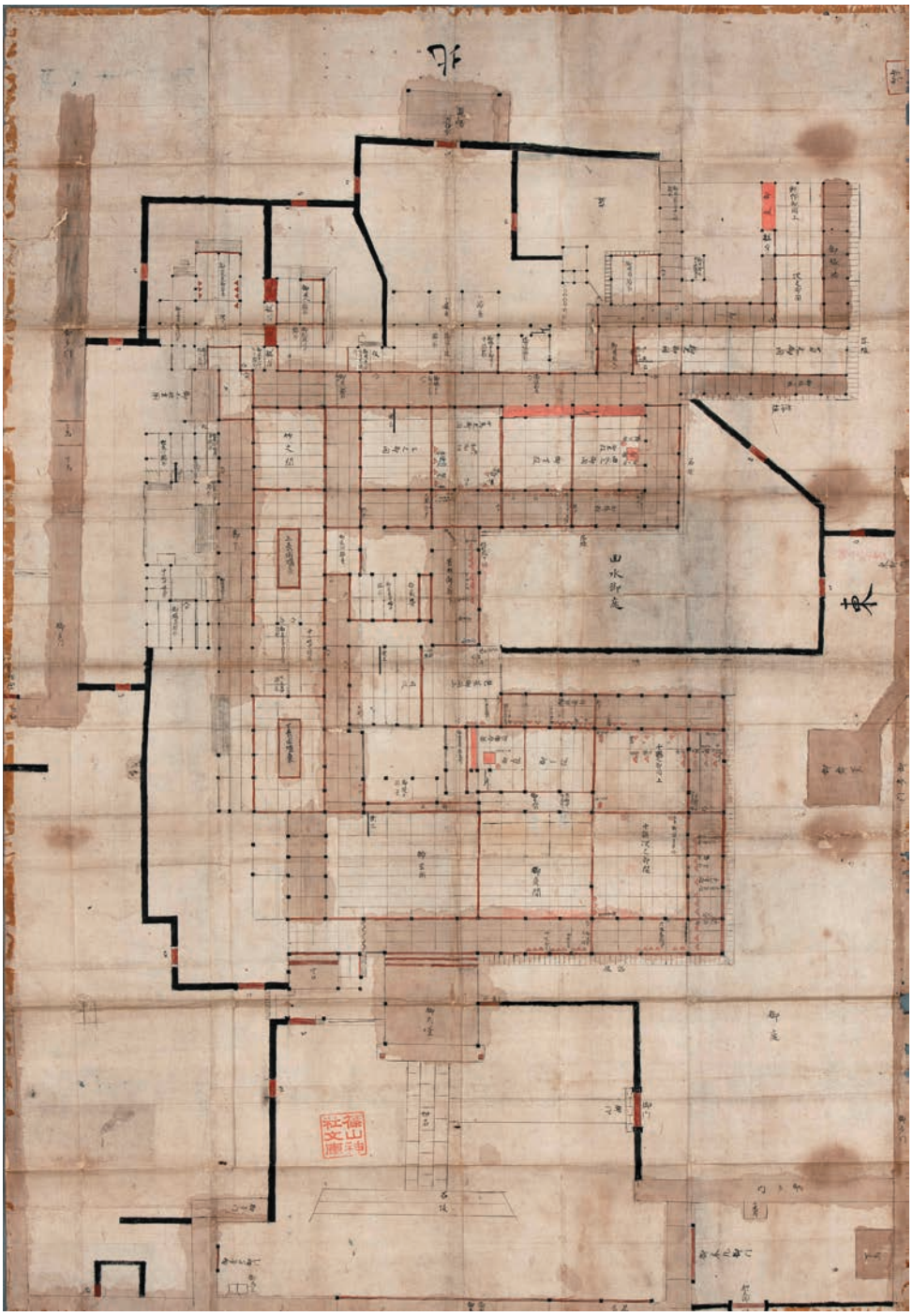
の一国一城令にて破却されたと推測されるが、元和６年（1620）に田中家が無嗣につき除封、翌７年に有馬豊氏が 21 万６千石の領主として丹波福知山から久留米に入城、大改修の末、寛永８年（1631）に城堀が完成した。

久留米藩有馬家は幕末まで存続し、明治時代初頭までは城の構造物は残され古写真なども残存している。しかしながら、明治５年（1872）に二ノ丸、同８年に本丸も解体され、本丸跡には篠山神社を建設、二ノ丸以下の堀などは全て埋め立てられ、工場群となり今に至っている。

【概要】城の縄張りは、現在久留米の市街となっており、本丸を除いてはほとんど知ることが難しい

第 210 図　延宝年間の久留米城下（『延宝八年製図久留米市街図』（久留米市蔵））

状況となっている。久留米城や城下を描いた絵図には、延宝８年（1680）の状況を描かれたとするものと、天保年間の様子を描いたものの２種類が存在し、それらなどを元に復元することができる。筑後川南岸に面した丘陵上に北から、本丸、二ノ丸、三ノ丸が並列し、その南側に外郭、そして城下町が展開している。本丸の北側には、馬出状の出丸が構築、本丸のすぐ東隣には、小早川秀包時代に造られたとされる「蜜柑丸」が置かれていた。本丸は南北八十六間半、東西五十三間、周囲には隅櫓を構築し、それらの間を多聞櫓が繋いでいた。隅櫓の内でも特に大きな巽櫓は三層の大型櫓で、天守の代わりをなしていた。内部には御殿を築造、二ノ丸、三ノ丸には大身の家臣屋敷、外郭には上級家臣の屋敷が建てられ、その外側に下級武士および町人の居住区が広がり、久留米城下を形成していた様子がわかる。



第 211 図　御城本丸絵図（篠山神社蔵）

【史料】あり

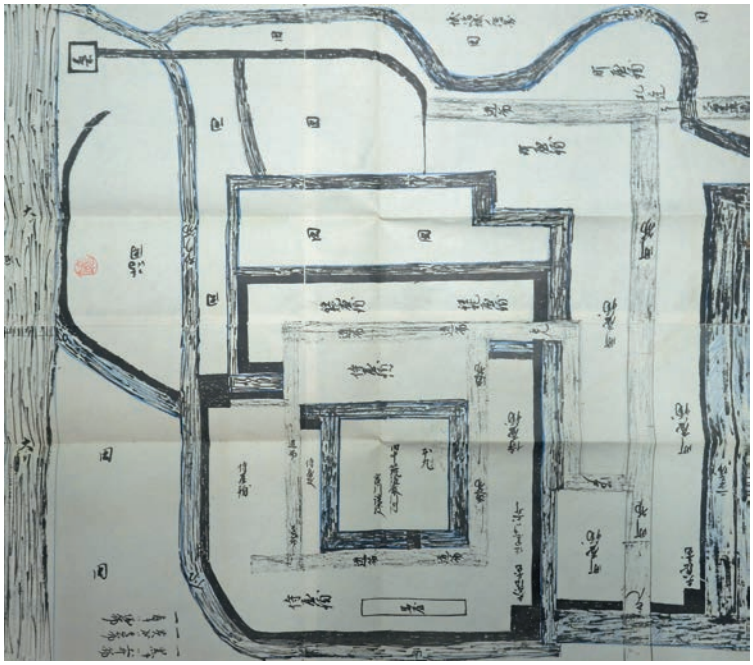
【参考文献】1 ～ 9,16,65,127

筑後Ｋ４　城島城（じょうじまじょう）

郡名　三潴郡　　別称　城島館　　図幅名　久留米西部（西）
種別　平城　　所在　久留米市城島町城島

【沿革】筑後川下流域、かつては筑後川が大きく蛇行していた川の左岸に面した城島の市街地に位置する。『軍談』には「城島舘跡」として「本丸東西三十八間、南北三十八間、外輪ニ堀アリ、口ノ廣五十間、二ノ丸東西四十八間、南北三十二間、南方川アリ、口廣十間、東方ニ堀アリ、口廣十間」とあり、天正 11 年（1583）に西牟田家周が築城、同 14 年に薩摩島津方に攻められ、翌 15 年には立花氏家臣・薦野玄賀が守ったとする。関ケ原合戦後の田中吉政柳川入部に際し、支城として家臣・宮川讃岐守が 6,800 石で居城したとする。また、同 19 年には宮川讃岐守を継いだ宮川大炊が当主・田中忠政に手討ちにされ、それに反発した一党が当城に立て籠もるという事件が勃発、この事件により忠政は大坂の陣に遅参、後の領地没収へとつながる一因となった。

第 212 図　昭和 23 年当時の城島城跡周辺航空写真
（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）



第 213 図　『城島城絵図』（写）（九州大学附属図書館付設記録資料館蔵「桧垣文庫」のうち）

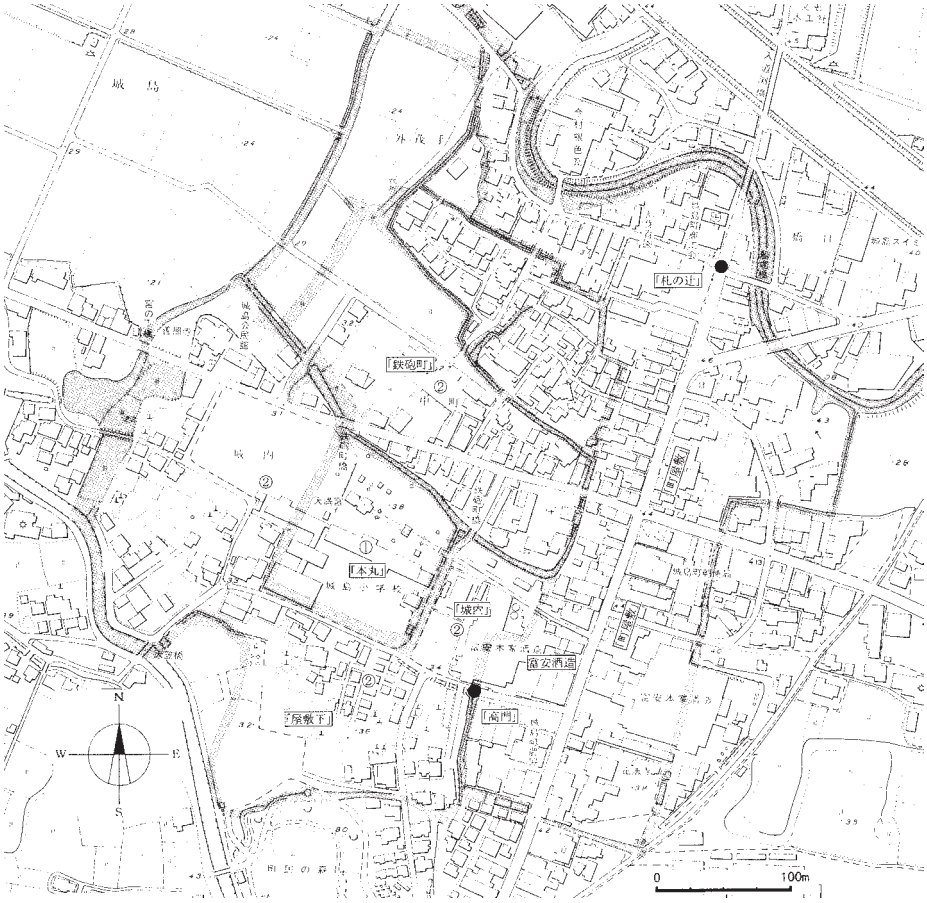
【概要】現状では、城跡は学校、水田、宅地化されてしまい、明確な遺構は水堀の一部が残るのみとなっている。江戸時代の絵図と地籍図から城郭構造を復元した木島孝之の案（文献 127）に従い、構造を説明する。字「本丸」とされる一角は現在城島小学校となっているが、ここは正方形の区画を保っており、かつては主郭（曲輪①）が置かれた場所とされる。①の周囲には曲輪②が設けられ、その周囲には土塁と外堀が巡る。その東側には城島の町家空間が展開していた。なお、曲輪②の空間には「屋敷下」「城内」「鉄砲町」の小字が残り、士分の屋敷地であったとみられている。以上のように当城は、方形に堀が巡らされた主郭を中心として、その周りに曲輪を配し、東側には城下町家を形成したと見ることができる。これらのレイアウトは田中氏段階に

生み出されたものであろう。

なお、『新考三潴郡誌』（文献 20）には、字本丸神社境内に末社小一郎神社があり、城島城の城将・城島小一郎を祀ったもので、毎年旧 11 月 16 日に祭典が行われていると記す。

【史料】あり

【参考文献】1 ～ 3,5 ～ 9,20,41,**127**



第 214 図　城島城跡推定図（文献 127）

筑後Ｋ５　榎津城（えのきづじょう）

郡名　三潴郡　　別称　なし　図幅名　羽犬塚（西）/ 佐賀南部（東）
種別　平城　　所在　大川市榎津

【沿革】筑後川下流の川港、榎津の町中、標高約３m の城山に位置する。築城は明らかではないが、田中吉政時代には支城に取り立てられ、寄合組頭の榎津加賀右衛門が知行 3,260 石で入城した。明確ではないが、おそらく元和の一国一城令にて廃城となったものとみられる。

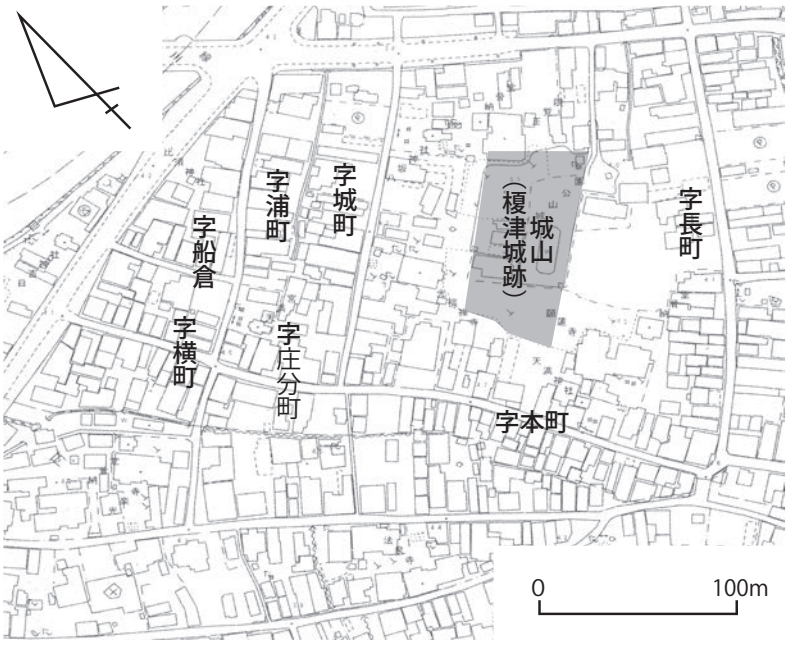
【概要】榎津の町中、字長町の一角に「城山」と呼ばれ、現在公園と墓地になっている場所が城跡とされている。「城山」といいつつも全くの平地であり、平城であると推測されるものの、現状では城の痕跡を見ることは非常に難しい。しかしながら、明治 20 年代の字図には、城山公園の一角は東側を除く三方を水路で囲まれており、これが

第 215 図　明治 20 年代初期の榎津城周辺字図（『筑後国三潴郡榎津町之図』（部分）・大川市教育委員会蔵・柳川古文書館保管）

城の周囲に存在した水堀の痕跡と見ることもできる。これより、水堀に囲まれた南北約100m、東西約50mの規模の曲輪を有し、榎津の町中に埋没するように、当城は立地していたものと想定される。

【史料】あり

【参考文献】5,8,9,28,127



第216図　榎津城周辺地形図
（大川市教育委員会提供図を一部改変して事務局作成）

筑後K６　福島城（ふくしまじょう）

郡名　上妻郡　　**別称**　なし　　**図幅名**　八女（東 / 西）
種別　平城　　**所在**　八女市本町

【沿革】矢部川の北岸、花宗川と山ノ井川に挟まれた標高約27mの平地、現在の福島の市街地に位置する。『軍談』には「福島城跡」として「本丸東西三十八間、南北二十一間、二ノ丸東西三十五間、南北三十二間、南面也」として堀が三重になっていると記す。

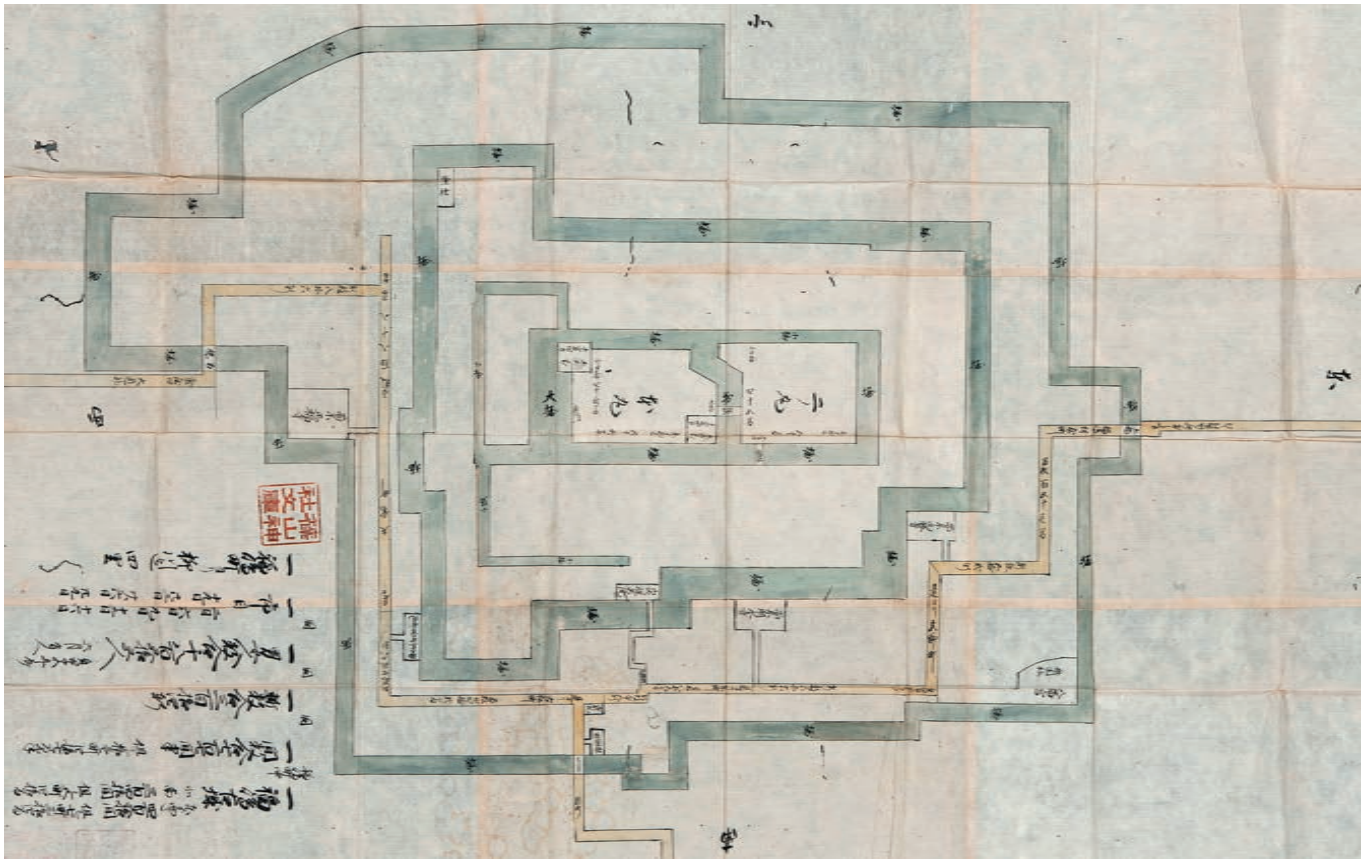
また、筑紫広門が最初に築城し、後に田中吉政が大改修し、次男久兵衛安政（正しくは三男康政）を３万石で置いたが、元和の一国一城令、田中家断絶により廃城となったことを記す。廃城後、福島は在郷町として現在に至っている。

【概要】福島城の往時の姿については、福島城を描いた絵図（第219図）や現在の地割などから類推されている。

現在八女公園になっている場所が本丸、その東側に二ノ丸が位置し、それぞれ小字が残されている。絵図では本丸の北西隅と南東隅に櫓台（矢倉臺）が記されており、現在、北西側のものとみられる櫓台跡が高さ５ｍほどの高まりとして残されている。八女市教育委員会所蔵資料に福島城にて出土したとされる鯱瓦があり（かつては軒瓦もあったというが現在は所在不明）、この大櫓に葺かれた可能性が高く、大型瓦葺櫓建物があったことが想定される。絵図には本丸と二ノ丸との周囲には、水堀が記されており、さらにその周りを二重の水堀が巡り、堀の塁線は要所で横矢をかけら

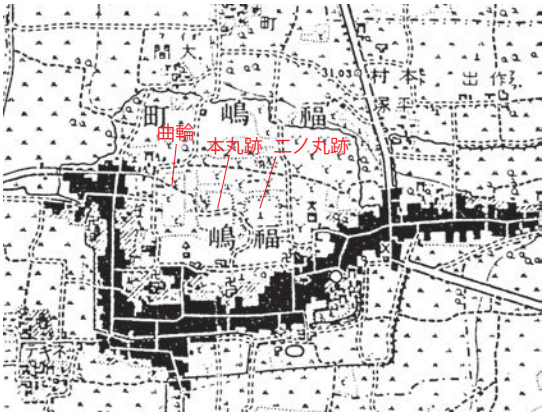
第217図　福島城本丸跡の櫓台跡（上）・
福島城の水堀の名残（福島八幡宮・下）

第 218 図　福島城復元図（文献 125）



第 219 図　福島古城図（篠山神社蔵）

れるように張り出し部分や、屈曲が何箇所も設けられ、「惣構」の形態を呈している。これらの水堀は現在、福島八幡宮近くのものを除いてはほとんど埋められたり、狭められて水路となってしまっているが、明治 30 年代の地図には本丸、二ノ丸周辺の水堀は埋まりつつも痕跡をとどめていたことがわかる。また、明治期の町並の状態から、本丸周辺つまり二重目の濠の内側には士分、その外側に町家というように住み分けがなされていた可能性も指摘されている（文献 127）。



第 220 図　明治期の福島城周辺地図（陸地測量部作成 1/20,000 地形図「筑後福島」（明治 33 年測量・福岡県立図書館提供）

以上のように、福島城は外周を含めると東西約 1 km、南北約 700m と田中氏の支城としては極めて広大で、支城の中でも藩主の子が入ったことでもわかるように藩内でもかなり重視された城であったことがわかる。また田中氏の本城であった柳川城の縄張りと比較しても、①方形の形状を持つ本丸・二ノ丸が並列する、②本丸、二ノ丸は水堀を伴う巨大な曲輪で重層的に囲郭、惣構が形成されている、③惣構を形成する曲輪の壁面には形骸化した横矢掛りがいくつも設けられている、④本丸隅部に天守台（天守曲輪）を張り出している、等の共通性が指摘されており（文献 127）、そこからも福島城の田中氏支城における重要性が窺い知れよう。

【史料】あり　【参考文献】1 ～ 3,5 ～ 9,13,34,**125**,**127**

第 221 図　昭和 23 年当時の福島城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

筑後Ｋ７ 松延城（まつのぶじょう）	郡名　山門郡	別称　吉井城	図幅名　柳川（東）
	種別　平城	所在　みやま市瀬高町松田・山門	

【沿革】瀬高町松田と山門の境にあたる標高９ｍの平地に位置する。『軍談』には「松延村城跡」として「方二町余」とあり、天正 12 年（1584）に樺島式部がこの城にて龍造寺方の攻撃を防ぎ、蒲池鑑廣を助けたことなどを記す。田中吉政の時代には、小早川家の元重臣、松野主馬を１万２千石の知行をもって入城させている。元和の一国一城令もしくは田中家断絶により廃城となったとみられる。

第 222 図　明治 20 年代初期頃の松延城周辺字図（『筑後国山門郡松延村絵図』と『筑後国山門郡山門村絵図』（共に部分・柳川みやま土木組合蔵）を合成して事務局作成）

【概要】城跡一帯については、中心部分が若干の微高地になっている他は、水田化してしまい、詳細な縄張りはわからなくなってしまっており、地割を元にした復元がなされている（文献 127）。字「本丸」「東二ノ丸」「西二ノ丸」「城内」「北三ノ丸」「南三ノ丸」「今屋鋪」などがあり、その一帯に城があったものと推測される。それらの中心部分の字「本丸」には不整円形を呈した水路に囲まれた高台①があり、そこが主郭であったとみられる。周りの水路は内堀を反映したものであろうか。①の周囲には曲輪②が取り巻いており、全体として方形の形状を呈する。②の西側にも水路で囲まれた曲輪③があったものと思われる。③の南側には字「南三ノ丸」が位置しているが、ここまで城域とするにはやや広い感があり、検討を要する。なお、②の北側の濠の名残をとどめると思われる水路は「しゅめんど川」といい、松野主馬の「主馬殿」が訛ったものであるという（文献 127）。ただ、『山門郡誌』（文献 14）には「主馬殿川」は城跡の南方にある小川であるとしており、現在の伝承と位置が異なっている可能性も考えられる。また、九州新幹線建設に伴う発掘調査などでは城内とみられる箇所から多くの瓦が出土

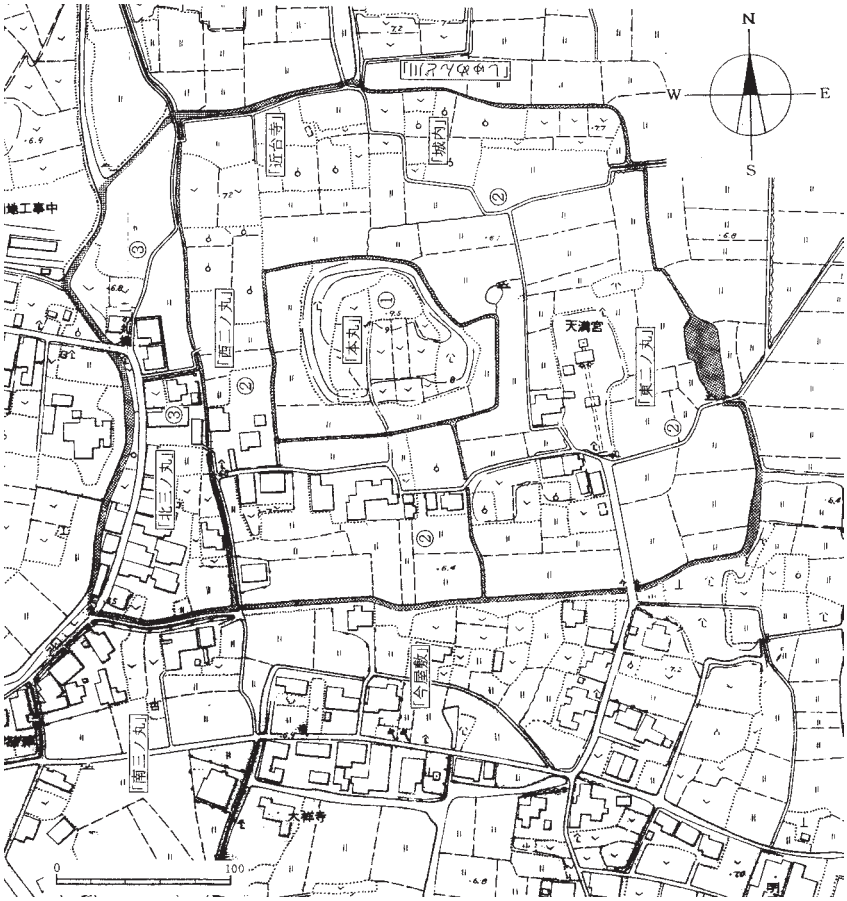
第 223 図　昭和 23 年当時の松延城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

している（文献 53・95）。コビキＢ技法（鉄線切り）による軒丸瓦の他、様々な道具瓦も出土しており、発掘担当者は江戸時代中期以降の松延天満宮に伴うものではないかとしている。しかしながら、桐文と思われる鬼板瓦なども出土しており、出土箇所も天満宮から離れた松延城内からも出土しているため、城に関わる可能性もあり、今後検討する必要があるだろう。

以上のように、当城は方形の水堀により主郭の外側を大きく取り囲んだ、一種の惣構を呈する大規模な城館であったことが推測される。

【史料】あり

【参考文献】1,2,6 ～ 8,**9**,14,22,53,94,95,**127**



第 224 図　松延城推定図（文献 127・1973 年の地形図使用）

筑後Ｋ８　鷹尾城（たかおじょう）

郡名　山門郡　　別称　高尾城　　図幅　柳川（東）
種別　平城　　所在　柳川市大和町鷹ノ尾

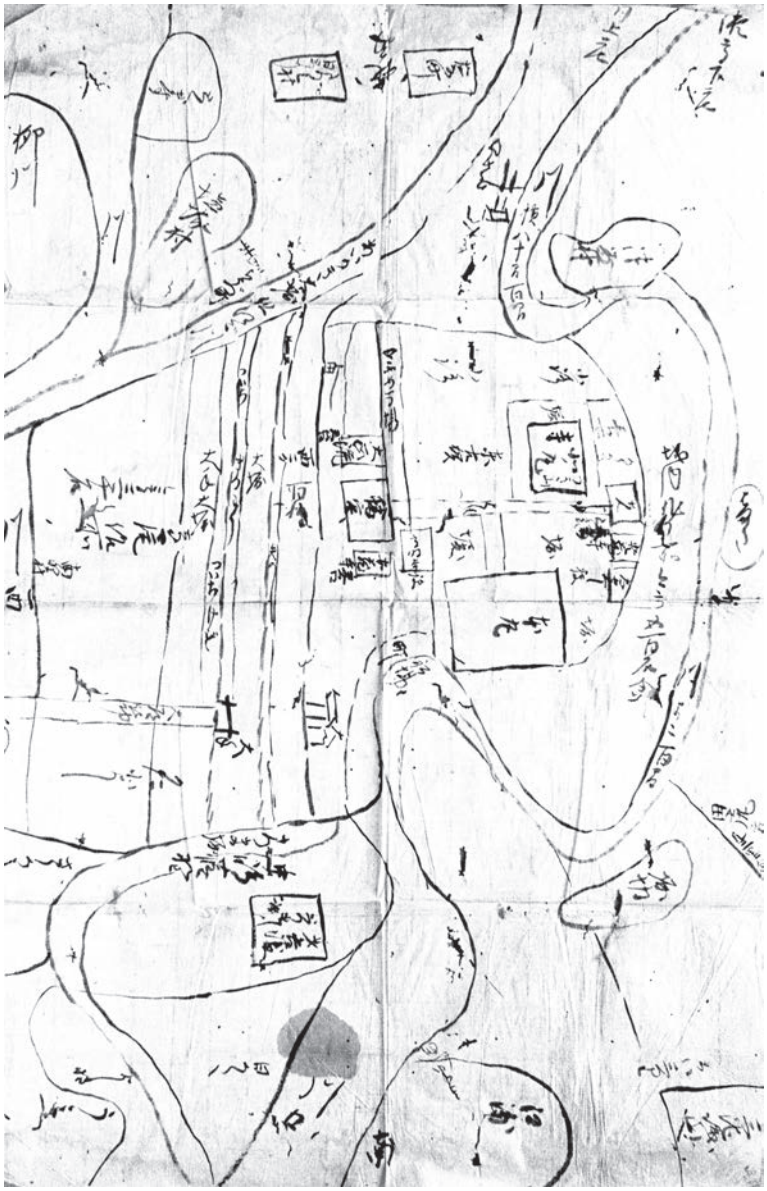
【沿革】矢部川右岸の鷹尾神社の東の平地上に位置する。『軍談』では「鷹尾村城跡」として「田尻伯耆守鑑種居城也」とし、元々本拠としていた田尻城（飛塚城）は水が乏しかったため、永禄年間に当城を築城し移ったとすることなどを記す（天文 17 年（1548）に田尻親種が築城したとする説もある）。天正 10 年（1582）には田尻氏は島津方に与し、龍造寺方の攻撃を受けて籠城するも、翌 11 年に開城となり、田尻氏は当地を去る。同 15 年には立花統虎（宗茂）柳川入部に伴い、隣接する中島城と共に重臣・立花織部介が入城している。その後、田中吉政の時代には、柳川城の支城として、宮川才兵衛が知行高六千石、組下の書上げ 16 名六千石をもって入城している。元和の一国一城令もしくは田中家廃絶に伴い、廃城となったとみられる。

第 225 図　田尻親種墓碑（柳川市指定史跡・鷹尾城推定地付近に建つ）

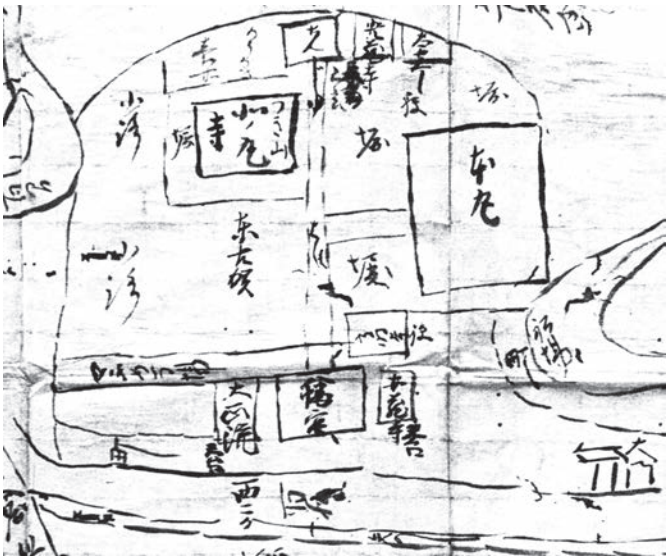
【概要】現在、鷹尾城の想定地周辺は、近代以降、大々的に改変されてしまい、現地での縄張りの検

討は非常に困難である。ただ、田尻氏ゆかりの親種寺に伝わる文書群にある『鷹尾城絵図』は非常に詳細に城の様子を描き出しており、そこからある程度の城の構造の復元が可能である。『鷹尾城絵図』で城の構造を見ると、中心部分は現在の鷹尾神社の東側、かつては川が大きく蛇行する湾曲部の内側に、「本丸」「つき山北ノ丸寺」と２つの方形区画が確認でき、堀で囲まれた２つの方形状の曲輪が並列している。そして地続きとなる西側には、八幡宮（鷹尾神社）を挟んで大堀、大手大堀などの松原、けず（枳殻）、ついち（築地）などの防御遺構、さらには大手、大門などの門遺構が描かれている。以上のような鷹尾城の構造が絵図から判明するが、文献 127 では、田中時代の遺構を反映している一方で、方形居館が並列する構造などは中世城郭の縄張りをそのまま踏襲したものである可能性を指摘し、さらに、松原、大堀、築地など、後世に残りにくい遮断遺構まで詳細に描かれているのは多少復元的に描いた結果ではないかとしている。そのような問題点はあるものの、およその構造については問題ないであろうし、また城の位置も、字「築山」など、鷹尾神社の東側にある字の場所付近であることなどもわかる。

なお、『城郭』では鷹尾神社の西側にある方形状クリークが巡る区画などを鷹尾城の本体の可能性があると指摘しているが、現状の地形からの類推であるとみられ、城地とするにはやや根拠が乏しいのではないか



第 226 図　鷹尾城絵図
（『田尻家文書』のうち。親種寺蔵・柳川古文書館写真提供）



第 227 図　『鷹尾城絵図』（第 226 図）のうち鷹尾城主要部分

と思われる。

【史料】あり　【参考文献】1,2,5 ～ 9,14,22,42,127

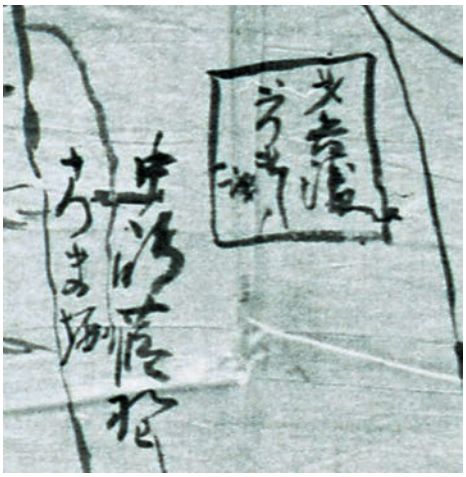
第 228 図　明治 20 年代初期頃の鷹尾城周辺字図（『筑後国山門郡鷹ノ尾村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）

第 229 図　昭和 23 年当時の鷹尾城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

筑後Ｋ９　中島城（なかしまじょう）

郡名　山門郡　　別称　なし　　図幅名　柳川（東）
種別　平城　　所在　柳川市大和町中島

【沿革】鷹尾城の南、矢部川右岸に面した平地に位置する。『立花統虎知行宛行状』（天正 15 年 8 月 14 日付　米多比鎮人家文書・柳川古文書館収蔵）には立花統虎が重臣立花織部介に、鷹尾城と併せて中嶋城の勤番をするように申し付けた（「中嶋勤番肝要」）とあり、鷹尾城に付属する柳川城の支城の一つであったことがわかる。また、正保２年（1645）の『柳川藩領域図』（柳川古文書館収蔵）にも、中島村の南側に「古城ト申傳、今ハ畠」と記されている。ただ江戸時代以来の地誌等には一切登場せず、『大和町史』資料編（文献 42）編纂の過程において存在が確認された城である。



第 230 図　『鷹尾城絵図』（第 226 図）に描かれた中島城（「才兵衛へとり遣し候城」）

【概要】中島城の位置などがわかる資料としては、『鷹尾城絵図』（親種寺蔵）の中に、「才兵衛へとり遣し候城」と方形の区画の中に記されていて、これが中島城の記載である。記載自体は田中吉政時代で、鷹尾城に入城した宮川才兵衛に遣わした城ということになっているが、おそらく立花時代の中島城を示していると思われる。この絵図では、方形区画のみが記載されているが、明治時代の字図には字「二重」の位置に矩形に屈曲する二重の水路が、かつての城の名残をとどめているのではないかとする

案もあり（文献 42）、単なる方形区画ではなく、より複雑な縄張りであった可能性も考えられるが、現状では決め手を欠き、断定するのは難しい。

なお、字「二重」の南西側にある字「薩堀」（さつまほり）は、『鷹尾城絵図』にも描かれており、地元の伝承では鷹尾城を攻めた島津軍がこの堀によって撃退されたとされるものである。

【史料】あり

【参考文献】42,127

第 231 図　明治 20 年代初期頃の中島城周辺字図（『筑後国山門郡中島村絵図』（部分）・柳川みやま土木組合蔵）

筑後Ｋ 10　柳川城（やながわじょう）

郡名　山門郡　　**別称**　柳河城・梁河城　　**図幅名**　柳川（西）
種別　平城　　**所在**　柳川市本城町

【沿革】沖端川と塩塚川に挟まれた現在の柳川市街地に位置する。その創始についてはよくわからないが、戦国時代には蒲池城の蒲池氏の持ち城となり、天正９年（1581）には龍造寺方によって落とされている。同 15 年には筑前立花城主であった立花統虎（宗茂）が三潴・山門・下妻三郡の領主として入城する。しかし、関ケ原合戦で立花家は所領を没収、代わって三河岡崎から田中吉政が 32 万 5 千石の石高で柳川に入る。田中時代に柳川城の大改修が行われ、ほぼ現在の姿となったものと考えられる。元和６年（1620）に田中家は無嗣断絶となり、旧城主の立花宗

第 232 図　描かれた柳川城天守（『柳河明証図会』のうち「其二五重殿守」・立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）

第 233 図　現在の柳川城天守台（上）・矢穴痕跡の残る石垣石材（下）

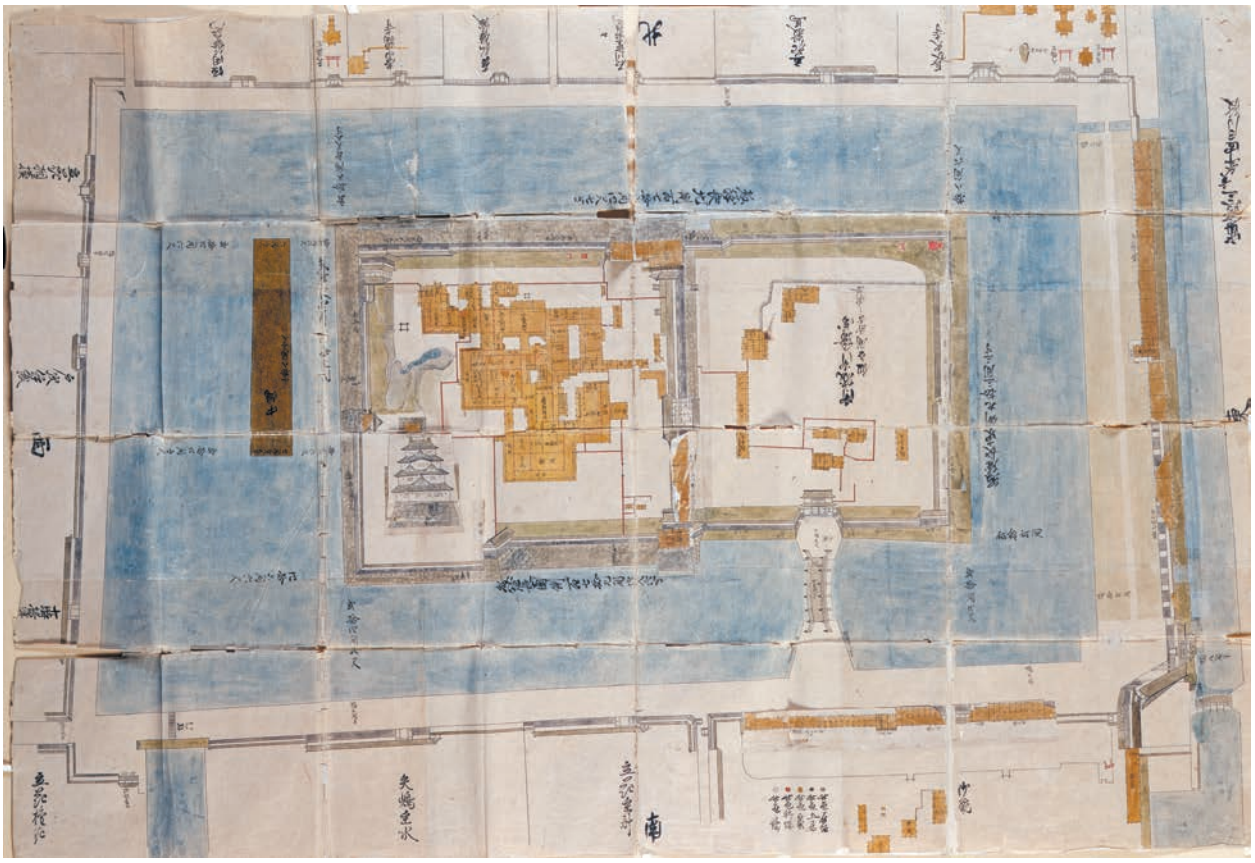
茂が山門・三池の二郡および上妻・下妻・三潴各郡の一部の併せて 10 万石の石高で再入城、以後明治維新まで立花家の居城となった。

【概要】現在、城跡は市街地化によって堀は埋め立てられ、本丸周辺の石垣も明治時代以降の干拓の際に石材なども持ち去られ、大きく変容しているものの、街路などはほぼ現在も踏襲され、また江戸時代の絵図も豊富にあって、城の構造をつぶさに知ることが可能である。

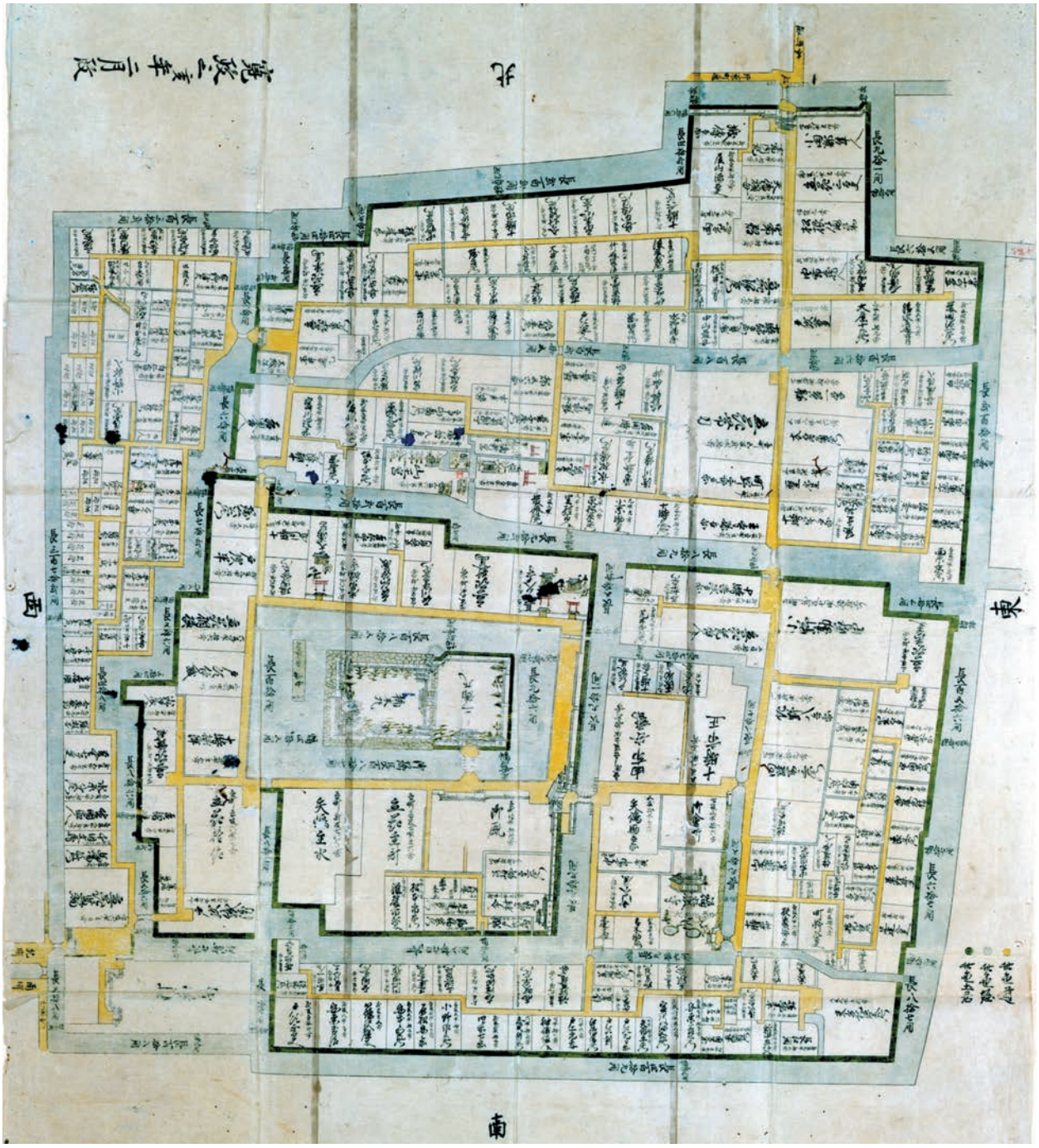
城の構造は、中心部分に本丸と二ノ丸が並列し、その周りを曲輪が重層的に囲いこむ。それらの曲輪の周りには、幅約 30m にも及ぶ水堀が造られていた。

本丸は方形の曲輪で、周囲は約 8 m の高石垣を構築、天守曲輪の他に隅櫓とそれらをつなぐ多聞櫓を塁線上に配していた。現在、本丸跡は柳城中学校の敷地となっており、五層の天守があったという高台や石垣が残されているが、高台も明治時代にかなり削られ、また石垣も

第 234 図　昭和 23 年当時の柳川城航空写真（国土地理院撮影）



第 235 図　『御城御絵図』（伝習館文庫）（福岡県立伝習館高等学校蔵・柳川古文書館保管・写真提供）



第 236 図　『御家中絵図』（旧柳河藩主立花家史料）（立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）

昭和初期の耕地整備の際に築かれたものと思われる新しいものであり、城があったころの見る影は薄い。ただ、本丸周辺の石垣石材には矢穴を残したものがいくつかあり、城の石垣石材は幾ばくかは残されているようである。

本丸以外については、虎口部分を除いて石垣の使用はない。しかしながら、本丸、二ノ丸周りの曲輪群の塁線は、櫓などは見られないものの、塁線を屈曲させて横矢を効かせることができるような折れや張り出しをいくつも創出しており、土塁で固められていた。特に本丸・二ノ丸の南側の曲輪はいわゆる「馬出」が巨大化して一般曲輪化したものと評価でき、織豊系の築城技術が十二分に生かされた造りとなっている。

なお現在、外郭部の土塁は「米多比土居」と呼ばれる一角を除いてはほぼ消滅してしまっている。

以上のように柳川城は本丸・二ノ丸を中心にそれらを広大な曲輪群で取り巻き、それらを水堀によって囲い込み、さらに北東側には町家群を置く、いわゆる「惣構」の形態を呈していた。まさに田中吉政 32 万石の居城にふさわしい縄張りであったと言えるだろう。

【史料】あり　【参考文献】1,2,5 ～ 9,14,22,44,127

筑後Ｋ 11　江浦城（えのうらじょう）	郡名　三池郡	別称　江村之城	図幅名　柳川（東）
	種別　平城	所在　みやま市高田町江浦	

【沿革】『軍談』には「江浦村城跡」として「永江氏代々ノ居城也、天正十二年、永江勘解由平方家、田尻ノ家士田尻了哲両士、鷹尾城ノ砦トシテ守之。同十五年高橋統増入部、当城ヲ以テ居城トス、永江氏統増ノ臣トナル、後故有テ柳川ニ奉仕ス、田中領地ノ時家士田中河内守之」とある。田中吉政時代の当城主・田中主水正は知行高 3,860 石、組下の書上げ 11 人分 3,300 石であった。慶長 15 年（1610）に主水正は久留米城へ転出、代わって『軍談』にあるとおり田中河内が 2 万石をもって入城している。元和の一国一城令によって廃城となったとみられる。

第 237 図　昭和 23 年当時の江浦城周辺航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

【概要】矢部川左岸とその支流の飯江川とに挟まれた自然堤防上に位置し、南側は旧河道の蛇行部により侵食されている。城の中心部は、字「本丸」にあたる箇所で、現在の水路や圃場整備前の状況を見ると、一辺東西約 160m、南北約 100m の方形区画で、周りを堀で囲まれている曲輪であったと見られる。さらにその中心部分はそこだけがかつては畑となっており（周囲は水田）、さらに区画がなされていた可能性が考えられる。字「本丸」の曲輪の外側には、曲輪と思われる平坦地があり、さらにそのまわりを方形に水路が巡ることから、水堀が巡っていたものと思われる。字「本丸」の南は字「二ノ丸」であり、現在は町家の短冊形地割が連続しているが、文献 127 では、その東側にあった古町集落から、江浦城の廃城後に町家が伸びてきたものと推測されている。また、外郭の北西隅には淀姫神社があるが、『江浦旧記』には、田中氏時代には城内にあった淀姫三所大明神社殿は没落廃退していたとあり、城内に位置していたことが分かる。

以上のように、当城は方形プランの主郭とその外側も方形プランの曲輪が取り囲み、外郭の堀は南へも伸びて古町の町家までをも包摂するいわゆる「惣構」を形成していたことが想定される。

【史料】あり　【参考文献】1,2,5 ～ 9,15,111,**127**

筑後K 12　三池陣屋（みいけじんや）

郡名 三池郡　別称 今山陣屋・三池藩主居館・三池町館　図幅名 大牟田（東）
種別 陣屋　所在 大牟田市新町

【沿革】三池陣屋は『軍談』には「三池町舘跡」として、天正 15 年（1587）、立花統虎（宗茂）の弟・高橋統増が、筑後国三池郡を賜った際に、居所とした場所である。その後、関ヶ原合戦後の改易を経て、元和 7 年（1621）に立花宗茂が柳川藩 10 万石に再封されたのと併せ、統増（立花種次）は、三池郡 15 ヶ村・ 1 万石を再び領するところとなり、三池藩主として再び三池に返り咲いた。その後、三池藩は文化 3 年（1806）に幕府の内紛に巻き込まれ、陸奥国下手渡に移封、三池藩領は幕府領（のち柳川藩預かり）となり、『軍談』には館舎は破却されたとある。そしてその約半世紀後の嘉永 4 年（1851）に三池藩領の一部が三池立花家に返還、旧領復帰に伴い、陣屋が再興された。明治に入ると三池藩主・立花種恭は三池藩知事に任命されたが、明治 4 年（1871）の廃藩置県で三池県が設置、同年 11 月に三潴県へと合併され、事実上ここに陣屋の終焉を迎えることとなる。

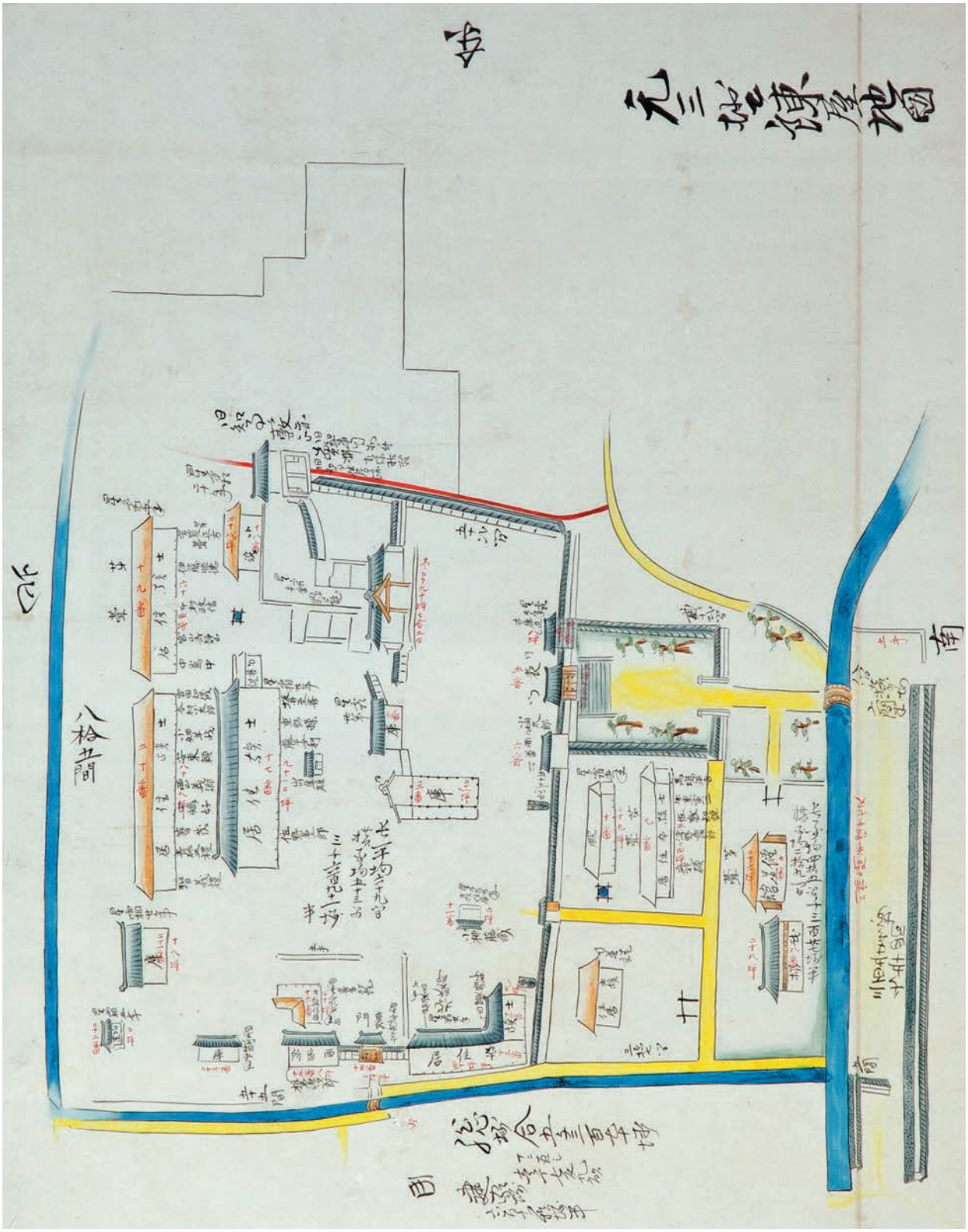
第 238 図　三池陣屋石橋（上）・石段（中）・建物（下・現三池郷土館）

【概要】三池陣屋は三池小学校周辺にあったとされ、周辺には字「御門」や「陣屋」などの地名が残されている。実際に小学校内には陣屋の建物の一部が移築されているものの、現地において陣屋の全容を知ることは難しい。知る手掛かりとしては、明治 6 年に描かれた『元三池御陣屋地図』（大牟田市立三池カルタ・歴史資料館蔵）がある。地図には、総坪数 5,370 坪、建坪 670 坪と記しており、堂面川に北面し、川から分かれた支流が西側から北側を取り囲む様子が描かれている。敷地内部は、表門があり、その内部には県庁（陣屋の時の表御殿）が描かれ、周囲には、庫や士卒の住居が記されており、西側には裏門、東側には塀の外側に「旧知事屋敷跡」と記されている。この絵図の段階ではすでに知事は東京へ移っており、屋敷は既に売却された後であるため、藩主屋敷（奥御殿）の様子を知ることができない。

なお現在、表門の石段が残存するほか、県庁（表御殿）建物の一部は、『三池郡誌』（文献 15）によると、三池郡役所となった後、三池尋常小学校の玄関と裁縫室に転用され、さらには昭和 26 年（1951）に三池小学校の郷土資料館に再転用、同 47 年まで活用されたが、同 48 年に玄関屋根部分のみ移築され他は取り壊された。表門は大牟田市田町の寿光寺に移築され、山門として使用されて

いる。以上のように、三池陣屋はおよその建物の位置はわかるものの、御殿の内部の間取りや構造などは現状ではわからない状況である。

【史料】あり　【参考文献】1,4,5,7,8,15,19,22



第 239 図　元三池陣屋地図（大牟田市立三池カルタ・歴史民俗資料館蔵）

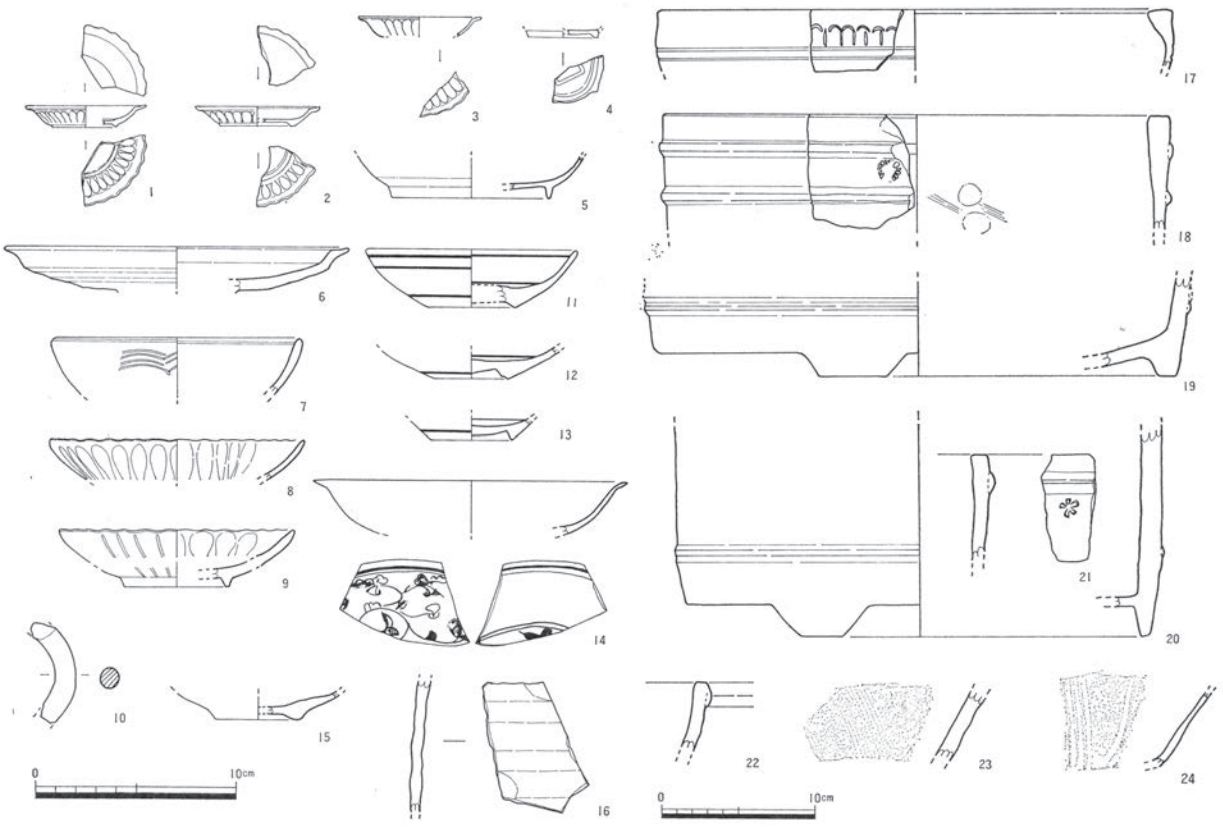
3　城館等伝承地

筑後D 11　峯切山陣（みねきりやまじん）	郡名　上妻郡	図幅名　黒木（西）
	種別　陣か	所在　八女市黒木町木屋

【沿革】黒木の猫尾城から矢部川を挟んだ南の丘陵上、標高 297m に位置する。『稿本八女郡史』（文献 13）には、「峯切山陣址」として、「道雪黒木城攻めの時、陣取りし所なる由云ひ傳ふ」と『上妻郡名勝図絵』を引いて記す。

【概要】現在、峯切山がある一帯は、果樹園となっており、また頂上部は通信塔が建てられていて、現状がかなり損なわれており、明確な城館遺構を見ることはできない。ただ、昭和 28 ～ 29 年（1953 ～ 54）の開墾時に黒木高校の歴史部員により峯切山から遺物が採集されており、『黒木町史』（文献 36）に報告されている。それによると、輸入陶磁器（青磁・白磁・明染付碗・朝鮮産青磁）、瓦質土器が報告されている。16 世紀代に属する遺物であることから、当時この場所に猫尾城に関連した出城のような施設、あるいは立花道雪が陣取った痕跡とも考えられるが、詳細は今後の調査に委ねざるを得ない。

【参考文献】9,13,36



第 240 図　峯切山採集遺物（黒木高校蔵）実測図（文献 36）

4　城館関連遺跡

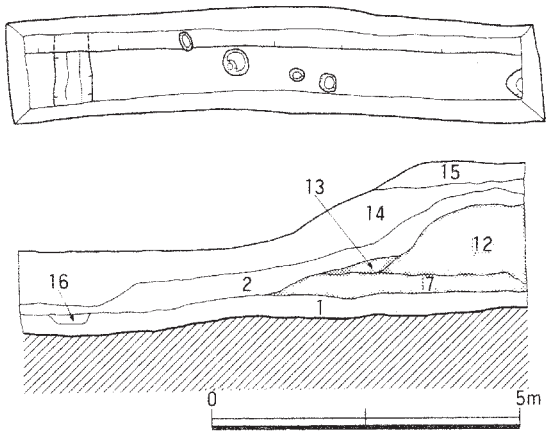
筑後Ｒ１　干潟中屋敷遺跡（ひかたなかやしきいせき）

郡名　御原郡　　図幅名　二日市（東）
種別　居館遺跡か　　所在　小郡市干潟

【位置】宝満川左岸の標高約 20 mの干潟の集落内に位置する。『城郭』にて「干潟館」とするのはこの遺跡を指しているものと思われる。

【概要】集落内に土塁状遺構が現存しており、平成８年（1996）に確認調査が行われ、土塁上面から陶磁器、土師器小皿等が出土し、14 世紀前半以降に位置づけられる。部分的な調査であり、また土塁の残存度合いもさほど良くもないため、全体的な平面プランは不明であるが、中世の居館遺跡の一部である可能性が指摘されている。周囲には上屋敷、下屋敷、町屋敷、堀ノ内などの字も残されている。

【参考文献】9,43



第 241 図　干潟中屋敷遺跡土塁実測図（文献 43）

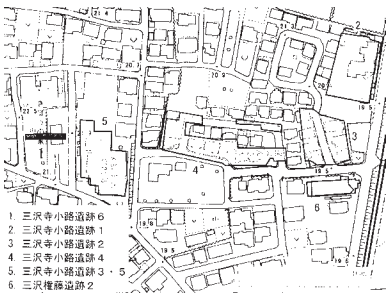
筑後Ｒ２　三沢寺小寺遺跡（みつさわてらしゅうじいせき）

郡名　御原郡　　図幅名　鳥栖（西）
種別　居館遺跡　　所在　小郡市三沢

【位置】宝満川支流の高原川左岸の標高約 20m の台地上に位置する。

【概要】遺跡地は字が「寺小路」といい「善風寺」があったという伝承が残る。過去に６次の調査が行われ、中世の居館あるいは寺院と見られる遺構が検出されている。特に３地点では、溝で囲まれた方形区画の南西隅部（3SD-1）が見つかっており、周辺でも近世以降の区画溝が多く検出されている。他の調査地点でも中世期の区画溝は見つかっているものの、囲い込むようなものになるかまではわかっていない。いずれにせよこれらの中世遺構は「善風寺」との関連が想定されるものであろう。

【参考文献】
55 ～ 58,60



第 242 図　三沢寺小路遺跡調査地位置図（文献 60）

第 243 図　三沢寺小路遺跡３・５地点平面図（文献 57）

筑後Ｒ３　大保横枕遺跡（おおほよこまくらいせき）

郡名　御原郡　　図幅名　鳥栖（東）
種別　居館遺跡　　所在　小郡市大保

【位置】宝満川右岸に面した標高 15m の平地上に位置する。

【概要】大規模店舗建設に伴い、約４万㎡の発掘調査がなされ、弥生時代の二重環濠が検出されたが、それと重複するように溝で囲まれた南北約 60m、東西約 100m の方形区画が確認され、12 世紀後半から 13 世紀前半を中心とする時期であることが判明している。

第 244 図　大保横枕遺跡平面図（文献 59・黒塗りは中世期の遺構）

区画内部からは小溝による小区画や、土坑などが見つかっており、中世の拠点的な集落、あるいは屋敷地である可能性が考えられている。

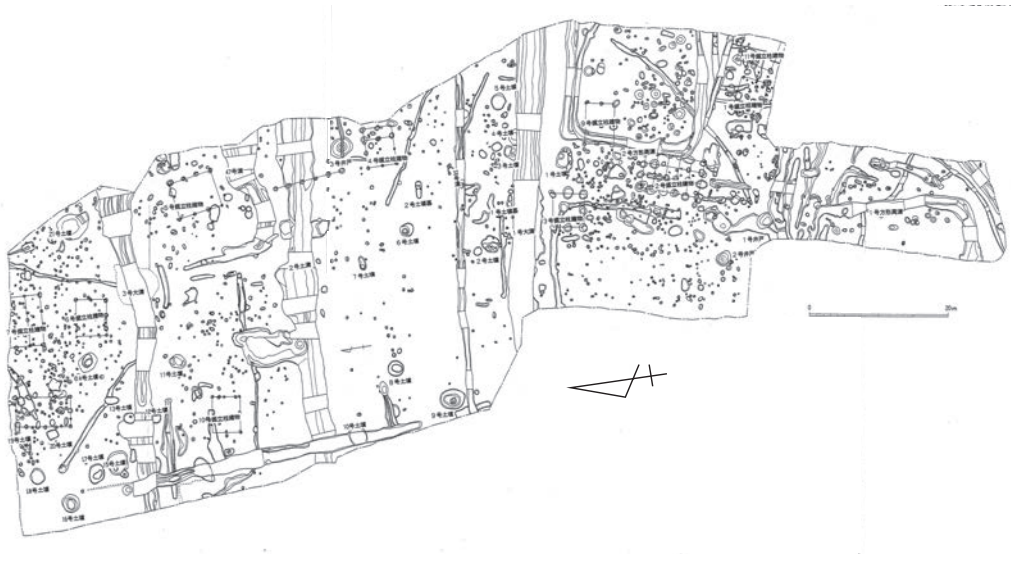
【参考文献】59

筑後Ｒ４　稲吉元矢次遺跡（いなよしもとやつぎいせき）

郡名　御原郡　　図幅名　鳥栖（東）
種別　居館遺跡　　所在　小郡市稲吉

【位置】宝満川左岸に面した標高約 11m の平地に位置する。

【概要】圃場整備に伴い東西約 120m、南北約 60m の範囲の調査が行われ、９～ 16 世紀の遺構・遺物が検出された。特に鎌倉期の掘立柱建物は 10 棟を超え、溝の多くもこの時期に属するものである。東西方向に延びる３本の大溝の性格は断定できないが、一辺約 20m の方形周溝が３区画確認されており、居館周りの区画溝・堀であるものとみられる。全容は杳として知れないが、この一帯に



第 245 図　稲吉元矢次遺跡遺構平面図（文献 54）

は鎌倉期に屋敷地群が展開していた可能性が考えられる。

【参考文献】54

筑後Ｒ５	西森田遺跡（にしもりたいせき）	郡名　御原郡	図幅名　鳥栖（東）
		種別　居館遺跡	所在　三井郡大刀洗町本郷

【位置】本郷町の北、標高約 17m の平地に位置する。

【概要】東西約 60m、南北約 30m の範囲の調査がなされ、東西約 30m、南北 20m 以上の溝に囲まれた方形区画が確認され、その内部からは 5 棟以上の掘立柱建物が検出されている。出土遺物から 12 世紀後半から 13 世紀を中心とする時期であるが、溝の最終埋没は 14 世紀以降に下るため、存続期間は南北朝期まで及ぶ可能性もあろう。また、方形区画外にも掘立柱建物 7 棟や井戸などが検出されている。当遺跡の南の本郷町には中世城館の三原城が位置することなどからも考え併せて、中世の武家居館ではないかと考えられている。

【参考文献】61

第 246 図　西森田遺跡遺構平面図（文献 61）

筑後Ｒ６	下見遺跡（したみいせき）	郡名　御井郡	図幅名　久留米（西）
		種別　居館遺跡	所在　久留米市東合川町５丁目

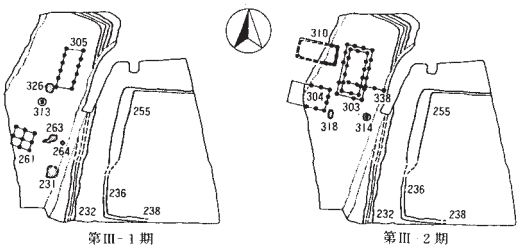
【位置】筑後川南岸、現在の久留米インターチェンジの北側に位置する。

【概要】住宅建設等によりこれまで９次にわたる調査が行われ、第５～９次調査において、関連する遺構が検出されている。遺跡は大きくⅢ期に分かれ、Ⅰ期は古墳時代終末から奈良時代の遺構群で、

竪穴住居群と１棟の掘立柱建物からなる。Ⅱ期は奈良時代終末から平安時代前期で、竪穴住居から掘立柱建物にとって代わり、井戸、溝、土坑が検出され、墨書土器、緑釉陶器なども出土する。Ⅲ期が鎌倉時代の遺構群で、方形に巡る溝に囲まれた２面の区画が確認され、西側の区画からは掘立柱建物、井戸が検出されている。特に四面廂の掘立柱建物を中心に西側に向かってコの字形に掘立柱建物群が並ぶ様子が検出され、国府や官衙を彷彿とさせる建物配置であるが、時代から見て中世在地豪族の居館と推測される。

【参考文献】37,68

第 247 図　下見遺跡第５～９次調査遺構配置図（文献 37）

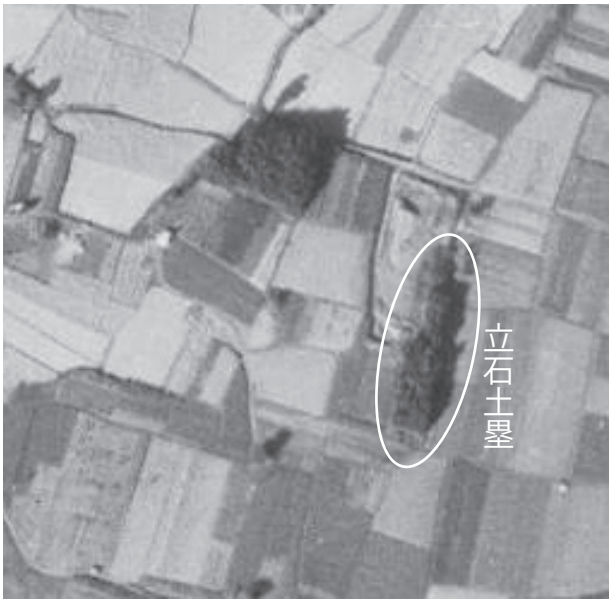


第 248 図　下見遺跡Ⅲ期の遺構配置模式図（文献 37）

筑後Ｒ７　筑後国府跡（ちくごこくふあと）	郡名　御井郡	図幅名　久留米（西）
	種別　居館遺跡	所在　久留米市合川町

【位置】筑後川支流、高良川の右岸、標高約 15m、筑後国府の庁域内に位置する。

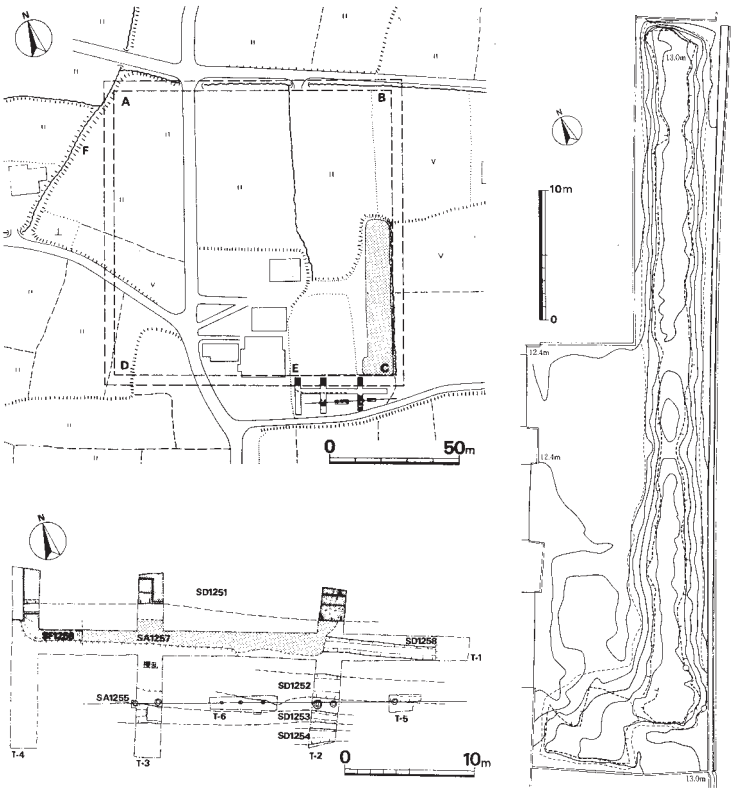
【概要】筑後国府は、国府成立以前の７世紀後半代の前身官衙のほか、平安時代末期まで久留米市秋川地区近辺においてⅠ～Ⅳ期の変遷を繰り返し、併せて国司館なども検出されている。ここで報告するのは、字立石の通称「長者屋敷」と呼ばれる一角で、現在もなお土塁状遺構（通称「立石土塁」）が南北方向に約 60m にも渡って残存している箇所である。幾度か調査が行われ、30 次調査においては土塁の南側のトレンチ調査をしたところ、幅約４ｍの東西方向の溝（SD1251）が検出され、方形区画の南東隅部に当たることが推測された。その結果、土塁と堀に囲まれた一辺約 100m の方形区画が想定されている。時期については、溝 SD1251 が９世紀代に構築された築地を破壊して掘られ、溝内からは龍泉窯系青磁碗、土鍋などが出土し、最終埋没は鎌倉時代まで下る可能性を示している。ただ、その後の調査においては、方形区画の堀



第 249 図　昭和 23 年当時の「立石土塁」航空写真（国土地理院撮影写真を一部改変して事務局作成）

が想定される箇所で遺構が見当たらないなどの事実も出てきており、実際にいわゆる方一町の方形区画になるか否かについては今後検討を要する。だが、現状においてはやはり中世期まで下る居館とみておいた方が良いと考えられる。

【参考文献】67,78



第 250 図　筑後国府跡「方形居館」遺構配置図（左・文献 67）・「立石土塁」平面図（右・文献 81）

筑後Ｒ８　東光寺遺跡（とうこうじいせき）	郡名　御井郡	図幅名　久留米（西）
	種別　居館遺跡	所在　久留米市山川町

【位置】高良山の支峰・吉見岳城の北西尾根を下った標高約 37m の尾根上に位置し、字「東光寺」の西側斜面部が高速道路建設に伴い発掘調査が行われた。

【概要】テラス状に造成された平坦面上からは、数多くの掘立柱建物や柵を構成するであろう柱穴群の他、Ⅳ区の東側には、堀状の遺構が確認されている。出土遺物の中心時期は 12 ～ 13 世紀で、最盛期とみられる。この近辺には、東光寺城の記載も見られるが、東光寺城は天正年間の山城として認識されているものであり、この調査区の成果とは合致しない。しかし当遺跡の谷を挟んだ北側の茶臼山遺跡や、近辺の大宮司邸跡、大祝家跡、宗崎遺跡などでも同時期の遺跡が確認されており、中世高良山を考える上で重要な遺跡である。

【参考文献】66

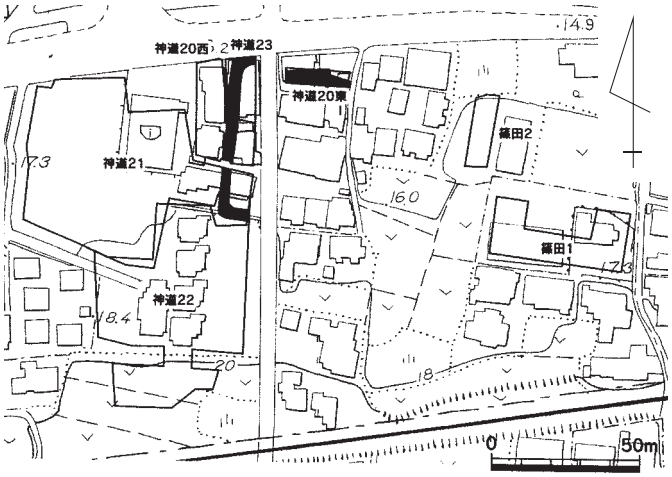
第 251 図　東光寺遺跡Ⅳ区遺構平面図（文献 66）

筑後Ｒ９　神道遺跡（じんどういせき）

郡名　御井郡　　図幅名　久留米（西）
種別　居館遺跡　　所在　久留米市御井旗崎1丁目

【位置】筑後川南岸、標高約 14m の平地に位置する。

【概要】道路建設に伴い、複数次に渡る発掘調査が行われ、20 ～ 23 次調査区において、幅約３～５m、深さ１m を超える堀状の溝に囲まれた方形区画が検出された。その区画は、南北約 50m、東西 30m 以上で、内部からは掘立柱建物を構成する柱穴群が検出されている。出土遺物は土師器、陶磁器など 12 ～ 13 世紀が大半であり、当該時期の居館跡と推測されている。



第 252 図　神道遺跡主要遺構配置図（文献 83）

なお、当遺跡の南側の二本木遺跡では、当遺跡と同一時期の遺構の他、16 世紀代の堀状溝のコーナー部分なども検出されており、中世居館あるいは城館の可能性を持つものが見受けられるが、明確なデータにかけるため、本書では割愛している。

【参考文献】68,79,80,82,83,86

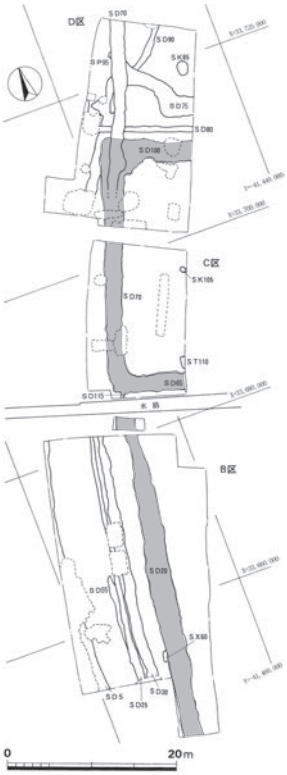
筑後Ｒ 10　日出原南遺跡（ひいでばるみなみいせき）

郡名　御井郡　　図幅名　久留米（西）
種別　居館遺跡　　所在　久留米市御井町

【位置】前記の神道遺跡の南方約 500m の標高約 33m 地点に位置する。

【概要】道路建設に伴い、複数次にわたる調査が行われており、４次調査 B・C・D 区において関連遺構が検出されている。溝 SD20 は 16 世紀代の出土遺物を主体とし、南北約 40m に渡る直線溝であり、その北側には、SD65・70・100 と三方を溝で囲い込む方形区画が確認できる。方形区画は南北約 25m で内部からはピット群が検出されている。この方形区画の溝の最終埋没は 17 世紀以降であるが、若干中世後半の遺物が混じることや、SD20 もまた最終埋没は近世に入るものの、出土遺物の主体は 16 世紀代になる事から、溝の掘削時期は 16 世紀代になるものと想定されている。近世期においては、薩摩街道の裏筋に当たることから、宿場町経営に関わる居住区とされているが、元々は中世の居館遺跡から継続しているものであろう。また、別調査区では、12 世紀代にさかのぼる区画溝なども検出されており、その時期の居館もある可能性も考えられる。

【参考文献】84



第 253 図　日出原南遺跡４次 B ～ D 区遺構配置図（文献 84）

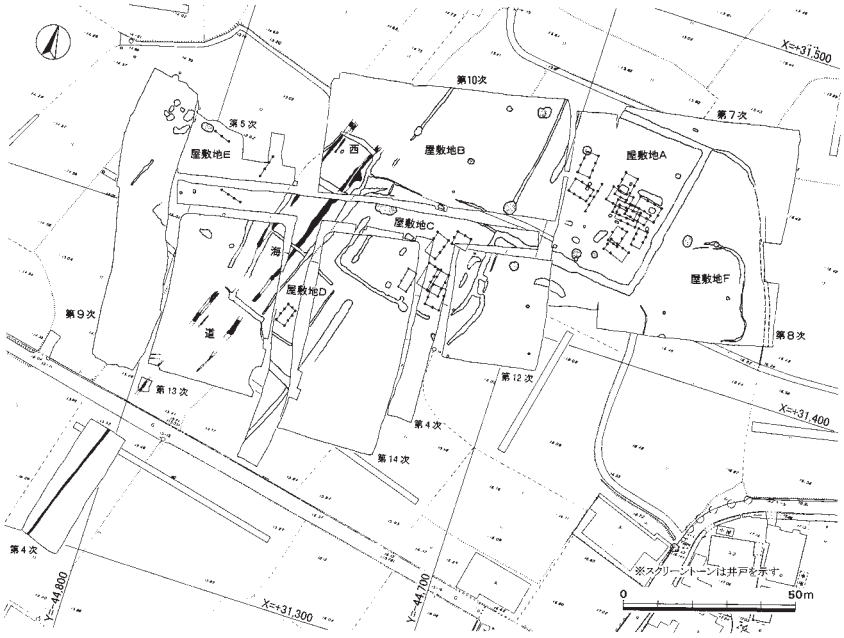
筑後Ｒ 11　古賀前遺跡（こがまえいせき）

郡名　御井郡　　図幅名　久留米（西）
種別　居館遺跡　　所在　久留米市本山1丁目

【位置】筑後川支流の上津荒木川左岸の標高約 16m に位置する。

【概要】区画整理事業に伴い、複数次にわたる調査が行われており、北東から南西方向に走る古代西海道の道路遺構が確認されており、その両側に道路と軸線を並行させるような方形区画をいくつも展開させるようなＡ～Ｆの５区画の居館群が検出されている。出土遺物は報告書によれば、13～15 世紀代であり、この時期に居館群が築造されていたと推測される。中でもＡは一辺約 50m 近くもある大型のもので、内部からは掘立柱建物群や井戸が検出されている。この場所については、字が「松本屋敷」であり、文献 77 には、出典はないとしながらも地元の伝承で「松本城」があったということが記されている。字の「松本屋敷」を「松本城」と誤伝した可能性が十分考えられるものの、当該遺跡との関連がある可能性は捨てきれない。

【参考文献】69,71,73,76,77



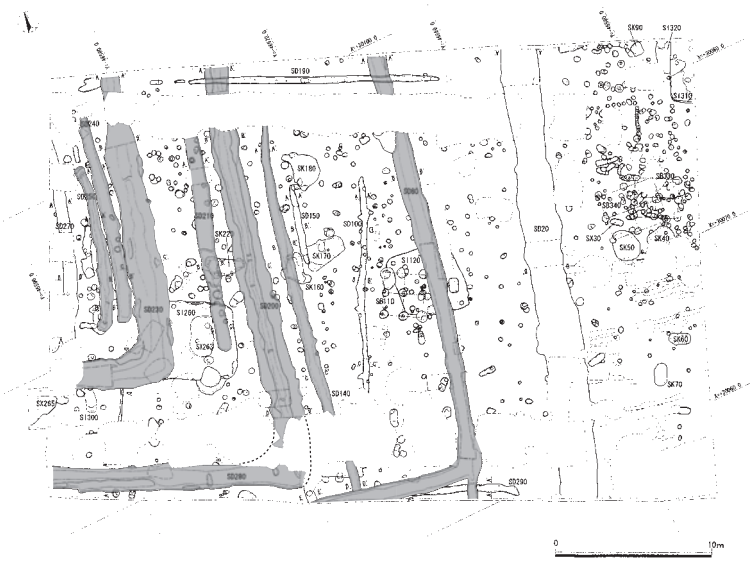
第 254 図　古賀前遺跡主要遺構配置図（文献 77）

筑後Ｒ 12　二子塚遺跡（ふたごづかいせき）

郡名　三潴郡　　図幅名　久留米（西）
種別　居館遺跡　　所在　久留米市荒木町荒木

【位置】筑後川支流の広川右岸、標高約 11m に位置する。

【概要】荒木小学校屋内運動場建て替えに伴い調査が行われた５次調査において、方形区画を形成すると思われる溝遺構多数を検出している。中でも大型のものは幅約３m、深さは１m を超える。大型溝の年代は 12～13 世紀を中心とする時期であるが、小型の溝には 15 世紀代まで下るものもあり、その頃まで存続していたものと思われる。区画内部には多数の柱穴が検出さ



第 255 図　二子塚遺跡５次調査遺構配置図（文献 85・アミカケは中世の溝）

れている。古墳時代の遺構と重複していることもあり、その構造は知れないが、掘立柱建物などがあったものと考えられ、中世の居館跡であると想定される。近隣には国人領主・近藤氏の居館なども想定されており、近藤氏との関連がある可能性も考えられよう。

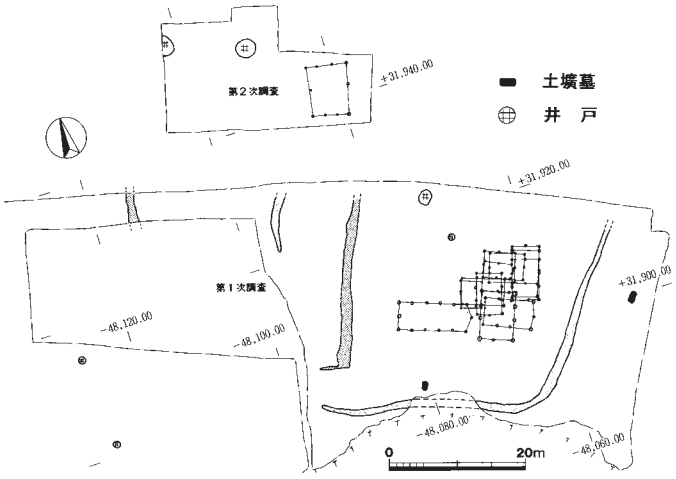
【参考文献】85

筑後Ｒ 13　城崎遺跡（じょうざきいせき）	郡名　三潴郡	図幅名　久留米西部（東）
	種別　居館遺跡	所在　久留米市安武町安武本

【位置】筑後川西岸、標高７ｍの平地に位置する。

【概要】圃場整備に伴う発掘調査により２回の調査が行われ、幅 1.5m、幅 1m 前後の溝に囲まれた方形区画が重複するように２区画（A・B）検出され、その内部、特に東側の屋敷地 A からは 10 棟を超える掘立柱建物群、井戸、土坑墓が検出されている。出土遺物から 14 ～ 15 世紀の年代が与えられている。近世期以降についても、北側の２次調査区において区画溝や井戸などが検出されており、近世まで屋敷群が継続して営まれていたことが想定される。

【参考文献】70,75



第 256 図　城崎遺跡中世主要遺構配置図（文献 75）

筑後Ｒ 14　道蔵遺跡（どうぞういせき）	郡名　三潴郡	図幅名　久留米西部（東）
	種別　居館遺跡	所在　久留米市大善寺町中津

【位置】広川下流右岸、標高約６ｍに位置する。

【概要】当遺跡は道路建設等に伴い、複数次にわたり調査が行われ、古代には三潴郡の郡衙の比定地ともなっている。その調査の中で、第１・６次調査において幅約４ｍ、深さ約２ｍの堀状の溝が検出されており、北東隅部が確認され、短くとも南北 80m 続く方形区画と想定されている。区画内部については未調査のため、施設等は不明であるが、居館を囲郭する堀とみてよいと思われる。堀の内部からは、12 ～ 13 世紀の出土遺物が大量に出土しており、その時期に営まれたことが想定される。なお、方形区画の南西側約 300m 地点の荊津天満宮があり『軍談』にみる荊津館の推定地となっており、関連性が窺われる。

【参考文献】74

第 257 図　道蔵遺跡主要遺構配置図（文献 74）

筑後Ｒ 15　北ノ屋敷遺跡（きたやしきいせき）

郡名　三潴郡　　図幅名　羽犬塚（西）
種別　居館遺跡　　所在　久留米市城島町江上本

【位置】城島町江上本の標高約３m の平地に位置する。

【概要】宅地建設に伴う発掘調査が行われており、幅約４m、深さ約２m の堀状の溝が方形に巡る様子が確認された。溝の南側はクリークが東西に走っていて、その前後関係は不明であるが、残る三方は、東西約 30m、南北約 20m の方形区画を造り出している。その区画内部は、東西に走る細い溝（SD1）の北側に遺構が密集し、複数回建て替えられた掘立柱建物が 11 棟検出され、居館であると想定される。時期については、堀状溝から出土した遺物から、16 世紀後半～ 17 世紀前半頃と推定され、堀状溝の最終埋没は、17 世紀前半～中頃と想定できる。また区画の南側にも掘立柱建物や便所遺構（近世）なども確認されている。当遺跡の北東約 500m 地点には西江上城（筑後 40）があり、関連性が窺われる。

【参考文献】88

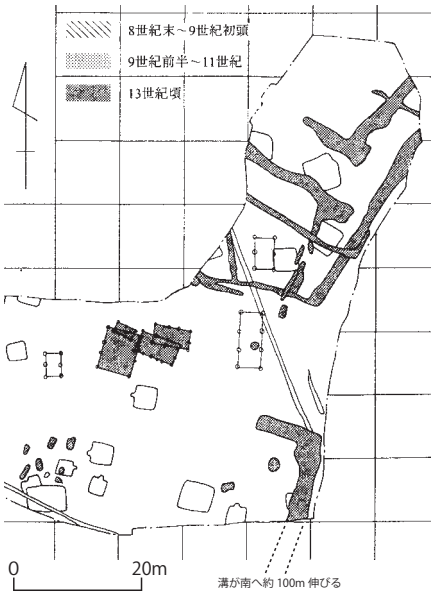
第 258 図　北ノ屋敷遺跡遺構配置図（文献 88）

筑後Ｒ 16　仁右衛門畑遺跡（にえもんばたけいせき）

郡名　生葉郡　　図幅名　吉井（西）
種別　居館遺跡　　所在　うきは市吉井町新治

【位置】筑後川支流の巨瀬川北岸の標高約 30m の平地に位置する。

【概要】道路建設に伴い、東西約 200m、南北約 30m の範囲の発掘調査が行われている。調査区の最も東側において、12 ～ 13 世紀の遺物が出土する区画溝が、掘立柱建物、井戸、土坑、墓など共に多数検出されており、方形区画を形成していることを確認している。特に調査区南東隅で確認された溝（17 号溝）は幅３m、深さ 1.3m で逆台形状の断面を呈している。さらにこの溝は南側に伸びることが確認され（平成９年度吉井町教育委員会調査）、検出された屈曲部まで総延長 100m に至ることがわかっており、北側から西側の区画が不明ではあるものの、方一町の方形居館が想定されている。また区画内部で検出された土坑墓からは完形の龍泉窯系青磁碗などが出土しており、居館に居住して



第 259 図　仁右衛門畑遺跡古代以降の主要遺構配置図（文献 52）

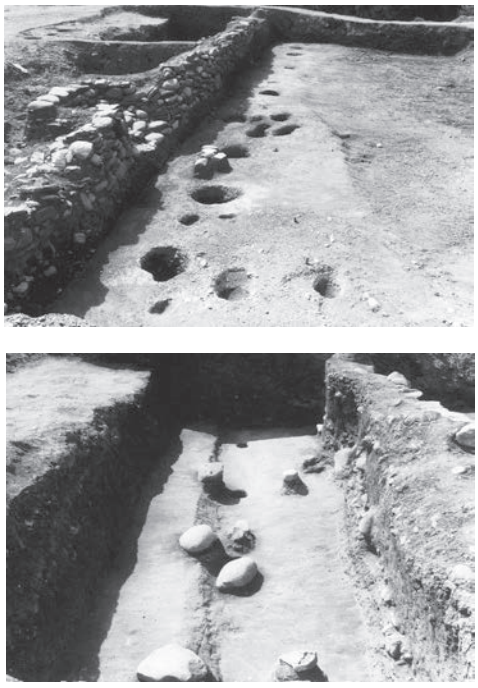
いた人物に関するものと考えられる。

【参考文献】52

筑後Ｒ 17　東館遺跡（ひがしたちいせき）	郡名　上妻郡	図幅名　八女（東）
	種別　居館遺跡	所在　八女市山内

【位置】矢部川支流の星野川左岸の標高約 70m の丘陵上に位置する。

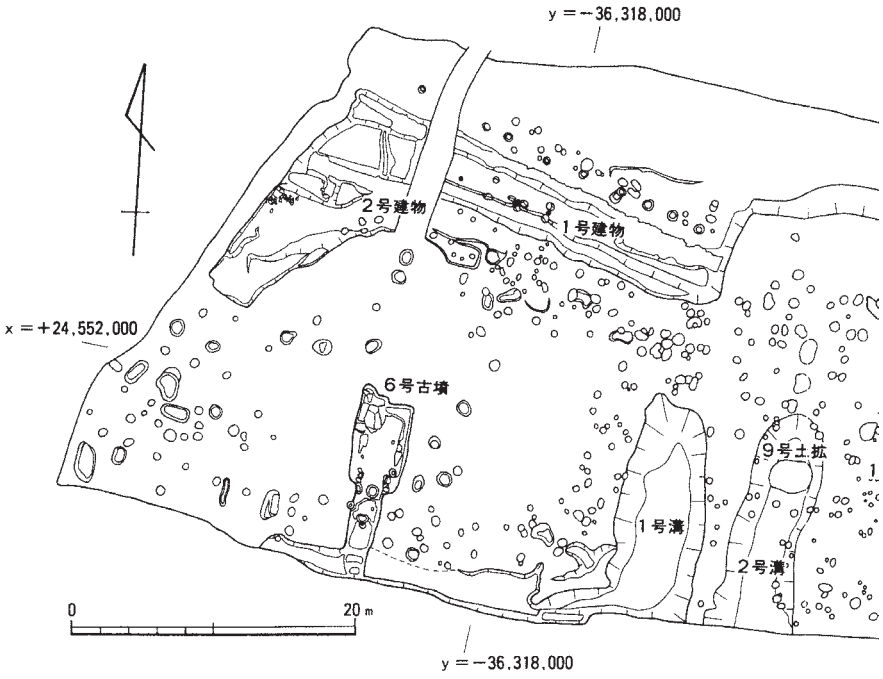
【概要】工場建設に伴い、字「東館」のＬ字形に張り出した尾根上の発掘調査が行われ、調査区の南東側から、東西約 18.5m 以上の北面する石垣が検出された。石垣の中央には６段の石段が築かれており、居館部へは北側から入るようになっており、遺跡の西側の字「西館」の谷を登り、北側へ回り込んで入り込む構造であったと想定される。石垣（図中１号建物）は高さ約１m でその前面に石垣列に平行するように柱穴列が確認されていて、柵などが想定できようか。また石垣は部分的に２段になっているようである（図中２号建物）。また、石垣の内部、下層には礎石列と思われる石列が確認でき、礎石建物があった面を埋め立て、石垣を築いて遺構面を拡張しているようである。石垣の南側は東側に２本の堀（１・２号溝）、西側にも部分的に溝が巡っているようであって、一辺約 30m の方形区画が想定できそうである。この区画の東側でも多くの柱穴群が確認されており、屋敷群が展開していた可能性が考えられる。



第 260 図　東館遺跡石垣・石段・柱穴列（上）・石垣内部から検出された礎石列（下）（八女市提供）

年代については、出土遺物の報告があまりなされておらず難しいが、調査区内の土坑からは明代あるいはベトナム産とも考えられる染付が出土しており、およそ 15 ～ 16 世紀といったところであろうか。

当遺跡の北背後の丘陵上には鷹尾城（筑後 165）、さらにその奥には犬尾城（筑後 164）があって、『軍談』の犬尾城跡の項にも、「（川崎氏の）常居ノ舘ハ麓ニアリ」と記されており、

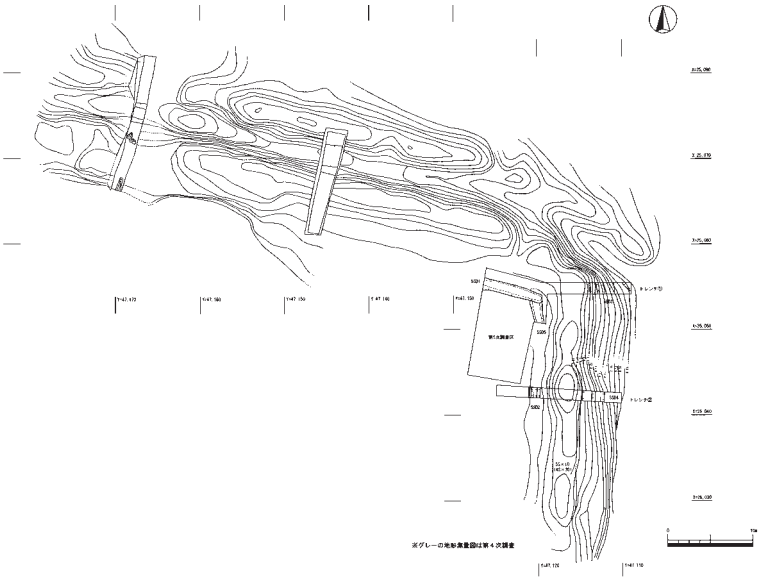


第 261 図　東館遺跡居館部遺構配置図（文献 89）

まさにこの遺跡の居館を指している可能性が高いと言えよう。館とは言いつつも、南側は斜面になっており、下の集落からは 20m 近くも高低差があり、防御性を意識した立地であると言えよう。
【参考文献】1,89,129

筑後Ｒ 18	熊野屋敷遺跡（くまのやしきいせき）	郡名　上妻郡	図幅名　羽犬塚（東）
		種別　土塁遺構	所在　筑後市熊野

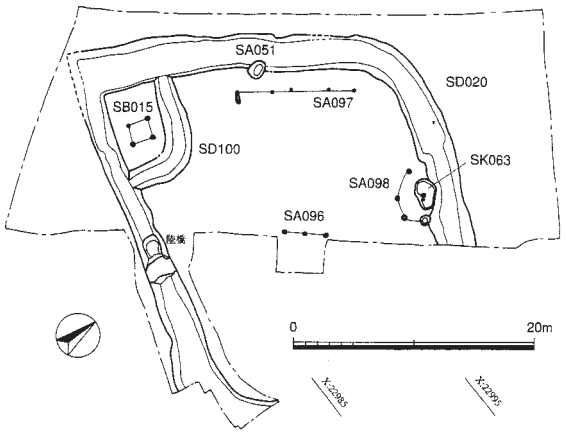
【位置】山ノ井川右岸、標高約 10m の微高地、坂東寺境内に位置する。
【概要】12 ～ 13 世紀頃に創建されたと考えられる坂東寺には、貞永元年（1232）銘の「坂東寺石造五重塔」（県指定文化財）があり、紀年銘を持つ石塔としては筑後最古のものである。寺の北側から東側にかけて、逆 L 字状の土塁遺構が残されており、東西約 60m、南北約 30m の規模を有し、北側の東西方向に走る土塁は二重になっている。トレンチ調査が行われており、土塁に沿って内側と外側に小溝が巡ることがわかっており、12 ～ 13 世紀頃に寺域と墓地が整備された段階では周りに溝が巡っていただけのものが、16 世紀頃に溝は埋没するが、土塁が整備され、それが近世以降も残っていたことが判明している。継続的に寺院があった場所に土塁が整備されたものであり、これが防御的な意味合いをなすものか否かは今後検討を要しようが、『軍談』や『上井覚兼日記』などには、天正 11 年（1583）に大友方（戸次・高橋勢）が坂東寺を焼き討ちをしたことや、翌 12 年に大友方が坂東寺に着陣したことなどが記載されており、坂東寺が城塞化している可能性は十分考えられる。
【参考文献】93



第 262 図　熊野屋敷遺跡土塁状遺構実測図（文献 93）

筑後Ｒ 19	長崎坊田遺跡（ながさきぼうたいせき）	郡名　上妻郡	図幅名　羽犬塚（東）
		種別　居館遺跡	所在　筑後市長崎

【位置】花宗川と山ノ井川に挟まれた標高約 7 m の平地上に位置する。
【概要】宅地開発に伴う発掘調査が行われ、調査区 B からは幅 1.7 ～ 3.8m、深さ 0.4 ～ 0.7m の溝に囲まれた東西約 32m、南北約 25m の方形区画が検出されている。区画の内部には柵や土坑に加え、南西隅部には、四方を溝で囲まれた 1 間× 1 間の掘立柱建物が検出されており、櫓建物の可能性も考えられる。方形区画は半分ほどしか調査がなさ



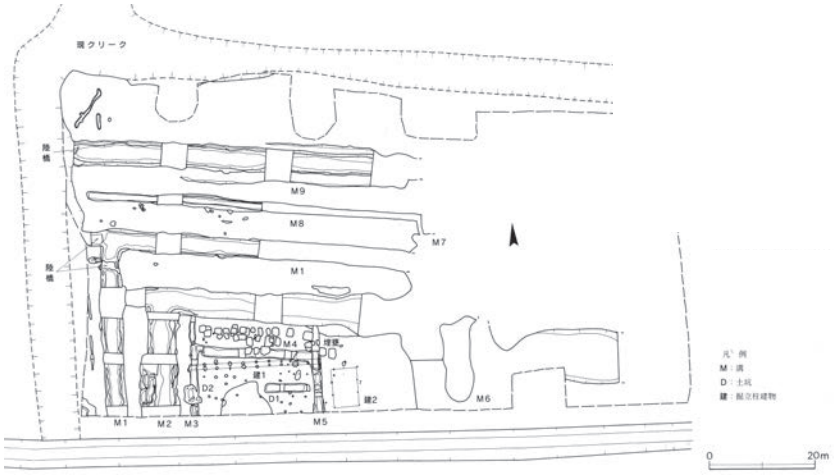
第 263 図　長崎坊田遺跡調査区 B 主要遺構配置図（文献 92）

れていないため、主要建物については不明である。溝からは 16 世紀代の大量の土師器、火鉢、茶釜や、明代の染付、青磁碗、高麗青磁などが出土しており、その時期の居館跡と想定される。
【参考文献】92

筑後Ｒ 20　彼岸田遺跡（ひがんだいせき）	郡名　下妻郡	図幅名　羽犬塚（東）
	種別　居館遺跡	所在　筑後市島田

【位置】花宗川左岸に面した標高約 4 m の平地に位置する。
【概要】矢部川浄化センター建設に伴う発掘調査により、中世に掘削、埋没した四重の堀状溝に囲まれた方形区画が検出された。現状のクリークの区画などから、一辺約 116m 以上の一町半の区画の内部を何重にも堀で囲われた様子が想定されている。

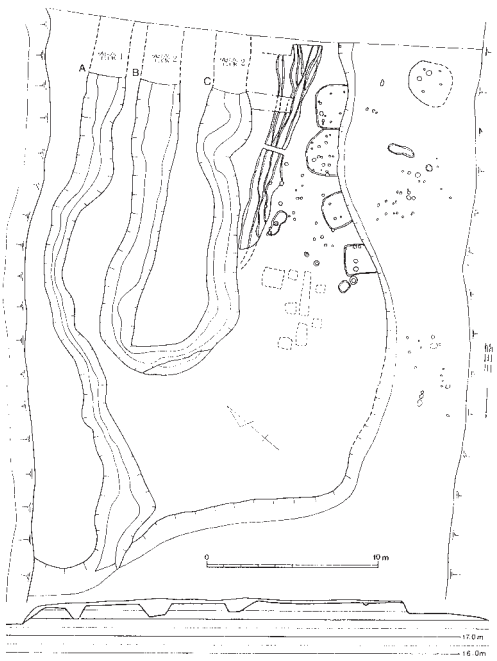
なお、区画内部からは掘立柱建物の他、近世墓なども検出されている。周囲の堀状溝からは、14 世紀後半～ 15 世紀代の遺物が出土しており、呪符木簡なども見つかっていて、その時期に営まれた大鳥居氏関連の居館跡ではないかと推測されている。
【参考文献】130



第 264 図　彼岸田遺跡主要遺構配置図（文献 130）

筑後Ｒ 21　陣内遺跡（じんないいせき）	郡名　三池郡	図幅名　柳川（東）
	種別　溝状遺構	所在　みやま市高田町上楠田

【位置】矢部川支流の楠田川上流、川に面した標高約 19m の台地上に位置する。
【概要】圃場整備に伴う発掘調査にて、幅約 4 m、深さ約 1 m の空堀状遺構が 2 本確認された。1 本は川に沿って平行に伸びているが、もう一本は U 字形に屈曲して掘られている。報告書では 15 世紀後半から 16 世紀前半としているものの、根拠が明示されておらず不分明であるが、中世期の堀である点においては問題ないようであり、城館に関連する遺構としておきたい。ただ、この遺構によって何を守ろうとしていたのかまでははっきりしない。報告書では田尻氏に関連する遺構であるとしている。また、近辺には「城前」の小字が残っており、次に述べる城前遺跡との関連を窺わせる。
【参考文献】96



第 265 図　陣内遺跡遺構配置図（文献 96）

筑後Ｒ 22　城前遺跡（じょうまえいせき）

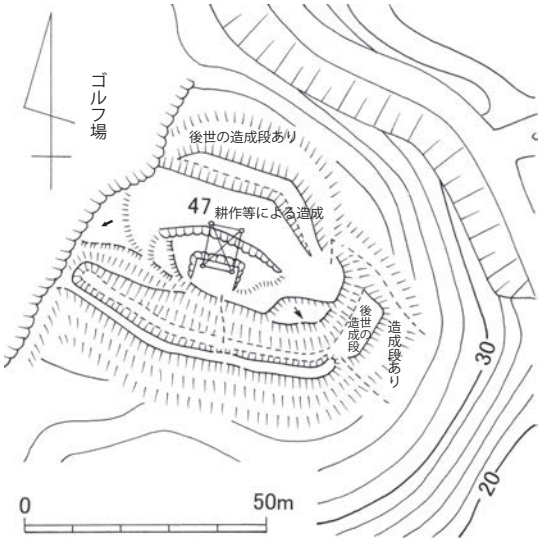
郡名	三池郡	図幅名	柳川（東）
種別	丘城か	所在	みやま市高田町上楠田

【位置】陣内遺跡の北側背後の標高 47m の丘陵上に位置する。

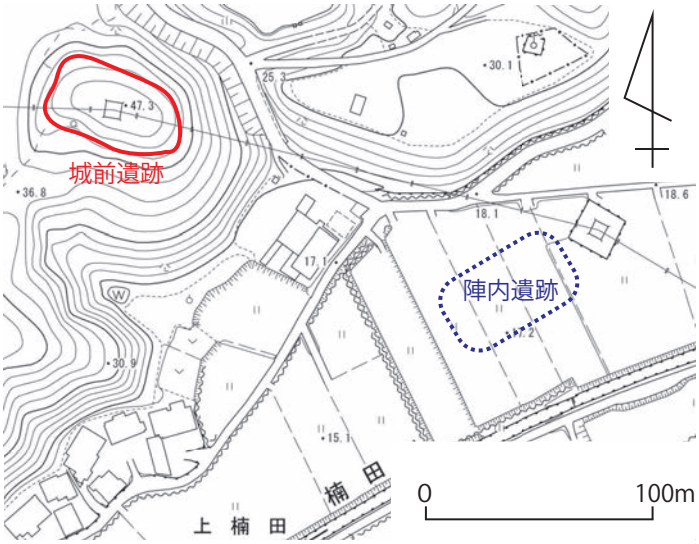
【概要】遺跡の小字は「城前」であり、陣内遺跡の調査報告書（文献 96）の周辺地図にも「城跡」として位置が示されていた。現地を踏査したところ、丘陵頂部は後世の削平を受けており、遺構の残存状況は不明ではあったものの、南側斜面には、約 50m にわたって横堀状の掘り込みが見られ、城館遺構の可能性がある。陣内遺跡との関係についても詳細は不明ではあるものの、100 ～ 200m 間隔と無関係とは思えないような位置関係にあり、城館として一連のものである可能性も考えられる。

【参考文献】96

第 266 図　陣内遺跡と城前遺跡遠景（左・手前の水田が陣内遺跡・奥の鉄塔が城前遺跡）・城前遺跡の横堀状遺構（右）



第 267 図　城前遺跡縄張り図（事務局作成）



第 268 図　城前遺跡と陣内遺跡の位置関係図（みやま市教育委員会提供図面を一部改変して事務局作成）

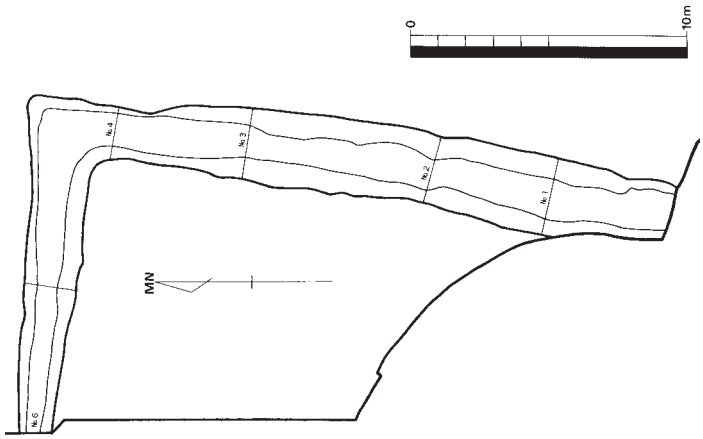
筑後Ｒ 23　上内高頭遺跡（かみうちたかがしらいせき）

郡名	三池郡	図幅名	関町（西）
種別	居館遺跡	所在	大牟田市上内

【位置】白銀川右岸、およびその支流の岡川の左岸に面した標高約 20 ～ 25m に位置する。

【概要】圃場整備に伴う発掘調査が昭和 63 年（1988）に行われており、調査された 2 地点のうち、

東側の第1地点では、古墳時代の住居群の他、調査区の南西隅において溝状遺構が検出されている。溝状遺構は、屈曲しており、南北22m以上、東西11m以上で、方形区画をなす北東隅と思われる屈曲部が検出された。溝幅は1.2～2.9m、深さは0.4～1.1mで、埋土からは糸切りの土師器、瓦器椀、白磁碗、滑石製石鍋など12世紀代を中心とする遺物が多く出土し、居館などの周りを取り囲む溝と推定されているが、区画の内部は一部しか調査しておらず、目立った遺構は検出されていない。ただ、調査区の東側には「城林」の小字なども残されており、遺跡との関連が想定される。



第269図　上内高頭遺跡溝状遺構（SD-01）平面図（文献101）

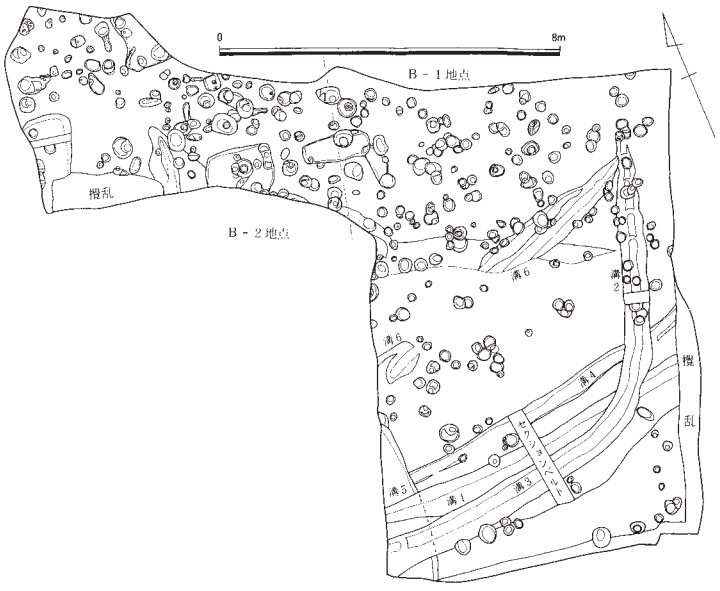
【参考文献】101

筑後R 24　白川遺跡（しらかわいせき）

郡名　三池郡　　**図幅名　大牟田（東）**
種別　居館遺跡　　**所在　大牟田市上白川町2丁目**

【位置】長溝川右岸の標高約10mの低台地上に位置する。

【概要】白川遺跡では、道路建設等の開発に伴い、何度か調査が行われているが、その中でも平成3年（1991）に行われたB-1・2地区の調査では、溝が6本、切り合う形で検出され、中でも溝2は直角に屈曲していた。その溝で囲まれるであろう区画内部には、多数の柱穴と思われるピット群が検出され、ピット群や溝からは、土師器、瓦器、鉄滓、大量の羽口片、滑石製石鍋片、同安窯系・龍泉窯系青磁、白磁などが出土している。出土遺物の図面が掲載されていないため、詳細な時期はわからないが、12～13世紀頃になるのではなかろうか。当遺跡の周辺には、羽山台遺跡、横又遺跡、次に述べる上白川遺跡など、同時期の館の堀・溝となるような溝状遺構が多数検出されており、羽山台遺跡では竪穴状遺構などもあって注目されるものの、調査面積の狭小さなどから、どのような区画をなすのかわからない事例が多く、今後の調査により明らかになると思われる。



第270図　白川遺跡B-1・2地区遺構平面図（文献102）

【参考文献】102

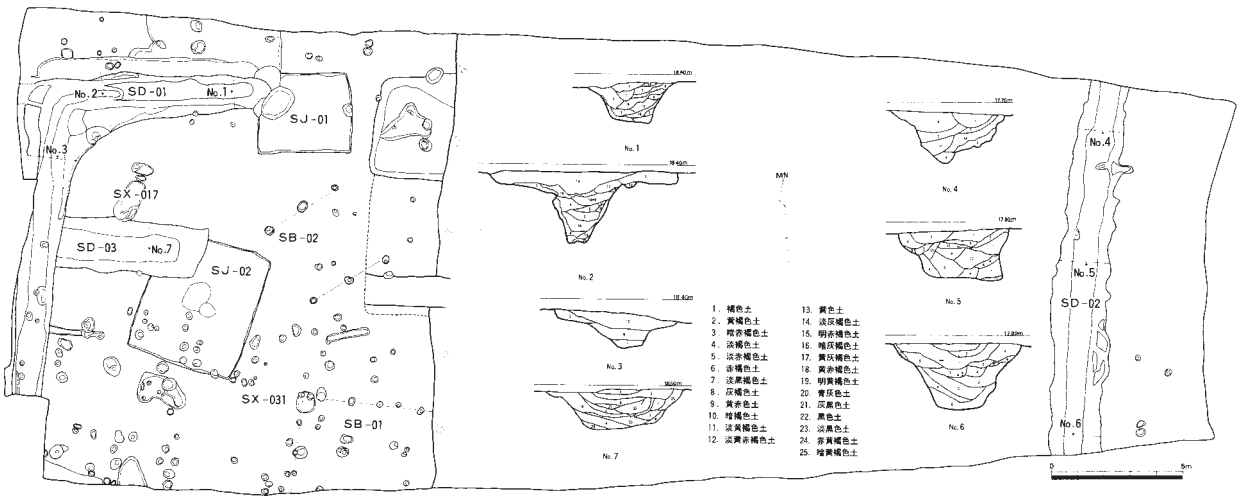
筑後Ｒ 25	上白川遺跡（かみしらかわいせき）	郡名　三池郡	図幅名　大牟田（東）
		種別　居館遺跡	所在　大牟田市上白川町２丁目

【位置】白川遺跡の南西約 200m 地点、標高約 17m に位置する。

【概要】宅地開発に伴い昭和 59 年（1984）に発掘調査が行われ、東西約 46m、南北約 18m の調査区からは、溝が２本検出され、調査区東側の溝は、南北の直線溝であったが、西側の溝（SD-01）はＬ字状に屈曲するプランを呈した区画溝であり、その内部からは掘立柱建物などの多くの柱穴列が検出されている。溝の深さは１～２m に及び、溝と言うより堀の印象を受ける。出土遺物には底部ヘラ切りと糸切りの両者の土師器が混じっていることや、白磁、青磁などから 11 世紀後半～ 12 世紀頃に年代が想定され、先に挙げた白川遺跡より若干古い様相を呈している。

当遺跡がある一帯は、先に述べたように当該期の中世遺跡が濃密に見つかっており、さらに東約 500m 地点には三池氏の居城と伝える大間城があり、発掘調査では 13 世紀頃の溝や柱穴群が検出されている。当遺跡も含めた大間城一帯には、中世前半期の居館群があった可能性を示しているのかもしれない。

【参考文献】99



第 271 図　上白川遺跡遺構平面図・断面図（文献 99）

Ⅵ　城館関連文献史料一覧

・本章では、本書報告対象の城館が登場する文献史料を集成した一覧表を示す。
・掲載にあたっては、城館別に採集した関係史料を「一次史料」と「参考史料」に類別し、編年配列した上で、各「一次史料」には枝番号を付した。ここでの「一次史料」とは、その城館が存続した同時代成立の史料である古文書・記録・日記類であり、その写しも含む。「参考史料」は、城館に関する記述内容の時期よりも後世の成立となる記録や編纂物である。
・本来ならば、原文書からの翻刻を掲載すべきだが、作業期間・紙幅等の事情により、その多くを良質な刊本から、一部を原本・謄写本等から収集し、内容については要旨、または当該城館に係る記述からの情報を示した。
・一覧表の作成にあたり、山本隆一朗氏・遠藤未央氏・野下俊樹氏の協力を得た。

＜中世城館＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
2	山隈城	参考			豊前覚書抄録8／『久留米市史 第7巻』P363			大友宗麟、秋月氏との合戦において勝利し、翌日「山隈御城」に在城す。
		参考	永禄11年11月		豊前覚書抄録8／『久留米市史 第7巻』P365			戸次鑑連、「山隈之御城」から、草野といもと村へと移る。
		(1)	（年未詳）10月19日	大友宗麟書状	法華津文書／『小郡市史５　中世・近世・近代』P348	（大友）宗麟	法華津隼人佐殿	法華津隼人佐が「山隈城誘奉行等」を勤めたことを賞する。
4	大板井城（坂井城）	参考			筑紫氏所領城数覚書16／『久留米市史 第7巻』P417			筑紫氏所領の中に「坂井之城」とみえる、筑後国三原郡に所在する番持の居城。
7	上高橋城	参考			筑紫氏所領城数覚書16／『久留米市史 第7巻』P417			筑紫氏所領の中に「高橋之城」とみえる、筑後国三原郡に所在する千手六□の居城。
8	三原城（本郷城）	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P415、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			三原和泉入道紹山、「三原郡本郷城」に居住。
		参考			隈江家譜560／『飯塚市史 上巻』P939			「天正七<己卯>年ヨリ種実御領内城主帳」の内、「三笠郡三原城主　板浪左京」とみえる。
10	西鯵坂城（阿地坂城）	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P415、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史			鯵坂氏、「三井郡鯵坂」に居住。
		参考			筑紫氏所領城数覚書16／『久留米市史 第7巻』P417			筑紫氏所領の中に「阿地坂城」とみえる、筑後国三井郡に所在する宗次郎左衛門尉の居城。
11	古賀城（八町嶋城）	参考			筑紫氏所領城数覚書16／『久留米市史 第7巻』P417			筑紫氏所領の中に「八町嶋城」とみえる、筑後国三井郡に所在する岩橋林加の居城。
15	毘沙門岳城（別所城）	(1)	応仁2年8月17日	大友親繁預ヶ状	大友家文書録350／『大分県史料31』第二部補遺（3）P216、志賀文書／『大日本史料8編2』P38	（大友）親繁	志賀太郎（親家）殿	大友親繁、志賀親家の「高良山別所城」における戦功を賞し、抽賞として「筑後国竹野郡内麦生之村伍拾五町」を預く。
18	吉見岳城	参考	永禄11年		豊前覚書抄録8／『久留米市史 第7巻』P360			大友宗麟、陣所として高良山の「よしみ嶽」を取誘う。
21	東光寺城（長増山城）	(1)	（年未詳）1月25日	大友氏家臣連署書状写	高良山宗崎家文書／『太宰管内志（中）』P133、宗崎（高良山文書「筑後将士軍談」）5／『久留米市史 第7巻』P67	宗歴、鎮連、紹運、道雪	高良社大宮司殿	大友氏家臣、高良社大宮司に対し、「長増山勤番之儀」について連絡し、所々の所領を「御城料」として宛行う。
26	弓削城	参考			筑紫氏所領城数覚書16／『久留米市史 第7巻』P417			筑紫氏所領の中に「弓削城」とみえる、筑後国三井郡に所在する弓削左衛門の居城。
29	荒木館	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P415、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			荒木氏、「荒木村」に居住。
		参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P415、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			斉藤三河守、「荒木」に居住。
31	海津城	参考			安武海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402			安武右衛門尉、天文14年まで69年間、海津城に居住す。
		参考			安武海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402			肥前龍造寺氏、「彼城」（海津城）を攻む。安武右衛門尉、家来横岳頼次らと共に合戦するも敗北し、落城す。
		参考			安武海津城主由来13／『久留米市史 第7巻』P402			安武右衛門尉、黒木弥市郎居城へ落忍び、横竹海津城に少しの間居住す。
		参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P415、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			安武安房守、「三潴郡梅津城主」とみえる。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
37	犬塚城	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P327			隈右京、「犬塚」に居住。
40	西江上城	(1)	（慶長5年） 12月2日	立花尚政（宗	田原文書／『福岡県史資料 第9輯』P258	（立花） 尚政	福有次介殿	「江上表」における合戦の手負を賞す。
41	東江上城	(2)	（慶長5年） 12月2日	立花尚政（宗	十時文書／『福岡県史資料 第9輯』P260	（立花） 尚政	十時平介殿	「江上表」における合戦の手負を賞す。
43	南清松館		（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P415、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			白仁弾正入道、「清松」に居住。
48	西牟田館	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P327			西牟田左衛門、「三潴郡西牟田」に居住
49	西牟田城	(1)	（天正12年） 9月3日	戸次道雪書状写	薦野家譜／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P369	（戸次） 道雪	（薦野） 増時	「安部六弥太」の働きによって、28日には「西牟田」、前日には「石垣」を分捕った活躍を比類なきものである。
		参考	天正12年		薦野家譜／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P374			大友勢、筑後へ侵攻。佐賀の国人の入る「西牟田の城」を攻略す。
58	酒見城	(1)	応安5年8月 日	深堀時縄軍忠状草案	深堀家文書323／『佐賀県史料集成 古文書編第4巻』P203、深堀家文書125／『増補訂正編年大友史料8』P79、肥前深堀文書4974／『南北朝遺文 九州編第5巻』P48	深堀掃部助時広代平五郎時縄		深堀時縄、「酒見城」において、山名少輔に属し、菊池武安と戦う。
		(2)	応安5年12月 日	深堀時広軍忠状	深堀家文書324／『佐賀県史料集成 古文書編第4巻』P204、肥前深堀文書5006／『南北朝遺文 九州編第5巻』P72	深堀掃部助時広		深堀時広、7月10日に「酒見城」で山名殿に属し、8月4日、菊池肥前守と合戦を行った際の軍忠について報告。これについて、「承了（花押）」という証判有。
		(3)	応安5年12月5日	禰寝久清代信成軍忠状	禰寝文書／『大日本史料6編36』P75、大隅禰寝文書5000／『南北朝遺文 九州編第5巻』P71	禰寝右馬助久清代親類弾正忠信成		「酒見城中」が難儀したため、合力するよう仰せがあり、9月25日「彼在所」に向かい軍忠。これについて、「承了（花押）」という今川頼泰の証判有。
		(4)	応安8年2月 日	式見兼綱軍忠状	姉川文書／『小郡市史5 中世・近世・近代』P228、肥前姉川文書5170／『南北朝遺文 九州編第5巻』P128	式見若狭守兼綱		兼綱は「北野御合戦」の後に、「酒見城」に籠城したことを報告。これについて、「承了（花押）」という今川頼泰の証判有。
		(5)	永和1年7月 日	深堀時広軍忠状	深堀家文書345／『佐賀県史料集成 古文書編第4巻』P216、肥前深堀文書5217／『南北朝遺文 九州編第5巻』P144	深堀掃部助時広		深堀時広、「酒見城」における軍忠について報告。これについて、「承了（花押）」という今川頼泰の証判有。
59	津村城	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P327			津村大介、「三潴郡津村」に居住。
61	蒲池城	(1)	応安5年7月 日	隈元政幸軍忠状写	青柳種信資料／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P282、青柳種信資料4966／『南北朝遺文 九州編第5巻』P46	隈元弥平次政幸		豊前の士御門靄寿丸代隈元政幸、大将（今川頼泰ヵ）の「筑後国御退治」に供奉す。その際、「鎌地城」に至り宿直警固を勤める。これについて、奥に「承了、（花押影）」という今川頼泰の証判有。
		(2)	（永和2年） 5月7日	今川了俊書状写	阿蘇家文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P283	（今川） 了俊	阿曽大宮司殿	肥後国人々少々「蒲地城衆」である。
		(3)	（年未詳） 6月2日	大友親世書状	近藤文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P284、筑後近藤文書6489／『南北朝遺文 九州編第6巻』P6489	（大友） 親世	吉岡民部丞殿	大友親世、吉岡民部丞に対して、今度「蒲池城」において、警戒や城内の警固に努めたことを褒め、さらなる軍忠を促す。
		(4)	（元亀元年） 8月24日	大友宗麟書状	広島大学所蔵蒲池文書6／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P2	（大友） 宗麟	蒲池勘解由使（鑑広）殿	大友宗麟、蒲池鑑広に対し、「其表」における特別な軍功を讃え、「蒲池要害」が心もとないので急ぎ乗船し、差籠むよう指示。
64	飯田館	(1)	貞和5年6月 日	荒木家有軍忠状	筑後近藤文書2597／『南北朝遺文 九州編第3巻』P58	（荒木） 藤原家有	進上 御奉行所	荒木家有、「筑後国白氣原・善導寺・牧村・石垣寺・荒木・瀬戸嶋・瀬高庄」などで毎夜宿直警固。善導寺は飯田館を指す。
67	竹井城（竹之城・草野城）	(1)	貞和3年11月25日	蓮眞書状	草野文書2402／『南北朝遺文 九州編第2巻』P385	蓮眞	草野孫次郎入道（永幸・円眞）殿	「筑後国草野城」警固について連絡。
		(2)	貞和7年2月9日	宇都宮冬綱奉書	草野文書11／『久留米市史 第7巻』P120、草野文書3000／『南北朝遺文 九州編第3巻』P171	前常陸介（宇都宮冬綱）	草野孫次郎入道殿、多比良大七入道殿	宇都宮冬綱、「筑後国山本郷草野城」について、当城衆へ城を修理・警固するよう連絡。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
67	竹井城（竹之城・草野城）	(3)	観応2年8月13日	兵部丞守雄遵行状	草野文書12／『久留米市史 第7巻』P120	兵部丞守雄	草野孫次郎入道（円眞）殿	兵部丞守雄、今月12日付鎮西御教書の旨に任せて、「筑後国草野城」の警固を命じる。
		(4)	（年未詳）7月12日	草野鑑尚書状写	横岳家文書188／『佐賀県史料集成 古文書編第6巻』P289	「（朱書）草野長門守、草野城主、発心嶽城主」鑑尚	横岳讃岐守殿、江上石見守殿、宗筑後入道殿、金屋	差出人の朱書に「草野城主」とみえる。
69	発心城	(1)	応安8年2月日	門司聖親軍忠状	門司文書22／『増補改訂中世北九州落日の譜－門司氏史話－』P393、豊前門司文書112／『久留米市史 第7巻』P555、豊前門司文書5169／『南北朝遺文 九州編第5巻』P127	門司左近将監聖親		門司聖親、筑後国において、「石垣城・耳納山・麦生・紅桃林・発所嶽・高良山其外所々御敵城」没落の際に、黒木谷河陣まで御共し、今も在陣しているという自身の忠節を報告。これについて、「承了（花押）」という証判有。
		(2)	天正3年3月2日		中書家久公御上京日記／『小郡市史５　中世・近世・近代』P349			「草野殿の関」を通過後に右手に「草野殿の城」が見えた。
		(3)	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P327			草野右衛門佐、「発心」に居住。
		(4)	（年未詳）7月12日	草野鑑尚書状写	横岳家文書188／『佐賀県史料集成 古文書編第6巻』P289	「（朱書）草野長門守、草野城主、発心嶽城主」鑑尚	横岳讃岐守殿、江上石見守殿、宗筑後入道殿、金屋	差出人の朱書に「発心嶽城主」とみえる。
		(5)	（年未詳）閏8月13日	大友義統書状写	高良山厨文書1／『久留米市史 第7巻』P309	（大友）義統	高良山大弐	大友義統、高良山大弐に対し、草野千光寺口柳坂表において、「発心岳之悪党」と合戦したことがみえる。
70	問本城	参考			立花系伝／『大日本史料11編20』P138			永禄10年12月、大友宗麟及び豊後諸将、豊後府内を発し、筑後へ赴く。永禄11年11月、筑後「山隈城」に入る。同月25日、「山隈」を去り、「草野問本城」に入る。同月28日、戸次道雪、問註所鑑豊女を娶る。後、永禄12年8月13日に女子生まれる。名は「闇千代」。
		参考			立花家雑集／『大日本史料11編20』P141			戸次道雪、永禄10年12月筑後国に発向。永禄11年中旬「筑後山隈城」に移る。同月25日「草野問本村之城」に移る。同月28日、「同所」において問註所安芸守艦豊女と婚礼。永禄12年8月13日、女子生まれ「闇千代」と号す。元亀1年8月、「筑後三原郡赤司村之城」に移る。
		参考			豊前覚書／『大日本史料11篇20』P146			永禄11年霜月25日、「草野といもと村」（問本村）へ「山隈之御城より移る。同28日祝言、「御上様」程なく妊娠、永禄12年8月、「御料人様」誕生す。
82 83 85	内山館（麦生館） 内山城 高丸城（麦生城）	(1)	応安8年2月日	門司聖親軍忠状	門司文書22／『増補改訂中世北九州落日の譜－門司氏史話－』P393、豊前門司文書112／『久留米市史 第7巻』P555、豊前門司文書5169／『南北朝遺文 九州編第5巻』P127	門司左近将監聖親		門司聖親、筑後国において、「石垣城・耳納山・麦生・紅桃林・発所嶽・高良山其外所々御敵城」没落の際に、黒木谷河陣まで御共し、今も在陣しているという自身の忠節を報告。これについて、「承了（花押）」という証判有。
		(2)	応安8年2月日	式見兼綱軍忠状	肥前姉川文書113／『久留米市史 第7巻』P555	式見若狭権守兼綱		式見兼綱、肥前国所々で合戦の後、「筑後国福童原、八町嶋」に在陣し、12月12日、「石垣、麦尾、黒木」など所々で宿直警固す。これについて、「承了（花押）」という一色頼泰の証判有。
		(3)	応安8年ヵ4月日	大河内宥軍忠状	肥前大河内文書7099／『南北朝遺文 九州編第7巻』P49	大河内豊前権守宥		「八町嶋御宿」に御供した後、「石垣・麦生・藤□〔山〕」に発向の際、供奉す。「承了（花押）」という証判有。
		(4)	永和1年7月日	深堀時広軍忠状	深堀家文書345／『佐賀県史料集成 古文書編第4巻』P216、肥前深堀文書5217／『南北朝遺文 九州編第5巻』P144	深堀掃部助時広		深堀時広、「酒見城」や、応安7年11月12日、「石垣・麦生・黒木・藤山」などにおける合戦の軍忠について報告。これについて、「承了（花押）」という今川頼泰の証判有。
		参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P415、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			麦生氏、「竹野郡麦生村」に居住。
		参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P415、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			星野右衛門大夫、「麦生城」に居住。
		参考			隈江家譜560／『飯塚市史 上巻』P939			「天正七<己卯>年ヨリ種実御領内城主帳」の内、「筑後国竹野郡麦尾城主　星野右馬」とみえる。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
88	山ノ中城（石垣城）	(1)	建武5年3月16日	藤原重宗軍忠状	肥後小代文書59／『久留米市史 第7巻』P518、肥後小代文書1148／『南北朝遺文 九州編第1巻』P346、小代文書14／『増補訂正編年大友史料6』P10	（小代）藤原重宗	進上 御奉行所	小代重宗、武藤資時・菊池武重以下の凶徒ら、「筑後国石垣城」に打出により、今月3日合戦す。また、守護代に属して「高良山・小田河原」に馳せ向かい、宿直警固したことを報告し、披露を請う。これについて、「承了（花押）」という少弐頼尚の証判有。
		(2)	建武5年7月6日	少弐頼尚書下写	三根郷御代々御判物写／『長崎県史 史料編第1』P407、対馬宗家判物写1195／『南北朝遺文 九州編第1巻』P362	大宰少弐（少弐頼尚）	宇木宗像彦太郎殿	少弐頼尚、宇木宗像彦太郎に対し、去3月3日筑後国石垣城合戦について、注申するよう連絡。
		(3)	暦応3年10月25日	松浦照軍忠状写	石志文書／『大日本史料6編4』P731	源照	進上 御奉行所	建武5年3月3日、「筑後国石垣山合戦」において軍忠を果たす。これについて「承了御判」という証判有。大日本史料によれば、本文の裏に一色範氏及び今川貞世の花押有。
		(4)	応安8年1月日	山内通忠軍忠状	山内家文書111／『久留米市史 第7巻』P554、山内家文書5163／『南北朝遺文 九州編第5巻』P125	山内下野守通忠		応安5年8月3日、筑後川を渡り「石桓〔垣〕御陣」を警固。
		(5)	応安8年2月日	門司聖親軍忠状	門司文書22／『増補改訂中世北九州落日の譜－門司氏史話－』P393、豊前門司文書112／『久留米市史 第7巻』P555、豊前門司文書5169／『南北朝遺文 九州編第5巻』P127	門司左近将監聖親		門司聖親、筑後国において、「石垣城・耳納山・麦生・紅桃林・発所嶽・高良山其外所々御敵城」没落の際に、黒木谷河陣まで御共し、今も在陣しているという自身の忠節を報告。これについて、「承了（花押）」という証判有。
		(6)	応安8年2月日	式見兼綱軍忠状	肥前姉川文書113／『久留米市史 第7巻』P555	式見若狭権守兼綱		式見兼綱、肥前国所々で合戦の後、「筑後国福童原、八町嶋」に在陣し、12月12日、「石垣、麦尾、黒木」など所々で宿直警固す。これについて、「承了（花押）」という一色頼泰の証判有。
		(7)	応安8年2月日	田原氏能軍忠状	豊後入江文書114／『久留米市史 第7巻』P556、入江文書23／『大分県史料10』第二部P393、豊後入江文書5171／『南北朝遺文 九州編第5巻』P130	田原下野権守氏能		応安7年11月10日夜に先勢として今川義範筑後川渡河の後、彼手に属して、「石垣城」に打入る。これについて、「承了（花押）」という今川了俊の証判有。
		(8)	応安8年ヵ4月日	大河内宥軍忠状	肥前大河内文書7099／『南北朝遺文 九州編第7巻』P49	大河内豊前権守宥		「八町嶋御宿」に御供した後、「石垣・麦生・藤□〔山〕」に発向の際、供奉す。「承了（花押）」という証判有。
		(9)	永和1年7月日	深堀時広軍忠状	深堀家文書345／『佐賀県史料集成 古文書編第4巻』P216、肥前深堀文書5217／『南北朝遺文 九州編第5巻』P144	深堀掃部助時広		深堀時広、「酒見城」や、応安7年11月12日、「石垣・麦生・黒木・藤山」などにおける合戦の軍忠について報告。これについて、「承了（花押）」という今川頼泰の証判有。
		(10)	天文3年2月2日	益田宗兼感状	俣賀文書567／『中世益田・益田氏関係史料集』P220	越中守（益田宗兼）	俣賀孫三郎殿	去閏正月16日の「筑後国星野里城」における軍功を讃え、益田尹兼と相談して、その活躍を申すべき旨を伝える。
		(11)	天文3年2月2日	益田宗兼感状	俣賀文書568／『中世益田・益田氏関係史料集』P220	越中守（益田宗兼）	俣賀孫三郎殿	去閏正月16日の「筑後国星野里城」における軍功を讃えるとともに、中間孫右衛門の疵を被る軍忠を讃え、益田尹兼と相談して、その忠節を申すべき旨を伝える。
		参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P416、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			星野重安、「石垣城」に居住。
91	菅館	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P415、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			菅四郎次郎、「竹野郡菅村」に居住。
94	鷹取山城（鷹取城）	(1)	建武5年3月14日	一色道猷感状写	肥前福田文書6991／『南北朝遺文 九州編第7巻』P15	沙弥（一色範氏・道猷）	福田三郎入道（兼信・理慶）殿	菊地武重以下凶徒退治について、「筑後国石垣山<号鷹取>」に搦手として小俣道剰が差し遣わされた際、これに参加したことを謝す。
		(2)	建武5年3月14日	一色道猷感状写	肥前福田文書6992／『南北朝遺文 九州編第7巻』P15	沙弥（一色範氏・道猷）	福田平四郎（兼益）殿	菊地武重以下凶徒退治について、「筑後国石垣山<号鷹取>」に搦手として小俣道剰が差し遣わされた際、これに参加したことを謝す。
		(3)	暦応3年10月日	佐志披軍忠状	斑島文書9／『佐賀県史料集成 古文書編第19巻』P197、斑島文書1594／『南北朝遺文 九州編第2巻』P91	（佐志）源披	進上 御奉行所	佐志披、「筑後国石垣山<号高鳥>合戦」における軍忠を報告。これについて、一色道猷が証判を据えている。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所蔵活字文献	差出	宛先	内容
94	鷹取山城（鷹取城）	(4)	（年未詳）7月6日	大友義統書状	問註所文書（１）38／『西国武士団関係史料集32』P51	（大友）義統	問註所刑部太輔殿	「鷹取」に放火することを厳命する。
		参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P327			星野中務、「高取」に居住。
98	妙見城（明見城）	参考	（延元4年）		大友家文書録綱文94／『増補訂正編年大友史料6』P55			大友氏泰、菊地武重が後醍醐天皇崩御の仏事をおこなう隙をつき、兵を筑後に発向させ「明見城」を攻める。その後菊地武重「明見城」を奪還し、豊後を攻める。
		参考	（永正4年3月）		北肥戦誌／『大宰府・太宰府天満宮史料14』P163			大友義長、星野重泰の居城「筑後国生葉郡妙見城」を攻める。
		参考	（永正4年3月）		歴代鎮西要略／『大宰府・太宰府天満宮史料14』P162			大友義長、星野重泰の居城「筑後国生葉城」を攻める。
		(1)	（年未詳）10月27日	小早川隆景書状	問註所文書（１）47／『西国武士団関係史料集32』P60	小早川隆景	問註所刑部少輔殿	問註所氏の普請の辛労を賞し、「妙見」の守備を任せたヵ。
		参考			隈江家譜560／『飯塚市史 上巻』P939			「天正七<己卯>年ヨリ種実御領内城主帳」の内、「同郡（生桑郡）妙見岳城　星野伯耆」とみえる。
102	福丸城（延寿寺城）	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P327			問註所氏、「延寿寺」に居住。
107	井上城	参考			問註所町野氏家譜／『大日本史料11編2』P696			町野（問註所）鑑景、天正8年より大友家に背きて秋月種実の麾下に属し、町野鎮昌の城「井上城」を攻める。
		参考			立花系伝／『大日本史料11編2』P696			天正10年9月25日、町野（問註所）鑑景の大友家に背きて龍造寺政家に属すにより、戸次道雪ら「井上城」を陥落させる。
		参考			隈江家譜560／『飯塚市史 上巻』P939			「天正七<己卯>年ヨリ種実御領内城主帳」の内、「同郡（生桑郡）井ノ上城主　秋月治部」とみえる。
111	隈ノ上城	(1)	（天正10年）1月14日	大友義統書状写	大友家文書録2040／『大分県史料33』第二部補遺（5）P200、大友家文書録2553／『大分県史料34』第二部補遺（6）P196	（大友）義統	問註所刑部太輔（統景）殿	大友義統、問註所統景の1月11日「生葉郡隈上村」における軍忠を賞す。
114	長瀬城	参考			隈江家譜560／『飯塚市史 上巻』P939			「天正七<己卯>年ヨリ種実御領内城主帳」の内、「筑後国生桑郡長瀬城主　同人（日田近江）」とみえる。
		参考			豊後武家文章／『大日本史料11編2』P697			天正10年7月25日、「筑後国生桑郡の内長瀬城」を打ち廻る。ただし、恵藤又左衛門は「柴尾口」に加勢。
119	高井岳城	(1)	（年未詳）11月7日	大友義長感状	波津久文書10／『大分県史料13』第二部P159	（大友）義長	波津久上野守殿	「筑後高名岳」における在陣の辛労を賞す。
		(2)	（天正8年）10月7日	大友義統書状写	大友家文書録1791／『大分県史料33』第二部補遺（5）P73、大友家文書録2559／『大分県史料34』第二部補遺（6）P199	（大友）義統	問註所刑部太輔（統景）殿	大友義統、問註所統景に対し、「当城粮料」として銀子一貫五百目を遣わす。また、「長岩・白石」覚悟のため、「高位岳」に城を誘えるよう昨日より下知を加えたことを伝える。なお、本文書にみえる「長岩・白石」の脇に「統景居城、両城共ニ筑後生葉郡之内ニ有」と記されている。
		(3)	（天正10年12月16日）	大友義統合戦手負注文一見状写	大友家文書録2036／『大分県史料33』第二部補遺（5）P199	（大友義統）	（堤鎮方）	大友義統、天正10年12月1日に「高位岳」を敵が攻めた際、これに防戦した際の手負注文に袖判を加う。
		(4)	（天正10年）12月16日	大友義統感状写	大友家文書録2037／『大分県史料33』第二部補遺（5）P199	（大友）義統	堤安芸守（鎮方）殿	大友義統、天正10年12月1日の「高位岳要害」に悪党が向かった際、「在城之衆」と申し談じて、「生葉大野原」において合戦するの忠節を賞し、軍忠状に袖判を加えたことを伝える。
		(5)	（年未詳）12月27日	大友義統書状写	問註所文書（2）／『西国武士団関係史料集33』P48	（大友）義統	問註所刑部太輔殿	高位岳城衆との熟談を命じる。
		(6)	（年月日不詳）	某書状（戸次道雪・高橋紹運連署書状ヵ）	森文書32／『西国武士団関係史料集3』P39			「高位岳」とみえる。
123	長岩城	(1)	（天正7年）2月4日	大友円齋（義鎮）書状	問註所文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P330	（大友）円齋	問註所刑部少輔殿	「当城」（長岩城ヵ）を堅固に守るべきことは言うまでもない。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
123	長岩城	(2)	（天正8年）10月7日	大友義統書状写	大友家文書録1791／『大分県史料33』第二部補遺（5）P73、大友家文書録2559／『大分県史料34』第二部補遺（6）P199	（大友）義統	問註所刑部太輔（統景）殿	大友義統、問註所統景に対し、「当城粮料」として一貫五百目を遣わす。また、「長岩・白石」覚悟のため、「高位岳」に城を誘えるよう昨日より下知を加えたことを伝える。なお、本文書にみえる「長岩・白石」の脇に「統景居城、両城共ニ筑後生葉郡之内ニ有」と記されている。
		(3)	（天正8年）3月10日	大友円齋（義鎮）書状	問註所文書（１）25／『西国武士団関係史料集32』P35	（大友）円齋	問註所加兵衛尉殿	「当城」（長岩城）が堅牢であることを賞する。
		(4)	（天正8年）10月7日	大友円齋（義鎮）書状	問註所文書（１）28／『西国武士団関係史料集32』P39	（大友）円齋	問註所刑部少輔殿	当城（長岩城）を守りきれることは疑いないという認識を示している。
		(5)	（天正9年）6月9日	大友義統書状	問註所文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P343	（大友）義統	問注所刑部太輔（統景）殿	大友義統、問註所統景に対し、蒲池鎮並の死亡や「簗河」の落城と蒲池一族の没落を驚き、今後の情報収集と「当城」を持ちこたえることが重要である旨を伝える。
		(6)	（天正9年ヵ）6月14日	（大友）義統書状写	問註所文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P344、大友家文書録2551／『大分県史料34』第二部補遺（6）P195	（大友）義統	問註所刑部太輔（統景）殿	「肥筑之徒党」、「長岩」へ一行の風聞を聞き、これは想定通りであり、義統自身発足につき粉骨を励ます。
		(7)	（天正9年）8月23日	大友円齋（義鎮）書状	問註所文書（１）32／『西国武士団関係史料集32』P45	（大友）円齋	問註所刑部少輔殿	8月13日に星野上野介が「白石要害」をのっとり、星野中務・伯耆守・秋月治部らが岩長城境目の芋川村まで進出した。
		(8)	（天正9年）9月9日	大友円齋（義鎮）書状	問註所文書（１）29／『西国武士団関係史料集32』P41	（大友）円齋	問註所刑部少輔殿	長期間籠城しており、兵粮が不足していることを大友氏に報告したところ、義統に命じてすぐに準備することを報ずる。
		(9)	（天正9年）9月18日	大友円齋（義鎮）書状	問註所文書（１）23／『西国武士団関係史料集32』P33	（大友）円齋	問註所刑部少輔殿	長岩城における無二の貞心を賞する。
		(10)	（天正9年）9月25日	大友円齋（義鎮）書状	問註所文書（１）31／『西国武士団関係史料集32』P43	（大友）円齋	問註所刑部少輔殿	当城（長岩城）を堅固に守るため、益々の馳走を命じる。
		参考		問註所家譜	問註所氏所蔵／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P346			伝わるに曰く、蒲池鎮並の子五郎三郎統虎、「柳川城」を守りて龍造寺隆信の軍を防ぐ。しかし、最終的には「城潰」す。統虎、生涯に及んだと偽り、「長岩」に逃れる。
		(11)	（天正10年ヵ）1月3日	大友義統書状	問註所文書（１）37／『西国武士団関係史料集32』P49	（大友）義統	町野与兵衛尉殿	「旧冬廿五」に秋月・星野太郎が当（長岩）城に攻め込んだが、勝利を得たことを賞する。
		(12)	（年未詳）1月28日	大友円齋（義鎮）書状	問註所文書（2）／『西国武士団関係史料集33』P27	（大友）円齋	問註所加兵衛尉殿	当（長岩）城の堅牢であることを賞す。
		(13)	（年未詳）5月10日	大友義統書状写	問註所文書（2）／『西国武士団関係史料集33』P40	（大友）義統	問註所刑部太輔殿	長期間籠城の辛労を気遣う。
		(14)	（年未詳）7月5日	大友義統書状写	問註所文書（2）／『西国武士団関係史料集33』P41	（大友）義統	問註所刑部太輔殿	当（長岩）城の兵粮料として、銀子５０疋目を遣わした。
		(15)	（年未詳）7月6日	大友義統書状	問註所文書（１）38／『西国武士団関係史料集32』P51	（大友）義統	問註所刑部少輔殿	当（長岩）城麓での勝利を賞する。
		(16)	（年未詳）9月25日	大友義統書状写	問註所文書（１）41／『西国武士団関係史料集32』P53	（大友）義統	問註所刑部太輔殿	9月22日に当（長岩）城の麓にある田籠村に星野中務少輔らが攻め込んだが、勝利し星野甚五郎らを討ち取ったことを賞す。
		(17)	（年未詳）閏3月20日	大友円齋（義鎮）書状	問註所文書（１）27／『西国武士団関係史料集32』P37	（大友）円齋	問註所加兵衛尉殿	当城（長岩城）は国衆達が忠節を行ったので、問題はないという認識を示している。
		(18)	（年未詳）7月27日	大友円齋（義鎮）書状	問註所文書（１）26／『西国武士団関係史料集32』P37	（大友）円齋	問註所刑部少輔殿	7月20日に秋月種実・秋月治部・両星野らが「当城」（長岩城）に攻め込み、田籠村に放火した。
		(19)	（年未詳）11月19日	大友義統書状	問註所文書（１）36／『西国武士団関係史料集32』P48	（大友）義統	問註所加兵衛尉殿	籠城によって長岩城を保持していることを賞し、糧料として「銀子三十疋目」を遣わした。
124	松尾城（田籠城）	(1)	（天文5年）閏10月6日	大友義鑑書状	問註所文書（１）1／『西国武士団関係史料集32』P7	（大友）義鑑	問註所加賀守殿	朝田内松尾に「取誘」を行うことを命じる。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
124	松尾城（田籠城）	(2)	（天文5年）閏10月6日	大友家加判衆連署書状	問註所文書（１）2／『西国武士団関係史料集32』P8	（入田）親廉・（山下）長就・（田北）親員	問註所加賀守殿	朝田内松尾に「取誘」を行うことを命じる。
126	白石城	(1)	（天正8年）3月15日	大友義統書状	三原文書20／『小郡市史5　資料編中世・近世・近代』P66	（大友）義統	三原山城守殿	白石城に長期間在城したことを賞する。
		(2)	（天正8年）10月7日	大友義統書状写	大友家文書録1791／『大分県史料33』第二部補遺（5）P73、大友家文書録2559／『大分県史料34』第二部補遺（6）P199	（大友）義統	問註所刑部太輔（統景）殿	大友義統、問註所統景に対し、「当城粮料」として銀子一貫五百目を遣わす。また、「長岩・白石」覚悟のため、「高位岳」に城を誘えるよう昨日より下知を加えたことを伝える。なお、本文書にみえる「長岩・白石」の脇に「統景居城、両城共ニ筑後生葉郡之内ニ有」と記されている。
		(3)	（天正9年）8月23日	大友円齋（義鎮）書状	問註所文書（１）32／『西国武士団関係史料集32』P45	（大友）円齋	問註所刑部少輔殿	8月13日に星野上野介が「白石要害」をのっとり、星野中務・伯耆守・秋月治部らが岩長城境目の芋川村まで進出した。
134	高屋城	参考	（天正15年）	五條系図	五條家文書／『史料纂集 五條家文書』P282			五條鎮定の項に、「住筑後上妻郡矢部山高屋城、以為本城」とみえ、五條鎮定が天正15年時点で高屋城を本城として居住していたことが窺える。子の統康も相続いで居す。
135	栗原城	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P327			五條七郎右衛門、「矢部栗原城」に居住。
140	高牟礼城（高群城）	(1)	永和2年3月日	毛利元春軍忠状案	毛利家文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P283、毛利家文書221／『増補訂正編年大友史料8』P141、毛利家文書5282／『南北朝遺文 九州編第5巻』P165	毛利右馬頭元春		応安7年11月17日、「高武礼・黒木」攻めに供奉。これについて、「承候了、在御判」という今川了俊のものと推測される証判有。
		参考	天正11年8月19日		豊前覚書抄録8／『久留米市史 第7巻』P366			肥前方城番士井出雲守、「たかむれと申城」から落退く。
		(2)	（天正12年）9月3日	戸次道雪書状	薦野文書／『小郡市史５　中世・近世・近代』P375、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P369	（戸次）道雪	（薦野）増時	猫尾城が降伏した結果、高牟礼に「入番」していた者達も火を放って退散したことを報ずる。
		(3)	「天正13年」（付箋）8月22日	鍋島信生奉知行宛行状	田尻家文書225／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P202	（鍋島）信生	（田尻）鑑種老	鍋島信生、龍造寺政家の指示により田尻鑑種の「明後日廿四日」より「高群」勤番に対して筑後国「江上四百町・蔵永四十五町・野瀬四十五町地」を宛行う。なお、年次は付箋より補った。
		(4)	（天正13年）8月24日	龍造寺政家書状	田尻家文書216／『柳川市史史料編3蒲池氏・田尻氏史料』P202	（龍造寺）政家	田尻又三郎殿	龍造寺政家、田尻又三郎に、父鑑種が「高群」「登城」に承諾したことへの悦びを伝える。
142	立華城（喬花城・立花城）	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P327			辺春勘ヶ由、「立花城」に居住。
143	猫尾城（黒木城）	(1)	建武3年3月8日	足利尊氏御教書	荒木近藤文書12／『久留米市史 第7巻』P173、筑後近藤文書449／『南北朝遺文 九州編第1巻』P151、荒木家文書／『太宰管内志（中）』P232	（足利尊氏）	荒木弥六（家有）殿	足利尊氏、荒木家有に対し、筑後国「黒木城」の凶徒退治のため、上野左馬助に属して軍忠を上げることを求める。
		(2)	建武3年3月13日	足利尊氏軍勢催促状	豊後田北文書47／『久留米市史 第7巻』P513、田北文書1／『大分県史料25』第二部P375	（足利尊氏）	（田北彦太郎ヵ）	足利尊氏、新田義貞討伐に関する光厳上皇の院宣が出されたことを伝え、上野義兼を「筑後国黒木城」に差遣わす。
		(3)	建武3年3月18日	龍造寺実善（家種）軍忠状	龍造寺家文書61／『佐賀県史料集成 古文書編第3巻』P42、肥前龍造寺文書48／『久留米市史 第7巻』P513、肥前龍造寺文書487／『南北朝遺文 九州編第1巻』P161	（龍造寺）沙弥實善	進上 御奉行所	龍造寺實善、今月17日、大将軍上野左馬助殿方に属して筑後国黒木城を攻め、これを破却す。これについて、「承了（花押）」という上野頼兼の証判有。
		(4)	建武3年3月18日	大江通信軍忠状	肥前来島文書49／『久留米市史 第7巻』P513、肥前来島文書488／『南北朝遺文 九州編第1巻』P162	大江通信	進上 御奉行所	大江通信、大将軍上野頼兼に属して、「筑後国黒木城」に相向かい、これを破却す。これについて、「承了（花押）」という上野頼兼の証判有。
		(5)	建武3年3月20日	藤原数門軍忠状	肥前武雄神社文書50／『久留米市史 第7巻』P514、肥前武雄神社文書494／『南北朝遺文 九州編第1巻』P164	藤原数門□〔上ヵ〕	進上 御奉行所	武雄大宮司師久曾女代弥三郎数門、上野頼兼に属して上野城を攻める。これについて、「承了（花押）」という上野頼兼の証判有。
		(6)	建武3年4月5日	龍造寺善智（家泰）軍忠状	肥前龍造寺文書51／『久留米市史 第7巻』P514、肥前龍造寺文書560／『南北朝遺文 九州編第1巻』P180	（龍造寺）沙弥善智	進上 御奉行所	龍造寺善智、上野頼兼に属して「筑後国黒木城」に押し寄せ、これを破却す。これについて、「承了（花押）」という上野頼兼の証判有。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
143	猫尾城 （黒木城）	(7)	応安8年1月日	山内通忠軍忠状	山内家文書111／『久留米市史 第7巻』P554、山内毛文書5163／『南北朝遺文 九州編第5巻』P125	山内下野守通忠		山内通忠、応安五年以来、今川貞世に属し、所々で合戦す。応安7年11月17日に「藤山御陣」・同25日に「黒木御陣・同谷河御陣」などで宿直警固す。
		(8)	応安8年2月日	式見兼綱軍忠状	肥前姉川文書113／『久留米市史 第7巻』P555	式見若狭権守兼綱		式見兼綱、肥前国所々で合戦の後、「筑後国福童原、八町嶋」に在陣し、12月12日、「石垣、麦尾、黒木」など所々で宿直警固す。これについて、「承了（花押）」という一色頼泰の証判有。
		(9)	応安8年2月日	田原氏能軍忠状	豊後入江文書114／『久留米市史 第7巻』P556、入江文書23／『大分県史料10』第二部P393、豊後入江文書5171／『南北朝遺文 九州編第5巻』P130	田原下野権守氏能		応安7年11月16日、「黒木城衆」降参す。これらについて、「承了（花押）」という今川了俊の証判有。
		(10)	応安8年2月日	門司聖親軍忠状	門司文書22／『増補改訂中世北九州落日の譜－門司氏史話－』P393、豊前門司文書112／『久留米市史 第7巻』P112、豊前門司文書5169／『南北朝遺文 九州編第5巻』P127	門司左近将監聖親		門司聖親、筑後国において、「石垣城・耳納山・麦生・紅桃林・発所嶽・高良山其外所々御敵城」没落の際に、「黒木・谷河」陣まで御共し、今も在陣しているという自身の忠節を報告。これについて、「承了（花押）」という証判有。
		(11)	応安8年8月日	長井貞広軍忠状写	萩藩閥閲録8-2・115／『久留米市史 第7巻』P557、萩藩閥閲録8-2・5231／『南北朝遺文 九州編第5巻』P151	長井掃部助貞広		長井貞広、今川了俊の九州入りに従い、所々を転戦す。応安7年11月、筑後河を渡り、「皆尾山・黒木・谷河御陣」において忠節あり。
		(12)	永和1年7月日	深堀時広軍忠状	深堀家文書345／『佐賀県史料集成 古文書編第4巻』P216、肥前深堀文書5217／『南北朝遺文 九州編第5巻』P144	深堀掃部助時広		深堀時広、「酒見城」や、応安7年11月12日、「石垣・麦生・黒木・藤山」などにおける合戦の軍忠について報告。これについて、「承了（花押）」という今川頼泰の証判有。
		(13)	永和2年3月日	毛利元春軍忠状案	毛利家文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P283、毛利家文書221／『増補訂正編年大友史料8』P141、毛利家文書5282／『南北朝遺文 九州編第5巻』P165	毛利右馬頭元春		応安7年11月17日、「高武礼・黒木」攻めに供奉。これについて、「承候了、在御判」という今川了俊のものと推測される証判有。
		(14)	永和3年3月日	安富直安軍忠状	深江文書／『大日本史料6編41』P73、肥前深江文書5392／『南北朝遺文 九州編第5巻』P207	安富下総権守直安		応安7年8月15日、高来へ発向に供奉、その後「筑後国福東・八町嶋」に渡河。また、「黒木」など所々で忠勤す。これについて、「承了（花押）」という今川了俊の証判有。
		(15)	永和4年11月日	橘薩摩公直軍忠状案	小鹿島文書74／『佐賀県史料集成 古文書編第17巻』P286、肥前小鹿島文書123／『久留米市史 第7巻』P562	（橘薩上村対馬守公直）		橘薩摩公直、去9月27日に筑後国山本御陣に馳せ参じ、「黒木御陣」と「三奈尾山城」を攻める働きをしたことを報告。
		(16)	永和4年11月日	大嶋実軍忠状	来島文書124／『久留米市史 第7巻』P563	松浦大嶋尾張介実		大嶋実、「筑後国黒木御陣」警固について報告。
		(17)	永和4年11月日	大島勝軍忠状	『増補訂正編年大友史料8』289、P177	松浦大島太郎左衛門尉勝		大島勝、「筑後国黒木御陣」警固について報告。これについて、「承了（花押）」という今川頼泰の証判有。
		(18)	（弘和3年）4月14日	良成親王書状	五條家文書31／『史料纂集 五條家文書』P21～	（良成親王）		凶徒「黒木」に打寄す。
		(19)	（元中8年）12月9日	五條頼治申状案	五條文書134／『久留米市史 第7巻』P568、五條家文書35／『史料纂集 五條家文書』P24、五條家文書480／『増補訂正編年大友史料8』P317、筑後五條文書6211／『南北朝遺文 九州編第6巻』P121	（五條）頼治上	進上 堀川（光継）殿	五條頼治、筑後国御方輩と共に合戦し、「黒木城<敵城>」の凶徒を退ける。
		参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P327			黒木兵衛頭宗実、「猫尾城」に居住。
		(20)	（年未詳）10月11日	黒木鎮連書状	横岳家文書111／『佐賀県史料集成 古文書編第6巻』P238	（黒木）鎮連	横岳殿	本文書の包紙上書に「筑後黒木狛（猫ヵ）尾城主」とみえる。
		(21)	（天正7年ヵ）6月21日	朽網宗歴書状	広島大学所蔵蒲池文書16／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P5	（朽網）宗歴	（蒲池）鑑広	朽網宗歴による六か条の指示。その中に、「黒木表陣所」事は了解したこと、道を造ること、詳しくは小林紀伊守へ申すこと、とみえる。
		(22)	（天正7年）9月6日	大友義統書状	蒲池玄造氏蔵本（肥後蒲池文書）11／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P34	（大友）義統	蒲池志摩守（鑑広）殿	大友義統、蒲池志摩守に対して、「黒木表之行」（黒木城攻めヵ）について下知があり、粉骨に励むことを期待している、と伝える。
		(23)	（天正7年）11月11日	大友義統書状	五條家文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P333	（大友）義統	五條（鎮定）殿	大友義統、五條鎮定に対し「黒木表」打入の途中、蒲池鑑広が龍造寺方に下ったことを伝え、今後の忠節を促す。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
143	猫尾城（黒木城）	(24)	（年未詳）5月24日	大友義統書状写	平林文書8／『大分県史料13』第二部P221	（大友）義統	平林弾正忠殿・竹中宮内	「肥前之逆徒」が「黒木表」に滞在しているとの風聞があり、事実ならば「当山」へ成行くよう命じる。
		(25)	（天正10年10月3日）	大友義統合戦手負注文一見状写	大友家文書録2028／『大分県史料33』第二部補遺（5）P196	（大友義統）	（麦生鎮綱）	大友義統、天正10年9月27日、「黒木里城」に発向し麦生鎮綱手之衆として合戦した者の手負注文に袖判を加える。
		(26)	（天正10年）10月3日	大友義統感状	大友家文書録2029／『大分県史料33』第二部補遺（5）P196	（大友）義統	麦生兵部大介（鎮綱）殿	大友義統、前27日、「黒木里城」攻めにおける麦生鎮綱の働きを賞し、併せて手負注文に袖判を加えたことを伝え一層の軍忠を頼む。
		(27)	（天正10年）11月3日	大友義統書状	広島大学所蔵蒲池文書8／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P3	（大友）義統	蒲池兵庫頭殿	今度「津江表」に至り、一勢を差出し、「黒木兵庫頭里城」を打崩し、「矢部」に在陣しているとみえる。
		(28)	（天正12年7月20日から同月24日までの間と思われる。）	大友義統証判五條鎮定軍忠着到状	五條家文書212／『史料纂集 五條家文書』P147	（大友義統）	五條殿	大友義統、天正12年7月20日、「黒木兵庫頭要害猫尾」に取り懸かり、「里城」を打崩した際の五條鎮定家中の負傷者および戦死者の注文を確認したことを伝え、あわせて袖に判を加える。
		(29)	天正12年6月22日	戸次道雪・高橋紹運連署書状	薩藩旧記雑録／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P367	戸次道雪・高橋紹運	某	「黒木表」は早々に打崩し、「山下表」へ一陣を張りかけることを伝える。
		(30)	（天正12年）7月22日	原田了栄書状写	児玉韜採集文書／『小郡市史５　中世・近世・近代』P373	（原田）了栄	（秋月）種実	大友勢が「黒木里城」を攻撃し、黒木家永が防戦したことを報ずる。黒木里城は黒木城（猫尾城）麓の館か。
		(31)	（天正12年）7月24日	大友義統感状写	大友家文書録2006／『大分県史料33』第二部補遺（5）P184	（大友）義統	朽網式部少輔（鎮康）殿	大友義統、去20日、「黒木兵庫頭要害猫尾」に至り、「里城」を打ち崩した働きを賞す。
		(32)	（天正12年）7月24日	大友義統書状	五條家文書209／『史料纂集 五條家文書』P146	（大友）義統	五條（鎮定）殿	大友義統、五條鎮定の活躍を賞し、「猫尾要害」について、朽網宗歴と熟談し、今に支える才覚を讃える。
		(33)	（天正12年）7月26日	大友義統感状	兒玉文書10／『大分県史料11』第二部P308	（大友）よし統（義統）	松ヶ尾弾正	大友義統、松ヶ尾弾正の本庄伊賀守に同陣し、「黒木兵庫頭要害猫尾」に至り、「里城」を打ち崩した働きを賞す。
		(34)	（天正12年）7月26日	大友義統感状	豊田文書10／『大分県史料11』第二部P282	（大友）よし統（義統）	長野主殿	大友義統、長野主殿の本庄伊賀守に同陣し、「黒木兵庫頭要害猫尾」に至り、「里城」を打ち崩した働きを賞す。
		(35)	（天正12年）7月26日	大友義統感状写	大友家文書録2002／『大分県史料33』第二部補遺（5）P182	（大友）義統	養父源内殿	大友義統、財津瀧閑と同陣し去20日の「黒木要害猫尾」における忠節を賞す。
		(36)	（天正12年）7月26日	大友義統感状写	大友家文書録2003／『大分県史料33』第二部補遺（5）P182	（大友）義統	赤尾兵庫介殿	大友義統、財津瀧閑と同陣し去20日の「黒木要害猫尾」における忠節を賞す。
		(37)	（天正12年）7月26日	大友義統感状写	大友家文書録2004／『大分県史料33』第二部補遺（5）P182	（大友）義統	小田民部少輔殿	大友義統、小田民部少輔に対し、「黒木兵庫頭要害猫尾」に取懸り、「里城」を打ち崩した働きを賞す。
		(38)	（天正12年）7月26日	大友義統感状写	大友家文書録2009／『大分県史料33』第二部補遺（5）P185	（大友）義統	田村作進（統幸）殿	大友義統、田村統幸の「黒木兵庫頭要害猫尾」に取懸り、「里城」を打ち崩した働きを賞し、軍忠状に袖判を加えたことを伝える。
		(39)	（天正12年7月27日）	大友義統合戦討死注文一見状写	大友家文書録2010／『大分県史料33』第二部補遺（5）P186	（大友義統）	（田村統幸）	大友義統、7月27日に「黒木兵庫頭要害猫尾」の合戦における田村統幸の提出した討死注文に袖判を加う。
		(40)	（天正12年ヵ）7月27日	大友義統書状	五條家文書183／『史料纂集 五條家文書』P127	（大友）義統	五條（鎮定）殿	大友義統、五條鎮定による、黒木兵庫頭実久の悪逆に対し、「兵庫頭要害」を打崩した戦功を賞する。これによって、五條鎮定に黒木鎮連居屋敷六町内を預進む。
		(41)	（天正12年）7月28日	大友氏家臣連署書状	五條家文書262／『史料纂集 五條家文書』P190、大友家文書録2005／『大分県史料33』第二部補遺（5）P182	（高橋）紹運（鎮種）、（戸次）道雪（鑑連）、（高橋）統増、（立花）統虎（宗茂）	津江（鎮盛）殿、新田（鎮実）殿、清原殿、津江（親信）殿、五條殿	大友氏家臣、前20日に「黒木里城」と同籠屋が打崩され、両水之手が切留められたことについて、各々の粉骨を讃え、早々に「彼一城」が落居したことを喜ぶ。
		(42)	同日（天正12年7月28日）	高橋紹運（鎮種）・戸次道雪（鑑連）連署書状追書	五條家文書263／『史料纂集 五條家文書』P192	雪（戸次道雪・鑑連）、連（高橋紹運・鎮連）	山御三人参	高橋紹運・戸次道雪、善応寺口を取り塞げば、「猫尾之儀」は、5日ともたないことを伝える。
		(43)	（天正12年）8月5日	大友義統感状写	大友家文書録2007／『大分県史料33』第二部補遺（5）P185	（大友）義統	朽網式部少輔（鎮康）殿	大友義統、去20日、「黒木兵庫頭要害猫尾」に至り、「里城」を打ち崩した働きを賞し、軍忠状に袖判を加えたことを伝える。
		(44)	（天正12年8月5日）	大友義統合戦手負注文一見状写	大友家文書録2008／『大分県史料33』第二部補遺（5）P185	（大友義統）	（朽網鎮康）	大友義統、7月20日の「黒木兵庫頭要害猫尾」における合戦における朽網鎮康被官の手負注文に袖判を加う。
		(45)	（天正12年）8月10日	大友義統書状	五條家文書213／『史料纂集 五條家文書』P151	（大友）義統	五條（鎮定）殿	大友義統、今度の「黒木表」における五條鎮定の活躍を賞する。
		参考			隈江家譜549／『飯塚市史 上巻』P934			天正13年8月、「黒木居城猫尾」を大友方数日のうちに攻め落とす。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
143	猫尾城（黒木城）	(46)	（年月日欠）	大友義統感状	大友家文書録1994／『大分県史料33』第二部補遺（5）P179	（大友義統）		某衛門尉について、「黒木要害猫尾攻口」における忠節を賞す。
		(47)	（天正12年以降）	由布雪下戦場覚	由布文書546／『飯塚市史 上巻』P546	（由布雪下）		由布雪下の合戦覚。天正12年8月中旬、「黒木猫尾城<筑後>」で合戦したことを記す。
		(48)	（天正12年）9月3日	戸次道雪書状	薦野文書／『小郡市史５　中世・近世・近代』P375、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P369	（戸次）道雪	（薦野）増時	黒木氏は高橋紹運・戸次道雪に詫び言を入れ、人質を出したので「猫尾」は大友氏の手に落ちたことを報ずる。
		(49)	（天正12年）9月11日	大友義統感状	十時文書／『福岡県史資料 第9輯』P260	（大友）義統	十時刑部丞殿	去月19日、戸次道雪に同心し、「黒木表」に着陣。
		(50)	（天正12年）9月11日	大友義統感状写	大友家文書録1998／『大分県史料33』第二部補遺（5）P180	（大友）義統	立花右衛門太夫殿	去月19日、戸次道雪に同心し、「黒木表」に着陣。
		(51)	（天正12年）9月11日	大友義統感状写	大友家文書録1999／『大分県史料33』第二部補遺（5）P181	（大友）義統	光行助左衛門殿	去月19日、高橋紹運に同心し、「黒木表」に着陣。
		(52)	（天正12年）9月11日	大友義統感状	戸次隆義文書1／『大分県史料26』第四部P75	（大友）義統	（宛所欠）	去月19日、戸次道雪に同心し、「黒木表」に着陣。
		(53)	（天正12年）10月18日	大友義統書状写	大友家文書録1989／『大分県史料33』第二部補遺（5）P176	（大友）義統	簗瀬三河入道殿	大友義統、簗瀬三河入道に対して、高橋紹運が「黒木表」越山の時、「居城」の「勤番」として残さるる辛労を賞す。
		(54)	（天正15年）9月22日	志賀道輝（親度）書状	五條家文書280／『史料纂集 五條家文書』P206	道輝（志賀親度）	五條殿	志賀道輝、五條氏に対し、「黒木表」において一城を取付けるを伝える。
		(55)	（年未詳）2月16日	大友義統書状	由布文書／『福岡県史資料 第9輯』P265	（大友）義統	由布五兵衛尉殿	去年「黒木表」に至り、戸次道雪が越山する際、「当城」に勤番した辛労を賞す。
		参考	天正19年		秀包記抄／『久留米市史 第7巻』P629			「黒木城」は大変な難所であったため、落城せず。
		(56)	慶長7年7月25日	慶長7年台所入之掟	『柳川の歴史3 田中吉政・忠政』P310	（田中）吉政	友田勝右衛門殿、田中勘右衛門殿	城の普請・作事などについて連絡したもの。「一、やな川・くるめ・城嶋・福嶋・くろ木・赤司・ゑのきつ・江浦八ツの諸城」とみえる。
147	前川内城（辺春城）	参考	天正元年～同4年の間と思われる。		筑後志4巻／『太宰管内志（中）』P154			天正の始、堤刑部貞長・同忠之ら五百人が「上妻郡邊原城」に押し寄せ、不日に落城す。
148	熊ノ川城（辺春城）	(1)	（天正8年）	江副兵部左衛門尉軍忠状写	小城藩士佐嘉差出古文書写／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P340	江副兵部左衛門尉		龍造寺家臣、江副兵部左衛門尉、蒲池氏攻めに加わる。このうち、「筑後へばる城御責之時」に一番に大矢窓に付き一番乗りしたことを記す。
		(2)	（天正10年）11月3日	大友義統書状	広島大学所蔵蒲池文書8／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P3	（大友）義統	蒲池兵庫頭殿	「辺春・河内不慮之儀」について連絡。
		(3)	（天正11年）3月28日	大友義統預ヶ状写	高良山文書（鏡山文書）57／『久留米市史 第7巻』P58、大友家文書録2082／『大分県史料33』第二部補遺（5）P221	（大友）義統	高良山大祝（鏡山保真）殿	鏡山宗善・保真、辺春薩摩守と共に悪党と戦い、戦死す。
		(4)	（天正11年）□□〔3月ヵ〕28日	朽網宗歴書状写	高良山文書（鏡山文書）58／『久留米市史 第7巻』P58、大友家文書録2084／『大分県史料33』第二部補遺（5）P222	宗歴（朽網鑑康）	大祝（鏡山保真）殿	朽網鑑康、鏡山宗善夫妻の「辺春山」にて戦死するの忠節を賞し、御判を与えることを子鏡山保真に伝える。
		(5)	（天正11年）3月28日	大友義統預ヶ状	歴世古文書／『大日本史料11編2』P769	（大友）義統	稲員式部丞（安守）殿	大友義統、稲員安守に対し、「辺春表」に悪党が取り掛かった際、「親父大蔵」が辺春鎮信と共に戦死した忠義を讃え、「筑後当条村共五町分」を預く。
		(6)	（天正11年）6月9日	大友義統預ヶ状写	大友家文書録2014／『大分県史料33』第二部補遺（5）P189	（大友）義統	酒見下総入道殿	大友義統、酒見下野入道に対し、「辺春薩摩守宅所」に立て籠もるなどの忠義を賞し、酒見屋敷などの土地を預く。
		(7)	（天正11年）6月9日	大友義統預ヶ状写	歴世古文書／『大日本史料11編2』P770、大友家文書録2015／『大分県史料33』第二部補遺（5）P189	（大友）義統	酒井田少輔太郎（統家）殿	大友義統、酒井田少輔太郎に対し、「不慮之弓箭」の時、辺春薩摩守と申談じて、「鎮信宅所」に立て籠もり、父夫婦や舎兄戦死の忠義を讃え、筑後国内の土地を預く。
		(8)	（天正11年）6月9日	朽網宗歴奉書写	大友家文書録2016／『大分県史料33』第二部補遺（5）P190	（朽網）宗歴（鑑康）	酒井田少輔太郎（統家）殿	大友義統、酒井田少輔太郎に対し、「不慮之弓箭」の時、辺春薩摩守と申談じて、「鎮信宅所」に立て籠もり、父夫婦や舎兄戦死の忠義を讃え、筑後国内の土地を預ける旨を連絡。
		(9)	（天正14年）2月28日	伊集院忠棟書状	広島大学所蔵蒲池文書12／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P4	（伊集院）忠棟	蒲池勘解由長官殿	「辺春村」の事について蒲池の望む通りになったが、これについて本田親貞が難渋を示しているという。
		(10)	（天正15年）12月10日	豊臣秀吉直書	徳山毛利家文書3／『山口県史 史料編中世2』P278	（豊臣秀吉）	毛利右馬頭（輝元）との	豊臣秀吉、毛利輝元に「和任・辺春取巻之儀」について指示を連絡。
150	白木城（藤山城）	(1)	応安8年ヵ4月日	大河内宥軍忠状	肥前大河内文書7099／『南北朝遺文 九州編第7巻』P49	大河内豊前権守宥		「八町嶋御宿」に御供した後、「石垣・麦生・藤□〔山〕」に発向の際、供奉す。「承了（花押）」という証判有。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
150	白木城 （藤山城）	(2)	永和1年7月日	深堀時広軍忠状	深堀家文書345／『佐賀県史料集成 古文書編第4巻』P216、肥前深堀文書5217／『南北朝遺文 九州編第5巻』P144	深堀掃部助時広		深堀時広、「酒見城」や、応安7年11月12日、「石垣・麦生・黒木・藤山」などにおける合戦の軍忠について報告。これについて、「承了（花押）」という今川頼泰の証判有。
155	山下城 （人見城）	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			蒲地勘ヶ由鎮行、「山下城」に居住。
		(1)	（天正7年）4月17日	大友義統書状	上妻文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P330	（大友）義統	上妻越前守殿	4月8日、龍造寺隆信らによる「蒲池勘解由使要害」（山下城）攻撃に対して、上妻越前守らは「足城」を誘え数度防戦し勝利したことを賞す。
		参考	（天正7年）4月17日	大友義統書状写	九州治乱記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P331	（大友）義統	木室次郎入道殿	龍造寺隆信らによる「蒲池勘解由使要害」（山下城）攻撃に対して、木室次郎入道らは「足城」を誘え数度防戦し勝利したことを賞す。
		(2)	天正12年6月22日	戸次道雪・高橋紹運連署書状	薩藩旧記雑録／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P367	戸次道雪・高橋紹運	某	「黒木表」は早々に打崩し、「山下表」へ一陣を張りかけることを伝える。
		(3)	（天正12年）9月3日	戸次道雪書状写	薦野家譜／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P370	（戸次）道雪	（薦野）増時	「山下城」の麓に悉く働く。
		参考	天正12年		薦野家譜／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P373			大友勢、筑後へ侵攻。「山下の城」を攻める。蒲池志摩守、かねてより大友氏と内通により城を渡す。城には宗像掃部が入る。次いで下筑後へ打出。「高尾の城」を攻囲む。田尻鎮〔鑑〕種は「柳川の城」におり、家臣だけでは防ぎきれず鷹尾城落城す。柳川城は二方は海に、二方は沼掘縦横にして要害堅固の地であり、これを龍造寺家治〔晴〕が多勢にて守る。
		参考		蒲池家譜	蒲池久敬氏蔵本1／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P28			蒲池氏が「筑後山下城主」であることを記す。「山下城」は、蒲池能久（法名覚能）が筑後国上妻郡山下に築いたことに始まるとする。
		参考		蒲池家系図并に由来等	蒲池玄造氏蔵本（蒲池家系図并に由来等）／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P42			蒲池家系図巻惣目録に「山下城興廃事」とみえる。
		参考		蒲池家由来ノ事	蒲池玄造氏蔵本（蒲池家系図并に由来等）／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P44・47			蒲池兵庫頭鎮運、上妻郡に「山下〈人見ヵ城〉城」を築き、「近郷八千郷」を領す。
		(4)	天正13年9月6日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P376			島津氏、北上し「山下里目辺」に放火することを評議す。
		(5)	天正13年9月29日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P377			上井覚兼、「山下」に御番衆を置くことや、「江之浦・堀切」のことなどを指示。
		(6)	天正13年10月1日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P378			隈部氏、上井覚兼に対し、「山下之事」は落着したこと、番衆が誰になるかは未定であることを伝える。
		(7)	天正14年7月21日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P380			上井覚兼、「上蒲池山下」を通り、進軍。
158	山崎城	(1)	永和1年10月25日	今川了俊安堵状	『増補訂正編年大友史料8』215、P138、肥後佐田文書5252／『南北朝遺文 九州編第5巻』P156	沙弥（今川了俊）	宇都宮河内小法師（親景）	宇都宮河内小法師の父が「筑後国山崎合戦」において討死したことを受け、宇都宮河内小法師に「一跡」を安堵。
		(2)	□〔永〕和2年6月日	長井広世軍忠状	『増補訂正編年大友史料8』214、P138、毛利家文書5314／『南北朝遺文 九州編第5巻』P182	〔長井五郎〕広世		去年8月29日、筑後国「山崎」において合戦。これについて、「承候了（花押）」という今川了俊の証判有。
		参考			豊後国志216／『増補訂正編年大友史料8』P138			応安7年、大蔵詮水（日田太郎）今川貞世に属して菊地武政と「筑之山崎城」において合戦、敗死す。
		参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			上妻越前守、「山崎城」に居住。
159	兼松城	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P327			豊饒美作守、「兼松城」に居住。
161	谷川城	(1)	応安8年1月日	山内通忠軍忠状	山内家文書111／『久留米市史 第7巻』P554、山内家文書5163／『南北朝遺文 九州編第5巻』P125	山内下野守通忠		山内通忠、応安五年以来、今川貞世に属し、所々で合戦す。応安7年11月17日に「藤山御陣」・同25日に「黒木御陣・同谷河御陣」などで宿直警固す。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
161	谷川城	(2)	応安8年2月日	門司聖親軍忠状	門司文書22／『増補改訂中世北九州落日の譜－門司氏史話－』P393、豊前門司文書112／『久留米市史 第7巻』P555、豊前門司文書5169／『南北朝遺文 九州編第5巻』P127	門司左近将監聖親		門司聖親、筑後国において、「石垣城・耳納山・麦生・紅桃林・発所嶽・高良山其外所々御敵城」没落の際に、「黒木・谷河」陣まで御共し、今も在陣しているという自身の忠節を報告。これについて、「承了（花押）」という証判有。
		(3)	応安8年8月日	長井貞広軍忠状写	萩藩閥閲録8-2・115／『久留米市史 第7巻』P557、萩藩閥閲録8-2・5231／『南北朝遺文 九州編第5巻』P151	長井掃部助貞広		長井貞広、今川了俊の九州入りに従い、所々を転戦す。応安7年11月、筑後河を渡り、「皆尾山・黒木・谷河御陣」において忠節あり。
		(4)	永和1年7月日	和泉久頼軍忠状写	日向押領司文書5219／『南北朝遺文 九州編第5巻』P145	和泉又七郎久頼		和泉久頼、応安7年12月より「谷河御陳」に馳参り、数日在陣す。これについて「承了（花押影）」という今川了俊の証判有。
		(5)	永和3年4月日	広嶺某軍忠状	播磨広嶺胤忠所蔵文書7112／『南北朝遺文 九州編第7巻』P53	（広嶺某）		筑後川を渡り、「高良山・谷河・今福・土橋・山鹿御陣」に供奉す。「承了（花押）」という証判有。
		参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P327			谷川新三郎、「谷川城」に居住。
162	酒井田館（酒井田城）	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			酒井田河内守、「酒井田村」に居住す。
		参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P415、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			酒井田志摩守、「上妻酒井田」に居住す。
164	犬尾城（川崎城）	(1)	永和1年3月日	深堀時久軍忠状	深堀家文書347／『佐賀県史料集成 古文書編第4巻』P217、肥前深堀文書5391／『南北朝遺文 九州編第5巻』P206	深堀備前守時久		深堀時久、発向の御供をし、「筑後国河崎御陣」まで忠功したことを報告。これについて、「承了（花押）」という今川義範の証判有。
		参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P415、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			川崎出羽守宗門、「川崎」に居住。
172	蒲原館	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P415、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			蒲原氏、「蒲原」に居住。
173	吉田館	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P415、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			吉田氏、「吉田村」に居住。
175	馬場館（甘木館）	参考	慶長3年10月16日		家勤記得集（稲員家記録）抄録9／『久留米市史第7巻』P382			天正14年、薩摩の島津軍、「甘木館」を攻め破る。
176	城ノ尾城（長延城・萩尾城）	参考	天正14年		家勤記得集抄録9／『久留米市史 第7巻』P381			大友氏家臣稲員安守、「古賀館」を焼き、領中の被官を率いて「長延村西城」に立籠り、村中近里の野武士をもって、「城尾城」を守らせる。
177	山王山城（長延城・西城）	参考	天正14年7月1日		家勤記得集抄録9／『久留米市史 第7巻』P381			大友方、「長延村山王山・城尾の両所」に要害を修繕し、要害と成す。
		参考	天正14年		家勤記得集抄録9／『久留米市史 第7巻』P381			大友氏家臣稲員安守、「古賀館」を焼き、領中の被官を率いて「長延村西城」に立籠る。
179	古賀館	参考	天正14年		家勤記得集抄録9／『久留米市史 第7巻』P381			肥軍、「古賀館」を再三攻めるも、稲員安守これを追い払う。
		参考	天正14年		家勤記得集抄録9／『久留米市史 第7巻』P381			薩州大軍、「古賀館」に発向す。支持危うければ、「長延城」へ立籠るべきである。
		参考	天正14年		家勤記得集抄録9／『久留米市史 第7巻』P381			薩州大軍の「古賀館」へ発向するにより、稲員安守の妻女・老母ならびに一族の妻女等、西田主殿・福吉弥次郎を相副え、「古賀館」を忍び出る。
		参考	天正14年		家勤記得集抄録9／『久留米市史 第7巻』P381			大友氏家臣稲員安守、「古賀館」を焼き、領中の被官を率いて「長延村西城」に立籠る。
		参考	天正15年8月		家勤記得集抄録9／『久留米市史 第7巻』P384			筑紫広門、安守・安直の沈淪を憐愍して、「古賀村の田畠并びに旧館」を授け、家臣原五郎左衛門・嶋平右衛に命じて徭役を免許せしむ。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
181	川瀬城	参考		蒲池家系図并に由来等	蒲池玄造氏蔵本（蒲池家系図并に由来等）／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P42			蒲池家系図巻惣目録に「川瀬城主矢ヶ部山下系図」とみえる。
		参考		稲員家記	稲員文書／『柳川市史史料編3蒲池氏・田尻氏史料』P383			天正17年の筑後国検地に際して所管する村を書き上げる。この内、「川瀬村廿三町」とみえ、元は蒲池氏領であったこと、蒲池一族の矢賀部大学広恒が「川瀬村」において「館所」を構え、住居としたことなどを記す。
183	知徳城	参考		稲員家記	稲員文書／『柳川市史史料編3蒲池氏・田尻氏史料』P383			天正17年の筑後国検地に際して所管する村を書き上げる。この内、「知徳村三町」とみえる。もとは坂東寺領であったが後に一条和泉守が押領、「知徳山」に築城。
184	一條館	参考		稲員家記	稲員文書／『柳川市史史料編3蒲池氏・田尻氏史料』P383			天正17年の筑後国検地に際して所管する村を書き上げる。この内、「一條村十六町」とみえる。一條氏が住居としたことから「一條村」と呼び、「一條和泉守住居之館」が存在したことなどを記す。
188	溝口館（溝口城）	(1)	康永2年7月日	田原正曇代正堅軍忠状	入江文書8／『大分県史料10』第二部P355、大友家文書録67／『大分県史料31』第二部補遺（3）P63、入江文書226／『増補訂正編年大友史料6』P138、豊後入江文書1950／『南北朝遺文 九州編第2巻』P214	豊前蔵人三郎入道正曇代子息三郎入道正堅		田原正曇代正堅、自身の軍忠について証判を賜わり注進に預からんことを請う。5月6日、正曇代黒澤余三入道、「筑後河三瀬」を渡り、「凶徒等城郭」を焼き払う。また同月8日には、「同国溝口・禅院城合戦」で先駆けとして「彼城」を焼落とし、その際疵を被る。さらに菊池との合戦では、「竹井城」に馳せ参る。これについて、「承了、沙弥（花押）」という大友正全の証判有。
		(2)	正平6年10月18日	三池頼親軍忠状	三池文書／『大日本史料6編15』P469、肥後三池文書3218／『南北朝遺文 九州編第3巻』P227	（三池）藤原頼親	進上　御奉行所	三池頼親、征西府方による正平6年9月29日の肥後攻めに供奉、その後、「筑後国溝口城」まで供奉し、「瀬高上庄」に陣す。これについて「承了（花押）」という菊池武光の証判有。
		参考			大久保家賦18／『大分県史料35』第二部補遺（7）P245			永正9年秋、「筑後溝口之城」に出張す。永正11年、筑後牢人星野正実を棟梁として、「蒲池・三池・黒木」ら諸兵「溝口ノ城」に立て籠もる。
		(3)	（天文19年）4月9日	大友義鎮書状	田尻家文書59／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P132	（大友）義鎮	田尻伯耆守（親種）殿	大友義鎮、田尻伯耆守に対し、舎弟山城守が「溝口薩摩守在所」を打崩し、その後帰り際に「和仁・辺春・本吉」らと合戦に及びこれに勝利、無事（鷹尾城に）「着城」したことを賞し、親類被官衆の身勝手な働きを戒め、「当城」（鷹尾城）を油断なく守るよう命じる。
		(4)	（天文19年4月19日）	田尻親種合戦手負注文	田尻家文書60／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P132	（田尻親種）	（大友義鎮）	天文19年4月19日に起きた「溝口丹後守要害」と、「三池上総介在所」における合戦に関する親類并被官衆の手負注文。これについて、「（花押）」という大友義鎮の証判有。
		(5)	（天文19年）4月24日	大友義鎮感状	田尻家文書61／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P133	（大友）義鎮	田尻伯耆守（親種）殿	大友義鎮、天文19年4月19日の「溝口要害」・「三池」における田尻親種と親類被官衆の軍忠を賞し、近日豊後より頭人一両人を派遣することを伝える。
		(6)	（天文19年）4月24日	大友義鎮感状	福岡市博物館所蔵文書／『小郡市史５　中世・近世・近代』P287。福岡市博物館所蔵文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P292	（大友）義鎮	三原和泉入道（昌林）殿、豊饒美濃守（鑑述）殿	同月19日に西牟田名代田河中務丞が「溝口要害」から三池に移動した。
		(7)	（天文19年）5月22日	大友義鎮書状	広島大学所蔵蒲池文書1／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P1	（大友）義鎮	蒲池十郎殿	大友義鎮、蒲池十郎に去15日の（菊池氏との）合戦で蒲池鑑盛の手に属して討捕った敵の頸注文が届いたことを知らせ、「溝口要害」の切崩を促す。
		(8)	（天文19年）閏5月8日	大友義鎮感状	田尻家文書71／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P137	（大友）義鎮	田尻伯耆守（親種）殿	大友義鎮、田尻伯耆守に対し、「其国衆」と申談じ、「溝口要害」を早々に打崩すよう促す。
		(9)	（天文19年）閏5月20日	大友義鎮書状	小代文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P293	（大友）義鎮	小代（実忠）殿	大友義鎮、小代実忠に対し、「溝口要害」の落城後、筑後衆は大津山へ向かうこと、蒲池武蔵守・田尻伯耆守と入魂するよう命じる。
		(10)	（天文19年）閏5月26日	大友義鎮書状	田尻家文書72／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P137	（大友）義鎮	田尻伯耆守（親種）殿	大友義鎮、田尻伯耆守に対し、田尻伯耆守の軍労の結果、「溝口要害」が落去したことを賞すと共に、「三池」（三池城）を取詰めこれを打ち崩すよう促す。
		(11)	（天文19年）閏5月26日	大友義鎮書状	広島大学所蔵蒲池文書2／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P1	（大友）義鎮	蒲池十郎殿	大友義鎮、蒲池十郎に対して、「溝口要害」が蒲池十郎の軍労の結果、落去したことを賞すと共に、「三池」を打崩すよう促す。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
188	溝口館（溝口城）	参考		蒲池家系図并に由来等	蒲池玄造氏蔵本（蒲池家系図并に由来等）／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P42			蒲池家系図巻惣目録に「溝口館主横溝氏之事」とみえる。
196	本郷城	(1)	（天正12年）7月25日	戸次道雪・高橋紹運・朽網宗歴連署条書	広島大学所蔵蒲池文書22／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P7	（朽網）宗歴、（高橋）紹運、（戸	蒲池殿	戸次道雪・高橋紹運・朽網宗歴が連署して種々の条件を蒲池氏に提示した条書。その中に、「本吉廿七町五反分為打替」として「本郷村」を領有すること、とみえる。
197	禅院城	(1)	康永2年7月日	田原正曇代正堅軍忠状	入江文書8／『大分県史料10』第二部P355、大友家文書録67／『大分県史料31』第二部補遺（3）P63、入江文書226／『増補訂正編年大友史料6』P138、豊後入江文書1950／『南北朝遺文 九州編第2巻』P214	豊前蔵人三郎入道正曇代子息三郎入道正堅		田原正曇代正堅、自身の軍忠について証判を賜わり注進に預からんことを請う。5月6日、正曇代黒澤余三入道、「筑後河三瀬」を渡り、「凶徒等城郭」を焼き払う。また同月8日には、「同国溝口・禅院城合戦」で先駆けとして「彼城」を焼落とし、その際疵を被る。さらに菊池との合戦では、「竹井城」に馳せ参る。これについて、「承了、沙弥（花押）」という大友正全の証判有。
198	小田城	(1)	建武5年3月日	長野助豊軍忠状写	三根郷御代々御判物写／『長崎県史 史料編第1』P407、町人御判物帳／『長崎県史 史料編第1』P821、対馬宗家判物写1163／『南北朝遺文 九州編第1巻』P352	（長野）中原助豊	進上 御奉行所	長野助豊、武藤資時・菊池武重以下凶徒ら、筑後へ打出により、今月1日御手に属し、「小田瀬口石垣山合戦」において戦功を挙げたことを報告。これについて、「承畢、大宰少弐御判」という少弐頼尚の証判有。
		(2)	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P328			溝口常陸介、「下妻小田城」に居住。
200	瀬高城（瀬高庄城）	(1)	建武5年10月21日	深堀時定注進状	肥前深堀文書1267／『南北朝遺文 九州編第1巻』P385	（深堀）平時定	進上 御奉行所	「筑後国瀬高御在庄」の時、10月20日「御番」を勤仕したことを報告。これについて、「承候了（花押）」という今川頼貞（ヵ）の証判有。
		(2)	建武5年10月27日	深堀時定注進状	肥前深堀文書1269／『南北朝遺文 九州編第1巻』P385	（深堀）平時定	進上 御奉行所	「筑後国瀬高御在庄」の時、10月20日「御番」を勤仕したことを報告。これについて、「承候了（花押）」という今川頼貞（ヵ）の証判有。
		(3)	建武5年11月1日	石動資成軍忠状写	北肥戦誌1272／『南北朝遺文 九州編第1巻』P387	（石動）菅原資成	進上 御奉行所	肥前国人石動資成、最前に馳参り、「瀬高御在庄」の間、宿直警固をし、その後「高良山」御座から帰陣までの間、御供したことを報告。
		(4)	建武5年11月3日	深堀時定注進状	肥前深堀文書1274／『南北朝遺文 九州編第1巻』P386	（深堀）平時定	進上 御奉行所	「瀬高上庄并高良山」において宿直警固を勤める。これについて、「承了（花押）」という一色範氏（道猷）の証判有。
		(5)	永和2年3月日	毛利元春軍忠状案	毛利家文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P283、毛利家文書221／『増補訂正編年大友史料8』P141、毛利家文書5282／『南北朝遺文 九州編第5巻』P165	毛利右馬頭元春		応安7年11月17日、「高武礼・黒木」攻めに供奉。また、応安8年9月8日には「瀬高・蒲池・酒見」まで御供す。これについて、「承候了、在御判」という今川了俊のものと推測される証判有。
		(6)	康永1年8月日	志賀頼房軍忠状	肥後志賀文書1846／『南北朝遺文 九州編第2巻』P180、大友家文書録52／『大分県史料31』第二部補遺（3）P53、大友家文書録198／『増補訂正編年大友史料6』P121	（志賀）源頼房	進上 御奉行所	志賀頼房、建武5年8月より在津警固の時、凶徒ら蜂起に伴い9月11日に発向、御供として「瀬高」に御座。その後、同10月には「少寒水山并畑城」における合戦の際、今河六郎の御手に属して軍忠す。これらについて、「承了（花押）」という一色範氏（道猷）の証判有。
		(7)	貞和5年6月日	荒木家有軍忠状	筑後近藤文書2597／『南北朝遺文 九州編第3巻』P58	（荒木）藤原家有	進上 御奉行所	荒木家有、「筑後国白氣原・善導寺・牧村・石垣寺・荒木・瀬戸嶋・瀬高庄」などで毎夜宿直警固。
		(8)	正平6年10月18日	三池頼親軍忠状	三池文書／『大日本史料6編15』P469、肥後三池文書3218／『南北朝遺文 九州編第3巻』P227	（三池）藤原頼親	進上 御奉行所	三池頼親、征西府方による正平6年9月29日の肥後攻めに供奉、その後、「筑後国溝口城」まで供奉し、「瀬高上庄」に陣す。これについて「承了（花押）」という菊池武光の証判有。
		(9)	観応3年12月日	伊東氏祐軍忠状写	日向伊東家古文状3507／『南北朝遺文 九州編第3巻』P309	伊東大和守氏祐		観応1年8月、「筑後川瀬高御陣」に参り忠節したことなどについて、「（花押影）」という足利直冬の証判有。
203	濱田城	参考	天文17年から天正11年の間と思われる。	田尻鑑種本領村数等覚書	田尻家文書209／『佐賀県史料集成 古文書編第7巻』P254、田尻家文書209／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P194			田尻鑑種の本領覚書のなかに「浜田城番　田尻大蔵」とみえる。
204	堀切城	参考	天文17年から天正11年の間と思われる。	田尻鑑種本領村数等覚書	田尻家文書209／『佐賀県史料集成 古文書編第7巻』P254、田尻家文書209／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P194			田尻鑑種の本領覚書のなかに「堀切城番　福山将監」とみえる。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
204	堀切城	(1)	（天正13年）9月19日	伊集院忠棟書状	広島大学所蔵蒲池文書34／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P11	（伊集院）忠棟	蒲池鎮運	伊集院忠棟、蒲池鎮連に対し、筑後事について、既に「堀切城」を攻落としたこと、「江浦」城も三日中には落城させる見込みである旨を伝える。『柳川市史 史料編3』所載の「関係地名現在地一覧」によると堀切は現在の福岡県山門郡（現在のみやま市）瀬高町河内。
		(2)	天正13年9月29日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P377			上井覚兼、「山下」に御番衆を置くことや、「江之浦・堀切」のことなどを指示。
		参考	天正13年		旧典類聚／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P379			島津勢、堀切・江浦両城を攻落とす。
205	萱津城	(1)	康永2年7月4日	荒木家有軍忠状	荒木近藤文書18／『久留米市史 第7巻』P176	（荒木）藤原家有	進上 御奉行所	荒木家有、凶徒らの筑後国「竹井萱津城」に立て籠もるにより、荒木次郎入道女子代子息として、守護御手に属して夜詰番役を勤めたことを報告。これについて、「承了（花押）」という証判有。
		(2)	康永2年7月4日	荒木家有軍忠状写	荒木家文書／『太宰管内志（中）』P262	（荒木）藤原家有	（進上 御奉行所）	荒木家有、凶徒らの筑後国「竹井萱津ノ城」に立て籠もるにより、荒木次郎入道女子代子息として、守護御手に属して夜詰を勤めたことを報告し、披露を請う。
206	竹井城	(1)	康永2年7月3日	龍造寺家政軍忠状	龍造寺家文書29／『佐賀県史料集成 古文書編第3巻』P26、肥前龍造寺文書1936／『南北朝遺文 九州編第2巻』P210	（龍造寺）藤原家政	進上 御奉行所	龍造寺家政、「筑後国竹井城南大手城戸口」の警固を命じられ、これを勤仕したことを報告。これについて、「承了（花押）」という証判有。
		(2)	康永2年7月4日	荒木家有軍忠状	筑後近藤文書1937／『南北朝遺文 九州編第2巻』P210	（荒木）藤原家有	進上 御奉行所	荒木家有、凶徒ら「筑後国竹井萱津城」に立て籠もるの間、守護の手に属し、度々「夜詰番役」を勤仕した旨を報告。
		(3)	康永2年7月5日	龍造寺家平軍忠状	龍造寺文書／『大日本史料6編7』P642、龍造寺文書227／『増補訂正編年大友史料6』P139、肥前龍造寺文書1938／『南北朝遺文 九州編第2巻』P211	（龍造寺）藤原家平	進上 御奉行所	龍造寺家平、中院侍従家・菊池対馬守以下凶徒の楯籠もる「筑後国竹井城」に発向。5月5日より御供、同15日、同月晦日の合戦で軍忠を遂げ、7月2日夜、「城郭」没落の際に軍功をあげたことを注進。これについて、「承了（花押）」という一色道猷の証判有。
		(4)	康永2年7月5日	大友氏泰書状写	田原文書228／『増補訂正編年大友史料6』P139、豊後草野文書1939／『南北朝遺文 九州編第2巻』P211	（大友）氏泰	（田原）豊前六郎蔵人（貞広）殿	大友氏泰、田原貞広に対し、「竹井城」没落を慶ぶと同時に、肥後への発向を促し、軍忠については京都に注進すべきことを伝える。
		(5)	康永2年7月5日	佐志披軍忠状	白井文書／『大日本史料6編7』P643	（佐志）源披	進上 御奉行所	佐志披、中院侍従家・菊池対馬守以下凶徒の楯籠もる「筑後国竹井城」に発向し、5月14日から「当城」の没落する7月3日まで昼夜警固し、なかんずく5月晦日には合戦で軍忠を遂げたことを注進。これについて、「承了（花押）」という一色道猷の証判有。
		(6)	康永2年7月5日	龍造寺家平軍忠状	龍造寺家文書78／『佐賀県史料集成 古文書編第3巻』P50	（龍造寺）藤原家平	進上 御奉行所	龍造寺家政、中院侍従家・菊池五郎武茂・大城藤次以下凶徒の「筑後国竹井城」への発向、7月2日夜に竹井城を没落する際に軍功をあげる。これについて、「承了（花押）」という一色道猷の証判有。
		(7)	康永2年7月6日	武雄社大宮司代藤原通厚軍忠状	武雄神社文書147／『佐賀県史料集成 古文書編第2巻』P152、肥前武雄神社文書1940／『南北朝遺文 九州編第2巻』P211	大宮司代通厚上	進上 御奉行所	藤原通厚、「筑後国竹井城」の凶徒退治における軍功を報告。これについて、「承了（花押）」という一色道猷の証判有。
		(8)	康永2年7月7日	大島聞軍忠状	来島文書／『大日本史料6編7』P647、肥前来島文書1941／『南北朝遺文 九州編第2巻』P212	（大島）源聞	進上 御奉行所	大島聞、「筑後国竹井城」の凶徒退治における軍功を報告。これについて、「承了（花押）」という一色道猷の証判有。
		(9)	康永2年7月7日	吉永正軍忠状	吉永文書／『大日本史料6編7』P648	（吉永）源正	進上 御奉行所	吉永正、筑後国竹井城に楯籠もる中院侍従家・菊池対馬守武茂以下の凶徒退治のため、発向し、戦功を挙げたことを報告。これについて、「承了（花押）」という一色道猷の証判有。
		(10)	康永2年7月23日	今村高弘軍忠状	肥前南里文書1943／『南北朝遺文 九州編第2巻』P212	（今村）豊嶋高弘	進上 御奉行所	今村高弘、大将軍の「筑後国竹井城御発向」に伴い、「大手矢倉番役」を三日三夜勤仕したことを報告。これについて、「承了（花押）」という証判有。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
206	竹井城	(11)	康永2年7月25日	山代遶軍忠状	松浦山代家文書60／『佐賀県史料集成 古文書編第15巻』P43、肥前山代文書1944／『南北朝遺文 九州編第2巻』P212	(山代) 源遶	進上 御奉行所	山代遶、筑後国竹井城に楯籠もる中院侍従家・菊池対馬守武茂以下の凶徒退治のため、発向し、戦功を挙げたことを報告。これについて、「承了（花押）」という一色道猷の証判有。
		(12)	康永2年7月25日	斑嶋淳軍忠状	斑嶋文書12／『佐賀県史料集成 古文書編第19巻』P199、肥前斑島文書1945／『南北朝遺文 九州編第2巻』P212	(斑嶋) 源淳	進上 御奉行所	斑嶋淳、中院侍従家・菊池五郎・大城藤次以下の凶徒が立て籠もる筑後国竹井城に発向し、軍忠をあげる。これについて、「承了（花押）」という一色道猷の証判有。
		(13)	康永2年7月日	佐志披軍忠状	斑嶋文書44／『佐賀県史料集成 古文書編第19巻』P214、肥前斑島文書1948／『南北朝遺文 九州編第2巻』P212	(佐志) 源披	進上 御奉行所	佐志披、中院侍従家・菊池五郎・大城藤次以下の凶徒が立て籠もる筑後国竹井城に発向し、5月14日から竹井城が落城する8月3日までの間、昼夜警固したことを伝える。これについて、「承了（花押）」という一色道猷の証判有。
		(14)	康永2年7月日	松浦定申状案	肥前斑島文書1947／『南北朝遺文 九州編第2巻』P212	松浦肥前守（峯貞）	進上 御奉行所	松浦定、中院侍従家・菊池五郎・大城藤次以下の凶徒が立て籠もる「筑後国竹井城城郭」において合戦。
		(15)	康永2年7月日	源正軍忠状写	肥前斑島文書1947／『南北朝遺文 九州編第2巻』P212	源正	進上 御奉行所	佐志披、中院侍従家・菊池五郎・大城藤次以下の凶徒が立て籠もる筑後国竹井城に発向し、5月14日から竹井城が落城する8月3日までの間、昼夜警固したことを伝える。これについて、「承了（花押影）」という一色道猷の証判有。
		(16)	康永2年7月日	佐志披軍忠状	白井文書4／『佐賀県史料集成 古文書編第19巻』P225	(佐志) 源披		佐志披、中院侍従家・菊池対馬守以下の凶徒が立て籠もる筑後国竹井城に発向し、5月晦日や7月3日に「当城」没落に至るまで宿直を警固したことを注進。これについて、「承了（花押）」という一色道猷の証判有。
		(17)	康永2年7月日	田原正曇代正堅軍忠状	入江文書8／『大分県史料10』第二部P355、大友家文書録67／『大分県史料31』第二部補遺（3）P63、入江文書226／『増補訂正編年大友史料6』P138、豊後入江文書1950／『南北朝遺文 九州編第2巻』P214	豊前蔵人三郎入道正曇代子息三郎入道正堅		田原正曇代正堅、自身の軍忠について証判を賜わり注進に預からんことを請う。5月6日、正曇代黒澤余三入道、「筑後河三瀬」を渡り、「凶徒等城郭」を焼き払う。また同月8日には、「同国溝口・禅院城合戦」で先駆けとして「彼城」を焼落とし、その際疵を被る。さらに菊地との合戦では、「竹井城」に馳せ参る。これについて、「承了、沙弥（花押）」という大友正全の証判有。
		(18)	康永2年8月10日	深堀政綱軍忠状写	深堀記録証文／『大日本史料6編7』P648、肥前深堀文書1953／『南北朝遺文 九州編第2巻』P215	(深堀) 平政綱	進上 御奉行所	深堀政綱、中院侍従・菊池五郎・大島藤次以下の凶徒が立て籠もる「筑後国竹井城」に発向し、五月十四日から竹井城が落城する七月三日までの間、昼夜警固したことを伝える。これについて、一色道猷が証判を据えている。
		(19)	康永2年12月2日	大蔵種貞軍忠状	由比文書3／『西国武士団関係史料集１４』P53、筑前重富文書1976／『南北朝遺文 九州編第2巻』P223	大蔵種貞	進上 御奉行所	中院義定・菊池武茂以下の凶徒が立て籠もる筑後国竹井城に発向した。
213	津留城	参考	天文17年から天正11年の間と思われる。	田尻鑑種本領村数等覚書	田尻家文書209／『佐賀県史料集成 古文書編第7巻』P254、田尻家文書209／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P194			田尻鑑種の本領覚書のなかに「津留城番　田尻石見守」とみえる。
214	蒲船津城	(1)	天正10年4月	綾部氏軍功覚書案	綾部家文書2／『佐賀県史料集成 古文書編第21巻』P30			「筑後蒲船津之城主」蒲地益種、龍造寺隆信に背く。
219	佐留垣城	(1)	（天正9年）6月12日	小代親伝書状	龍造寺文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P344	(小代) 親伝	龍造寺殿	小代親伝、龍造寺隆信に対し、「佐良垣村」に楯籠っていた蒲池鎮並の残党をすぐに討ち果たしたことを賞す。
220	今福城	(1)	永和3年4月日	広嶺某軍忠状	播磨広嶺胤忠所蔵文書7112／『南北朝遺文 九州編第7巻』P53	(広嶺某)		筑後川を渡り、「高良山・谷河・今福・土橋・山鹿御陣」に供奉す。「承了（花押）」という証判有。
		(2)	（天文19年7月23日）	田尻親種討死手負注文	田尻家文書77／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P139	(田尻親種)	(大友義鎮)	田尻親種が提出した、天文19年7月23日、「三池郡今福合戦」における親種被官の討死手負注文。これについて、「令一見訖（花押）」という大友義鎮の証判有。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
220	今福城	(3)	（天文19年7月23日）	田尻親種分捕高名注文	田尻家文書78／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P140	（田尻親種）	（大友義鎮）	田尻親種が提出した、天文19年7月23日、「三池郡今福合戦」において分捕った「小山山城・同対馬勢」の分捕高名注文。これについて、「令一見訖（花押）」という大友義鎮の証判有。
		(4)	（天文19年）7月28日	大友義鎮感状	田尻家文書76／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P139	（大友）義鎮	田尻伯耆守（親種）殿	大友義鎮、「三池郡今福・新開陣所」における戦功を賞し、これに合わせて「親員居城之事」（三池親員、三池城）と「大津山以下」討伐に関する状況を問う。
221	飛塚城（田尻城）	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史			田尻左京、「飛塚」に居住。
228	甘木城	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史			甘木紀伊守、「甘木村」に居住。
229	大間城（三池氏館）	(1)	貞和4年4月19日	一色直氏軍勢催促状	肥前深堀文書2465／『南北朝遺文 九州編第3巻』P13、深堀記録証文／『大日本史料6編11』P511	（一色）宮内少輔（直氏）	深堀三郎五郎（時明）殿	一色直氏、筑後国の凶徒ら、今月16日に「□〔三〕池城」で合戦し、博多に寄来たる旨を聞き、深堀氏に軍忠を求める。
		(2)	（年未詳）11月21日	大友政親書状	小田原文書1／『大分県史料10』第二部P15	（大友）政親	田原殿	「三池城」攻めに関して、日田六郎を差遣わしたことなどを伝える。
		(3)	（天文19年4月19日）	田尻親種合戦手負注文	田尻家文書60／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P132	（田尻親種）	（大友義鎮）	天文19年4月19日に起きた「溝口丹後守要害」と、「三池上総介在所」における合戦に関する親類并被官衆の手負注文。これについて、「（花押）」という大友義鎮の証判有。
		(4)	（天文19年）4月24日	大友義鎮感状	田尻家文書61／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P133	（大友）義鎮	田尻伯耆守（親種）殿	大友義鎮、天文19年4月19日の「溝口要害」・「三池」における田尻親種と親類被官衆の軍忠を賞し、近日豊後より頭人一両人を派遣することを伝える。
		(5)	（天文19年）4月24日	大友義鎮感状	福岡市博物館所蔵文書／『小郡市史５ 中世・近世・近代』P287	（大友）義鎮	三原和泉入道（昌林）殿、豊饒美濃守（鑑述）殿	同月19日に西牟田名代田河中務丞が「溝口要害」から三池に移動した。
		(6)	（天文19年）閏5月26日	大友義鎮書状	田尻家文書72／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P137	（大友）義鎮	田尻伯耆守（親種）殿	大友義鎮、田尻伯耆守に対し、田尻伯耆守の軍労の結果、「溝口要害」が落去したことを賞すと共に、「三池」（三池城）を取詰めこれを打ち崩すよう促す。
		(7)	（天文19年）閏5月26日	大友義鎮書状	広島大学所蔵蒲池文書2／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P1	（大友）義鎮	蒲池十郎殿	大友義鎮、蒲池十郎に「溝口要害」に関して軍労の結果、落去したことを賞すと共に、「三池」を打崩すよう指示。
		(8)	（天文19年ヵ）6月25日	信圓書状	田尻家文書73／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P138	信圓	（田尻）親種	信圓、田尻親種に対し、近日「三池」へ出兵する際の祈祷を吉日に行うことを伝え、社領については配慮に謝意を示す。
		(9)	（天文19年）7月28日	大友義鎮感状	田尻家文書76／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P139	（大友）義鎮	田尻伯耆守（親種）殿	大友義鎮、「三池郡今福・新開陣所」における戦功を賞し、これに合わせて「親員居城之事」（三池親員、三池城）と「大津山以下」討伐に関する状況を問う。
		参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P415、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史			三池弾正少弼、「三池」に居住す。
		(10)	天正6年11月11日	勝部兵右衛門聞書	薩藩旧記雑録／『柳川市史史 料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P319			「三池屋敷の本口」にて山田新介・比志島宮内少輔・鎌田出雲守らが合戦。
		(11)	（天正13年）閏8月26日	大友義統感状写	蒲池敬造家文書（感状其外書付之写）2／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』	（大友）義統	蒲池兵庫頭殿	大友義統、蒲池兵庫頭に対し、「三池表」への肥前悪党の侵入に際し、鎮運が駆けつけ合戦、即時に追い崩したこと、またその際に家中の衆に数人の戦死者が出たことを称える。
230	三池山城（今山城）	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P327			三池上総介、「三池今山城」に居住。

＜近世城館＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
K1	松崎陣屋	(1)	寛文9年7月28日		古代日記書抜／『福岡県史　近世史料編　久留米藩初期（下）』P102			有馬豊範を分封して松崎藩が成立するにあたり、岩田村東陣屋の候補地を家老兼御井・御原郡代の有馬正盛らが見分する。
		(2)	寛文11年5月9日		古代日記書抜／『福岡県史　近世史料編　久留米藩初期（下）』P118			松崎陣屋の建設は江戸からの指図の上、取りかかること、町場縄張はただ今から始めることが命じられる。
K2	赤司城	(1)	暦応3年10月13日	今村高広軍忠状	肥前南里文書64／『久留米市史 第7巻』P520、肥前南里文書1584／『南北朝遺文 九州編第2巻』P89	（今村孫三郎高広）		今村高広、筑後凶徒退治のため、一色道猷去7月29日発向の間、豊福原・竹野以下所々で軍忠す。また、9月24日には、一色氏に属して、「赤司城」の宿直警護をしたことを報告。これについて、「承了（花押）」という佐竹義尚の証判有。
		(2)	暦応3年10月19日	武雄社女大宮司代藤原通幸着到状	武雄神社文書145／『佐賀県史料集成 古文書編第2巻』P151、肥前武雄神社文書65／『久留米市史第7巻』P520、肥前武雄神社文書1585／『南北朝遺文 九州編第2巻』P89	藤原通幸上	進上 御奉行所	藤原通幸、同9月23日、今河六郎の御手に属すよう命じられ、その後御共し、「赤司城」において宿直警固したことを報告。これについて、「承了（花押）」という一色道猷の証判有。
		(3)	暦応3年10月日	後藤遠明着到状	武雄鍋島家文書7／『佐賀県史料集成 古文書編第6巻』P5	（後藤）藤原遠明	進上 御奉行所	後藤遠明、「赤司城」に着到し、宿直警固していることを報告。これについて、「承了（花押）」という証判有。
		(4)	暦応3年10月日	武雄社女大宮司代藤原通幸	武雄神社文書144／『佐賀県史料集成 古文書編第2巻』P151	藤原通幸	進上 御奉行所	藤原通幸、「赤司城」に着到し、警固したことを報告。これについて、「承了（花押）」という証判有。
		(5)	暦応3年11月5日	一色道猷（範氏）感状	武雄神社文書146／『佐賀県史料集成 古文書編第2巻』P152	沙弥（一色道猷）	後藤武雄大宮司代	一色道猷が、新田遠江禅師・宮城籐次ら凶徒退治に関して、「筑後国赤自」（赤司）に要害を構え、合戦したときの後藤武雄大宮司の戦功を称えたもの。
		参考	元亀元年		豊前覚書抄録8／『久留米市史 第7巻』P365			戸次鑑連、といもと村から赤司城へと移る。
		(6)	（天正13年）7月29日	戸次道雪書状	薦野文書／『小郡市史５　中世・近世・近代』P383	（戸次）道雪	（薦野）増時	北野・赤司の両城が大友方の手に落ちたことを報じる。
		(7)	（年未詳）□□13日	大友義鎮書状	草野文書54／『久留米市史 第7巻』P140	（大友）義鎮	草野中務太輔（鑑員）殿	大友義鎮、「□〔赤〕司之事」について、豊饒□〔孫〕三郎が「□〔在〕城」していることに関して、草野鑑員へ連絡。
		(8)	慶長7年7月25日		慶長7年台所入之掟／『柳川の歴史3 田中吉政・忠政』P310	（田中）吉政	友田勝右衛門殿、田中勘右衛門殿	城の普請・作事などについて連絡したもの。「一、やな川・くるめ・城嶋・福嶋・くろ木・赤司・ゑのきつ・江浦八ツの諸城」とみえる。
K3	久留米城	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P327			丹波良寛、「久留米」に居住。
		(1)	（年未詳）4月19日	鍋島信生書状	高良山文書（座主麟圭宛関係文書）14／『久留米市史 第7巻』P107	（鍋島）信生	麟圭公	鍋島信生、麟圭に（久留米）城外での戦いは、見合わせが必要であることを伝える。
		参考	（天正15年）		神代弥左衛門遺戒書12／『久留米市史 第7巻』P399			豊臣秀吉、「くるめ御城」を小早川秀包に遣わす。
		参考	（天正15年）		神代弥左衛門遺戒書12／『久留米市史 第7巻』P400			小早川秀包、「くるめ御城」に入城す。
		参考	天正15年6月7日		家勤記得集抄録9／『久留米市史 第7巻』P384			豊臣秀吉、「御井郡・御原郡・三潴郡の内、大善寺より北」を小早川藤四郎秀包に賜いて、「久留米城」を守らせる。これにより、小早川秀包「久留米侍従」と号す。なお、『久留米市史 第7巻』は、小早川秀包の所領に関して検討を要する、としている。
		参考	天正18年9月14日	1590年度日本年報	16・17世紀イエズス会日本報告集／『山口県史史料編中世1』P1072	（ルイス・フロイス）	（イエズス会総長）	盲人ダミアン、「筑後の国の久留米城」を通過しようとする。
		参考	天正19年		秀包記抄／『久留米市史 第7巻』P629			小早川秀包、「久留米ノ城」に御座の間、高良山座主丹波麟圭出仕せず。
		参考	天正19年		秀包記抄／『久留米市史 第7巻』P629			麟圭妻の妹、小早川秀包家臣林次郎兵衛の妻となる。以後、麟圭、「久留米城」へ出仕す。
		参考	慶長5年		毛利伊豆書上／『久留米市史 第7巻』P644			小早川秀包、「久留米在城」のところ、大坂物騒につき、大坂へ上る。
		参考	慶長5年		『黒田家譜』巻之13／『久留米市史 第7巻』P646			黒田如水、「筑後国久留米の城」へ押し寄せんがため、先使を立たる。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
K3	久留米城	参考	慶長5年		秀包記抄／『久留米市史 第7巻』P647			「久留米城」には小早川秀包の妻子などがいる。
		(2)	慶長7年7月25日		慶長7年台所入之掟／『柳川の歴史3 田中吉政・忠政』P310	(田中) 吉政	友田勝右衛門殿、田中勘右衛門殿	城の普請・作事などについて連絡したもの。「一、やな川・くるめ・城嶋・福嶋・くろ木・赤司・ゑのきつ・江浦八ツの諸城」とみえる。
K4	城島城	(1)	慶長7年7月25日		慶長7年台所入之掟／『柳川の歴史3 田中吉政・忠政』P310	(田中) 吉政	友田勝右衛門殿、田中勘右衛門殿	城の普請・作事などについて連絡したもの。「一、やな川・くるめ・城嶋・福嶋・くろ木・赤司・ゑのきつ・江浦八ツの諸城」とみえる。
K5	榎津城	(1)	(元亀1年) 5月26日	大友宗麟書状	広島大学所蔵蒲池文書4／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P2	(大友) 宗麟	蒲池勘解由使(鑑広) 殿	大友宗麟、肥前水貝攻略について、海上が第一であるので早々に帰陣し、「榎津」に在陣し向かい側を調略するよう蒲池勘解由使に命じる。
		(2)	慶長7年7月25日		慶長7年台所入之掟／『柳川の歴史3 田中吉政・忠政』P310	(田中) 吉政	友田勝右衛門殿、田中勘右衛門殿	城の普請・作事などについて連絡したもの。「一、やな川・くるめ・城嶋・福嶋・くろ木・赤司・ゑのきつ・江浦八ツの諸城」とみえる。
K6	福島城	参考	天正15年7月6日		家勤記得集抄録9／『久留米市史 第7巻』P384			豊臣秀吉、筑紫広門に上妻郡を賜い、「福島」に居らしむ。
		(1)	慶長7年7月25日		慶長7年台所入之掟／『柳川の歴史3 田中吉政・忠政』P310	(田中) 吉政	友田勝右衛門殿、田中勘右衛門殿	城の普請・作事などについて連絡したもの。「一、やな川・くるめ・城嶋・福嶋・くろ木・赤司・ゑのきつ・江浦八ツの諸城」とみえる。
K7	松延城	(1)	天正12年11月4日	大友義統袖判合戦頸注文	蒲池玄造氏蔵本（肥後蒲池文書）12／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P34	(大友義統)	(蒲池兵庫守鎮運)	天正12年11月4日、肥前の悪党と「山門郡松延村」において合戦した際の討捕った頸の注文。
		(2)	(天正12年11月4日)	大友義統袖判合戦頸手負注文	大友家文書録1991／『大分県史料33』第二部補遺(5) P177	(大友義統)		天正12年11月4日、肥前の悪党が「松延」に取出した際、「溝口掃部頭手之衆」に属して合戦した際の注文。
		(3)	(天正12年) 11月5日	蒲池鎮運知行宛行状	大木（守）文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P373	(蒲池) 鎮運	河野縫殿助殿	「松延表」において防戦した際の軍忠を賞し、領地2町を宛行う。
K8	鷹尾城（高尾城）	(1)	(天文4年頃ヵ) 7月11日	入田親廉書状	田尻家文書42／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P108	(入田) 親廉	田尻伯耆守(親種) 殿	入田親連、田尻伯耆守の忠義によって「鷹尾村」拝領の上意を受けたことを祝すと共に祝儀を贈られたことを謝す。
		(2)	(天正15年) 8月14日	立花統虎知行預置状	米多比文書（1）32／『西国武士団関係史料集19』P40	(立花) 統虎	三左衛門尉殿	立花統虎が筑後を拝領するに当たって、立花三左衛門尉は鷹尾城在番を命じられ、城料105町を預け置かれた。
		(3)	(天文17年ヵ) 9月3日	大友義鑑書状	田尻家文書49／『佐賀県史料集成 古文書編第7巻』P92、田尻家文書49／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P128	(大友) 義鑑	田尻伯耆守(親種) 殿	大友義鑑、田尻親種に、「覚悟之要害」の水手損傷に伴う「領内高尾」への新城移築の申請を認めることを伝える。なお、『柳川市史 史料編3』は本文書の年次を天文4年頃ヵとする。
		(4)	(天文17年ヵ) 9月10日	小田部鑑□副状	田尻家文書50／『佐賀県史料集成 古文書編第7巻』P93、田尻家文書50／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P128	(小田部) 鑑	田尻殿	小田部鑑□、田尻親種の申請した「新城之儀」について披露したこと、これについて御書をもって新城築城の許可が仰出されたことへの祝意を伝える。なお、『柳川市史 史料編3』は本文書を天文4年頃ヵとする。
		(5)	(天文17年ヵ) 12月5日	小田部鑑□奉書	田尻家文書51／『佐賀県史料集成 古文書編第7巻』P93、田尻家文書51／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P128	(小田部) 鑑	田尻殿	小田部鑑□、田尻親種に対し、「鷹尾村要害」について移築が認められたことを慶ぶ。なお、『柳川市史 史料編3』は本文書を天文4年頃ヵとする。
		(6)	(天文17年ヵ) 12月15日	大友義鑑書状	田尻家文書52／『佐賀県史料集成 古文書編第7巻』P94、田尻家文書52／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P129	(大友) 義鑑	田尻伯耆守(親種) 殿	大友義鑑、田尻親種の「鷹尾要害」築城について祝意を伝え、祝儀として嶋織物二端を送る。なお、『柳川市史 史料編3』は本文書を天文4年頃ヵとする。
		(7)	(天文17年ヵ) 12月21日	入田親廉副状	田尻家文書53／『佐賀県史料集成 古文書編第7巻』P95、田尻家文書53／『柳川市史 史料編 蒲池氏・田尻氏史料』P129	(入田) 親廉	田尻伯耆守(親種) 殿	入田親廉、田尻親種による「御領内高尾」要害築城に関して、当主大友義鑑の祝意を伝える。また、鷹尾城は優れた場所柄であるから、城の誘えなどは油断なくおこなうよう伝える。なお、『柳川市史 史料編3』は本文書を天文4年頃ヵとする。
		(8)	(天文19年) 4月7日	大友義鎮書状	田尻家文書58／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P131	(大友) 義鎮	田尻伯耆守(親種) 殿	大友義鎮、田尻伯耆守に対し、三池・溝口が同心し西牟田などが蜂起し、「其方在所」（鷹尾城）を取り囲んだとしても、蒲池近江守と申談じ、「当城」（鷹尾城）を堅固に守り抜くよう命じる。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
K8	鷹尾城（高尾城）	(9)	（天文19年）4月9日	大友義鎮感状	田尻家文書59／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P132	（大友）義鎮	田尻伯耆守（親種）殿	大友義鎮、田尻伯耆守に対し、舎弟山城守が「溝口薩摩守在所」を打崩しと、帰り際に起きた「和仁・辺春・本吉」らと合戦に勝利し、無事（鷹尾城に）「着城」したことを賞し、親類被官衆の身勝手な働きを戒め、「当城」（鷹尾城）を油断なく守るよう命じる。
		(10)	（天文19年）4月24日	大友義鎮感状	田尻家文書62／『柳川市史 史料編 蒲池氏・田尻氏史料』P133	（大友）義鎮	田尻又三郎（鑑種）殿	大友義鎮、田尻又三郎に対し、三池上総介・溝口丹後守が西牟田と同心して寝返ったことに関して、「親父伯耆守」（田尻親種）と「鷹尾在城」し、数日防戦したことを賞し、「同城」を「父子一意」を以て忠節したことを讃える。
		(11)	（天文19年）5月7日	大友義鎮書状	田尻家文書63／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P134	（大友）義鎮	田尻伯耆守（親種）殿	大友義鎮、田尻伯耆守に対し、三池との「当城」（鷹尾城）での合戦において防戦し敵を撃退したことを賞し、肥後国小代を扶助すべきこと、肥後国の計略には油断なきよう注意すべきことを伝える。
		(12)	（天文19年）5月22日	大友義鎮書状	田尻家文書65／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P134	（大友）義鎮	田尻伯耆守（親種）殿	大友義鎮、田尻伯耆守に対し、「当城之事」（鷹尾城）での三池・大津山・辺春への昼夜の警戒を労う。
		(13)	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P327			田尻中務大輔、「山門高尾城」に居住す。
		(14)	（天正10年ヵ）11月20日	鍋島信生書状	鹿子木文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P350	（鍋島）信生	鹿子木殿	鍋島信生、「高尾表」（鷹尾城）攻略のため、「向城」を普請する。
		(15)	天正10年11月29日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P351			上井覚兼、田尻中務太輔より、龍造寺氏に対する「田尻籠城」に関して、「田尻住城」には兵粮等が来年秋まで、手火矢玉薬等は5～6年は持つ旨の書状が届いたことを記す。
		(16)	天正10年12月14日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P352			上井覚兼ら、「肥後表・有馬表・田尻殿籠城之体・阿蘇家和平」などについて評議す。
		(17)	（天正11年）7月19日	大友義統書状写	「古文書写」河原氏所蔵問註所文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』	（大友）義統	問註所刑部少輔殿	大友義統、問註所刑部少輔に対し、「田尻中務太輔要害」に肥筑悪党が攻めてきたが、これを防戦、勝利したことを注進す。また大友義統も「盛岡」まで出陣す。
		(18)	（天正11年ヵ）8月13日	龍造寺政家書状	横岳文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P360	龍（龍造寺）政家	（横岳）家実	龍造寺政家、横岳家実に対し、来る15日に出港するよう命じ、また、「江浦」は考えどおりに諸口を取り詰め、「鷹尾」の落城も時間の問題であることを伝える。
		(19)	天正11年9月7日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P361			島津氏の使者、坂上伊賀丞が上井覚兼の許をたずねる。「彼城」（鷹尾城）の兵粮、2･3か月では尽きそうにないこと、子息を島津方へ送り置くとの田尻氏の意志を伝える。
		(20)	天正11年12月10日	鍋嶋信生起請文	田尻家文書207／『佐賀県史料集成 古文書編第7巻』P252	鍋嶋飛騨守信生	田尻長松丸殿参	鍋嶋信生、田尻長松丸の近日「鷹尾城」の築地を破却し、「鷹尾城」を渡すことを条件に、田尻長松丸の所領を進め置く旨の起請文を発給。
		(21)	天正11年12月10日	龍造寺氏老臣連署起請文	田尻家文書208／『佐賀県史料集成 古文書編第7巻』P253	小河武蔵守信實、土肥出雲守信安、納富能登守家理	田尻長松丸殿	龍造寺氏家臣、田尻長松丸の近日「鷹尾城」の築地を破却し、「鷹尾城」を渡すことを条件に、田尻長松丸の所領を進め置く旨の起請文を発給。
		(22)	（天正11年）12月26日	大友義統書状	五條家文書215／『史料纂集 五條家文書』P152、五條家文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P365	（大友）義統	五條（鎮定）殿	大友義統、鷹尾城主田尻氏の龍造寺氏に内通するにより、「鷹尾要害」が敵に渡ることを懸念し、鷹尾城を攻める。
		(23)	（天正11年）12月28日	大友義統書状	田尻家文書213／『佐賀県史料集成 古文書編第7巻』P260。田尻家文書213／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P196	（大友）義統	朽網三河入道殿	大友義統、朽網氏に対し、田尻中務大輔の（鷹尾城）「下城」について伝える。また、「鷹尾之儀」についても連絡。
		(24)	天正11年閏1月28日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P354			上井覚兼、田尻氏に遣わしていた柏原左近将監が帰還したことを受け、「彼籠城之体」（鷹尾城籠城）など田尻・龍造寺氏の情勢を聞く。
		(25)	天文17年から天正11年の間と思われる。	田尻鑑種本領村数等覚書	田尻家文書209／『佐賀県史料集成 古文書編第7巻』P254、田尻家文書209／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P194			田尻鑑種の本領覚書のなかに「本城鷹尾村」とみえる。
		(26)		蒲池家由来ノ事	蒲池玄造氏蔵本（蒲池家系図并に由来等）／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P45			鎮漣の母は田尻鎮種の城である「高尾ノ城」に落ち行くとある。
		(27)	永禄7年		陰徳太平記・西国太平記／『太宰管内志』P24			蒲地弘高、大友氏の命に従わず、高尾城に立て籠もる。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所蔵活字文献	差出	宛先	内容
K8	鷹尾城（高尾城）	(28)	天正12年10月7日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P372			田尻氏、島津氏に使者を遣わす。現在、「高尾之城」に入部しているが、妻子が龍造寺の人質となっているため一途に奉公することが難しいこと、また、「江之浦」（江浦城）は龍造寺の手から離れ大友勢が居るが、その中には自分の内衆もいるため調略によって、「江之浦」は容易く攻略できること、を伝える。
		参考	天正12年		薦野家譜／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P373			大友勢、筑後へ侵攻。「山下の城」を攻める。蒲池志摩守、かねてより大友氏と内通により城を渡す。城には宗像掃部が入る。次いで下筑後へ打出。「高尾の城」を攻囲む。田尻鎮〔鑑〕種は「柳川の城」におり、家臣だけでは防ぎきれず鷹尾城落城す。柳川城は二方は海に、二方は沼掘縦横にして要害堅固の地であり、これを龍造寺家治〔晴〕が多勢にて守る。
K9	中島城	(1)	（天正15年）8月14日	立花統虎知行宛行状	米多比鎮人家文書／『大和町史 資料編』P661	立花統虎	（米多比）三左衛門尉	立花統虎、米多比三左衛門尉鎮久を中島城の勤番とし、城料として105町分をあたえる。
K10	柳川城（柳河城・梁河城）	参考	（天正6年3月2日）		天正6年筑後領主附15／『久留米市史 第7巻』P414、『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史			蒲地弾正、「柳川城」に居住。
		(1)	「天正8年」8月28日	龍造寺隆信書状写	薩藩旧記雑録／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P337	（龍造寺）隆信	伊集院右衛門大夫殿	龍造寺隆信、「築河要害」について、怜親類家中の者どもが「諸口」に取り詰め、落城は時間の問題であることを伝える。なお、年次は朱書。
		参考	天正8年	綾部氏軍功覚書案	綾部家文書2／『佐賀県史料集成 古文書編第21巻』P30			龍造寺氏家臣綾部氏、蒲地鎮並を柳川城に責む。龍造寺氏の軍勢は、龍造寺政家を大将に一万余騎。
		(2)	（天正9年）6月9日	大友義統書状	問註所文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P343、大友家文書録2045／『大分県史料33』第二部補遺（5）P205、大友家文書録2557／『大分県史料34』第二部補遺（6）P198	（大友）義統	問註所刑部太輔（統景）殿	大友義統、問註所統景に対し、蒲池鎮並の死亡や「築河」の落城と蒲池一族の没落を驚き、今後の情報収集と「当城」を持ちこたえることが重要である旨を伝える。
		(3)	（天正9年）6月14日	大友義統書状	問註所文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P344、問註所文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P344	（大友）義統	問註所刑部太輔（統景）殿	大友義統、問註所統景に対し、宗歴・宗傑の注進を見たこと、「築河表」が敵の地に落ちたことを驚く。
		参考	天正9年		日本史／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P342	ルイス・フロイス		龍造寺氏、蒲池鎮並とその一族を殺害した後、「蒲池殿の領地と諸城」を不意打ちする。
		参考		問註所家譜	問註所氏所蔵／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P346			伝わるに曰く、蒲池鎮並の子五郎三郎統虎、「柳川城」を守りて龍造寺隆信の軍を防ぐ。しかし、最終的には「城潰」す。統虎、生涯に及んだと偽り、「長岩」に逃れる。
		参考	天正10年4月	綾部氏軍功覚書案	綾部家文書2／『佐賀県史料集成 古文書編第21巻』P30			鍋島信生、柳川城に住す。
		(4)	（天正12年）4月16日	戸次道雪（鑑連）・高橋紹運連署書状	五條家文書261／『史料纂集 五條家文書』P188	（高橋）紹運（鎮種）、（戸次）道雪（鑑連）	（五條）鎮定老	大友氏家臣戸次道雪・高橋紹運、先々に「築川」を打崩さることを伝える。
		(5)	（天正12年）9月3日	戸次道雪書状写	薦野家譜／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P370	（戸次）道雪	（薦野）増時	柳川へ攻めかけられ、家治「籠城」す。
		参考	天正12年		薦野家譜／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P373			大友勢、筑後へ侵攻。「山下の城」を攻める。蒲池志摩守、かねてより大友氏と内通により城を渡す。城には宗像掃部が入る。次いで下筑後へ打出。「高尾の城」を攻囲む。田尻鎮〔鑑〕種は「柳川の城」におり、家臣だけでは防ぎきれず鷹尾城落城す。柳川城は二方は海に、二方は沼掘縦横にして要害堅固の地であり、これを龍造寺家治〔晴〕が多勢にて守る。
		(6)	（天正15年）4月26日	立花宗茂書状	五條家文書304／『史料纂集 五條家文書』P224	立花左近宗茂	矢部七郎左衛門尉（五條統康）殿	立花宗茂、五條統康に、自身の「当城」（柳川城）拝領を伝える。
		参考	天正15年6月7日		家勤記得集抄録9／『久留米市史 第7巻』P384			豊臣秀吉、「山門郡・下妻郡・三潴郡の内大善寺川より南」を立花統虎に賜い、「柳川城」を守らせる。これにより、立花統虎は「柳川侍従」と号す。
		(7)	（慶長5年）10月21日	黒田如水書状	古文書写7／『佐賀県史料集成 古文書編第21巻』P143	（黒田）如水軒圓清	鍋平五郎殿	黒田如水、鍋嶋平五郎の柳川における合戦での活躍を賞し、明日「其表」へ参ることを伝える。
		(8)	（慶長5年）10月晦日	鍋島直茂同勝茂連署書状	武雄鍋島家文書33／『佐賀県史料集成 古文書編第6巻』P22	鍋（鍋島）信濃守勝茂、、鍋（鍋島）加賀守直茂	龍左衛門大夫殿	鍋島勝茂・同直茂、今度の「柳川表」における合戦での活躍を賞す。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
K10	柳川城（柳河城・梁河城）	(9)	（慶長5年）11月6日	井伊直政書状	古文書写8／『佐賀県史料集成 古文書編第21巻』P144、田尻家文書255／『佐賀県史料集成 古文書編第7巻』P311	井伊兵部少輔直政	鍋嶋平五郎殿	井伊直政、鍋嶋平五郎に対し、今度の「柳川表」における戦功を賞す。
		(10)	（慶長5年）11月26日	圓光寺三要（閑室元佶）書状	古文書写9／『佐賀県史料集成 古文書編第21巻』P145	圓光寺三	鍋平五公人々御中	圓光寺三要、鍋嶋平五郎に対し、「柳川表之儀」における手柄について内府と井伊直政へ連絡したことを伝える。
		参考		蒲池家由来ノ事	蒲池玄造氏蔵本（蒲池家系図并に由来等）／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P44・46			蒲池鎮連が義を守りて龍造寺隆信に下らず、「柳川ニ一城ヲ新築シ下筑後ノ内一万町ヲ領ス、下蒲池ト云フ」とみえる。また、関ヶ原の合戦に関連して田中吉政が「柳川城」に居住したと記す。
		(11)	慶長7年7月25日		慶長7年台所入之掟／『柳川の歴史3 田中吉政・忠政』P310	（田中）吉政	友田勝右衛門殿、田中勘右衛門殿	城の普請・作事などについて連絡したもの。「一、やな川・くるめ・城嶋・福嶋・くろ木・赤司・ゑのきつ・江浦八ツの諸城」とみえる。
K11	江浦城	参考	天文17年から天正11年の間と思われる。	田尻鑑種本領村数等覚書	田尻家文書209／『佐賀県史料集成 古文書編第7巻』P254、田尻家文書209／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P194			田尻鑑種の本領覚書のなかに「江浦城番　田尻龍哲」とみえる。
		(1)	天正10年12月10日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P352			田尻氏、島津氏に使者を遣わし、去朔日夜に龍造寺が「江村之城」（江浦城ヵ）に寄せ来るもこれを撃退す。
		(2)	（天正11年ヵ）8月13日	龍造寺政家書状	横岳文書／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P360	龍（龍造寺）政家	（横岳）家実	龍造寺政家、横岳家実に対し、来る15日に出港するよう命じ、また、「江浦」は考えどおりに諸口を取り詰め、「鷹尾」の落城も時間の問題であることを伝える。
		(3)	天正11年8月14日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P360			龍造寺氏が田尻氏と降伏交渉を行っていたことが伝えられる。「江之浦拵ニ人数ヲ差籠」とみえる。
		(4)	天正12年10月7日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P372			田尻氏、島津氏に使者を遣わす。現在、「高尾之城」に入部しているが、妻子が龍造寺の人質となっているため一途に奉公することが難しいこと、また、「江之浦」（江浦城）は龍造寺の手から離れ大友勢が居るが、その中には自分の内衆もいるため調略によって、「江之浦」は容易く攻略できること、を伝える。
		(5)	（天正13年）9月19日	伊集院忠棟書状	広島大学所蔵蒲池文書34／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P11	（伊集院）忠棟	蒲池鎮運	伊集院忠棟、蒲池鎮連に対し、筑後事について、既に「堀切城」を攻落としたこと、「江浦」城も三日中には落城させる見込みである旨を伝える。
		(6)	天正13年9月29日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P377			上井覚兼、「山下」に御番衆を置くことや、「江之浦・堀切」のことなどを指示。
		(7)	天正13年		旧典類聚／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P379			島津勢、堀切・江浦両城を攻落とす。
		(8)	慶長7年7月25日		慶長7年台所入之掟／『柳川の歴史3 田中吉政・忠政』P310	（田中）吉政	友田勝右衛門殿、田中勘右衛門殿	城の普請・作事などについて連絡したもの。「一、やな川・くるめ・城嶋・福嶋・くろ木・赤司・ゑのきつ・江浦八ツの諸城」とみえる。
K12	三池陣屋	参考	天正15年6月7日		家勤記得集抄録9／『久留米市史 第7巻』P384			豊臣秀吉、高橋統増に三池郡を賜い、「三池館」を守らせる。なお、『久留米市史 第7巻』は、「三池館」を江浦城の誤りとする。
		参考	寛永4年		覚書　中島家文書／『福岡県の地名』P1173			三池藩祖立花種次、今山村のうちに陣屋を築く。
		参考	嘉永4年		御献上目録　草葉文書／梶原伸介「三池藩立花家の歴史と三池陣屋について」『福岡県地方史研究協議会大会　福岡県の近世城郭4陣屋』P23			柳川藩預けとなっていた三池藩領が、陸奥国伊達郡下手渡に移っていた立花種恭に返還され、今山村の村民や新町の町民から土地や金品の献上があり、陣屋の復旧が進められる。翌年3月8日に棟上げ、4月晦日に引っ越す。
		参考	明治6年		三池藩陣屋地図／梶原伸介「三池藩立花家の歴史と三池陣屋について」『福岡県地方史研究協議会大会　福岡県の近世城郭4陣屋』P21			三池陣屋の建物や坪数、構造などが詳細に記されている。

＜城館等伝承地＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
D2	陣屋陣	(1)	（天正13年）7月29日	戸次道雪書状	薦野文書／『小郡市史５　中世・近世・近代』P383	（戸次）道雪	（薦野）増時	北野・赤司の両城が大友方の手に落ちたことを報じる。また、高橋紹運が「北野要害」に籠城している。
		(2)	（天正13年）閏8月朔日	大友府蘭（義鎮）書状	毛利弘文書2／『大分県史料26』第四部P72	府蘭（大友義鎮）	（大友）義統	前日、一動を以て「北野」への在陣について、衆談をもって堅固にすべきことを連絡。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
D10	柳坂陣（耳納城）	(1)	応安8年2月日	門司聖親軍忠状	門司文書22／『増補改訂中世北九州落日の譜－門司氏史話－』P393、豊前門司文書112／『久留米市史 第7巻』P112、豊前門司文書5169／『南北朝遺文 九州編第5巻』P127	門司左近将監聖親		門司聖親、筑後国において、「石垣城・「耳納山」・麦生・紅桃林・発所嶽・高良山其外所々御敵城」没落の際に、黒木谷河陣まで御共し、今も在陣しているという自身の忠節を報告。これについて、「承了（花押）」という証判有。
		(2)	応安8年2月日	田原氏能軍忠状	豊後入江文書114／『久留米市史 第7巻』P556、入江文書23／『大分県史料10』第二部P393、豊後入江文書5171／『南北朝遺文 九州編第5巻』P130	田原下野権守氏能		田原氏能、今川了俊に従い、応安7年11月12日、筑後国「皆尾」（耳納）山凶徒を追落とす。これについて「承了（花押）」という今川了俊の証判有。
		(3)	応安8年8月日	長井貞広軍忠状写	萩藩閥閲録8-2・115／『久留米市史 第7巻』P557、萩藩閥閲録8-2・5231／『南北朝遺文 九州編第5巻』P151	長井掃部助貞広		長井貞広、今川了俊の九州入りに従い、所々を転戦す。応安7年11月、筑後河を渡り、「皆尾山・黒木・谷河御陣」において忠節あり。
		(4)	永和2年3月日	毛利元春軍忠状写	毛利家文書221／『増補訂正編年大友史料8』P141	毛利右馬頭元春		応安7年11月12日、筑後川を渡り、今川義範に御供して「皆尾山」を登り合戦。
		(5)	永和4年11月日	橘薩摩公直軍忠状案	小鹿島文書74／『佐賀県史料集成 古文書編第17巻』P286、肥前小鹿島文書123／『久留米市史 第7巻』P562	（橘薩上村対馬守公直）		橘薩摩公直、去9月27日に筑後国山本御陣に馳せ参じ、「黒木御陣」と「三奈尾山城」を攻める働きをしたことを報告。
		(6)	永和4年11月日	大嶋実軍忠状	来島文書124／『久留米市史 第7巻』P563	松浦大嶋尾張介実		大嶋実、去月（9月ヵ）28日に「耳納山城」攻めと御陣宿直警固などの戦功を報告。
		(7)	永和4年11月日	大島勝軍忠状	『増補訂正編年大友史料8』289、P177	松浦大島太郎左衛門尉勝		大島勝、10月28日「耳納城攻並御陣」の宿直以下軍功に励んだ旨を報告。これについて、「承了（花押）」という今川頼泰の証判有。
		(8)	（年未詳）閏8月13日	大友義統書状写	高良山厨文書1／『久留米市史 第7巻』P309	（大友）義統	高良山大弐	大友義統、高良山大弐に対し、「草野千光寺口柳坂表」において、発心岳の悪党と合戦の際、父子戦死の活躍を賞する。

＜城館等関連遺跡＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
R7	筑後国府跡	(1)	建武4年2月3日	荒木家有軍忠状	荒木近藤文書14／『久留米市史 第7巻』P174	（荒木）藤原家有	進上 御奉行所	荒木家有、菊池武敏以下凶徒蜂起により、去12日の「筑後国符」下向以来の軍忠を報告。これについて、「承了（花押）」という証判有。
		(2)	建武5年1月28日	一色道猷軍勢催促状写	肥前福田文書6989／『南北朝遺文 九州編第7巻』P14	沙弥（一色範氏・道猷）	福田一族中	菊地武重以下凶徒等、1月27日に「筑後国府」へ打出。
		(3)	暦応3年4月2日	小代光信軍忠状	肥後託摩文書1498／『南北朝遺文 第2巻』P63	（小代光信）		建武3年5月17日、三池一族等、在々所々に押寄せ、「凶徒等住宅」を焼払う。その際、大将軍の御座している「筑後国府」に着到。
		(4)	（正平6年）10月25日	五條頼元書状	豊後入江文書3228／『南北朝遺文 九州編第3巻』P229	（五條）頼元	田原豊前権守（氏能）殿	五條頼元、筑後川渡河に関して、御所を「国府」に召さる予定であることを連絡。
		(5)	（正平6年）10月25日	五條頼元書状	豊後入江文書3229／『南北朝遺文 九州編第3巻』P229	（五條）頼元	田原入道（直貞・正曇）殿	五條頼元、筑後川渡河に関して、「国府」を御陣とする予定であることを連絡。
		参考	天正14年7月8日		岩橋家記録11／『久留米市史 第7巻』P392			岩橋家、「筑後符中本城」にひきこす。

＜所在不明＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
F1	妙福寺ノ城	(1)	康永4年4月21日	荒木家有軍忠状	荒木近藤文書18／『久留米市史 第7巻』P176、筑後近藤文書2113／『南北朝遺文 九州編第4巻』P277、荒木家文書／『太宰管内志（中）』P233	（荒木）藤原家有	進上 御奉行所	「筑後国上妻郡妙福寺ノ城」の警固について仰せ下され、荒木六郎入道女子代弥六がこれを勤める。これについて、「承了（花押）」という証判有。
F2	紅桃林城	(1)	応安8年2月日	門司聖親軍忠状	門司文書22／『増補改訂中世北九州落日の譜－門司氏史話－』P393、豊前門司文書112／『久留米市史 第7巻』P555、豊前門司文書5169／『南北朝遺文 九州編第5巻』P127	門司左近将監聖親		門司聖親、筑後国において、「石垣城・耳納山・麦生・紅桃林・「発所嶽」・高良山其外所々御敵城」没落の際に、黒木谷河陣まで御共し、今も在陣しているという自身の忠節を報告。これについて、「承了（花押）」という証判有。紅桃林（ことばやし）は現在の福岡県久留米市草野町に所在。
F3	石井要害	(1)	（天正9年）10月10日	大友府蘭（義鎮）書状	問註所文書（1）／『西国武士団関係史料集32』P35	（大友）府蘭	問註所刑部太輔殿	小椎尾河内に現れた悪党を退治したので、今後の対策として石井要害にも兵力を入れておくことが検討されている。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
F4	中尾畑城	(1)	建武5年10月日	龍造寺家貞軍忠状	龍造寺家文書91／『佐賀県史料集成 古文書編第3巻』P57、肥前龍造寺文書1271／『南北朝遺文 九州編第1巻』P385	龍造寺彦三郎（家貞）		龍造寺家貞、今月14日「筑後国小清水山并中尾畑城攻」における合戦の際、味方として軍忠したことを報告。これについて、「承了（花押）」という佐竹義尚の証判有
		(2)	建武5年10月16日	志賀頼房軍忠状	志賀文書／『大日本史料6編5』P82、肥後志賀文書1264／『南北朝遺文 九州編第1巻』P383	（志賀）源頼房	進上 御奉行所	筑後国凶徒等蜂起につき、志賀頼房大将に御供して、「同国小泉并畑城」において代官今川殿に属して軍忠を挙げる。これについて、「承了（花押）」という佐竹義尚の証判有。
		(3)	康永1年8月日	志賀頼房軍忠状	肥後志賀文書1846／『南北朝遺文 九州編第2巻』P180、大友家文書録52／『大分県史料31』第二部補遺（3）P53、大友家文書録198／『増補訂正編年大友史料6』P121	（志賀）源頼房	進上 御奉行所	志賀頼房、建武5年8月より在津警固の時、凶徒ら蜂起に伴い9月11日に発向、御供として「瀬高」に御座。その後、同10月には「少寒水山并畑城」における合戦の際、今河六郎の御手に属して軍忠す。これらについて、「承了（花押）」という一色範氏（道猷）の証判有。
F5	戸原城	参考	天正10年4月	綾部氏軍功覚書案	綾部家文書2／『佐賀県史料集成 古文書編第21巻』P30			龍造寺家臣綾部氏、「戸原之城」を責め、城主戸原伊予守と合戦す。これによって、綾部尾張・高木左馬大夫・原口平次兵衛・石井与次郎・渋谷神八郎が討死す。
F6	権現岳城	参考			普聞集／『大日本史料11編8』P377			豊後勢、「権現岳」に陣す。
		参考			北肥戦誌／『大日本史料11編8』P376			戸次道雪・高橋紹運、8月24日に「黒木ヵ居城高群」を攻落とし、翌25日朝に「権現岳」から「河崎」に陣替。

＜特定困難＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
	高良山	(1)	（正平17年）6月11日	空山自空書状	肥前光浄寺文書7084／『南北朝遺文 九州編第7巻』P43	（空山）自空	謹上 高辻殿	懐良親王、「高良」に御成。
		(2)	永和3年3月日	吉川経見軍忠状	吉川家文書5389／『南北朝遺文 九州編第5巻』P206	吉川駿河守経見		去永和2年9月27日渡海し、筑前と肥前における合戦に軍忠す。その後筑後川を渡り、「高良山所々」より陣替えの際、御手に属す。これらについて、「承了（花押）」という証判有。
		(3)	（天正12年）8月29日	戸次道雪・高橋紹運連署書状	広島大学所蔵蒲池文書40／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P13	（高橋）紹運・（戸次）道雪	ユキ（蒲池鎮運）	高橋紹運・戸次道雪、蒲池鎮運に対し、「高良山之儀」については「順儀」となり、昨日28日に参上したことを伝える。
		(4)	（天正12年）9月3日	戸次道雪書状写	薦野家譜／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P370	（戸次）道雪	（薦野）増時	「高良山へ御登城候て」とみえる。
		(5)	（正平17年）6月11日	空山自空書状	肥前光浄寺文書7084／『南北朝遺文 九州編第7巻』P43	（空山）自空	謹上 高辻殿	懐良親王、「高良」に御成。

Ⅶ　城館関連地名一覧

＜凡例＞

1　本章では、報告対象地域における城館に関連する地名を一覧にしたものである。

2　城館に関連する地名とは、城（シロ・ジョウ）・館（タチ・タテ）・屋敷・門・矢倉・園・垣内・土居（ドイ）・府・丸・蔵（クラ）・城戸（キド）・鍛冶・射場・的場・堀切のほか、武器あるいは合戦に関連すると思われる地名、あるいはその他城館に関連すると思われる地名を指す。

3　地名の抽出は、「明治十五年字小名調」（『福岡縣史資料第七輯』1937年福岡県編集・発行）に搭載された地名を基本とし、これらに搭載されていない現在残る小字等の地名を補完的に追加したものである。地名の抽出に当たっては、服部英雄氏（福岡県中近世城館跡詳細分布調査指導委員・九州大学大学名誉教授）が作成したデータを利用するとともに、山門郡、三池郡については、事務局で抽出を行った。

4　現在、城館と判明しているものと直接つながりがある地名については、別の欄を設けて、他の地名と区別した。なお、今回あげられた大半の地名には、中近世城館とは無関係のものが多数含まれていると考えられるが、それらの峻別は困難であり、また今後の調査研究の備えとして、あえてその全てを掲載することとした。

旧村名（大字）	関連地名	旧村名（大字）	関連地名
＜筑後国御原郡＞		大杜	一向屋敷・古屋敷・北屋敷・中屋敷・三屋敷・内屋敷
下高橋	馬屋元・内畠屋敷	五郎丸	屋敷ノ一・屋敷ノ二・屋敷ノ三・屋敷ノ四・屋敷
福童	今朝丸		五・屋敷六
高樋	城ノ前・古屋敷・町小路・下西小路・上西小路・	今山	江口屋敷北・江口屋敷西・江口南屋敷・江口東屋敷
	上西小路・中小路・馬場小路・北小路・垣添・辻・		・松丸屋敷・西松丸屋敷・堂屋敷・今山屋敷
	今屋敷・番屋口・砂掘	十郎丸	野屋敷・西屋敷・堀ノ口
甲條	西屋敷・東屋敷・屋敷付ノ一・屋敷付ノ二・	大石	陣内
	屋敷付ノ三	荘島町	東弓町・西弓町
本郷町	築地・屋形町・陳ノ内・陳ノ前・馬場	稲数	小路屋敷・大屋敷
下岩田	城内・堀ノ本	仁王丸	大屋敷・中屋敷・屋敷・天神屋敷・寺屋敷
小郡町	下築地・中築地・西上築地・東上築地・向築地	塚島	矢蔵
	・陳塚	中島	土居ノ内・蜜柑屋敷・土居ノ角
松崎町	新堀・城山	平方	元成屋敷
上高橋	東館	八坂	土居後
鵜木	鴨屋敷・向屋敷・天神屋敷・北屋敷・大城	上西鰺坂	辰堀・屋敷ノ坪・中屋敷・城ノ内
今	西小路二・西小路一・東小路	下西鰺坂	馬場添・西馬場添・大丸
井上	長者掘	鳥巣	今屋敷
吹上	徳丸	高良	南小路・北小路・西小路・東小路・中小路・恋ノ丸
干潟	弓場ノ上・上屋敷・下屋敷・中屋敷・町屋敷	石崎	屋敷ノ一・屋敷ノ二・今屋敷・土居ノ内
	・堀之内・城戸口	小森野	西寺屋敷・矢倉町
乙隈	古小路・南小路	山川	西馬場・鶴ヶ城・城ノ前・城・城谷・城牟田・城
山隈	屋鋪下・屋鋪・東蔵堀・番屋敷		堀・城島・渡屋敷・下城島
山隈	城山	合川	東屋敷・北屋敷・西屋敷・南屋敷・土居ノ内・西小
大保	弓場・堀田・大倉・北小路・中小路・東小路		路・屋形町・小城宇楚・寺屋敷
	・南小路・西小路	藤光	屋鋪・屋敷坪
大板井	屋敷・宮ノ馬場・門出	櫛原	大蔵・童屋敷
小板井	屋敷・屋形町	高良内	大屋鋪・横馬場・立馬場・井堀
大崎	中屋敷	國分	築地・政所・馬場田・屋敷
横隈	犬馬場	金島	古城戸・重屋敷・馬場・奥屋敷・大堀
三澤	寺小路	大城	大屋敷・南土居・北土居
力武	犬馬場	赤司	西北小路・東小路・城小路・山小路・横小路
二森	南屋敷・北屋敷・辻ノ前・弓場本	若松	中屋敷・城ノ内・大屋敷
＜筑後国御井郡＞		八丁島	土居外一・土居外二・西屋敷・東屋敷・南土居外
三川	角屋鋪・城屋鋪・宮本屋敷・無三屋敷・屋敷・南屋	宮瀬	村屋敷
	鋪・東屋敷・寺屋鋪・中屋鋪・中屋鋪・南中屋鋪・	中川	東屋敷・中小路・土手下・城戸
	東屋鋪・北屋鋪・東中屋鋪・中屋鋪・西屋敷・奥屋	八重亀	土居ノ内・土居ノ外・西屋敷・中屋敷
	鋪・西屋鋪・橋本屋敷・北屋鋪・庚辛屋鋪	太郎原	西屋敷・土手上
守部	土手上・立屋敷・室屋敷・浦屋敷・内屋敷	＜筑後国三潴郡＞	
菅野	新屋鋪	津福	弓場・向小路・堀回シ
富多	西屋敷・東屋敷	津福今	廣屋敷・新堀
御井町	堀ノ上・馬場先・大銃場・土居ノ内・大屋敷	白口	源右衛門城戸・北屋敷・東屋敷・西屋敷・寺屋敷・
上津荒木	松本屋敷・中村屋敷・田中屋敷・原屋敷・馬場		中屋敷・南屋敷・黒門・陣ノ山・下屋敷・垣ノ内・
足穂	西小路・土居下		陣ノ内
中	横屋敷・中小路・堀ノ口・奥小路	住吉	屋敷内・城山・館
陣屋	蔵屋敷・陣屋口	中津	屋敷
野中	上城蓮輪・城蓮翰・東屋敷・高島屋敷・本村屋敷・	安武本	女掘・屋敷・城島
	屋敷・東屋敷・南屋敷・屋敷・屋敷一・屋敷三・屋	武島	北堀口・南堀口・垣添・力屋敷・築留
	敷二・屋敷四	下荒木	城嶋・竹ノ丸・古門
上弓削	屋敷ノ一・屋敷ノ二	荒木	横小路・立小路

旧村名（大字）	関連地名
宮本	奥小路・西小路・女堀・馬出シ
夜明	南小路・陳ノ内
藤吉	大屋敷・城田・小路・奥小路
黒田	表小路
原田	北ノ屋敷・堀割・新堀・陳ノ内・西ノ屋敷
高三瀦	北小路・城ノ上・館・横弓場
玉満	四郎丸・中小路・館
笹淵	東屋敷・東ノ前・堀ノ内・南ノ前・南屋敷・立堀
	・大城・九郎丸
前牟田	東島堀・島堀・中屋敷・別當屋敷・東屋敷・横堀
	・野開屋敷
生岩	堀口・城田・古門
西牟田	西小路・館・城崎・小次郎丸・東小路・三郎丸
大角	垣添・東屋敷・大屋敷・西屋敷・高屋敷・柳屋敷
福土	助屋敷
清松	南屋敷・十郎丸・北屋敷・寺屋敷
壹町原	堀添・原田屋敷・馬喰野・西屋敷
芦塚	出丸・濱屋敷・中小路・東小路・北小路・西小路
	・中屋敷・馬場
下田	東小路・中小路・外屋敷
濱	南小路・中小路・北小路・東小路・土居外・屋敷
内野	新堀・東屋敷・西屋敷
城島	町屋敷・本丸・屋敷下・城内
大依	東屋敷・西屋敷・新屋敷・北屋敷・四郎丸
六町原	南屋敷・前屋敷・屋敷内
楢津	大堀ノ上・馬場中・大屋敷・城崎・古屋敷・境堀
江上	館ノ前・館屋敷・刑部屋敷・館古賀・堂屋敷・
	千代島屋敷・佐京屋敷・東屋敷・横堀・堀ノ口
江上々	女郎屋敷・立野屋敷・さこ屋敷・東三丸・西三丸
	・彌太郎丸・佐平次屋敷
江上本	馬場・楢屋敷・馬場・鍛冶屋敷・寺堀・中屋敷・乙
	丸・北屋敷・的場・栗丸・立堀・助丸・新藏屋敷・
	新堀・田屋敷・タチ・山城形・堀ノ内
上青木	城ノ元・門田
下青木	牛堀・南小路・東小路・館屋敷
西青木	堀江
青木島	元屋敷
浮島	土居外北湖添ニシエゴゾエ
道海島	土居下
下林	筒江屋敷・堀ノ内・北小路・南小路・西小路
中古賀	北小路・下北小路・中小路・上中小路・東小路・南
	小路・南小路・北小路・東築切・西築切・堀揚
諸富	土居ノ内・東小路・地藏屋敷・南屋敷・西小路・北
	小路・中小路
洒見	下城内・上城内・馬場北・堀ノ内
向島	東堀ノ内・西堀ノ内・屋敷ノ内・中小路・馬場崎・
	高馬場崎・西屋敷・東屋敷
榎津	城町
幡保	竹屋敷
鬼古賀	曲輪ノ内・堀ノ内
上巻	中小路・田中屋敷・田屋敷・屋敷ノ後
郷原	中小路・中田城
一木	金丸・城宅
九網	屋鋪ノ内・今屋鋪・古屋鋪・西龍城・東龍城・牛丸
大野島	山屋敷・公儀堀東ノ割・公儀堀西ノ割・格屋敷
新田	龍城
間	九郎丸
田脇	堀ノ口・四郎丸・二郎丸
南濱武	土居神・番所ノ前
久々原	高土居・堀越
古賀	屋敷北
西濱武	堀ノ内・水土居下・道屋敷
西蒲池	屋鋪前・泉屋鋪・馬場・中小路・正覺屋鋪・藏屋
	鋪・居屋鋪・中堀
東蒲池	門前
高橋	西小路・東小路・中小路・表小路
大藪	寺屋敷・中屋敷・西屋敷・東屋敷・堀ノ口・新堀・
	南小路・中小路・北小路・土居下・溝ノ口・南屋
	敷・西小路
奥牟田	野屋敷・西村東屋敷・中屋敷・土居西・土居東・堂
	屋敷・向屋敷・寺屋敷・前村東屋敷・鍵屋敷・北島
	東屋敷

旧村名（大字）	関連地名
三八松	政所・野屋敷・大屋敷・北小路・奥小路・南小路・
	西小路・馬場ノ前・馬場ノ脇・土井ノ口・虎屋敷・
	高ホリ・外新堀・内新堀・中屋敷・東屋敷・土居
	越・東小路・中小路・屋敷内・屋敷浦・新堀
筏溝	政所・前屋敷・水町屋敷・中小路・六ケ所屋敷・門
	ノ内・觀音丸
矢加部	南屋敷・北屋敷・五ス丸・町屋敷
高嶋	内廓・堀ノ内・馬場崎・屋敷園
立石	城ノ内・中小路・東小路・堀ノ内・新堀・阿彌陀屋鋪
上木佐木	宮ノ前・堀ノ内
上牟田口	青木屋敷・觀音丸・秋丸・對馬屋敷
蒲生	立堀・東小路・中屋鋪・北小路・土居ノ内
金納	北屋鋪・南屋鋪・東屋鋪・新堀
八町牟田	町屋敷・水落屋敷・野々屋敷・野口屋敷・東名屋
	敷・堀ノ内・弓場ノ本・沖屋敷・正分ヤシキ
上八院	堀ノ内・西田屋敷・天神屋敷・今屋敷・南立堀・北
	立堀・北境屋敷・中村屋敷・寺屋敷・上屋敷・壹町
	分屋敷・野屋敷・茅土居・横堀
繪下古賀	馬場添・屋敷内・西屋敷・沖屋敷・今屋敷
中木室	宮ノ前・古賀屋敷・西屋敷・赤城
中八院	北ノ屋敷・今屋敷・吉藏屋敷・堀ノ内・田中屋敷・
	長兵衛屋敷・次郎丸・東次郎丸・油屋々敷・右京屋敷
	・堀割・南屋敷・屋敷ノ内・西屋敷・庄屋敷・新堀
本木室	陣ノ内・奥小路・東屋敷・城之上・堀向・堀ノ内・
	中小路・西小路
上白垣	西屋敷・北之屋敷・東ノ屋敷・三太夫屋敷・大屋敷
	・屋敷添・新中堀・中小路
下白垣	屋敷田・堀ノ内・中小路
下八院	西屋敷・元屋敷・南屋敷
下牟田口	馬場・南馬場先・北馬場先・門前・馬場通
下木佐木	堀之口
横溝	烏帽子土居・堀田中・堀田西・城ノ内・南長堀・長
	堀・高良土居
蛭池	本屋敷前・宇土屋敷・天神ノ木屋敷・北島屋敷・
	舘・馬場前・陣ノ内・村小路・宮ノ前・正覺屋敷・
	陣分後・柳堀・陣分西・陣分屋敷・森分屋敷・本屋
	敷・徳物屋敷・田ノ上屋敷・寺分屋敷
侍島	西屋敷・東屋敷・中通屋敷・寺屋敷・柿ノ木土居・
	升地屋敷・西小路・平土居
＜筑後国山本郡＞	
吉木	下馬場崎・中馬場崎・上馬場崎・堀下・上堀下・西
	小路・東小路・江下小路・下江下小路・東江下小路
	・西江下小路・原小路・上江下小路・馬場・上馬場
	・中馬場・下馬場・古城山・竹井城
矢作	下丸・上丸・東下屋敷・西下屋敷・上西屋敷・中西
	屋敷・東中屋敷・上東屋敷
蛯川	東屋敷・中屋敷・片屋敷・南屋敷・北屋敷
常持	角屋敷
合樂	屋敷
與田	西屋敷・南屋敷・中屋敷・大屋敷・向屋敷・橋口屋
	敷・下屋敷・上ノ段屋敷・東屋敷・北屋敷・鍛冶屋
	敷・馬場塔
木塚	西城戸・北屋敷・中屋敷
飯田	下町屋敷・下屋敷・町屋敷・南屋敷・中町屋敷・馬
	場・北屋敷・東屋敷・西屋敷・門田・金丸・下門田
	・北金丸・金丸
＜筑後国竹野郡＞	
野田	垣添・馬場川原・下土居・土居元・土居端
豊城	自在丸
常盤	虎丸・熊丸
地徳	ヤシキツホ・シロヤシキ・大ヤシキ・七平屋敷・寺
	屋敷・中屋敷・寺屋敷・西屋敷・田ハタ屋敷・東屋
	敷・姥ヶ城
中尾	自在丸・ヤシキ・大城町・屋形町・人丸
竹野	竹野ヤシキ・徳間ヤシキ・五郎丸・人丸
秋成	上堀・四郎丸・北屋敷・中屋敷・南屋敷・垣添
殖木	屋鋪田
田主丸	門ノ内・馬々
益生田	六田屋敷・王屋敷・二田屋敷・菊地屋敷・平城・麻
	生屋敷・垣添・人丸・益屋敷・東上屋敷・小丸・寺
	屋敷・森田屋敷・熊丸・屋形町・城ノ下・池尻屋
	敷・中屋敷・藏屋敷・中村屋敷・本村屋敷・稗田屋敷

旧村名（大字）	関連地名	旧村名（大字）	関連地名
益生田	敷・姥屋敷・矢倉・馬場・上馬場・東館・西館・城内	前古賀	屋鋪・屋鋪・東小路・中小路・西小路
石垣	東屋敷・東中屋敷・西中屋敷・西屋敷・大井東屋	立野	奥小路・東小路・中小路・西小路
	敷・上屋敷・中東屋敷・六田屋敷	新荘	上屋敷・下屋敷
森部	東屋敷・中屋敷・土井ノ内・西屋敷	川犬	犬ノ馬場・南ノ屋敷・下ノ屋敷・北ノ屋敷・上大屋敷
長栖	弓場元・堀ノ内・垣添		・下大屋敷
鷹取	陣ノ内・堀田	平	下屋敷・上屋敷
上原	久保園・屋鋪田・門ノ内・垣添・屋敷	北山	堀田・古屋敷・小路・堀切・騎射場・城ノ谷・今小路
朝森	東屋敷・段屋敷・垣添		・永松堀・鞍懸・御倉・城山・大倉山・大倉
志塚島	堀ノ童・向屋鋪・垣添・目出屋鋪	白木	今屋敷・難ヶ倉・横居場・横ヶ倉・城ノ平・小ヶ倉
牧	垣添・乙尾丸・今屋敷・西屋敷		・屋敷田
以眞恵	西屋鋪・東屋鋪・町屋鋪・垣添・百丸	鹿子生	陣床・屋敷
恵利	馬場先・犬丸・金丸	上邊春	屋敷谷・高倉
八幡	土居崎・北屋敷・南屋敷・築廻・東屋敷・奥屋敷・	兼松	二ノ丸・城山・立屋敷・堀田・安藝殿屋敷
	西屋敷・垣添	山崎	城道・城山・今屋敷・城ノ下・馬場・倉谷・馬場ノ前
菅原	堀口・垣添・大屋鋪・弓場・東屋鋪・堂中屋鋪		・門前・城佛・起請丸
＜筑後国生葉郡＞		谷川	小路・西殿・朝倉・古金屋鋪
浮羽	釜之土居・屋鋪田・今屋鋪・石丸・中屋鋪・下三園	田形	原屋敷・屋敷
	・散使屋鋪・館屋鋪・勘十屋鋪・小屋鋪	馬場	北門前・南門前・今屋敷
流川	小路・屋鋪内・大門・城	津江	中小路
古川	高丸・城地・町屋敷・土居元	本	立山・小路・屋敷
生葉	屋鋪・下屋敷・屋敷田	祈禱院	屋敷
清瀬	屋敷・屋敷田・國光屋敷・下屋敷・馬場・犬ノ馬場	井延	前田・中園・屋敷
若宮	外屋敷・中屋敷・馬場ノ上・屋敷	黒土	屋敷
宮田	屋形町・屋敷	忠見	中山丸
(椋谷)	村屋敷・堀切	山内	城ノ東・東館・西館・城ノ西・城ノ谷
(合瀬)	屋敷下	柳島	道雪陣
(本星野)	馬場道下・寄前・引陳・外城・内城	北田形	西ノ前・屋敷・陣畠・陣山・城ノ谷・城ノ峯
(十籠)	吉城	湯邊田	堀切
(千々谷)	馬場	田本	内ノ城・堀切
(桁山)	屋敷	本分	古賀ノ倉・西馬場・東馬場・築地
(仁田原)	藏屋敷	今	築山・三郎丸
(浦)	弓摺羽・番所	桑原	北屋敷・南屋敷
富永	土居切・西城	笠原	城山・梶屋敷・今屋敷・屋敷・屋形迫・古賀倉
高見	中小路・金丸・上馬場・馬場・今屋敷・山城・三郎丸	田代	新城・陣床
小鹽	堀田・城土・馬場・小松堀	木屋	弓掛・西城・中城・東城・南城・長城・弓掛ノ塔・
東隈上	門田・堀田・屋形町・徳丸・屋次郎丸・加智屋敷・		堀田・家鋪・浦ノ小路・裏ノ小路・中ノ小路・垣添
	三郎丸		・屋敷ノ下・寝小屋ノ岩・屋敷ノ下
西隈上	堀田・三郎丸・町屋敷・六郎丸	北木屋	陣ノ内・城山・東屋敷・北屋敷・上今屋敷・古屋敷
八和田	土居下		・今屋敷
新治	今屋敷・馬洗・石藏	大淵	城ノ原・堀迫
朝田	今屋敷・辻屋敷	北矢野	ヤシキマエ・屋敷上・屋敷前・堀田・屋敷下・屋敷
妹川	東城ヶ鼻・城ヶ鼻・西城ヶ鼻・古屋敷・鬼ヶ城・		上・堀田坂・堀尻・土居間・ヤシキウエ・屋敷ノ
	今屋敷・平家ヶ城・矢所・盗人ノ馬場		上・屋敷ノ上・屋敷前・ヤシキノ上・馬場・堀田ノ
福益	福丸		口・堀尻・屋敷上・堀井川
屋部	出口屋鋪・屋鋪・奥屋鋪・東屋鋪・鍛冶屋敷	矢部	今屋敷・山内小路・堂屋敷・陣床・屋敷上・屋敷向
吉井	堀田町		・城平・屋敷ノ上・屋敷向・屋敷ノ下・今屋敷
櫻井	古屋敷・北屋敷・屋敷	上横山	馬場野・古屋敷
徳丸	南屋敷・北屋敷・西屋敷	下横山	馬場
田籠	馬場・日森園	北川内	大門口
千年	今丸・屋敷・中童子丸・上童子丸・童子丸	吉常	役丸
福永	屋敷	久泉	東中園・中園・北中園・南中園・西中園・門田・堀
橘田	童子丸・上童子丸・下童子丸・石堀		ミテ・中ノ馬場
山北	高丸・千代丸	水原	西馬場・中馬場・上馬場・弓場谷・城ノ尾・南屋
三春	東木戸・小屋敷・馬場・大屋敷・城丸・堀割		敷・北屋敷・上馬場平・下馬場平・長藏・内屋敷・
＜筑後国上妻郡＞			御手水・堀田
福島町	北小路・二ノ丸南・本丸南・本丸西・本丸・二ノ丸	日吉	弓場本・土居ノ下
	・將監堀・中ノ土手・清水堀	長延	栗ノ小路・垣添・屋形町・虎丸・弓場元・馬場先・
福島	外小路・溝狭間		馬場脇・城ノ尾
岩崎	茶屋々敷・川南屋敷・川北屋敷	六田	下南屋鋪・西南屋鋪・東南屋鋪・下屋鋪・上屋鋪
高塚	堀田	川上	下村屋鋪・上村屋鋪
宮野	西堀田・東堀田	新代	屋敷・北中ノ馬場・南中ノ馬場・西屋敷・東屋敷・
酒井田	下小路・東小路・西小路・南小路		南屋敷
柳瀬	小路	廣川	屋敷・上小路・中小路・下小路・堀ノ後
大島	今屋敷・五郎屋敷・道屋敷	藤田	館・弓場
吉田	屋敷ノ坪・丸ノ内・屋敷ノ坪・馬場添・屋敷・茶屋	一條	寺屋敷・觀音屋敷
	・小路	熊野	築地
宅間田	屋敷・淀丸	藏數	野屋敷・元藏數
豊福	屋形町	山ノ井	寄丸
蒲原	高倉・今屋敷・射場・屋鋪	德久	堀口
長濱	土居ノ内・半屋鋪・元屋鋪・屋鋪裏	羽犬塚	射場ノ本
前津	堀口・西屋鋪・前屋鋪上	富重	北屋敷・南屋敷
室岡	中小路・折部屋鋪・陣ノ前・掘見手・四丁堀	若菜	古屋敷・堀口・大堀

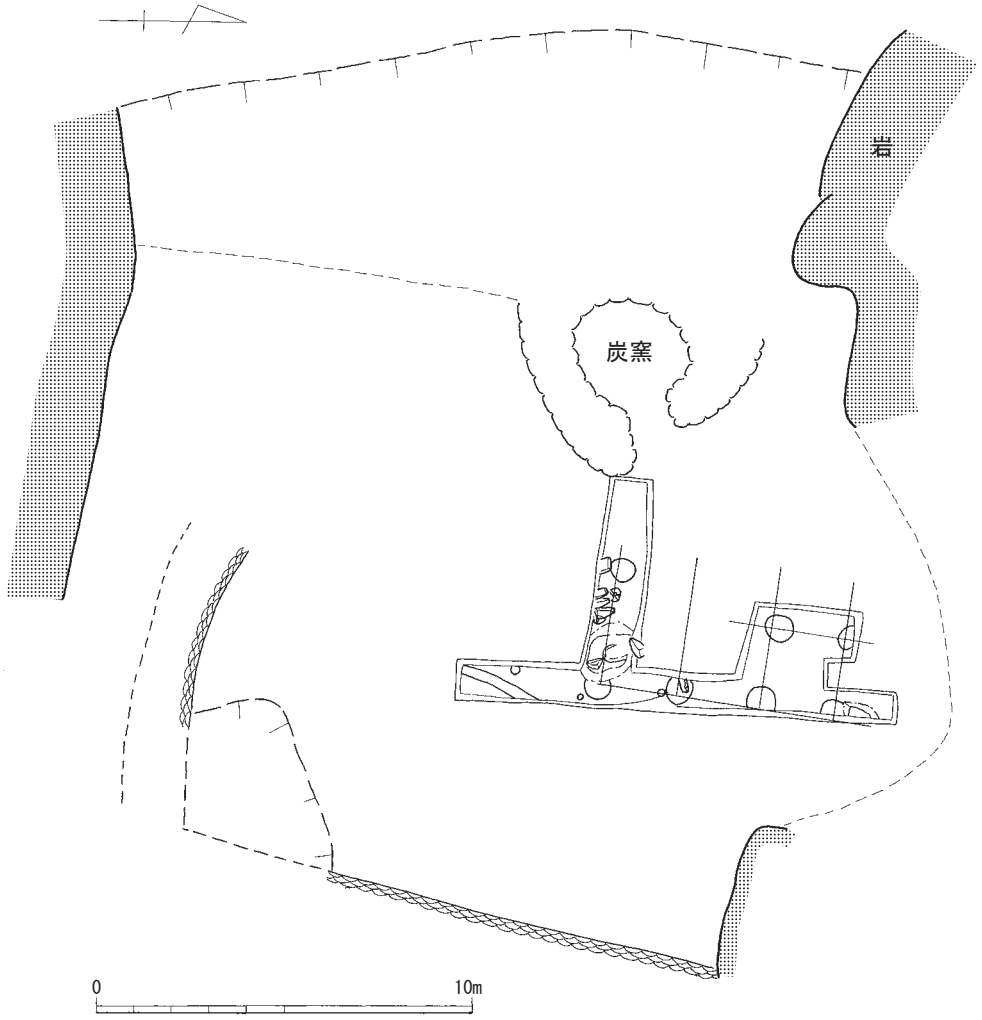
旧村名（大字）	関連地名
和泉	立林
長崎	東井堀・西井堀・古木戸・屋敷
久富	大城・大門口
庄嶋	屋鋪
四カ所	中堀・東屋鋪・中屋鋪・西屋鋪
富久	屋敷・居屋城・西ノ門・屋敷内
江口	柿添
水田	城ノ崎
下北島	馬出シ・東屋敷・西屋敷
島田	大屋敷・下屋敷・北屋敷・外屋敷・觀音屋敷・梅ノ
	木屋敷・弓張
古島	堀ノ内・賴屋敷
折地	今屋敷・屋敷内
井田	南屋敷・古屋敷・堀越・中堀越・大門・前田・下堀
	越・孫七堀・境屋敷・下屋敷・中屋敷・屋敷・新堀
	・立堀・東屋敷
中牟田	土居ノ内
＜筑後国下妻郡＞	
下妻	蔵屋敷
富安	大丸
馬間田	陳ノ内
常用	南小路・西小路
上北島	馬ダシ・馬場・堀田・上堀田
野町	南屋敷・北屋敷
志	垣添・下屋敷添・上屋敷添
津島	中小路・上小路・下小路・南小路・西小路・東小路
	・北小路
鶴田	元屋敷・土居越・南小路・中小路・西小路・北小路
	・東小路
新溝	犬丸・南屋敷・東屋敷・西屋敷
久恵	上藤丸・藤丸・下藤丸・堀ノ内・垣添
溝口	城・上小路・小御門・土居外
北長田	唐申土居
＜筑後国山門郡＞	
大江	内屋敷・東屋敷
本吉	屋敷ノ内
弥四郎	屋敷田・三ノ籠・大城
泰仙寺	中土居
徳益	陣屋敷・新屋敷・東小路・西小路・堀口
豊原	観音小路・古屋敷・中小路・西小路・北小路・堀ノ口
尾野	杉馬場・奥小路・上小路・中小路
太神	門前・馬場先・陣ノ内
下百丁	屋敷ノ内
榮	土居ノ花・古屋敷・池田屋敷・芝原屋敷・屋敷ノ内
	・且那屋敷・西小路
明野	番所・新土居端・西小路
上宮永	北馬場・南馬場
東開	城戸
五拾町	土居・中小路・元屋鋪
棚町	北屋鋪・中土居
中島	薩摩堀
河内	陳内
久末	屋敷ノ内・屋敷・元屋敷
小川	古屋敷・大堀
北関	貝城
坂田	屋敷
長田	堀田・屋敷・陳ノ内・春屋敷
矢留	大城開
新	北松丸・松丸・居屋敷
吉開	鬼丸・中小路・居屋敷
起田	屋鋪田
木ノ元	清屋鋪
蒲船津	北ノ屋敷
高畠	屋敷ノ内
藤吉	土居丸
佃	蔵跡・屋敷ノ内・大城・城戸・土居外・中土居西・
	土居溝・堀ヨリ南・中土居東
上庄町	松土居・乙丸
吉富	下横堀・大横堀・中横堀
中山	土居下・堀ノ内・庄屋小路・寺ノ小路・屋敷内・内
	屋敷・西庄屋小路
本郷	下土居・中土居

旧村名（大字）	関連地名
文廣	屋敷・馬場崎・天神屋敷・東屋敷・西屋敷
山門	西小路・東小路・城内
常盤町	鷹匠小路・弓小路・鉄砲小路・西覚寺小路
海津	横馬場・堀頭・屋形町
原町	北小路
垂見	堀ノ内・東馬場・西馬場・三郎丸
甲田	堀ノ内・城ノ尾・下城ノ尾
大草	寺屋敷・東屋敷・馬場ノ内・西屋敷
真弓	屋敷ノ谷・寺屋敷・貝城
鹽塚	乙丸・三郎丸・大城町・北城
飯江	垣添
竹飯	今城・馬場ノ下・新屋敷・今屋敷・犬ノ馬場・北小
	路・土居ノ内・城ヶ平・屋敷・上小路
鷹ノ尾	太郎丸・寺小路・馬場ノ内・清土居・勢田丸・馬場
六合	小路・南小路・向屋敷・北城
清水	射的ノ元・南小路・垣添
百町	十明小路・内馬場・北小路・西中小路・南小路・
	田中小路・中小路・中村小路・西小路
松田	今屋敷・北三ノ丸・南三ノ丸・西二ノ丸・本丸・
	東二ノ丸
大廣園	城畑・武士町・門田・射場ノ元・陣畑
下宮永	野田堀・大城
立山	築地ノ内・垣ノ内・堂屋敷・明神屋敷
河原内	屋敷ノ内・道屋敷・城ヶ谷
本町	三軒小路・脇小路・本城町・三ノ丸・坊主小路・
	城隅町・御姫小路・幟小路・弓小路・早馬小路
＜筑後国三池郡＞	
三池町	小路・古城・大間小路
岩本	堀切・城・内ノ倉
橘	元屋敷・陳内
宮崎	岩丸・甲屋敷・乙ヤシキ・小立山・城ノ平
勝立	内屋敷
舞鶴	城道・鍛冶屋敷
岬	四郎丸・館・屋敷廻・仲屋敷
白川	元屋敷
草木	下屋敷
櫟野	城子山・東城子山・粧屋敷・城ノ尾・辻路・城ノ内
甘木	城
大牟田	北屋敷・原屋敷・城ヶ崎
吉野	城畑・北屋敷・南屋敷
亀谷	堂屋敷・屋敷ヶ浦・手堀・宮ノ馬場
三里	城龍
新町	陣屋
教楽来	東丸・四大丸・堺丸
上内	上林・金丸・持丸・城花山・屋敷田・柴尾ノ城戸・
	立山
江浦町	高城・二ノ丸
上楠田	城前・陣内・犬丸・馬場・城戸ヶ谷
下飯江	城戸・門前・大門
田尻	陣内・小路
岩津	今屋敷・寺屋敷
原	城ノ平・東屋敷
四箇	城ノ下・古門・垣添
北新開	黒丸・坊屋敷・五郎丸・奥屋敷・遠丸・弾正屋敷・
	小路・乙井丸
南新開	太郎丸・外新土居・南屋舗・立小路・横小路・城内
江浦	高城・伏堀・六郎丸・土居手
今福	城ノ下・城ノ山
濃施	中屋敷・城ノ山
田隈	小路・中屋敷・陣屋敷
下里	東屋敷・西屋敷
横須	城ノ前・城
東米生	四郎丸・陣ノ下
西米生	立林
藤田	中原屋敷・本村屋敷
川尻	西寺堀・東寺堀・三郎丸・土屋敷・馬場・南小丸・
	上屋敷
倉永	下方屋敷・陣内・堀土居・秋丸
田浦	横射場

Ⅷ　うきは市長岩城跡発掘調査報告

平成 10 年度、福岡県教育庁文化財保護課からの各種開発事業照会に対して、福岡県農政部久留米農林事務所所管事業の一つとして「浮羽町（当時）長岩地区生活環境保全林整備事業」が回答された。浮羽町南部の山間に位置する長岩地区は長岩城の所在地としてつとに知られており、教育庁北筑後教育事務所生涯学習課文化財担当は事業の内容を確認するために久留米農林事務所担当と協議を行った。事業は、長岩城跡といわれる一帯に遊歩道を設置、一部に張芝を行うといった軽微な地形改変を伴うものであった。現地は急峻な岩場が優勢な地形であって、遊歩道も開削ではなく主として木製デッキを階段状に設置するというものである。

工事の内容から城跡が破壊される恐れはほとんどないと予想されたとはいえ、長期的に見てもこの長岩城跡で発掘調査を実施できる希有な機会であると判断し、久留米農林事務所の理解を得て、平成 10 年 8 月 30・31 日の両日にかけてトレンチ調査を実施した。今から思えば、非常に隔靴掻痒の感のある調査であるが、ほぼ 20 年前のこととて事情は不分明である。

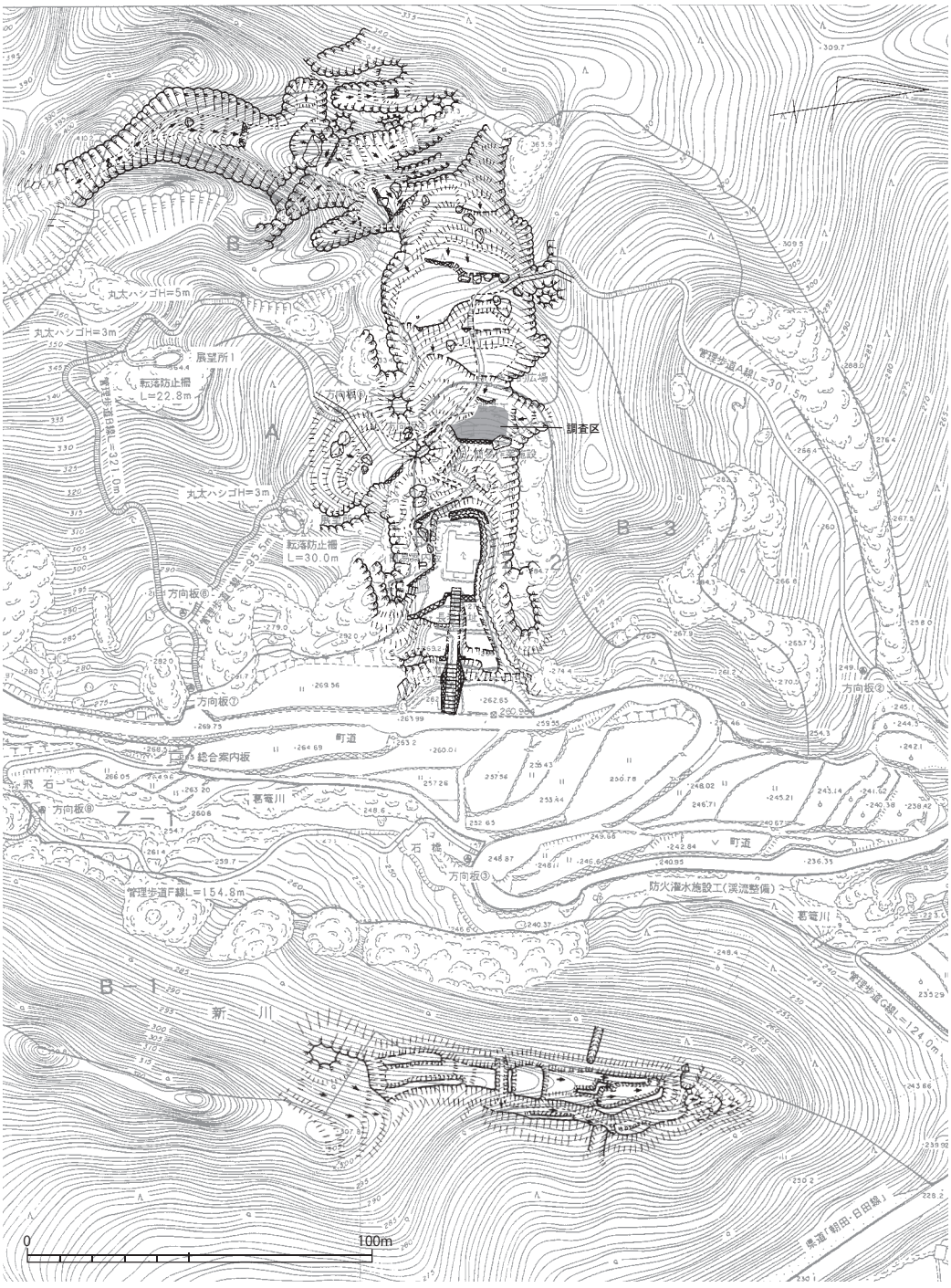


第 272 図　長岩城跡遺構配置図（1/200）

調査の内容

調査は遊歩道が計画され、かつ張芝が施工される狭い平坦地にトレンチを入れることとした。現地は東から西に向かって急勾配で高くなる地形で、処々に狭い平坦地が看取できる。試掘対象地は岩場で挟まれた南北幅約 20m、東西幅 20m 弱の平坦に近い土地であるが、その南に偏して幅 1.5m ほどの石階段、登り道が置かれ、高位となる西辺段落ちに石組の炭焼き窯が設置されていた。

試掘トレンチは平坦地の中ほどに東西方向で、西端が炭焼き窯前端の石組に接するように設定し、ここから幅約 1 m のトレンチを 6 m の長さで掘削した。土層の堆積は概ね、表土・灰黒色土（腐葉土）が 0.5m、その下位に 0.1m の厚さで灰黄褐色土が堆積し、さらに下位で明黄褐色の硬い盤が現



第 273 図　長岩城跡周辺地形図および縄張り図（1/2,000）

れて遺構の地山となっている。当時のメモに「造成土」と注記がしてあるが、断ち割りを行っておらず、今となっては確認のしようがない。ただ、現地は岩山の相を呈していて、安定したいわゆる「地山」と呼べるような土壌が存在することも疑わしい地形であることから、他所から持ち込んだ可能性は十分考えられる。

この最初に設定したトレンチでは東寄りに岩盤があり、それに接するように直径 0.7m ほどの柱穴を確認、さらに西側でも直径 0.6m の柱穴を検出し、両者の芯々での距離は 3.1m を測る。なお、西側柱穴近くでは平坦面を上面にして、高さを揃える石列様の礫群を検出したが、これは柱穴の検出面よりやや上位にあった。脇から割れた石臼も出土している。

最初のトレンチの北側にグリッドを設けたところ、略東西方向に芯々で 2.0m を隔てた柱穴を検出したため、さらに一部拡張した。結局、2.2m の柱間で南北方向に直線的に並ぶ 4 基のほぼ同規模の柱穴、およびそれと直角方向に並ぶ 2 基の柱穴を確認した。なお、柱穴は検出だけで留めている。また、柱穴から土師器皿片 1 点が出土したとメモがあるが、所在不明である。

結　語

今回の確認調査で 7 基の柱穴を検出した。南西の 1 基が柱間距離が揃わないものの、ほかの 6 基は規則的な配置から見て建物を構成するものと考えてよいであろう。また、南西の 1 基も東辺の柱列と直交する位置に配置されていて、関連するものである可能性が高い。

長岩城跡には縄張図で見るようにいくつかの狭い平坦地が認められる。その一つで建物跡と思われる遺構を確認したことは、この場所に「長岩城」が実在した可能性を示しているといってよかろう。さらなる調査が期待される。

東から見上げる

北東から

東から

北から

第 274 図　長岩城跡発掘調査区写真

Ⅸ 『福岡県の中近世城館跡Ⅰ～Ⅲ』の補遺

福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査において、過去３冊の報告書を刊行し、福岡県内でも、筑前地域および豊前地域については、既に報告を完了している。しかしながら、報告書作成までに、現地調査を完全に行い得なかったものや、報告時に行った調査の場所とは異なる場所で、新たに城館遺構が発見された場合など、既刊の報告書に本来掲載すべき案件が出来してきたため、この報告書の作成時までに追加補足調査を行い得たものについて、ここで追加報告をするものである。個別案件の詳細については、次節を参照願いたいが、その補足調査の概要について以下に述べておく。

なお、これらの調査を行うにあたり、以下の方々や機関には協力を賜った。記して感謝したい。田中賢二、中村修身、中村正、若枚善満、筑紫野市教育委員会（敬称略）。

① 報告書刊行時において未調査であり、顕著な遺構があることを認識していなかったが、遺構の存在の情報を入手し、再踏査した結果、遺構を確認したもの

・大丸城（筑前 306）**・猿尾の陣**（豊前 D12）

② 報告書刊行時において調査は行っていたが、場所が異なっていた、あるいは未確認の遺構の存在があったため、再踏査した結果、遺構を追加確認したもの

・天ヶ城（筑前 25）**・扇山城**（筑前 86）**・城山砦**（豊前 106）

③ 報告書刊行時の調査において遺構を確認していたが、報告書作成に間に合わなかったため、改めて調査を行ったもの

・大将陣（豊前 D8）

④ 報告書作成時の調査では、現地調査を行うことができなかったが、遺構がある可能性があると認識し、改めて踏査を行ったが、遺構を確認できなかったもの

・高城（筑前14・筑紫野市）**・弥山城**（筑前89・飯塚市）**・城ヶ尾城**（筑前96・飯塚市）**・椎木谷城**（豊前84・田川市/田川郡川崎町）**・蓑島城**（豊前143・行橋市）**・沓尾城**（豊前144・行橋市）**・佐伯陣**（豊前D9・行橋市）

なお、手切城（豊前 47）を確認する際の根拠資料となった『豊前國田川郡全図』（国立公文書館所蔵）には、手切城や既に知られた城跡の他に、田川郡赤村・添田町周辺にも何ヶ所か城跡の記号がおとされていた。そのため、それらについても現地踏査を実施したが、結局明確な城館遺構を確認することはできなかった。また、馬ヶ岳城（豊前 140・行橋市 / 京都郡みやこ町）の内、みやこ町側の麓に所在するという石垣、土塁などの城館遺構と言われているものについても踏査を行ったが、それらは全て谷水路の護岸や、畑造成などの後世の造成によるものと認識され、城館遺構と断定し得るものは存在しなかった。

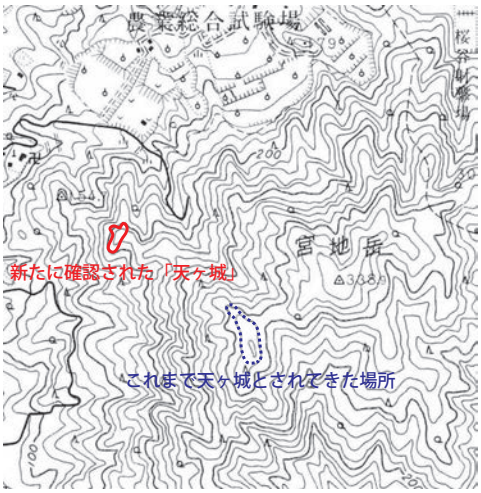
以上のうち、①～③の対象について、次節にて個別報告を行う。また、補足調査は城館の現地調査のみならず、文献史料調査においても同様であり、いくつか未発見のままに不掲載となった文献史料がいくつも確認できた。そのため、次々節において追加分を全て掲載する。

以上の追加調査により、文献史料にのみ存在が明らかで、現地の所在が全く不明のものを除いては、新規に城館としてリストアップされたものはなかったが、６ヶ所の城館については追補訂正することができた。個別報告する案件については、新出のものはないため、位置や参考文献等の諸情報については、既刊の報告書に参照願うこととして、本書では割愛させていただく。

筑前 25　天ヶ城（あまがじょう）	郡名　御笠郡	別称　阿満か城・蘆城城	図幅名　二日市（東）
	種別　山城	所在　筑紫野市阿志岐	

【沿革】筑紫野市東部、宝満川左岸の宮地岳の中腹に位置する。これまでは山頂の南西側の標高338m地点に人為的造成があるとして「天ヶ城」としてきたが、堀切などの明確な城館遺構はなく、城館としてやや不自然な印象を抱いていた。2016年に筑紫野市教育委員会の小鹿野亮氏に宮地岳山中の別の場所に城館遺構が存在する情報をいただき、氏の同行の元、現地調査を行った。

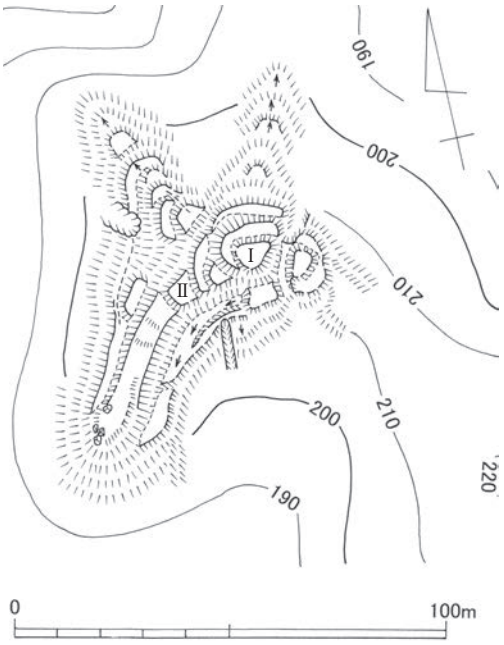
なお、当城は『筑前国続風土記』には「蘆城村古城」として「あまか城といふ。城主詳ならす」とある。また『薦野家譜』の中に天正７年（1579）の秋月・筑紫勢の攻勢に対して、戸次道雪・高橋紹運が「…米の山龍ヵ城あまカ山加羅山香椎山名嶋等に砦を築き軍勢を籠め置」いたことが記されており、当城は「あまカ山」にあたるものとみられる。



第 275 図　天ヶ城位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「二日市」を一部改変して事務局作成）

【概要】城地は宮地岳山頂の北西側の標高約210mの尾根上の頂部に存在し、尾根上頂部Ⅰを起点に、尾根上に縄張りが展開している。Ⅰは一辺約10mにも満たない小曲輪だが、その周囲にも同規模の小曲輪が階段状に展開する。特に南西側の尾根上に平坦地形が顕著にみられ、Ⅱには一部横堀状にもなっている帯曲輪が巡る。また、Ⅰの東側には深さ２mほどの堀切が見られ、山頂部側からの備えとなっている。全長70mほどの小規模な城郭であるが、従前から考えられていた天ヶ城とは異なり、曲輪の平坦面も明瞭であり、なおかつ堀切などの防御遺構も確実に伴うこと、また『古戦古城之図』に掲載された天ヶ城（第276図）の場所とも齟齬をきたさないため、今回報告する遺構群こそが「天ヶ城」そのものであると考えられる。

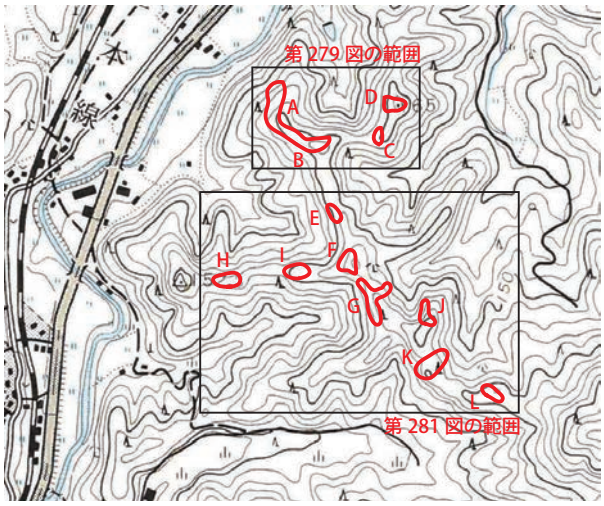
第 276 図　『御笠郡天山村柴田故城之図』（国立公文書館蔵）に描かれた「天ヶ城」



第 277 図　天ヶ城縄張り図（事務局作成）

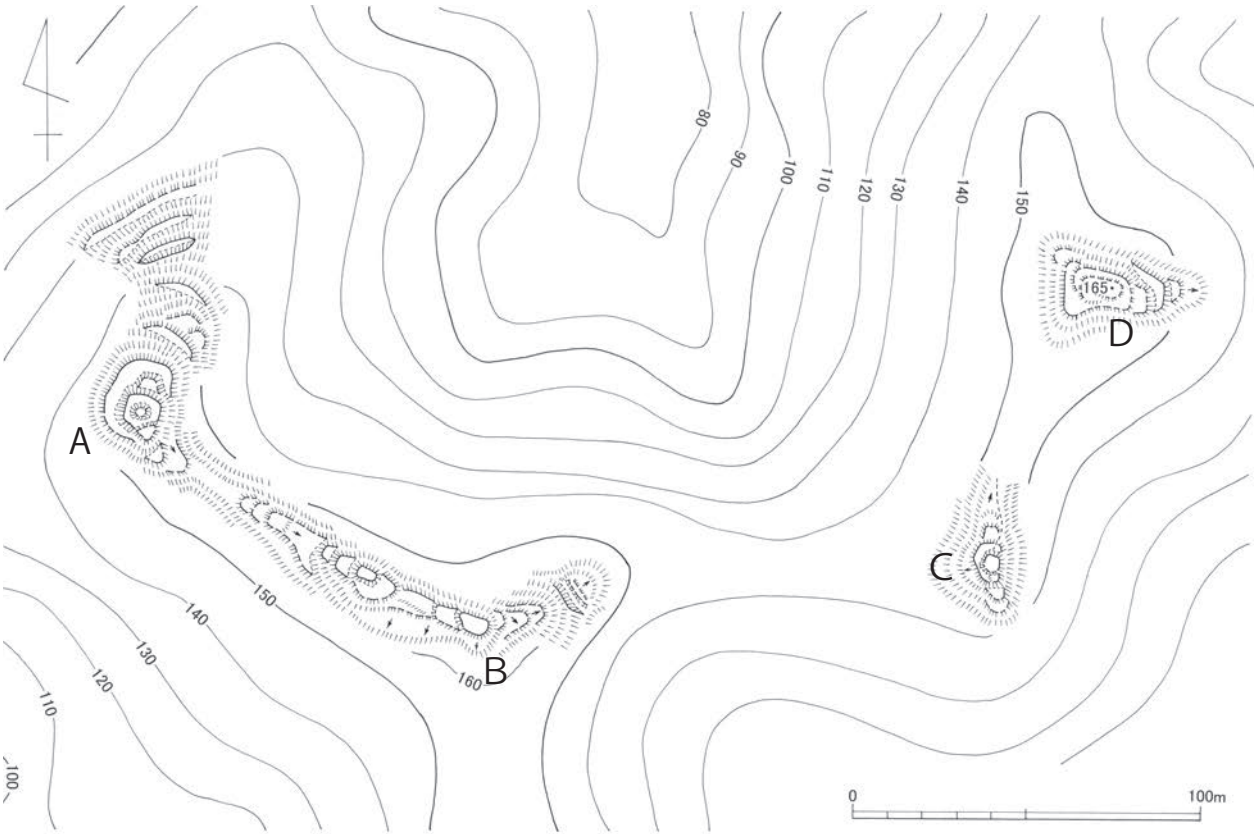
筑前 86 扇山城（おうぎやまじょう）	郡名　穂波郡	別称　修理殿城	図幅名　大隈（西）
	種別　山城	所在　飯塚市阿恵	

【沿革】穂波川東岸に面した標高約170mの山稜部に位置する。従来、江戸時代に描かれた絵図（第280図）などに基づき、廣崎篤夫や中村正によって踏査・作図がなされていた。筆者も報告書Ⅰ作成の段階においても中村氏と共に現地を訪れ確認していたものの、絵図に図示はされていないが、砦のように頂部が平らになっていると記されており（巓モナラシ在之砦址ノコトシ）、城域はさらに広がる可能性を指摘していた。実際にそれらの部分を再度踏査したところ、やはり城館遺構と見られる平坦面群が非常に広域に広がることが判明したため、作図を行い再報告することとした。



第 278 図　扇山城位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「大隈」を一部改変して事務局作成）

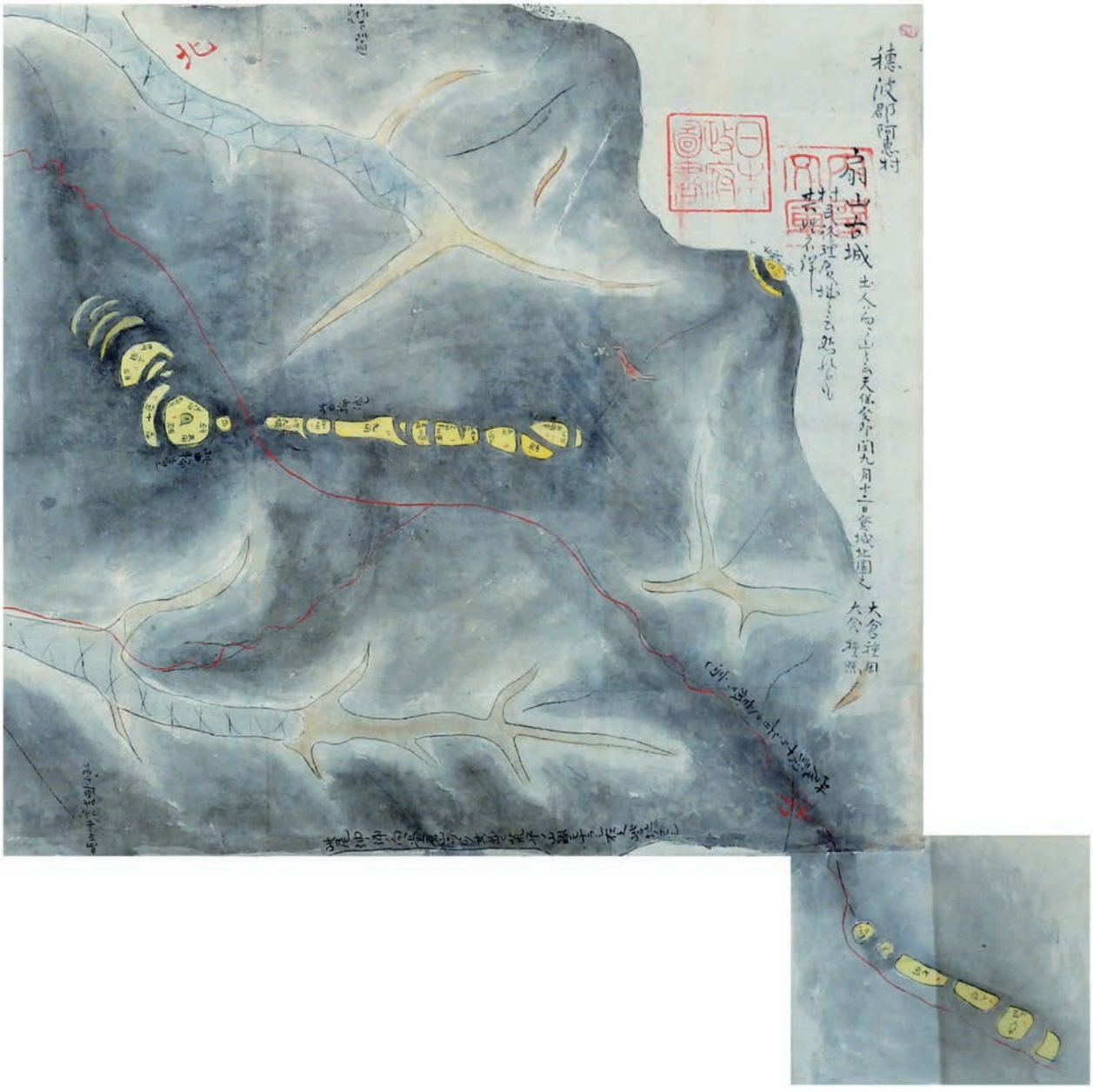
なお、当城は『筑前国続風土記』には「秋月の端城也。村民は修理殿城と云」とし、また同書「八木山村古戦場」の項にも、天正９年（1581）



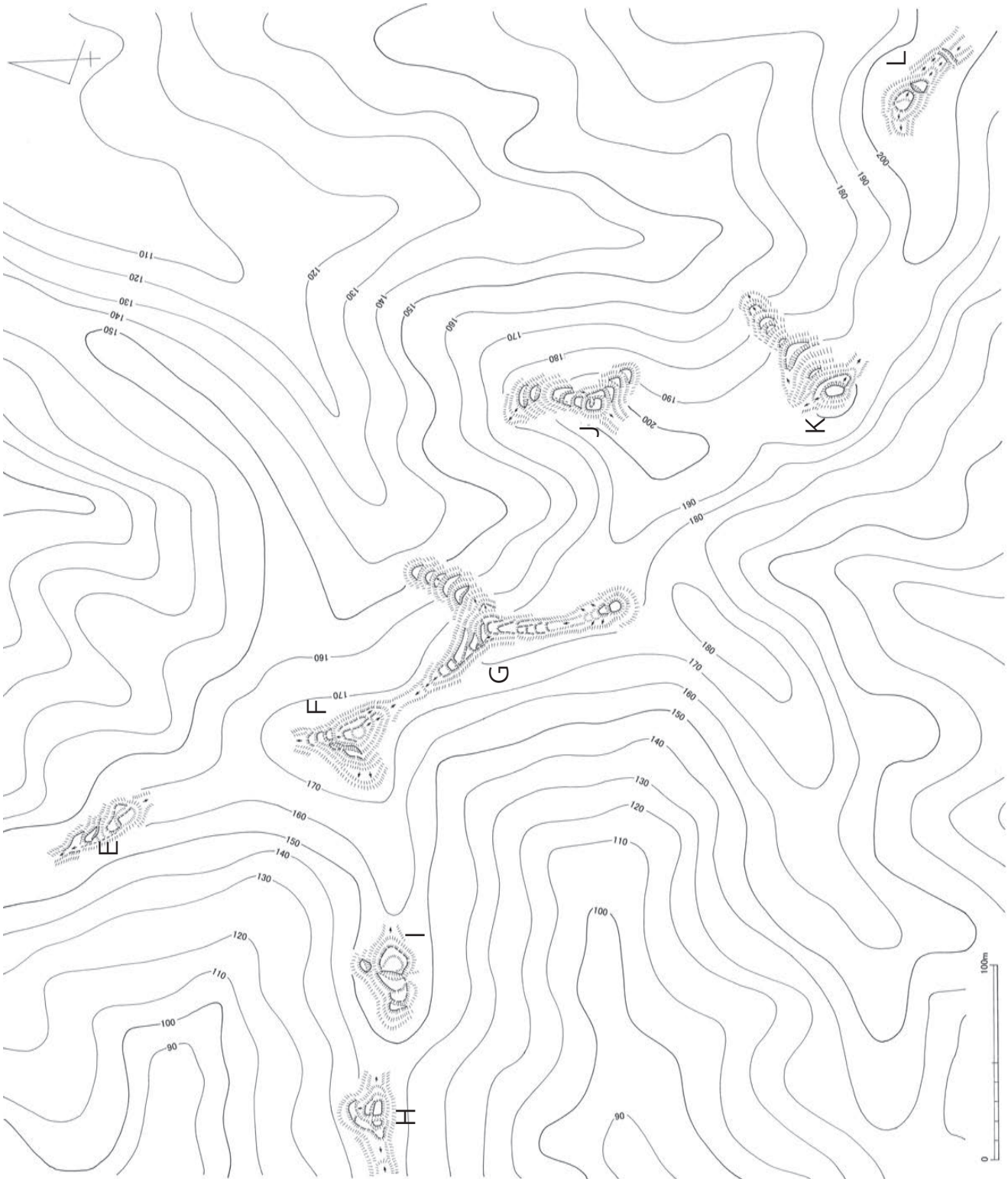
第 279 図　扇山城縄張り図（Ａ～Ｄ地区・事務局作成）

11 月、戸次・高橋両軍が秋月領内に侵攻したため、秋月方の「臼井、扇山、茶臼山、高の山、馬見などの城代共」が合戦に及んだことが認められ、扇山城が穂波郡における秋月方の城として取り立てられていたことがわかる。

【概要】従来は穂波側に突き出た標高約170mの頂部Aから東側約300mの範囲に城館遺構が広がるものと認識されていた（図中A～D）。しかしながら、さらに南側の尾根上、さらにはそこから派生する支尾根上にも曲輪群E～Lが散在することが判明し、およそ12箇所の曲輪群が確認された。以下、順に曲輪群の概要について述べる。A・B地区は従来、扇山城の中心とされる箇所であり、西側の頂部Aを中心に小曲輪群を連ねているが、途中尾根上は自然地形になりながらも、Bまで小曲輪群が連ねられている。Bの北東側には、堀切 1 本を構築する。Bの東側には尾根の鞍部を挟んで約



第 280 図　「穂波郡阿恵村扇山古城図」（部分・『古戦古城之図』のうち。国立公文書館蔵）



第 281 図　扇山城縄張り図（E ～ L 地区・事務局作成）

100m先の地点に曲輪群Cを構築、５面ほど確認できるが、いずれも長さ５m程度の小曲輪である。Cの北側約50m地点の標高165m地点にも曲輪群Dを置くが、あまり丁寧な整形具合とは言えない。Cについては江戸時代の絵図にも「古城ヨリ低シ」と記し、曲輪の描写がなされている。

一方、Bから南側については従来城域ではないとされてきた箇所であるが、Bから南へ尾根上を約100mも進めばEの曲輪群が確認できる。Eは長さ５m前後の小曲輪が４面ほど確認されるばかりで、そこから南へ100mほど尾根を登ると標高約170mの頂部にたどり着き、そこにはFの曲輪群がある。Fは主に北側と西側の斜面に２～３面の小曲輪面を構築する程度である。このEからFにかけての場所については、江戸時代の絵図には曲輪の表記はなされないものの、「此尾頭ナラシ有之　古城ヨリ高シ」とあり、曲輪群の可能性を匂わせている。さらにFから西へ派生した尾根上にもH・Iの曲輪群が構築されている。Iはやや規模が大きな曲輪面が確認できるものの、５面ほどを単位にそれぞれ50mほどのまとまりをもったこじんまりとしたものばかりである。尾根はこの先にも延びているものの、自然地形しか確認できず、城館遺構は構築されていない。なお、H・Iの場所についても、江戸時代の絵図に「荒平ノ巓モナラシ在之砦址ノコトシ」とあり、曲輪群の存在を想定しているかのようである。

Fからさらに南側の尾根上にもGの曲輪群があり、ここは北東側の尾根にも曲輪群が分岐しており、城域南側の曲輪群の中では最も規模が大きく、造成もかなり丁寧になされている印象を受ける。さらに江戸時代の絵図にもはっきりと６面の曲輪の描写がなされている。Fから南東側へもJ・K・Lの曲輪群が構築されており、J・Kの曲輪群は穂波川に面した西側に曲輪を展開させるのではなく、その反対側の北東側に曲輪を展開させている。Lの南東側には浅いながらも堀切１本を構築し、その先はなだらかな地形ではなく、急激に傾斜がきつくなり、城館遺構を確認することはできず、城域はここまでと考えられる。

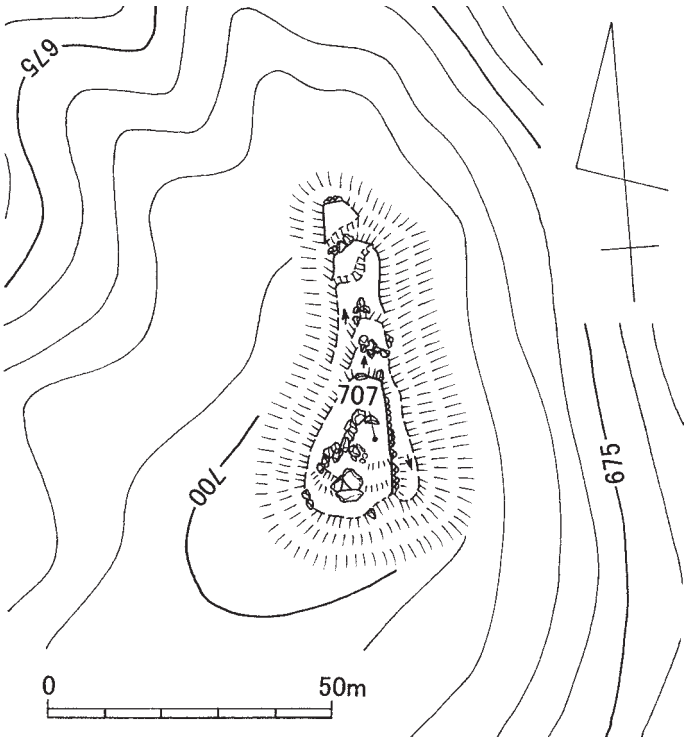
以上のように、扇山城は総延長約１km以上にもわたる尾根上の稜線に曲輪群を散在的に構築し、細長く陣を張るような形態を意図したかのような縄張りを呈している。扇山城のある場所は、穂波郡から冷水峠を越えて御笠郡、あるいは東へ迂回して白坂越えを通れば夜須郡の秋月へたどり着ける穂波川流域の要所を見下ろすような場所にある。そのような重要地点を扼するような立地にあるため、重要視されたとも考えられる一方で、曲輪群の構築を見ると、穂波川に面する西側に積極的に曲輪群を延ばしていく様子でもなく、むしろ穂波川とは逆の東側斜面に曲輪群が構築されている箇所も見受けられた。この意味する所についてはさらに検討を要しようが、いずれにせよ、これらの尾根上の稜線を延々と長城ラインかのように曲輪群を展開させていたり、曲輪の造成もあまり丁寧ではなく、急ごしらえ的な印象を受ける。堀切などの遮断施設が少ないのも特徴的である。このような縄張り構造は、県内の事例では障子ヶ岳城（福岡県田川郡香春町・京都郡みやこ町）の周辺、田川郡と京都郡との境に位置する稜線上に延々と築かれた城館群と類似している。この障子ヶ岳城周辺城館については、香春岳城を包囲するために構築した陣城群の可能性も考えられ、扇山城も一時期に大軍が駐留するような軍事的緊張下に置かれた可能性が十分考えられよう。その時期がいつなのか、永禄期の毛利・大友の争乱や、天正年間の秋月・大友の争乱などが考えられようが、結論を導き出すためには、今後さらに検討を要しよう。

筑前 306	大丸城（おおまるじょう）	郡名　那珂郡	別称　なし	図幅名　不入道（西）
		種別　山城	所在　筑紫郡那珂川町南面里	

【沿革】筑紫郡那珂川町南面里の鷲ヶ岳城のさらに南へ尾根を上った標高707mの頂部に位置する。従前より大丸城は、那珂川町の分布地図（那珂川町教育委員会1995『那珂川町文化財分布地図』）により知られ、地元でも「大丸城」という伝承が存在したため報告書Ⅱでも分布図に掲載していたが、調査時間の制約から現地調査することができなかった。しかし報告書Ⅱ刊行後に田中賢二氏らに城郭遺構が存在するとの情報をもらい、現地調査を行ったところ、城館遺構が存在したため、ここに報告するものである。

【概要】標高707mの頂部は岩の露頭が顕著にみられ、一見自然地形であるかのような印象を受けるが、人工的に平坦面の造成がなされる。頂部には南北約30m×東西約15mの曲輪面があり、その東側から南側にかけて自然石の石垣が構築されている。また北側に向けて階段状に小曲輪が展開し、所々に石が積まれているのが確認できる。堀などの防御遺構は確認できない。全長50mほどの小規模城館であることや、麓からあまりにかけ離れたところにある立地、さらには鷲ヶ岳城のさらに奥にあることなどから、物見や狼煙などの役割を持った鷲ヶ岳城の出城としての性格が考えられよう。

第 282 図　大丸城からの眺め（上・油山が見える）・主郭（中）・石垣（下）

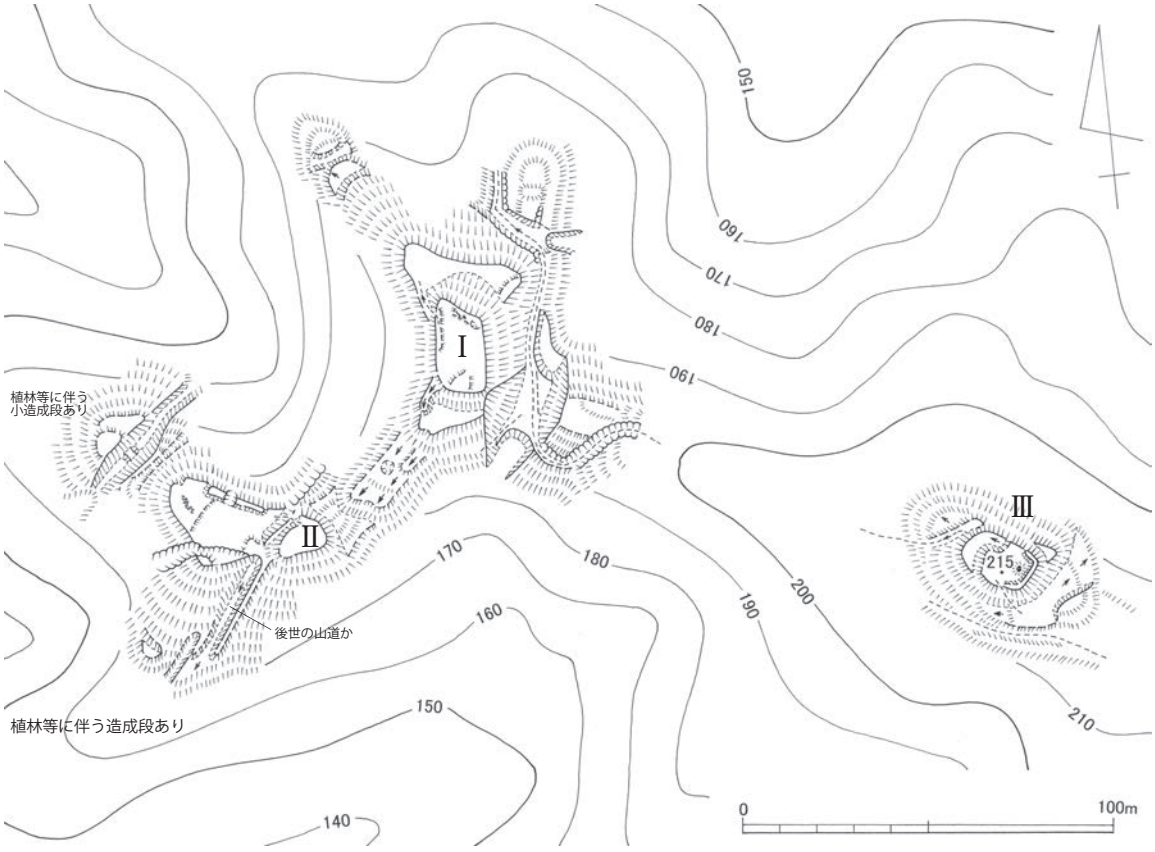


第 283 図　大丸城縄張り図（事務局作成）

豊前 106	城山砦（じょうやまとりで）	郡名　田川郡	別称　添田城・城山城	図幅名　筑前山田（東）
		種別　山城	所在　田川郡添田町添田	

【沿革】田川郡の岩石城の南西麓、通称「城山」と呼ばれる尾根の頂部に位置する。『岩石城』（岩石城史編集委員会・1987年）に報告されたのを初出とし、地名以外には城としての言い伝えは確認できない。上記文献では添田城の出城ではないかとする。報告書Ⅲでは上記文献に掲載されていた図面を参考に現地踏査・作図を行った上で報告していたが、中村修身氏から提供された図面にはそれ以外にも曲輪が図示されていたため、再度踏査して遺構を確認の上、図面を作成した。

【概要】添田中学校の南東側に伸びる尾根の頂部、標高約200mの頂部に位置する。従来は曲輪ⅠとⅡの部分のみが知られていたが、いただいた情報によりさらに東側の尾根上のⅢにも曲輪と堀切があることが判明した。また、再踏査の機会にⅠ及びⅡの周辺についても若干の補足の図化を行っている。曲輪群は大きく東西に分けられ、西側は曲輪ⅠとⅡが中心となる。Ⅰには低土塁が巡り、周囲には腰曲輪、さらには北東、北西、南東側に堀切が各1本設けられる。特に南東側の堀切は深さ約10m、幅約20mもの巨大なものである。またⅡの曲輪の西側の曲輪には、一部土塁状の高まりや集石なども確認ができるが、その西側にも堀切1本が確認できる。なお、Ⅱの南西側にも広大な平坦面群が広がっているが、延々と麓付近まで続いており、おそらく植林等に伴う後世の造成段とみられる。城域の東側には独立して曲輪Ⅲが置かれている。一辺約10mの小曲輪ではあるが、東側に土塁を巡らし、幅10mを越える大堀切が構築される。以上のように東西約200m、南北約150mの範囲にわたり、城域が展開している。



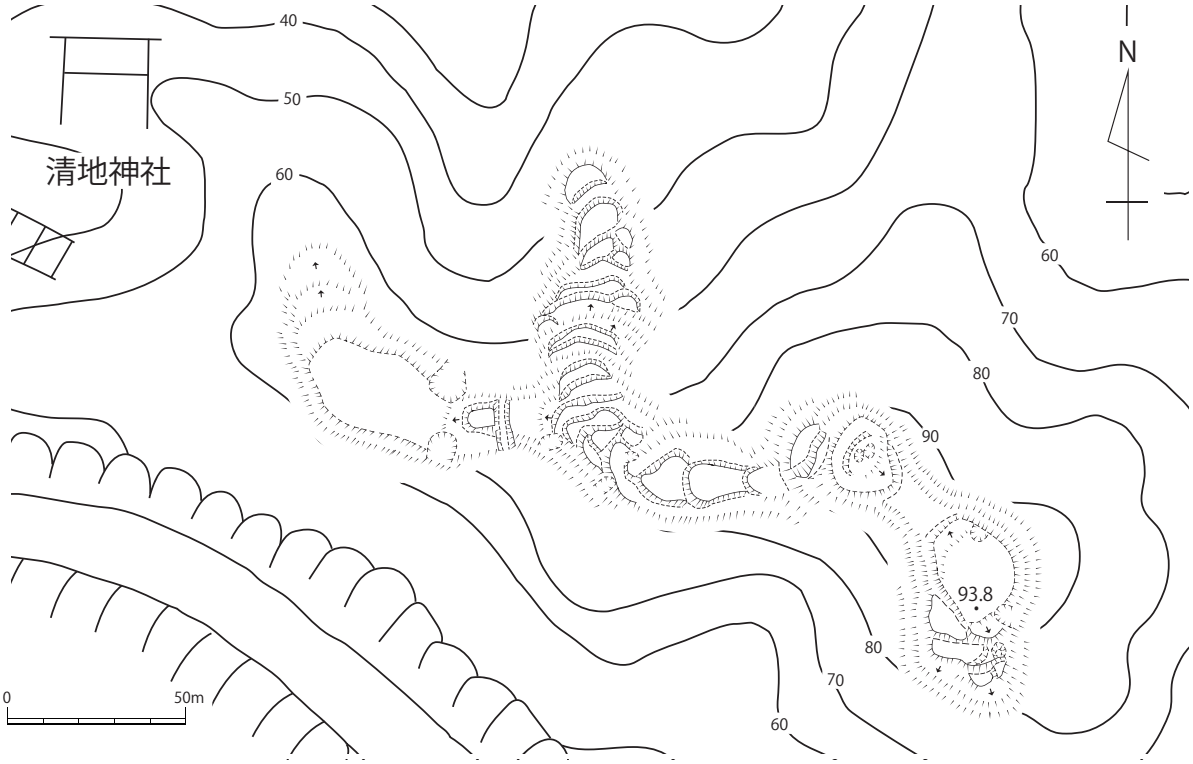
第284図　城山砦縄張り図（事務局作成）

豊前Ｄ８	大将陣（たいしょうじん）	郡名　仲津郡	別称　矢留城	図幅名　行橋（東）
		種別　山城	所在　行橋市矢留	

【沿革】今川東岸、矢留集落にある清地神社の東側、矢留山（標高93m）の山頂に位置する。報告書Ⅲの作成時に現地に城館遺構らしき平坦面群があることは認識していたものの、図化調査をする余裕が確保できず、今回改めて報告することとなった。城地の字は「大将山」であり、『豊前国古城記』には「同(城跡一ヶ所)矢留村ノ内、大将陣」とある。また、『京都郡誌』には『長野家譜』を引き、「馬ヶ岳城之事並家臣の姓名」として「一出城国見矢倉(矢留村にあり大将陣と云山也)」とある。『地名から探る豊前国遺跡』（1976年・定村貴二著）では、「大将山、堀ノ内、小堀、中木戸道」などの関連地名から、「矢留城」を想定し、以後の文献は全てこれに倣っているが、「大将陣」を本来の名称とすべきであろう。

第 285 図　大将陣（矢留山）遠景

【概要】山頂部の主郭は楕円形状を呈し、南北約30m、東西約10mを測る。主郭南側に小規模な曲輪群が５段ほど配される。また主郭北西側の二股に分かれた細尾根上には、それぞれ階段状に小規模な曲輪群が展開し、曲輪群の西側に1本の掘切を設けている。大将陣より南西方向に位置する馬ヶ岳城を視認でき、馬ヶ岳城の出城としての理解も可能かもしれない。また矢留山北側約900m地点の標高12mほどの低段丘上には、中世期の屋敷地群が確認された矢留堂ノ前遺跡（豊前R10）が位置しており、これらと併せた上で当該地の状況を考えていく必要があろう。



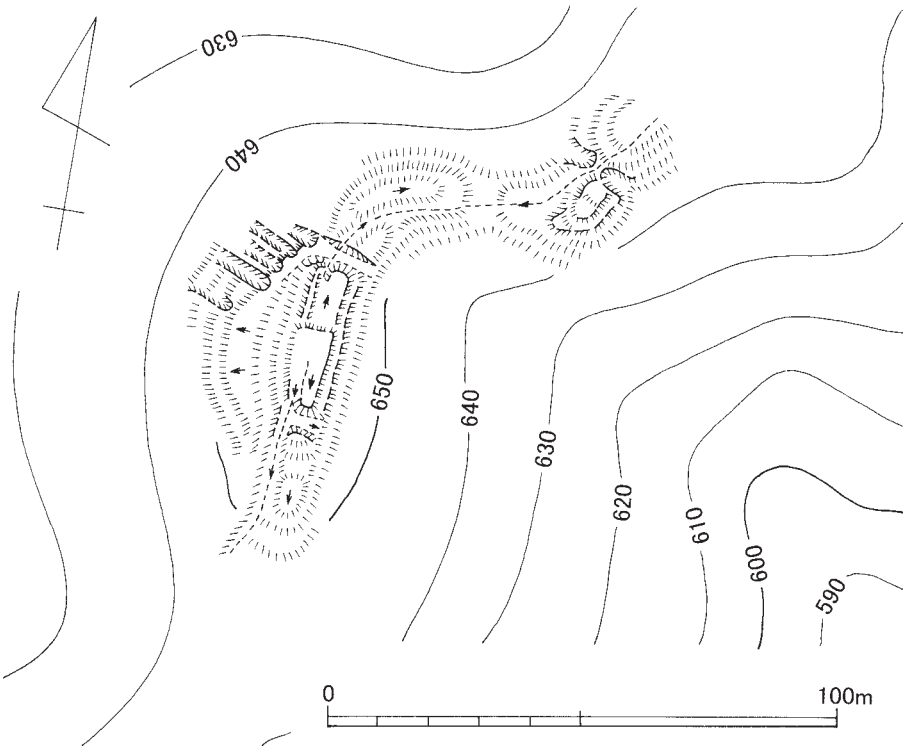
第 286 図　大将陣縄張り図（若枚善満作成・提供）

豊前Ｄ９ 猿尾の陣（さるおじん）	郡名　築城郡	別称　なし	図幅名　伊良原（東）
	種別　山城	所在　築上郡築上町寒田・本庄	

【沿革】豊前城井谷の最奥部、寒田集落の西側に聳える標高660mの頂部の北側、標高約650mの尾根上に位置する。報告書Ⅲ作成時には、築上町教育委員会からの情報として、『陰徳太平記』によると吉川広家が城井谷攻めに際して陣取ったという「猿尾の陣」があり、それが大字寒田の字「猿尾」であり、現地にも堀切が確認できるということであった。時間的制約から現地調査を行うことができなかったが、改めて現地を確認すると城館遺構が確認できたため、ここに報告する次第である。

【概要】三角点のある標高660mの岩山から北へ尾根を進むと、尾根稜線上に堀切３本が確認できる。築上町教育委員会が認識していた堀切は最も北側の堀切で、その南側には堀切２本に挟まれる形で主郭が形成されているのが確認できた。主郭は南北約20m、東西約10mで、尾根稜線上の自然平坦地形を若干平坦にする程度の造成しか行っていないようであり、周囲には切岸と呼べるような急斜面は元から自然の急斜面と思われる東側だけである。また、北側の堀切に平行するように主郭の西側には竪堀が３～４本構築される。また、尾根を北東側へ進むと、堀切と若干造成した地形を確認することができる。『陰徳太平記』のいう吉川広家の陣に当たるかどうかはなお検討の余地があろうが、この場所が城館として使用されたことはまず間違いない。

第 287 図　猿尾の陣主郭（上）・堀切（下）



第 288 図　猿尾の陣縄張り図（事務局作成）

2　城館関連文献史料一覧

【筑前地域補遺】
＜中世城館＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
1 2	唐山東城 唐山西城	(1)	（年未詳）9月10日	大友宗麟書状	竹田津文書14／『大分県史料10』第二部P127	（大友）宗麟	竹田津刑部少輔殿	大友宗麟、竹田津刑部少輔の「賀良山」に在城し、昼夜辛労を果たすを聞きこれを励まし、以前「当城」において敵が取り掛かった際の軍功を讃える。
5	岩屋城	(1)	天文12年11月29日	大内義隆感状写	松隈文書395／『飯塚市史 上巻』P889	（大内義隆）	松隈藤七郎（正勝ヵ）殿	大内義隆、松隈藤七郎に対し、去9月6日、「岩屋城麓」において残党が活動した際、これを防戦し疵を被った旨の注進を千手興国から受け、これを賞す。
		参考	慶長3年10月16日		家勤記得集（稲員家記録）抄録9／『久留米市史 第7巻』P373			永禄10年7月、筑前国「岩屋城主」高橋三河守鑑種、秋月種実と共に豊後大友に叛く。宝満岳に城を構う。これに対し軍兵を率いて宝満・岩屋を攻める。
		参考	慶長3年10月16日		家勤記得集（稲員家記録）抄録9／『久留米市史 第7巻』P373			天正13年、高橋紹運、立花道雪の遺体を棺に納め、立花山で喪す。その際、秋月種実、「宝満城」に忍び入り城を焼く。これにより、高橋紹運は屋山中務大輔の守る「岩屋城」に入る。
		参考	慶長3年10月16日		家勤記得集（稲員家記録）抄録9／『久留米市史 第7巻』P381			天正14年、島津義久、大友を伐たんとし、まず「筑前国岩屋<紹運>・立花<統虎>両城」を攻めんとす。その後、薩軍太宰府に陣して岩屋城を攻め、紹運自害す。
		参考	寛永15年2月15日		神代弥左衛門遺戒書12／『久留米市史 第7巻』P398			天正14年、高橋紹運城（岩屋城）へ田代より陣替え、その後四十日ほどで落城。
6	浦ノ城	(1)	文和2年2月 日	平河貞家軍忠状	肥後平河文書3521／『南北朝遺文 九州編第3巻』P314	平河八郎貞家		「浦城」攻めについて戦功。これについて、「承了（花押）」という一色氏冬の証判有。
		(2)	文和2年2月 日	平河貞家軍忠状	肥後平河文書3522／『南北朝遺文 九州編第3巻』P314	平河八郎貞家		11月24日「宰府合戦」の時、「峯薬師堂」より「浦城」に追籠る。
8	有智山城	参考			宗像軍記・中342／『飯塚市史 上巻』P879			永正3年正月下旬、少弐氏譜代の郎従筑紫資方・麻生元貞、少弐政資を対馬より呼び寄せ筑前に打ち入り、「内山ノ城」に立て籠もる。
10	宝満城	(1)	（天正10年）7月5日	大友義統感状案	簗瀬文書3／『久留米市史 第7巻』P304、大友家文書録2025／『大分県史料33』第二部補遺（5）P195	（大友義統）	簗瀬三河入道殿	去々年以来、宝満城への籠城の忠節を称える。
		(2)	（天正10年）12月8日	大友義統感状写	簗瀬文書4／『久留米市史 第7巻』P304	（大友）義統	簗瀬新介殿	大友義統、高橋紹運の「同城」（宝満城）以来の軍労を賞し、今後の軍忠に期待する旨を伝える。
		(3)	（天正12年）1月15日	朽網宗歴書状	田尻家文書214／『柳川市史 史料編3蒲池氏・田尻氏史料』P196	（朽網）宗歴	（田尻）鑑種	朽網宗歴、「立花・宝満」への使者について連絡。
		参考	慶長3年10月16日		家勤記得集（稲員家記録）抄録9／『久留米市史 第7巻』P373			永禄10年7月、筑前国岩屋城主高橋三河守鑑種、秋月種実と共に豊後大友に叛く。「宝満岳」に城を構う。大友宗麟、これに対し軍兵を率いて宝満・岩屋を攻める。
		参考			家勤記得集（稲員家記録）抄録9／『久留米市史 第7巻』P378			天正12年8月、高橋紹運・立花道雪、「筑前国岩屋・立花両城」に在り。
		参考			家勤記得集（稲員家記録）抄録9／『久留米市史 第7巻』P380			天正13年、高橋紹運、立花道雪の遺体を棺に納め、立花山で喪す。その際、秋月種実、「宝満城」に忍び入り城を焼く。
46	杉本城（秋月宅所）	(1)	（弘治3年）8月25日	臼杵鑑速書状	田尻家文書91／『柳川市史 史料編3蒲池氏・田尻氏史料』P146	（臼杵）鑑速	（田尻）親種	臼杵鑑速、田尻親種の「秋月宅所」の軍忠について披露したことなどを連絡。
66	三日月城（池田山城）	(1)	天正13年閏8月23日	田原氏老臣連署副状写	片山文書26／『大分県史料10』第二部P333	託摩佐渡入道麟専・溝部山城守統秀・萱嶋美作守宏籌・溝部右衛門大夫鎮忠・津崎大和入道麟春・森越中守鎮幡・萱嶋和泉守鐵庫・竹田津志摩守鎮増	片山熊千代殿	田原氏老臣等、「池田里城」大手において、父源六兵衛討死の軍功を賞し、一跡の安堵と今後賞を加うるを約す。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
47	古処山城	参考			大久保家賦18／『大分県史料35』第二部補遺（7）P255			天文12年、「筑前古所城主秋月文種」西牟田親毎・陶安武（大内家臣）と同心肥筑を奪わんとして挙兵す。
		参考			隈江家譜／『飯塚市史 上巻』P934			天正13年、秋月種実嫡子三郎種長、家督を継ぎ「古所山城」に居住。
		参考			岩屋軍記567／『飯塚市史 上巻』P945			豊臣勢に敗北し、城を空け「古所山」に引く。
51	休松城	(1)	（永禄10年）9月8日	大友宗麟書状案	田尻家文書115／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P158	（大友）宗麟	戸次伯耆守（鑑連）殿	大友宗麟、戸次鑑連に対し、「今度之合戦」（休松合戦）における舎弟らの戦死を悼む。
		(2)	（永禄11年）6月7日	戸次鑑連書状	田尻家文書118／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P159	（戸次）鑑連	（田尻）鑑種	戸次鑑連、田尻鑑種に対し去年「休松」において仰せられたことは今も変わらないことを伝える。
69	長尾城	(1)	永和3年1月日	吉川経見軍忠状	吉川家文書253／『増補訂正編年大友史料8』P160	吉川駿河守経見		永和2年9月27日渡海し、「筑前国鴟山之御陣并蜷打御戦」において戦功を挙げる。これについて、「承了（花押）」という今川頼泰の証判有。
		(2)	永和3年1月日	吉川経見軍忠状	吉川家文書254／『増補訂正編年大友史料8』P160	吉川駿河守経見		永和2年9月27日渡海し、「筑前国鴟山之御陣并蜷打御戦」において戦功を挙げる。これについて、「承了（花押）」という今川頼泰の証判有。
90	許斐山城	参考			古部家系伝272-10／『宗像市史 史料編第2巻』P210			天文1年9月15日、宗像氏延「許斐岳」を襲う。
		参考			訂正宗像大宮司系譜276／『宗像市史 史料編第2巻』P214			天文1年、大友義鎮筑前に討入、「許斐嶽」を囲う。
		参考			立花家譜／『飯塚市史 上巻』P927			立花氏、宗像氏貞と筑前潤野原で戦い勝利する。氏貞敗れて「許斐城」に走る。
		(1)	（天正15年以降）	由布雪下戦場覚次第写	由布文書546／『飯塚市史 上巻』P546	（由布雪下）		由布雪下の合戦覚。「筑前国許斐城」で合戦したことを記す。
102	笠木山城（笠城城）	(1)	（永禄12年）10月17日	大友宗麟書状	梅野文書482／『飯塚市史 上巻』P920	（大友）宗麟	千手尾張守殿	大友宗麟、千手尾張守に対し、去15日、「立花表」の敵が敗北した旨の注進を受け、その際、千手尾張守の「笠木城於連緒城其外所々」に放火した報告を受け、毛利氏との合戦が予定通りに進んだことを慶ぶ。
		(2)	（天正14年）11月9日	立花統虎書状写	萩藩閥閲録555／『飯塚市史 上巻』P936	立左（立花）宗虎	上野掃部助（秋宣）殿	去2日、「笠城敵陣」における軍忠を賞す。本文書は検討を要す。
		(3)		朝倉隆秋書状写	萩藩閥閲録556／『飯塚市史 上巻』P936	（朝倉）安房守隆秋	上野掃部助（秋宣）殿	去2日、「笠城敵陣」において立花統虎の許での軍忠を賞す。本文書は検討を要す。
125	茅城（馬見城）	(1)	（永禄12年）1月16日	吉川元春・小早川隆景連署書状写	佐賀文書纂・小田村文書460／『飯塚市史 上巻』P911	（小早川）隆景、（吉川）元春	小田村備前守殿	麻生隆実に対し、「馬見在番之儀」を申入れる。
		(2)	（天正7年ヵ）	大友義鎮条々事書	入江文書515／『飯塚市史 上巻』P925	（大友）義鎮	田原常陸介（親宏）殿	条々の中に「一馬見表之事」とみえる。なお、差出人・宛所は包紙ウハ書から補った。
		参考	天正9年4月28日	秋月種実知行宛行状写	秋月志料稿・上野四郎兵衛家古文書516／『飯塚市史 上巻』P925	（秋月）種実花押	上野四郎兵衛尉殿	秋月種実、先年筑前国「休松・馬見・本当寺之鑓」・筑後国「妙見嶽・原竈」の合戦において度々戦功を挙げるを賞す。なお、文言から偽文書の可能性が高いが、参考までに掲げる。
126	花尾城	参考			歴代鎮西志377-1／『宗像市史 史料編第2巻』P374			帆柱山の花尾城を麻生鑑種が守る。
127	益富城	参考			隈江家譜549／『飯塚市史 上巻』P934			天正13年、秋月種実隠居して「大隈ノ城」に移る。
182	龍ヶ岳城か	(1)	「永禄11年」6月28日	田原親宏感状	萱嶋文書43／『大分県史料10』第二部P261	（田原）親宏	萱嶋美濃守殿	田原親宏、萱嶋美濃守に対し、今度、西大野宮山に芸州衆が立て籠もっている件に関して、去5月20日に取り掛かり、更には「一城」を落城させたことを讃える。また、合戦の中で「杉・西郷両城」を防戦したことを承知したことを伝える。なお、年次は異筆。
204	香月館	(1)	正平12年2月日	於保胤宗軍忠状	肥前多久文書3950／『南北朝遺文 九州編第4巻』P71	於保五郎胤宗		去年10月、「山鹿」に馳参り御供し「香月城郭」破却の際に合戦に及ぶ。軍忠について、「一見了（花押）」という五條良氏の証判有。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
216	多良倉岳城（含「麻生山」）	(1)	□〔永〕和2年6月日	長井広世軍忠状	毛利家文書5314／『南北朝遺文 九州編第5巻』P182	〔長井五郎〕弘世		麻生山・城井における合戦における戦功を報告。「承了（花押）」という今川了俊の証判有。
228	古賀城	参考			占部家系伝272-11／『宗像市史 史料編第2巻』P210			文亀3年9月11日、占部尚安「鞍手郡古賀城」に移る。
243	白山城（宗像城 永禄年間まで）	(1)	永徳１年7月日	深堀時久軍忠状	深堀家文書353／『佐賀県史料集成 古文書編第4巻』P221	（深堀時久）		康暦１年9月25日、「宗像城」に召され忠節をしたことを報告。これについて、「承了（花押）」という今川仲秋の証判有。
		(2)		深堀時清軍忠状	深堀家文書354／『佐賀県史料集成 古文書編第4巻』P222	（深堀時清）		康暦１年9月25日、「宗像城」に進発し、忠節をしたことを報告。これについて、「承了（花押）」という今川仲秋の証判有。
		参考			訂正宗像大宮司系譜9／『宗像市史 史料編第2巻』P5			応永5年8月、少弐忠資、宗像氏経の留守を伺い宗像西郷に陣を張り、「白山城」を攻める。宗像氏経肥後より帰国し大内盛見の助けを得てこれを退ける。
256	名残城	参考			訂正宗像大宮司系譜286-1／『宗像市史 史料編第2巻』P219			天文2年、宗像氏続、大宮司職を辞し「名残城」に籠る。
268	高宮城	(1)	応安8年2月日	田原氏能軍忠状	入江文書23／『大分県史料10』第二部P391、入江文書188／『増補訂正編年大友史料8』P117	田原下野権守氏能		応安5年3月26日、「高宮御陣」に馳せ参る。
271	亀山城	(1)	享禄5年9月19日	河津隆業合戦分捕手負注文写	河津伝記272-1／『宗像市史 史料編第2巻』P204	河津新四郎隆業	杉豊後守（興長）殿	享禄5年（天文1年）9月19日、大友方の宗像氏延、「隆業宅所」に取り懸かるも、河津隆業、卯時から未刻まで防戦す。その際に大内氏家臣杉興長に出された「郎従僕従太刀打粉〔分〕捕手負人数注文」。袖に「龍福寺殿袖判」（大内義隆）とあり。「隆業宅所」については、『筑前国続風土記拾遺』の「亀山古城」の項に享禄5年9月19日に大友方の立花親貞・宗像氏延・大和左衛門尉らが「此城」を攻めたと記す。時期的にみて亀山城を指すヵ
		(2)	享禄5年9月25日	大内義隆感状写	河津伝記272-3／『宗像市史 史料編第2巻』P205	（大内）義隆	河津新四郎（隆業）殿	大内義隆、河津隆業に対し、享禄5年9月19日に大友勢の先鋒として宗像氏延が「隆業宅所」を攻めた際、これを防ぎ氏延の頸を捕ったことや合戦の軍功を賞す。
		参考			河津伝記272-4／『宗像市史 史料編第2巻』P206			河津興光子の新四郎長裕、大永7年8月家督を継ぎ「西郷亀山ノ邑城」に居住。後、長裕大内義隆に属し偏諱を授かり隆業と号す。後、享禄5年9月19日、大友方の立花親貞・宗像氏延・大和左衛門尉等、「隆業ヵ亀山ノ城」に押し寄す。
		参考			宗像記272-5／『宗像市史 史料編第2巻』P207			享禄5年9月19日、大友方の宗像新四郎氏延、「隆業宅前」を攻める。河津隆業これを防ぎ、氏延の頸を捕る。
272	上西郷城か	(1)	「永禄11年」6月28日	田原親宏感状	萱嶋文書43／『大分県史料10』第二部P261	（田原）親宏	萱嶋美濃守殿	田原親宏、萱嶋美濃守に対し、今度、西大野宮山に芸州衆が立て籠もっている件に関して、去5月20日に取り掛かり、更には「一城」を落城させたことを讃える。また、合戦の中で「杉・西郷両城」を防戦したことを承知したことを伝える。なお、年次は異筆。
273	飯盛城	参考			河津伝記215／『宗像市史 史料編第2巻』P157			明応5年11月、大友・少弐勢「所々ノ大内領」を攻める。立花・麻生を先鋒として「高鳥居・飯盛ノ両城」を攻める。河津弘業は「飯盛ノ城」を守る。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
283	高鳥居城	参考			河津伝記215／『宗像市史 史料編第2巻』P157			明応5年11月、大友・少弐勢「所々ノ大内領」を攻める。立花・麻生を先鋒として「高鳥居・飯盛ノ両城」を攻める。「高鳥居」は河津弘業・同綱家・深川右京・阿野弾正忠・遠藤刑部・石津彦四郎等数百騎がこれを守る。
		参考	慶長3年10月16日		家勤記得集（稲員家記録）抄録99／『久留米市史 第7巻』P383			天正14年、立花統虎、星野兄弟立て籠もる「鷹取城」を攻めこれを討つ。
		参考		合屋姓由緒記	青柳資料・嘉摩穂波糟屋散在文書写358／『飯塚市史 上巻』P882			合屋氏、大内義隆に仕え、後に「粕屋郡高鳥井の城主杉弾正忠重」に仕える。
292	立花山城	(1)	（年未詳）3月20日	大友義長書状	岐部文書5／『西国武士団関係史料集31』P13	（大友）義長	「岐部□□〔五郎ヵ〕左衛門尉殿」	大友義長、岐部左衛門尉に「立花城番」について連絡。
		参考			占部家系伝272-10／『宗像市史 史料編第2巻』P210			天文元年9月、占部豊安、大友方の立花鑑光の城「立花城」を攻めて戦功あり。
		参考			歴代鎮西要略273-2／『宗像市史 史料編第2巻』P213			天文元年、大内・大友合戦あり、大友軍敗れて「立花城」を去る。
		(2)	（天文2年ヵ）2月4日	杉興重書状	宗形神社文書278／『宗像市史 史料編第2巻』P215	（杉）興重	黒河刑部少輔（隆尚）殿	杉興重、黒河隆尚の、2月2日「立花麓」における戦功を讃える。なお、『宗像大社文書』は年次を天文1年と比定する。
		(3)	（天文2年ヵ）3月9日	大内義隆感状写	河津伝記279／『宗像市史 史料編第2巻』P216	（大内）義隆	河津新四郎（隆業）殿	大内義隆、「立花要害」の計略に関して陶入道の注進が到来、隆業の戦功を賞す。
		(4)	（天文12年2月12日）	大友家社奉行連署事書案	宇佐永弘文書2250／『大分県史料6』第一部P203	田北大和守（鑑生）、一万田弾正忠、臼杵四郎左衛門尉（鑑続））、吉岡越前寺（長増）、小原四郎左衛門尉（鑑元ヵ）		「立花城」について、よくよく思慮を巡らすこと。
		(5)	（年未詳）11月14日	鑑光書状	大友家文書録1193／『大分県史料32』第二部（2）P195	鑑光	本郷殿、上野殿	「立花御城番」の辛労を謝し、替衆については疎略なき旨を伝える。
		参考		房顕覚書	房顕覚書／『広島県史 古代中世史料編Ⅲ』P1144			永禄6年8月、毛利隆元の遠行によって、十ヶ国衆が「橘」に下向。
		(6)	（永禄12年）5月10日	大友宗麟書状	田尻家文書120／『柳川市史 史料編3蒲池氏・田尻氏史料』P160	（大友）宗麟	田尻中務太輔（鑑種）殿	大友宗麟、田尻中務太輔の5月6日「立花表」における合戦勲功を賞す。
		(7)	（永禄12年5月10日）	大友宗麟合戦手負注文一見状	田尻家文書121／『柳川市史 史料編3蒲池氏・田尻氏史料』P160	（大友宗麟）	（田尻鑑種）	大友宗麟、田尻鑑種の提出した永禄12年5月6日「立花表敵陣切岸」における合戦の田尻鑑種被官の手負注文に一見を加える。
		(8)	（永禄12年5月23日）	大友宗麟感状	大友家文書録1546／『大分県史料32』第二部（2）P346	（大友）宗麟	一万田民部少輔（鎮実）殿	前18日「立花表」における軍労を賞し、家中の者の手負や戦死の着到に披見したことを伝える。
		(9)	（年未詳）	戸次鑑連（ヵ）書状写	横岳家文書191／『佐賀県史料集成古文書編第6巻』P290	（戸次）鑑連	横岳殿	差出人に朱書で「戸次伯耆守筑前立花城主」とみえる。
		(10)	天正6年6月1日	宗像第一宮御宝殿置札	宗像大社所蔵772／『中世益田・益田氏関係史料集』P312	奉行吉田飛弾〔騨〕守尚時・奉行豊福式部卿秀賀・奉行石松対馬守尚宗・奉行御樋対馬守秀盛・奉行高向中務卿良秀・奉行吉田伯耆守重致・社奉行許斐安芸守氏鏡・筆者実相院益心	（宗像宮）	永禄11年4月12日、「立花敵城」の麓に芸衆が陣を張る。城督は立花弥十郎・田北民部少輔・臼杵進士允・鶴原掃部助等。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
292	立花山城	(11)	（天正12年）1月15日	朽網宗歴書状	田尻家文書214／『柳川市史 史料編3蒲池氏・田尻氏史料』P196	（朽網）宗歴	（田尻）鑑種	朽網宗歴、「立花・宝満」への使者について連絡。
		(12)	天正14年8月12日	神田元忠書状	深安地區三吉鼓文書16／『広島県史 古代中世編Ⅳ』P904	（神田）元忠	鼓宮徳丸殿	「立花」に目を向け籠城すべき旨を伝える。
		(13)	天正14年8月16日		上井覚兼日記／『柳川市史 史料編3蒲池氏・田尻氏史料』P380			「立花之城」とみえる。
		(14)	（天正15年）9月8日	豊臣秀吉朱印状写	多久家文書8／『佐賀県史料集成 古文書編第10巻』P311	（豊臣秀吉）	龍造寺民部大夫とのへ	肥後国一揆に際し、毛利右馬頭輝元を「立花之城」に出馬させる旨を伝える。
		参考	慶長3年10月16日		家勤記得集（稲員家記録）抄録9／『久留米市史 第7巻』P380			天正13年、高橋紹運、立花道雪の遺体を棺に納め、立花山で喪す。その際、秋月種実、「宝満城」に忍び入り城を焼く。戸次左近将監統虎、「立花城」を守る。
		参考	慶長3年10月16日		家勤記得集（稲員家記録）抄録9／『久留米市史 第7巻』P381			天正14年、島津義久、大友を伐たんとし、まず「筑前国岩屋〈紹運〉・立花〈統虎〉両城」を攻めんとす。
301	龍神山城（岩門城）	(1)	（長享1年）4月28日	少弐政資書状写	馬廻御判物帳／『長崎県史 史料編第1』P741	（少弐）政資	宗中務少輔殿	少弐政資、「岩門亀尾敵城」を攻め、落居が近いことを連絡。
		(2)	明応6年9月23日	大内氏奉行人連署奉書	長岡家文書478／『中世益田・益田氏関係史料集』P181	民部丞（岡部武景）・兵庫助（杉弘隆）	長岡助八（盛実）殿	5月13日以来、「城督」遠田治部丞兼相と共に「岩門」に在城するを賞す。 ※『中近世城館跡Ⅱ－筑前地域編2-』に同文書の写がみえる。ここには正文を別途掲げる。
315	安楽平城	(1)	文明10年10月26日		正任記440／『中世益田・益田氏関係史料集』P166			「安楽平城奉行」である遠田石見守兼常・飯田中務丞秀長が、早良郡辺に落人が出張している旨を大内政弘に言上。
329	高祖城	参考	文禄元年10月日	佐々木家記録写	郷原幸年所蔵文書896／『中世益田・益田氏関係史料集』P377			足利尊氏の軍勢、「筑前ノ原田カ城高祖」に入る。
348	柑子岳城	(1)	（年未詳）3月日	戸次道雪書状写	「伯耆志（会見郡4）」所収文書8／『新鳥取県史 史料編古代中世1古文書編 上』P176	（戸次）道雪	佐伯孫六殿	「柑子岳籠城」について兵粮が尽き難儀していたため、兵粮を籠めた帰路に起きた生松原で起きた合戦の活躍を賞す。
358	親山城	(1)	（年未詳）9月14日	大友親治感状写	改正原田記附録上66／『増補訂正編年大友史料14』P39	（大友）親治	是松新兵衛尉殿	大友親治、是松新兵衛尉に対し、9月8日の「小金丸攻口」における戦功を賞す。
		(2)		大友義長感状写	改正原田記附録上67／『増補訂正編年大友史料14』P39	（大友）義長	是松新兵衛尉殿	大友義長、是松新兵衛尉に対し、9月8日の「小金丸攻口」における戦功を賞す。

＜所在不明＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
F7	嘉麻城	(1)	建武4年10月25日	長野助豊軍忠状写	長野文書166／『飯塚市史 上巻』P845	（長野）仲原助豊	進上　御奉行所	長野助豊、筑前国嘉麻郡凶徒等誅伐のため、「御教書案并御施行」の旨に任せ、大将（佐竹義尚）に属して「彼城内」（嘉麻城）に懸け入り戦功をあげる。これについて、「承畢、太宰少弐」（少弐頼尚）という証判あり。
		参考			宗像軍記・中342／『飯塚市史 上巻』P879			大内義興、少弐氏の立て籠る「嘉麻ノ城」を攻め落とす。その後少弐は「内山ノ城」に立て籠もる。

＜近世城館＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
K13	名島城	(1)	（年月日未詳）	牛庵（益田元祥）一代奉公覚書	益田家文書461／『大日本古文書家分け22-2』P179	（益田元祥）		豊臣秀吉、小早川隆景に益田景祥を小早川秀秋に付すよう命ず。これを受け、「御留守居」として「名嶋」に置かるべき旨を述べる。

＜新出城郭＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
	立岩城	(1)	正平8年8月15日	八幡三社大菩薩神体台板調査録	飯塚市川島・川島八幡宮、嘉穂郡誌200／『飯塚市史 上巻』P855	立岩城主到津大宮司宇佐宿祢公連		筑前国嘉麻郡「河島」にある川島八幡宮の由緒。差出人に「立岩城主」到津大宮司宇佐宿祢公連とみえる。
		(2)	正平13年12月旬8日	漆生八幡宮神体銘写	嘉麻市漆生・漆生八幡宮、嘉穂郡誌206／『飯塚市史 上巻』P856	立岩領主到津大宮司宇佐宿祢公連		奉納された八幡大菩薩稲築宮御神像に関する神体銘の写。差出人に「立岩領主」とみえ、川島八幡宮の「立岩城主」と同義ヵ。
	山田新城	(1)	（年未詳）2月19日	吉川元春・小早川隆景連署書状	佐藤文書470／『飯塚市史 上巻』P913	（小早川）隆景、（吉川）元春	佐藤又右衛門尉殿	「山田新城」に兵粮を差籠める件について、「路地送」は庄内の給人に申し付けたこと、これを緩怠なく行うよう連絡。

【豊前地域補遺】
＜中世城館＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
22 23	大三岳城 小三岳城	(1)	(年未詳) 2月14日	田原紹忍書状	長野文書7／『大分県史料10』第二部 P88	(田原) 紹忍	長野内記兵衛尉殿	田原紹忍、長野内記兵衛尉の養父右馬助が「三岳要害」において戦死した戦功を讃える。
32	宮山城 (宮尾城)	(1)	(永禄2年ヵ) 9月22日	某チヤ書状	田尻家文書99／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P149	チヤ	タネ (田尻親種)	某チヤ、田尻親種に対し、9月21日に「宮雄要害」を切崩し勝利を得、「真清」を討果たすため、郡内を焼き払ったこと、これは、豊州への緩怠ではなく、宿意である旨を大友氏に「仰上」げてほしい旨を伝える。
		(2)	(永禄2年ヵ) 9月22日	某シ・宿連署書状	田尻家文書101／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P150	宿、シ	タネ (田尻親種)	某シ・宿ら、田尻親種に対し、「宮雄要害」の件に関して助言を求める。
		(3)	(年未詳) 5月24日	某感状	松原文書6／『大分県史料10』第二部 P348		松原内蔵丞殿	「宮山」における軍忠を賞す。これについて、「承了(花押)」という今川了俊の証判あり。
37	堀越城 (鷲岳城)	(1)	応安5年9月日	周布士心軍忠状写	萩藩閥閲録21・4982／『南北朝遺文 九州編第5巻』P52	周布因幡入道士心(兼氏)		応安5年8月22日、「豊前国規矩郡鷲尾城」に押寄せ凶徒ら悉く没落す。
		(2)	元亀1年1月25日	大友宗麟書状写	片山文書／『小郡市史５ 中世・近世・近代』P344	(大友) 宗麟	田原近江守(親賢)殿、田原常陸介(親宏)殿	鷲岳城に高橋鑑種を入城させるに当たって、普請を早急に行うことを命じる。
		(3)	(元亀１年) 6月8日	吉川元春書状写	堀立家証文写／『小郡市史５ 中世・近世・近代』P345	(吉川) 元春	堀立壱岐守殿	高橋鑑種が近日鷲岳に入城することを報じる。
39	長野城	(1)	(永禄8年) 10月5日	大友宗麟(義鎮)知行預ヶ状	飯田文書1／『大分県史料8』第二部 P116	(大友) 宗麟 (義鎮)	飯田但馬守殿	大友宗麟、飯田但馬守の、今度「長野表」における軍功を賞し、豊前国の内20町を預け置く。
50	香春岳城	(1)	(永禄2年) 8月26日	大友義鎮感状	大友家文書録1439／『大分県史料32』第二部 (2) P293	(大友) 義鎮	田原常陸守(親宏)殿	大友義鎮、去22日「西郷遠江守要害」における軍功を賞し、「門司・花尾・高春岳」攻めを促す。
		(2)	(永禄5年ヵ) 3月19日	大友義鎮書状	大友家文書録1433／『大分県史料32』第二部 (2) P291	(大友) 義鎮	志賀常陸守(鑑綱)殿	「香春嶽城督」を賞し、百五拾町分を預け、城料として四百五十町分を付け遣わす。
		(3)	(永禄5年) 10月28日	大友宗麟感状写	堀文書1／『西国武士団関係史料集25』	(大友) 宗麟	臼杵孫七殿	「香春岳」以来所々の軍功を賞す。
		(4)	(天正14年) 12月3日	益田元祥書状	嶺家文書836／『中世益田・益田氏関係史料集』P349	(益田) 元祥	深田中務少輔(氏栄)殿	益田元祥、深田氏栄の昨日2日に「香春岳」の「五徳之口」における合戦での軍功と、被官新五郎の矢疵を被るを讃える。
		(5)	(天正14年) 12月12日	豊臣秀吉朱印状	益田家文書380／『大日本古文書家分け22-2』P79	(豊臣秀吉)	益田(元祥)とのへ	「香春嶽要害」で付城を築城して在陣しているとの事、黒田孝高より報告を受け、その辛労を労う。 ※『中近世城館跡Ⅲ―豊前地域編―』に同文書の写がみえる。ここでは正文を別途掲げる。
		(6)	(天正14年) 12月12日	豊臣秀吉朱印状	三浦家文書108／『大日本古文書家分け14』P404	(豊臣秀吉)	神田宗四郎(元忠)とのへ	「香春嶽要害」で付城を築城して在陣しているとの事、黒田孝高より報告を受け、その辛労を労う。 ※『中近世城館跡Ⅲ―豊前地域編―』に同文書の写がみえる。ここでは正文を別途掲げる。
		(7)	天正19年11月1日	上領頼宣起請文写	平生町立平生図書館蔵長家文書872／『中世益田・益田氏関係史料集』P365	上(上領)民部左頼宣	後藤吉左衛門尉殿	上領頼宣、天正9年以来の吉見氏の下での軍忠を書き上げる。その中に、「一かわらかたけ(香春岳)〇〔一こ口〕御持候へと仰候時」とみえる。
		(8)	(天正15年以降)	由布雪下戦場覚次第写	由布文書546／『飯塚市史 上巻』P546	(由布雪下)		由布雪下の合戦覚。このうち、「永禄元年六月」に「香春城」で合戦したことを記す。
		参考			隈江家譜560／『飯塚市史 上巻』P938			豊臣秀吉、豊前国「河原岳」に着陣。先手蒲生氏郷、4月1日に「岩石ノ城」に押し寄す。
		参考			岩屋軍記／『飯塚市史 上巻』P943			豊臣秀吉、豊前国小倉に着す。「同国(豊前国)香春の城主」高橋元種、降参して豊臣方の先手に加わる。
104	岩石城	(1)	天正15年3月3日	秋月種長覚書写	薩藩旧記雑録後編巻十九・御文庫拾六番箱六巻・義弘公御譜558／『飯塚市史 上巻』P936	(秋月種長)		毛利勢、一両日中に「彦山か岩石か大隈」に陣替え。
		参考			隈江家譜560／『飯塚市史 上巻』P938			豊臣秀吉、豊前国「河原岳」に着陣。先手蒲生氏郷、4月1日に「岩石ノ城」に押し寄す。
		参考			北肥戦誌／『飯塚市史 上巻』P940			4月1日、豊臣秀吉、小倉に陣し丹波秀勝・前田利長・蒲生氏郷を以て長野鎮貞の守る「岩石城」を攻める。
		参考			岩屋軍記／『飯塚市史 上巻』P943			「同国(豊前国)巌石の城主ハ秋月か侍大将隈□〔江〕越中守・芥田悪六兵衛と云者共」両大将として籠城。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
129	松山城	(1)	（永禄5年）9月10日	戸次鑑連書状	田尻家文書103／『柳川市史 史料編3 蒲池氏・田尻氏史料』P151	（戸次）鑑連	（田尻）親種	戸次鑑連、田尻親種に対し、当陣衆も「松山」に至り、やがて取るべく陣を寄せ詰めることは、田川郡の抑えとして第一であることを伝える。 ※『福岡県の中近世城館跡Ⅲ―豊前地域編―』所載の表では、「山田家文書」所収の同文書を記載している。
		(2)	（永禄5年）11月12日	宗像氏貞書状	山田家文書442／『飯塚市史 上巻』P904	（宗像）氏貞	有田加賀守（経道）殿、山田民部丞（満重）殿	去9日「松山」に敵が差寄せた。
		(3)	（永禄7年）3月2日	大友宗麟所領預置状	岐部文書4／『西国武士団関係史料集31』P38	（大友）宗麟	岐部兵庫助殿	大友宗麟、岐部兵庫助の「豊前国松山城攻口」における戦功を賞し、豊筑間15町を預け置く。
140	馬ヶ岳城	参考			歴代鎮西志160-3／『宗像市史 史料編第2巻』P125			文明1年、大内氏当主政弘に反旗を翻した大内氏一族の大内道頓（教幸）、大内氏家臣陶弘護と戦うも破れ、豊前「馬岳」に入る。なお、年次や内容に誤り多く信憑性を欠く。
		参考			歴代鎮西要略160-4／『宗像市史 史料編第2巻』P126			大内氏家臣陶弘護、大内氏当主政弘に反旗を翻した大内氏一族の大内道頓（教幸）を攻め、「馬岳」を囲う。この後、大内道頓、妻子を殺害した後自害す。なお年次や内容に誤りが多く信憑性を欠く。
		参考			宗像軍記160-6／『宗像市史 史料編第2巻』P127			去8日、大内氏当主政弘に反旗を翻した大内氏一族の大内道頓（教幸）、豊前柳ヵ浦に押し渡り、その後、「馬ヵ岳ノ城」に入りて妻子と共に自害す。なお年次や内容に誤りが多く信憑性を欠く。
		(1)	弘治3年7月23日	田原親宏感状	森文書4／『西国武士団関係史料集3』P10	（田原）親宏	森木工助殿	田原親宏、森木工助の豊前発向の時、去6月20日の「山田安芸守隆朝要害」、同7月4日の「馬岳城攻口」での合戦の軍忠を賞し、追って恩賞があることを伝える。
		(2)	弘治3年8月13日	田原親宏感状	後藤敏宏文書9／『大分県史料10』第二部P303	（田原）親宏	靍田神五郎殿	田原親宏、靍田神五郎の豊前発向の時、去6月20日の「山田安芸守最前要害」、閏7月3日の「馬岳」における辛労を賞す。 ※本史料は、『福岡県の中近世城館Ⅲ―豊前地域編―』140馬ヶ岳城（48）では誤って、「道中書状」としているので、表題を訂正する。
159 関連	高畑城	(1)	応安8年2月日	田原氏能軍忠状	入江文書23／『大分県史料10』第二部P392、入江文書179／『増補訂正編年大友史料8』P112	田原下野権守氏能		田原氏能の軍忠状。応安7年正月23日、城井常陸前司入道（宇都宮正綱）謀反により、今川氏兼の発向に付き従うため、「城井御陣」に参る。その後、同年9月には豊後における合戦を終え、同年9月13日に「城井御陣」に帰参、「高畑城」没落までの間、忠節致す。この旨は「霜台」（今川氏兼）が見知している。これらについて、「承了（花押）」という今川了俊の証判有。
167	大平城 （城井城）	(1)	応安7年	豊前国城井陣合戦手負注文案	入江文書16／『大分県史料10』第二部P385	（田原氏能）		田原氏能が提出した「豊前国城井陣合戦」の手負注文。
		(2)	応安7年11月6日	竹田津道景請文并今川了俊感状写	竹田津文書5／『大分県史料10』第二部P160	沙弥（今川了俊）	竹田津治郎左衛門尉殿	今川了俊、竹田津治郎左衛門尉の「豊前城井合戦」における軍忠を賞す。
		(3)	応安8年2月日	田原氏能軍忠状	入江文書23／『大分県史料10』第二部P392	田原下野権守氏能		田原氏能の軍忠状。応安7年正月23日、城井常陸前司入道（宇都宮正綱）謀反により、今川氏兼の発向に付き従うため、「城井御陣」に参る。その後、同年9月には豊後における合戦を終え、同年9月13日に「城井御陣」に帰参、「高畑城」没落までの間、忠節致す。この旨は「霜台」（今川氏兼）が見知している。これらについて、「承了（花押）」という今川了俊の証判有。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
172	宇留津城	(1)	天正14年11月11日	益田元祥感状	益田高友家文書833／『中世益田・益田氏関係史料集』P348	（益田）元祥	与次郎（益田兼友）殿	益田元祥、去7日の「豊前国都郡（ママ）宇良津（宇留津）之城」攻めの際の益田兼友とその被官の軍功を讃える。
		(2)	（天正14年）11月12日	毛利輝元書状	益田家文書398／『大日本古文書家分け22-2』P98	毛利右馬頭輝元	益田右衛門佐（元祥）殿	毛利輝元、「宇留津」城陥落の戦功を褒す。
		(3)	天正14年12月25日	益田元祥書状写	内田家文書（永田秘録64）837／『中世益田・益田氏関係史料集』P349	（益田）元祥	豊田式部少輔殿	益田元祥、去7日の「宇留津」における合戦で、豊田理兵衛が疵を被ったことは神妙であったことを伝える。
		(4)	天正14年12月25日	益田元祥書状写	内田家文書（永田秘録64）838／『中世益田・益田氏関係史料集』P349	（益田）元祥	豊田式部少輔殿	益田元祥、豊田式部少輔に対し、去7日の「宇留津」における合戦で、被官俣賀経介が討死したことの忠儀を讃え、子孫に対し能々申すべき旨を伝える。
		(5)	天正19年11月1日	上領頼宣起請文写	平生町立平生図書館蔵長家文書872／『中世益田・益田氏関係史料集』P365	上（上領）民部左頼宣	後藤吉左衛門尉殿	上領頼宣、天正9年以来の吉見氏の下での軍忠を書き上げる。その中に、「一ふせん（豊前）うるう津（宇留津）の城きりとられ候時」とみえる。
196 205 207	櫛狩屋城 八田城 山田城	(1)	（弘治3年）7月13〔23〕日	田原親宏感状	足立悦雄文書33／『大分県史料26』第四部P28	（田原）親宏	田代弥七郎殿	田原親宏、豊前国出張の時、最前より供奉し、「山田安芸守要害」や7月4日「馬岳」における軍忠を賞す。
		(2)	弘治3年7月23日	田原親宏感状	森文書5／『大分県史料35』第二部補遺（7）P69、『行橋市史資料編　中世』P187	（田原）親宏	森木工助（薫能）殿	田原親宏、豊前国発向の際、去6月20日「山田安芸守隆朝宅所要害」や7月4日「馬岳城攻口」における軍忠を賞す。
253	雁俣城	(1)	（年未詳）9月26日	大友家加判衆連署奉書写	平林文書2-4／『西国武士団関係史料集29』P27	寒田兵部少輔親景、本庄伊賀入道栄阿	平林丹後守殿、古庄左京亮殿、得永藤右衛門殿、本庄新左衛門殿、都甲勘ヶ由左衛門殿、森伊賀守殿、一万田治部少輔殿	「鷹俣岳御城誘」について、「上毛下毛両郡給人」の中で在郡して馳走する場合は、「給所」と懇意にすべきであること、なので「相論之地」に関する「土貢」についてはまず懸置き、「城料」となすべき旨を伝える。

＜近世城館＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
K1	門司城		（永禄4年ヵ）8月18日	毛利元就・同隆元連署書状	益田家文書306／『大日本古文書家分け22-1』P273	（毛利）隆元、（毛利）元就	益田右衛門佐（藤兼）殿	豊後衆、「門司」に侵攻す。
			永禄4年11月16日	田原親宏感状	森文書8／『大分県史料35』第二部補遺（7）P70	（田原）親宏	森木工助（董能）殿	去5日「門司表:」敗戦以来の軍忠を賞す。
			（年未詳）11月16日	田原親宏感状	足立悦雄文書50／『大分県史料26』第四部P36	（田原）親宏	田代兵庫亮殿	田原親宏、田代兵庫亮に対し、去5日「門司表陳」における敗戦の際、京都郡・仲津郡における軍忠を賞す。
			（年未詳）11月16日	田原親宏感状	足立悦雄門司52／『大分県史料26』第四部P37	（田原）親宏		「門司」における合戦における下総守助秀の軍忠を賞し、跡目を安堵す。
			（永禄5年ヵ）10月13日	田原親宏預ヶ状案	森文書4／『大分県史料35』第二部補遺（7）P66	（田原）親宏		田原親宏、去年11月5日「門司表」転退以来の忠節を賞し、安岐郷内の土地を預く。
			（永禄5年ヵ）10月13日	田原親宏預ヶ状	森文書9／『大分県史料35』第二部補遺（7）P71	（田原）親宏	森木工助（董能）殿	田原親宏、去年11月5日「門司表」転退以来の忠節を賞し、安岐郷内の土地を預く。
			（年未詳）7月20日	田原親宏書状	足立悦雄文書45／『大分県史料26』第四部P34	（田原）親宏	田代兵庫亮殿	田原親宏、田代兵庫亮に対し、「門司陳」撤退の際の軍忠を賞し、闕地次第恩賞を与えることを伝える。
K2	小倉城		観応3年3月23日	宗像資村軍忠状写	萩藩閥閲録71所収小野文書3379／『南北朝遺文 九州編第3巻』P276	小野三郎左衛門宗像資村		11月5日夜、「小倉城」を追い落とす時合戦。

X　総　括

はじめに－福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業について

平成 24 年度から開始した福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業は、28 年度にてすべて完了する。当事業を総括するにあたり、事業を行うに際し留意した点などを最初にまとめておくこととしたい。

本事業は、福岡県内に所在する中近世城館および、それらに関連する遺跡（伝承地なども含む）を把握・周知化することを第一の目的として行ってきた。そのため、各城館の把握においては、まずは既知情報をすべからく把握することを重点的に行った。誰しもが知るような城館であれば問題はないのだろうが、これまで城郭の一覧表などに名称ぐらいしか知られていなかったものについては、出典にあたり、それがなぜ城館として認識されるに至ったのかについて徹底的に把握することに努めた。その結果、原典の読み間違いや写し間違いにより存在するはずのない城館がリストの中に含まれていたり、同一の城館が重複してリストアップされていたりする事例が散見された。当事業ではそのような誤りが確認された場合、削除対象とした。そのため本県の場合、城館の実数は増えたが、このような精査を行った結果、若干増にとどまっている。

また、各城館の報告では、記載内容の出典や根拠をなるべく明示するように努めた。これは本報告書の内容を第三者が吟味する際にも、混乱をきたすことがより少なくなると考えたからである。前述のように本報告において削除した城館についても、初めからなかったものとして全てを削除するのではなく、削除した理由や根拠を述べた上で、城館一覧表の末尾には削除した城館の一覧を掲げている。

次に、本事業では過去に作成された図面（以下、「既往図」）を基本としながらも、新たに縄張り図を作成するなどして、構造が把握できる城館についてはでき得る限り図面を提示して構造を説明することとした。本事業は筑前・豊前・筑後の３地域に分けて行ったが、中でも筑前地域は研究の蓄積も多く、事務局が作成する以前から多くの既往図が公表されていた。そのため、重要な城館であっても既往図があるもので構造を把握するに足る図面である場合には、その図を使用させていただいた。しかしながら既往図がない城館、また、詳細な構造を説明するには不十分な既往図しかない城館が、県内には数多く存在していたため、それらについては、把握できるものは全て事務局にて図面を作成して掲載した。このことにより、本報告書には県内の構造が把握できる城館についてはほぼ全て図面を掲載して、構造の説明を行っている。このようになるべく多くの城館の構造を図示することで説明することに努めたため、文章については事実関係の記載を優先し、城館にまつわる詳細な歴史や、縄張り構造などから導き出される推論まじりの考察などは記載することを極力差し控えた。ただ、それだけでは県内城館の歴史的価値までを理解することは困難であるため、本章「総括」にてその理解の一助とした次第である。

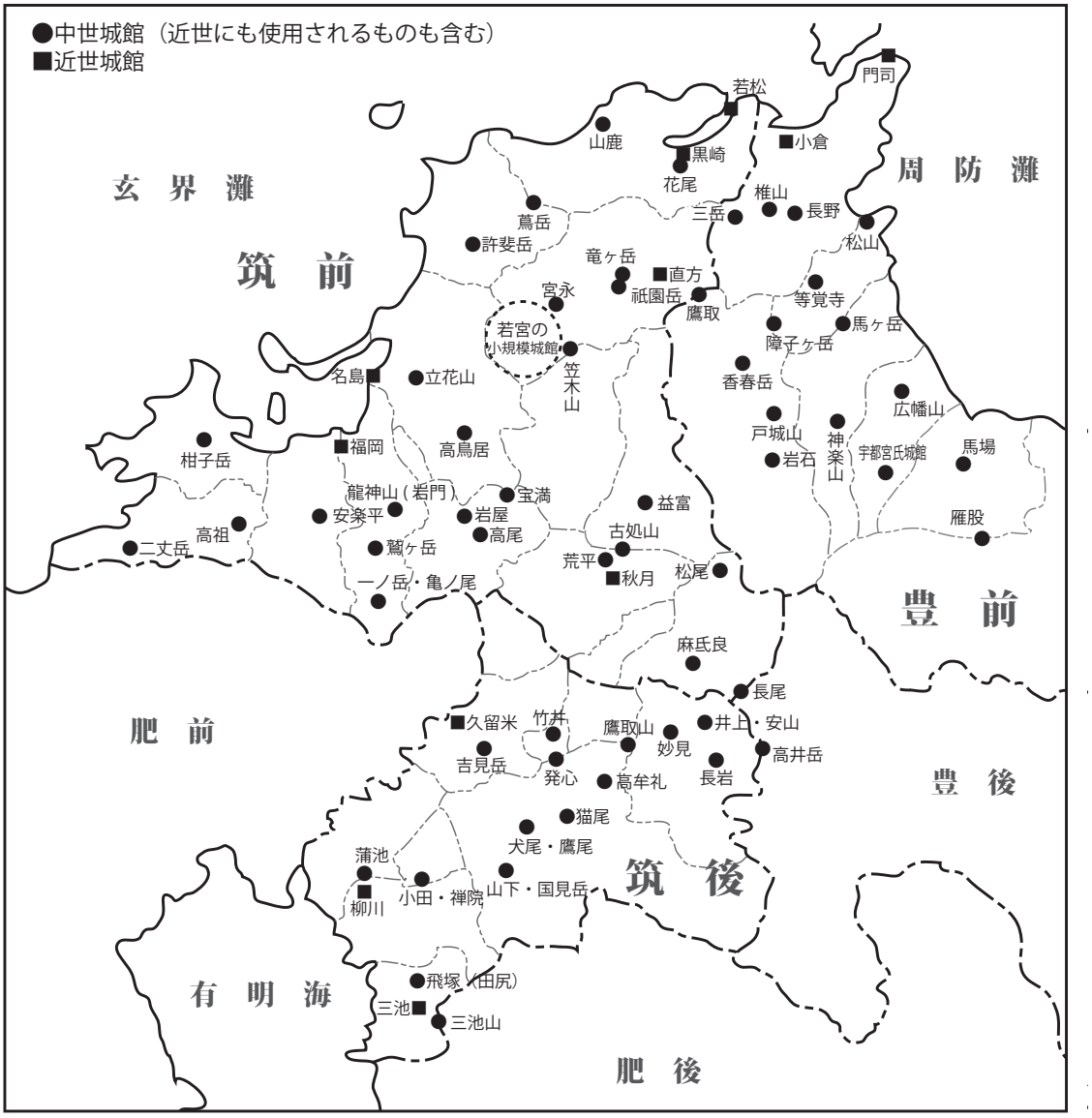
1　福岡県の中近世城館の歴史的概観

はじめに

福岡県には、中世から近世初期にかけて築かれた多くの城館遺跡が遺されている。福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査で報告された城館遺跡は、筑前地域では、中世 362 遺跡、近世 16 遺跡、豊前地域では、中世 253 遺跡、近世 8 遺跡、筑後地域では、中世 230 遺跡、近世 12 遺跡に及ぶ。これらをあわせると、中世城館が 845 遺跡、近世城館が 36 遺跡で、この他に伝承地や関連遺跡、所在が不明のものも含めれば、県内の中近世城館遺跡の総数は、ゆうに 1000 を超える。

近世城館には中世から存続する城館を含むので、中世に築かれた城館が多数に及ぶことは容易に察せられる。福岡県に限らず、中世は権力が各地に分立し、それら諸勢力が争いを続けた時代であり、多数の城館遺跡の存在は、そのことを如実に表現するものである。

ここでは、福岡県を中心としながら、城館遺跡が築かれた中世から近世初期の歴史を概観し、本事業の調査成果を理解する一助としたい。



第 289 図　福岡県内主要中近世城館位置図

（1）鎌倉幕府の成立から蒙古襲来まで

治承寿永の内乱期の九州は、平氏の権力基盤であった。九州全域を統治した大宰府は、平安時代後期には、大規模な武士団を形成した筑前の原田・山鹿・粥田、筑後の三毛、豊前の板井などの豪族が、有力な府官層となって運営されていた。平清盛や弟の頼盛は、大宰大弐となって府官層を家人化し、九州に強固な地盤を築いた。平氏に味方して活躍した九州の有力な武士として、原田種直、板井種遠、山鹿秀遠らがおり、その拠点として、種直の岩門城、種遠の神楽山城、秀遠の山鹿城などが伝えられるが、治承寿永の内乱期の城は遺構として残っておらず、その実態はつかみがたい。

元暦２年（1185）３月、壇ノ浦の戦いで平氏が滅亡した後、同年 12 月、源頼朝は、全国の荘園や公領に地頭を置くことを朝廷から認められた。頼朝は九州の安定を重視し、平氏についた九州の有力武士たちの所領を没収するいっぽう、それ以外の一般武士たちの本領を安堵して、積極的に御家人に取り立てた。九州では、この小規模な地頭たちの上に、広大な平氏方の武士たちの没収地を与えられた東国御家人が地頭として赴任するという、二重構造の地頭制が成立した。

当初、九州全域に及ぶ強い支配権を持った鎮西奉行として赴任した天野遠景が、九州の御家人たちや荘園領主の支持を得られず、建久５年（1194）頃に関東に呼び戻された後、その権限を分けた国別の守護として、筑前・豊前・肥前（三前）と二島（壱岐・対馬）を支配する武藤資頼、筑後・豊後・肥後（三後）を支配する大友能直、奥三か国（薩摩・大隅・日向）を支配する島津忠久が任命された。「九州三人衆」と呼ばれたこれらの勢力を中心として、中世九州の政治史は展開する。

武藤資頼は、原田種直の旧領を給与され、大宰府の府官層を掌握する。嘉禄２年（1226）10 月には朝廷から大宰少弐に任命され、以後、武藤氏が少弐を世襲して少弐氏を名乗った。鎌倉幕府の守護と大宰府の次官の地位をあわせ持つ少弐氏は、大宰府を拠点に九州北部に大きな勢力を築いた。

豊前国の板井種遠の旧領は、下野国の有力御家人宇都宮信房にあたえられ、豊前国や隣接する筑前国東部には、宇都宮一族が勢力をもった。野仲・山田・成恒・深水・大和・西郷・如法寺・山鹿・麻生の諸氏である。麻生氏は、北条得宗家領の山鹿荘の地頭代官職となり、遠賀川河口域に勢力を拡大した。平家没官領であった門司関には、下総氏が門司六郷の地頭職を得て支配した。

関東から遷って来た御家人ばかりではなく、古代以来の有力豪族である宗像大宮司の宗像氏、住吉神社神主の佐伯氏、筑後国府の有力官人の草野氏なども勢力を保った。原田種直は没落したものの、筑前の秋月・深江、筑後の三原・田尻など、原田氏と同じ府官大蔵氏末裔の御家人も多い。また豊前の長野氏は、宇佐宮領長野荘の地頭職に補任された開発領主の中原氏の子孫であった。城館遺跡からこの時期をみた場合、やはり顕著な遺跡は知られない。少弐氏の居城として、太宰府市の浦ノ城が知られ、1969 年に宅地開発によって遺跡は消滅したが、13 ～ 16 世紀の遺物が出土している。遺構が消滅していることもあり、本来的な城郭の形状はわからない。

文永 11 年（1274）10 月、高麗兵をはじめとするモンゴル（蒙古・元）軍約２万８千人が博多湾を襲撃した。文永の役である。九州の御家人たちは善戦したものの、最新兵器の「てつはう」や集団戦などの戦術に圧倒され、太宰府まで撤退し、上陸した蒙古軍と水城を防衛線として戦うことを覚悟するに至った。しかし、蒙古軍は強風の吹いた一夜が明けると不思議にも撤退していた。

鎌倉幕府は蒙古軍の再度の襲来に備え、博多湾岸の今津から香椎までの総延長 20km に及ぶ元寇防塁を築いた。防塁は現在も、今宿、生の松原、姪浜、西新、地行、博多、箱崎に残る。これは蒙古軍の上陸を防ぐための施設である。弘安４年（1281）６月に 14 万の大軍で襲来した蒙古軍の上

陸を、御家人たちは防塁を利用して阻止することに成功した。弘安の役である。その後、台風の襲来によって蒙古軍の船の多くは難破し、蒙古軍は日本軍の追撃により壊滅状態となって撤退した。

（２）鎌倉幕府の滅亡から南北朝時代

蒙古襲来は新たな領地を獲得できた戦いではなかったため、鎌倉幕府は、恩賞を武士たちに与えることが困難であり、武士たちの一族内部での争いも多くなった。弘安８年（1285）11 月に北条得宗家の御内人（内管領）の長崎頼綱と有力御家人安達泰盛が争った霜月騒動に連動し、少弐景資は泰盛に味方し、御笠郡の岩門城（龍神山城）に拠って、太宰府の浦ノ城に拠る兄の経資を攻めた。激戦の末、景資は討たれ、岩門城は落ちた。

蒙古襲来によって対外的危機感が強まった結果、鎌倉幕府は北条氏一門の権力が強化され、北条氏が幕府要職と守護職を独占して行った。得宗専制体制の成立である。北条（金沢）実政が鎮西探題として博多に下向すると、鎮西探題は裁判所の機能を充実させ、少弐氏の大宰府にかわって、九州の政治の中心となって行く。北条氏一門は、九州の６か国の守護職を占め、少弐氏は筑前国、大友氏は豊後国、島津氏は薩摩国と、それぞれが１か国を支配するのみになってしまった。

しだいに、北条氏への不満が高まり、元弘３年・正慶２年（1333）閏２月、後醍醐天皇が隠岐を脱出して伯耆国船上山に立て籠もると、この動きに呼応して、西国各地で反乱が起こる。５月 22 日に得宗北条高時が自刃し、鎌倉幕府が滅亡すると、少弐貞経・大友貞宗らが鎮西探題の北条英時を鷲尾山（愛宕山）の城に攻め、滅ぼした。翌建武元年正月、鎮西探題金沢政顕の子の規矩高政・糸田貞義が、北条氏と関係の深い門司氏・山鹿氏・長野氏・星野氏・問註所氏などを味方に反乱を起こした。少弐氏の一族である惣領頼村も高政に味方する状況であった。高政は遠賀郡の帆柱山城を構え、山鹿政貞・弓削・宗氏で固め、長野政通・貞通兄弟が門司城を修築して門司氏が守り、貞義は三池郡の堀口城に陣を張り、黒木・星野・問註所氏らを招集した。後醍醐天皇の建武政権は、少弐貞経・宇都宮冬綱らを下向させ、翌年の初めまでかかって鎮圧した。

建武２年７月、北条高時の遺児の時行が信濃で兵を挙げた。中先代の乱である。時行軍は、いちどは足利軍を一掃して鎌倉を制圧するものの、足利尊氏によって奪回された。この乱をきっかけにして尊氏は、建武政権から離反したが、翌年正月、京都で新田義貞・北畠顕家の連合軍に敗れ、九州に逃れた。少弐氏や大友氏を味方に付けた尊氏は、３月２日、多々良浜の戦いで、後醍醐天皇方の菊池武敏を破った。尊氏は太宰府の原山に入って九州の武士たちを招集し、一色範氏を九州探題に任じ、４月３日、九州の勢力を率いて京都に攻め上った。

尊氏に敗れて吉野に逃れた後醍醐天皇は、尊氏が擁する北朝に対して南朝を立て、日本各地に皇子を将軍として派遣して、京都奪回を目指した。このうち、九州には、暦応元年・延元３年（1338）９月、征西大将軍として懐良親王を派遣する。懐良親王は、康永元年・興国３年（1342）５月、薩摩国に上陸し、南九州から勢力を拡大する。京都で足利尊氏・直義兄弟が対立して、観応の擾乱が始まると、尊氏の庶子で直義の養子となった直冬が、貞和５年・正平４年（1349）９月には九州に落ち、肥後の河尻幸俊に迎えられた。翌観応元年・正平５年以降、九州探題の一色範氏と対立した少弐頼尚が直冬に味方し、九州は宮（懐良親王）方、将軍（足利尊氏）方、兵衛佐殿（足利直冬）方の３勢力が対立する複雑な情勢となった。

観応元年から２年にかけて、京都で南朝と結んだ直義が室町幕府の権力を握ると、直冬が九州探

題となり、また南朝に尊氏・義詮父子が下って直義を討伐にかかると、一色範氏が九州探題に返り咲くという具合に目まぐるしく情勢が変化する。この室町幕府の内紛によって、南朝は勢力を蓄えることができた。懐良親王は観応２年・正平６年（1351）９月、肥後国菊池から太宰府・博多方面を攻略するための遠征に出発。延文４年・正平 14 年（1359）８月、懐良親王と菊池武光の軍勢は、筑後国大保原の戦い（筑後川の戦い）で、少弐頼尚を破って大勝利し、康安元年・正平 16 年８月、宮方の征西府が太宰府を制圧したのである。

応安４年･建徳２年（1371）２月、室町幕府は九州奪回の切り札として、九州探題の今川了俊（貞世）を派遣する。了俊は豊後の大友氏や肥前の松浦氏と結び、自身は門司から上陸して３方向から太宰府を攻撃し、翌年８月に太宰府を陥落させた。了俊は少弐冬資を暗殺し、九州探題と少弐氏の対立を解消する。宮方は高良山を根拠地として抗戦したが、菊池武光が病に倒れ、子の武敏は筑後国御井郡北野で戦死、孫の武朝も福童原の戦いで敗れたため、肥後国隈府に撤退した。懐良親王は征西将軍職を甥で後村上天皇の皇子の良成親王に譲り、肥後国八代城に引退した。良成親王は筑後国上妻郡の山中で、五條頼元や子の良氏･良遠、孫の頼治らに守られて、明徳３年･元中９年（1392）の南北朝合一後も南朝再興をはかったが、かなわないまま、上妻郡大杣で薨去した。

60 年あまりにわたって抗争が続いた南北朝の内乱は、史料にも諸勢力が拠った城塞に関する記録は現れるが、この時期の城館遺跡として明確なものは、ほとんど見受けられないようである。

（３）南北朝の合一から大内氏の九州北部進出、少弐氏の滅亡まで

今川了俊は南朝勢力をほぼ一掃することに成功し、豊後国を除き、ほぼ九州全域を直接的に支配するようになった。了俊の強大化を警戒した将軍足利義満は、応永２年（1395）閏７月、了俊の九州探題を解任し、足利氏一門の渋川満頼を新しい探題として送り込んだ。渋川氏は九州探題職を世襲するものの、探題が九州の政治の中心的役割を担ったのは、子の渋川義俊が探題職を務めた 1420 年代が最後であった。有力武士の少弐・大友・菊池氏が九州探題と対立するようになり、幕府は中国地方の有力守護の大内盛見に、豊前国の守護職を与え、九州探題の後見を依頼した。朝鮮王朝や明との貿易を推進するために赤間関・門司関ばかりでなく、博多をも支配下に置きたい大内氏にとって、豊前国守護となり、九州探題を後見することは大きな意義があった。

大内氏の九州北部への進出は、大友氏や少弐氏との対立を生じた。永享３年（1431）７月、大内盛見は、少弐満貞・大友持直・菊池兼朝と怡土郡萩原で戦い、戦死してしまう。幕府は衝撃を受けつつも、たくみな工作で菊池と少弐・大友を戦わせ、大友氏の内部分裂をはかった。これによって大内氏は九州北部の制圧を順調に進めた。大内氏は、豊前の門司・長野・貫氏、筑前の麻生氏を被官とした。大内教弘の代には、家臣の陶弘房を筑前守護代として箱崎に置き、仁保弘直を太宰府に、杉興信を京都郡の松山城に、陶美作を山門郡の垂見城に置いた。さらに原田弘種と秋月種繁を被官とした。大内政弘は文明 10 年（1478）に深野重親を太宰府の岩屋城に在城させている。これらの史料に名称がみえる城館遺跡も、室町時代前半の遺構はなく、戦国時代末期のものが多い。

応仁元年（1467）５月、応仁の乱が起こると、８月に大内政弘は、2000 艘の船をしたてて京都に攻め上り、山名宗全が率いる西軍の主力として奮戦した。文明元年（1469）４月、東軍を率いる細川勝元は、大友氏に豊前国を攻めさせ、少弐頼忠（政尚・政資）を筑前守護に補任した。頼忠は亡命先の対馬から箱崎津に上陸し、筑前・豊前両国を支配する。翌年には、政弘の伯父の教幸が長

門国赤間関で反乱を起こし、これに麻生家延が応じている。領国の情勢が不安定化する中、政弘は文明９年 10 月に日野富子の斡旋で、周防・長門・筑前・豊前の守護職と石見・安芸の所領を安堵するという好条件で講和を結び、翌 11 月に帰国した。文明 10 年９月、大内政弘は少弐政尚を討ち、豊前・筑前を制圧した。大友氏が豊後・筑後をおさえ、少弐氏は肥前国三根郡を中心とする一地方勢力となり、肥前の一地方勢力となった九州探題渋川氏と小競り合いを繰り返した。

大内義隆は、天文５年（1536）５月、朝廷から大宰大弐に任じてもらい、９月に少弐資元を攻めて、肥前国小城郡多久城で自殺させた。大宰大弐として、少弐氏から古代大宰府の権威を奪った義隆は、さかんに「大府宣」を発行して武士や寺社の所領を安堵している。肥後の菊池氏と手を組んで、筑後方面の大友氏の動きも押さえた。豊前守護代に譜代の杉氏、郡代に橋津・佐田（宇佐）、野仲・城井・広津（築城）など、段銭奉行（室町幕府の職名で、段銭の徴収を掌る。段銭は、朝廷や幕府が臨時に諸国の田地から面積に応じて徴収した金銭である）に野仲（下毛）、山田・城井・如法寺（築城）、副田（田川）、伊川・貫（企救）など豊前国内の土着の国人を任命した。

少弐資元の有力家臣であった龍造寺家兼は、大内氏に通じたとして少弐の家臣から非難され、同 13 年、資元の子の冬尚の重臣の馬場頼周は策謀して、家兼の軍を各所に出動させて敗退させ、子や孫を殺害し、家兼を柳川に追放した。家兼は翌 14 年再挙して頼周を誅殺し、龍造寺の支配を復活した。冬尚は再起をはかったが、永禄２年（1559）、家兼の曾孫である龍造寺隆信に攻められ、勢福寺城に逃れて自害した。なお天正４年（1576）に大友氏が冬尚の弟の政興を押し立てて、佐賀を攻略しようとしたが、成功しなかった。少弐氏の活動が確認できるのは、この政興が最後である。

（４）大友義鎮の九州北部制覇

大内義隆の九州北部支配は安泰であるかにみえた。ところが、天文 20 年（1551）９月、義隆は重臣の陶隆房（晴賢）の反乱によって、長門国大寧寺で自殺し、大宰権少弐・筑前守護代の杉興運も粕屋の浜で討たれた。陶隆房は大友義鎮（宗麟）の弟の晴英（大内義長）を大内氏の後継に迎えた。しかし、大内氏の支配も長くは続かなかった。弘治元年（1555）10 月、陶隆房が、毛利元就との厳島の戦いに敗れて討たれ、同３年４月に大内義長が長門の且山城で滅亡すると、大友義鎮は豊前・筑前・肥前に兵を送った。同年２月、京都郡の馬ヶ岳城で大内氏被官の野仲重兼が秋月文種（種方）に誘われて挙兵し、３月に馬ヶ岳城が秋月氏の手に落ちた。

永禄２年（1559）、三国を平定した義鎮は、豊後・筑後・肥後の守護職に加えて、新たに豊前・筑前・肥前の守護と九州探題に任じられ、九州北部の支配を手に入れた。大友氏は、筑後国を支配するにあたり、一門の豊饒氏と土着の有力国人の三原氏（原田氏の一族）を組み合わせて守護代とし、その下に筑後土着の国人の高一揆衆と国衆と呼ばれる豊後の地侍をたくみに配置した。大友氏は筑前国怡土郡を中心に所領があり、怡土荘博多浜には荘政所を置き、一門譜代の古庄氏や臼杵氏を派遣する。臼杵氏は怡土荘にあった柑子岳城督として、大友氏の筑前支配の一翼を担った。

これより先、秋月文種は毛利氏と通じ、弘治２年（1556）７月、筑前国夜須郡・嘉麻郡の古処山城で挙兵し、高良山の大友勢を攻めて敗走させたが、翌年７月、文種は戸次鑑連らによって討たれた。また、毛利元就に呼応した筑紫惟門は永禄２年２月に筑前で挙兵して博多を焼き、元就が秋に門司城を攻め、同４年夏ごろまでには元就の手に落ちた。10 月から 11 月、大友義鎮は門司城奪還を目指したが、激戦の末、大友勢は敗退した。義鎮は、同年７月に田原義種が守る香春岳城を攻略したが、

数か月後には毛利氏に奪回されてしまったらしい。また、翌５年正月に松山城を戸次鑑連に攻めさせているが、落とすことができずに撤退している。なお、門司城攻防戦の敗北のためか、同年７月、義鎮は出家して宗麟と号した。大友氏は同年９月に松山城、10 月に門司城の奪還を目指して攻めたが、毛利氏は大友氏の攻撃をしのいでいる。この後、翌６年３月、毛利元就は、将軍足利義輝の命により、大友宗麟と和議の話し合いを進めることになった。

また、義鎮は、高橋鑑種を御笠郡の岩屋城・宝満城に置き、豊前妙見岳城の田原親賢、筑前柑子岳城の臼杵鑑速とともに、九州北部の軍事指揮と地方行政を担わせたが、永禄 10 年（1567）に、鑑種の反乱が表面化し、秋月種実・筑紫広門・原田親種らをはじめ、宗像・麻生氏も加わり、太宰府天満宮の神官・僧兵たちも味方して、宝満城・岩屋城に入った。宗麟は、戸次鑑連（立花道雪）・吉弘鑑理（高橋紹運）らに豊後・肥後・筑後の軍勢を付けて、鑑種を攻撃させた。

大友勢は、岩屋城は落としたが、宝満城は落城させられず、永禄 12 年４月には毛利勢が筑前に侵入し、吉川元春・小早川隆景の軍勢が立花山城を攻撃した。宗麟も筑後まで出陣し、５月から６月の間、大友・毛利両軍は、立花山・宝満・岩屋城をめぐり、総力戦を展開した。やがて、大友氏の援助を受けた大内輝弘が山口に攻め入り、尼子勝久が但馬から出雲に入ったため、毛利氏は大友氏と和睦して撤退した。鑑種は孤立無援となって降伏し、毛利氏の支配下にあった小倉城に入った。宗麟は、宝満・岩屋城に高橋紹運、立花山城に立花道雪を置いて、筑前支配の再建をはかった。

（５）大友氏・毛利氏・龍造寺氏・島津氏の抗争

天正６年（1578）11 月、大友義統が日向国の耳川（宮崎県日向市）で島津氏に大敗を喫すると、大友氏に従っていた国人たちが相次いで離反するようになった。12 月、秋月種実は筑紫鎮恒らとともに、大友方の高橋紹運が拠る宝満・岩屋両城に攻め寄せた。筑前では紹運と立花山城の立花道雪が頑強に大友方の拠点を守備し、種実らに対抗し続けた。豊前では長岩城の野仲鎮兼、本庄城の宇都宮（城井）鎮房、馬ヶ岳城の長野助守、香春岳城の高橋元種ら主だった国人がこぞって種実に呼応して大友氏に反旗を翻した。豊後国国東郡でも大友庶家田原氏の宗亀とその娘婿である田原親貫が反抗し、天正６年末から同８年 10 月にかけて、大友氏はその鎮圧に追われた。

さらに、日向耳川の戦いの直後、筑後には、島津氏と連携した肥前の龍造寺隆信の勢力が押し寄せて来た。蒲池鎮並・田尻鑑種など筑後の国人たちも大友氏から離反する。天正７年、筑前では高祖城の原田了栄が大友方の拠点の柑子岳城を攻略して怡土・志摩郡を制し、豊前では高橋元種・長野助守らが蜂起し、豊前国の過半が大友氏の支配から離脱した。同年６月には、島原の有馬鎮純（晴信）が龍造寺鎮賢（政家）に起請文を差し出し、龍造寺氏が肥前を統一した。

いっぽう島津氏は、天正 10 年、肥後制圧を目指して北進を開始する。11 月、肥前の有馬鎮純と筑後の田尻鑑種が隆信から離反して、島津氏の軍事支援を要請する。同 12 年２月、島津義久が肥後へと出陣し、３月、島津家久を有馬へと渡海させた。３月 24 日、隆信は２万 5000 の兵を率いて龍造寺方の有馬純豊の拠る島原城の救援に向かい、島津軍 7000、有馬軍 1000 と圧倒的に優勢に戦ったが、家久の激励に奮い立った島津軍の猛反撃にあい、隆信は戦死した。沖田畷の戦いである。

島原で龍造寺氏が敗退すると、大友義統は筑後・肥前の奪回を目指し、実弟の田原親家、筑後の問註所鑑豊・五條鎮定らに、７月、黒木家永が籠城する猫尾城を攻撃させた。立花道雪・高橋紹運が加勢して、９月に同城を攻略し、大友勢は、山下城の蒲池鎮運を降して、龍造寺家晴が守る柳川

城を攻めようとした。10 月までに島津氏は肥後国を制圧し、龍造寺政家も島津氏に降った。龍造寺氏、田尻鑑種、黒木氏、秋月氏、筑紫氏に加え、大友氏に焼き討ちされた宇佐宮の社家衆が大友氏打倒を島津氏に願い出る。島津氏は大友氏と和平中だったので、いったん筑後から双方撤退することを大友氏に申し入れ、翌 13 年閏 8 月に肥後の阿蘇氏を屈伏させた。この頃、立花道雪が筑後在陣中に病死し、大友氏にとって大きな痛手となった。

天正 13 年 10 月、関白秀吉から九州停戦令が大友氏や島津氏に届けられた。翌 14 年正月、島津氏は自発的に停戦する意志がないことを表明する。秀吉は島津氏を討つべく、九州攻めの準備を加速する。4 月、大友宗麟は秀吉に臣従して島津征伐を懇願し、秀吉の仲介で毛利氏とも和睦した。

秀吉の九州攻めに向けた動きや大友氏・毛利氏の関係修復の結果、肥前勝尾城の筑紫広門は、大友氏に味方することを表明。天正 14 年 7 月、島津氏は勝尾城を攻めて広門を降伏させる。島津氏は筑前に侵攻したが、岩屋・宝満両城の守将高橋紹運とその子で立花山城を守る立花統虎（宗茂）は、秀吉および毛利氏の援軍到来が近いとの情報を信じて降伏を拒否した。7 月 27 日、岩屋城を守る紹運は 760 名の軍勢で 5 万の島津軍の総攻撃を迎え撃ち、全滅した。島津軍は多数の戦死者・戦傷者を出しながら岩屋城を攻略し、宝満城を降伏させるが、立花山城は抗戦を続け、戦線は膠着する。すでに毛利氏の援軍が立花山城に入り、攻略が容易ではなく、戦力も低下して来ていたため、島津氏は撤退を決定する。立花統虎は撤退する島津軍を追撃して損害を与え、若杉城（高鳥居城）を襲撃し、島津氏に味方した筑後の星野鎮胤・鎮元兄弟を討ち取った。筑後で幽閉されていた筑紫広門も蒲池氏の監視下から逃れて勝尾城を奪回し、龍造寺政家も島津氏から距離を置いた。

（6）豊臣秀吉の天下統一、九州国分け、関ヶ原の戦いまで

筑前から撤退した島津氏は、天正 14 年（1586）10 月に豊後に侵入し、大友義統を破って豊後を制圧したが、略奪行為を繰り返し、弱体化していった。この月のはじめには毛利・吉川・小早川勢も、秀吉の先兵として豊前に上陸し、高橋元種の居城小倉城を手はじめに、島津方勢力の拠る諸城攻略を開始した。11 月、中国勢は秀吉の軍監の黒田官兵衛（孝高）とともに、高橋氏の属城である築城郡宇留津城を攻め崩した。元種は香春岳城に立て籠るが、毛利軍の攻撃を受け、12 月に降伏する。翌 15 年正月、秀吉が京都を発つ。3 月、島津軍は豊後から総退却をはじめる。4 月はじめ、秀吉軍が秋月氏の属城である田川郡岩石城を攻め落とし、秋月の攻略に向かったため、秋月種実・種長父子は古処山城を出て、剃髪して秀吉に降伏した。以後、秀吉の弟秀長に率いられた大友・毛利・小早川・宇喜多など 15 万余の軍が日向へ、秀吉自身も 10 万余の軍を率いて肥後に進み、薩摩を目指した。4 月 17 日に島津義久・義珍が宮部継潤・黒田官兵衛の陣する日向根白坂を攻めるが、敗退し、5 月 8 日、薩摩川内泰平寺の秀吉陣所に剃髪した義久が出頭し、降伏した。

同年 6 月、秀吉は筑前箱崎で九州の国分けを行った。筑前国および筑後国生葉郡・竹野郡、肥前国基肄・養父半郡を小早川隆景に（居城は立花山城・名島城。以下同じ）、同秀包に筑後国御井・御原・山本郡（久留米城）、筑紫広門に上妻郡（山下城・福島城）、立花統虎に三潴・山門・下妻郡（柳川城）、高橋統増に三池郡（内山城）、黒田官兵衛に豊前国六郡（馬ヶ岳城・中津城）、毛利勝信（森吉成）に同国企救郡・田川郡（小倉城）、佐々成政に肥後国、大友義統に豊後国、龍造寺政家に肥前四郡が安堵された。秋月・高橋氏は日向に転封、有馬・松浦氏は旧領を安堵された。

同年、肥後では佐々成政の検地への不満から国人一揆が起こり、一揆は鎮圧されたものの、成政

は責任を問われ切腹させられる。豊前でも宇都宮鎮房は秀吉からの伊予転封の命令を不服とし、黒田官兵衛による検地への国人衆の不満もあり、官兵衛が肥後国一揆鎮圧に赴いた隙をつき、10月、鎮房と宇都宮一族の野仲鎮兼など有力国人は一揆を起こした。一揆は吉川広家の援軍も得て、12月までに鎮圧され、鎮房は人質を出して降伏したが、翌年、中津に誘い出され、官兵衛の指示を受けた子の長政に殺された。本拠地の城井谷も長政に攻撃され、宇都宮一族は滅亡した。秀吉の統一政策によって、大名からも自立的な勢力だった国人領主や土豪、海賊たちは相次いで圧殺されて行く。

慶長3年（1598）8月の秀吉の死により、豊臣政権は崩壊に向かい、同5年9月の関ヶ原の戦いに至る。黒田長政は徳川家康の東軍につき、関ヶ原で活躍するとともに、官兵衛も豊後石垣原の戦いで、西軍についた大友義統の軍を破り、小倉の毛利勝信を降伏させ、久留米城や柳川城を攻略した。戦後、長政は家康から筑前国を与えられた（居城は名島城・福岡城。以下同じ）。細川忠興が豊前国を与えられ（中津城・小倉城）、筑後国は、毛利秀包・立花宗茂・高橋統増（直次）・筑紫広門が西軍についたために改易され、田中吉政が筑後国を与えられた（柳川城）。

むすび～近世四藩の成立～

福岡藩では、慶長5年12月に黒田長政が名島城に入った後、福岡城を築き、また豊前との国境付近を中心に、地域支配の拠点として、六端城（若松・黒崎・鷹取・益富・松尾・麻氏良城）を築いた。六端城は元和元年（1615）の一国一城令で廃城となっている。元和9年、長政が死去すると、二代藩主忠之は遺言により、三男長興に秋月5万石、四男高政に東蓮寺4万石を分与し、秋月・東蓮寺（延宝3年・1675年に直方藩に改称）の両支藩が成立した。長政の筑前入国直後、秋月には叔父の直之が1万2000石を与えられて配置され、秋月氏以来の秋月城（陣屋）を居館としたが、慶長14年に直之が死去した後は番士が置かれ、元和9年の秋月藩の成立によって城下町となった。高政は寛永3年（1626）に藩主居館（直方陣屋）を完成させた。

小倉藩では、慶長5年12月に細川忠興が中津城に入った。領内の要衝の端城には一族・重臣を配したが、元和元年の一国一城令で門司城以下の端城は破壊された。忠興は後に小倉城に移ったが、中津城も嫡男忠利の居城として維持し、家督を譲った後は忠興が中津城を隠居城とした。寛永9年（1632）、肥後熊本の加藤忠広が改易され、細川忠利は熊本に転封となった。企救・田川・京都・仲津・築城・上毛郡15万石は小笠原忠真に与えられ、その他の豊前地域も小笠原一族が配置された。

筑後国は慶長19年に田中吉政が病死した後、後を継いだ子の忠政とその兄の康政が対立し、大坂夏の陣に忠政は遅参してしまう。康政の讒訴により内通を疑われ、忠政は江戸に留められることとなり、元和6年8月に後継ぎがないまま忠政が病死すると、田中氏は改易された。同年末に筑後国は、御井・御原・三潴・山本・竹野・生葉郡が有馬豊氏に（居城は久留米城。以下同じ）、山門・下妻・上妻郡と生葉郡の一部が立花宗茂に（柳川城）、三池郡が立花種次（高橋直次の子）に与えられ（三池陣屋）、久留米藩、柳川藩、三池藩が成立した。

【参考文献】
副島邦弘・近沢康治編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書　XXIX付録　福岡県中近世山城跡』福岡県教育委員会、1979年
阿部猛・西村圭子編『戦国人名事典』新人物往来社、1987年
吉永正春『九州戦国合戦記』海鳥社、1994年
川添昭二他著『県史40福岡県の歴史』山川出版社、1997年
峰岸純夫・片桐昭彦編『戦国武将・合戦事典』吉川弘文館、2005年
森茂暁『戦争の日本史8南北朝の動乱』吉川弘文館、2007年
山本浩樹『戦争の日本史12西国の戦国合戦』吉川弘文館、2007年
アクロス福岡文化誌編纂委員会編『アクロス福岡文化誌7福岡県の名城』海鳥社、2013年

2　福岡県の中世城館跡の構造的特徴

はじめに

福岡県では、平成 24 年度より県内に分布する中近世城館跡の分布調査を開始した。調査は 5 ヶ年におよび、平成 28 年度に終了した。すでに福岡県における中近世城館跡については、『日本城郭大系』第 18 巻 (1) で、718 ヶ城が記載されており、おおよその分布数は把握されていたものの、各城館跡の構造を示す平面図（縄張り図）はほとんど作成されていなかった。その後、個人的に県内の城について調査された廣崎篤夫氏の『福岡県の城』(2)、『福岡古城探訪』(3) や、中村修身氏の『北九州・京築・田川の城』(4) などが続々と刊行された。そしてそれらの集大成として、福岡県内の教育委員会で文化財行政に携わる職員を中心に組織された、福岡県の城郭刊行会によって『福岡県の城郭』(5) が刊行され、多くの県内の中世城郭の平面構造も把握されるようになる。

福岡県では、今回の分布調査について、全 4 冊におよぶ調査報告書を刊行している。この報告書によってほぼ県内全域の中近世城館跡の位置、構造、歴史を明らかにすることができた。そこでそうした個別の城館跡を比較検討することによって、福岡県内に分布する中世城館跡の特徴について俯瞰してみたい。

畝状竪堀群の用いられ方

まず分布調査の最大の成果のひとつとして、畝状竪堀群の認められる中世城館跡の分布状況が明らかになったことを挙げることができる。その集中する地域として筑前中東部・豊前・筑後北部があり、数量ともに他の分布域を圧倒している。ここは秋月氏の拠点および秋月氏と敵対する勢力との係争地ということができる。岡寺良氏によると、秋月氏が戦略上重要な城館に偏在的に畝状竪堀群を敷設し、さらにはそれに誘発された宗像氏や草野氏、立花氏も城館に畝状竪堀群を用いたとする (6)。

ところで、畝状竪堀群はその構造が単純に竪堀を連続して設けるだけではなく、法則性をもっていくつかのパターンに分類されることが近年提唱されている。北部九州では岡寺良氏によってⅠ類［防御パーツとして部分的に使用する］、Ⅱ類［城全体を囲繞］、Ⅲ類［竪堀群からさらに形態を発展変化させたもの］の 3 類に分類され、そのⅢ類の発展を a［竪堀・横堀の巨大化］、b［竪堀の短小化］、c［横堀とうまく組み合わせた竪堀群］とした。

そうしたうえで筑前中東部・豊前西部・筑後北部のなかでも最終的に秋月氏が領域を拡大させていった豊前西部にⅡ類＋Ⅲ類の城館の多い点を指摘している (7)。

さて、こうした畝状竪堀群は戦国時代の山城における人工的な防御施設の到達点を示すものであることにはまちがいないが、その竪堀群に防御された曲輪群に着目すると、横矢や折、さらには虎口構造に発達した点を見出すことができない。つまり斜面地［切岸］には発達した竪堀群が導入される一方で、平坦面は発達しないというアンバランスさを指摘することができる。従来畝状竪堀群の存在する山城イコール発達した城郭構造という図式であったが、はたしてそうなのであろうか。

北部九州で畝状竪堀群がもっとも集中する地域の中心となる秋月氏の本拠である古処山城は古処山の西方尾根部（北郭）の北側斜面と、南方尾根部（南郭）の西側から南東側に畝状竪堀群を巡らせる典型的な城郭として著名である。しかし、山頂部や尾根頂部の曲輪加工はほとんどなされていない。同様に馬ヶ岳城の山麓部に構えられた畝状竪堀群は土塁と横堀の長大なラインに構えられて

いる。土塁には折も認められるのだが、やはり曲輪は認められない。おそらく折の存在より戦国時代後半に築かれたものであることに違いはないのだが、曲輪や虎口に戦国時代後半の発達した構造は認められない。

こうした視点で畝状竪堀群を見ていくと、その大半は曲輪部分が未発達であり、削平はなく、虎口も認められない。おそらく斜面地の防御として発達したのが畝状竪堀群であり、切岸→竪堀→畝状竪堀群という発達過程が想定できる。さらに畝状竪堀群は斜面地防御施設として竪堀が二段にわたって構えられる等覚寺城、長野城の構造となる。横堀と連動する畝状竪堀群も横堀は斜面地を防御する施設だったのである。

畝状竪堀群と曲輪面のアンバランスは決して矛盾するものではない。曲輪面と斜面地の防御施設は同一に発達するものではなく、斜面地防御に集中する築城と、曲輪面防御に集中する築城があったのではないかと考えられる。こうした発達形態によってアンバランスさの矛盾は解消されるものと考えられる。秋月氏はまさに斜面防御に専念したのであり、それに誘発された敵対勢力もそれに倣ったのではないだろうか。古処山が異常に高い山に選地する山城である点も、斜面防御の城であったことを物語っている。

石垣・石積みの用いられ方

福岡県の中世城館跡で今一つ注目される遺構として石垣を挙げることができる。石垣は織豊系城郭により出現した。しかし、15 世紀後半から 16 世紀前半に日本列島の数か所において石垣を伴う城郭が出現している。信濃松本地域（林小城、山家城（第 291 図）、埴原城、桐原城）、美濃（大桑城、伊木山城）、北近江（小谷城、鎌刃城）、南近江（観音寺城、小堤城山城、佐生城、三雲城）、西播磨・東備前（感状山城、三石城、富山城）、北部九州と、戦国武将である三好長慶の居城（芥川山城、飯盛城（第 290 図））などで明らかに安土城に先行する石垣が確認されている。

そのひとつである北部九州では、筑前で有智山城、烏岳城（城ノ辻）、懸尾城、笠木山城、帆柱山城、花尾城、古賀城、蔦岳城、鷲ヶ岳城、一ノ岳城、七曲城、安楽平城、高祖城、二丈岳城に、豊前では櫛狩屋城、追揚城、雁股城で石垣が確認されている。

筑前の典型例として花尾城の石垣を見ていきたい。花尾城の中心部はⅠ、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴからなるが、ほぼこれらの曲輪が石垣によって構築されている。Ⅴの南側斜面に構築された石垣は高さが３ｍに

第 290 図　飯盛城石垣

第 291 図　山家城石垣

およぶもので、土留めの石積みなどではない。自然石を積む野面積みであるが、隅部を構築している。さらに注目されるのはⅡ郭の北側斜面に設けられた石垣である。二条の登り石垣を構え、最下部には方形の井戸状の石組が組まれている。水の手（井戸）防御の登り石垣と考えられるが、類似する施設が認められない現在、その用途については断定はできない。しかし、中心部には石垣が構えられていることにより、この登り石垣も戦国時代のものと考えて差し支えないだろう。このように花尾城では積極的に石垣を導入した戦国期城郭として評価してよいだろう。こうした石塁は二丈岳城にも認められる。

なお、花尾城では石垣が構えられているにもかかわらず、畝状竪堀群も積極的に取り入れている。古処山城の場合、曲輪面の造成がほとんどなされていないにもかかわらず畝状竪堀群を設けるというアンバランスさとは対極に位置付けることができる。織田・豊臣の城では石垣を導入するが、この石垣が防御ラインを形成するため、堀切や畝状竪堀群を採用しない。これに対して花尾城では石垣は防御ラインというよりもむしろ曲輪を確保するための施設として導入され、切岸の防御としては畝状竪堀群を設けたものと考えられ、やはりアンバランスなものではない。しかし石垣と畝状竪堀群という違和感より、石垣の構築を麻生氏段階にまで遡るものではなく、豊臣大名である小早川氏、黒田氏段階まで下がる可能性も指摘されるが、曲輪面確保と切岸面防御という構造からは戦国時代の麻生氏による構築と考えてよいだろう。

同様の石垣として評価できるのが、宗像大宮司家の最後の拠点となった蔦岳城である。石垣の規模は主郭の南側斜面だけに確認されており、花尾城に比べて小規模ではあるが、高さ２ｍにおよぶ野面積みの本格的な石垣を築いている。ここでも畝状竪堀群を設けており、石垣と畝状竪堀群に時間差はなく、同時期に築かれた施設であることはまちがいない。なお、蔦岳城では宝珠文軒平瓦や巴文軒丸瓦が採集されており、瓦葺建物も導入されていたことがうかがえる。

鷲ヶ岳城は那珂郡支配の拠点として大友氏の家臣大鶴宗雲が築いたとされる。ここでは畝状竪堀群は設けられないが、主郭の周囲および主郭東側山腹に構えられたⅢ郭に自然石を用いた野面積みの石垣が用いられている。

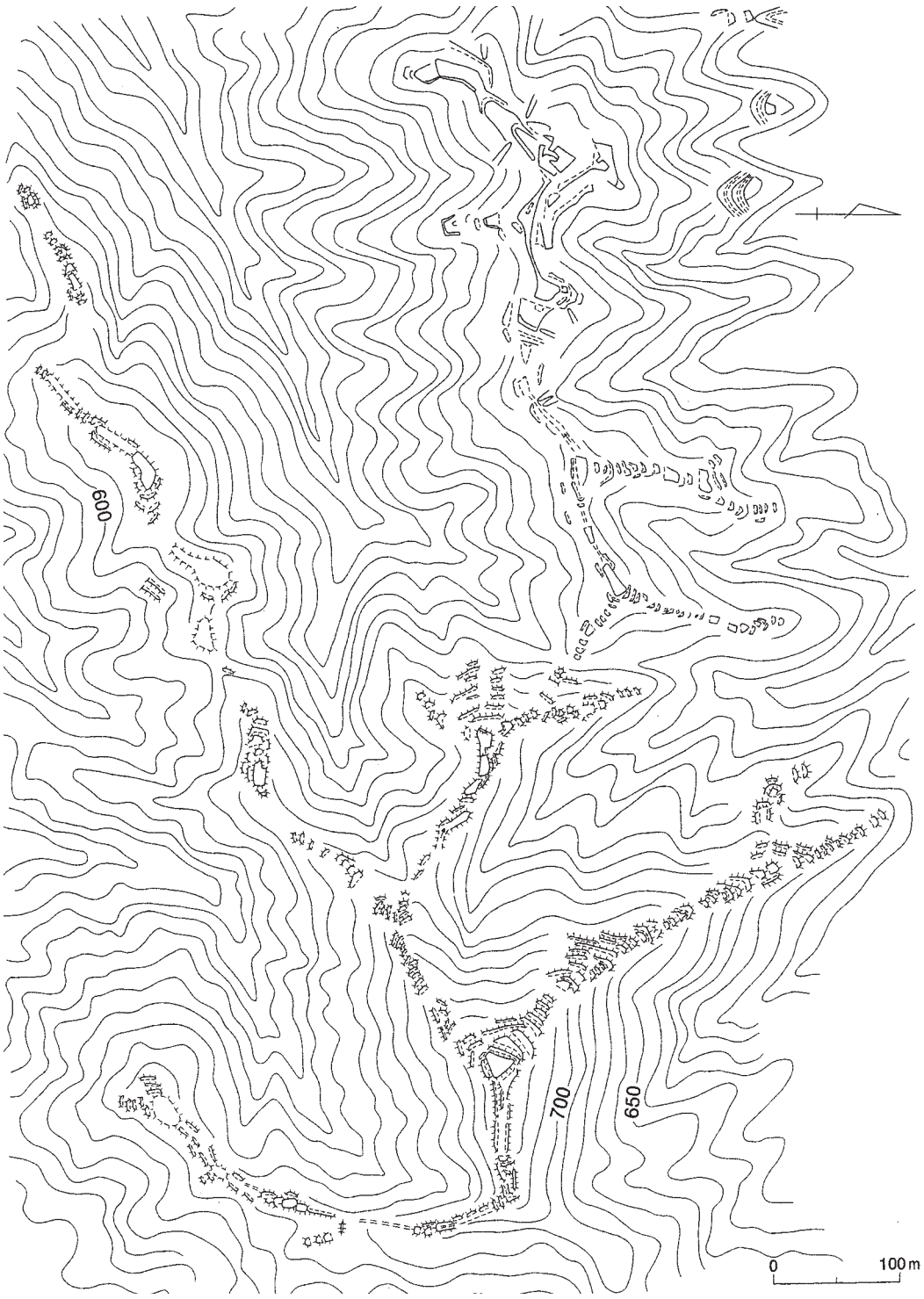
また、同じく大友氏の家臣である小田部民部大輔鎮通入道紹叱が早良郡支配の拠点とした安楽平城でも自然石を積む野面積みの石垣が主郭の周囲に築かれている。巨大な堀切は設けられるものの畝状竪堀群は伴わない。これは鷲ヶ岳城も同じである。

さて、こうした筑前の石垣の導入について重要な鍵を握るのが高祖城である。高祖城は周防の大内氏により原田氏が城督となっている。ここでは発掘調査によって中心部の曲輪の段が石垣によって築かれていることが明らかになった。この高祖城の石垣は扁平な石を垂直に積み上げる工法で、これまで見てきた野面積みの石垣とは異なっている。また、発掘調査では礎石建物も検出されており、瓦も多く出土している。つまり石垣、礎石建物、瓦という織田・豊臣の城の特質がすでに筑前でも備わっていることが明らかになったのである。これは大内氏による技術とみてよいだろう。

豊前では上毛郡に所在する雁股城の石垣に注目しておきたい。主郭の曲輪上面から斜面にかけて積まれた登り石垣が認められる。扁平の石材をほぼ垂直に積み上げる工法は下毛郡（大分県）に所在する長岩城の登り石垣に酷似する。『豊前志』に「長岩城主野仲兵庫の出城なり」と記されており、両城には強い関係性が考えられ、斜面移動を封鎖する登り石垣もそうした関係で導入されたことが考えられる。

長大な陣城の構築

筆者が今回の分布調査でもっとも注目したのが攻城戦の付城の構造である。その典型が立花山城の南側に対峙する三日月山地区、さらにその南側に位置する城ノ越山地区の城郭遺構である。三日月山地区では東西約 1km、南北約 800m にわたり、総延長約 2 km におよんで曲輪が累々と築かれている。基本的には尾根筋を階段状に造成するのみで堀切は認められない。一部に畝状竪堀群を設けるが、極めて小規模なものである。城ノ越山地区でも 800m 四方にわたり、総延長約 2 km にお



第 292 図　武名ヶ平城跡略測図
（島根県教育委員会 1988『島根県中近世城館跡分布調査報告書（第 2 集）出雲・隠岐の城館跡』から転載）

よんで曲輪が築かれている。これらは永禄年間の毛利氏と大友氏による立花山城をめぐる攻防戦にかかわる付城と考えられる。立花山城は大友氏の一族立花氏の居城となり、大友氏の筑前支配の拠点となり、筑前への進出を図る毛利氏との間での争奪が繰り広げられることとなる。三日月山地区は立花山城を包囲する毛利氏の付城として築かれ、さらにその外側に築かれた城ノ越山地区は立花山城の救援に駆け付けた大友氏の付城と考えられる(8)。立花山城に関してはこれまでに詳細な調査も実施されているが、三日月山地区、城ノ越山地区での城郭遺構は近年発見されたばかりであり、今後詳細な分析を加える必要があるが、とにかく長大な付城であることはまちがいない。

豊後では吉川城を紹介しておきたい。豊前と筑前の国境に位置しており、永禄 11 年（1568）に大三岳城、小三岳城に籠る大友氏方の長野氏を攻める毛利氏の吉川元春、小早川隆景によって築かれた付城と考えられる。東西約 1 km にわたる広範囲な山稜部に曲輪が累々と築かれている。大半の曲輪はほとんど加工されず、堀切もほとんど設けられていない。とにかく山稜のピーク毎に主郭を構え、それぞれの主郭から南方に派生する尾根上には点々と曲輪が構えられている。ここでも明瞭な堀切は認められず、ただ兵の駐屯地として築かれたのであろう。

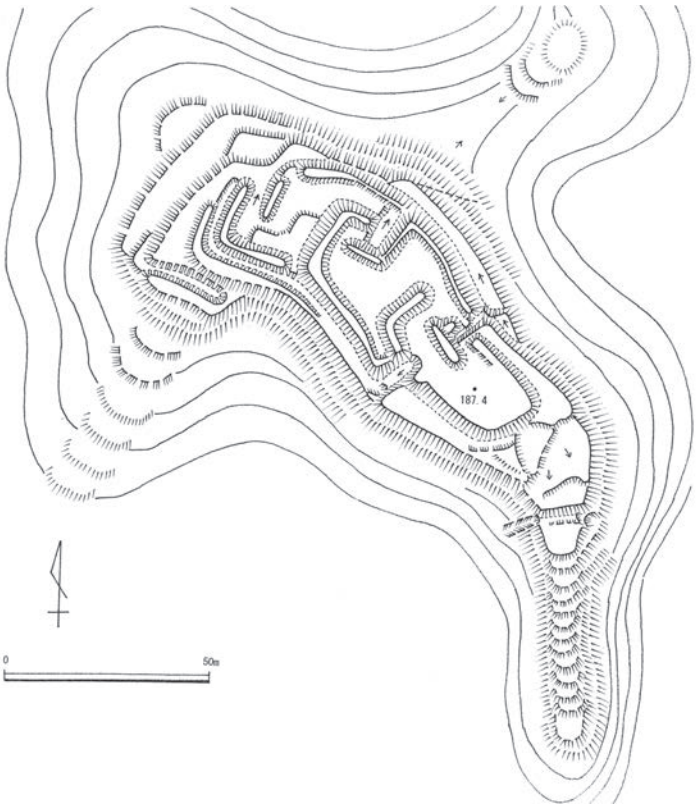
椎山城も全長 2 km におよぶ長大な城郭である。その構造もただ小曲輪を連続させるもので、立花山城三日月山地区、城ノ越山地区、吉川城と類似する。地誌類には戦国時代以前の歴史しか記載されていないが、これほどの長大な城が戦国以前のものとは考えられない。おそらく毛利氏による長野城攻めに用いられた付城の可能性が考えられよう。

さらに木下城とその北側に伸びる尾根上にも 1.5km にわたって小曲輪が連続する城郭遺構が確認されたが、これも毛利氏による長野城攻防戦に築かれた可能性が高い。

毛利氏によるこうした陣城構築は中国地方でも認められる。武名ヶ平城跡（島根県飯石郡飯南町）（第 292 図）は永禄 5 年（1562）の毛利元就による出雲攻略の際に築かれた陣城と考えられる。その構造は福岡県における毛利氏の陣城と同じく尾根筋に延々と小削平地を設けるものである。

第 293 図　太閤ヶ平本陣周辺の縄張図（西尾孝昌氏作図）

実はこうした小削平を延々と築く構造は織田・豊臣の付城でも見受けられる。織田・豊臣の付城は横堀を巡らせ、土塁に折の付く矩形の構造となり、付城にも斉一性の強い築城技法を特徴としている。ところがこうした構造はその中心部に構えられており、その外側に小削平を階段状に構える場合がある。ひとつは天正９年（1581）の鳥取城攻めの羽柴秀吉軍の付城群である。太閤ヶ平と呼ばれる本陣は横堀が巡り、土橋には横矢のかかる土塁に囲まれた見事な付城である。この太閤ヶ平から鳥取城までの間に秀吉配下の諸将の付城が点々と構えられているのであるが、その付城と付城間に延々と小削平地が設けられている（第 293 図）。



第 294 図　上山田陣城跡概要図（中井均作図）

また、天正 18 年（1590）の豊臣秀吉による小田原攻めの際、別動隊による韮山城攻めで構えられた付城群にもこうした小削平地が設けられている。特に上山田陣城と、本立寺付城では尾根筋に延々と小曲輪を設けている（第 294 図）(9)。

いずれも付城と付城間の尾根筋に構えられていることにより、土塁の防御ラインと同じように籠城軍の攻城ラインの突破を防いだものと考えられる。土塁とせず、小曲輪としたのは兵を配置するためであったものと考えられる。

今回の分布調査で把握された長大な付城遺構の確認は大友氏や毛利氏の築城を考えるうえで貴重な発見となったものと考えられる。今後のさらなる分析に期待したい。

おわりに

平成 24 年度より５ヶ年におよぶ調査によって福岡県内に所在する中世城館跡の分布と構造が明らかとなった。その特徴を拙稿で指摘することができた。こうした特徴は今後の研究に委ねたい。そのためにも今回の総合的な調査成果は基本資料となる。本報告によって今後の日本城郭史の研究の進むことに大いに期待したい。

さらにはこの報告から史跡指定が進むとともに、城跡が地域のまちづくりの核として活用されることを望みたい。

【注】
1. 磯村幸男ほか 1979『日本城郭体系』第 18 巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社
2. 廣崎篤夫 1995『福岡県の城』海鳥社
3. 廣崎篤夫 1997『福岡古城探訪』海鳥社
4. 中村修身 2016『北九州・京築・田川の城』合同会社花乱社
5. 福岡県の城郭刊行会 2009『福岡県の城郭 戦国城郭を行く』銀山書房
6. 岡寺良 2006「戦国期秋月氏の城館構成 －福岡県朝倉市・杷木地区を事例に－」『城館史料学』第 4 号 城館史料学会
7. 岡寺良 2016「九州北部における畝状空堀群の様相」『第 33 回全国城郭研究者セミナーシンポジウム「連続空堀群再考」』第 33 回全国城郭研究者セミナー実行委員会・中世城郭研究会
8. 藤野正人、山崎龍雄 2014「三日月山城砦群と城ノ越山城砦群の考察 – 対面する二つの巨大な城砦群」『九州考古学』第 89 号 九州考古学会
9. 中井均 2014「韮山城攻めの付城について」『韮山城跡「百年の計」きわめる・つたえる・いかす・郷土の誇り』伊豆の国市教育委員会

3　海岸堡－ Beachhead

福岡県は筑前・筑後・豊前それぞれに海を持つ。海との関わりが特色のひとつといえる。たとえば周防・長門あるいは肥前・肥後より、海から船にて攻められることは、しばしばあった。攻撃側は海岸堡 Beachhead（山）を確保しようとするし、防衛側はあらかじめ海岸堡とされる可能性のある山に築城し、それを防いだ。

高さのある山を確保できれば、弓矢や投石、また鉄砲戦にも圧倒的に優位に武器が使えた。弓の射程距離が 60m だとして、山ならば落差 10m 以上はある。この距離、そして上下を挟んで低い側は、高い側には有効な射撃ができず、高い側は、引力を味方にして低い側に強力な弓矢を射ることができた。投石ならば短い距離から直接投げるか、シュリンゲ（投石紐）を使う。落差があればあるほど、小さな石にも殺傷力が与えられる。低い側は何もできない。大きな落差でカブトも役立たず、こわれる。山にいれば、つぎの補給・支援部隊がくるまでの占領が容易となった。

先の大戦で、中国戦線にて少人数からなる徴発隊に参加し、中国側兵士に包囲された経験を持つ元日本兵に話を聞いた。「山に上がりさえすれば助かる。上を向けた鉄砲は当たらない。伝書鳩を飛ばして本隊の救援を待つ」とのことだった。高低差で軍事的優劣が決まった。高さこそが防禦の基本である。三角州等、高さがない地での築城では、石垣や建物で、必要な高さを確保した。

攻防戦は海岸堡 Beachhead の確保にある。海岸堡の典型は文禄・慶長の役での倭城である。最初に豊臣軍が攻略したのが釜山湾岸にあった釜山子城で、攻略に成功して日本側の拠点になった。敗色が濃厚になった慶長の役に、海岸に面して築城された倭城も典型的な海岸堡であるが、通常の攻撃的な側面よりは防衛的な側面を持っていた。倭城の城域には港が含まれる。仮に包囲されても、他の海岸堡より友軍の補給があれば、たやすく落城はしない。海岸沿いの西生浦倭城、機張倭城、蔚山倭城、熊川倭城はその典型で、海の干満の影響を受ける洛東江沿いの竹島倭城、亀浦倭城、弧浦里倭城、梁山倭城なども海岸そのものに位置するとはいえないが、海岸堡の一種といえる。

寛永 14 年（1637）の天草島原の乱で、島原城がキリシタン一揆に包囲されたが、「陸路は敵に成候故、船にて参候」（『原史料に見る天草島原の乱』、0044 佐野弥七左衛門覚書）とあって、城内の一角に港が確保してあれば、連絡・補給・支援が可能であった。

海こそ自由な通路であった。攻撃側も海からくるが、防禦側も海を最大限活用した。

福岡県内の海岸沿いの城はいずれも海岸堡としての本質を持つ。以下文献にあらわれるものを中心に、紹介したい。

なお海岸堡とならび、橋頭堡 Bridgehead という言葉もよく使われる。本来は領国境に橋以外に通路がない場合、橋を渡った向こう側に築く陣地のことであるが、海岸堡と同じ意味での攻撃拠点の意味で使われることも多い。

今津の港と後背地・本岡城郭、水崎城、柑子岳城

足利尊氏の袖判がある文書があり、筑前国本岡城郭を松浦佐志披に与えると記してある（観応元年・1350・9月 11 日有浦文書）。

　　判（足利尊氏）
下　松浦佐志披蔵人披
可令早領知筑前国本岡城郭同国志登社領家同地頭職（以下略）

本岡城郭とあるが、筑前の本岡ならば志摩郡元岡以外には思い浮かばない。ともに領知せよとされた志登社については、元岡に隣接する太郎丸に志登宮という小字名がある（明治十五年字小名調）。太郎丸（村）の西に隣接して志登（村）があるけれど、志登社は太郎丸に属していたのかもしれない。足利尊氏によって元岡と志登社が与えられた。なぜこの本岡（元岡）が、村としてではなく、城郭として松浦佐志氏に与えられたのだろうか。

松浦佐志氏は松浦を冠し、「披」という一字名を名乗っているように、海賊松浦党の一員である。その根拠地は肥前国松浦郡の佐志（唐津市佐志）と考えられる。水軍だから志摩郡へは船で来たことであろう。元岡は今でこそ内陸地のように見えるが、その前面の耕地には古新開、新開、開といった字名が多く、干潟を小さく仕切りながら開田したものである。開田以前、南北朝時代であれば満潮時には、ほぼ自由に航海できたし、干潮時でも干潟内の河川と支流は航行できた。元岡・太郎丸間を流れる瑞梅寺川支流を盲川という。松浦党であれば、海図的な知識はあった。足利尊氏は今津瑞梅寺川干潟（前海という）の制海権を確保するために、盲川より海につながる本岡城郭、ならびにおなじく前海に面する太郎丸と推定される志登社領家同地頭職を松浦党に与えたのであろう。

元岡周辺・九州大学新キャンパス内にはいくつかの城跡がある。そのうち桑原地域の大神城（外山城）、松隈の志摩城、松隈城（馬場城）は元岡管内ではない。元岡に属する明確な城山として水崎城跡（旧元岡村字水崎、標高 80m）のみがある。この山には土塁や壕のような遺構はないが、南から遠望すれば頂部および西に一段下がった一角が水平に造成されていることが確認できる（本書・筑前２、216 頁）。明治 37 年海図には分銅山と山の名前が記入されている。海から見れば、分銅の形状のように、上が水平で縁が切り立っていたようだ。『筑前国続風土記拾遺』に「山上に平地有。縁有て周れり」とある記述もこのことを裏付けており、木のなかった幕末のころには切り立った縁が観察できたようだ。九州大学新キャンパス内に保存されている。

この城は今津湾周辺、志摩郡東部におけるきわめて重要な戦略的な地位を占めており、いくどとなく争奪戦がくり返された。水崎合戦および水崎城衆（水崎人数）が登場する文献史料は８点もの多数が残されていて、そのあらましがわかる。由比重富文書の年欠 11 月 29 日大友親綱感状（史料、およびそれを所収する刊本については筑前２、293 頁）は、水崎城衆中に宛てられたものである。

今度於水崎城、面々粉骨之由、其聞候、喜入候、然者敵陣退散之由、常陸守所より注進候、大慶此事候、弥当城事、用心以下可被本走候、其段高崎尾張守所へ申合候之間、閣筆候、恐々謹言
　十一月廿九日　親綱（花押）

大友親綱が大友家の当主であった期間は永享３～11（1431～1439）の９年間で、嘉吉４年（1444）卯月５日の史料に高崎尾張守源棟治が見える（柞原八幡宮文書・編年大友史料、年欠だが貞和２年（1346）頃とされる角違一揆の合戦奉行人に「高崎尾張守」がみえている（武家家法Ⅱ 4-46 頁）。世代からいって先祖であろうから、襲名があった）。永正四年（1507）正月 25 日には水崎合戦があった。「水崎古城麓合戦」ないし「水崎防戦」と呼ばれている。攻めかけられて麓にて防衛したらしい。大友側の是松新兵衛が軍功を挙げたが、しかし大友側の西徳王丸父親、さらに松隈七郎父らが戦死したことがわかっている（児玉龝採集文書・7-106、是松氏所蔵、東大史料編纂所 DB、麻奈古村大光寺文書）。水崎城衆の犠牲が多く、勝利し得たかどうかは不明である。

（享禄４年・1531）11 月 12 日大内氏奉行人連署奉書によれば、水崎人数が原田領分・王丸兵庫允（大

内側）を攻撃した。城をめぐる攻防戦ではないが、「水崎人数」（水崎城に配置された軍勢）が原田陣に攻撃をしかけていた（児玉韞採集文書・王丸文書、2-56、東大史料編纂所 DB、『筑前国怡土庄史料』）。

このように敵対する大友側にも大内側にも、双方の史料に水崎城が登場する。水崎城は 15 世紀前半以来、100 年に亘って軍事拠点として機能し続け、城の攻防戦を少なくとも二度経験した要害であった。よってこの城こそ、足利尊氏が与えた「本岡城郭」であり、最大の水軍・松浦党を頼んで守らせた城郭だと推定できる。であれば「本岡城郭」＝水崎城は 1350 年、南北朝初期以来 200 年間、継続して機能した重要な城郭であった。

この軍事枢要地を押さえれば、港湾都市である今津を掌握できる。仮に今津に敵が上陸しても、海陸双方から反撃ができた。今津には臼杵端城（標高 15.7m）と鷺城があるから、双方にて海岸堡を構築できたが、いかんせん水崎城に較べれば標高ははるかに低く面積も狭かったから、収容兵力も少なく、軍事的な安定性には欠けるところがあった。また毘沙門山も、浜崎山も適地であったが、むしろ干潟内陸が重要視されたようだ。今津干潟・前海の最奥にあって、比高 80m の水崎山（分銅山）が最適の海岸堡とされたことは、このように古文書史料に明確であった。

水崎城は長期の軍事拠点であるわりには、城郭としての造作には顕著なものがないが、これは弓矢や投石を主兵器としていた時代には、山の高さがあれば十分に防衛機能を果たす事ができたからである。むろん雨風をしのぐ建物は必要であったから、山上平坦地には建物が数棟たって、さらに平地が不足すれば、懸け造りで斜面に柱を立てて建物とした。水は不可欠だったから井戸を掘ったと推測するが、おそらく地下水脈に当たらなかっただろうから、山麓のしみ水を利用したものか。主郭を死守する思想は稀薄で、山麓の主戦場で勝敗を決している。享禄頃までは水崎城のような造作のほとんどない城でも、十分に防衛機能を発揮できた。

ところで享禄以降、水崎城は史料に登場しなくなるが、替わって登場するのが、柑子岳城である。水崎城の機能が完全に消えたとは考えがたく、文献には登場しないといっても、城兵が置かれた可能性はあるが、拠点としての地位は柑子岳城（254.5m）に移った。文書に好士岳とも書かれたのは、好字の使用である。

村田文書・年欠 4 月 28 日森繁宣書状（写）によれば、

敵城柑子岳只今酉刻落城候条、則時各至其境、可有出陣候

とあって、「只今酉刻」（夕方 6 時頃）に落城、と臨場感がある。敵城柑子岳とあるのは大内側の発言で、繁宣については裏に「森美作」とある旨、注記がある。宛先は「基肆郡・養父郡」となっており、その両郡は九州探題領である。繁の字は九州探題渋川氏の通字で、森美作守繁宣は探題渋川尹繁より繁の一字を得ている（本史料は、『新修鳥栖市誌』中世編所収）。森繁宣は境まで出陣せよ、故参（古参）当参（新参）によらず、早く馳せ参れ、と指示を出した。朝から攻めて、夕刻に落城したらしい。この機に一気に攻めるべく、領内の武士に指示を出した。このように柑子岳城の動向は肥前にまで影響を与えるものであった。

天文 2 年（1533）7 月 1 日の是松氏宛臼杵親連知行預ケ状（児玉韞採集文書、前掲）によれば、今度の「好士岳」の難儀などにおける忠節の賞により、所領が預けられている。これは大友方史料である。難儀とあるから落城したのであろう。

（同４年）７月 10 日大内氏奉行人連署状（同児玉韞採集文書、東大史料編纂所 DB）には梅月八郎左衛門尉に宛てて、大内家家中よりの以下の書状が出された。

当御城普請、従去天文三年正月三日、至同四年二月四日毎月三ヶ度宛内廿一ヶ度不勤之由、仁保宮内少輔以目録注進、不参以之外之儀ニ候、於已後者無懈怠可有其沙汰候、猶於油断者一段可被仰出候、恐々謹言

七月十日　　（＊杉）　興重　判
　　（＊弘中）興勝　判

梅月八郎左衛門尉殿

大内方志摩郡代であった仁保宮内少輔の注進によれば、柑子岳城普請（＊土木工事）を天文３年より同４年にいたるまで、毎月３回宛勤めるはずだったが、うち 21 回が不勤であったとして、もってのほか、と咎められている。３回× 13 ヶ月＝ 39 回(回)のうち 21 回だから 53％を勤めていない。だが城の普請は１年と１ヶ月、継続して行われていた。現在の城の形＝遺構は、こうした普請事業を受けた結果のものである。

『筑前国続風土記』に本丸跡は「城の上」と呼び、長さ 60 間・横８、９間ほどとある。標高 254.4m、遠くから見れば、平坦に造成されていることが一目瞭然なのだが、山頂に上がってみると、意外に狭く細長い。60 間×８間はよほどに狭いと実感できる。水平面といっても、完全なる平坦地ともいえず、緩やかな斜度があるが、当時はこれで十分であった。その下の曲輪を二の丸跡とし、「下城の上」と呼ぶ。長さ 40 間・横 20 間ほど、こちらは広いし、相当に平坦な感じがする。また北西にも、もうひとつ山頂がある。三角点のある本丸より 30m 程低いが、比高 220m はある。小田観音堂や北の海上から見れば、柑子岳の一部をなすことは明瞭で、ここを城地に取込まなかった、とは考えにくい。たしかに視認できる遺構はないが、水崎城同様に建物等があったと考える。柑子岳は、明治 37 年海図では草場山となっている。地籍は草場のみならず、東側半分は今津地内で、北も小田に及ぶ。一帯でもっとも大規模な海岸堡であった。なお『筑前国続風土記』に南方三町ほどの所に陣尾と呼ぶ山があって、原田氏が当城を攻撃した時の陣所とする。陣尾（じんのお）は標高 100m の山で、上がれば驚く程、間近に柑子岳を望むことができるが、残念ながら一帯の土取りが進んでおり、どのような遺構があったのかがわからない。向城の典型である。

沓尾・蓑島

文亀元年（1501）閏６月24日、仲津郡沓緒崎（沓尾崎）における合戦で、大友軍は大内方仁保護郷らの軍勢を破った（７月13日大友親治感状、『大友家文書録』、同年８月３日仁保興棟合戦注文、『三浦文書』、『行橋市史』資料編227、230）。

この沓尾には陣山という地名がある。陣が置かれたことに由来しよう。これも典型的海岸堡である。

天文21年（1552）11月の豊前国津濃熊庄名寄帳（平賀家文書・『大日本古文書』、『行橋市史』301）に津隈庄の年貢を蓑島の藤左衛門尉の舟が周防小郡に搬送したとある。永禄４年（1561）９月６日、同月28日には蓑島で合戦が行われ（同年10月10日「児玉就方軍忠状」『萩藩閥閲録』３、『行橋市史』361）、11月に大友軍が敗走すると村上水軍が蓑島を攻撃、大友方の船10艘を破った（同月９日「毛利隆元感状」『萩藩閥閲録』１、『行橋市史』364、365）。天正７年には毛利方杉重良が蓑島へ渡り大友方に寝返り（正月18日「毛利輝元書状」萩藩閥閲録２）、この島をめぐり両軍が激しい攻防を続けた（３月７日「大友円斎書状」入江文書／史料纂集、以上

『行橋市史』478～480）。

蓑島も典型的な海岸堡である。その後に地形改変があったらしく、遺構はみられないと報告されているが、豊前と防長の関係を考える上では重要な軍事拠点だった。むろん建物は建てられていたであろう。

河川内で潮汐の影響を受ける範囲内であれば、海岸堡になると考える。六角川の潮汐限界点にあるおつぼやま神籠石や、筑後川の同限界点にほど近い高良山神籠石は海岸堡であろう。よって征西府拠点、あるいは大友氏拠点となった高良山城も広義の海岸堡である。

名島山と多々良浜

名島城の城山は多々良川河口にある。蒙古襲来・文永の役にて蒙古軍は筥崎宮を焼いているから（『勘仲記』）、後方多々良川干潟にも侵入しただろう。この山も占拠されたと考える。

足利尊氏軍と菊池武敏方が戦った多々良浜合戦の際にも、名島山は海岸堡として機能したはずで、当初は菊池側が布陣しただろうが、のち足利尊氏軍が占拠し、勝利したと考える。

永禄12年（1569）５月18日、大友と毛利との立花山攻城でも、「多々良川御越御陣」（『豊前覚書』）、「多々良浜」（『宗像記追考』）と見える（『大日本史料』当日条、588頁）。多々良浜にて合戦があったのなら、名島山の争奪があったであろう。

警固山＝鳥飼城・福岡城

福岡城は西が樋井川河口で（慶長段階までは、のちの大濠公園北に河口があった）、東が那珂川河口で、当時は御笠川も合流していた。近世以前にも、古代以来の歴史があって、古代には警固所（大宰府西守護所）が置かれて、刀伊の入寇時には攻撃目標とされた（小右記）。また蒙古襲来時には高麗軍（東路軍）の攻撃目標とされて、鳥飼潟周辺にて激しい戦闘が行われた。この警固山は那珂郡と早良郡の郡境にあって、東は警固村、西は鳥飼村に属していた。今川了俊や渋川満直の居城として名前が見える鳥飼城（『九州治乱記』ほか）も、この警固山山頂の城を指す。ほかには鳥飼村には探題居城になるような城跡はない。

近世福岡城を築城する際に大がかりな造成がなされて、本丸御殿の広大な平坦地ができた。それ以前には中世城らしい段々の地形があっただろう。警固神社は移転させられたが、若一王子社のみは城内に残り、ほかに警固の藤と呼ばれる老いた藤が残された（『筑前国続風土記』）。

志賀島

志賀島は蒙古襲来時に蒙古（高麗軍＝東路軍）が占領した。『蒙古襲来絵詞』には、志賀海神社に隣接する山にて警戒する蒙古兵と、海岸に設置された柵列や、海からの通路上の櫓門風な門が描かれている。これも典型的な海岸堡である。

海岸堡は自然の山でも十分に防衛機能を果たしたが、次第に防御機能が恒常化して要塞化していった。

今回報告された多数の城館跡の図は貴重な成果であって、この図により今後、学問的にも文化財保護行政面にも、多くの材料が与えられた。うち、海岸際の山城や、潮汐の影響を受ける河川に面した山城は、当然ながら海岸堡で、度々の合戦で争奪が行われた。遺構が残りにくいものもあるけれど、軍事拠点としての枢要性があって、歴史的に重要な役割を果たしてきている。

4　福岡県における遺跡としての中近世城館

日本列島の歴史において、列島規模の争乱は二度にわたって起こったといえよう。その一つは、原始の弥生時代終末期に当たる 2 世紀後半の倭国の乱（「魏志倭人伝」）もしくは倭国大乱（『後漢書』）である。この争乱は、列島各地で誕生しつつあった諸小国群相互間における、いわば覇権紛争であったともいえる。「魏志倭人伝」によると、結果的には、諸小国群に共立された女王・卑弥呼の誕生で倭国の乱が終息した。因みに、倭の女王・卑弥呼は、邪馬台国を都とした。この倭国の乱の終結は、その後、古代国家の形成に向かって歩み出す大きな契機となった。

倭国の乱の実像は、「魏志倭人伝」や『後漢書』という文献史料によってまず解明されねばならないが、あまりにも情報量が少ない。そこで、同時代の考古資料に大きく頼らざるを得なくなってくるのである。倭国の乱に係わる考古資料には、遺跡としては平地の大規模な環濠集落と、高地の小規模な集落のセット関係が重要である。そして、遺物には各種の武器・武具がある。いま見たような文献史料と考古資料の一体的なアプローチこそが、倭国の乱の実像に迫れるといえる。

もう一つの争乱は、中世の戦国時代のそれである。古代の律令国家の崩壊後、12 世紀末に、武士による政権である鎌倉幕府が成立したが、やがて 15 世紀中頃に起こった応仁の乱に始まり、列島各地で有力な権力者、いい換えれば戦国大名の間で、再統一に向けて争乱が相ついだ。戦国時代の争乱は、16 世紀後半における豊臣秀吉による天下統一まで、100 年以上続いた。

中世の戦国時代における争乱の実態は、もちろん文書・日記・絵図などの文献史料によるところが大きい。しかし、中世の文献史料は、近世の厖大なそれに比べると極めて少ない。そこで、考古資料の役割が期待されるのである。考古資料といえば、城館つまり、戦国大名の居館・城下町そして山城などの遺跡が挙げられる。それらの遺跡群からはまた、日常生活用具としての土器・陶磁器や武器・武具など各種多様な遺物が出土する。そのような遺跡・遺物つまり考古資料と、前述の文献史料の統一的な分析によって、争乱の実態に接近できることは、原始の倭国の乱の場合と共通している。

戦後の日本考古学における重要成果の一つとして、中世考古学が挙げられる。その代表的な事例に、福井市の一乗谷朝倉氏遺跡の調査成果が知られる。この遺跡は、中世末の文明 3 年（1471）から天正元年（1573）まで存続した、越前国の戦国大名・朝倉氏の城館に係わる遺跡である。一乗谷の朝倉氏に関して、各種の文献史料に基づいて、一定の歴史像は描かれて来たが、昭和 43 年（1968）から始まった、最後の城主・朝倉義景の居館跡の発掘調査によって、その実像が明らかにされた。山間部を流れる一乗谷川沿岸の平地には、城下町が形成され、その一角の山麓に居館が位置する。城下町跡に対する発掘調査の結果、武家屋敷・町屋・寺院などからなる城下町の構造解明が進んだ。そして、城下町背後の山間部に築かれた山城・砦・櫓などの遺構群、さらには遺跡の随所からの出土品の調査成果をトータルに合わせ考えると、戦国時代の緊迫感と、その中での日常的な生活感が彷彿として伝わってくるといえよう。

さて、ここで福岡県内の城館遺跡の調査成果と重要性・課題などに関して、ケース・スタディとして香椎 B 遺跡を取り上げることにしたい。

香椎 B 遺跡は、福岡市東区香椎に属し、標高 90m の老ノ山と、その南麓の谷部に広がる。遺跡地の宅地造成に先立ち、平成 7 年（1995）から 3 カ年に渡って発掘調査が実施された。その結果、

調査を担当された下村智・瀧本正志氏らの見解によると、まず、谷部において、Ⅰ期（10 世紀～11 世紀末）からⅦ期（16 世紀）にまたがって、中世遺構が変遷することが判明した。そのうち、Ⅴ期（14 世紀前半～ 15 世紀前半）では、大規模な敷地造成を行った後、大溝や堀のほか、柵列で 1 町や半町ごとに区画した敷地に多数の掘立柱建物群つまり屋敷群が出現する。また、応永 6 年（1399）・応永 28 年（1421）銘や、僧侶名・宗派を明示する文字を刻んだ板碑の出土から、この時期に禅寺が存在したと推測されている。そして、この屋敷群の北側背後の老ノ山山頂には、御飯ノ山城が築かれている。単郭の主郭内に 7 棟の掘立柱建物と柵列、複雑な構造を示す出入り口の門と櫓、そして、周囲の堀切、竪堀など山城の構造が完掘された。御飯ノ山城には一条の堀切と竪堀がめぐるが、竪堀を西南方に 120 数m下ると居館跡推定地に至る。ここには「里城」の字が残るが、未調査である。

御飯ノ山城について、貝原益軒の『筑前国続風土記』（1709）には、大内氏家臣の一万田弾正が籠城したところで、立花山城の出城とも記す。この場合は永享 3 年（1431）の大内盛見による立花城攻略に代表される、大内氏と大友氏の抗争が背景となっている。立花城は、御飯ノ山城の北方やや東寄り約 2.8km の指呼の間に位置する。さらに、御飯ノ山城の東側に当たる城ノ越山と、城ノ越山からは北方に当たり、立花山城との間に位置する三日月山には、それぞれ城砦群が分布する。これらの城砦群は、永禄年間（1558 ～ 1570）における周防の毛利と豊後の大友両氏による立花山城争奪戦に係わるものといわれる。すなわち、三日月山は立花山城包囲の毛利方の、そして、城ノ越山を立花城救援のため陣取った大友方の、それぞれの城砦群と位置づけられている。

ところで、上述の香椎 B 地区の西方 800m ほどの地点で、一般国道 3 号博多バイパス建設に伴って、平成 19 年から 2 年間にまたがって、発掘調査が行われたところ、一町四方ほどと推定される屋敷跡が検出された。密集する遺構群は、掘立柱建物・井戸・土坑・製鉄関係工房・墓からなり、13 世紀後半から 16 世紀にまたがっている。ここで、13 世紀後半といえば、蒙古襲来時に石築地役・異国警固番役として、大友氏が香椎宮に入って来る時期に当たる。また、16 世紀は、天正 14 年（1586）の薩摩の兵火によって、立花城下近辺が、香椎宮も含めて焼き討ちに遭う時期である。

香椎宮は、香椎 A・B 両遺跡の中間に位置するが、古代の大宰府の官人に始まり、中世の戦国大名にも篤い信仰の対象となっていたことと思われる。一方、蒙古襲来の鎌倉時代後期には、社領が大友氏の領地となるが、南北朝時代には立花城とその関連城砦群とともに、戦乱に巻き込まれる結果となった。

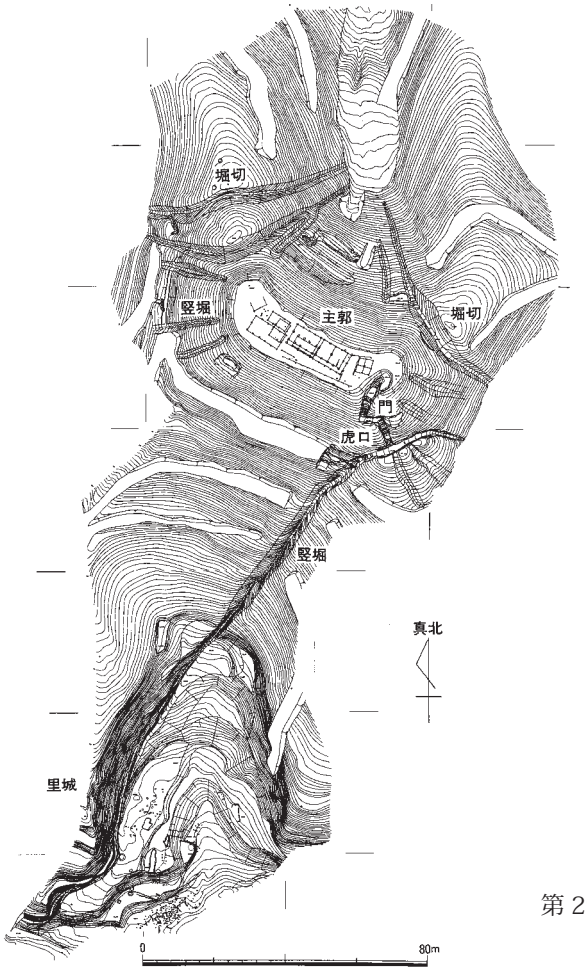
なお、香椎宮に関して、旧社家の三苫家に伝来した戦国時代を中心とする文書群は、香椎・立花城・香椎宮や、それらをめぐる大友氏・大内氏などの動向を考える上で重要である。

以上に見てきたように、これまでに知られる文献史料に加えて、城館遺跡に対する新たに行われた現地調査とともに、発掘調査の成果という考古資料の一体的活用もしくは総合化によって、香椎地区引いては九州地方の中世史の解明が大きく前進したといえよう。

ところで、福岡県教育委員会が平成24年度から 5 カ年の歳月をかけて実施した、福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業は、当該遺跡に対する悉皆調査とその成果に相当する。すなわち、遺跡の位置、分布状況・所属年代・現状・歴史的背景等々が、既存の資料に加えて、新たに作成ないしは記録された資料とともに、詳細な記録が作成された。その成果は、福岡県の文化財保護事業にとって画期的なものといえる。この上は、これらの遺跡群が恒久的に保存されることを第一義とし

つつも、さらなる調査の深化と史跡整備による活用を期待したい。そして、今回の調査成果が、福岡県ならびに日本の学術研究と文化の向上に資することを祈念したい。

【参考文献】
福岡県教育委員会2015『福岡県の中近世城館跡Ⅱ―筑前地域編２―』（福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査等報告書２・福岡県文化財調査報告書第250集）
福岡市教育委員会2000『香椎B遺跡―香椎住宅造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―』（福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第621集）
福岡市教育委員会2010『香椎A遺跡３―一般国道3号博多バイパス建設に伴う調査２―』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1072集）



第 295 図　福岡市御飯ノ山城跡測量図
（福岡市教育委員会 2000）

第 296 図　福岡市香椎 B 遺跡遺構平面図（福岡市教育委員会 2000）

5　総括－福岡県の中近世城館の様相と特徴

総括を締めくくるにあたり、本事業等で明らかとなった福岡県の中近世城館について、時代ごとにその様相と特徴を述べておきたい。

（1）中世城館

①各地域の拠点城館

本章1の「福岡県の中近世城館の歴史的概観」でも述べているように、現在の福岡県内の中世、特に戦国時代は、顕著な大名勢力が地元にはなく、およそ一つの旧郡ごとに有力な国人領主勢力が割拠していた。各国人領主の居城・本城が、福岡県内の中世城館を特徴づけるキーワードとなりうる。それらの内容を示すならば、次のようになろう。

第3表　福岡県内の中世の主な拠点城館一覧

国名	郡名	城名	領主名	備考	国名	郡名	城名	領主名	備考
筑前国	御笠郡	岩屋城（太宰府市）	高橋氏	大友氏御笠郡代	豊前国	田川郡	香春岳城	高橋氏	
	夜須郡	古処山城・荒平城（朝倉市）	秋月氏			京都郡	馬ヶ岳城	長野氏	
	下座郡	―	―			仲津郡	神楽城	宇都宮（城井）氏	
	上座郡	―	―			築城郡	宇都宮氏城館	宇都宮（城井）氏	
	穂波郡	―	―			上毛郡	―	―	
	嘉麻郡	益富城（嘉麻市）	秋月氏		筑後国	御原郡	―	―	
	鞍手郡	―	―			御井郡	―	―	
	遠賀（御牧）郡	花尾城（北九州市八幡西区）	麻生氏			三潴郡	蒲池城	蒲池氏	
		山鹿城（芦屋町）	麻生氏			山本郡	竹井城	草野氏	
	宗像郡	蔦岳城（宗像市/岡垣町）	宗像氏			竹野郡	発心城	草野氏	
	糟屋郡	立花山城	立花氏	大友氏糟屋郡代		生葉郡	妙見城	星野氏	
		高鳥居城	杉氏・星野氏				井上城・長岩城	問註所氏	
	席田郡	―	―			上妻郡	猫尾城・高牟礼城	黒木氏	
	那珂郡	鷲ヶ岳城	大鶴氏	大友氏那珂郡代			犬尾城	川崎氏	
		一ノ岳城	筑紫氏				山下城	蒲池氏	
	早良郡	安楽平城	小田部氏	大友氏早良郡代		下妻郡	―	―	
	怡土郡	高祖城	原田氏			山門郡	飛塚城	田尻氏	
	志摩郡	柑子岳城	臼杵氏	大友氏志摩郡代		三池郡	三池山城	三池氏	
豊前国	企救（規矩）郡	長野城	高橋氏（あるいは長野氏）						
		小倉城	高橋氏						

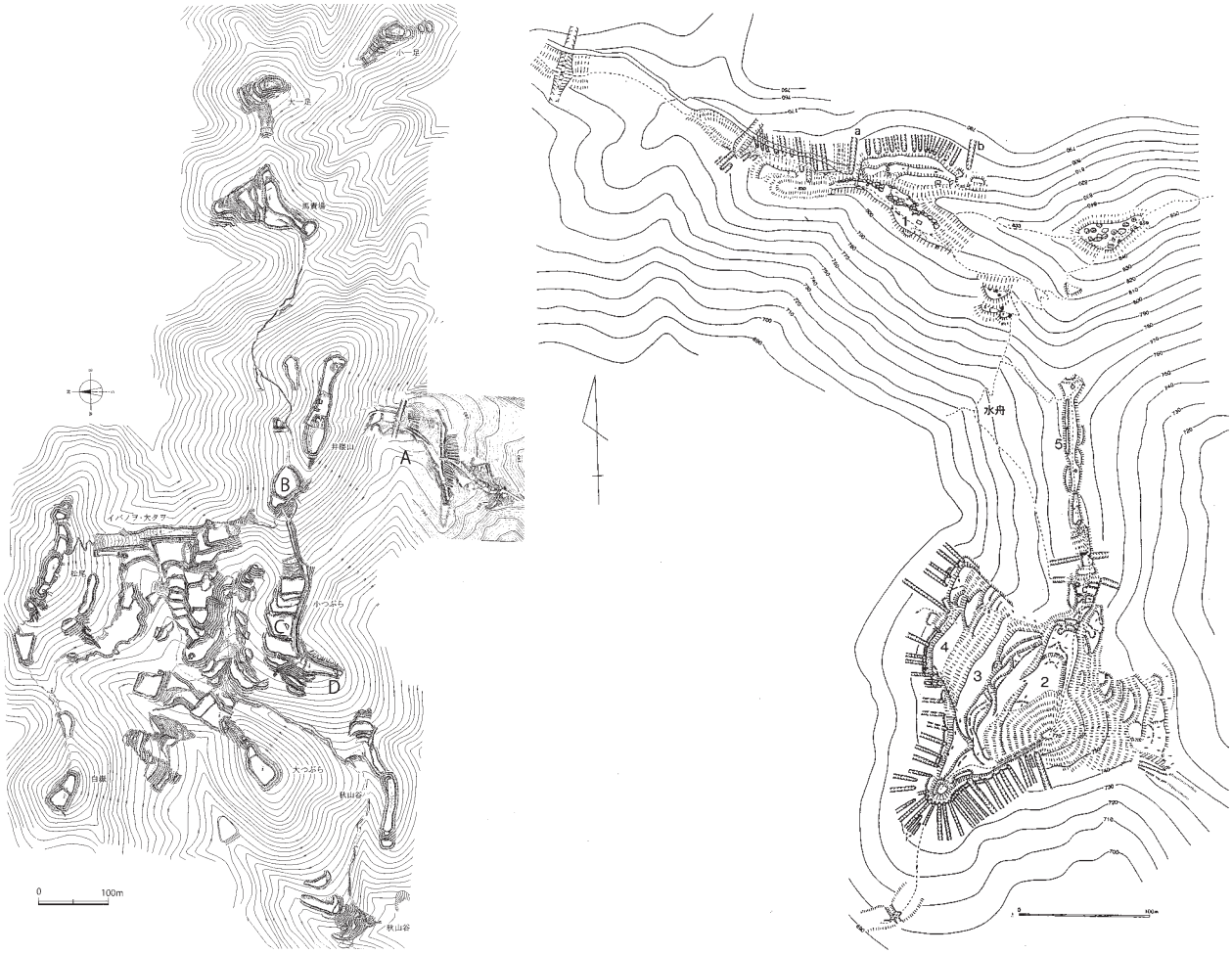
これらの城館における特徴を示すとすれば、次の2点があげられよう。

ア.大規模城館の存在

福岡県内の拠点城館の中には、筑前の立花山城、古処山城・荒平城、益富城、蔦岳城、豊前の長野城、馬ヶ岳城、筑後の妙見城など、全長500mをはるかにしのぐ大規模城館が存在する。一郡、あるいはそれを越えた範囲での勢力の結集した結果を表しているものと思われる。また、後段においても触れるが、畝状空堀群などの特徴的な防御施設を過剰に備えたものも含まれている。

イ.瓦・石垣の使用

立花山城、鷲ヶ岳城、安楽平城、高祖城など、主に福岡湾周辺の拠点城郭には、瓦と石垣が使用される事例が確認できる。いわゆる織豊系の築城技術導入以前の在地の城館において、瓦や石垣が使用される事例は全国的に普遍的にみられるものではなく、特定の地域に偏在することが分かっているが、北部九州もその偏在する地域の一つである。石垣については基本的に城館周辺、あるいは



第297図　県内の中世の大規模城館の事例(左:立花山城・右:古処山城)

第298図　県内の石垣を用いた中世城館の事例(左:鷲ヶ岳城・中:安楽平城・右:一ノ岳城)

城館構築の造成時に産出された石材を用いたものが大半であり、織豊期以降のような遠方の石切り場から輸送してくるようなことは行っておらず、どちらかといえば、「その場にあるから使う」という消極的な使用であるとみられるものの、特筆すべき事項であろう。また、瓦を使用する他の事例としては、古処山城、蔦岳城、二丈岳城があり、拠点城郭に集中することが分かる。

②小規模城館群集の地域

福岡県内には拠点城郭が見られない地域がいくつかある。そのような地域は城がないわけではなく、拠点城郭に代わって小規模城館が群在する状況が確認できる。鞍手郡などは最たるもので、特に郡の西側、いわゆる上鞍手（若宮）地域（現在の宮若市）近辺には集落の背後の丘陵頂部に小規模な曲輪を１～２面、堀切を何本か構築した程度のいわゆる「小規模城館」が多数確認できる。地

誌ではこれらの城館の城主は、地元の小領主となっており、村ごとに小領主とその領主の城を確認することができる。鞍手郡は有力な国人領主が存在しなかった地域で、立花氏、秋月氏、宗像氏の支配領域のはざまにあたるいわゆる「緩衝地帯」的な地域であったとみられる。中には宮永城や犬鳴城、（湯原）草場城などのように、やや比高の高い頂部に規模の大きな城が構築されているものの、これらは周りの国人領主がそれぞれ当地の支配の足掛かりとして築いた城であり、これらの小規模城館群は、小領主層が割拠していた鞍手郡の戦国期の社会構造を表す非常に重要な存在といえよう。

また、県内で他に小規模城館が密集する地域としては、筑前志摩郡、豊前田川郡南部（大任町・川崎町周辺）、仲津郡～上毛郡（宇都宮氏などの豊前国衆の城館群）などがあげられよう。

③筑後の平地城館

福岡県内でも、有明海に面した筑後地域は平野が広大に広がっており、山城を築けない場所が少なからず存在する。特に筑後の三潴郡や山門郡は大小の河川が入りくんだ低湿地で、灌漑や排水のためのクリークが発達した地域である。このような低地の平野では、クリークを水堀とした平地城館が連想される。隣接する佐賀平野では、姉川城や直鳥城（佐賀県神埼市・姉川城は国指定史跡）等では、城全体にクリークを巡らし、島状の曲輪群を形成している。福岡県内においても、蒲池城や､近世城郭に改修される前の柳川城などはそのような城館の景観を呈していたものと想像される。

しかしながら、今回の調査ではクリークを巡らし、島状の曲輪を密集させるような中世城館の存在を明確に確認することはできなかった。クリークを巡らした近世以来の集落はいくつも存在するのだが、それらは江戸時代以来の地誌等に城館としての伝承が見られるものはほとんどなく、城館と伝えられる場所はいくつもあるが、それらは明治以降の地図、字図などを見ても、クリークの囲繞とは関係のなさそうな場所ばかりであった。あえてその可能性があるものといえば、生津城（久留米市）、酒見城、津村城（大川市）、津留城、白鳥城、蒲船津城（柳川市）などがあげられるが、城館伝承地と近世以降のクリーク集落が偶然重複したに過ぎない可能性も考えられる。しかしながら、白鳥城は明確な城館伝承がない場所（古戦場としての伝承は残る）であったりと、検証の根拠に乏しいのが現状である。

またその一方で、彼岸田遺跡（筑後市）では、城館の由来がない場所であるにもかかわらず、四重の水堀にめぐらされた 14 ～ 15 世紀の中世居館が発掘調査で確認されており、今後未知の平地城館が確認される可能性も考えられよう。

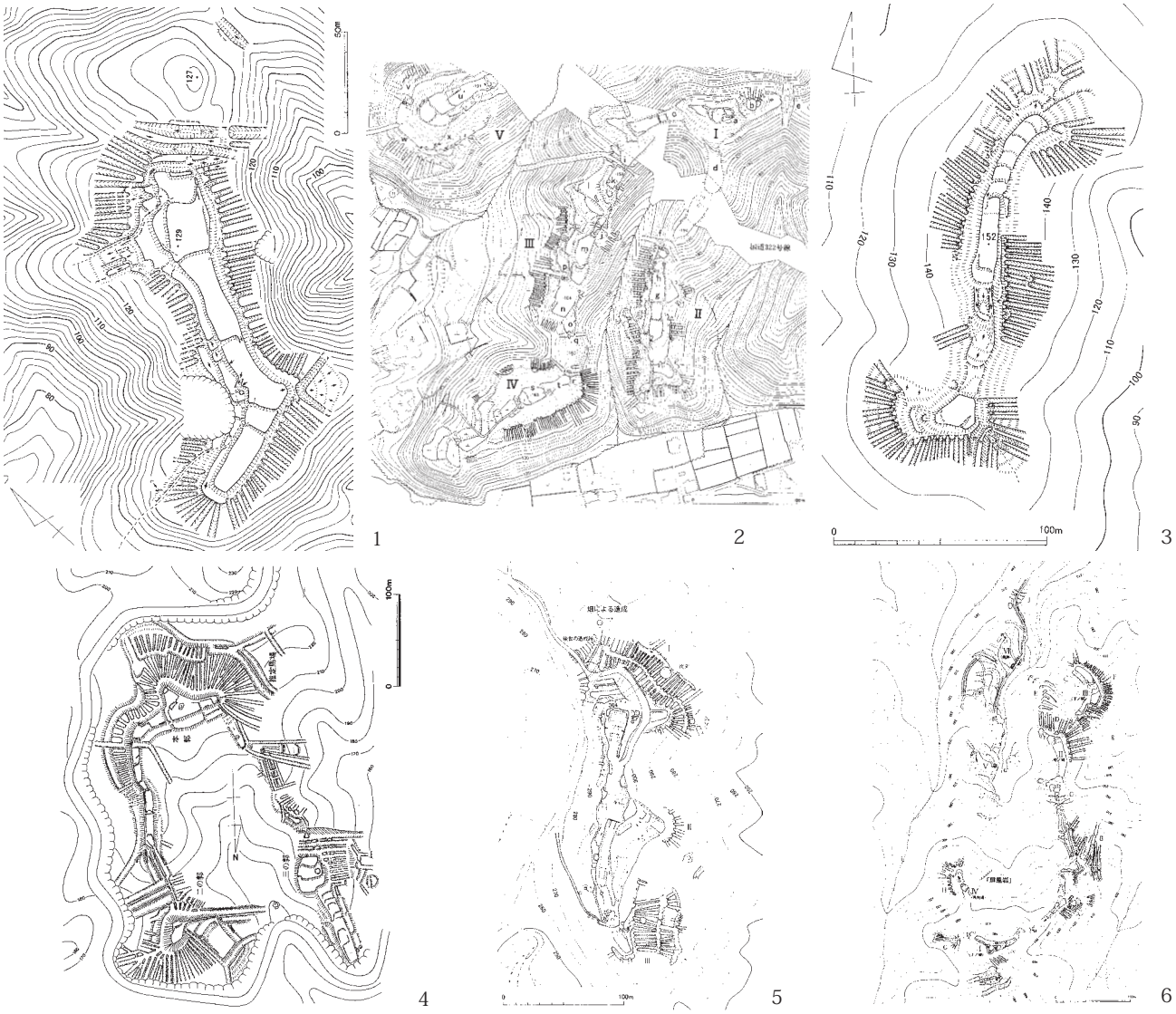
④特色ある防御遺構

今回の調査で確認された城館の中には、福岡県内の中世城館を特徴づける防御遺構を備えたものがいくつも確認された。その代表的な防御遺構として畝状空堀群と多重横堀があげられる。

ア．畝状空堀群の多用

畝状空堀群とは、山城の斜面上（あるいは平坦面上）に竪堀を何本も連続させて構築した遺構群を指し、横堀などと組み合わせることで、曲輪斜面の防御強化を図るものである。畝状阻塞、畝状竪堀群、連続空堀群などとも呼ばれる。

この畝状空堀群は、中世城館では、北は秋田県から南は鹿児島県まで確認され、一見広く分布しているものの、特定の地域に偏って集中していることが明らかとなっている。集中する地域としては、越後、飛騨、土佐、安芸などに加え、北部九州（筑前・豊前）があげられる。福岡県内でも、

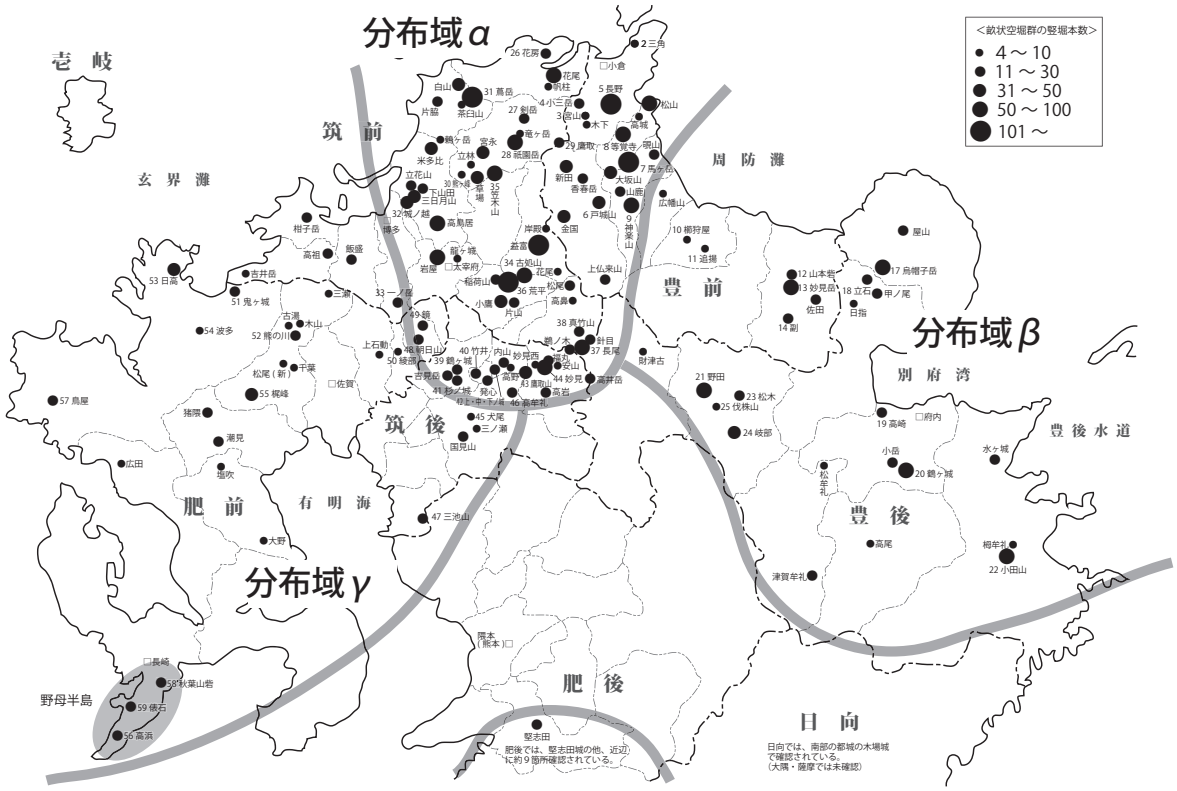


第 299 図　県内の畝状空堀群を多用する中世城館の事例
（1：長尾城・2：荒平城・3：祇園岳城・4：長野城・5：等覚寺城・6：妙見城）

古く廣崎篤夫により長野城など、膨大な数の畝状空堀群を備えた城の存在が指摘されている（廣崎1986）。

さらに北部九州全体でみてみると、福岡県の他、北部九州全県（佐賀・長崎・大分）で畝状空堀群を持つ城館は確認されているものの、その城館数、さらには畝状空堀群の竪堀構築数で、福岡県は他を圧倒しており、その差は歴然である。特に長野城、蔦岳城、益富城、荒平城などは一つの城に 100 本前後、あるいはそれ以上もの竪堀を構築しており、畝状空堀群を構築することを城郭防御の基本路線としていたことがよくわかる。

さらに北部九州における畝状空堀群を持つ城館の分布を検討したところ、分布域は第300図のようにα～γの三つの分布域に区分され、分布域αに竪堀の本数が多い城館が密集する状況が読み取れる。福岡県内では全般的に畝状空堀を持つ城が分布してはいるが、分布の密集状況をさらに詳細にみると、顕著に畝状空堀群を多用する城館は、秋月氏の本拠（古処山城・荒平城・益富城）とその支配領域の縁辺部、すなわち境目の城に多用されることが指摘されている（岡寺2006）。さらに秋月氏ばかりではなく、その同盟関係にあった勢力の城館（星野氏の高鳥居城・妙見城、高橋氏の



第 300 図　九州における畝状空堀群を構築する中世城館分布図（岡寺 2016b）

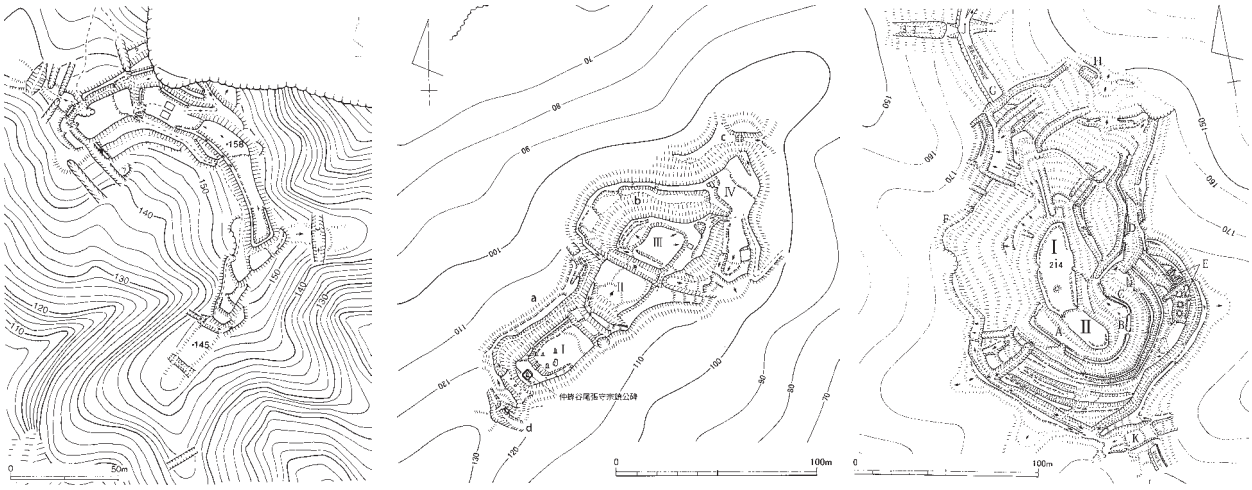
長野城、長野氏の馬ヶ岳城・等覚寺城など）や、これらの勢力と直接敵対する隣接勢力の城館（宗像氏の蔦岳城、問註所氏の安山城・西ノ城（井上西城）、草野氏の発心城など）に濃厚に見受けられる（岡寺2016ｂ）。

以上のように、福岡県内の中世城館の防御遺構を考える上では、膨大な竪堀群により構成される畝状空堀群は、非常に特色あるものといってよいであろう。

イ．多重横堀

福岡県内の城館において畝状空堀群が多用される一方で、もう一つの別に特色ある防御遺構として、多重横堀があげられる。これは県内でも偏って分布が認められるなどの傾向はつかめていないが、顕著な事例としては、馬場城･八田城（豊前市）、犬尾城･鷹尾城（八女市）、小田城（みやま市）、竹の尾城（北九州市八幡西区）、高尾山城（太宰府市）などが挙げられる。福岡近県では肥前東部から筑前西部にかけて勢力を持っていた、筑紫氏の本城・勝尾城（佐賀県鳥栖市）とその出城・葛籠城には長大な横堀ラインを延々と伸ばす縄張り構造が確認できる。太宰府市の高尾山城など、太宰府・筑紫野地域に見られる横堀を持つ城の多くは筑紫氏が関与していることが分かるが、それ以外については分布に特徴が見られるものではない。特筆すべき事項として、みやま市の小田城は、これまでほとんど城の構造が知られていなかったが、今回の調査により、最大六重の横堀ラインを構築する厳重な防御構造がみられた。小田城の出城・禅院城では全長 100m 前後もある堀切２本を構築しており、多重横堀の構築を防御の基本路線とした縄張りのあり方があったことを示唆しており、非常に興味深い。

いずれにせよ、戦国時代末期の北部九州の国人領主たちは、城郭の防御の方法として、畝状空堀



第 301 図　県内の多重横堀を構築する中世城館の事例（左：高尾山城・中：馬場城・右：小田城）

群や多重横堀など、特色ある技法を熟知しており、それぞれの志向性に基づき、畝状空堀群を積極的に選択した秋月氏や、多重横堀を積極的に選択した筑紫氏など、防御についての多くのバリエーションを持ち合わせていたことが特徴として挙げられよう。ただ、城の虎口に対する関心は薄く、虎口を設ける城はまれに見受けられるものの、虎口をしっかりと防御する工夫や、虎口そのものの構築ですら、あまり積極的ではなかったことは、北部九州の中世城館の特徴ともいえよう。

⑤陣城

陣城とは戦時において、攻城あるいは守城のため、あるいは戦場において一時的に構築された城砦のことを指すが、北部九州においては縄張り構造から陣城について特定できるようなものはこれまで見られなかった。文献上では、久留米市高良山周辺の城館群について、天正12年（1584）の大友方（戸次氏・高橋氏）の筑後攻略戦における陣であると指摘されているものの、それらの城館群の縄張りは、一般的な中世山城の縄張りから見て極端に異なるものではなく、通常の山城と陣城との区別ができるほどではなかった。

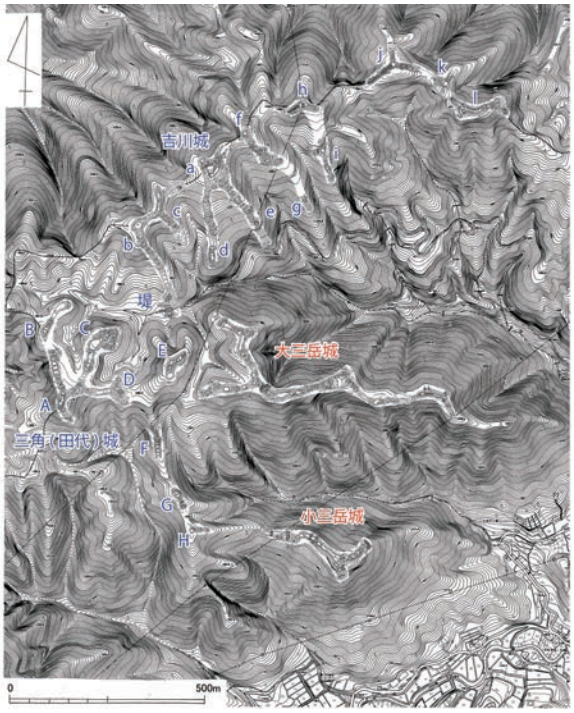
ただ近年、立花山城の南側の三日月山や城ノ越山において、尾根上に延々と曲輪群を構築するような長大な城館群が確認され、永禄12年（1569）の立花山城を巡る大友方と毛利方との戦いに関する陣城ではないかという指摘がなされるようになった（藤野・山崎2014）。また、今回の本事業での調査においても、北九州市小倉南区の三岳城（大三岳城・小三岳城）およびその周辺の城館群について、三岳城を攻める側と守る側が相対峙するような曲輪群が尾根上に延々と構築されている様子を確認することができ、これも立花山城を巡る争いがあった前年（永禄11年）の毛利方と大友方（長野氏）との戦いにおける陣城群ではないかと考えられるようになった（村田2000・岡寺2016ａ）。縄張りの特徴としては、

ア.尾根上の平坦地形をひたすら曲輪化、斜面は階段状に小刻みに小曲輪を構築

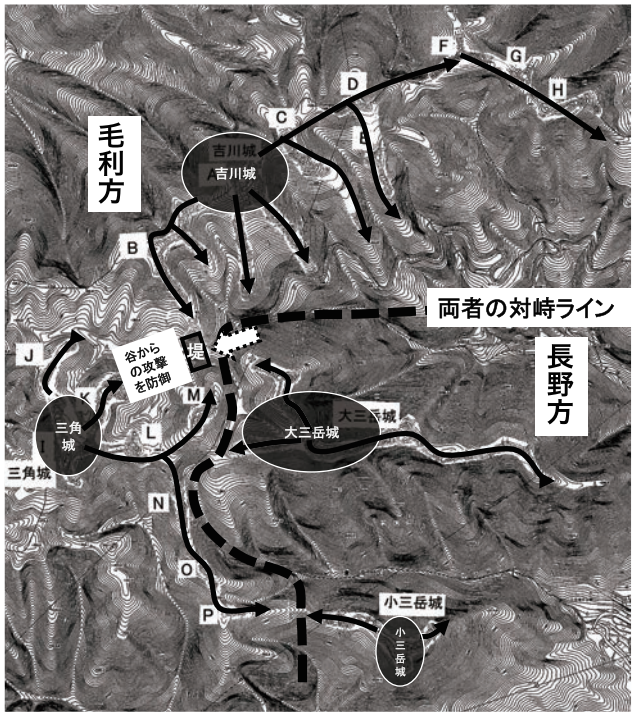
イ.堀切などの遮断遺構はあまり設けない

ウ.攻撃あるいは防御する方向が明確な場合は、その方向に向けて曲輪化し、それ以外の方向へは、たとえ平坦地形があっても曲輪化しない

などがあげられる。このような縄張りを持つ大規模な城館としては、若王子城（北九州市小倉



第 302 図　三岳城周辺城館位置図



第 303 図　永禄 11 年三岳合戦における陣城配置考察図（岡寺 2016a）

北区）、椎山城（北九州市小倉南区）、障子ヶ岳周辺城館群（京都郡みやこ町・田川郡香春町）、扇山城（飯塚市）などをあげることができる。これらについては近年、発見・再確認されたばかりのものであり、詳細な検討は今後に委ねられてはいるが、福岡県の中世城館を考える上では非常に重要な存在となろう。

⑥南北朝時代・戦国時代前半の城館

これまであげてきた中世城館の特徴のほとんどは、戦国時代末期（16 世紀後半）に限定されたものである。それは、現在地表に残されている中世城館の姿は、廃絶時の様子を示しているためであり、ほとんどの中世城館の廃絶が戦国時代末期まで下ることから、南北朝時代や戦国時代前半（14 ～ 15 世紀）の状況をほぼ示していないからである。そのような状況であるから、当該期の城館の特徴を考えるのは、全面的に発掘調査が行われた事例で、なおかつ戦国時代前半までに廃絶した城館であるという非常に限定された条件のものしかない。現状県内では、園田浦城（北九州市八幡西区）が 15 世紀代で廃絶した状況を示したほぼ唯一の発掘事例であろう。堀切や単独の竪堀などは確認できるが、畝状空堀群や多重横堀などの複雑な防御遺構は確認されていない。

一方、平地城館の発掘事例は少なからず存在している。今回、当事業においては「城館関連遺跡」として、城館の伝承がないものであっても、中世期に堀や溝で囲まれた屋敷地の調査事例について、リストアップして掲載した。県内全域で 80 箇所ほどにも及び、時期も 12 ～ 17 世紀と非常に幅広く確認することができた。ただ、このような平地の堀や溝で囲まれた屋敷地の遺跡は、開発に伴う発掘調査など偶発的に発見されることがほとんどであり、また古代までの古い時代と複合した遺跡の場合、調査担当者の注目がどうしても古い時代に行ってしまいがちであることから、その重要性を見落としたままに調査、報告が行われる場合が少なくない。よって、今回あげたもの以外にもいくつか見落としもあるだろうし、今後発掘されてくるものも少なくはないだろう。中世山城ではな

かなか把握しにくい南北朝～戦国前半期の城館遺跡を考える上でも、平地城館の調査成果は少なからず注目すべきであろう。

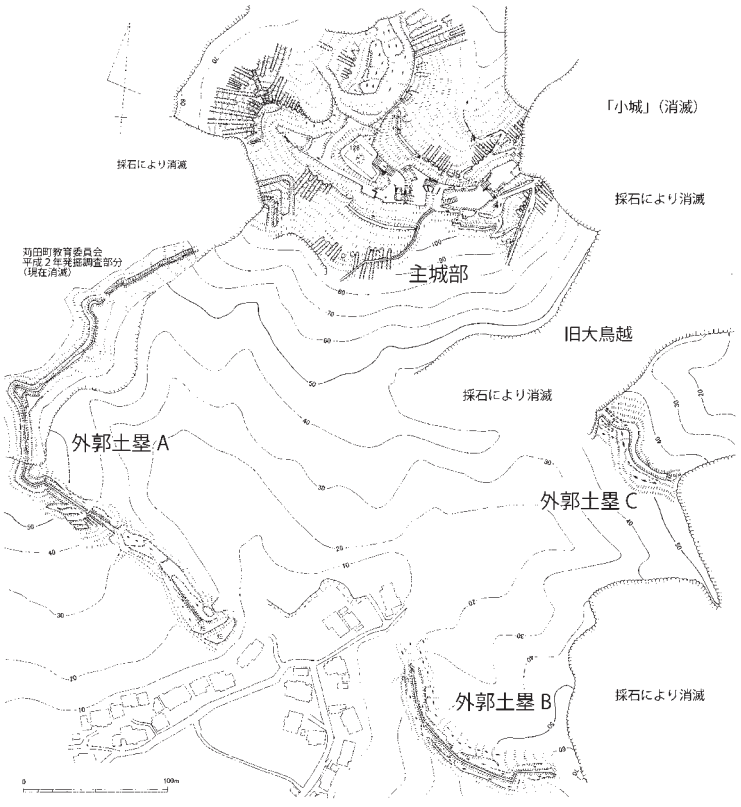
（2）織豊期・近世城館

①織豊系城郭の導入と展開

天正 14 年（1586）、豊後大友氏援助と島津氏打倒を名目に、中央政権を掌握した豊臣秀吉の勢力が九州に上陸する。以後、いわゆる「織豊系」の築城技術による築城が北部九州にも始まる。

福岡県内における最初の織豊系城郭の築城は、天正 14 年に小早川・黒田が豊前に上陸して一帯を鎮圧する際に築城・改修した城とみられる。例えば、本事業において再確認した松山城（苅田町）の外郭ラインがあげられよう。一見ただの土塁線にも思えるが、塁線の各所に横矢を効かせることのできる屈曲部を設け、土塁線の途中に設けた虎口は、食い違い虎口のように城内に屈曲してから入るようにできていて、明らかに織豊系の築城技術によるものであることが分かる。おそらく豊前攻略のため、松山城に入った小早川、あるいは黒田により改修されたものとみられる。この他、天正 15 年の豊前国人一揆における黒田方の付城として利用した城郭のいくつかにも、このような織豊系の築城技術が用いられ、それらが九州における織豊系城郭の導入といえよう。

これらは陣城など一時的な使用の際のものであり、本格的に技術導入による築城が行われるのは、天正 15 年の九州国分け以後である。国分けにより、筑前には小早川隆景、豊前には黒田孝高と森吉成などの豊臣系大名が入城する。黒田の居城・中津城は大分県内に所在するが、森と小早川の居城は、豊前・小倉と筑前・名島に築かれた。小倉城は江戸期の大改修により当該期の状況はよくわからないが、名島城については、近年、発掘調査が行われ、算木の隅角を明瞭にした石垣づくりの枡形虎口を備え、桐文の軒丸瓦や大型の鯱瓦を葺いていたことが想定されている。また、小早川が名島城に移るまでの間に在城した立花山城にも、同様の石垣や枡形虎口を備えた箇所が確認され、これら両城が九州における本格的な織豊系城郭の嚆矢として重要な存在といえよう。また、年代については確定していないが、松山城（苅田町）の山上の曲輪群は部分的に算木積みの石垣を構築するばかりではなく、つづら折れの導入ラインを確立していて、織豊系城郭の技術が



第 304 図　松山城縄張り図

遺憾なく発揮されている。

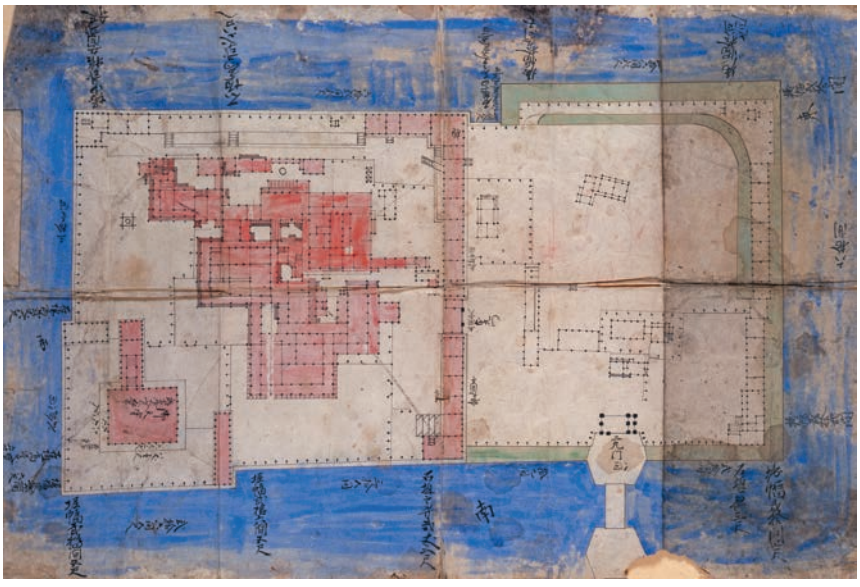
②織豊期の本城と支城

九州国分け後、文禄・慶長の役を経て、慶長５年（1600）の関ヶ原合戦により、福岡県内の諸大名の目まぐるしい入れ替えが行われる。その結果、筑前には黒田長政、豊前には細川忠興、筑後には田中吉政が入ることになる。この関ヶ原合戦後の慶長期は、一般的には豊臣に対する徳川の圧倒的優位により政権が安定していたとの見方もあるが、徳川と豊臣、二つの政権が両立する、いわゆる二重公儀体制のような状況であり、また新たな土地に入部してきた大名も、慣れない土地で常に他国からの侵略に備える状態であった。そのようなことから、新規に本拠となる居城を大々的に築城するのはもちろんのこと、領内各所に支城を置いて、領内防備に努めるような状況であった。いわゆる「慶長の築城ラッシュ」と呼べる状況が現出していた。

福岡県内においては、筑前の黒田領は本城福岡城のほかに、黒崎、若松、鷹取、益富、小石原、麻氐良の６つの支城、いわゆる「筑前六端城」が築城された。これらの内、若松城は消滅したものの、残りの５つの内、麻氐良城を除く４つは発掘調査が行われ、瓦（小石原を除く）、礎石建物に加え、石垣で固められた枡形虎口を検出（麻氐良城でも瓦が採集され、地表観察で枡形虎口が確認されている）、福岡城と同様、織豊系の築城技術が大いに用いられた構造となっている。豊前の細川領も、本城小倉城をはじめ、福岡県内の支城としては香春岳の鬼ヶ城、岩石城や門司城など、従来中世城館が存在した場所あるいはその周辺であるにもかかわらず、石垣や瓦を用いて新規に大規模改修を行っている。筑後の田中領についても、本城柳川城を現在に続く縄張りの原型となる大改修を行ったほか、領内10箇所に支城を置いた。平地城館が多いために詳細が分かるものが少ないが、八女の福島城や猫尾城などは石垣を用いた織豊系の築城技術による築城・改修が行われている。

③近世城郭の成立

慶長20年（1615）、大坂夏の陣により豊臣家は滅亡、徳川氏の支配体制が完全に確立し、本格的に近世社会が到来する。いわゆる元和の一国一城令により、領内の支城は基本的には破却などにより廃絶、軍事的政治的権力は、すべて各藩の本城へ集中することとなった。福岡県内の藩も元和６年（1620）に筑後の田中家が無嗣廃絶となり、久留米に有馬家、柳川に立花家が入城、いわゆる「四藩体制」が近世期を通じて確立する。黒田、細川（のち小笠原）、有馬、立花の各家は、福岡、小倉、久留米、柳川の各城を本城と



第 305 図　御城絵図（柳川城）
（福岡県立伝習館高等学校蔵・柳川古文書館保管・写真提供）

して幕末まで存続する。

また、近世期、福岡藩では寛永元年（1624）に秋月藩、元和９年（1623）に東蓮寺藩（のち延宝３年（1675）に直方藩として再立藩）の２つの支藩が生まれ、それぞれ陣屋を構えている。この内、秋月陣屋は現在も残されており、石垣、櫓、大手門などが備えられてはいるが、筑前六端城にみられたような枡形虎口などの純軍事的なパーツはなく、もはや城というよりは陣屋、御殿であったことがわかる。

④幕末期城郭

幕末期、特にペリー来航の嘉永６年（1853）以降、急激に不穏になっていく社会情勢の中で、各藩は有事に備え、「陣屋」あるいは「御殿」と称する緊急避難施設を領内に構築するようになっていく。五稜郭（北海道函館市（函館代官所））や龍岡城（長野県佐久市（田野口藩））など西洋式の城郭構造を取り入れたものまで現れる一方で、勝山御殿（山口県下関市（長府藩））のように旧来の日本式城郭により新規に築城されるものが現れてくる。そのような中、福岡県内においても、秋月藩の秋月南御殿（文久３年（1863）築造）や、福岡藩の犬鳴別館（宮若市・慶応元年（1865）竣工）などが築造される。あくまでも城ではなく御殿、別館という名目で築造されたため、櫓や枡形などの城とみなされる軍事施設は極力排除して造られているのが特徴である。秋月南御殿も犬鳴別館もともに、現在も石垣が残されており、当時の社会情勢を伝える上で非常に重要な存在といえよう。

【参考文献】
岡寺　良 2006「戦国期秋月氏の城館構成―福岡県朝倉市・杷木地域を事例に―」『城館史料学』第４号　城館史料学会
岡寺　良 2016a「豊前地域における陣城・臨時的築城」『平成 27 年度九州城郭研究大会資料集』北部九州中近世城郭研究会
岡寺　良 2016b「九州における畝状空堀群の様相」『第 33 回全国城郭研究者セミナー　シンポジウム「連続空堀群再考」資料集』第 33 回全国城郭研究者セミナー実行委員会・中世城郭研究会
廣崎篤夫 1986「福岡県内の畝状堅堀について」『第３回全国城郭研究者セミナー報告資料』
藤野正人・山崎龍雄 2014「三日月山城砦群と城ノ越山城砦群の考察―対面する二つの巨大な城砦群―」『九州考古学』第 89 号
村田修三 2000「長野城とその包囲網」・「中世・近世移行期の山城の変遷―城塞群における臨時築城と恒久築城の関係を中心に―」『長野城』北九州市教育委員会

おわりに－今後に向けて

はじめにでも述べたが、平成 24 年度よりから開始した福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業は、28 年度にて全て完了する。国庫補助事業の中近世城館遺跡の分布調査は福岡県教育委員会としては初めての行いであったが、実は福岡県教育委員会では過去に同種の調査を行っている。それは、九州縦貫自動車道建設に伴って鞍手郡鞍手町音丸城跡の記録保存調査が行われたことなどを発端として、同自動車道建設に伴う調査の一環として昭和 52 年（1977）に行われた福岡県下全域の中世城郭調査である。ただその際には、部分的に現地踏査なども行われたようであるが、その成果を十分に反映することはほぼなく、主に公表されたのは県内中世城郭一覧表と分布図であった。確かにその時点では十分な成果であり、その後の県内の遺跡分布地図の作成などにも反映され、城跡の保護という観点においては一定の成果をあげることができたといえよう。しかしながら、中近世城館の調査研究も進み、かつてのデータのみでは十分とは言えず、さらには小倉城（北九州市小倉北区）などの都心部の近世城郭は固より、山城でも園田浦城（北九州市八幡西区）、御飯ノ山城（福岡市東区）、米の山城（飯塚市）などが開発対象として記録保存調査が行われたこともあり、今後の中近世城館の保存活用のためにも、かつての調査からおよそ 40 年ぶりに今回の事業の実施になった次第である。

当事業の最大の成果は、県下全体の中近世城館の悉皆的な把握であろう。よく知られている城館はもちろんのこと、ほぼ無名の城館についても対象としたため、いまだ周知の包蔵地となっていないものはもちろんのこと、周知の包蔵地でも位置や範囲が異なっていたものについても、より正確に把握できたといえる。今後の見通しとしては、まずはそれら未周知の対象については、文化財保護法の手続きに従って包蔵地の周知化を行い、位置や範囲についても見直しを行うことでより確実に保護の対象とすることが最重要課題といえよう。

また、当事業では広く保護の対象とするため、中世の城館のみならず近世から幕末に至るまでの城館も調査対象とした。さらには直接的な対象ではないが、中近世城館に関連する遺跡として、幕末期の海防・防衛施設（烽火台・台場・遠見番所）についても現状わかる範囲での情報収集と現地調査を実施した。必ずしも十分な調査とは言えないが、これらの成果については、本書に附編として掲載しており、今後保護の対象とする上での情報として活用いただければ幸いである。

さて、話しは中近世城館に戻るが、今回の事業実施により、県下全体の中近世城館の現状の状況が明らかとなった。そのため特に重要とみなされるものについては、さらに詳細に調査を進めたうえで、将来的な史跡指定を行う見通しを立てることもできるようになったのではなかろうか。現在、福岡県下において国指定史跡となっている中近世城館は、福岡城跡ただ一つであり、中世城館は一つも指定されていないのが現状である（他の指定要件により史跡地に含まれている対象は除く）。県指定や市指定史跡も皆無ではないものの、他の種類の遺跡に比べると必ずしも多いとは言えない状況である。当事業の成果が今後の史跡指定への道筋となれば幸いである。

最後に、当事業を実施するにあたり、御協力いただいた県内市町村教育委員会、博物館、図書館、また自身の研究成果を提供していただいた城郭研究者の方々、現地の情報等をいただいた地元住民の方々、さらには日頃の御指導ならびに総括編に御執筆いただいた調査指導委員の先生方に感謝を述べ、文章を締めくくることとしたい。

附.福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台跡

附 . 福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台跡

福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査においては、中近世城館だけではなく、近世の海防・防衛に関わる施設、すなわち台場・遠見番所・烽火台についても調査を行った。これは、調査指導委員会の検討において、近世城館も調査を行うのであれば、これらの施設についても併せて行うべきではないかという意見があり、それを受けて事務局により中近世城館の調査の合間を見て、現地調査や文献・絵図調査を行った。ただ、この種の施設については、調査・研究の蓄積があまりなく、調査方法も確立しているとはいいがたい状況であるため、詳細な報告については後日に期すこととし、本事業においては現状の調査結果をまとめる程度となった。決して完璧を期すことができたわけではないが、現状での調査成果を公表することで、今後の備えとしたい。なお、調査を行うにあたり、以下の方々や機関にはご協力いただいた。記して感謝したい（50 音順、敬称略）。糸島市大入区、糸島市立伊都国歴史博物館、岩国徴古館、北九州市立自然史・歴史博物館、久留米市市民文化部文化財保護課、立花家史料館、福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会、福岡県立糸島高等学校、福岡市博物館、みやこ町教育委員会、柳川古文書館、有田和樹、小野剛史、若杤善満。

1　福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台の歴史的概要

①海防意識の高まりと遠見番所の設置

近世において沿海部の海防意識が高まってくるのは、寛永年間ころからである。島原の乱の鎮圧に象徴される禁教とそれに伴うスペイン･ポルトガルとの貿易の禁絶､いわゆる「鎖国と禁教」によって領海警備がなお一層重要視されてきたことによる。寛永 15 年（1638）､島原の乱を鎮圧した幕府は、スペイン・ポルトガルとの交易を禁止、同 17 年に通商の継続を願い出るために派遣されたポルトガル使節一行を処刑した。これが新たな国際緊張を生み、その対応策として沿岸警備令を強化、ポルトガル船は打ち払いの対象として、各藩に沿海部の監視のための遠見番所の設置や、異国船渡来時には長崎奉行などへの報告を義務付けた。その結果、福岡県内では、福岡藩、小倉藩などで遠見番所が設置された。また、柳川藩や久留米藩においても、異国船打ち払いの他、河川の通行の監視などのため、筑後川や有明海沿岸にも遠見番所・津口番所を設置している。

②烽火台の設置

各藩に遠見番所の設置を義務付けた寛永年間には、長崎警備を強化すると同時に、異国船の来襲を江戸及び近隣諸藩に通達するしくみとして烽火台が設置される。正保４年（1647）にポルトガル船２隻が長崎に来襲した際には、長崎の放火山（烽火山）に設置された烽火台に、初めて公的に狼煙が上げられ、享保年間には佐賀藩や天草などで烽火台の再整備がなされている。

福岡県内において、本格的に烽火台が設置される契機となったのは、文化５年（1808）８月に起こったフェートン号事件である。イギリス軍艦フェートン号の長崎港侵入と無抵抗のままに出港を許してしまったこの事件をきっかけに、狼煙による緊急連絡の重要性を痛感、各藩では烽火台が各地に整備されていった。長崎において異国船の来襲などの異変が起こった場合、すぐさま長崎の放火山に狼煙が打ち上げられ、多良岳から佐賀を経て、福岡藩領、小倉藩領、中津藩領へとリレー形式により九州各地に有事が伝達されるようになった。福岡藩では、フェートン号事件の２か月後の同年10月には藩内の６ヶ所に烽火台（六峰）が設置されている。

③台場の設置

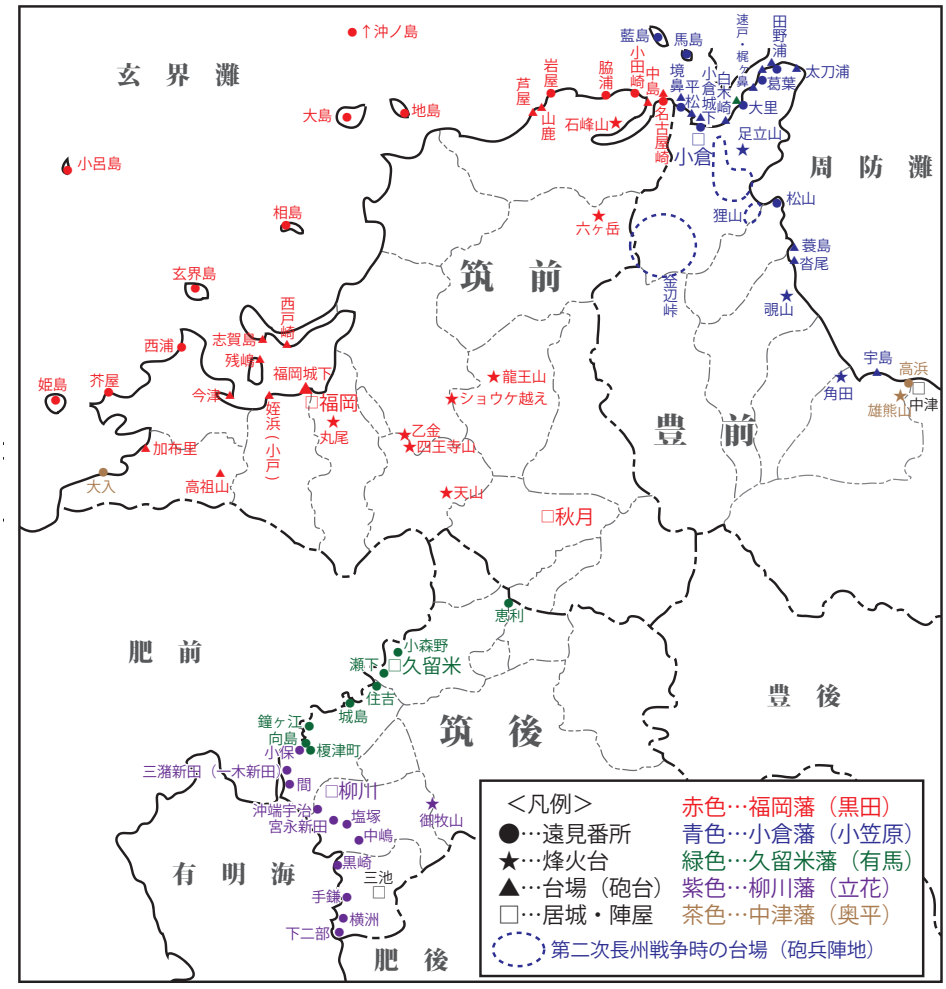
フェートン号事件以降、相次ぐ異国船の来航によって海防論が強まり、幕府は文政８年（1825）に「異国船打ち払い令」を発するが、アヘン戦争による清の敗北などを受け、天保 13 年（1842）に撤回する。しかし海防の重要性は引き続き認識され、嘉永６年（1853）のペリー来航以来、日本各地の沿海部に台場（砲台）の築造がさかんとなる。福岡藩では、安政元年（1854）に台場を建設する許可を幕府に願い出、同３年から文久元年（1861）ころにかけて城内ならびに藩内の約 10 ヶ所に台場を設置している。小倉藩も文久３年（1863）に響灘沿岸から関門海峡にかけての沿海部に、久留米藩も藩屋敷を構えていた豊前大里（北九州市門司区大里）に台場を構築した。

④第二次長州戦争における砲兵陣地の台場

慶応２年（1866）６月に始まった第二次長州戦争で行われた小倉口の戦いでは、幕府軍は長州に攻め込むどころか高杉晋作率いる長州軍の九州上陸を許し、戦意の上がらない幕府方の各藩諸隊は次々に離脱、最終的に孤立した小倉藩は８月１日に小倉城を自ら焼き、田川郡へ撤退した。しかし、小倉藩も家老・島村志津摩の指揮の下、企救郡と田川郡との境・金辺峠（北九州市小倉南区・田川郡香春町）と、企救郡と京都郡との境・狸山（北九州市小倉南区）にそれぞれ陣を張り、攻め来る長州軍を撃退、最終的には翌３年１月 20 日、両藩は講和して、第二次長州戦争は終結したのである。

この一連の戦いの中で、企救郡内の各所において両藩の間で戦闘が繰り広げられ、至る所に陣が張られ、台場（砲兵陣地）が築かれ、文献や絵図などにその存在が記されている。

以上、概要について説明したが、次章にてそれらの海防・防衛施設の個別説明を藩ごとに行い、次々章にて文献史料一覧を提示する。



第 306 図　福岡県内の近世台場・遠見番所・烽火台跡位置図

2　個別報告

（1）福岡藩

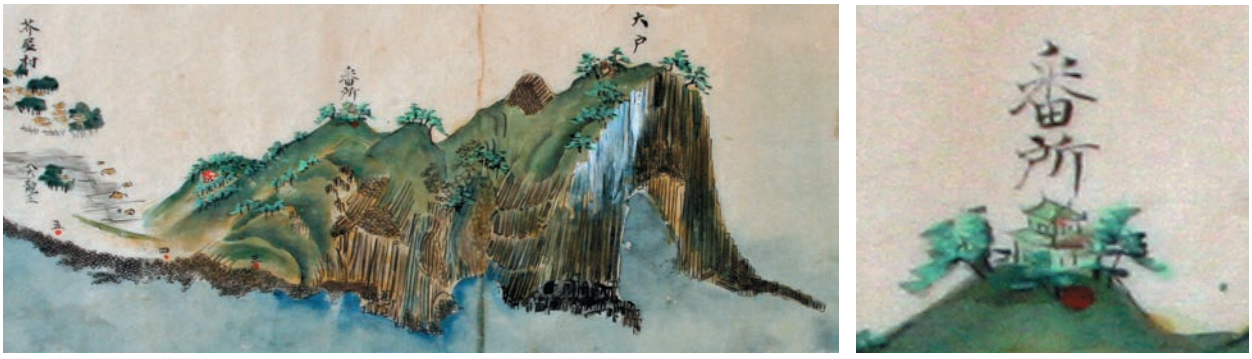
福岡藩では、遠見番所、烽火台、台場が築造されている。以下、順次報告する。

①　遠見番所

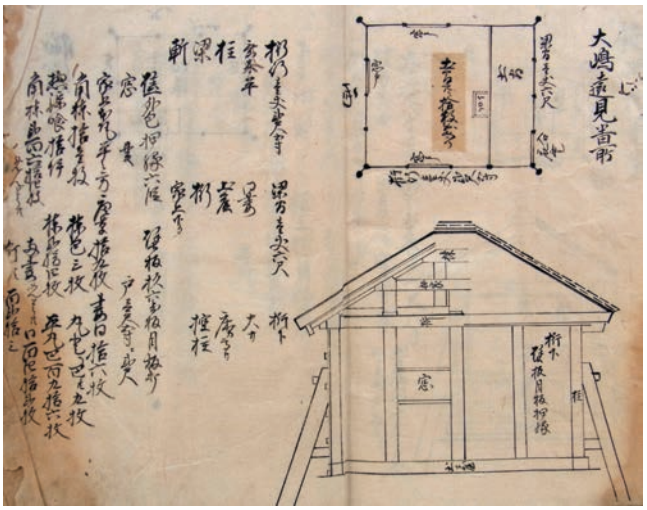
福岡藩では、寛永年間のポルトガル打払いの沿岸警備令に伴い、遠見番所を設置している。『黒田続家譜』巻六には、姫島（糸島市）、西浦（福岡市西区）、相島（糟屋郡新宮町）、大島（宗像市）、岩屋（北九州市若松区）に幕府両使の見立てにより番所を構え、定番を派遣、さらに地島（宗像市）にも定番を置き、小呂島（福岡市西区）、白島（男島・女島、北九州市若松区）に番船を派遣して、毎日巡見させ、福岡城下には津口番所を設置した。遠見番所では定番と足軽により交代で見張りに当たった。さらに正保２年（1645）には西浦の番所を玄界島（福岡市西区）に移し、新たに芥屋浦（糸島市）、脇浦（北九州市若松区）、沖ノ島、大島（宗像市）に番所が設定されている（福岡県 1998 など）。以上のことから、姫島、芥屋、西浦、玄界島、相島、大島、沖ノ島、岩屋、脇浦に遠見番所が置かれたことがわかるが、これらの遠見番所については、『林文書』（九州歴史資料館蔵）の「浦嶋遠見番所灯篭堂急用丸囲上屋共図」の中に、嘉永７年（1854）段階の番所、灯篭堂などの建物の指図が掲載されている。これを見ると、上記の他、地島（宗像市）、名古屋崎（北九州市戸畑区）、小田崎（北九州市若松区）の遠見番所も掲載されている（第 308 図）。それらの建物を見ると、板張りのものと練塀（小田崎、名古屋崎）のものと２種類あるようである。これらの内、確実に痕跡が知られているものは、相島１ヶ所のみであったが、今回の調査で芥屋と地島において痕跡を確認することができた。ここでは、現地確認を行ったものを中心に説明する。なお、『玄海町誌』等には、宗像市の勝島に遠見番所があったとする記載がみられるが、これについては『筑前国続風土記拾遺』に正徳享保年間に南京姦商の仲買禁止に伴い、番士を遣わした屋敷「加子屋敷」があったとする他には文献記載を見つけることができず、また現地踏査では島の最高所に番所の痕跡を見ることができなかった。よってこれについては遠見番所から除外しておきたい。

【姫島遠見番所】糸島市の沖合に浮かぶ姫島にある番所で、島内最高所の鎮山山頂にあったと地元では伝える。山頂部は平坦地形が広がり、石列のような構築物の痕跡なども確認できるものの、現地は藪になっており、詳細を確認することはできなかった。

【芥屋遠見番所】『志摩郡形相図』には遠見番所が描かれている（第 307 図）。それには糸島半島の

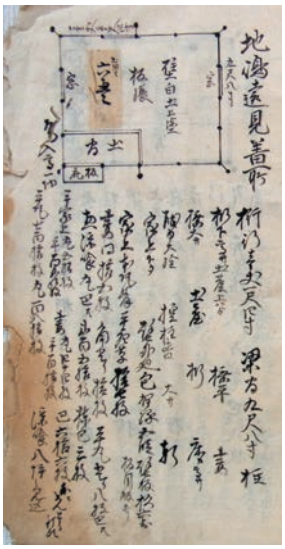


第 307 図　『志摩郡形相図』（部分・福岡県立糸島高等学校蔵）に描かれた芥屋遠見番所
（写真提供：糸島市教育委員会）

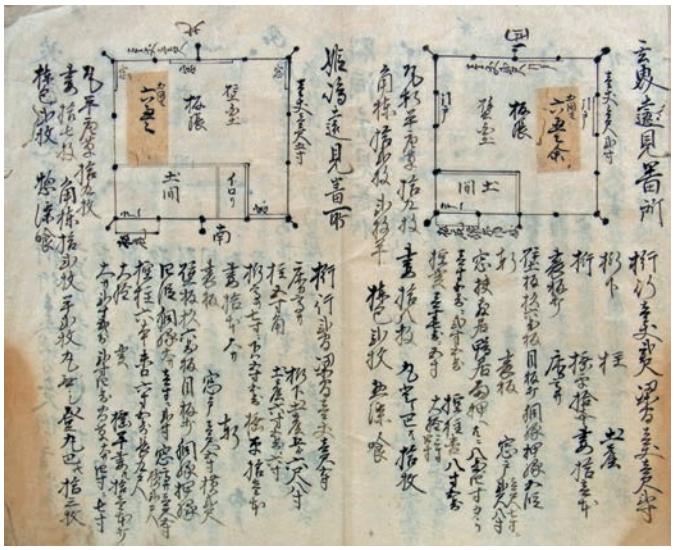


大嶋（大島）遠見番所

藍嶋（相島）遠見番所

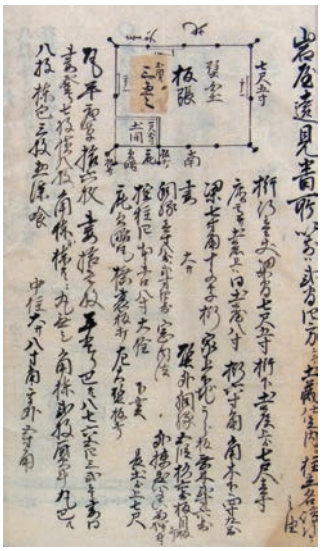


地嶋（地島）遠見番所

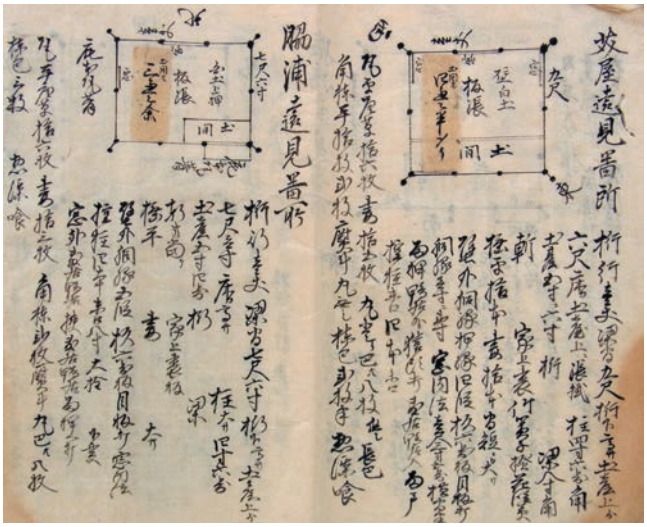


姫嶋（姫島）遠見番所

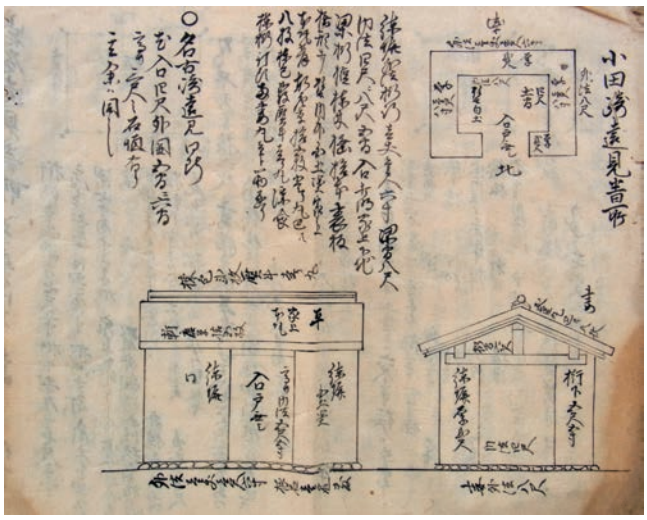
玄界遠見番所



岩屋遠見番所



脇浦遠見番所　芥屋遠見番所



名古屋崎遠見番所　小田崎遠見番所

第 308 図　「浦嶋遠見番所灯篭堂急用丸囲上屋共図」（『林文書』九州歴史資料館蔵）に描かれた遠見番所

西突端部にある国指定天然記念物・芥屋の大門の南側の小高くなった尾根の鞍部に位置する。現在、

簡易な展望所が建てられ、海を一望できる好所に位置している。約 10m × 5 m の平坦面が見られる他は、建物等の痕跡を見ることはできないが、周囲の地表を入念に観察すると、近世の瓦が多く散布しており、中には黒田家の家紋である下がり藤の文様の軒平瓦なども確認され、藩の公的施設としての遠見番所の建物に葺かれていたものとみてよく、間違いなくこの場所に立地していたことがわかる。指図には、軒瓦が使われていることなどが記されている。

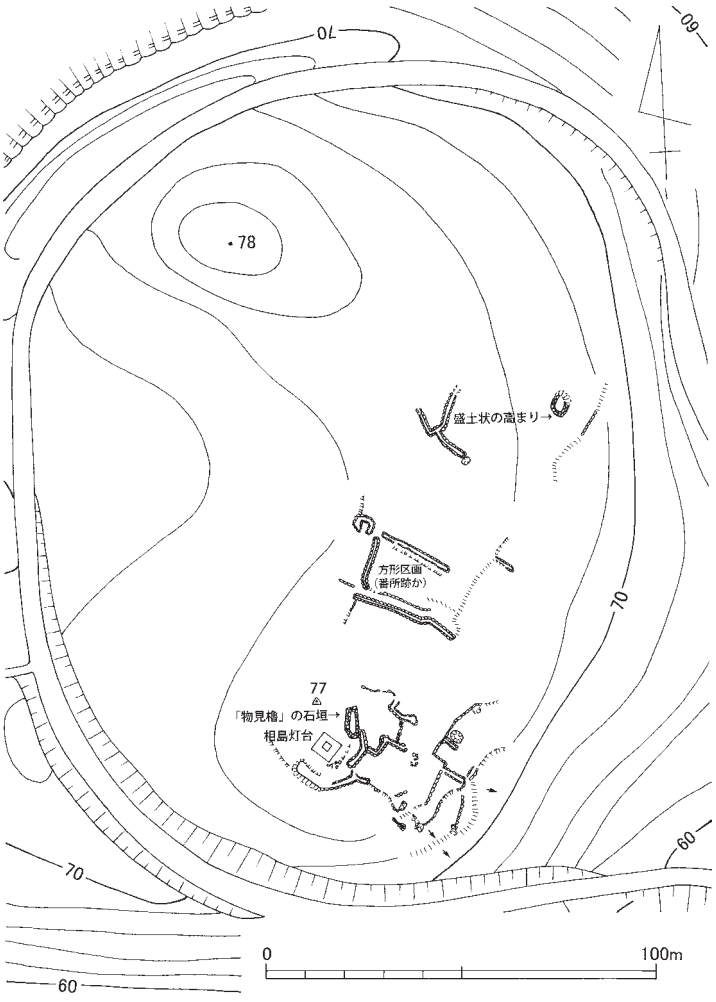
第 309 図　芥屋遠見番所跡位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「芥屋」を一部改変して事務局作成）

第 310 図　芥屋遠見番所跡に散布する瓦

【相島遠見番所】相島遠見番所は、福岡藩の遠見番所としては最も良好に遺構が確認されている番所である。相島の最高所で西端にある高山に置かれていた。現在、相島灯台と三角点のすぐ横に「物見櫓」と呼ばれる石垣が残されているが、その近辺にも石垣の構築物が確認できる。ただ、一帯は現在も果樹園や畑となっており、後世の改変がかなり入っていて、どこまでが遠見番所の遺構なのかは断定は難しい。しかしな

第 311 図　相島遠見番所位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「津屋崎」を一部改変して事務局作成）

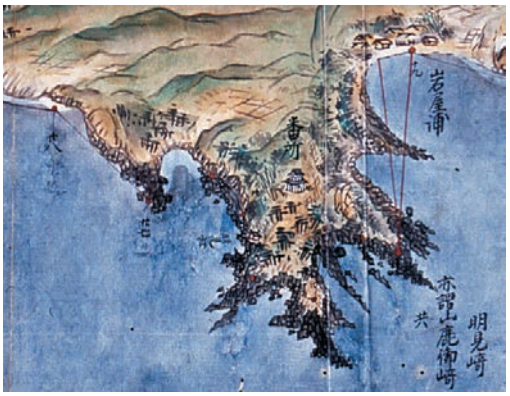
第 312 図　『藍嶋絵図』（部分・岩国徴古館蔵）に描かれた「物見番所」



第 313 図　相島遠見番所現況平面図（事務局作成）

がら、いわゆる「物見櫓」の石垣の北側背後には、石垣により一辺約 15 ｍの方形区画が設けられており、江戸時代の巴文軒丸瓦が散布していて、この区画内に遠見番所の建物が置かれていた可能性が高い。またさらに北側にも不自然な盛土状の高まりなどもあり、番所との関連を窺わせる。江戸時代の相島の様子を描いた『藍嶋絵図』にも、島の西側頂部に「物見番所」と記された建屋が描かれている。これは岩屋や芥屋が二層構造であるのに対し、ここでは一層構造の建屋となっている。時期が異なるせいであろうか。

第 314 図　相島遠見番所「物見櫓」石垣遺構（左）・遺物散布状況（右）



第 315 図　『遠賀郡海岸形相図』に描かれた岩屋遠見番所（部分・福岡市博物館蔵）

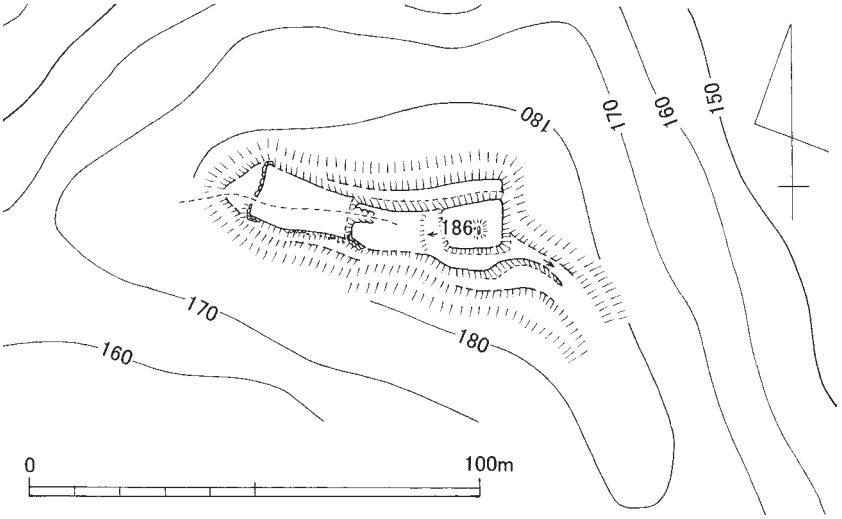
【岩屋遠見番所】若松半島の西、響灘に突き出た遠見ノ鼻（妙見崎）にあった番所で、現在は妙見崎灯台や宿泊施設などが建っている。『遠賀郡海岸形相図』に遠見ノ鼻の突端に、番所と記され、二層構造の建屋が描かれている。現地を確認していないが、宿泊施設等で既に消滅している可能性も考えられる。

【地島遠見番所】『筑前国続風土記拾遺』には、地島の遠見番所は泊（島の南側にある集落）の艮の高峰の頂にありと書かれている。宗像郡の鐘崎の沖合に浮かぶ地島の最高所である遠見山山頂（標高 186m）は、泊集落の北北西に位置し、『筑前国続風土記拾遺』の記載とはやや異なるが、その山の名前や地元の伝承から遠見番所が置かれていた場所と認識されている。現地は沖ノ島が見える展望所として散策コースの一角にもなっているが、その展望所の周囲には近世の巴文軒丸瓦を含む多くの瓦片が散布している。その瓦が散布する展望所となっている場所は一辺約 10m 弱の方形の平坦面となっており、造成によって造られた面である可能性が高く、周囲には人工的なテラス面も存在する。さらには西側にも尾根地形に沿う形で一辺 10 ～ 20m の平坦面が 2 面造成されており、縁辺部には石垣遺構なども確認できる。南東側については畑耕作とも考えられる細い造成面が斜面下に向けて何段も築かれており、後世の改変地形の可能性が考えられる。散布している丸瓦はコビキ B 技法（鉄線切り）のものも見られ、巴瓦については林文書（第 308 図）にもその存在が記されている。これまで福岡藩に関する遠見番所としては相島遠見番

第 316 図　地島遠見番所位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「神湊」を一部改変して事務局作成）

所が唯一の遺構が確認できる事例であったが、この地島遠見番所の確認により、新たに遺構が確認できる事例が追加されることとなった。

なお、その他の番所の所在情報は『筑前国続風土記拾遺』に掲載される。大島番所は島内最高所の御嶽神社の前にあるとするが、その場所は展望台や道路によって大きく改変されており、既に消滅してしまった可能性が高い。また玄界遠見番所は山上にありとしている（玄界は本事業では未踏査）。



第 317 図　地島遠見番所現況平面図（事務局作成）

第 318 図　地島遠見番所遠景（左）･瓦散布状況（中）･石垣遺構（右）

②　烽火台

福岡藩では、文化５年（1808）のフェートン号事件の２か月後の同年10月には藩内の６ヶ所に烽火台（六峰）が設置されている。その６ヶ所とは、長崎に近い順から、天山（筑紫野市）、四王寺山（大野城市・糟屋郡宇美町）、ショウケ越え（糟屋郡須恵町・飯塚市）、龍王山（飯塚市）、六ヶ岳（直方市）、石峰山（北九州市若松区）であり、その他、四王寺山烽火台から分岐して福岡城方面に乙金（大野城市）、丸尾（福岡市中央区）の二つの烽火台を築いている。

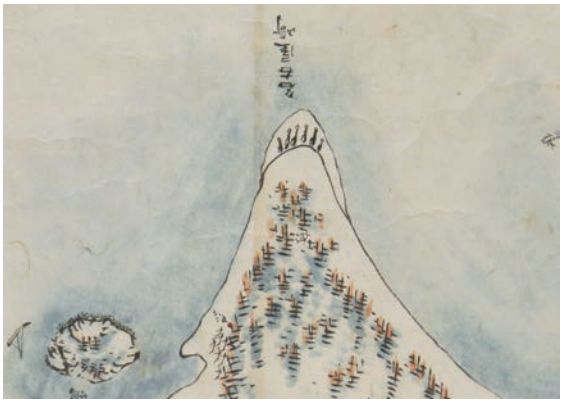
第 319 図　『筑前三笠郡岩谷城図』（個人蔵）に描かれた烽火台

これら８ヶ所の烽火台について、詳細な構造や位置を残しているものはなく、四王寺山烽火台が四王寺山の西側稜線上に「烽家」「火ノ尾」という地名、丸尾烽火台が警固３丁目に「峰花台団地」（現在は福岡県住宅供給公社クラシオン桜坂になっている）という建物名があるばかりである。

【四王寺山烽火台】唯一絵図資料に描かれたものが『筑前三笠郡岩谷城図』（個人蔵）にある（第319図）。それを見ると、四王寺山の西の峰に「烽火臺」と記された２棟の櫓状建物が描かれている。この絵図が文化８年３月に描かれているため、烽火台が整備されて約１年半後であり、四王寺山の烽火台とみてよく、今後現地確認をする際にも参考になろう。

③　台場

台場の構築は、享保３年（1718）の密貿易のために来航した唐船に対する打ち払いのため、名古屋（名護屋）崎と小田崎に台場を設け、これを撃退することなどが挙げられるが（北九州市1990）、文久年間になると攘夷問題とも併せ、領内沿岸に次々と台場の構築を行っている。それらを挙げると、名古屋崎、中島（北九州市戸畑区）、山鹿、芦屋（遠賀郡芦屋町）、西戸崎、志賀島（福岡市東区）福岡城沿岸部（洲崎・城下・波奈）（博多区・中央区）、姪浜（小戸）、残嶋（能古）、今津（西区）、高祖山（糸島市・福岡市西区）、加布里（糸島市）がある。詳細は文献史料一覧を参照いただくとし、ここでは絵図資料に残る名古屋崎、福岡城沿岸部（洲崎は現地の状況も含む）、現地調査を行った能古、姪浜の各台場の詳細を報告する。



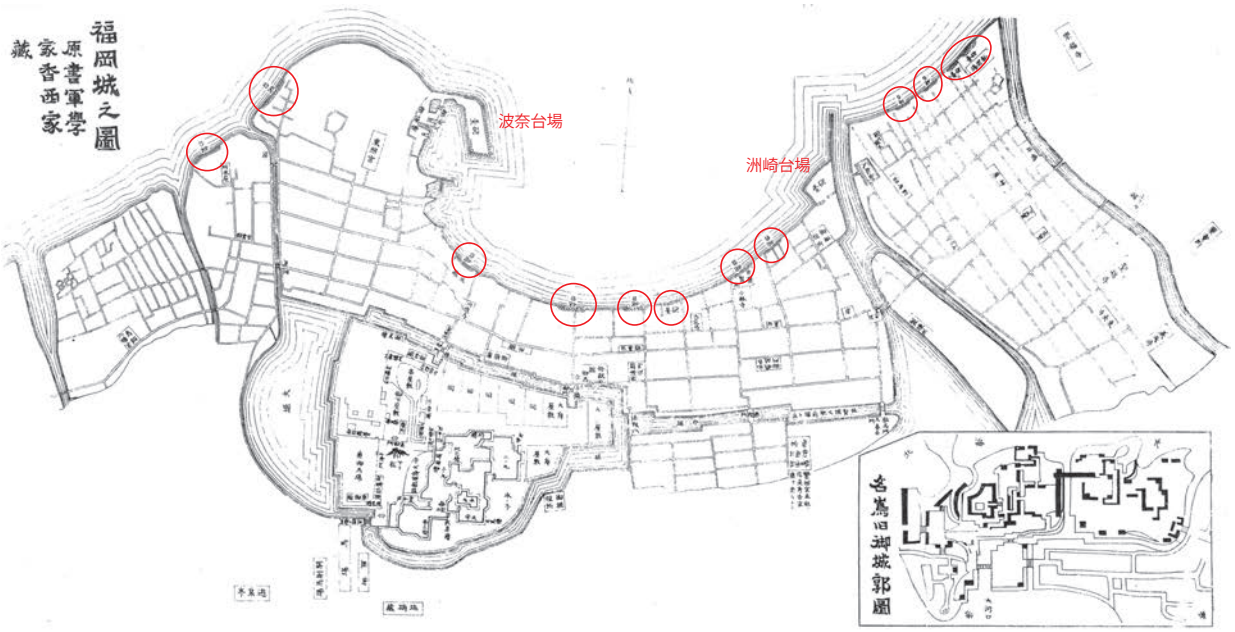
第320図　『長州戦争図』（部分・北九州市自然史・歴史博物館蔵）に描かれた名古屋崎台場

【名古屋崎台場】北九州市戸畑区、洞海湾の出口の東側、北に突き出した名古屋崎に構築された台場であるが、現在は新日鉄八幡製鉄所となっており、岬ごと消滅している。『長州戦争図』（第320図）には、名古屋崎の突端に６門の大砲が置かれている状況が描かれている。『福岡藩砲台備石火矢覚』には名護屋には五貫目砲３門、二貫目砲２門の計５門置かれたとある。福岡藩内の台場では大砲を設置した状況を描いた唯一の絵図資料であり、貴重である。

第321図　波奈台場跡地（午砲場跡）

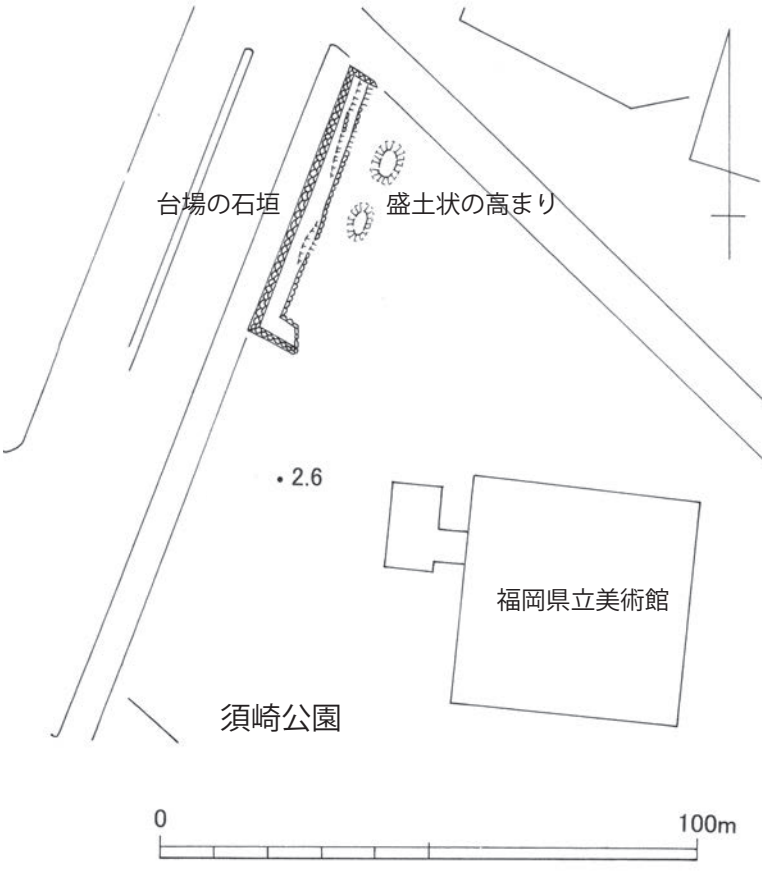
【福岡城沿岸部の台場】福岡城沿岸部の台場を示した図としては、『鶴城起源』（1898年発行）の付図である「福岡城之図」（福岡市役所1968に再掲載図あり）がある（第322図）。それを見ると、福岡城の北側沿岸部、東は博多から西は唐人町までの14ヶ所に「砲台」と記し、石垣の表記が記されている。ただ、『見聞略記』には元治元年（1864）に荒戸と洲崎の台場の間に「土俵台場」を築いたとあり、石垣づくりの台場ではなく、土俵による仮設の台場である可能性も考えられる（現在は全てなくなっている）。これらの中でも舟入があった荒津の波奈台場は、舟入を守るように出島状になっており、東の洲崎台場と相対するようにひときわ大きなものとなっている。台場として使われなくなった明治から昭和にかけて、福岡市中に正午の時報を知らせる午砲場として活用された。

また、中洲の河口に当たる洲崎台場もまた城下の台場の中では大きいものだが、台場の石垣が現在も須崎公園内に残されている。現在、須崎公園の北西端には、約50mに渡って直線状の石垣が



第 322 図　『福岡城之図』（1898 年・福岡市 1968 から転載）に描かれた福岡城下の台場

残されている。これは元あった台場の北西側の石垣に当たり、当時は海に面していた場所で、地中にも石垣は埋もれているものと考えられる。外側の石垣は花崗岩を用い、中にはしっかりとした矢穴のある石材も見られるため、台場構築以前の護岸に積まれていた石垣である可能性も考えられる。一方で、内面の石垣は一段程が残っているが、鑿痕跡をきれいに残す切石積みで、いわゆる幕末頃の落とし積みと呼ばれる手法が見受けられ、台場構築時に使用された石材であると思われる。石垣の両端部は内側に折れているものの、台場敷地の隅に当たるわけではなく、本来のものというよりも公園整備など、後世の造作によるものと思われる。また、石垣の背後には、2 ヶ



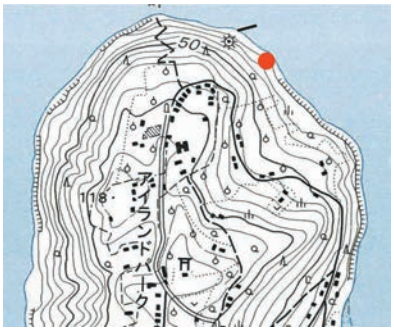
第 323 図　洲崎台場跡地現況平面図（事務局作成）

所の高さ約 1 m 弱の土盛りが確認された。これが台場に伴うものかは不明であるが、公園整備のものとしても不自然であり、今後の検討のために図示した。

第 324 図　洲崎台場の石垣（左上）・石垣外側の石材（右上）・内側の石材（左下）・盛土状の高まり（右下）

【残嶋（能古）台場】

これまで能古島の台場は所在不明とされてきたが、今回の現地調査で、台場跡と思われる箇所が確認されたので報告する。能古台場は、『福岡県地理全誌』にも「北浦人家ノ北十町許。巡り田ト云所ニアリ。南北六間、東西四間許アリ。文久元年辛酉新築、明治三年廃ス」とあり、福岡市教育委員会の能古島の報告書には残島灯台の南東側沿岸部に位置が示されていた。しかし、その場所を現地踏査したが、自然の傾斜地形などがあるばかりで、台場と思われる造成痕跡は確認できなかった。そのため、そこから灯台までの間の沿岸部について地図上で平坦地を形成できそうな場所を推測して現地確認したところ、海岸に面した標高約 10m の場所に、東西約 30m、南北約 20m の平坦地があり、海に面した側が一段高くなり、内側に大石を並べて石列とする場所を発見した。周囲には耕作地などの痕跡もなく、またその崖下において船鎖とも考えられる鉄



第 325 図　能古台場推定地位置図（国土地理院作成 1/25,000「福岡西部」を一部改変して事務局作成）

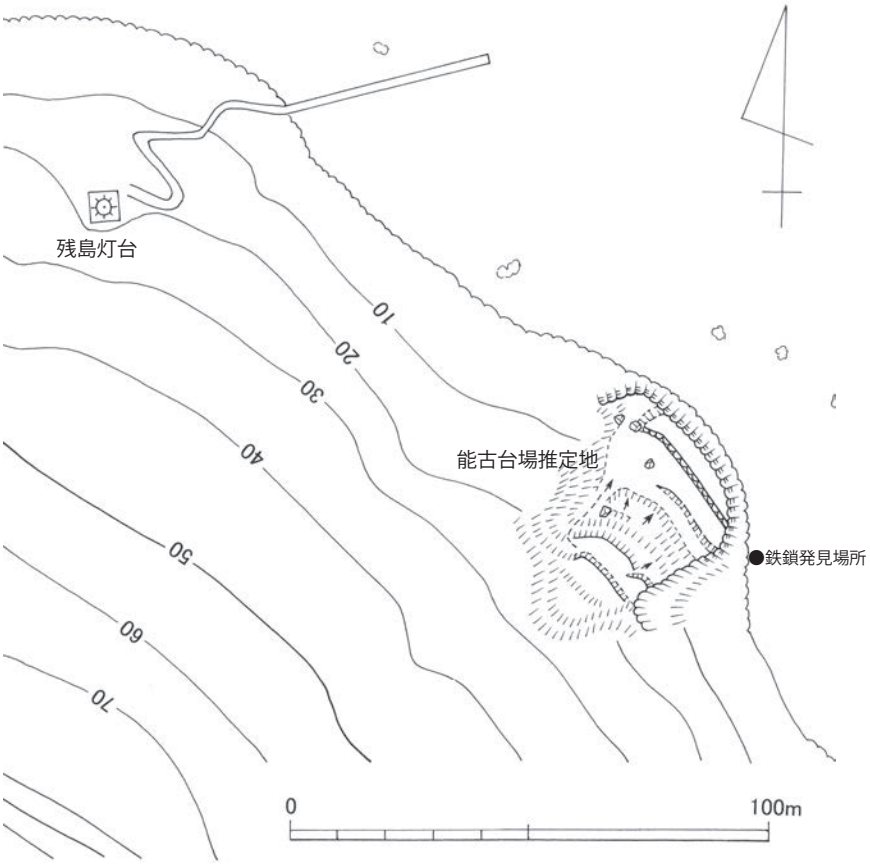
第 326 図　能古台場推定地の石列（左・奥に志賀島が見える）・推定地崖下にあった鉄鎖（右）

鎖（一つの長さ約 10cm）を発見した。鉄鎖がいつの時代のものかも不明であるが、崖上の平坦面との関係も想定され、また対岸の志賀島を間近に見ることができる。『見聞略記』には志賀島台場と能古台場との間を海上封鎖する計画があったことを考えると、立地としても問題なく、台場ではないかと推測される。

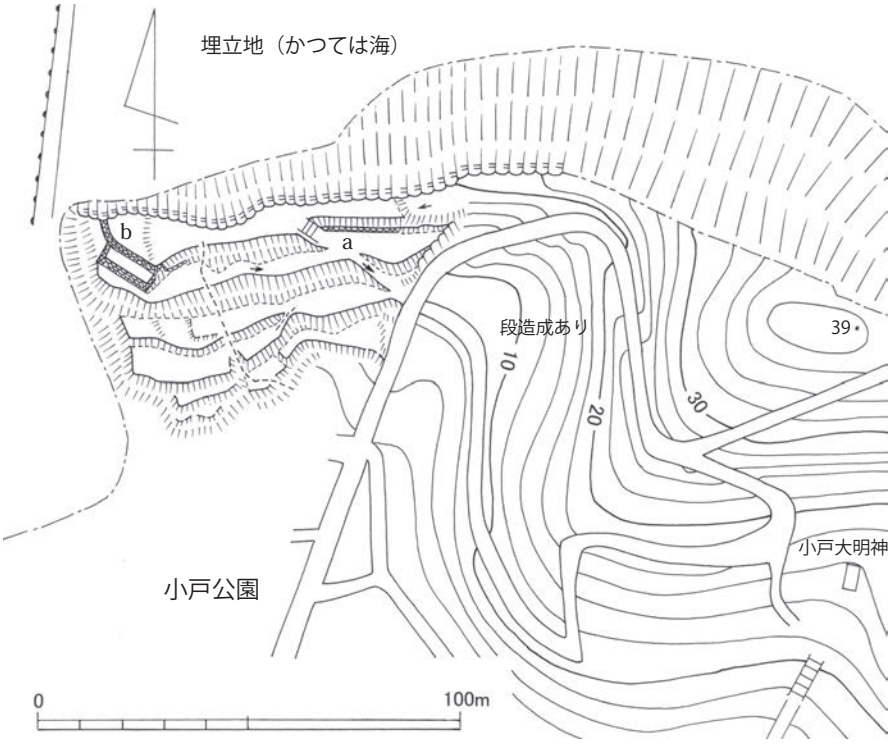
なお、平坦面の東側は浸食により崩れており、元々はさらに東側へと平坦面が伸びていた可能性が高い。海岸側についても、浸食によりかなり削られてしまっていると思われる。さらに詳細な調査をすることで検証可能となろう。

【姪浜（小戸）台場】『福岡県地理全誌』には「台場跡」として「小戸大明神宮ノ西一町余。小戸山ニアリ。東西六十間、南北三十間、面積六反二畝二十四歩アリ。慶応元年乙丑新築、明治三年廃ス」とある。今津湾と博多湾との境に突き出した妙見崎に構築された台場で、現在も小戸公園内に石垣遺構が残されている。

小戸公園の北側、妙見崎の岬が西側に屈曲する



第 327 図　能古台場推定地周辺平面図（事務局作成）



第 328 図　姪浜（小戸）台場周辺平面図（事務局作成）

部分、尾根の南斜面のａに東西約 25m の石垣を築き、その西端には石段を設置、さらにそこから西へ約 30m 地点、西側が崖となる場所のｂにも２段に石垣を構築している。石垣の石材は立方体に加工しており、小型の矢穴を確認することができる。そして石垣を築いた上面が大砲を置く台場となっていると考えられる。『見聞略記』には大砲５挺を置いたことが記されており、十分な面積は確保されていよう。北側は崖となっており、かつては海に面していたところであり、かなり浸食を受けている。また、南側斜面には３～４段にわたって造成段が確認された。谷を挟んだ南東側の斜面にも類似する造成段が見られることから耕作地などの後世の造作の可能性も考えられるが台場に関わる平坦面としても解釈できるため図示した。

なお、『見聞略記』には「山の上切ならし、石垣不入ニ御台場成就仕リ」とあって、石垣を入れることなく完成したとあるが、現状では間違いなく石垣は台場に使用されており、整合性については検討を要しよう。

第 329 図　姪浜台場石垣・石段

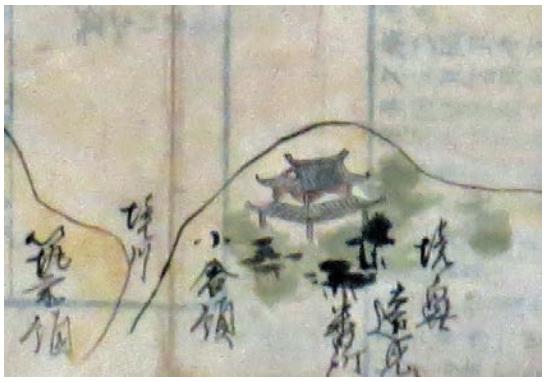
第 330 図　姪浜台場位置図（国土地理院作成 1/25,000「福岡西部」を一部改変して事務局作成）

（２）小倉藩

小倉藩では、遠見番所、烽火台、台場に加え、幕長戦争（第二次長州戦争）時の砲兵陣地（台場）が築造されている。以下、順次報告する。

①　遠見番所

小倉藩では、宝永２年（1705）以来、漂流を装って来航する密貿易船（唐船）を取り締まるため、正徳５年（1715）から６年にかけて葛葉、田野浦、大里（北九州市門司区）、境鼻、小倉河口、馬島（北九州市小倉北区）、苅田松山（京都郡苅田町）に遠見番所を設置、さらに老朽化していた藍島（北九州市小倉北区）の遠見番所を増築している。小倉藩では以上８ヶ所の遠見番所があることがわかる



第 331 図　『長州戦争図』（左）と『小倉領藍嶋略図』（右）（共に北九州市自然史・歴史博物館蔵）に描かれた境鼻遠見番所

が、これらの内、絵図に描かれているのが、境鼻番所と藍島番所、現地に旗柱石が残されているのが藍島番所であり、ここではその２つについて詳述する。

【境鼻番所】筑前と豊前との国境にあたる境川河口の右岸の小丘陵上にあったとされる番所で、大正９年（1920）に櫓山荘という洋館が建てられたため、番所の痕跡は残されていない。ただ、『長州戦争図』及び『小倉領藍嶋略図』にはそれぞれ丘陵上に番所が描かれている。前者が一層の建物に対し、後者では二層の建物になっていて、構造については検討を要しよう。

第 332 図　藍島遠見番所旗柱石位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「六連島」を一部改変して事務局作成）

【藍島遠見番所】藍島の遠見番所は、藍島の最高所・高山（現在は宝山）の頂部にあったとされ、『小倉領藍嶋略図』にも二層の建造物が見えるが、現在はその痕跡はわからなくなっている。ただ、番所に付随して、享保６年（1721）に造られた旗柱石が山頂に残されている。この石は海上に密貿易船を発見するといち早く境鼻番所に急報するため、紺地に白く染め抜いた三階菱紋入りの大旗を掲げたもので、福岡県指定史跡（昭和 44 年 5 月 1 日指定）になっている。２本の立石の間に旗竿の台石を置き、立石には旗を固定するための穴がそれぞれあけられている。石材は花崗岩の切石で矢穴も残され、高さは 2.4m にも及ぶ立派なものである。絵図には番所に隣接して旗竿が描かれており、たもとにはこの柱石があったものと考えられる。

②　烽火台

小倉藩内の烽火台は足立山（北九州市小倉南区・小倉北区）、覗山（行橋市）と角田の峰尾（豊前市）の３ヶ所に置かれていた。このうち足立山と角田については詳細な場所は不明であるが、覗山については、中世の覗山城跡の城域内に烽火台の痕跡ではないかと思えるものが思い当たったため、今後の検討材料としてここで報告する。

【覗山烽火台】覗山山頂（標高 124m）には中世の山城である覗山城があるが、その曲輪内に、２ヶ

第 333 図　藍島遠見番所旗柱石（左・福岡県指定史跡）・『小倉領藍嶋略図』（部分・北九州市自然史・歴史博物館蔵）に描かれた藍島遠見番所と旗柱（右）

所、明らかに山城よりも後の時代に構築された直径約５ｍの大穴が確認された。山城遺構として確認していた際には、古墳の盗掘坑などの遺跡とは無関係のものと認識していたが、改めて烽火台として考えた場合、Ⅲの曲輪の最高所に開けられた穴は深さが２～３ｍもあり、両側に排水溝のようなトレンチ状の切り込みが入れられていた。またⅡの曲輪にも同規模の大穴があった。後で述べる構造がしっかりと残されている雄熊山烽火台ほどは立派ではないが、マウンド頂部に穴を穿ち、横から穴を掘っているような状況は類似するようにも感じられ、また、覗山に烽火台を設置する場合、最も好都合な立地をしており、推測ではあるが烽火台の痕跡の可能性があるものとして報告する。

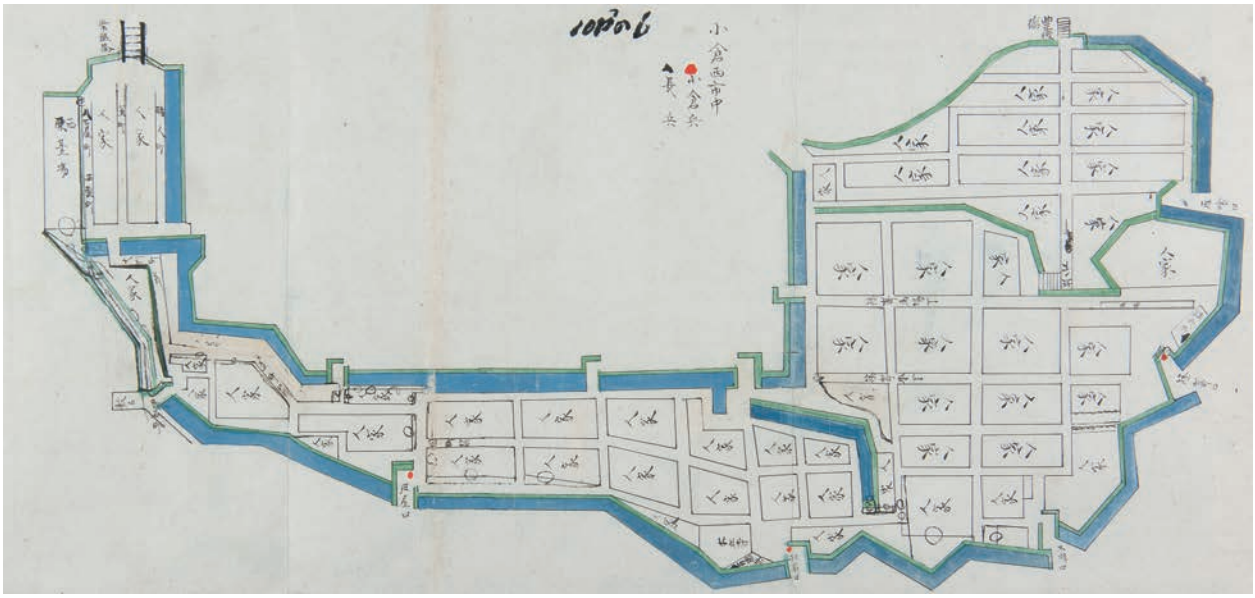
第 334 図　覗山城内に確認される烽火台と推測される痕跡位置図（●で示す）

③　台場

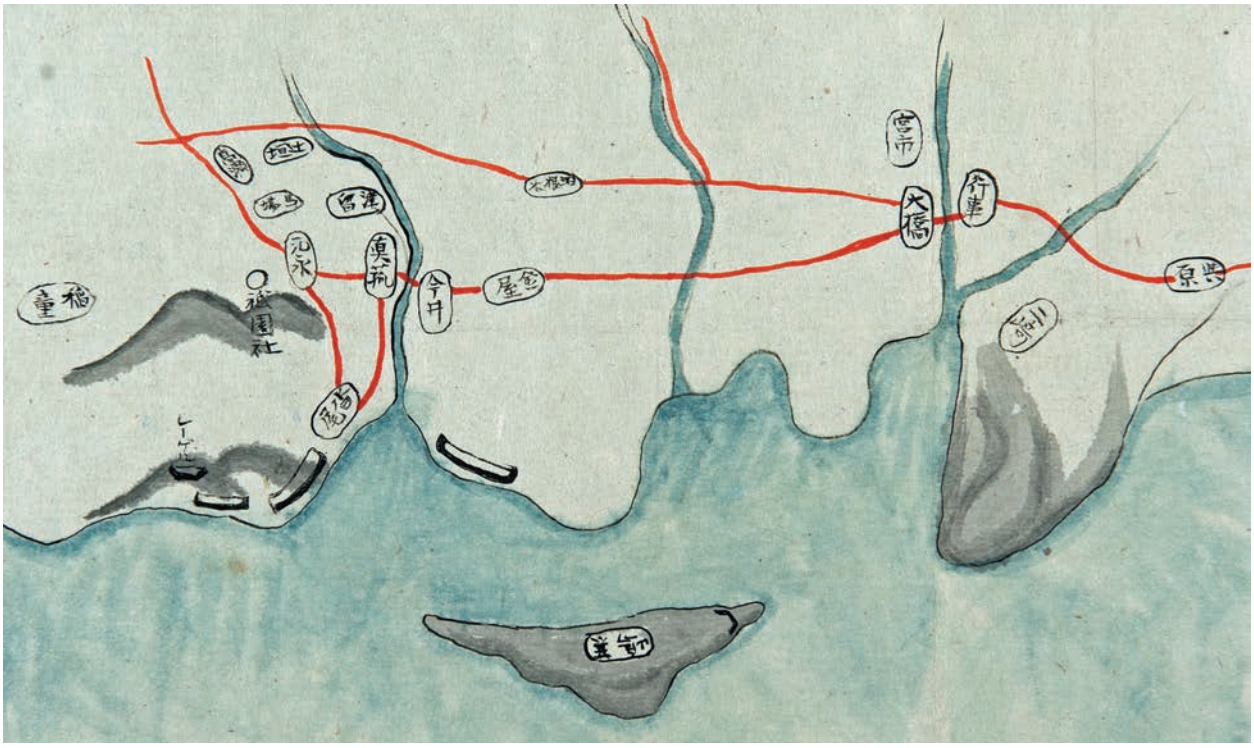
小倉藩は文久３年（1863）頃に、門司、田野浦、葛葉（北九州市門司区）、東浜・西浜、境鼻（北九州市小倉北区）に台場を構築している。ただ、絵図資料を除いては台場の状況を知る術はないため、ここでは台場が掲載された絵図資料を掲載することで、説明に代えさせていただく。また第二次長州戦争関連で、仮設に築造された台場（砲兵陣地）については、次項で説明する。

第 335 図　『長門国対岸ノ図』（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵）

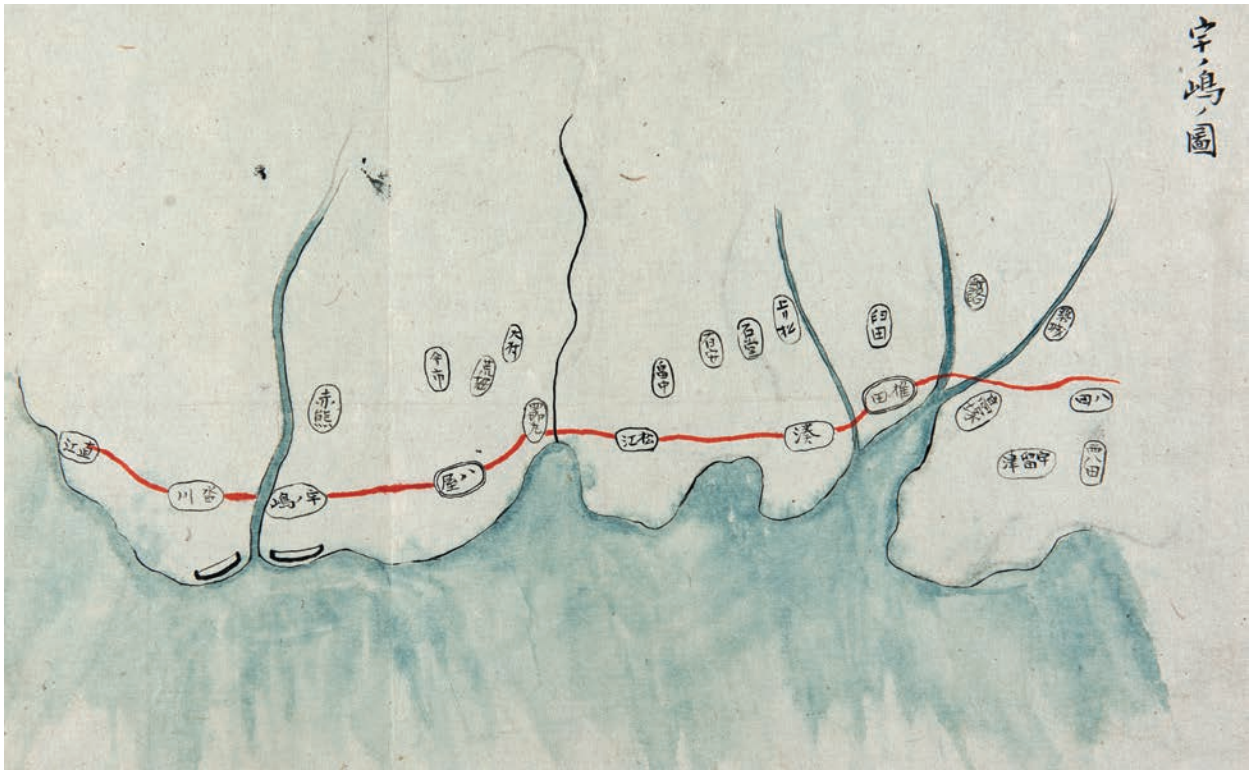
【関門海峡～響灘沿岸の台場】『長門国対岸ノ図』（第 335 図）には、門司の田野浦から小倉城下を経て、境鼻に至るまでの沿岸部に台場（砲台）が築かれている様子が描かれている。また、小倉城下の西浜台場（西台場）は、『小倉西市中図』（第 336 図）に東西方向に細長い区画で「西台場」と描く。また、『沓尾ノ図』には蓑島と沓尾（行橋市）に、『宇ノ嶋ノ図』には宇島（豊前市）の岩岳川と思われる河口の両岸に台場の印が記されている。蓑島、沓尾については現地踏査を行ったが、自然の丘陵地あるいは後世の神社地などになっており、明確な台場の痕跡を見つけることはできなかった。



第 336 図　『小倉西市中図』（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵・左端に「西臺場」の文字が見える。左が北）



第 337 図　『沓尾ノ図』（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵）



第 338 図　『宇ノ嶋ノ図』（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵）

④　第二次長州戦争時の台場（砲兵陣地）

慶応２年（1866）の第二次長州戦争の小倉口の戦いにおいて小倉藩領の企救郡内の至る所が戦渦に巻き込まれ、長州軍と幕府軍（小笠原軍）とが各所で戦い、野戦のための砲台（砲兵陣地）が数多く造られた。また、小倉藩の小倉城撤退後は、企救郡と田川郡との境にある金辺峠周辺と、企救郡と京都郡との境の狸山において対峙戦となるが、ここでも両軍が砲兵陣地を築いている。詳細については文献史料一覧を参考にしていただきたい。これらの砲兵陣地については、今回の調査にて、金辺峠周辺、狸山周辺、足立山（霧ヶ峰）について山中を踏査したものの、明瞭に台場とわかる遺構は残されていなかった（足立山山頂には中世山城とは明らかに異なる堡塁状の土盛りがみられたものの砲兵陣地であるかどうかの判断はつかなかった）。おそらく土俵を積んだだけのような非常に簡易な施設であったため、痕跡としては残されていないものとみられる。

しかし、それらの布陣を記した絵図が何点か残されているため、ここではそれらの絵図を紹介することで、説明に代えさせていただく。

小倉城周辺の布陣の様子を描いた絵図としては『豊前小倉領分捕地之図』（北九州市自然史・歴史博物館蔵・図なし）がある。それを見ると、小倉城の東側、足立山から小文字山の西麓の村々に台場（砲兵陣地）が築かれていることがわかる。台場の印の白黒の向きから、小倉城に向けて構築しており、長州方の陣地とみられる。また、足立山の南、小倉南区曽根の竹馬川北岸一帯にも、台場が築かれており、河口部周辺には石垣も築かれている。台場の表記は南を向いた状態で記されているため、狸山方面を攻めるための長州方のものとみられるが、石垣は竹馬川河口の両岸に築かれており、海からの攻撃に備えるように置かれているため、元々の小倉藩の台場かもしれないし、軍事的な施設ではない可能性もある。また、足立山から曽根の一帯にかけての長州方の布陣を詳細に記した絵図面が小笠原文庫にもあり、それには細かな台場名称なども描かれており、照合することで

第 339 図　『金部峠江引揚ノ節備配龍ヶ鼻刀掛ヨリ周囲ヲ見ル図』（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵）

詳しい戦況を窺うことができるが、今後の課題としたい。

また、小倉藩が小倉撤退後に陣を敷いた金辺峠と狸山の図がそれぞれ何枚かずつ小笠原文庫に残されているため、ここではそれを掲載することで説明に代えさせていただく（第 339・341 図）。

なお、それぞれの現地については、陣や胸壁台場があると推測されたため踏査を行ったが、狸山は現在最も海岸に近い丘陵のみが残存するが、現地は自然地形がみられたのみであった。また、金辺峠についても、金辺峠から茶臼山、鈴ヶ岩屋などを現地踏査したものの、砲兵陣地に関わるような遺構を確認することはできなかった。後世の改変はほぼないような場所ばかりであったため、おそらくは長期間残存しないような簡易な施設であったものと考えられる。

第 340 図　鈴ヶ岩屋から小倉方面の眺め

第 341 図　『狸山諸備持場ノ図』（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵）

（3）久留米藩

久留米藩では、藩内に遠見番所、藩外ではあるが豊前国企救郡大里に台場を築造している。以下、順次報告する。

①　遠見番所

久留米藩では二種類の番所を築造している。一つは、城下町の出入口や渡し場、領内主要街道筋の要地に「穀留番所」を設置していた。穀留番所は人や船の往来を監視し、禁制物資の藩外持ち出し、いわゆる抜け荷を取り締まる、いわゆる関所としての役割を果たすものであった。さらにそれらの中でも異国船警戒も役目として付加したものが「遠見番所」であった。年代により設置数や場所は変化しており、詳細は文献史料一覧を参照いただきたいが、すべて含めると、榎津、向島、鐘ヶ江、城島、住吉、小森野、恵利、瀬ノ下の８箇所があげられる。筑後川の川筋を描いた江戸時代の絵図にこれらの遠見番所の記載がみられ、１～２棟の建屋が描かれているが、榎津は門構えの立派なものとなっている。

②　台場

久留米藩領内に台場は築造されることはなかったが、豊前国企救郡大里（北九州市門司区大里）に久留米藩の通称有馬屋敷に付随して台場が築かれていた。文久３年（1863）５月 10 日に攘夷決行の期日にあわせ、長州藩は関門海峡を往来する外国商船を砲撃したが、その際に築かれたものである。翌４年５月、有馬屋敷ともども小倉藩に引き渡し、久留米藩は大里から撤退している。現在同地は、埋め立てなど開発が激しく、完全に消滅してしまっている。

（4）柳川藩

柳川藩には、遠見番所と烽火台が築かれている。以下順次報告する。

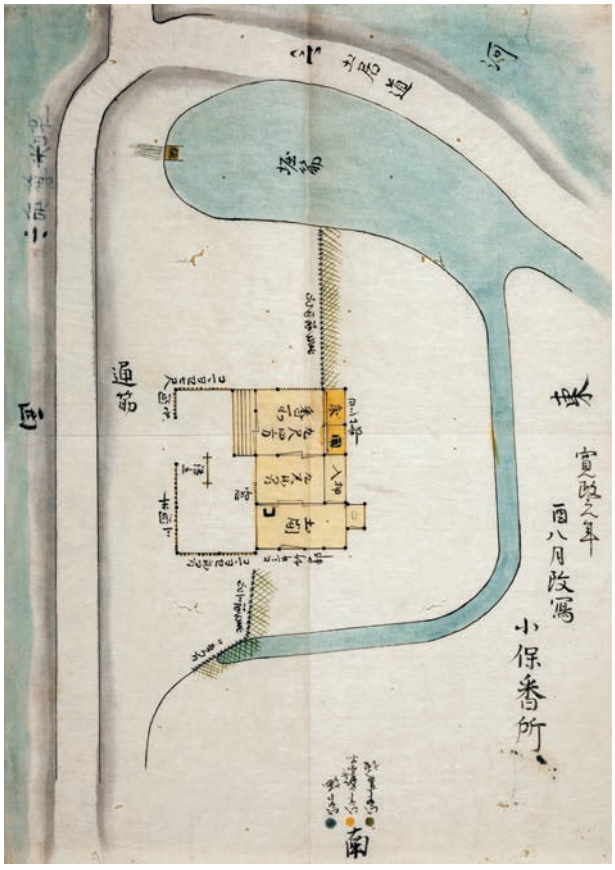
①　遠見番所

柳川藩では、異国船監視のための遠見番所と、川の往来を監視するための津口番所の二種類の番所が設けられており、また両方の役割を備えた番所も置かれていた。『集書』（江戸中期・『柳川市史史料編Ⅰ』所収）には小保、三潴新田（一木新田）、沖端宇治、宮永新田、塩塚、中島、黒崎、手鎌、横洲の９ヶ所が掲載されており、さらに間、下二部の２ヶ所も遠見番所とされている。『柳河明証図会』の「宇治番所」の絵図を見ると、番所の前面には船着き場が構築され、柵で囲まれた敷地内に番所の建屋が１棟、旗竿１と突棒・刺股・袖搦の三道具が描かれ、柳川藩の一般的な遠見番所の様相を示している。次頁以下に、遠見番所の絵図及び指図を掲載し、詳述に代えることとしたい。

②　烽火台

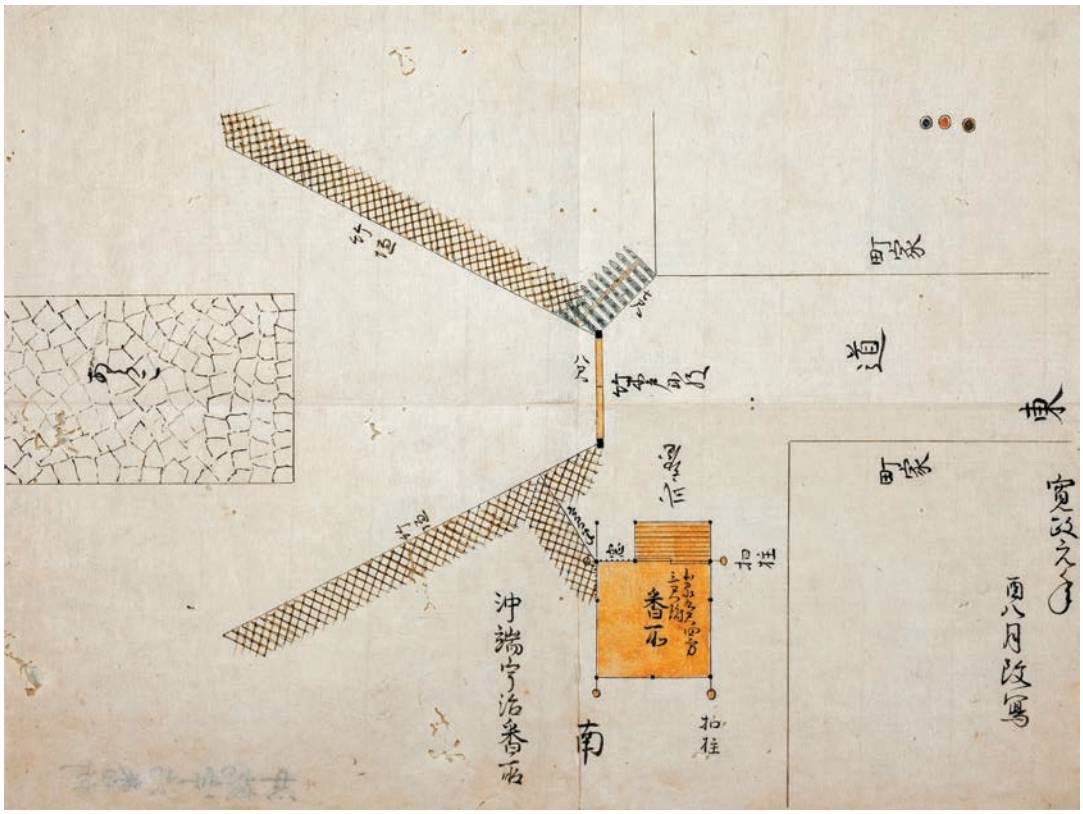
烽火台については、肥前の多良岳であげられた狼煙を柳川城で受け、それらを藩内各所へ伝達するために御牧山（甲塚山・みやま市山川町・みやま市指定史跡）に築かれていた。山頂に烽火台があったものと思われ、かつては頂上に烽火台跡と思われる大きな窪みがあったことが指摘されている（加藤ほか 2003）。今回の調査にて現地を踏査したが、その痕跡を見ることはできなかった。ただ、頂上からは柳川の平野を一望することができる。

第 342 図　御牧山山頂の現況



小保御番所絵図（遠見番所）

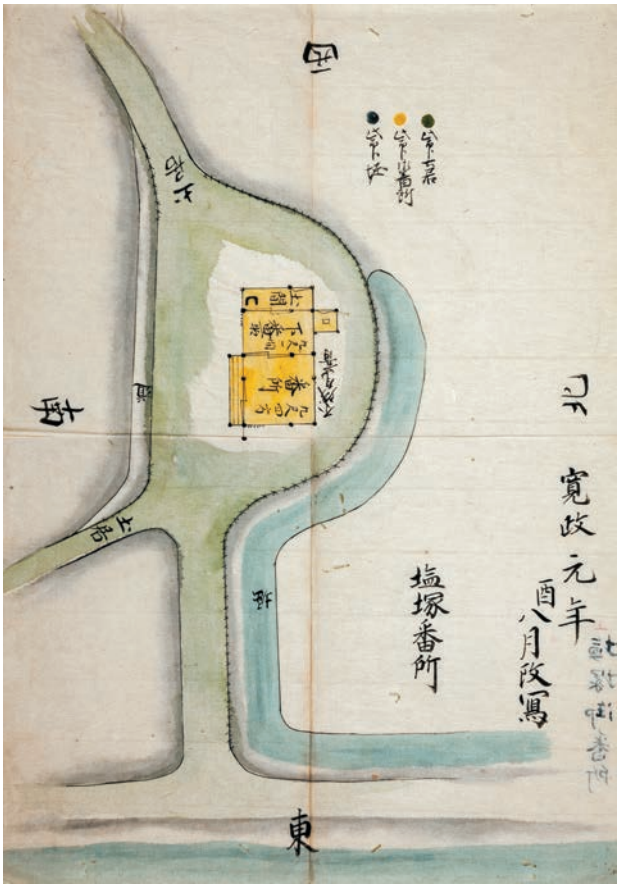
三潴新田御番所絵図（遠見番所）



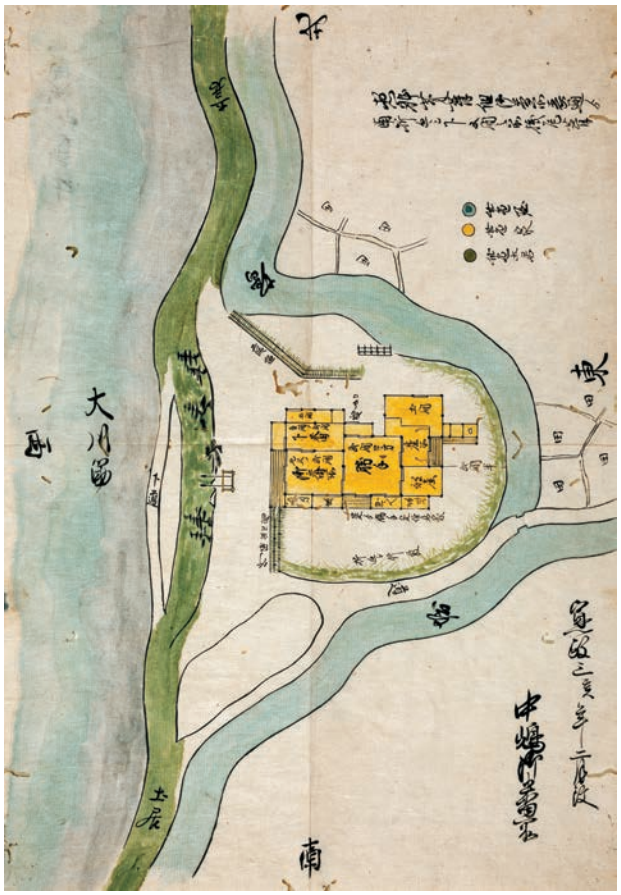
沖端宇治
御番所絵図
（遠見番所）

第 343 図　柳川藩内の番所絵図（１）（立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）

新田御番所絵図（遠見番所）



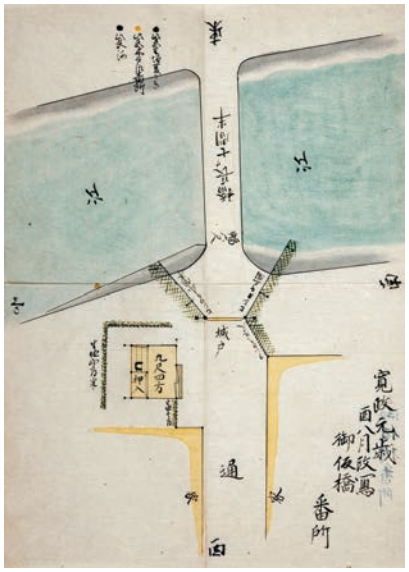
塩塚御番所絵図（遠見番所）



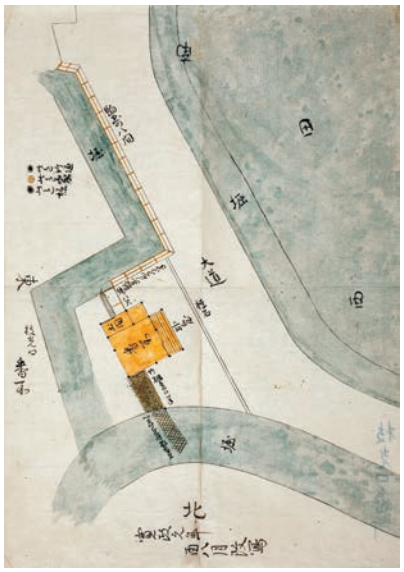
中嶋御番所（遠見番所）

横津御番所（遠見番所）

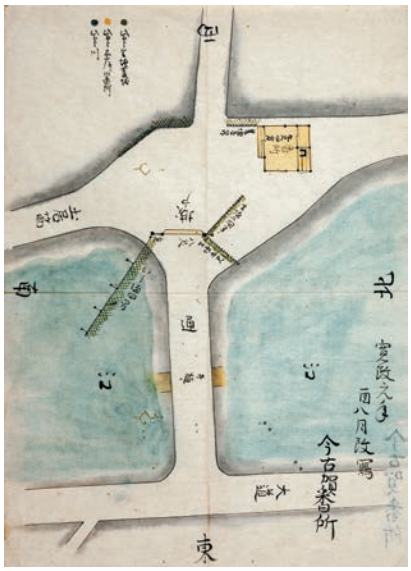
第 344 図　柳川藩内の番所絵図（２）（立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）



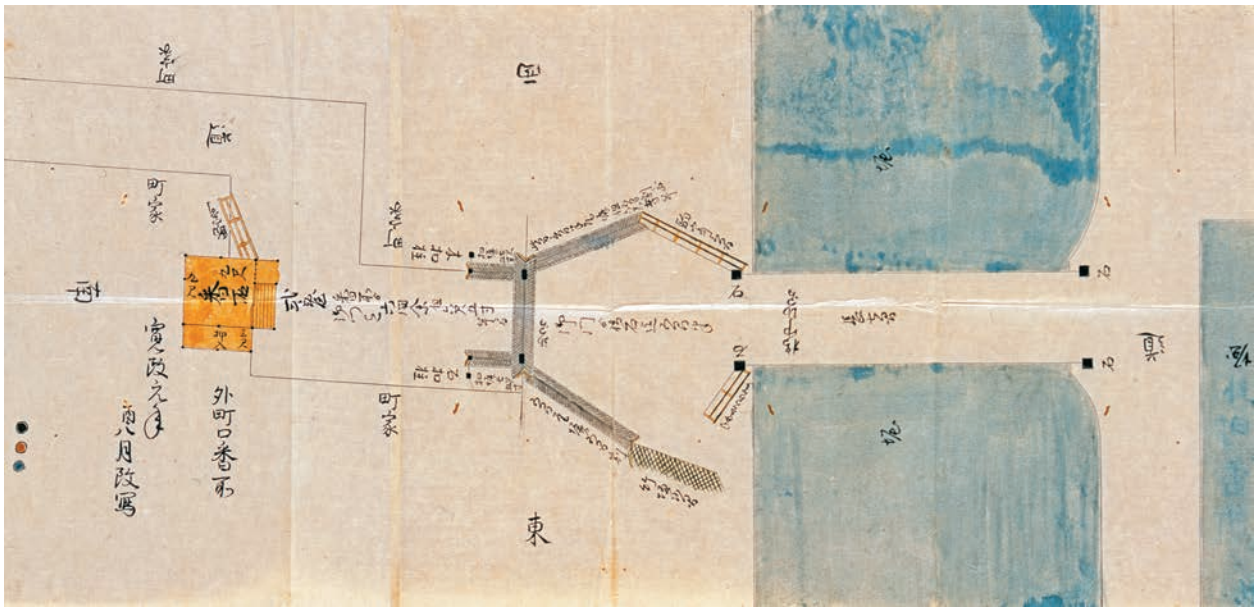
御仮橋御番所絵図



枝光口御番所絵図



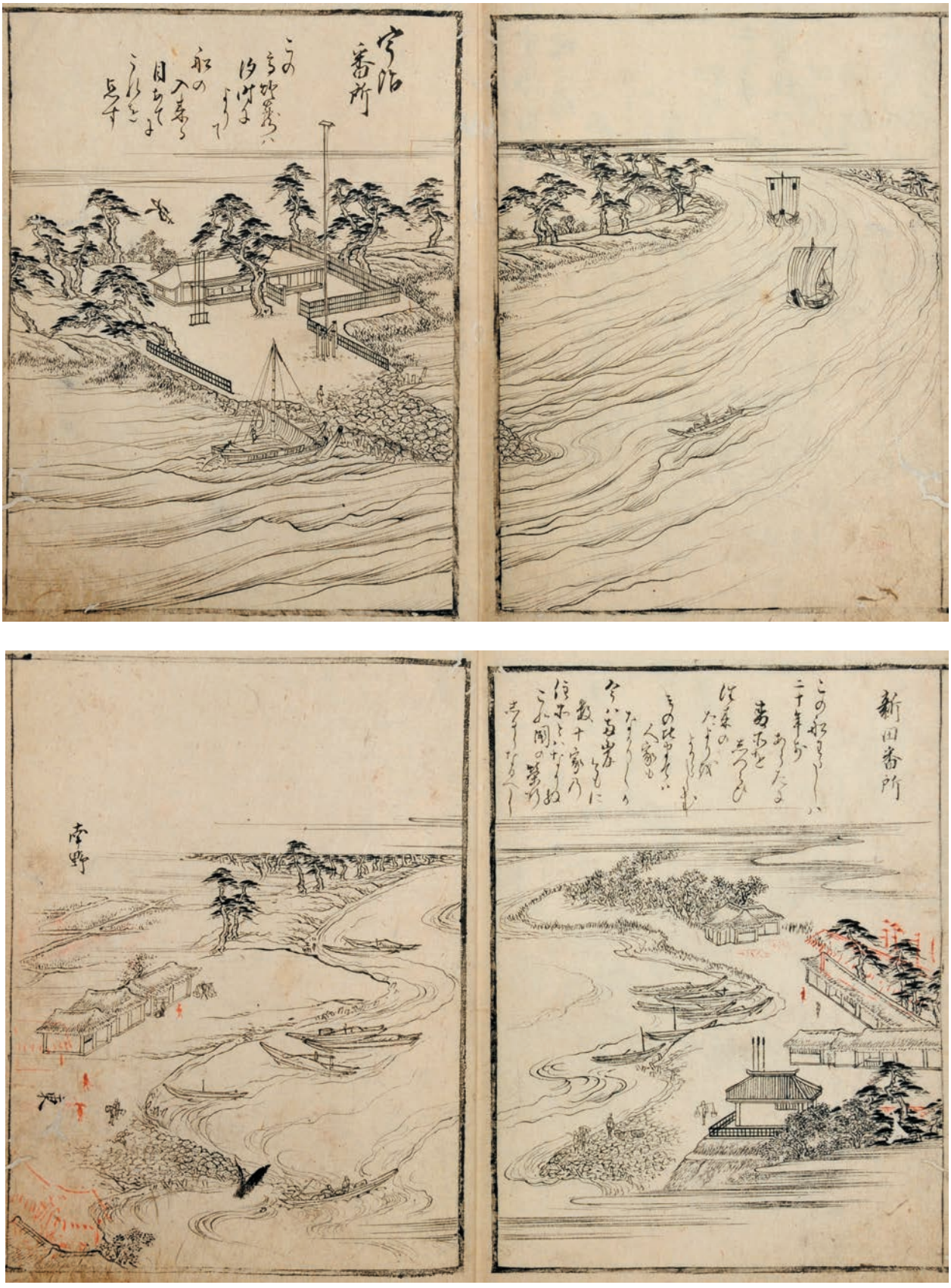
今古賀御番所絵図



外町口御番所絵図

沖端津口御番所絵図

第 345 図　柳川藩内の番所絵図（３）（立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）



第 346 図　『柳河明証図会』に描かれた宇治番所（沖端宇治番所）と新田番所
（立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）

（５）中津藩

中津藩は、福岡県内の藩領としては現在の築上郡吉富町・上毛町と、糸島市の一部が含まれており、遠見番所と烽火台が築造されている。以下、順次報告する。

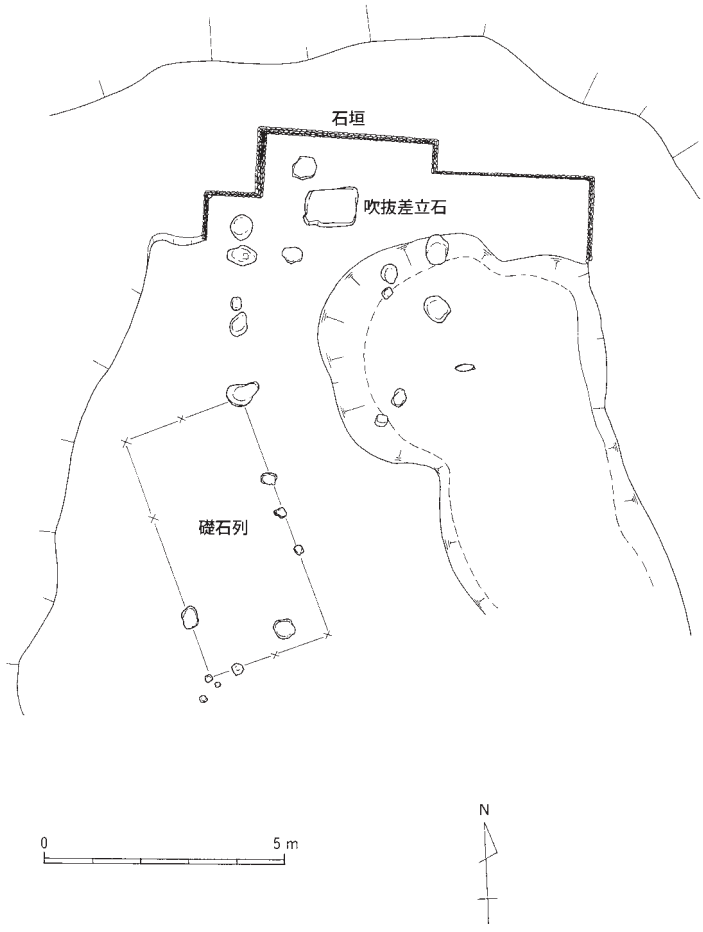
①　遠見番所

福岡県内における中津藩の遠見番所が２ヶ所あり、一つは藩の城下、中津近くの高浜（築上郡吉富町小祝）に置かれていた。山国川河口の左岸に立地し、現在は痕跡を見ることはできないが、周知の包蔵地となっている他、「高浜の番所踊り」という無形民俗文化財も伝えられている。当番所跡では、試掘調査も行われており、江戸期の遺物が出土している（福岡県教育委員会2001）。

もう一つは飛び地藩領の怡土郡大入村（糸島市大入）の配崎山に置かれている。この配崎山の遠見番所は寛政５年（1793）に設置、文政11年（1828）に一度は廃止されたものの、天保14年（1842）に再び設置された。番所には合図のための吹抜１、三道具ならびに棒２本、遠目鑑１を常備し、異国船を発見した際には合図の吹抜を差し立て、夜間の場合は篝火を焚くことなどが取り決められていた。この配崎山番所跡地は平成16年（2004）に調査が行われていて、石垣、礎石列、吹抜差立石、さらには建物に葺かれていた巴文軒丸瓦、草花文軒平瓦や寛永通宝が見つかっており、県内では他には遠見番所の詳細調査例はなく重要な事例と言えよう。

第 347 図　配崎山遠見番所位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「芥屋」を一部改変して事務局作成）

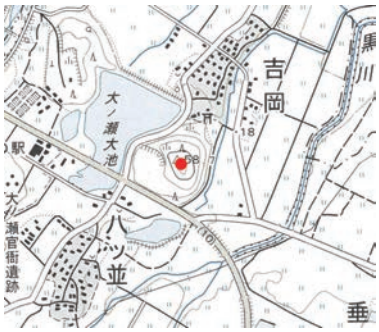
第 348 図　配崎山遠見番所石垣・吹抜差立石（上）・礎石列（下）
（写真提供：糸島市教育委員会）



第 349 図　配崎山遠見番所平面図
（二丈町教育委員会 2006 から転載）

②烽火台

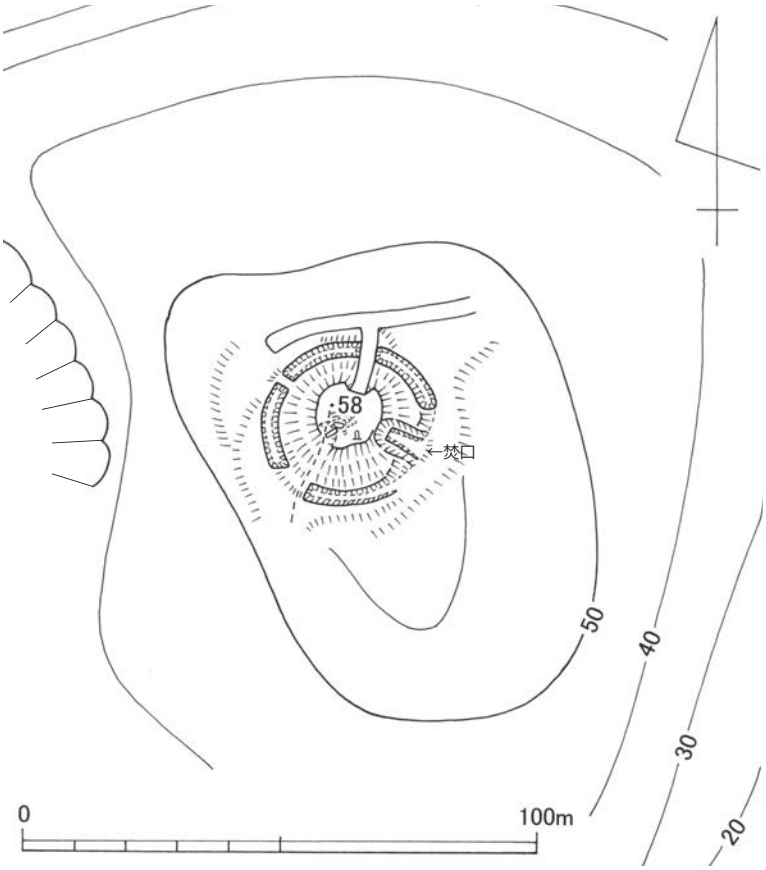
福岡県内における中津藩の烽火台は、築上郡上毛町吉岡の雄熊山烽火台（吉岡烽火台）である。これは、小倉藩の角田の烽火台から中津城下、あるいは藩領内に造られた長峰尾（大分県中津市野依）、大蔵山（大分県宇佐市院内町北山）へと中継するためのもので、文化６年（1809）に築造された。



第 350 図　雄熊山烽火台位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「中津」を一部改変して事務局作成））

【雄熊山烽火台】山国川左岸、標高58mの独立丘陵の雄熊山の山頂部に位置する。山頂部には、直径約25m、高さ約４～５mのマウンド状の土盛りがあるが、それが烽火台の土台である。土盛りの周囲には幅約２m、深さ約１m弱の溝が回り、焚口を除く三方が陸橋状に掘り残されている。南東側には、焚口があり、花崗岩の切石で組まれた石組みの口の部分が現在も確認することができる。土盛りの頂部は平坦に整形されており、かつては煙道が開いていたものと考えられるが、現在は埋められて石碑が建てられている（現在石碑は倒壊）。またこの土盛り遺構が中世城郭を再利用したものではないかという意見もあるが、自然丘陵上に完全に人工的に造られた土盛りとみられ、再利用とは考えにくい。現状、県内では良好に残存した唯一の烽火台であり、非常に貴重な存在と言えよう。

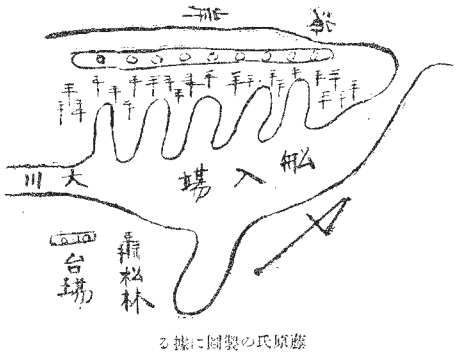
第 351 図　雄熊山烽火台全景（上）・焚口部分（中・下）



第 352 図　雄熊山烽火台現況平面図（事務局作成）

（6）その他

上記、福岡・小倉・久留米・柳川・中津藩以外にも、他藩のものがあるため最後にまとめておく。一つは幕府領の遠見番所である。『怡土志摩地理全誌』（由比1989）の「城山城跡」の項には「島原乱の後、異国船監視のため、加布里遠見番所がおかれ、改廃の後幕領になって貞享５（1688）年、松国在住の郷足軽八人と本村在住の波呂松右エ門、同伊右エ門らで、遠見番と赤坂番所警備を受持った」とある。出典が不明であるため、確証は得られないが、春日神社（北九州市八幡西区黒崎）が所蔵する筑前国絵図にも、年紀不詳ながら加布里に遠見番所の描写がなされており、存在自体はまちがいないようである。



第 353 図　「久留米藩の大里船入場」
（浅野 1939 から転載）

また、長州藩については第二次長州戦争時の小倉藩との戦いにおける砲兵陣地については既に述べたが、それ以前の台場が福岡県内に存在する。「豊前大里に於ける久留米藩の経営」（浅野1939）には「長藩の小森江砲臺」として「幕末攘夷論の盛なりし頃、長州藩は小森江に海岸砲臺を築造した、其の長さは百間余、高さ九尺、幅三間余であり、其の場所は久留米藩の船入場の前面であつたと云ふ。（古野登三郎談）」とあり、また「米藩の船入場の前面は海岸迄、一帯の松林であつたやうである、現在の製粉及び製糖工場の一部が、久留米屋敷であつたから、長藩の臺場は、両工場の東側であつたやうである。（黙然人氏書翰）」とあり、第353図の挿図を載せている。現在、ニッカウヰスキーの工場となっており、その痕跡は見ることはできない。

【参考文献】
浅野陽吉1938「大里の有馬屋敷」『郷土研究　筑後』第６巻第12号　筑後郷土研究会
浅野陽吉1939「豊前大里に於ける久留米藩の経営」『郷土研究筑後』第７巻第７号　筑後郷土研究会
大川市誌編集委員会1977『大川市誌』福岡県大川市役所
加藤信一郎・牛島寿人・東竜雄・築地原正英・仲井克己2003「福岡県山門郡山門町谷軒の生活と伝承Ⅱ」『帝京平成大学紀要』第15巻第2号
北九州市史編さん委員会1990『北九州市史　近世』北九州市
久留米市史編さん委員会1982『久留米市史』第２巻　久留米市
二丈町教育委員会2006「第六章　配崎山・遠見番所の調査」『大入盆綱引き』（二丈町民俗文化財調査報告書第４集）
服部英雄2003「烽火台にみる長崎街道の軍事的側面―亀井昭陽『烽火日記』および古代烽―」『長崎街道』（福岡県文化財調査報告書第184集）福岡県教育委員会
福岡市1968『福岡市史・別巻』福岡市役所
福岡市教育委員会1993『能古島』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第354集）福岡市教育委員会
福岡県1997『福岡県史』近世史料編　久留米藩初期（下）
福岡県1998『福岡県史』通史編　福岡藩（二）
福岡県教育委員会2001『上唐原了清遺跡Ⅰ』（一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告６）
福岡県教育委員会2016『福岡県の中近世城館跡Ⅲ―豊前地域編―』（福岡県中近威勢城館遺跡等詳細分布調査報告書３・福岡県文化財調査報告書第254集）
守友　隆2012「「漂流貿易」の拠点・藍島―小倉藩の遠見番所が置かれた藩境の島―」『西日本文化』459　西日本文化協会
柳川市史編集委員会1999『地図のなかの柳川-柳川市史　地図編-』柳川市
大和町史編纂実務委員会2001『大和町史』通史編　上巻　大和町
由比章祐1989『怡土志摩地理全誌』１怡土編　糸島新聞社

3　遠見番所・烽火台・台場関連文献史料一覧

・本章では、本書報告対象の遠見番所・烽火台・台場（砲台）が登場する文献史料を集成した一覧表を示す。
・掲載にあたっては、遠見番所・烽火台・台場（砲台）別に採集した関係史料を「一次史料」と「参考史料」に類別し、編年配列した上で、各「一次史料」には枝番号を付した。ここでの「一次史料」とは、その台場等が存続した同時代成立の史料である古文書・記録・日記類であり、その写しも含む。「参考史料」は、台場等に関する記述内容の時期よりも後世の成立となる記録や編纂物である。
・本来ならば、原文書からの翻刻を掲載すべきだが、作業期間・紙幅等の事情により、その多くを良質な刊本等から収集し、内容については要旨、または当該遠見番所等に係る記述からの情報を示した。
・掲載は、福岡藩・小倉藩・久留米藩・柳川藩・中津藩の順とし、各藩ごとに遠見番所・烽火台・台場の項目の順で整理した。
・一覧表の作成は、一瀬智（福岡藩烽火台・台場）、松川博一（久留米藩、柳川藩遠見番所）、酒井芳司（福岡藩遠見番所、小倉藩遠見番所・烽火台・台場、久留米藩烽火台・台場、中津藩遠見番所・烽火台）が担当し、酒井が全体を整序した。

【福岡藩】
〈遠見番所〉

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
1	姫島遠見番所	糸島市志摩姫島	参考	寛永17年		『新訂黒田家譜　第2巻』P181			福岡藩、遠見番所を置き、異国船の来航を監視する。定番の士と足軽を遣わす。
			参考	正保年間		正保年間筑前国図／『福岡県史資料第6輯』巻末附載地図			遠見番所が描かれる。
			参考	延宝4年4月3日		『新訂黒田家譜　第2巻』P387			番人を増し、直参の士2人、足軽2人を定番として遣わし、番船を備える。
			参考	嘉永7年		浦嶋遠見番所灯篭堂急用丸囲上屋共図／林文書122（九州歴史資料館蔵）			遠見番所の建物平面図が描かれる。
2	芥屋浦遠見番所	糸島市志摩芥屋	参考	正保2年		『新訂黒田家譜　第2巻』P181			福岡藩、遠見番所を置く。
			参考	正保年間		正保年間筑前国図／『福岡県史資料第6輯』巻末附載地図			遠見番所が描かれる。
			参考	天和１年		『新訂黒田家譜　第2巻』P387			足軽を遣わし置く。
			参考	嘉永7年		浦嶋遠見番所灯篭堂急用丸囲上屋共図／林文書122（九州歴史資料館蔵）			遠見番所の建物平面図が描かれる。
3	於呂島遠見番所	福岡市西区小呂島	参考	正保年間		正保年間筑前国図／『福岡県史資料第6輯』巻末附載地図			遠見番所が描かれる。
			参考	天和１年		『新訂黒田家譜　第2巻』P387			福岡藩、於呂島に士2人を遣わし置く。
4	西浦遠見番所	福岡市西区西浦	参考	寛永17年		『新訂黒田家譜　第2巻』P181			福岡藩、遠見番所を置き、異国船の来航を監視する。定番の士と足軽を遣わす。
			参考	正保2年		『新訂黒田家譜　第2巻』P181			福岡藩、西浦遠見番所を玄界島に移す。
5	玄界島遠見番所	福岡市西区玄界島	参考	正保2年		『新訂黒田家譜　第2巻』P181			福岡藩、西浦遠見番所を玄界島に移す。
			参考	正保年間		正保年間筑前国図／『福岡県史資料第6輯』巻末附載地図			遠見番所が描かれる。
			参考	延宝4年4月3日		『新訂黒田家譜　第2巻』P387			番人を増し、直参の士2人、足軽2人を定番として遣わし、番船を備える。
			参考	嘉永7年		浦嶋遠見番所灯篭堂急用丸囲上屋共図／林文書122（九州歴史資料館蔵）			遠見番所の建物平面図が描かれる。
6	津口番所	福岡城下	参考	寛永17年5月		『北九州市史　近世』P731			福岡藩、ポルトガル船の来航を契機とし、番所を置く。
7	相島遠見番所	糟屋郡新宮町相島	参考	寛永17年		『新訂黒田家譜　第2巻』P181			福岡藩、遠見番所を置き、異国船の来航を監視する。定番の士と足軽を遣わす。
			参考	正保年間		正保年間筑前国図／『福岡県史資料第6輯』巻末附載地図			「番所」の文字はないが、遠見番所とみられる建物が描かれる。
			参考	延宝4年4月3日		『新訂黒田家譜　第2巻』P387			番人を増し、直参の士2人、足軽2人を定番として遣わし、番船を備える。
			参考	享保１年6月26日		『北九州市史　近世』P732			福岡藩、かねて常設の藍島番所を増築し、番士を加える。
			参考	嘉永7年		浦嶋遠見番所灯篭堂急用丸囲上屋共図／林文書122（九州歴史資料館蔵）			遠見番所の建物平面図が描かれる。
8	大島遠見番所	宗像市大島	参考	寛永17年		『新訂黒田家譜　第2巻』P181			福岡藩、遠見番所を置き、異国船の来航を監視する。定番の士と足軽を遣わす。
			参考	正保年間		正保年間筑前国図／『福岡県史資料第6輯』巻末附載地図			遠見番所が描かれる。
			参考	延宝4年4月3日		『新訂黒田家譜　第2巻』P387			番人を増し、直参の士2人、足軽2人を定番として遣わし、番船を備える。
			参考	嘉永7年		浦嶋遠見番所灯篭堂急用丸囲上屋共図／林文書122（九州歴史資料館蔵）			遠見番所の建物平面・立面図が描かれる。
9	地島遠見番所	宗像市地島	参考	正保年間		正保年間筑前国図／『福岡県史資料第6輯』巻末附載地図			遠見番所が描かれる。
			参考	延宝4年4月3日		『新訂黒田家譜　第2巻』P387			番人を増し、直参の士2人、足軽2人を定番として遣わし、番船を備える。
			参考	嘉永7年		浦嶋遠見番所灯篭堂急用丸囲上屋共図／林文書122（九州歴史資料館蔵）			遠見番所の建物平面図が描かれる。
10	沖島遠見番所	宗像市沖ノ島	参考	正保2年		『新訂黒田家譜　第2巻』P181			福岡藩、遠見番所を置く。
			参考	天和１年		『新訂黒田家譜　第2巻』P387			足軽を遣わし置く。
11	岩屋遠見番所	北九州市若松区	参考	寛永17年		『新訂黒田家譜　第2巻』P181			福岡藩、遠見番所を置き、異国船の来航を監視する。定番の士と足軽を遣わす。
			参考	正保年間		正保年間筑前国図／『福岡県史資料第6輯』巻末附載地図			遠見番所が描かれる（「山鹿御崎」と記される）。
			参考	延宝4年4月3日		『新訂黒田家譜　第2巻』P387			番人を増し、直参の士2人、足軽2人を定番として遣わし、番船を備える。
			参考	嘉永7年		浦嶋遠見番所灯篭堂急用丸囲上屋共図／林文書122（九州歴史資料館蔵）			遠見番所の建物平面図が描かれる。
12	脇ノ浦遠見番所	北九州市若松区	参考	正保2年		『新訂黒田家譜　第2巻』P181			福岡藩、遠見番所を置く。
			参考	正保年間		正保年間筑前国図／『福岡県史資料第6輯』巻末附載地図			遠見番所が描かれる。
			参考	嘉永7年		浦嶋遠見番所灯篭堂急用丸囲上屋共図／林文書122（九州歴史資料館蔵）			遠見番所の建物平面図が描かれる。
13	小田崎遠見番所	北九州市若松区	参考	嘉永7年		浦嶋遠見番所灯篭堂急用丸囲上屋共図／林文書122（九州歴史資料館蔵）			遠見番所の建物平面・立面図が描かれる。
14	名古屋崎遠見番所	北九州市戸畑区	参考	嘉永7年		浦嶋遠見番所灯篭堂急用丸囲上屋共図／林文書122（九州歴史資料館蔵）			遠見番所の建物平面・立面図が描かれる。
15	若松浦番所	北九州市若松区	参考	寛永17年5月		『北九州市史　近世』P731			福岡藩、ポルトガル船の来航を契機とし、番所を置く。

〈烽火台〉

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
0	諸烽火台		参考	文化6年8月25日	郡方覚書	旧福岡図書館蔵本／中山平次郎「九州北辺に於ける文化年間の烽火台」『考古学雑誌5-7』P446			「烽火場。天山　四王寺山　しやうけ越　龍王岳　六ッ岳　石峯　丸尾此所四王寺村（ヤマ）より移 一文化6年巳8月25日より烽火番初。御城代組3人10日交代、1ヶ所出張」
			参考	文化7年5月10日					「午5月10日より両人番、10日交代。」
			参考	文化8年12月26日					「同8年未12月26日以後御番人無し。」
			参考	文化13年5月					福岡・佐賀両藩より長崎奉行に願い出、「烽火」相止となる。
			参考		篤斎叢書	平岡良助氏蔵本／中山平次郎「九州北辺に於ける文化年間の烽火台」『考古学雑誌5-7』P444			「（文化4年フェートン号事件をきっかけに）夫より国々へ烽火御仕立に相成。…御国にては、天山・四王寺・六嶽・石峯・丸尾薬院村上なり。石峯より豊前霧ヶ嶽に受るとの事也。右烽火一ヶ所に、御城代組より両人其御番有しか、3・4年にて止ぬ。右烽火、一度もえし事あり。全く見そんしにての事也と。然れとも其時彼丸尾の烽火もえし事なれは、…家中大騒動也。」
1	天山烽火台	筑紫野市天山	(1)	文化6年10月21日～30日		烽山日記　上／『亀井南冥・昭陽全集7』P22～32			亀井昭陽、「天山」で烽火番を務める。
			(2)	文化6年12月1日～10日		烽山日記　中／『亀井南冥・昭陽全集7』P33			
			(3)	文化7年11月1日～10日		烽山日記　下／『亀井南冥・昭陽全集7』P80～85			
			参考	（文化9年）		『筑紫野市史　下巻』P158			「天山」と「石峰」に「烽火場定番」を1人ずつ置き、「烽火場小使」として石峰に4人、天山に3人を付ける。
			参考	（文化10年12月）	文化九年郡方覚書	『筑紫野市史　下巻』P158			天山烽火台の見張り番として、3人が新たに雇用される。
			(4)	（文化13年カ）	帳面仕立案	近藤文書／『筑紫野市史』P159			「天山烽火場」の廃止に伴い、烽火場の運営諸経費の清算について。
2	四王寺山烽火台	大野城市乙金・宇美町四王寺	(1)	文化6年12月21日～30日		烽山日記　中／『亀井南冥・昭陽全集7』P33～36			亀井昭陽、「四王寺山」で烽火番を務める。
			(2)	（文化6年）	連年日記	染原文書／『県報184　長崎街道』P230			「此年烽火台四王寺山に出来候、長崎非常之節、出方人馬手当テ筋、様々被仰付候事」
			(3)	文政3年	文政三年庚辰観世音寺村之内旧跡礎現之図	藤井甚太郎「太宰府古図に就て」／『歴史地理23-1』			四王寺山の西側稜線上に「烽家」・「火ノ尾」。
			参考	大正3年12月15日		中山平次郎「九州北辺に於ける文化年間の烽火台」／『考古学雑誌5-7』P438			四王寺山付近の住人よりの聞き取りとして、四王寺山中の「火ノ尾は大野城の烽火址なるべけれども、烽家は則ち文化年間の新烽火の一なりといふ」との記述。
			参考						高原謙次郎の談話として、文化年間に「農民藩廷の認可を受けずして、雨乞の為漫に（四王寺）山上に火を燃し、之が警報と誤認せられて福岡城内の騒擾を惹起し…」との記述。
3	乙金烽火台	大野城市乙金	参考		郡方覚書	旧福岡図書館蔵本／中山平次郎「九州北辺に於ける文化年間の烽火台」『考古学雑誌5-7』P447			「烽火場図」に、「四王寺」・「丸尾」間の中継地として「乙金」あり。
4	丸尾烽火台	福岡市中央区桜坂	参考			福岡県地理全誌／『福岡県史　近代史料編　地理全誌1』P158			「烽火台址　村（薬院村）ノ西南2町、丸尾ト云山ノ上ニアリ。文化ノ末、旧藩ニテ烽火台ヲ建ラル。幾程ナクヤミタリ。此尾続キニ、御所谷ト云地アリ。由縁アルヘケレトモ不詳。
			参考	大正3年12月15日		中山平次郎「九州北辺に於ける文化年間の烽火台」／『考古学雑誌5-7』P439			「（大休山）の高点の北方に位せる丘陵（＝丸尾）に、烽火台の名称が附与せられたる事…」
			参考		篤斎叢書	平岡良助氏蔵本／中山平次郎「九州北辺に於ける文化年間の烽火台」『考古学雑誌5-7』P446			「右烽火、一度もえし事あり。全く見そんしにての事也と。然れとも其時彼丸尾の烽火もえし事なれは、…家中大騒動也。…又丸尾に行てみれば、うつ高くやき草をつみ、其上に屋根ありて、四方は竹にて囲ひあり。九尺四方やあらんと覚しきか、跡もなく白灰となりて失ぬ。」
5	ショウケ越烽火台	飯塚市筑穂町内住	(1)	文化6年9月21日～30日		烽山日記　上／『亀井南冥・昭陽全集7』P13～21			亀井昭陽、「淘羅嶺」で烽火番を務める。
			(2)	文化7年7月11日～20日		烽山日記　下／『亀井南冥・昭陽全集7』P65～73			
			参考			福岡県地理全誌／『福岡県史　近代史料編　地理全誌3』P471			「烽火台跡／十郎畑ニアリ。台ノ迹、東西4間、南北2間半。番宅ノ迹長2間半、横3間アリ。糟屋郡界ヨリ東60間許。此村（内住村）ニ属ス。」
6	龍王山烽火台	飯塚市八木山	(1)	文化7年8月11日～20日		烽山日記　中／『亀井南冥・昭陽全集7』P57～64			亀井昭陽、「龍王岳」で烽火番を務める。「烽舎毀岳之陰面西北而築之、左右之隙劣旋馬而下臨百仞之谿」
			参考			福岡県地理全誌／『福岡県史　近代史料編　地理全誌3』P560			「烽火台址／龍王岳ノ北20町余ニアリ。1畝許ノ地に礎石存ス。裏ハ大日寺・明星寺ノ二村ニ接ス。」
			参考	昭和38年刊		『鎮西村史』／『県報184　長崎街道』P232			竜王山から北東に峯続きの「八木山富士」＝放口山（ほぐちやま）＝烽火の転訛か。
			参考			服部英雄「第6章　烽火台にみる長崎街道の軍事的側面」／『県報184　長崎街道』P233			鴻ノ巣・石坂久仁夫氏への聞き取り「のろし台は八木山富士にあった。小学校の頃からそう聞いている。」
7	六ヶ岳烽火台	直方市・鞍手町	(1)	文化6年8月24日～9月3日		烽山日記　上／『亀井南冥・昭陽全集7』P7～13			亀井昭陽、「六岳」で烽火番を務める。着任時は未だ築造中。烽火台の規模・構造について記述あり。「二方二丈有半」、「薀積薪草而屋之」、「茅葺四阿壜之外以竹落之」。
8	石峰山烽火台	北九州市若松区藤木	(1)	文化7年3月21日～4月1日		烽山日記　中／『亀井南冥・昭陽全集7』P37～56			亀井昭陽、「石峰」で烽火番を務める。
			(2)	文化7年9月11日～9月21日		烽山日記　下／『亀井南冥・昭陽全集7』P73～P80			
			参考	（文化9年）		『筑紫野市史　下巻』P158			「天山」と「石峰」に「烽火場定番」を1人ずつ置き、「烽火場小使」として石峰に4人、天山に3人を付ける。
			参考			筑前国続風土記拾遺／『筑前国続風土記拾遺　中』P471			「遠賀郡　貞」「藤木村」に「〇烽火所址。」
			参考			福岡県地理全誌／『福岡県史　近代史料編　地理全誌2』P780			「烽火台址／石峰ノ八分、南ノ方ニアリ。…今其遺址2畝許ノ地ニアリ。」

〈台場〉

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
1	加布里台場	糸島市加布里	参考		福岡藩砲台備石火矢覚	周防憲男資料（追加分）82／『物語福岡藩史』P339			「加布里」台場に1貫目砲2門・200目砲1門を備える。
2	高祖山台場	糸島市高祖ヵ	参考		福岡藩砲台備石火矢覚	周防憲男資料（追加分）82／『物語福岡藩史』P339			「高祖山」台場に1貫目砲3門・300目砲2門を備える。
3	今津台場	福岡市西区今津か	(1)	文久3年4月8日		見聞略記／『見聞略記』P134			黒田斉溥、「残ノ島・今津岳・志賀島等御台場御見分」。
4	姪浜（小戸）台場	福岡市西区小戸	(1)	文久3年9月上旬		見聞略記／『見聞略記』P156			「姪浜小戸山之上ニ、新ニ御台場地形拵へ切る」、「郡夫等ニ而山の上切ならし、石垣不入ニ御台場成就仕リ、大砲五挺計リ御備へ附ニ相成申候」
			参考	慶応元年		『福岡県史第2巻　上冊』P319			姪浜に砲台を築き沿岸防備をなす。
			参考			福岡県地理全誌／『福岡県史　近代史料編　地理全誌6』P227			「小戸大神宮ノ西一町余。小戸山ニアリ。東西60間・南北30間。面積6反2畝24歩アリ。慶応元年乙丑新築、明治三年廃ス。」
5	能古島台場	福岡市西区能古	参考	文久元年4月12日		黒田家文書　綱領10／『黒田家譜　7（上）』P283			「志賀・能古・荒戸山」に大砲を設置する。
			(1)	文久3年4月8日		見聞略記／『見聞略記』P134			黒田斉溥、「残ノ島・今津岳・志賀島等御台場御見分」。
			(2)	文久3年6月		見聞略記／『見聞略記』P141			福岡藩、能古島と志賀島の間「台場ヨリ台場迄凡二十余丁」の海上封鎖策について、家中に下問する。
			(3)	元治元年7月		見聞略記／『見聞略記』P187			7月20日頃、4ヵ国連合艦隊長州襲来との報告により、福岡藩士270～80人が「志賀浦・残島両所之御台場」に出張する。
			参考		福岡藩砲台備石火矢覚	周防憲男資料（追加分）82／『物語福岡藩史』P339			「残の島」台場に5貫目砲1門・2貫目砲3門・1.5貫目砲1門・1貫目砲1門を備える。
			参考			福岡県地理全誌／『福岡県史　近代史料編　地理全誌6』P234			「北浦人家ノ北10町許。巡リ田ト云所ニアリ。南北6間・東西4間許アリ。文久元年辛酉新築、明治3年廃ス。」
6	波奈台場（荒戸・福岡台場）	福岡市中央区荒戸	参考	文久元年4月12日		黒田家文書　綱領10／『黒田家譜　7（上）』P283			「志賀・能古・荒戸山」に大砲を設置する。
			参考	文久3年4月7日		黒田家文書　綱領11／『黒田家譜　7（上）』P306			「洲崎・波奈」両砲台を築き始める。波奈は6月20日落成。
			参考	文久3年5月		入江六郎七記録　上／『福岡県史2　上冊』P318			「国々海辺江御たい場御築立ニ相成申候」、「福岡御だい場御築立ニ付、国主若殿様幷ニ秋月黒田甲斐守様　御両殿日々才判、御家来衆ハ大身・小身不残御だい場築持籠役之事、何れも石火矢御作立御入用之由ニ候事」、「福岡台場・洲崎台場築立始まる。」
			(1)	文久3年5月		見聞略記／『見聞略記』P136			「福岡洲崎浜御台場」及び「荒戸江も新ニ御台場」を築造する。「福岡洲崎浜御台場」築造中、足軽衆と重役が喧嘩を起こす。「此節之御台場築立、中々御大そうの御事ニて、出方夫之人々江毎日御酒被為下、御用人方ヨリ御酌ニ御出被成、一人ニ三合三勺宛被為下候由」
			(2)	文久3年6月23日		見聞略記／『見聞略記』P140			「福岡荒戸之御台場」6月23日に成就し、大砲を備える。
			(3)	文久3年10月		見聞略記／『見聞略記』P162			「荒戸之御台場」に大砲15挺程を備える。
			(4)	元治元年		見聞略記／『見聞略記』P198			遠見番より異国船発見時の連絡法に大砲を用いることを定める。玄界島にて発見時は、「志賀」→「さい戸」→「荒戸の御台場」より城内へ連絡することに。
			参考		福岡藩砲台備石火矢覚	周防憲男資料（追加分）82／『物語福岡藩史』P339			「荒戸波奈」台場に12貫目砲1門・5貫目砲7門・2貫目砲2門を備える。
7	洲崎台場	福岡市中央区須崎	参考	文久3年4月7日		黒田家文書　綱領11／『黒田家譜　7（上）』P306			「洲崎・波奈」両砲台を築き始める。波奈は6月20日落成
			(1)	文久3年4月		見聞略記／『見聞略記』P135			同月頃より「福岡洲崎之浜」に新たに「御台場」を築造す。
			参考	文久3年5月		入江六郎七記録　上／『福岡県史2　上冊』P318			「国々海辺江御たい場御築立ニ相成申候」、「福岡御だい場御築立ニ付、国主若殿様幷ニ秋月黒田甲斐守様　御両殿日々才判、御家来衆ハ大身・小身不残御だい場築持籠役之事、何れも石火矢御作立御入用之由ニ候事」、「福岡台場・洲崎台場築立始まる。」
			(2)	文久3年6月17日		見聞略記／『見聞略記』P143			横浜浦・宮浦・姫島3ヶ浦より「御寸志」として、「福岡洲崎御台場」に「石」積廻す。近日中に下浦触中の全浦より「石」積廻す。
			(3)	文久3年10月		見聞略記／『見聞略記』P162			「福岡洲崎之御台場」10月中に成就する。大砲24・5挺を備える。
			(4)	元治1年8月		見聞略記／『見聞略記』P190			「福岡荒戸ヨリ洲崎之台場」の間に、「土俵台場」を築く。「右之台場ハ、自然異国船襲来之節、大砲之御備之為なるべし」
			参考		福岡藩砲台備石火矢覚	周防憲男資料（追加分）82／『物語福岡藩史』P339			「州崎」台場に12貫目砲1門・5貫目砲8門・2貫目砲6門を備える。
8	志賀島台場	福岡市東区志賀島	参考	文久1年4月12日		黒田家文書　綱領10／『黒田家譜　7（上）』P283			「志賀・能古・荒戸山」に大砲を設置する。
			(1)	文久3年4月8日		見聞略記／『見聞略記』P134			黒田斉溥、「残ノ島・今津岳・志賀島等御台場御見分」。
			(2)	文久3年6月		見聞略記／『見聞略記』P141			福岡藩、能古島と志賀島の間「台場ヨリ台場迄凡二十余丁」の海上封鎖策について、家中に下問する。
			(3)	元治1年7月		見聞略記／『見聞略記』P187			7月20日頃、4ヵ国連合艦隊長州襲来との報告により、福岡藩士270～80人が「志賀浦・残島両所之御台場」に出張する。
			(4)	元治1年		見聞略記／『見聞略記』P198			遠見番より異国船発見時の連絡法に大砲を用いることを定める。玄界島にて発見時は、「志賀」→「さい戸」→「荒戸の御台場」より城内へ連絡することに。
			参考		福岡藩砲台備石火矢覚	周防憲男資料（追加分）82／『物語福岡藩史』P339			「志賀島」台場に2.8貫目砲1門・2貫目砲1門・1.5貫目砲1門・1貫目砲3を備える。
9	西戸崎台場	福岡市東区西戸崎	(1)	元治1年		見聞略記／『見聞略記』P198			遠見番より異国船発見時の連絡法に大砲を用いることを定める。玄界島にて発見時は、「志賀」→「さい戸」→「荒戸の御台場」より城内へ連絡することに。
			参考		福岡藩砲台備石火矢覚	周防憲男資料（追加分）82／『物語福岡藩史』P339			「西堂崎」台場に1貫目砲2門を備える。

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
10	芦屋台場	芦屋町芦屋	参考	文久3年6月1日		黒田家文書　綱領11／『黒田家譜　7（上）』P309			「芦屋柏原砲台」築立。
			参考	文久3年		年暦算／『遠賀町近世古文書年譜』P179			6月、芦屋・山鹿に台場築立始まり、7月下旬に成就す。惣奉行吉田六郎太夫様。7月25日芦屋惣棟上げ、台場に石火矢5挺据わる。
			参考		福岡藩砲台備石火矢覚	周防憲男資料（追加分）82／『物語福岡藩史』P339			「芦屋」台場に2貫目砲1門・1貫目砲1門・800目砲4門・800目野戦砲1門を備える。
			(1)	（明治1年）辰6月	覚	小田家文書／『芦屋町誌』P735			「芦屋柏原両御砲台」の御備筒掛を山鹿魚町・芦屋町の「農兵頭取」ほか周辺村・浦の者に命じる。
11	柏原（山鹿）台場	芦屋町山鹿	参考	文久3年6月1日		黒田家文書　綱領11／『黒田家譜　7（上）』P309			「芦屋柏原砲台」築立。
			参考	文久3年		年暦算／『遠賀町近世古文書年譜』P179			6月、芦屋・山鹿に台場築立始まり、7月下旬に成就す。惣奉行吉田六郎太夫様。7月25日芦屋惣棟上げ、台場に石火矢5挺据わる。
			参考		福岡藩砲台備石火矢覚	周防憲男資料（追加分）82／『物語福岡藩史』P339			「柏原」台場に2貫目砲1門・1貫目砲1門・800目砲1門・300目砲1門を備える。
			(1)	（明治1年）辰6月	覚	小田家文書／『芦屋町誌』P735			「芦屋柏原両御砲台」の御備筒掛を山鹿魚町・芦屋町の「農兵頭取」ほか周辺村・浦の者に命じる。
12	中島台場	北九州市戸畑区	(1)	文久3年5月27日		見聞略記／『見聞略記』P139			（長州藩による関門海峡通行の外国船砲撃の影響で）「若松表并ニ名こや崎等」に「仮台場急ニ出来」する。同日朝に「御国之蒸気船」に「石火矢・玉薬等」を積込み、同表へ乗廻す。
			参考	文久3年6月1日		黒田家文書　綱領11／『黒田家譜　7（上）』P309			「若松浦中島砲台」築立。
			参考			入江六郎七記録　上／『福岡県史第2巻上冊』P318			「若松浦中島砲台」築立、7日成就す。
			(2)	文久3年6月		見聞略記／『見聞略記』P143			「赤間か関度々之騒動ニ付、若松中ノ島へ御台場出来」、「中ノ島之御台場」に「弐貫目位之大砲」を置く。
			参考	文久3年		年暦算／『遠賀町近世古文書年譜』P179			5月末より若松に台場築立御取かかり、6月末に成就す。
			参考		福岡藩砲台備石火矢覚	周防憲男資料（追加分）82／『物語福岡藩史』P339			「若松中島」台場に2貫目砲2門・1貫目砲2門・800目砲1門・500目砲1門・300目砲1門を備える。このほか「若松」に800目野戦砲3門を備える。
			(4)	慶応3年11月	「戸畑村名古屋崎御砲台御取止ニ付御筒諸道具共ニ中嶋江御引廻夫並ニ御筒囲木屋仕調共ニ仕廻目録書上帳」	『戸畑市史　第2集』P282			名古屋崎台場を廃し、その諸道具等を中島台場に移す。
			(5)	（慶応3年）11月12日	遠賀鞍手郡役所達覚	『戸畑市史　第2集』P284	底井野郡役所	大庄屋　三輪佐一郎殿	「名護屋崎御砲台」取止めに付、「御筒並ニ玉薬・砲座舗板」引き取りのため役人を派遣する。これらの品々を「中嶋御台場」近辺に囲い置く。
			(6)	（慶応3年）11月23日	楠野太一郎夫触	『戸畑市史　第2集』P285	普請方　楠野太一郎	右村々（修多羅村・小石村）庄屋衆中	「戸畑村名古屋崎御砲台」取止めに付、「御道具」の「中嶋御台場所」への運搬について、村夫を課す。
			(7)	慶応3年11月	若松村組頭・庄屋船賃請書	『戸畑市史　第2集』P287	若松村組頭　清作、同村庄屋　許山準次	遠賀鞍手御郡御役所	「名古屋崎御台場より中島御台場迄御道具御積廻ニ付御召仕船賃御請申上候事」
			(8)	（慶応4・明治1年）5月13日	楠野太一郎書状	『戸畑市史　第2集』P286	楠野太一郎	遠賀鞍手御郡御役所	「去る卯冬戸畑村名古屋崎御台場御取止」、「御道具中嶋御台場」引廻に係る諸費用の不足分について。
			参考			福岡県地理全誌／『福岡県史　近代史料編　地理全誌2』P753			「近年嶋の北辺ニ、藩ヨリ砲台を設ラル。」
			参考	明治27年3月5日	陸軍所轄地旧砲台地価格取調方宛回答	『戸畑市史　第2集』P382	（戸畑村役場カ）	（陸軍所轄地旧砲台地価格取調方）	「河斛島」「旧砲台」の面積「5反7畝36歩」、1反価格「60円」の記載。
			参考	明治29年6月12日	旧砲台地拝借願之件	『戸畑市史　第2集』P385	戸畑村役場	原田卯之吉外2人宛	
			参考	明治30年7月12日	旧砲台敷地拝借願返戻	『戸畑市史　第2集』P386	戸畑村役場	若松町　樋口新太郎殿外6名宛	「河斛島旧砲台地」の拝借願を却下する。
			参考	明治31年10月25日	保安林政府買収の義上申	『戸畑市史　第2集』P389	福岡県遠賀郡戸畑村長　副田一定、同県同郡若松町長　中屋重義	福岡県知事　曽我部道夫殿	中島台場跡地の、保安林としての国有化を請願する。「文久年間黒田藩ニ於テ該島ノ北端ニ砲台ヲ営築セラレ、…点々老松ノ存在セシヲ以テ、砲台廃毀後村民ニ以テ松苗ヲ植継キ…」
13	名古屋崎台場	北九州市戸畑区中原	(1)	文久3年5月27日		見聞略記／『見聞略記』P139			（長州藩による関門海峡通行の外国船砲撃の影響で）「若松表并ニ名こや崎等」に「仮台場急ニ出来」する。同日朝に「御国之蒸気船」に「石火矢・玉薬等」を積込み、同表へ乗廻す。
			(2)	元治1年8月	名古屋崎御台場御木屋掛入用品々代　出　間通	『戸畑市史　第2集』P280			名古屋崎台場の建設資材の代金を記す。
			参考		福岡藩砲台備石火矢覚	周防憲男資料（追加分）82／『物語福岡藩史』P339			「名護屋」台場に5貫目砲3門・2貫目砲2門を備える。
			(3)	慶応3年11月	「戸畑村名古屋崎御砲台御取止ニ付御筒諸道具共ニ中嶋江御引廻夫並ニ御筒囲木屋仕調共ニ仕廻目録書上帳」	『戸畑市史　第2集』P282			名古屋崎台場を廃し、その諸道具等を中島台場に移す。
			(4)	（慶応3年）11月12日	底井野郡役所達覚	『戸畑市史　第2集』P284	底井野郡役所	大庄屋　三輪佐一郎殿	「名護屋崎御砲台」取止めに付、「御筒並ニ玉薬・砲座舗板」引き取りのため役人を派遣する。これらの品々を「中嶋御台場」近辺に囲い置く。

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
13	名古屋崎台場	北九州市戸畑区中原	(5)	（慶応3年）11月23日	楠野太一郎夫触	『戸畑市史　第2集』P285	普請方　楠野太一郎	右村々（修多羅村・小石村）庄屋衆中	「戸畑村名古屋崎御砲台」取止めに付、「御道具」の「中嶋御台場所」への運搬について、村夫を課す。
			(6)	慶応3年11月	若松村組頭・庄屋船賃請書	『戸畑市史　第2集』P287	若松村組頭　清作、同村庄屋　許山準次	遠賀鞍手御郡御役所	「名古屋崎御台場より中島御台場迄御道具御積廻ニ付御召仕船賃御請申上候事」
			(7)	（慶応4・明治1年）5月12日	水夫粮米・諸入用銭納付書覚	『戸畑市史　第2集』P286	戸畑村庄屋　高崎正三郎	普請方　楠野太一郎様	「名古屋崎御台場御取除ケ水夫粮米・諸入用銭」納付書。
			(8)	（慶応4・明治1年）5月13日	楠野太一郎書状	『戸畑市史　第2集』P286	楠野太一郎	遠賀鞍手御郡御役所	「去る卯冬戸畑村名古屋崎御台場御取止」、「御道具中嶋御台場」引廻に係る諸費用の不足分について。
			(9)	明治27年3月5日	陸軍所轄地旧砲台地価格取調方宛回答	『戸畑市史　第2集』P382	（戸畑村役場ヵ）	（陸軍所轄地旧砲台地価格取調方）	「名古屋」「旧砲台」の面積「9反4畝12歩」、1反価格「3円」の記載。

【小倉藩】

〈遠見番所〉

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
1	筑前堺川（境鼻）遠見番所	北九州市小倉北区中井浜	参考	正徳5年		巡見上使御尋之節、申上様の次第／『福岡県史資料　第二輯』P480			遠見番所を置く。
2	小倉川口遠見番所	北九州市小倉北区紫川河口	参考	正徳5年		巡見上使御尋之節、申上様の次第／『福岡県史資料　第二輯』P480			遠見番所を置く。
3	門司遠見番所	北九州市門司区門司	参考	正徳5年		巡見上使御尋之節、申上様の次第／『福岡県史資料　第二輯』P480			遠見番所を置く。
4	田浦遠見番所	北九州市門司区田野浦	参考	正徳5年		巡見上使御尋之節、申上様の次第／『福岡県史資料　第二輯』P480			遠見番所を置く。
5	大里遠見番所	北九州市門司区大里	参考	正徳5年		巡見上使御尋之節、申上様の次第／『福岡県史資料　第二輯』P480			遠見番所を置く。
6	苅田松山遠見番所	京都郡苅田町松山	参考	正徳5年		巡見上使御尋之節、申上様の次第／『福岡県史資料　第二輯』P480			遠見番所を置く。
7	藍島遠見番所	北九州市小倉北区藍島	参考	正徳5年		巡見上使御尋之節、申上様の次第／『福岡県史資料　第二輯』P480			遠見番所を置く。
			参考	文久3年5月10日		小倉藩攘夷記／『行橋市史　中巻』P624、『北九州市史　近世』P746			小倉藩、藩内に異国船を見るに従って、号砲を逓次に3回打発することを通知する。
8	馬島（小六連島）遠見番所	北九州市小倉北区馬島	参考	享保1年6月26日		巡見上使御尋之節、申上様の次第／『福岡県史資料　第二輯』P480、『北九州市史　近世』P732			福岡藩、遠見番所を新設する。延享3年「巡見上使御尋之節、申上様の次第」は、前年の正徳5年に設置したとする。
9	葛葉遠見番所	北九州市門司区	参考	正徳5年		巡見上使御尋之節、申上様の次第／『福岡県史資料　第二輯』P480			唐船の荷物を買い取り、小倉と下関の間に船を置き、あわせて船をも借り替えるので、門司の葛葉に遠見番所を設ける。

〈烽火台〉

No.	名称		枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
1	足立山烽火台	北九州市小倉北区・南区足原	参考	文化6年1月20日		『豊津町史史料編　豊津藩　歴史と風土第10輯』P7			烽火台の試し焚きを行う。
2	堀越山峯	北九州市小倉南区堀越	参考	慶応2年10月5日		豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P185			堀越山峯に烽火を揚げると、狸山の本陣小宮民部より、応援として農兵100人を差し向ける。
3	覗山烽火台	行橋市覗山	参考	文化6年1月20日		『豊津町史史料編　豊津藩　歴史と風土第10輯』P7			烽火台の試し焚きを行う。
4	角田の峰尾烽火台	豊前市角田	参考	文化6年1月20日		『豊津町史史料編　豊津藩　歴史と風土第10輯』P7			烽火台の試し焚きを行う。
5	吉見陣烽火場	企救郡	(1)	文化11年正月14日		忠固公年譜・中村平左衛門日記／『小倉市誌　続編』P990			企救郡吉見烽火場に火を挙げる者あり。
			(2)	文久3年4月27日		中村平左衛門日記／『小倉市誌　続編』P998			砲台成就につき、一統に御酒を下さる。

〈台場〉

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
1	堺鼻湊口台場	北九州市小倉北区中井浜	(1)	文久3年5月10日		小倉藩攘夷記／『行橋市史　中巻』P624、『北九州市史　近世』P746			小倉藩、藩内に異国船を見るに従って、号砲を遁次に3回打発することを通知する。
2	東西台場（東浜台場・西浜台場）	北九州市小倉北区紫川河口	(1)	文久3年3月4日		文久三年より亥子丑迄時勢変動記　柏木黙二郎／『豊津町史史料編　豊津藩歴史と風土第8輯』P28、企救郡小森承之助日記／『福岡県史資料　第7輯』P522、『北九州市史　近世』P821			小倉の紫川河口東西台場に大砲が据え付けられる。4月7日、砲術方門田一郎（栄）とその門下によって試射を行う。10日、藩主見分。27日、西台場にて東西台場の竣工式を藩主臨席のもとに行う。
			参考	文久3年5月18日		小倉藩攘夷記／『北九州市史　近世』P746			小倉藩、藩内に異国船を見るに従って、号砲を遁次に3回打発することを通知する。
			(2)	慶応2年6月4日～7月23日		島村貫倫伝（松島一郎）・藤田弘策日記／『門司市史』P216・284～5			17日、長州藩軍艦3艘、田ノ浦・門司を襲う。抗戦の後、小倉藩第一軍の島村貫倫、田ノ浦を去り、第三軍渋田見新、第六軍小笠原織衛、第二軍渋田見舎人と合流し、小倉東西両砲台に屯する。第二軍は小笠原近江守の軍と交代し、大里駅、馬寄村に陣す。7月3日、長州藩、引島砲台から大里・馬寄を砲撃。檀浦古台場からも砲撃。新羅浜より上陸し、大里を襲う。敵の兵火により、大里・馬寄を撤退。27日、長州藩、勅使松ノ台場から砲撃、別軍が大里に上陸、藤松ノ砦を襲う。赤坂台場・延命寺台場は小倉要衝の地で、ここから攻め登る。肥後の将兵とともに抗戦するも、将軍家茂の薨去により、小倉藩は小倉城を自焼し、香春に退く。
3	大里砲台	北九州市門司区大里	(1)	元治1年5月15日～18日		文久四年甲子歳日記新町村豊田重蔵控／『門司市史』P212～3			大里の久留米屋敷、交代台場詰が国許に引き取り、小倉藩に引き渡される。
			(2)	慶応2年6月17日～7月3日		島村貫倫伝（松島一郎）・長防征討日記・小倉口第一戦略記・小倉口第二戦略記・小倉戦争日記・懐旧記事（山県有朋）・豊国戦記（佐野経彦）・柳田道保陣中日記・藤田弘策日記・梧山日記・高瀬氏記録・高瀬氏諸日記／『門司市史』P216～304			17日、長州藩軍艦3艘、田ノ浦・門司を襲う。抗戦の後、小倉藩第一軍の島村貫倫、田ノ浦を去り、第三軍渋田見新、第六軍小笠原織衛、第二軍渋田見舎人と合流し、小倉東西両砲台に屯する。第二軍は小笠原近江守の軍と交代し、大里駅、馬寄村に陣す。7月3日、長州藩、引島砲台から大里・馬寄を砲撃。檀浦古台場からも砲撃。新羅浜より上陸し、大里を襲う。敵の兵火により、大里・馬寄を撤退。27日、長州藩、勅使松ノ台場から砲撃、別軍が大里に上陸、藤松ノ砦を襲う。赤坂台場・延命寺台場は小倉要衝の地で、ここから攻め登る。肥後の将兵とともに抗戦するも、将軍家茂の薨去により、小倉藩は小倉城を自焼し、香春に退く。
			参考	慶応2年9月27日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P163			大里の戦いで、地雷火にかかって懲りたので、一人も台場の外へ出ず。
4	小森江砲台	北九州市門司区葛葉	参考	文久3年頃か		浅野陽吉「豊前大里に於ける久留米藩の経営」／『郷土研究筑後』第7巻第7号、1939年、P4			幕末攘夷論の盛んであった頃、長州藩は小森江に海岸砲台を築造した。その長さは100間余、高さ9尺、幅3間余であり、その場所は久留米藩の船入場の前面であったという（古野登三郎氏談）。
5	葛葉台場	北九州市門司区葛葉	(1)	文久3年3月27日		企救郡小森承之助日記／『福岡県史資料　第7輯』P522、小倉藩史年表／『福岡県史資料　第10輯』P607			小倉藩、葛葉砲台を建設し、4月27日に完成する。
6	門司台場	北九州市門司区門司	参考	文久3年5月18日		小倉藩攘夷記／『北九州市史　近世』P746			小倉藩、藩内に異国船を見るに従って、号砲を遁次に3回打発することを通知する。
7	梶ヶ鼻台場	北九州市門司区旧門司	参考	文久3年5月10日		小倉藩攘夷記／『行橋市史　中巻』P624、『北九州市史　近世』P746			小倉藩、藩内に異国船を見るに従って、号砲を遁次に3回打発することを通知する。
8	速戸台場	北九州市門司区旧門司	参考	文久3年5月10日		小倉藩攘夷記／『行橋市史　中巻』P624、『北九州市史　近世』P746			小倉藩、藩内に異国船を見るに従って、号砲を遁次に3回打発することを通知する。
9	新開ノ上山	北九州市門司区田野浦	(1)	文久3年6月25日・26日		豊田氏万日記控／『門司市史』P191			長州藩士100人と台場拵人夫ほどが田野浦に来て、台場を築く。
			(2)	文久3年7月24日		小森承之助日記／『門司市史』P196			長州藩士、幕府の異国形船に田野浦新開台場から3発撃ちかける。
10	田野浦台場	北九州市門司区田野浦	(1)	文久3年7月15日		小倉藩攘夷記／『行橋市史　中巻』P628			長州兵、田野浦を不法に占拠し、台場を築く。
			(2)	文久3年7月18日		白石正一郎日記／『門司市史』P207、企救郡小森承之助日記／『福岡県史資料　第７輯』P524			勅使正親町公董卿、16日に田ノ浦台場、18日に引島弟子松台場・大里久留米屋敷ノ台場を巡視する。

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
10	田野浦台場		(3)	文久3年7月24日		文久二年万日記控豊田氏／『門司市史』P194			田野浦台場から当沖を通る船に2～3発大砲を撃ちかけ、1発が船の表に当たった。
			(4)	慶応2年6月17日～7月27日		島村貫倫伝（松島一郎）・長防征討日記・小倉口第一戦略記・小倉口第二戦略記・小倉戦争日記・懐旧記事（山県有朋）・豊国戦記（佐野経彦）・柳田道保陣中日記・藤田弘策日記・梧山日記・高瀬氏記録・高瀬氏諸日記／『門司市史』P216～304			17日、長州藩軍艦3艘、田ノ浦・門司を襲う。抗戦の後、小倉藩第一軍の島村貫倫、田ノ浦を去り、第三軍渋田見新、第六軍小笠原織衛、第二軍渋田見舎人と合流し、小倉東西両砲台に屯する。第二軍は小笠原近江守の軍と交代し、大里駅、馬寄村に陣す。7月3日、長州藩、引島砲台から大里・馬寄を砲撃。檀浦古台場からも砲撃。新羅浜より上陸し、大里を襲う。敵の兵火により、大里・馬寄を撤退。27日、長州藩、勅使松ノ台場から砲撃、別軍が大里に上陸、藤松ノ砦を襲う。赤坂台場・延命寺台場は小倉要衝の地で、ここから攻め登る。肥後の将兵とともに抗戦するも、将軍家茂の薨去により、小倉藩は小倉城を自焼し、香春に退く。
11	せき忠台場	北九州市門司区田野浦	(1)	文久3年6月25日・26日		豊田氏万日記控／『門司市史』P191			長州藩士100人と台場拵人夫ほどが田野浦に来て、台場を築く。
12	笠石畠台場	北九州市門司区田野浦	(1)	文久3年6月25日・26日		豊田氏万日記控／『門司市史』P191			長州藩士100人と台場拵人夫ほどが田野浦に来て、台場を築く。
13	登ヶ所大炮弐挺居方	北九州市門司区田野浦	(1)	文久3年6月25日・26日		豊田氏万日記控／『門司市史』P191			長州藩士100人と台場拵人夫ほどが田野浦に来て、台場を築く。
14	葛原台場	北九州市小倉南区葛原	参考	文久3年5月10日		小倉藩攘夷記／『行橋市史　中巻』P624、『北九州市史　近世』P746			小倉藩、藩内に異国船を見るに従って、号砲を逓次に3回打発することを通知する。

〈台場（第二次長州戦争時）〉

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
1	赤坂台場	北九州市小倉北区赤坂	(1)	慶応2年7月27日		島村貫倫伝（松島一郎）・長防征討日記・小倉口第一戦略記・小倉口第二戦略記・小倉戦争日記・懐旧記事（山県有朋）・豊国戦記（佐野経彦）・柳田道保陣中日記・藤田弘策日記・梧山日記・高瀬氏記録・高瀬氏諸日記／『門司市史』P216～304			17日、長州藩軍艦3艘、田ノ浦・門司を襲う。抗戦の後、小倉藩第一軍の島村貫倫、田ノ浦を去り、第三軍渋田見新、第六軍小笠原織衛、第二軍渋田見舎人と合流し、小倉東西両砲台に屯する。第二軍は小笠原近江守の軍と交代し、大里駅、馬寄村に陣す。7月3日、長州藩、引島砲台から大里・馬寄を砲撃。檀浦古台場からも砲撃。新羅浜より上陸し、大里を襲う。敵の兵火により、大里・馬寄を撤退。27日、長州藩、勅使松ノ台場から砲撃、別軍が大里に上陸、藤松ノ砦を襲う。赤坂台場・延命寺台場は小倉要衝の地で、ここから攻め登る。肥後の将兵とともに抗戦するも、将軍家茂の薨去により、小倉藩は小倉城を自焼し、香春に退く。
2	延命寺台場	北九州市小倉北区赤坂	(1)	慶応2年7月27日		島村貫倫伝（松島一郎）・長防征討日記・小倉口第一戦略記・小倉口第二戦略記・小倉戦争日記・懐旧記事（山県有朋）・豊国戦記（佐野経彦）・柳田道保陣中日記・藤田弘策日記・梧山日記・高瀬氏記録・高瀬氏諸日記／『門司市史』P216～304			17日、長州藩軍艦3艘、田ノ浦・門司を襲う。抗戦の後、小倉藩第一軍の島村貫倫、田ノ浦を去り、第三軍渋田見新、第六軍小笠原織衛、第二軍渋田見舎人と合流し、小倉東西両砲台に屯する。第二軍は小笠原近江守の軍と交代し、大里駅、馬寄村に陣す。7月3日、長州藩、引島砲台から大里・馬寄を砲撃。檀浦古台場からも砲撃。新羅浜より上陸し、大里を襲う。敵の兵火により、大里・馬寄を撤退。27日、長州藩、勅使松ノ台場から砲撃、別軍が大里に上陸、藤松ノ砦を襲う。赤坂台場・延命寺台場は小倉要衝の地で、ここから攻め登る。肥後の将兵とともに抗戦するも、将軍家茂の薨去により、小倉藩は小倉城を自焼し、香春に退く。
3	宮尾台場	北九州市小倉北区篠崎か	参考	慶応2年10月4日		豊国戦記　第十六／『福岡県企救郡誌』P171			松本藤三郎、今村、宮尾、薬園三ヶ所の台場を守る。
4	薬園台場	北九州市小倉北区熊谷	参考	慶応2年10月4日		豊国戦記　第十六／『福岡県企救郡誌』P171			松本藤三郎、今村、宮尾、薬園三ヶ所の台場を守る。
5	今村砲台	北九州市小倉北区今町	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			小笠原軍、紺屋原の北、新町の東、両山上に二砲台を設け、守垣の北諏訪森に野戦砲台を設け、吉兼、祇園町（祇園町頭と祇園社頭）、高野（2ヶ所）、南方（一軒屋の上、岩鼻の上）、蒲生（2ヶ所）、今村等の山により砲台を起こし、小倉城跡に迫ろうとする。
			参考	慶応2年9月9日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P223			9月9日の小倉城下総攻撃の勝利に乗じ、松本藤三郎、今村に進出し、山手の高地に台場を築き、敵と対峙する。

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
5	今村砲台		参考	慶応2年9月28日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P163			松本藤三郎、今村の下山の鼻に台場を築く。
			参考	慶応2年10月4日		豊国戦記　第十六／『福岡県企救郡誌』P171～4			松本藤三郎、今村、宮尾、薬園3ヶ所の台場を守る。長州兵の攻撃により、今村台場が落ち、松本藤三郎、戦死する。
			参考	慶応2年10月4日		修訂防長回天史　五中九／『福岡県企救郡誌』P105			長州兵、今村砲台を攻撃し、陥とす。
6	高坊山（高法山）台場	北九州市小倉北区高坊	参考	慶応2年8月27・28日		豊国戦記　第十一・十二・十三、丙寅之御変動御本陣御後備大砲打方並附属小銃隊戦争明細方／『福岡県企救郡誌』P135、138、228			門田栄の小銃隊、北方原の台場を乗っ取った勢いで、高坊山の台場を乗っ取り、破却する。
7	高隊台場	北九州市小倉北区高坊か	参考	慶応2年8月28日		豊国戦記　第十一・十二／『福岡県企救郡誌』P135			長門勢、高隊の台場に退却する。高坊山の松林数ヶ所に地雷火を埋めてあるとの里人等の注進により、立石原、十文字の台場を攻撃することを中止する。
8	黒原砲台	北九州市小倉北区黒原	参考	慶応2年8月29日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P100			奇兵隊、黒原砲台より米利堅雷布留を数発遠撃し、長州兵の勢いを助ける。
			参考	慶応2年10月4日		修訂防長回天史　五中九／『福岡県企救郡誌』P106			奇兵隊白尾行八郎一手、黒原砲台より、仏蘭西式砲二門を率いて来て戦う。
9	足立山台場	北九州市小倉北区・南区足原	参考	慶応2年8月16日		豊国戦記　第十九／『福岡県企救郡誌』P125			長州の大石雄太郎、足立山の麓に数十の台場を立てる。この他に湯川、大平山に3ヶ所の台場を築き、同村長野道、水神ヶ森、新町、高坊山の四辻、立石原等に台場を構える。大畠、瀬川屋敷、山王ノ森、中野山、蓮ノ池の辺り、妙見社の麓、二ツ池の辺などには、伏台場を築く。
			参考	慶応2年8月28日		豊国戦記　第十一・十二／『福岡県企救郡誌』P135			長門勢、足立山、猿ヶ森の台場より、大砲を打ち出して対戦する。
10	猿ヶ森台場	北九州市小倉北区・南区足原	参考	慶応2年8月28日		豊国戦記　第十一・十二／『福岡県企救郡誌』P135			長門勢、足立山、猿ヶ森の台場より、大砲を打ち出して対戦する。
11	新町東山上砲台	北九州市小倉南区北方	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			小笠原軍、紺屋原の北、新町の東、両山上に二砲台を設け、守垣の北諏訪森に野戦砲台を設け、吉兼、祇園町（祇園町頭と祇園社頭）、高野（2ヶ所）、南方（一軒屋の上、岩鼻の上）、蒲生（2ヶ所）、今村等の山により砲台を起こし、小倉城跡に迫ろうとする。
			参考	慶応2年10月4日		修訂防長回天史　五中九／『福岡県企救郡誌』P106			長州兵、北方新町の砲台を攻撃し、小倉兵、支えきれずに退去する。
12	北方原台場	北九州市小倉南区北方	参考	慶応2年8月28日		豊国戦記　第十一・十二／『福岡県企救郡誌』P135			門田栄、長門勢が退却したので、北方原の台場を乗っ取る。
13	地蔵原台場	北九州市小倉南区北方か	参考	慶応2年8月17日		豊国戦記　第十九／『福岡県企救郡誌』P128			長門勢、北方地蔵原に台場を築き、陣営を構える。
14	原山台場	北九州市小倉南区北方か	参考	慶応2年9月9日		豊国戦記　第十三／『福岡県企救郡誌』P149			小倉勢の松本熊太郎、原山台場に隊士6人と残り、長門勢と戦う。
			参考	慶応2年9月12日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P151			長州勢、北方原に押し出し、原山台場を攻撃する。松本熊太郎、原山台場を固める。
			参考	慶応2年9月15日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P151			長門勢、原山近く押し寄せる。松本熊太郎等7人、台場を防ぎかねたが、渋田見新の隊士常盤常右衛門、応援に走り来て、長州勢の横合いを射撃し、長州勢、退却する。
			参考	慶応2年9月17日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P156			紺屋原上切松の台場を固める深谷小太郎の隊士松本熊太郎は、原山の台場に藁人形を並列して人がいるように見せかける。
			参考	慶応2年10月3日		豊国戦記　第十五／『福岡県企救郡誌』P169			松本熊太郎、深谷小太郎、原山の台場を固める。
15	尾平山砲台	北九州市小倉南区湯川	参考	慶応2年8月28日		修訂防長回天史　五中八／『小倉市誌補遺』P607			長州兵、尾平山砲台を守る。
16	北隅野戦台場	北九州市小倉南区湯川	参考	慶応2年8月28日		修訂防長回天史　五中八／『小倉市誌補遺』P607			長州兵、北隅野戦台場を守る。
17	垣松山上砲台	北九州市小倉南区湯川	参考	慶応2年8月28日		修訂防長回天史　五中八／『小倉市誌補遺』P607			長州兵、垣松山上砲台を守る。山上砲台より臼砲を発射する。小倉兵去る。

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
18	湯川台場	北九州市小倉南区湯川	参考	慶応2年8月28日		豊国戦記　第十一・十二／『福岡県企救郡誌』P133			小倉兵、葛原正明寺の台場を目掛けて打ち出でる。長州勢は、湯川新池堤の辺に構えた数十の陰し台場より発砲して、本台場と協力して戦う。
			参考	慶応2年8月29日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P101			湯川砲台より高田兵、小倉兵を遠撃する。
			参考	慶応2年10月7日		豊国戦記　第十七／『小倉市誌　補遺』P651、『福岡県企救郡誌』P194			湯川台場を守る湯川勘左衛門、思いがけない背面からの長州勢の攻撃により、落ち失せる。
19	恵良山砲台	北九州市小倉南区湯川	参考	慶応2年10月7日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P224			長州勢、奇兵隊、報国隊を葛原村正気原、湯川村尾恵良山両砲台に配備し、山県狂助を総監とし、狸山口小倉藩諸備の出動を押え、島村諸隊の陣地に対する。
20	葛原台場	北九州市小倉南区葛原	参考	慶応2年8月19日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P96			小倉兵、長州兵の葛原台場を銃撃する。
			参考	慶応2年8月28日		豊国戦記　第十一・十二／『福岡県企救郡誌』P133			小倉兵、葛原正明寺の台場を目掛けて打ち出でる。長州勢は、湯川新池堤の辺に構えた数十の陰し台場より発砲して、本台場と協力して戦う。
			参考	慶応2年8月29日		豊国戦記　第十一・十二／『福岡県企救郡誌』P133			小倉勢は台場に引き籠り、長州勢は葛原、正明寺、洗出川の台場より、中曽根を放火する。
21	疫神原砲台	北九州市小倉北区葛原	参考	慶応2年8月28日		豊国戦記　第十一・十二／『福岡県企救郡誌』P138			門田栄、陣を疫神原に退けて、台場を築く。
22	正明寺台場	北九州市小倉南区葛原	参考	慶応2年8月29日		豊国戦記　第十一・十二／『福岡県企救郡誌』P133			小倉勢は台場に引き籠り、長州勢は葛原、正明寺、洗出川の台場より、中曽根を放火する。
23	宗毛原畑台砲台	北九州市小倉南区葛原本町・沼本町	参考	慶応2年8月19日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P96			長州兵、曽祢より東北葛原、湯川の後面宗毛原畑台に砲台を築き、葛原村東路傍、湯川北隅、垣松山上、山下、湯川の前面尾平山等五所に砲台を置き、北黒原より足立に連なり、砲台相属す。小倉兵、曽祢西北山辺より、茅山（朽網の手前）、能智原等に連なり、砲台を各所に置く。
24	洗出川台場	北九州市小倉南区葛原本町	参考	慶応2年8月29日		豊国戦記　第十一・十二／『福岡県企救郡誌』P133			小倉勢は台場に引き籠り、長州勢は葛原、正明寺、洗出川の台場より、中曽根を放火する。
25	正気原砲台	北九州市小倉南区葛原	参考	慶応2年10月7日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P224			長州勢、奇兵隊、報国隊を葛原村正気原、湯川村尾恵良山両砲台に配備し、山県狂助を総監とし、狸山口小倉藩諸備の出動を押え、島村諸隊の陣地に対する。
26	下原台場	北九州市小倉南区葛原・東西朽網	参考	慶応2年8月28日		修訂防長回天史　五中八／『小倉市誌　補遺』P608			長州兵、尾原に向かう中城と、中城に向かう小さな台場等から一斉狙撃する。
27	辻蔵台場	北九州市小倉南区辻三	参考	慶応2年10月7日		豊国戦記　第十七／『小倉市誌　補遺』P651、『福岡県企救郡誌』P194			小笠原軍、吉兼・金山・辻蔵の台場を退却する。
28	太貫山正面砲壘	北九州市小倉南区	(1)	慶応2年8月17日		梧山筆記　小倉藩士松本退蔵記録／『小倉市誌　補遺』P611			長州軍、太貫山正面の高みに関門を建て、柵を振り、砲壘を設ける。
29	原砲台	北九州市小倉南区朽網東・西	参考	慶応2年8月11日		修訂防長回天史　五中八／『小倉市誌補遺』P606			長州兵、小倉兵が籠る狸場山に向かう右手の原砲台より登る。
30	御庄津砲台	北九州市小倉南区朽網東・西	参考	慶応2年8月11日		修訂防長回天史　五中八／『小倉市誌補遺』P606			長州兵、小倉兵が籠る狸場山に向かう右手の御庄津砲台より登る。
31	黒崎砲台	北九州市小倉南区朽網東・西	参考	慶応2年8月11日		修訂防長回天史　五中八／『小倉市誌補遺』P606			長州兵、小倉兵が籠る狸場山に向かう左手の海浜の黒崎砲台より登る。
32	狸山台場	北九州市小倉南区朽網	参考	慶応2年8月16日		豊国戦記　第十九／『福岡県企救郡誌』P125			小倉兵、10日の戦いに敗北したので、16日夜より、狸山、貫松山、浜寺に台場を築き建てる。
			参考	慶応2年9月17日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P155～6			長州勢、企救郡朽網蛭子山に攻め寄せる。徳力嵐山に掛ける陣鐘を合図に、秋羽山より津田岡之丞、数発の大砲を打ち出し、長州勢、立石原に退く。狸山口には小笠原鬼角、中野一角、その他30人隊物頭等、昼夜、台場を固める。
			参考	慶応2年10月6日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P224			10月5日、長州勢3000～4000人、島村志津摩部下の各隊に総攻撃。6日に各隊退却。小笠原正参100余人を引率し、貫山の山腹耳取り山に仮台場を築く。

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
33	端山上下台場	北九州市小倉南区朽網東・西か	(1)	慶応2年8月17日		梧山筆記　小倉藩士松本退蔵記録／『福岡県企救郡誌』P207			太貫山に関門を置き、近くの端山の上下に台場を築く。関門浜手四番手六番手の台場に、長州兵、大小銃を打ちかけ、進み来る。小倉兵も防戦する。
34	貫松山台場	北九州市小倉南区朽網か	参考	慶応2年8月16日		豊国戦記　第十九／『福岡県企救郡誌』P125			小倉兵、10日の戦いに敗北したので、16日夜より、狸山、貫松山、浜寺に台場を築き建てる。
35	浜寺台場	北九州市小倉南区朽網か	参考	慶応2年8月16日		豊国戦記　第十九／『福岡県企救郡誌』P125			小倉兵、10日の戦いに敗北したので、16日夜より、狸山、貫松山、浜寺に台場を築き建てる。
36	鳥喰山砲台	北九州市小倉南区上曾根・上貫・隠蓑・志井	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			小笠原軍、妙見山、鳥喰山、隠蓑、松尾山等の数所に砲台を置き、高津尾の後門に備える。
			参考	慶応2年10月4日		修訂防長回天史　五中九／『福岡県企救郡誌』P108			小倉兵、松尾山、隠蓑を捨て、鳥喰山砲台を嬰守する。長州兵、鳥喰山を攻め、小倉兵は支えきれずに走る。
37	唐戸台場	北九州市小倉南区下曽根	参考	慶応2年10月4日		豊国戦記　第十六／『福岡県企救郡誌』P181			高浜寛一郎、唐戸台場を乗っ取ろうと攻め寄せる。長門勢、唐戸台場に引き籠る。
38	下曽根社宗米蔵跡台場	北九州市小倉南区下曽根か	(1)	慶応2年10月4日		梧山筆記　小倉藩士松本退蔵記録／『福岡県企救郡誌』P214			下曽根社宗米蔵跡に台場を築く。
39	蒲生砲台	北九州市小倉南区蒲生	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			小笠原軍、紺屋原の北、新町の東、両山上に2砲台を設け、守垣の北諏訪森に野戦砲台を設け、吉兼、祇園町（祇園町頭と祇園社頭）、高野（2ヶ所）、南方（一軒屋の上、岩鼻の上）、蒲生（2ヶ所）、今村等の山により砲台を起こし、小倉城跡に迫ろうとする。
			参考	慶応2年9月9日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P223			9月9日の小倉城下総攻撃の勝利に乗じ、青柳彦十郎、蒲生村に進出し、虹山の麓に台場を築き、守る。
			参考	慶応2年9月17日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P155～6			長州勢、企救郡朽網蛭子山に攻め寄せる。徳力嵐山に掛ける陣鐘を合図に、秋羽山より津田岡之丞、数発の大砲を打ち出し、長州勢、立石原に退く。蒲生、高野口には青柳彦十郎の隊が台場を固める。
40	二神山台場	北九州市小倉南区蒲生か	参考	慶応2年9月12日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P151			有馬政之丞、兵を分けて、二神山、東福寺山の両台場を固めて、長州勢を待ち受ける。
			参考	慶応2年9月16日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P153			有馬政之丞、二神山台場に引き揚げ、長州勢の形勢を見定める。
			参考	慶応2年9月20日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P159			小笠原近江守貞正、二神山台場を巡視する。
41	南方砲台	北九州市小倉南区南方	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			小笠原軍、紺屋原の北、新町の東、両山上に2砲台を設け、守垣の北諏訪森に野戦砲台を設け、吉兼、祇園町（祇園町頭と祇園社頭）、高野（2ヶ所）、南方（一軒屋の上、岩鼻の上）、蒲生（2ヶ所）、今村等の山により砲台を起こし、小倉城跡に迫ろうとする。
			参考	慶応2年10月4日		修訂防長回天史　五中九／『福岡県企救郡誌』P105			長州兵、一軒屋砲台を奪う。
42	高野砲台	北九州市小倉南区高野	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			小笠原軍、紺屋原の北、新町の東、両山上に2砲台を設け、守垣の北諏訪森に野戦砲台を設け、吉兼、祇園町（祇園町頭と祇園社頭）、高野（2ヶ所）、南方（一軒屋の上、岩鼻の上）、蒲生（2ヶ所）、今村等の山により砲台を起こし、小倉城跡に迫ろうとする。
			参考	慶応2年8月17日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P222			青柳彦十郎隊は、高野村の東北端蓑堤の西高地畑に台場を築き、守る。
			参考	慶応2年8月29日		豊国戦記　第十三／『福岡県企救郡誌』P139			青柳彦十郎、高野、祇園町に4ヶ所の砲台を築く。
			参考	慶応2年9月17日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P155～6			長州勢、企救郡朽網蛭子山に攻め寄せる。徳力嵐山に掛ける陣鐘を合図に、秋羽山より津田岡之丞、数発の大砲を打ち出し、長州勢、立石原に退く。蒲生、高野口には青柳彦十郎の隊が台場を固める。
			(1)	慶応2年10月4日		修訂防長回天史　五中九、丙寅之御変動御本陣御後備大砲打方並附属小銃隊戦争明細方／『福岡県企救郡誌』P105、233			長州兵、高野、祇園町砲台を抜き、高野、祇園両村を焼く。
43	東福寺山台場	北九州市小倉南区高野	参考	慶応2年9月12日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P151			有馬政之丞、兵を分けて、二神山、東福寺山の両台場を固めて、長州勢を待ち受ける。
44	金山台場	北九州市小倉南区高野	参考	慶応2年10月7日		豊国戦記　第十七／『小倉市誌　補遺』P651、『福岡県企救郡誌』P194			小笠原軍、吉兼・金山・辻蔵の台場を退却する。
45	稲荷峠台場	北九州市小倉南区長尾	参考	慶応2年10月7日		修訂防長回天史　五中九／『小倉市誌補遺』P636、『福岡県企救郡誌』P109			長州藩の堅田・八幡二小隊、稲荷峠の台場を破る。

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
46	祇園町砲台	北九州市小倉南区長尾	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			小笠原軍、紺屋原の北、新町の東、両山上に2砲台を設け、守垣の北諏訪森に野戦砲台を設け、吉兼、祇園町（祇園町頭と祇園社頭）、高野（2ヶ所）、南方（一軒屋の上、岩鼻の上）、蒲生（2ヶ所）、今村等の山により砲台を起こし、小倉城跡に迫ろうとする。
			参考	慶応2年8月17日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P222			松本藤三郎の隊下は、長尾村に陣営を進め、祇園町祇園の森北側大庄屋役宅地内の築山を台場として、警備する。
			参考	慶応2年8月29日		豊国戦記　第十三／『福岡県企救郡誌』P139			青柳彦十郎、高野、祇園町に4ヶ所の砲台を築く。
			参考	慶応2年10月4日		修訂防長回天史　五中九、深谷隊慶応二寅陣中日誌、丙寅之御変動御本陣御後備大砲打方並附属小銃隊戦争明細方／『福岡県企救郡誌』P105、204、233			長州兵、高野、祇園町砲台を抜き、高野、祇園両村を焼く。
47	高野谷山西ノ尾椎木山台場	北九州市小倉南区長尾	参考	慶応2年10月5日		豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P187			島村志豆摩、植波新兵衛、中村武雄、片村友吉に10余人を付けて、高野谷山西ノ尾椎木山の中に畳を積み立て、台場を築かせる。長州勢の栗屋十郎隊、攻めかかり、小倉勢、引き退く。
48	金光寺原台場	北九州市小倉南区長尾	参考	慶応2年10月5日		豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P187			島村志豆摩、古谷半三郎、豊田幾太郎に、金光寺原、池尻山に台場を築かせる。長州勢の攻撃により、退去する。
49	五反田山台場	北九州市小倉南区長尾か	参考	慶応2年10月5日		豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P187			島村志豆摩、隊士八部民右衛門、中島勇三郎に農兵10余人を付けて、五反田山に台場を築かせる。
50	池尻山台場	北九州市小倉南区長尾か	参考	慶応2年10月5日		豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P187			島村志豆摩、古谷半三郎、豊田幾太郎に、金光寺原、池尻山に台場を築かせる。長州勢の攻撃により、退去する。
51	中山砲台	北九州市小倉南区志井・徳力	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			徳力村と志井村の間に小笠原軍の中山砲台あり。志井妙見山砲台と相応ずる。
			参考	慶応2年10月4日		修訂防長回天史　五中九／『福岡県企救郡誌』P107			長府三吉内蔵之介一手が、中山砲台を攻め、陥す。志井妙見山台場にせまる。
			参考	慶応2年10月5日		豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P185			高田重右衛門等、中山台場を守るが、長州勢に襲われ、落ち延びる。
52	秋葉山砲台	北九州市小倉南区徳力	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			妙真寺の上の砲台の北に小笠原軍の秋葉山砲台あり。
			参考	慶応2年8月17日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P222			大砲隊茂呂於吉は、徳力村秋葉山上に砲台を築き、長崎で新たに買い入れた新式のレーケル砲を据え付け、守る。
			参考	慶応2年9月2日		豊国戦記　第十三／『福岡県企救郡誌』P141			津田岡之丞、徳力秋羽山に台場を作り、野戦砲を掛け並べる。
			参考	慶応2年9月20日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P159			小笠原近江守貞正、徳力秋羽山に登り、津田岡之丞の台場を巡視する。
			参考	慶応2年10月4日		修訂防長回天史　五中九／『福岡県企救郡誌』P106～8			奇兵一小隊、報国一小隊の兵、紺屋原に火をつけ、秋葉砲台を砲撃し、徳力に迫る。徳力に侵入した鴻城隊、臼砲で秋葉砲台を撃ち、陥落する。
			参考	慶応2年10月5日		豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P183			長州勢、須理山に登り、実本台場を眼下に見下ろし、小銃弾を浴びせる。深谷小太郎、萩尾、実本の2台場を捨て、秋葉山に引き退く。
53	徳力台場	北九州市小倉南区徳力	参考	慶応2年8月17日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P222			松本熊太郎の一隊は、陣営を徳力村ノ内字鉱屋原に進め、同所字良切り松に砲台を築き、木砲数門を据え、警固する。
			参考	慶応2年9月2日		豊国戦記　第十三、深谷隊慶応二寅陣中日誌／『福岡県企救郡誌』P141、201			深谷小太郎、徳力、嵐山、草場実本の三ヶ所に台場を作り、農民84人を籠め置く。徳力村に築いた台場を深谷が巡見する。
			参考	慶応2年9月17日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P155～6			長州勢、企救郡朽網蛭子山に攻め寄せる。徳力嵐山に掛ける陣鐘を合図に、秋羽山より津田岡之丞、数発の大砲を打ち出し、長州勢、立石原に退く。深谷小太郎の隊、徳力、紺屋原の台場を固める。
			参考	慶応2年9月23日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P160			深谷小太郎、徳力村にあって、藁を集めて台場を作る。
			参考	慶応2年10月5日		豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P183、185			徳力、草場の2ヶ所には、小倉勢、駐屯して地雷火を埋める。長州勢、破竹の勢いをもって徳力、萩尾の台場を攻め破る。
54	嵐山台場	北九州市小倉南区徳力	参考	慶応2年9月2日		豊国戦記　第十三／『福岡県企救郡誌』P141			深谷小太郎、徳力、嵐山、草場実本の3ヶ所に台場を作り、農民84人を籠め置く。島村志豆馬、嵐山台場に鐘を掛け、諸兵の駈け引きを試みる。
			参考	慶応2年9月17日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P155～6			長州勢、企救郡朽網蛭子山に攻め寄せる。徳力嵐山に掛ける陣鐘を合図に、秋羽山より津田岡之丞、数発の大砲を打ち出し、長州勢、立石原に退く。
			参考	慶応2年9月21日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P160			徳力嵐山に掛ける合図の陣鐘を鳴らし、秋羽山の大砲を発射する。
55	草場実本台場	北九州市小倉南区徳力	参考	慶応2年9月2日		豊国戦記　第十三／『福岡県企救郡誌』P141			深谷小太郎、徳力、嵐山、草場実本の3ヶ所に台場を作り、農民84人を籠め置く。
			参考	慶応2年10月5日		豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P183			長州勢、須理山に登り、実本台場を眼下に見下ろし、小銃弾を浴びせる。深谷小太郎、萩尾、実本の2台場を捨て、秋葉山に引き退く。

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
56	萩尾台場	北九州市小倉南区徳力・長尾	参考	慶応2年10月5日		豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P185			徳力、草場の2ヶ所には、小倉勢、駐屯して地雷火を埋める。長州勢、破竹の勢いをもって徳力、萩尾の台場を攻め破る。
57	巫部山上台場	北九州市小倉南区徳力	参考	慶応2年10月5日		豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P186			巫部山上台場を盾に取り、小倉勢、少しも動かず奮戦したが、石田、隠蓑、堀越、中山等の味方が敗走し、志井の方に退く。
58	守垣北諏訪森野戦砲台	北九州市小倉南区守垣	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			小笠原軍、紺屋原の北、新町の東、両山上に2砲台を設け、守垣の北諏訪森に野戦砲台を設け、吉兼、祇園町（祇園町頭と祇園社頭）、高野（2ヶ所）、南方（一軒屋の上、岩鼻の上）、蒲生（2ヶ所）、今村等の山により砲台を起こし、小倉城跡に迫ろうとする。
			参考	慶応2年8月17日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P222			深谷小太郎、守垣村と北方村字コン浪の中間高地の畑に台場を築き、守る。
			参考	慶応2年9月5日		豊国戦記　第十三／『福岡県企救郡誌』P143			深谷小太郎、守垣上切松に台場を築く。
			(1)	慶応2年9月17日		深谷隊慶応二寅陣中日誌／『福岡県企救郡誌』P202			長州兵、北方新町出切より、守垣台場を攻撃し、深谷隊、拒守する。19日、長州兵10余人、守垣村ウラキリ松台場へ打ち入る。深谷隊、長州兵を大いに破る。22日、ウラキリ松台場へ長州兵、打ち掛かり、深谷隊、戦い、敗走させる。23日、守垣村出切に台場を築く。
			(2)	慶応2年10月4日		修訂防長回天史　五中九、深谷隊慶応二寅陣中日誌／『福岡県企救郡誌』P106、204			長州の蒲生の兵と守垣砲台の小倉兵が戦い、奇兵隊の援軍により、小倉兵、砲台を捨て退く。深谷隊、守垣台場により、長州兵と戦うが、長州兵が多勢となり、防ぎきれず、徳力村に宿陣する。
			参考	慶応2年9月20日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P159			小笠原近江守貞正、深谷小太郎が籠る守垣台場を巡視する。
59	高原山砲台	北九州市小倉南区守垣か	参考	慶応2年9月5日		豊国戦記　第十三／『福岡県企救郡誌』P143			松本熊太郎、高原山に台場を構える。
60	石田砲台	北九州市小倉南区石田町	参考	慶応2年8月29日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P101			小倉兵、石田砲台より発砲する。
61	松尾山砲台	北九州市小倉南区石田町	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			小笠原軍、妙見山、鳥喰山、隠蓑、松尾山等の数所に砲台を置き、高津尾の後門に備える。
			参考	慶応2年10月4日		修訂防長回天史　五中九／『福岡県企救郡誌』P106			小倉兵、松尾山、その左隠蓑、その南河堤の二ヶ所の砲台に退き、拒戦する。
			参考	慶応2年10月4日		豊国戦記　第十六／『福岡県企救郡誌』P180			渋田見新、高橋唯之丞、岡の松の間に3ヶ所の台場を築き、長州勢の攻め打つのをしばらく支えていたが、隊を引きまとめ、隠蓑へ退却する。
			参考	慶応2年10月5日		豊国戦記　第十六／『福岡県企救郡誌』P183～4			石田松尾山台場には、二木求馬の隊が籠り居たが、長州勢に攻められ、鳥越山に退く。長州勢、松尾台場を乗っ取る。
62	紺屋原北山上砲台	北九州市小倉南区石田町	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八、丙寅之御変動御本陣御後備大砲打方並附属小銃隊戦争明細方／『福岡県企救郡誌』P103、228			小笠原軍、紺屋原の北、新町の東、両山上に2砲台を設け、守垣の北諏訪森に野戦砲台を設け、吉兼、祇園町（祇園町頭と祇園社頭）、高野（2ヶ所）、南方（一軒屋の上、岩鼻の上）、蒲生（2ヶ所）、今村等の山により砲台を起こし、小倉城跡に迫ろうとする。
			参考	慶応2年9月17日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P155～6			長州勢、企救郡朽網蛭子山に攻め寄せる。徳力嵐山に掛ける陣鐘を合図に、秋羽山より津田岡之丞、数発の大砲を打ち出し、長州勢、立石原に退く。深谷小太郎の隊、徳力、紺屋原の台場を固める。
63	隠蓑砲台	北九州市小倉南区隠蓑	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			小笠原軍、妙見山、鳥喰山、隠蓑、松尾山等の数所に砲台を置き、高津尾の後門に備える。
64	徳力後山砲台	北九州市小倉南区徳吉	参考	慶応2年10月7日		修訂防長回天史　五中九／『福岡県企救郡誌』P109			長州藩の鴻城三番、五番、徳力後山に砲台を築こうとする。
65	吉兼砲台	北九州市小倉南区徳吉	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			北高津尾の北の台の東南角本道に面し、大丸を右に望み、吉兼村を左に望み、一砲台あり。その北五六丁に吉兼砲台あり。小笠原軍、紺屋原の北、新町の東、両山上に2砲台を設け、守垣の北諏訪森に野戦砲台を設け、吉兼、祇園町（祇園町頭と祇園社頭）、高野（2ヶ所）、南方（一軒屋の上、岩鼻の上）、蒲生（2ヶ所）、今村等の山により砲台を起こし、小倉城跡に迫ろうとする。
			参考	慶応2年10月7日		修訂防長回天史　五中九／『小倉市誌補遺』P636、『福岡県企救郡誌』P109			長州藩、吉兼砲台を攻めようとする。長州藩の八幡・堅田五番二小隊、野添山鼻の砲台を破り、吉兼砲台に逼る。小倉兵、保つことができずに走る。
			参考			豊国戦記　第十七／『小倉市誌　補遺』P651、『福岡県企救郡誌』P194			小笠原軍、吉兼・金山・辻蔵の台場を退却する。
66	志井妙見山砲台	北九州市小倉南区志井	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			徳力村と志井村の間に小笠原軍の中山砲台あり。志井妙見山砲台と相応ずる。
			参考	慶応2年10月5日		修訂防長回天史　五中九、豊国戦記第十六／『福岡県企救郡誌』P108、180			奇兵隊、妙見山砲台を攻め、小倉兵、支えきれずに砲台から走る。奇兵隊、妙見山砲台に入る。二木求馬が守る志井の台場、攻め落とされる。

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
67	志井村字市ヶ原台場	北九州市小倉南区志井	参考	慶応2年8月1日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P222			8月1日から10余日後、牧野弥次右衛門、島村士大将の指揮により、金辺の陣営を発足し、志井村字茶屋並びに字市ヶ原に陣営を移す。字市ヶ原北端の高地に台場を築き、守る。
68	高尾山台場	北九州市小倉南区志井	参考	慶応2年10月5日		豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P185			高尾山台場には、丸田靭負、伊藤七五三之助等、所々に隊を分けて防ぐ。
69	堀越台場	北九州市小倉南区堀越	参考	慶応2年9月5日		豊国戦記　第十三／『福岡県企救郡誌』P143			渋田見新の隊士に堀越、十三塚、鳥越の3ヶ所の台場を守備させる。
				慶応2年10月5日		豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P184			岩田小十郎、高橋唯之丞等は、堀越山に台場を据え、十三塚より隠蓑の岬まで小倉勢によって防備厳かに待ち掛ける。十三塚内ノ森ノ左ノ尾に陣営を掛け並べる高橋唯之丞、渋田見主税の隊も、長州勢の鬨の声により、崩れて逃げ去る。堀越を固める岩田小十郎、柏木久右衛門、台場を捨て、落ち行く。長州勢、所々の台場を乗っ取る。
70	十三塚台場	北九州市小倉南区堀越	参考	慶応2年9月5日		豊国戦記　第十三／『福岡県企救郡誌』P143			渋田見新の隊士に堀越、十三塚、鳥越の3ヶ所の台場を守備させる。
			参考	慶応2年9月9日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P223			渋田見新、志井村福楽寺門前北側の田地に台場を築き、ついで堀越村北部十三塚に台場を築き、警備を怠らない。
			参考	慶応2年10月5日		豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P184			十三塚内ノ森ノ左ノ尾に陣営を掛け並べる高橋唯之丞、渋田見主税の隊も、長州勢の鬨の声により、崩れて逃げ去る。堀越を固める岩田小十郎、柏木久右衛門、台場を捨て、落ち行く。長州勢、所々の台場を乗っ取る。
71	合馬台場	北九州市小倉南区合馬	参考	慶応2年10月7日		修訂防長回天史　五中九／『小倉市誌補遺』P636、『福岡県企救郡誌』P109			長州藩の八幡一小隊、合馬の台場を抜く。
72	鳥越台場	北九州市小倉南区山本	参考	慶応2年9月5日		豊国戦記　第十三／『福岡県企救郡誌』P143			渋田見新の隊士に堀越、十三塚、鳥越の3ヶ所の台場を守備させる。
73	長尾村砲台	北九州市小倉南区長尾	(1)	慶応2年9月1日		丙寅之御変動御本陣御後備大砲打方並附属小銃隊戦争明細方／『福岡県企救郡誌』P230			小倉藩の小銃隊、長尾村砲台を築き立てるのを見分する。
74	丸山台場	北九州市小倉南区高津尾	(1)	慶応2年8月17日		深谷隊慶応二寅陣中日誌／『福岡県企救郡誌』P200			高津尾村丸山台場、築立てたところ、長州兵が蒲生村へ押し入ることを注進する者がある。
			参考	慶応2年10月7日		修訂防長回天史　五中九／『小倉市誌補遺』P636			小笠原氏の一将・島村志津摩、砲台を築く。
			参考			豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P196			長州勢の攻撃により、小倉兵、島村志豆馬のいる堂ヶ鼻の台場に馳せ帰る。
			参考	慶応2年10月13日		豊国戦記　八　佐野経彦筆／『小倉市誌　補遺』P637			小倉藩の青柳彦十郎、高津尾に陣を据え、丸山・堂ヶ鼻・茅生の3か所に台場を築く。
75	岡村砲台	北九州市小倉南区高津尾か	参考	慶応2年10月7日		修訂防長回天史　五中九／『小倉市誌補遺』P636			小笠原軍、岡村の2砲台にあって、高津尾砲台と相応じて防戦する。長州兵、岡村砲台を破る。
76	高津尾砲台（堂ヶ鼻砲台）	北九州市小倉南区高津尾	参考	慶応1年10月13日		豊国戦記　八　佐野経彦筆／『小倉市誌　補遺』P637			小倉藩の青柳彦十郎、高津尾に陣を据え、丸山・堂ヶ鼻・茅生の三か所に台場を築く。
			参考	慶応2年8月1日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P221～2			8月1日から10余日後、島村士大将（志津摩）、金辺峠の陣地を発し、高津尾に宿営する。東谷川の東方東丸山北西の山麓（深谷小太郎）、同川の西丸山北西の山麓（同）、高津尾字北の鼻（松本藤三郎）、同村字尾の上高地（松本熊太郎）、同村字堂ヶ鼻（青柳彦十郎）に台場を築き、各隊が守る。
			(1)	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八、丙寅之御変動御本陣御後備大砲打方並附属小銃隊戦争明細方／『福岡県企救郡誌』P102～3、228			小倉兵、高津尾の要害の要口の河流をはさんで、東の小丸、南の大丸の二山の半腹に砲台を設ける。大丸山の北の北高津尾北方の台上に砲台あり。吉兼・合馬・山本村の一部なる岡等の諸村に面する。その左右の山麓に山本村があり、その間にまた砲台を置く。
			参考	慶応2年10月7日		修訂防長回天史　五中九／『小倉市誌補遺』P636			小笠原軍、岡村の二砲台にあって、高津尾砲台と相応じて防戦する。長州兵、岡村砲台を破る。長州兵、高津尾・大丸・小丸諸砲台を環攻する。激戦の後、高津尾左右翼陥落する。
			参考			豊国戦記　第十七／『福岡県企救郡誌』P196			長州勢の攻撃により、島村志豆馬、引鐘を鳴らし、四方の味方の引き退くのを見届け、堂ヶ鼻の尾伝いに宮山の峯に登る。高津尾台場ははやくに灰燼に帰す。
77	大丸砲台	北九州市小倉南区高津尾か	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P102			小倉兵、高津尾の要害の要口の河流をはさんで、東の小丸、南の大丸の二山の半腹に砲台を設ける。
			参考	慶応2年10月7日		修訂防長回天史　五中九／『小倉市誌補遺』P636、『福岡県企救郡誌』P109			長州兵、高津尾・大丸・小丸諸砲台を環攻する。激戦の後、高津尾左右翼陥落する。
78	小丸砲台	北九州市小倉南区高津尾か	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P102			小倉兵、高津尾の要害の要口の河流をはさんで、東の小丸、南の大丸の二山の半腹に砲台を設ける。
			参考	慶応2年10月7日		修訂防長回天史　五中八／『小倉市誌補遺』P636、『福岡県企救郡誌』P109			長州兵、高津尾・大丸・小丸諸砲台を環攻する。激戦の後、高津尾左右翼陥落する。
79	茅生砲台	北九州市小倉南区高津尾か	参考	慶応1年10月13日		豊国戦記　八　佐野経彦筆／『小倉市誌　補遺』P637			小倉藩の青柳彦十郎、高津尾に陣を据え、丸山・堂ヶ鼻・茅生の3か所に台場を築く。
80	白旗嶺砲台	北九州市小倉南区高津尾か	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			小丸の東の高山である白旗嶺とその北麓妙真寺の上に小笠原軍の砲台あり。
			参考	慶応2年10月7日		修訂防長回天史　五中九／『福岡県企救郡誌』P109			小倉兵、妙見山の前面の白旗山上の砲台に拠り、拒戦する。

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
81	平尾台台場	北九州市小倉南区平尾台	参考	慶応2年10月7日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P225			渋田見、牧野両隊は、島村軍の退却を見て、平尾台に引き揚げ、同所字吹上ヶ横道の険阻を利用し、堅牢なる台場を築く。
82	龍ヶ鼻台場	北九州市小倉南区呼野（金辺峠）	参考	慶応2年8月1日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『小倉市誌　補遺』P618、『福岡県企救郡誌』P221			小倉藩の主将・島村志津摩、隊士総勢1000余人を率い、金辺峠を中心とし、東は龍ヶ鼻、西は茶臼山の山腹、白岳越に台場を築き、10余日間守るが、敵が寄せないので、各隊に進軍を指揮する。
			参考	慶応2年10月7日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P225			島村の諸隊は、全軍金辺の要害に備え、茶臼山の山腹、龍ヶ鼻の山麓に砲台を築く。両軍対峙中、10月11日、薩摩肥前両藩の仲裁により、停戦する
83	野添山鼻砲台	北九州市小倉南区呼野	参考	慶応2年8月15日		修訂防長回天史　五中八／『福岡県企救郡誌』P103			野添山鼻に砲台を置き、高津尾要口の左翼とする。
			参考	慶応2年10月7日		修訂防長回天史　五中九／『小倉市誌補遺』P636、『福岡県企救郡誌』P109			長州藩の八幡・堅田五番二小隊、野添山鼻の砲台を破り、吉兼砲台に逼る。
84	茶臼山台場	北九州市小倉南区呼野・田川郡香春町採銅所（金辺峠）	参考	慶応2年8月1日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『小倉市誌　補遺』P618、『福岡県企救郡誌』P221			小倉藩の主将・島村志津摩、隊士総勢1000余人を率い、金辺峠を中心とし、東は龍ヶ鼻、西は茶臼山の山腹、白岳越に台場を築き、10余日間守るが、敵が寄せないので、各隊に進軍を指揮する。
			参考	慶応2年10月7日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『福岡県企救郡誌』P225			島村の諸隊は、全軍金辺の要害に備え、茶臼山の山腹、龍ヶ鼻の山麓に砲台を築く。両軍対峙中、10月11日、薩摩肥前両藩の仲裁により、停戦する
85	白岳越台場	北九州市小倉南区呼野・田川郡香春町採銅所（金辺峠）	参考	慶応2年8月1日		小倉藩政時代記　内山圓治記録／『小倉市誌　補遺』P618、『福岡県企救郡誌』P221			小倉藩の主将・島村志津摩、隊士総勢1000余人を率い、金辺峠を中心とし、東は龍ヶ鼻、西は茶臼山の山腹、白岳越に台場を築き、10余日間守るが、敵が寄せないので、各隊に進軍を指揮する。
86	簑島台場	行橋市簑島	参考	慶応2年		沓尾ノ図　小笠原文庫／『豊津町史史料編　豊津藩　歴史と風土第7輯』P3			絵図に台場の記載がある。
87	沓尾台場	行橋市沓尾	参考	慶応2年		沓尾ノ図　小笠原文庫／『豊津町史史料編　豊津藩　歴史と風土第7輯』P3			絵図に台場の記載がある。
88	宇島台場	豊前市宇島	参考	慶応2年9月16日		豊国戦記　第十四／『福岡県企救郡誌』P154			長州藩の洋式軍船2艘、宇島の台場下に寄せ来り、巡航する。翌17日、波止場近く船を寄せ、小艇を下して長州勢、上陸する。台場より射撃し、軍船を撃退する。
			参考	慶応2年		宇ノ島ノ図　小笠原文庫／『豊津町史史料編　豊津藩　歴史と風土第7輯』P3			絵図に台場の記載がある。

【中津藩】

〈遠見番所〉

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
1	高浜遠見番所	築上郡上毛町小祝・大分県中津市小祝新町	参考	寛永15年	小倉役人木内所左衛門・有山四郎兵衛宛	高浜論所一件／『福岡県築上郡吉富町誌』P64			小笠原長次が島原の乱に出陣した際、寛永15年に京泊に小屋をかけ、苫で屋根を葺き、子祝浦の者が昼夜3人が留守中に番をする。長次が帰陣した後、番所を造り、佐々木金左衛門が初めて召し置かれた。黒田孝高と細川忠興の時代には番所がなかった。忠興の時に遠見番のために船を出すことを命じられ、御扶持人衆が船に乗って行き、京泊で遠見番をした。
2	配崎山遠見番所	糸島市二丈福井	参考	寛政5年		松尾文書・川上文書大入村遠見番覚書／『二丈町民俗文化財調査報告書第4集』P49			異国船監視のため、大入配崎山に遠見番所を置く。小松崎郷方より輪番で遠見役を派遣する。後に地元出身の鏡庄次郎を登用する。文政11年に廃止されるが、天保14年に再び開かれる。

〈烽火台〉

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
1	雄熊山烽火台	築上郡上毛町吉岡	参考	文化6年1月20日		『豊津町史史料編　豊津藩　歴史と風土第10輯』P7			烽火台の試し焚きを行う。

【久留米藩】

〈遠見番所〉

No.	名称		枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
1	恵利村遠見番所	久留米市田主丸町恵利三角	参考	天和年間	有馬中務大輔領分覚書	『久留米市史 第２巻』P885			「唐船遠見番所」と記す。
			参考	宝永1年	永禄以来年代記	三浦家文書／『福岡県の地名』P845			恵利村番所が設置される。
			参考	寛政1年８月	筑後久留米領御尋答書	『福岡県史資料9』P600、『大川市誌』P325			番所は筑後川通船と遠見を兼ねる。筑前国境に位置し、士ならびに足軽5人を当てる。
2	小森野村遠見番所	久留米市小森野	(1)	寛文7年10月	古代日記書抜	『福岡県史 近世史料編 久留米藩初期（下）』P74			「小森野津留番所家」が出来上がる。
			参考	寛文8年	啓忘録抜萃	『久留米市史 第８巻』P911			「小森野村遠見番所」が置かれる。
			参考	天和年間	有馬中務大輔領分覚書	『久留米市史 第２巻』P885			「唐船遠見番所」と記す。
			参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	天明6年頃		『米府紀事略』5／『久留米市史 第9巻資料編 近世Ⅱ』P166			「唐舟遠見番」として「小森野」が挙げられ、番人は２人とみえる。
			参考	寛政1年８月	筑後久留米領御尋答書	『福岡県史資料9』P600、『大川市誌』P325			番所は筑後川通船と遠見を兼ねる。肥前国田代領境に位置し、士ならびに足軽五人を当てる。
3	瀬ノ下（瀬下）遠見番所	久留米市瀬下町	参考	寛文9～貞享1年	久留米藩領古図	『福岡県史資料3』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	寛文年間	分限帳	『米府紀事略』3／『久留米市史 第9巻資料編 近世Ⅱ』P177			久留米藩士早崎角右衛門、「瀬下御番」とみえる。
			参考	天和年間	有馬中務大輔領分覚書	『久留米市史 第２巻』P885			「唐船遠見番所」と記す。
			参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	天明6年頃		『米府紀事略』5／『久留米市史 第9巻資料編 近世Ⅱ』P166			「唐舟遠見番」として「瀬ノ下」が挙げられ、番人は２人とみえる。
			参考	寛政1年８月	筑後久留米領御尋答書	『福岡県史資料9』P600、『大川市誌』P325			番所は筑後川通船と遠見を兼ねる。肥前国境に位置し、士ならびに足軽5人を当てる。

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
4	住吉村遠見番所	久留米市安武町住吉	参考	寛文9～貞享1年	久留米藩領古図	『福岡県史資料3』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	寛文年間	分限帳	『米府紀事略』3／『久留米市史 第9巻資料編 近世Ⅱ』P186			久留米藩士衣笠九五郎、「住吉御番」とみえる。
			参考	天和年間	有馬中務大輔領分覚書	『久留米市史 第２巻』P885			「唐船遠見番所」と記す。
			参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	天明6年頃		『米府紀事略』5／『久留米市史 第9巻資料編 近世Ⅱ』P166			「唐舟遠見番」として「住吉」が挙げられ、番人は２人とみえる。
			参考	寛政1年８月	筑後久留米領御尋答書	『福岡県史資料9』P600、『大川市誌』P325			番所は筑後川通船と遠見を兼ねる。肥前国境に位置し、士ならびに足軽5人を当てる。
5	城島村遠見番所	久留米市城島町城島字内茂手	参考	寛文３年	分限帳	『大川市誌』P328			五代藩主有馬頼旨、久留米藩士山口新左衛門に支配させる。城島下番所に先鋒を居住させる。
			参考	寛文9～貞享1年	久留米藩領古図	『福岡県史資料3』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	天和年間	有馬中務大輔領分覚書	『久留米市史 第２巻』P885			「唐船遠見番所」と記す。
			参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	天明6年頃		『米府紀事略』5／『久留米市史 第9巻資料編 近世Ⅱ』P166			「唐舟遠見番」として「城島」が挙げられ、番人は２人とみえる。
6	鐘ヶ江村遠見番所	大川市鐘ヶ江	参考	寛文3年	分限帳	『大川市誌』P328			五代藩主有馬頼旨、久留米藩士山口新左衛門に支配させる。鐘ヶ江下番所に先鋒を居住させる。
			参考	寛文9～貞享1年	久留米藩領古図	『福岡県史資料3』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	天和年間	有馬中務大輔領分覚書	『久留米市史 第２巻』P885			「唐船遠見番所」と記す。
			参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	天明6年頃		『米府紀事略』5／『久留米市史 第9巻資料編 近世Ⅱ』P166			「唐舟遠見番」として「鐘ヶ江」が挙げられ、番人は２人とみえる。
7	向島村遠見番所	大川市向島	参考	寛文3年	分限帳	『大川市誌』P328			五代藩主有馬頼旨、久留米藩士山口新左衛門に支配させる。向島下番所に先鋒を居住させる。
			参考	寛文9～貞享1年	久留米藩領古図	『福岡県史資料3』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	天明6年頃		『米府紀事略』5／『久留米市史 第9巻資料編 近世Ⅱ』P166			「唐舟遠見番」として「向島」が挙げられ、番人は２人とみえる。
			参考	文政2年	筑後川古図	久留米市所蔵文書／『福岡県の地名』P1011			筑後川に沿って浦町・本町が並列し、東部と西部の２か所に番所が置かれた。
8	榎津（町）遠見番所	大川市榎津	参考	寛文3年	分限帳	『大川市誌』P328			五代藩主有馬頼旨、久留米藩士山口新左衛門を居住させ、向島・鐘ヶ江・城島遠見番所を支配させる。先鋒隊将と平士を居住させる。
			参考	寛文6年	分限帳	鶴久二郎文書／『福岡県の地名』P1009			久留米藩士山口新左衛門、番所役人に任じられており、向島・鐘ヶ江・城島の各定番を管轄する。
			参考	寛文年間	分限帳	『米府紀事略』3／『久留米市史 第9巻資料編 近世Ⅱ』P166			久留米藩士山口新左衛門、「榎津御番」とみえる。
			参考	寛文9～貞享1年	久留米藩領古図	『福岡県史資料3』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	天和年間	有馬中務大輔領分覚書	『久留米市史 第２巻』P885			「唐船遠見番所」と記す。
			参考	元禄7年3月1日	続古代日記書抜（仮題）	『福岡県史 近世史料編 久留米藩初期（下）』P332			四人衆（山田・安西・小川・伊吹）により川筋の見分として「榎津沖御番所」の見分が行われる。
			参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	天明6年頃		『米府紀事略』5／『久留米市史 第9巻資料編 近世Ⅱ』P166			「唐船遠見番」として「榎津」が挙げられ、番人は２人とみえる。
			参考	寛政1年8月	筑後久留米領御尋答書	『福岡県史資料9』P600、『大川市誌』P325			番所は筑後川通船と遠見を兼ねる。肥前国ならびに柳川領境に位置し、物頭組足軽十人を当てる。出番所として沖之番所と浜番所があり、本番所から足軽を差し出している。

〈台場〉

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
1	大里砲台	北九州市門司区大里	参考	寛永20年		防長回天史／『門司市史』P197			新たに久留米藩、砲台を借地の大里に築造する。
			参考	文久2年5月24日		小倉藩攘夷記／『行橋市史 中巻』P624			異国船を見るに従って、号砲を逓次に3回打発することが通知されていた。
			(1)	文久3年7月18日		白石正一郎日記・豊田氏日記／『門司市史』P207、企救郡小森承之助日記／『福岡県史資料 第７輯』P524			勅使正親町公董卿、16日に田ノ浦台場、18日に引島弟子松台場・大里久留米屋敷ノ台場を巡視する。
			(2)	元治1年5月15日～18日		文久四年甲子歳日記新町村豊田重蔵控／『門司市史』P212～3			大里の久留米屋敷、交代台場詰が国許に引き取り、小倉藩に引き渡される。

【柳川藩】

〈遠見番所〉

No.	名称		枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
1	小保（町）遠見番所	大川市小保	参考	元禄5年4月	御領中諸事覚書	『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P298			「小保番所」、十五日潮には三百石船まで出入りできる。
			参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	寛保年間	柳河藩領地図	『柳川市史 地図編』別刷42			「小保町番所」の記述あり。
			参考	寛政1年8月	小保番所絵図	伝習館文庫／『地図のなかの柳川－柳川市史 地図編－』P6			番所の建物が描かれている。
			参考		集書	渡辺家史料／『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P311			「遠見番所」として「小保」の名がみえる。
2	三潴新田遠見番所（一木新田番所）	大川市新田	参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	寛保年間	柳河藩領地図	『柳川市史 地図編』別刷42			「一木新田番所」の記述あり。
			参考	寛政1年8月	三潴新田番所絵図	伝習館文庫／『地図のなかの柳川－柳川市史 地図編－』P6			番所の建物が描かれている。
			参考		集書	渡辺家史料／『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P311			「遠見番所」として「新田」の名がみえる。※宮永新田番所の可能性もあり。
			参考		柳河藩政誌略	『福岡県史資料8』P510			「津口番所」として「三潴新田」とみえ、外国船打払いのために百目の銃を置くべきことと、飾槍・鉄砲・玉薬・火縄等を備置していたとある。

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
3	間村遠見番所	柳川市間	参考	元禄5年4月	御領中諸事覚書	『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P298			「間村番所入江」、十五日潮には二十石船まで出入りできる。
			参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
4	沖端宇治遠見番所（沖端番所・宇治番所）	柳川市矢留本町	参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	文政9年10月以降	柳河明証図会	『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P292			「宇治番所　遠見番所にして船の出入をあらたむ」とあり。宇治番所の図あり。
			参考	寛政1年8月	沖端宇治番所絵図	伝習館文庫／『地図のなかの柳川－柳川市史　地図編－』P6			番所の建物が描かれている。
			参考		集書	渡辺家史料／『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P311			「遠見番所」として「沖端」の名がみえる。
			参考		柳河藩政誌略	『福岡県史資料8』P510			「津口番所」として「沖端」とみえ、外国船打払いのために百目の銃を置くべきことと、飾槍・鉄砲・玉薬・火縄等を備置していたとある。
5	宮永新田番所（新田番所）	柳川市佃町	参考	文政9年10月以降	柳河明証図会	『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P286・288			「新田番所　船渡しなり、南野に渡る」とあり。新田番所の図があって、この船わたしは二十年前新たに番所を設えたと記す。
			参考	寛政3年2月	新田御番所絵図	伝習館文庫／『地図のなかの柳川－柳川市史　地図編－』P6			番所の建物が描かれている。
			参考		集書	渡辺家史料／『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P311			「遠見番所」として「新田」の名がみえる。※三潴（一木）新田番所の可能性もあり。
			参考		柳河藩政誌略	『福岡県史資料8』P510			「津口番所」として「宮永新田」とみえ、外国船打払いのために百目の銃を置くべきことと、飾槍・鉄砲・玉薬・火縄等を備置していたとある。
6	塩塚遠見番所	柳川市大和町塩塚	参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	寛政1年8月	塩塚番所絵図	伝習館文庫／『地図のなかの柳川－柳川市史　地図編－』P6			番所の建物が描かれている。
			参考		集書	渡辺家史料／『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P311			「遠見番所」として「塩塚」の名がみえる。
7	中島（中嶋）遠見番所（中島徳永番所）	みやま市高田町徳島	参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	寛政3年2月	中嶋御番所絵図	伝習館文庫／『地図のなかの柳川－柳川市史　地図編－』P6			番所の建物が描かれている。
			参考		集書	渡辺家史料／『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P311			「遠見番所」として「中島」の名がみえる。
			参考		柳河藩政誌略	『福岡県史資料8』P510			「津口番所」として「中島徳永」とみえ、外国船打払いのために百目の銃を置くべきことと、飾槍・鉄砲・玉薬・火縄等を備置していたとある。
参考	江ノ浦（江浦）村番所		参考	元禄5年4月	御領中諸事覚書	『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P298			「江ノ浦津口番所」、十五日潮には三百石船まで、小潮には百石まで出入りできる。
			参考	寛保年間	柳河藩領地図	『柳川市史 地図編』別刷42			「江浦村番所」の記述あり。
8	黒崎（村）番所	大牟田市岬	参考	元禄5年4月	御領中諸事覚書	『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P298			「黒崎村番所」、左右遠干潟にて船懸りなし。
			参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	寛保年間	柳河藩領地図	『柳川市史 地図編』別刷42			「黒崎番所」の記述あり。
			参考		集書	渡辺家史料／『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P311			「遠見番所」として「黒崎」の名がみえる。
			参考		柳河藩政誌略	『福岡県史資料8』P510			「津口番所」として「黒崎」とみえ、外国船打払いのために百目の銃をおくべきことと、飾槍・鉄砲・玉薬・火縄等を備置していたとある。
9	手鎌（村）番所	大牟田市手鎌	参考	元禄5年4月	御領中諸事覚書	『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P298			「手鎌村番所」、十五日潮には三十石船まで出入りでき、小潮には出入りなし。
			参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	寛保年間	柳河藩領地図	『柳川市史 地図編』別刷42			「手鎌村番所」の記述あり。
			参考		集書	渡辺家史料／『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P311			「遠見番所」として「手鎌」の名がみえる。
			参考		柳河藩政誌略	『福岡県史資料8』P510			「津口番所」として「手鎌」とみえ、外国船打払いのために百目の銃を置くべきことと、飾槍・鉄砲・玉薬・火縄等を備置していたとある。
10	横洲（村）番所（横須番所）	大牟田市恵比須町	参考	元禄5年4月	御領中諸事覚書	『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P298			「横洲村番所」、十五日潮には三十石船まで出入りでき、小潮には出入りなし。
			参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。
			参考	寛保年間	柳河藩領地図	『柳川市史 地図編』別刷42			「横洲番所」の記述あり。
			参考	天明7年12月23日	御條目	『柳川市史 史料編Ⅳ 柳河藩法制』P338			「横須御番所」、多年中絶していたが、再置するので後藤権兵衛、相勤めるように命じる。
			参考		集書	渡辺家史料／『柳川市史 史料編Ⅰ地誌』P311			「遠見番所」として「横洲」の名がみえる。
			参考		柳河藩政誌略	『福岡県史資料8』P510			「津口番所」として「横洲」とみえ、外国船打払いのために百目の銃を置くべきことと、飾槍・鉄砲・玉薬・火縄等を備置していたとある。
11	（下二部村）遠見番所	大牟田市天領町・白金町・山下町	参考	元禄14年3月	筑後図	『福岡県史資料7』付図			「遠見番所」の記述あり。

〈烽火台〉

No.	名称	所在地	枝番	年月日	表題	史料群名・採録・出典	差出	宛先	内容
1	甲塚山烽火台	みやま市山川町甲田字佐野	（1）	文化6年1月20日		郡役所日記の内抜書頭附／『大和町史通史編　上巻』P577			烽火台の試し焚きを行う。

索　引

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
あ						
アイノツル城	あいのつるじょう	上妻郡	八女市矢部村北矢部	133	20	124
赤司城	あかじじょう	御井郡	久留米市北野町赤司	K2	26	164
明星岳城	あかぼしだけじょう	御井郡	久留米市高良内町	20	12	－
足利尊氏陣	あしかがたかうじじん	下妻郡	筑後市鶴田	D14	28	－
阿地坂城	あじさかじょう	→西鯵坂城（にしあじさかじょう）				
甘木河内守城	あまぎかわちのかみじょう	→鬼ノ口城（おにのくちじょう）				
甘木河内守館	あまぎかわちのかみやかた	→馬場館（ばばやかた）				
甘木城	あまぎじょう	→鬼ノ口城（おにのくちじょう）				
甘木城	あまぎじょう	三池郡	大牟田市甘木	228	26	－
尼ノ長者居館	あまのちょうじゃきょかん	→煎熊館（いりくまやかた）				
荒木近藤氏館	あらきこんどうしやかた	→荒木館（あらきやかた）				
荒木館	あらきやかた	三潴郡	久留米市荒木町荒木	29	14	－
飯田館	いいだやかた	山本郡	久留米市善導寺町飯田	64	16	84
生駒野城	いごまのじょう	上妻郡	八女市上陽町下横山	146	20	131
石井要害	いしいようがい	生葉郡か	うきは市か	F3	30	－
石垣城	いしかきじょう	→山ノ中城（やまのなかじょう）				
石橋氏屋敷	いしばししやしき	三潴郡	久留米市三潴町草場	D5	28	－
一條館	いちじょうやかた	上妻郡	八女郡広川町一條・筑後市一条	184	24	－
一之瀬館	いちのせやかた	生葉郡	うきは市浮羽町朝田	112	18	－
稲員城	いなかずじょう	→稲員館（いなかずやかた）				
稲員館	いなかずやかた	御井郡	久留米市北野町稲数	12	12	－
稲吉元矢次遺跡	いなよしもとやつぎいせき	御原郡	小郡市稲吉	R4	28	185
犬尾城	いぬおじょう	上妻郡	八女市山内	164	22	140
犬塚城	いぬづかじょう	三潴郡	久留米市三潴町玉満	37	14	80
井上城	いのうえじょう	生葉郡	うきは市浮羽町流川	107	18	113
井ノ上西城	いのうえにしじょう	→西ノ城（にしのしろ（うきは市浮羽町流川））				
井上館	いのうえやかた	生葉郡	うきは市浮羽町清瀬	110	18	115
今古賀城	いまこがじょう	山門郡	柳川市三橋町今古賀	215	26	－
今福城	いまぶくじょう	三池郡	みやま市高田町今福	220	26	158
今山城	いまやまじょう	→三池山城（みいけやまじょう）				
今山城	いまやまじょう	三池郡	みやま市高田町	－	30	－
今山陣屋	いまやまじんや	→三池陣屋（みいけじんや）				
今山嶽城	いまやまだけじょう	→三池山城（みいけやまじょう）				
妹川城	いもかわじょう	→平家城（へいけじょう（うきは市浮羽町妹川））				
妹川平家城	いもかわへいけじょう	→平家城（へいけじょう（うきは市浮羽町妹川））				
妹川万貫寺城	いもかわまんがんじじょう	→満願寺城（まんがんじじょう）				
煎熊館	いりくまやかた	生葉郡	うきは市浮羽町三春・山北	116	20	－
入隈館	いりくまやかた	→煎熊館（いりくまやかた）				
磐井城	いわいじょう	御井郡	久留米市御井町・山川町	22	12	－
岩井城	いわいじょう	→磐井城（いわいじょう）				
兎城	うさぎじょう	上妻郡	八女市黒木町土窪	145	20	131
内城城	うちじょうじょう	生葉郡	八女市星野村	130	20	－
内野城	うちのじょう	三潴郡	久留米市大善寺町	－	30	－
内山城	うちやまじょう	竹野郡	久留米市田主丸町益生田	83	18	94
内山城	うちやまじょう	→内山館（うちやまやかた）				
内山城	うちやまじょう	三池郡	大牟田市吉野	223	26	159
内山館	うちやまやかた	竹野郡	久留米市田主丸町益生田	82	18	93
姥ヶ城	うばがじょう	竹野郡	久留米市田主丸町地徳	80	16	－
浦館	うらやかた	生葉郡	八女市星野村	129	20	－
江上城	えがみじょう	→西江上城（にしえがみじょう（久留米市城島町江上本））				
		→東江上城（ひがしえがみじょう（久留米市城島町江上））				
江後前川内城	えごまえかわちじょう	→前川内城（まえかわちじょう）				
江崎城	えざきじょう	山門郡	柳川市三橋町垂見	216	26	－
江島城	えじまじょう	三潴郡	久留米市江島	－	30	－

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
江浦城	えのうらじょう	三池郡	みやま市高田町江浦	K11	28	180
榎津城	えのきづじょう	三潴郡	大川市榎津	K5	26	169
江村之城	えむらのしろ	→江浦城（えのうらじょう）				
恵利砦	えりとりで	竹野郡	久留米市田主丸町恵利	72	16	－
延寿寺城	えんじゅじじょう	→福丸城（ふくまるじょう）				
延寿寺館	えんじゅじやかた	→福丸館（ふくまるやかた）				
大石城	おおいしじょう	生葉郡	うきは市浮羽町高見	113	18	－
大石館	おおいしやかた	三潴郡	久留米市大石町	27	14	－
大板井城	おおいたいじょう	御原郡	小郡市大板井	4	12	－
大岩空堀城	おおいわからぼりじょう	→地下名城（じげなじょう）				
大奥城	おおおくじょう	三池郡	大牟田市宮崎	224	26	－
大木城	おおきじょう	山門郡	みやま市瀬高町大廣園	202	24	－
大隈城	おおくまじょう	三潴郡	久留米市梅満町	30	14	－
大渕城	おおぶちじょう	→熊野堂城（くまのどうじょう）				
大保横枕遺跡	おおほよこまくらいせき	御原郡	小郡市大保	R3	28	185
大村居館	おおむらきょかん	→井上館（いのうえやかた）				
大藪居館	おおやぶきょかん	→大藪砦（おおやぶとりで）				
大藪砦	おおやぶとりで	三潴郡	三潴郡大木町大藪	54	16	－
小川館	おがわやかた	竹野郡	久留米市田主丸町船越	76	16	－
小郡館	おごおりやかた	→向築地長者館（むかいついじちょうじゃやかた）				
小田城	おだじょう	下妻郡	みやま市瀬高町小田	198	24	146
乙隈城	おとぐまじょう	御原郡	小郡市乙隈	1	12	－
乙隈館	おとぐまやかた	→乙隈城（おとぐまじょう）				
荊津館	おどろつやかた	三潴郡	久留米市宮ノ陣町荊津	32	14	－
鬼城	おにじょう	→兎城（うさぎじょう）				
鬼ノ口城	おにのくちじょう	上妻郡	八女市広川町水原	174	22	142

か

海津城	かいづじょう	三潴郡	久留米市安武町大島	31	14	78
掻上城	かきあげじょう	→山崎城（やまざきじょう）				
兼松城	かねまつじょう	上妻郡	八女市立花町兼松	159	22	137
蒲池城	かまちじょう	三潴郡	柳川市東蒲池	61	16	－
鎌池城	かまちじょう	→蒲池城（かまちじょう）				
蒲原城	かまはらじょう	上妻郡	八女市蒲原	172	22	－
蒲船津城	かまふなつじょう	山門郡	柳川市三橋町蒲船津	214	26	155
上内高頭遺跡	かみうちたかがしらいせき	三池郡	大牟田市上内	R23	30	196
上笹尾岳城	かみささおだけじょう	竹野郡	久留米市田主丸町竹野	－	30	－
上白川遺跡	かみしらかわいせき	三池郡	大牟田市上白川町２丁目	R25	30	198
上高橋城	かみたかはしじょう	御原郡	三井郡大刀洗町上高橋	7	12	－
上ノ城	かみのしろ	→発心城（ほっしんじょう）				
上久末城	かみひさすえじょう	→久末城（ひさすえじょう）				
萱津城	かやつじょう	山門郡	みやま市山川町竹飯	205	24	－
烏山城	からすやまじょう	→東山城（ひがしやまじょう（うきは市））				
川崎式部館	かわさきしきぶやかた	上妻郡	八女郡広川町新代	180	24	－
川崎氏館	かわさきしやかた	上妻郡	八女市豊福	169	22	－
川崎城	かわさきじょう	→犬尾城（いぬおじょう）				
川崎屋敷	かわさきやしき	→川崎氏館（かわさきしやかた）				
川瀬城	かわせじょう	上妻郡	八女郡広川町広川	181	24	－
川瀬館	かわせやかた	上妻郡	八女郡広川町新代	182	24	－
観音寺山城	かんのんじやまじょう	竹野郡	久留米市田主丸町石垣	－	30	－
冠城	かんむりじょう	→平家城（へいけじょう（うきは市吉井町鷹取（No.93）））				
冠平家城	かんむりへいけじょう	→平家城（へいけじょう（うきは市吉井町鷹取（No.93）））				
岸山城	きしやまじょう	生葉郡	うきは市浮羽町山北	117	20	－
北関城	きたのせきじょう	山門郡	みやま市山川町北関	209	26	－
北ノ屋敷遺跡	きたのやしきいせき	三潴郡	久留米市城島町江上本	R15	30	192
木室城	きむろじょう	三潴郡	大川市本木室	57	16	－
清水城	きよみずじょう	生葉郡	うきは市吉井町富永	96	18	－
久恵館	くえやかた	下妻郡	筑後市久恵	187	24	－
草野別館	くさのべっかん	三潴郡	三潴郡大木町福土か	52	14	－

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
草野館	くさのやかた	→吉野尾館（よしのおやかた）				
草場城	くさばじょう	→草場館（くさばやかた）				
草場館	くさばやかた	御井郡	久留米市宮ノ陣町大杜	24	12	－
国武館	くにたけやかた	上妻郡	八女市国武	171	22	－
国見城	くにみじょう	→国見岳城（くにみだけじょう）				
国見岳城	くにみだけじょう	上妻郡	八女市立花町北山	156	22	135
久保城	くぼじょう	→大石城（おおいしじょう）				
久保山城	くぼやまじょう	上妻郡	八女市立花町か	154	22	－
神代館	くましろやかた	御井郡	久留米市山川町神代	13	12	70
隈城	くまじょう	三潴郡	久留米市大善寺町夜明	33	14	－
隈城	くまじょう	竹野郡	久留米市田主丸町竹野	－	30	－
隈ノ上城	くまのうえじょう	生葉郡	うきは市浮羽町朝田	111	18	116
熊ノ川城	くまのかわじょう	上妻郡	八女市立花町上辺春	148	20	132
熊河城	くまのかわじょう	→熊ノ川城（くまのかわじょう）				
熊野堂城	くまのどうじょう	上妻郡	八女市黒木町大淵	141	20	128
熊野屋敷遺跡	くまのやしきいせき	上妻郡	筑後市熊野	R18	30	194
鞍掛城	くらかけじょう	上妻郡	八女市立花町北山	157	22	－
栗原城	くりはらじょう	上妻郡	八女市矢部村矢部	135	20	－
久留米城	くるめじょう	御井郡	久留米市篠山町	K3	26	165
久留目城	くるめじょう	→久留米城（くるめじょう）				
来目城	くるめじょう	→久留米城（くるめじょう）				
黒木城	くろぎじょう	→猫尾城（ねこおじょう）				
下林城	げばやしじょう	三潴郡	大川市下林	56	16	－
甲条城	こうちょうじょう	御原郡	三井郡大刀洗町甲条	5	12	－
高野城	こうのじょう	竹野郡	久留米市田主丸町益生田	84	18	95
河野城	こうのじょう	→高野城（こうのじょう）				
古賀城	こがじょう	御井郡	久留米市宮ノ陣町八丁島	11	12	－
古賀城	こがじょう	→古賀館（こがやかた（八女郡広川町新代））				
古賀館	こがやかた	上妻郡	八女郡広川町新代	179	24	－
古賀館	こがやかた	→五郎丸城（ごろうまるじょう（久留米市北野町五郎丸））				
古賀前遺跡	こがんまえいせき	御井郡	久留米市本山１丁目	R11	30	190
小坂館	こさかやかた	生葉郡	うきは市浮羽町流川	109	18	－
小椎尾氏別館	こじおしべっかん	生葉郡	うきは市浮羽町小塩	121	20	－
小椎尾氏館	こじおしやかた	生葉郡	うきは市浮羽町小塩	120	20	－
越生氏館	こじおしやかた	→小椎尾氏館（こじおしやかた）				
小塩城	こじおじょう	生葉郡	うきは市浮羽町小塩	118	20	－
小城	こじょう	→谷山城（たにやまじょう（うきは市吉井町福益））				
古城	こじょう	→谷山城（たにやまじょう（うきは市吉井町福益））				
紅桃林城	ことばやしじょう	竹野郡	久留米市草野町紅桃林	F2	30	－
虎伏木城	こぶしきじょう	上妻郡	八女市矢部村北矢部	136	20	－
古寶殿城	こほうでんじょう	御井郡	久留米市山川町	17	12	－
小丸城	こまるじょう	竹野郡	久留米市田主丸町益生田	86	18	97
五郎丸城	ごろうまるじょう	御井郡	久留米市宮ノ陣町五郎丸	25	12	－
五郎丸城	ごろうまるじょう	御井郡	久留米市北野町五郎丸	－	30	－
権現岳城	ごんげんだけじょう	竹野郡	久留米市田主丸町石垣	－	30	－
権現岳城	ごんげんだけじょう	上妻郡か	八女市か	F6	30	－

さ

齋藤館	さいとうやかた	上妻郡	八女郡広川町一條	185	24	－
坂井城	さかいじょう	→大板井城（おおいたいじょう）				
酒井田城	さかいだじょう	→酒井田館（さかいだやかた）				
酒井田館	さかいだやかた	上妻郡	八女市酒井田	162	22	－
酒見城	さけみじょう	三潴郡	大川市酒見	58	16	82
笹尾岳城	ささおだけじょう	→下笹尾岳城（しもささおだけじょう）				
		→中笹尾岳城（なかささおだけじょう）				
		→上笹尾岳城（かみささおだけじょう）				
笹隈城	ささくまじょう	→小塩城（こじおじょう）				
笹城	ささじょう	→山下城（やましたじょう）				
笹ノ城	ささのじょう	→鷹尾城（たかおじょう（八女市山内・大籠））				

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
篠原城	ささはらじょう	→久留米城（くるめじょう）				
笹原城	ささはらじょう	→久留米城（くるめじょう）				
笹渕館	ささぶちやかた	三潴郡	三潴郡大木町笹渕	D7	28	－
篠山城	ささやまじょう	→久留米城（くるめじょう）				
三ノ瀬城	さのせじょう	上妻郡	八女市立花町下辺春	160	22	138
佐留垣城	さるがきじょう	山門郡	柳川市大和町栄	219	26	－
算城	さんじょう	→東光寺城（とうこうじじょう）				
塩塚城	しおつかじょう	山門郡	柳川市大和町塩塚	218	26	156
重虎城	しげとらじょう	生葉郡	うきは市浮羽町妹川	101	18	－
地下名城	じげなじょう	上妻郡	八女市黒木町笠原	139	20	126
下見遺跡	したみいせき	御井郡	久留米市東合川町５丁目	R6	28	186
下青木城	しもあおきじょう	三潴郡	久留米市城島町下青木	42	14	－
下内城	しもうちじょう	三池郡	大牟田市岩本	226	26	－
下笹尾岳城	しもささおだけじょう	竹野郡	久留米市田主丸町竹野	79	16	－
下高橋城	しもたかはし	御原郡	三井郡大刀洗町下高橋	6	12	－
下田城	しもだじょう	三潴郡	久留米市城島町下田	39	14	－
下田館	しもだやかた	三潴郡	久留米市城島町下田	38	14	－
下妻城	しもつまじょう	→下妻村營（しもつまむらえい）				
下妻村營	しもつまむらえい	下妻郡	筑後市下妻	D16	28	－
下ノ城	しものしろ	→発心城（ほっしんじょう）				
下牟田館	しもむたやかた	上妻郡	筑後市井田	191	24	144
十籠館	じゅうごもりやかた	生葉郡	八女市星野村	127	20	－
城崎遺跡	じょうざきいせき	三潴郡	久留米市安武町安武本	R13	30	191
城氏城	じょうしじょう	竹野郡	久留米市田主丸町石垣	90	18	－
城島城	じょうじまじょう	三潴郡	久留米市城島町城島	K4	26	168
城島館	じょうじまやかた	→城島城（じょうじまじょう）				
城ノ内城	じょうのうちじょう	三潴郡	三潴郡大木町横溝	55	16	－
城ノ尾城	じょうのおじょう	上妻郡	八女郡広川町長延	176	22	－
城平山城	じょうでらやまじょう	上妻郡	八女市立花町白木	152	22	－
城前遺跡	じょうまえいせき	三池郡	みやま市高田町上楠田	R22	30	196
松門寺城	しょうもんじじょう	→平家城（へいけじょう（久留米市田主丸町常盤（No.75）））				
松門寺館	しょうもんじやかた	→平家城（へいけじょう（久留米市田主丸町常盤（No.75）））				
白石城	しらいしじょう	生葉郡	八女市星野村	126	20	123
白川遺跡	しらかわいせき	三池郡	大牟田市上白川町２丁目	R24	30	197
白木城	しらきじょう	上妻郡	八女市立花町白木	150	22	－
白口中村館	しらぐちなかむらやかた	三潴郡	久留米市荒木町白口	28	14	－
白口館	しらぐちやかた	→白口中村館（しらぐちなかむらやかた）				
白鳥城	しらとりじょう	山門郡	柳川市三橋町白鳥	211	26	152
白牧大岩屋名城	しらまきおおいわやなじょう	上妻郡	八女市黒木町笠原	138	20	－
城跡山城	しろあとやまじょう	上妻郡	八女市長野か	167	22	－
神道遺跡	じんどういせき	御井郡	久留米市御井旗崎１丁目	R9	30	189
陣内遺跡	じんないいせき	三池郡	みやま市高田町上楠田	R21	30	195
陣屋敷	じんやしき	三池郡	大牟田市田隈	D17	28	－
陣屋陣	じんやじん	御井郡	久留米市北野町陣屋	D2	28	－
杉ノ城	すぎのじょう	御井郡	久留米市御井町	16	12	74
菅館	すげやかた	竹野郡	うきは市吉井町鷹取	91	18	102
住厭城	すみあきじょう	→杉ノ城（すぎのじょう）				
諏訪平家城	すわへいけじょう	→平家城（へいけじょう（久留米市田主丸町殖木（No.78）））				
諏訪館	すわやかた	竹野郡	久留米市田主丸町殖木	77	16	－
瀬高城	せたかじょう	山門郡	みやま市瀬高町上庄	200	24	－
禅院城	ぜんいんじょう	下妻郡	みやま市瀬高町小田・廣瀬	197	24	145
仙頭屋敷	せんどうやしき	上妻郡	八女市立花町白木か	153	22	－

た

大聖寺山城	だいしょうじやまじょう	→安山城（やすやまじょう）				
大将陣砦	たいしょうじんとりで	三池郡	大牟田市天道町			
大間城	だいまじょう	三池郡	大牟田市三池	229	26	160
大間館	だいまやかた	→大間城（だいまじょう）				

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
高井岳城	たかいだけじょう	生葉郡 / 豊後国 うきは市浮羽町小塩・大分県日田市川下		119	20	118
高岩城	たかいわじょう	生葉郡	八女市星野村	125	20	122
鷹尾城	たかおじょう	上妻郡	八女市山内・大籠	165	22	141
鷹尾城	たかおじょう	山門郡	柳川市大和町鷹ノ尾	K8	28	174
高尾城	たかおじょう	→鷹尾城（たかおじょう（柳川市））				
高島城	たかしまじょう	生葉郡	八女市星野村	132	20	—
高城	たかじょう	→鷲岳城（わしがたけじょう）				
高朶城	たかすだじょう	上妻郡	八女市立花町下辺春	149	22	133
高須田城	たかすだじょう	→高朶城（たかすだじょう）				
高朶谷施城	たかすだだになもみじょう	→高朶城（たかすだじょう）				
高瀬城	たかせじょう	御井郡	久留米市御井町	19	12	—
鷹取城	たかとりじょう	→鷹取山城（たかとりやまじょう）				
鷹取城	たかとりじょう	山門郡	柳川市上宮永町	217	26	—
鷹取山城	たかとりやまじょう	生葉郡 / 竹野郡	うきは市浮羽町妹川・八女市星野村・久留米市田主丸町森部	94	18	103
立華城	たかはなじょう	上妻郡	八女市黒木町木屋	142	20	—
喬花城	たかはなじょう	→立華城（たかはなじょう）				
立花城	たかはなじょう	→立華城（たかはなじょう）				
高丸城	たかまるじょう	竹野郡	久留米市田主丸町益生田	85	18	95
高三潴式部少輔館	たかみづましきぶしょうゆうやかた	→高三潴館（たかみづまやかた）				
高三潴館	たかみづまやかた	三潴郡	久留米市三潴町高三潴	34	14	—
高牟礼城	たかむれじょう	上妻郡	八女市黒木町笠原・星野村	140	20	126
高群城	たかむれじょう	→高牟礼城（たかむれじょう）				
高屋城	たかやじょう	上妻郡 / 生葉郡	八女市矢部村矢部	134	20	124
高山城	たかやまじょう	→兼松城（かねまつじょう）				
田川城	たがわじょう	→田川館（たがわやかた）				
田川館	たがわやかた	三潴郡	久留米市三潴町田川	36	14	79
竹井城	たけいじょう	山本郡	久留米市草野町吉木	67	16	85
竹井城	たけいじょう	山門郡	みやま市高田町竹飯	206	24	—
武井城	たけいじょう	→竹井城（たけいじょう（久留米市草野町））				
竹井の今城	たけいのいましろ	→竹井城（たけいじょう（みやま市高田町））				
竹井牡丹長者館	たけいぼたんちょうじゃやかた	→竹井館（たけいやかた）				
竹井館	たけいやかた	山門郡	みやま市山川町尾野	207	24	150
竹之城	たけのじょう	→竹井城（たけいじょう（久留米市草野町））				
田籠城	たごもりじょう	→松尾城（まつおじょう）				
田尻城	たじりじょう	→飛塚城（とびづかじょう）				
田尻飛塚城	たじりとびづかじょう	→飛塚城（とびづかじょう）				
館古賀城	たちこがじょう	→東江上城（ひがしえがみじょう）				
立石城	たついわじょう	生葉郡	うきは市浮羽町流川	106	18	—
龍石城	たついわじょう	→立石城（たついわじょう）				
立岩城	たついわじょう	→立石城（たついわじょう）				
田中兵庫屋敷	たなかひょうごやしき	三潴郡	久留米市三潴町高三潴	D6	28	—
谷川城	たにがわじょう	上妻郡	八女市立花町谷川	161	22	139
谷山城	たにやまじょう	山本郡	久留米市山本町豊田	62	16	—
谷山城	たにやまじょう	生葉郡	うきは市吉井町福益	99	18	107
垂見城	たるみじょう	山門郡	柳川市三橋町垂見	212	26	—
筑後国府跡	ちくごこくふあと	御井郡	久留米市合川町	R7	28	187
千々谷館	ちぢややかた	生葉郡	八女市星野村	128	20	—
知徳城	ちとくじょう	上妻郡	八女郡広川町広川	183	24	143
智徳城	ちとくじょう	→知徳城（ちとくじょう）				
知徳館	ちとくやかた	→知徳城（ちとくじょう）				
茶臼城	ちゃうすじょう	上妻郡	八女市長野	166	22	—
茶臼城	ちゃうすじょう	三池郡	大牟田市倉永	222	26	—
茶臼山城	ちゃうすやまじょう	→茶臼城（ちゃうすじょう（八女市））				
茶臼山城	ちゃうすやまじょう	→茶臼城（ちゃうすじょう（大牟田市））				
長増山城	ちょうぞうさんじょう	→東光寺城（とうこうじじょう）				
鎮西探題館	ちんぜいたんだいやかた	→乙隈城（おとぐまじょう）				

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
築足城	つきあしじょう	生葉郡	八女市黒木町大淵	137	20	125
月足城	つきあしじょう	→築足城（つきあしじょう）				
津村城	つむらじょう	三潴郡	大川市津	59	16	83
釣井城	つりいじょう	山本郡	久留米市草野町吉木	68	16	－
鶴ヶ城	つるがじょう	御井郡	久留米市山川町	14	12	71
津留城	つるじょう	山門郡	柳川市大和町六合	213	26	153
鶴田城	つるだじょう	下妻郡	筑後市鶴田	189	24	－
鶴見山館	つるみやまやかた	上妻郡	八女市豊福	168	22	－
寺ん城	てらんしろ	→高岩城（たかいわじょう）				
問本城	といもとじょう	山本郡か	久留米市草野町か	70	16	－
東光寺遺跡	とうこうじいせき	御井郡	久留米市山川町	R8	28	188
東光寺城	とうこうじじょう	御井郡	久留米市山川町	21	12	－
道雪陣	どうせつじん	上妻郡	八女市柳島	D13	28	－
道蔵遺跡	どうぞういせき	三潴郡	久留米市大善寺町中津	R14	30	191
轟城	とどろきじょう	→生駒野城（いごまのじょう）				
戸原城	とはらじょう	不明	不明	F5	30	－
飛塚城	とびづかじょう	三池郡	みやま市高田町田尻	211	26	159
富本城	とみもとじょう	竹野郡	久留米市田主丸町竹野	－	30	－
豊福城	とよふくじょう	→今福城（いまぶくじょう）				
鳥飼城	とりかいじょう	竹野郡	三井郡大刀洗町三川	71	16	－

な

長岩城	ながいわじょう	生葉郡	うきは市浮羽町新川	123	20	119
中尾畑城	なかおばたじょう	山門郡か	みやま市か	F4	30	－
長崎坊田遺跡	ながさきぼうたいせき	上妻郡	筑後市長崎	R19	30	194
中笹尾岳城	なかささおだけじょう	竹野郡	久留米市田主丸町竹野	－	30	－
中島城	なかしまじょう	山門郡	柳川市大和町中島	K9	28	176
長瀬城	ながせじょう	生葉郡	うきは市浮羽町高見	14	18	117
長野城	ながのじょう	→茶臼城（ちゃうすじょう（八女市））				
中ノ城	なかのしろ	→発心城（ほっしんじょう）				
中野大膳光臣館	なかのたいぜんみつおみやかた	→国武館（くにたけやかた）				
長延城	ながのぶじょう	→城ノ尾城（じょうのおじょう）				
		→山王山城（さんのうざんじょう）				
長延館	ながのぶやかた	→城ノ尾城（じょうのおじょう）				
		→山王山城（さんのうざんじょう）				
中野屋敷	なかのやしき	→国武館（くにたけやかた）				
長浜館	ながはまやかた	下妻郡	筑後市長浜	186	24	－
中牟田城	なかむたじょう	下妻郡	筑後市中牟田	193	24	－
中牟田館	なかむたやかた	下妻郡	筑後市中牟田	192	24	－
中村館	なかむらやかた	→白口中村館（しらぐちなかむらやかた）				
流館	ながれやかた	三潴郡	筑後市西牟田	50	14	－
梨木山陣	なしのきやまじん	上妻郡	八女市黒木町木屋	D12	28	－
生津城	なまづじょう	三潴郡	久留米市三潴町生津	44	14	81
生津館	なまづやかた	三潴郡	久留米市三潴町生津か	45	14	－
蓮城	なもみじょう	→高朶城（たかすだじょう）				
蓮原城	なもみばるじょう	→高朶城（たかすだじょう）				
仁右衛門畑遺跡	にえもんばたけいせき	生葉郡	うきは市吉井町新治	R16	30	192
西鯵坂城	にしあじさかじょう	御井郡	小郡市下西鯵坂	10	12	70
西鯵坂館	にしあじさかやかた	→西鯵坂城（にしあじさかじょう）				
西江上城	にしえがみじょう	三潴郡	久留米市城島町江上本	40	14	－
西葛尾城	にしかずらおじょう	竹野郡	久留米市田主丸町益生田	81	18	92
西葛生城	にしかずらおじょう	→西葛尾城（にしかずらおじょう）				
西隈上城	にしくまのうえじょう	→隈ノ上城（くまのうえじょう）				
西古賀館	にしこがやかた	三潴郡	久留米市三潴町西牟田	47	14	－
西城	にしじょう	→山王山城（さんのうざんじょう）				
西田口城	にしたぐちじょう	三潴郡	大川市三丸	60	16	－
西の城	にしのしろ	生葉郡	うきは市吉井町富永	97	18	104
西ノ城	にしのしろ	生葉郡	うきは市浮羽町流川	108	18	114
西の原城	にしのはるじょう	三池郡	大牟田市白銀	225	26	－

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
西原口城	にしはりぐちじょう	→長瀬城（ながせじょう）				
西牟田城	にしむたじょう	三潴郡	筑後市西牟田	49	14	－
西牟田本村館	にしむたほんむらやかた	三潴郡	久留米市三潴町西牟田	46	14	－
西牟田館	にしむたやかた	三潴郡	筑後市西牟田	48	14	－
西森田遺跡	にしもりたいせき	御原郡	三井郡大刀洗町本郷	R5	28	186
新田城	にったじょう	竹野郡	久留米市田主丸町石垣	89	18	100
奴田館	ぬたやかた	竹野郡	久留米市田主丸町豊城	73	16	－
猫尾城	ねこおじょう	上妻郡	八女市黒木町木屋	143	20	129

は

飯江城	はえじょう	山門郡	みやま市高田町舞鶴	208	26	151
萩尾城	はぎおじょう	→城ノ尾城（じょうのおじょう）				
萩尾麟可館	はぎおりんかやかた	→城ノ尾城（じょうのおじょう）				
八町嶋城	はっちょうじまじょう	→古賀城（こがじょう（久留米市））				
花立山城	はなたてやまじょう	→山隈城（やまぐまじょう）				
馬場館	ばばやかた	上妻郡	八女市広川町水原	175	22	－
濱田城	はまだじょう	山門郡	みやま市瀬高町濱田	203	24	149
原内山城	はらうちやまじょう	三池郡	大牟田市	227	26	－
原口城	はりぐちじょう	→長瀬城（ながせじょう）				
春野屋敷	はるのやしき	三潴郡	久留米市原古賀町	D4	28	－
日出原南遺跡	ひいでばるみなみいせき	御井郡	久留米市御井町	R10	30	189
東江上城	ひがしえがみじょう	三潴郡	久留米市城島町江上	41	14	－
東葛生城	ひがしかずらおじょう	→内山城（うちやまじょう（久留米市田主丸町））				
東館遺跡	ひがしたちいせき	上妻郡	八女市山内	R17	30	193
東山城	ひがしやまじょう	生葉郡	うきは市浮羽町小塩	122	20	－
東山城	ひがしやまじょう	→城跡山城（しろあとやまじょう）				
東山館	ひがしやまやかた	→城跡山城（しろあとやまじょう）				
干潟城	ひかたじょう	→山隈城（やまぐまじょう）				
干潟中屋敷遺跡	ひかたなかやしきいせき	御原郡	小郡市干潟	R1	28	184
干潟館	ひかたやかた	→干潟中屋敷遺跡（ひかたなかやしきいせき）				
彼岸田遺跡	ひがんだいせき	下妻郡	筑後市島田	R20	30	195
久末城	ひさすえじょう	山門郡	柳川市三橋町久末	210	26	－
毘沙門岳城	びしゃもんだけじょう	御井郡	久留米市御井町	15	12	73
日田氏館	ひたしやかた	→隈ノ上城（くまのうえじょう）				
人見城	ひとみじょう	→山下城（やましたじょう）				
平野城	ひらのじょう	→大間城（だいまじょう）				
平林城	ひらばやし（でえらばやし）じょう	→山崎城（やまざきじょう）				
蛭池館	ひるいけやかた	三潴郡	三潴郡大木町蛭池	53	14	－
吹上城	ふきあげじょう	御原郡	小郡市吹上	3	12	－
福島城	ふくしまじょう	上妻郡	八女市本町	K6	26	170
福益城	ふくますじょう	→福丸城（ふくまるじょう）				
福益館	ふくますやかた	→福丸館（ふくまるやかた）				
福間別館	ふくまべっかん	→草野別館（くさのべっかん）				
福間村營	ふくまむらえい	三潴郡	三潴郡大木町福土	D8	28	－
福間館	ふくまやかた	三潴郡	三潴郡大木町福土	51	14	－
福丸城	ふくまるじょう	生葉郡	うきは市吉井町福益	102	18	109
福丸館	ふくまるやかた	生葉郡	うきは市吉井町福益	103	18	－
藤田館	ふじたやかた	上妻郡	八女郡広川町藤田	178	24	－
藤山城	ふじやまじょう	→白木城（しらきじょう）				
二子塚遺跡	ふたごづかいせき	三潴郡	久留米市荒木町荒木	R12	30	190
麓の城	ふもとのしろ	→城氏城（じょうしじょう）				
古町城	ふるまちじょう	→海津城（かいづじょう）				
平家城	へいけじょう	竹野郡	久留米市田主丸町田主丸	74	16	－
平家城	へいけじょう	竹野郡	久留米市田主丸町常盤	75	16	－
平家城	へいけじょう	竹野郡	久留米市田主丸町殖木	78	16	－
平家城	へいけじょう	竹野郡	久留米市田主丸町益生田	87	18	98
平家城	へいけじょう	竹野郡	うきは市吉井町鷹取	92	18	－
平家城	へいけじょう	竹野郡	うきは市吉井町鷹取	93	18	－
平家城	へいけじょう	生葉郡	うきは市浮羽町妹川	100	18	108

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
平家塚城	へいけづかじょう	上妻郡	八女市立花町白木	151	22	－
別所城	べっしょじょう	→毘沙門岳城（びしゃもんだけじょう）				
辺春城	へばるじょう	→前川内城（まえかわちじょう）				
		→熊ノ川城（くまのかわじょう）				
保木城	ほきじょう	→岸山城（きしやまじょう）				
星野城	ほしのじょう	→山ノ中城（やまのなかじょう）				
発心城	ほっしんじょう	山本郡 / 竹野郡 / 上妻郡				
		久留米市草野町草野・田主丸町中尾、八女市上陽町上横山・上陽町下横山				
				69	16	86
発心岳城	ほっしんだけじょう	→発心城（ほっしんじょう）				
堀田屋敷	ほったやしき	三潴郡	三潴郡大木町横溝	D9	28	－
堀切城	ほりきりじょう	山門郡	みやま市瀬高町堀切	204	24	－
堀口城	ほりぐちじょう	三池郡	大牟田市	F7	30	－
本郷城	ほんごうじょう	御原郡	三井郡大刀洗町本郷	9	12	－
本郷城	ほんごうじょう	下妻郡	みやま市瀬高町本郷	196	24	－
本郷館	ほんごうやかた	→三原城（みはらじょう）				
本星野館	ほんほしのやかた	生葉郡	八女市星野村	131	20	－
本村館	ほんむらやかた	→西牟田本村館（にしむたほんむらやかた）				
本村館	ほんむらやかた	→本館（ほんやかた）				
本館	ほんやかた	上妻郡	八女市本	170	22	－

ま

舞鶴城	まいづるじょう	→鶴ヶ城（つるがじょう）				
舞鶴城	まいづるじょう	→国見岳城（くにみだけじょう）				
舞鶴城	まいづるじょう	→飯江城（はえじょう）				
舞鶴城	まいづるじょう	→三池山城（みいけやまじょう）				
前川内城	まえかわちじょう	上妻郡	八女市立花町上辺春	147	20	－
舛形城	ますがたじょう	→鷹尾城（たかおじょう（八女市山内・大籠））				
益永城	ますながじょう	→平家城（へいけじょう（久留米市田主丸町益生田（No.87）））				
益永平家城	ますながへいけじょう	→平家城（へいけじょう（久留米市田主丸町益生田（No.87）））				
松尾城	まつおじょう	生葉郡	うきは市浮羽町田籠	124	20	120
松崎城	まつざきじょう	→松崎陣屋（まつざきじんや）				
松崎陣屋	まつざきじんや	御原郡	小郡市松崎	K1	26	160
松崎館	まつざきやかた	→松崎陣屋（まつざきじんや）				
松延城	まつのぶじょう	山門郡	みやま市瀬高町松田・山門	K7	28	173
馬間田城	ままだじょう	下妻郡	筑後市馬間田	194	24	－
豆塚長者館	まめつかちょうじゃやかた	→屋形館（やかたやかた）				
満願寺城	まんがんじじょう	生葉郡	うきは市浮羽町妹川・吉井町福益	104	18	111
万貫城	まんがんじょう	→満願寺城（まんがんじじょう）				
満願城	まんがんじょう	→満願寺城（まんがんじじょう）				
三池氏館	みいけしやかた	→大間城（だいまじょう）				
三池陣屋	みいけじんや	三池郡	大牟田市新町	K12	28	181
三池藩主居館	みいけはんしゅきょかん	→三池陣屋（みいけじんや）				
三池町館	みいけまちやかた	→三池陣屋（みいけじんや）				
三池山城	みいけやまじょう	三池郡	大牟田市三池・熊本県南関町久重	230	26	161
水田城	みずたじょう	下妻郡	筑後市水田	190	24	－
溝口城	みぞぐちじょう	→溝口館（みぞぐちやかた（筑後市溝口））				
溝口館	みぞぐちやかた	→久恵館（くえやかた）				
溝口館	みぞぐちやかた	下妻郡	筑後市溝口	188	24	－
三沢寺小路遺跡	みつさわてらしょうじいせき	御原郡	小郡市三沢	R2	28	184
三ツタカ城	みつたかじょう	→山ノ中城（やまのなかじょう）				
南清松館	みなみきよまつやかた	三潴郡	久留米市三潴町清松	43	14	－
峯切山陣	みねきりやまじん	上妻郡	八女市黒木町木屋	D11	28	183
峯山城	みねやまじょう	生葉郡	うきは市浮羽町三春	115	20	－
耳納城	みのうじょう	→柳坂陣（やなぎさかじん）				
三原城	みはらじょう	御原郡	三井郡大刀洗町本郷	8	12	69
宮園城	みやぞのじょう	山門郡	みやま市瀬高町大廣園	201	24	148
宮ノ陣	みやのじん	御井郡	久留米市宮ノ陣５丁目	D3	28	－
妙見城	みょうけんじょう	生葉郡	うきは市吉井町富永	98	18	105

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
妙見城	みょうけんじょう	→内城城（うちじょうじょう）				
明顕城	みょうけんじょう	→妙見城（みょうけんじょう（うきは市吉井町富永））				
妙見西城	みょうけんにしじょう	→西の城（にしのしろ（うきは市吉井町富永））				
妙見出城	みょうけんでじろ	生葉郡	うきは市吉井町鷹取 / 富永	－	30	－
妙見山城	みょうけんやまじょう	→妙見城（みょうけんじょう（うきは市吉井町富永））				
妙福寺ノ城	みょうふくじのしろ	上妻郡	不明	F1	30	－
向城	むかいじょう	→白牧大岩屋名城（しらまきおおいわやなじょう）				
向築地長者館	むかいついじちょうじゃやかた	御原郡	小郡市小郡	D1	28	－
麦生城	むぎおじょう	→高丸城（たかまるじょう）				
麦生館	むぎおやかた	→内山館（うちやまやかた）				
宗崎遺跡	むねさきいせき	→宗崎館（むねさきやかた）				
宗崎館	むねさきやかた	御井郡	久留米市御井町	－	30	－
森部の平家城	もりべのへいけじょう	→平家城（へいけじょう（うきは市吉井町鷹取（No.92）））				
問註所氏館	もんちゅうじょしやかた	→井上館（いのうえやかた）				

や

屋形館	やかたやかた	生葉郡	うきは市吉井町屋部	95	18	－
安武古町城	やすたけふるまちじょう	→海津城（かいづじょう）				
安山城	やすやまじょう	生葉郡	うきは市浮羽町流川	105	18	112
柳川城	やながわじょう	山門郡	柳川市本城町	K10	28	177
柳河城	やながわじょう	→柳川城（やながわじょう）				
梁河城	やながわじょう	→柳川城（やながわじょう）				
柳坂城	やなぎさかじょう	山本郡	久留米市山本町柳坂	63	16	－
柳坂陣	やなぎさかじん	山本郡	久留米市山本町柳坂	D10	28	－
柳島城	やなじまじょう	上妻郡	八女市北田形	163	22	－
矢部山城	やべやまじょう	→高屋城（たかやじょう）				
山隈城	やまぐまじょう	御原郡 / 筑前国夜須郡	小郡市山隈・朝倉郡筑前町四三嶋・山隈	2	12	68
山崎城	やまざきじょう	上妻郡	八女市立花町山崎	158	22	136
山下国見岳城	やましたくにみだけじょう	→国見岳城（くにみだけじょう）				
山下城	やましたじょう	上妻郡	八女市立花町北山	155	22	134
山ノ上城	やまのうえじょう	→谷山城（たにやまじょう（うきは市吉井町福益））				
山ノ中城	やまのなかじょう	竹野郡	久留米市田主丸町石垣	88	18	99
弓削城	ゆげじょう	御井郡 / 山本郡	久留米市山本町豊田・山川町	26	12	－
横溝氏館	よこみぞしやかた	三潴郡	久留米市三潴町高三潴	35	14	－
横溝城	よこみぞじょう	→城ノ内城（じょうのうちじょう）				
横溝館	よこみぞやかた	→堀田屋敷（ほったやしき）				
吉井城	よしいじょう	→松延城（まつのぶじょう）				
吉岡城	よしおかじょう	下妻郡	みやま市瀬高町文廣	199	24	－
吉木館	よしきやかた	山本郡	久留米市草野町吉木	65	16	－
吉田大膳城	よしだだいぜんじょう	下妻郡	筑後市馬間田	195	24	－
吉田館	よしだやかた	上妻郡	八女市吉田	173	22	－
吉野内山城	よしのうちやまじょう	→内山城（うちやまじょう（大牟田市吉野））				
吉野尾館	よしのおやかた	山本郡	久留米市草野町吉木	66	16	－
吉見岳城	よしみだけじょう	御井郡	久留米市御井町・山川町	18	12	76
芳水嶽城	よしみだけじょう	→吉見岳城（よしみだけじょう）				

ら

龍造寺陣	りゅうぞうじじん	下妻郡	筑後市鶴田	D15	28	－

わ

若松城	わかまつじょう	御井郡	久留米市宮ノ陣町若松	23	12	－
鷲ヶ城	わしがじょう	→鷲岳城（わしがたけじょう）				
鷲岳城	わしがたけじょう	上妻郡	八女市黒木町木屋	144	20	－

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふくおかけんのちゅうきんせいじょうかんあとよん　つけたりふくおかけんのきんせいだいば・とおみばんしょ・ほうかだいあと
書　　名	福岡県の中近世城館跡Ⅳ　附.福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台跡
副 書 名	筑後地域・総括編
巻　　次	福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査報告書　第４集
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第260集
編著者名	一瀬　智・酒井芳司・坂元雄紀・飛野博文・中井　均・西谷　正・服部英雄・松川博一・岡寺　良（編集）
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8575　福岡県福岡市博多公園７番７号　℡ 092-651-1111
発行年月日	2017年３月31日

所収遺跡名	所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
福岡県筑後地域に所在する中近世城館遺跡等約290箇所	大牟田市 久留米市 柳川市 八女市 筑後市 大川市 小郡市 うきは市 みやま市 三井郡大刀洗町 三潴郡大木町 八女郡広川町	40202 40203 40207 40210 40211 40212 40216 40225 40229 40503 40522 40544				150401 ～ 170331		福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査
福岡県内に所在する近世台場・遠見番所・烽火台跡等約50箇所	福岡県内各所					121201 ～ 170331		福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査

所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
福岡県筑後地域に所在する中近世城館遺跡等約290箇所	城館及び城館関連遺跡	鎌倉～江戸時代	城館遺構（曲輪・土塁・堀など）	な　し	
福岡県内に所在する近世台場・遠見番所・烽火台跡等約50箇所	台場跡 遠見番所 烽火台跡	江戸時代	台場（砲兵陣地含む） 遠見番所 烽火台跡	な　し	

要　約

本報告における中近世城館遺跡等詳細分布調査では、筑後地域に所在する約 290 箇所の中近世城館、城館伝承地、城館関連遺跡等を対象とし、一部の対象については現地調査を行い、縄張り図等の作成を行い、その結果を報告している。また、文献史料、絵画資料等についても総合的な調査を実施した結果も併せて報告している。

さらに附編として、県内に所在する近世の台場、遠見番所、烽火台などの海防に関わる遺跡も報告している。

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2133051
登録年度 28	登録番号 1

福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査報告書４

福岡県の中近世城館跡Ⅳ

－筑後地域・総括編－

附. 福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台跡

福岡県文化財調査報告書第260集

平成29年３月31日

発　　行　　福岡県教育委員会
〒812-8575
福岡県福岡市博多区東公園７番７号

印　　刷　　株式会社　四ヶ所
〒838-8512
福岡県朝倉市馬田336